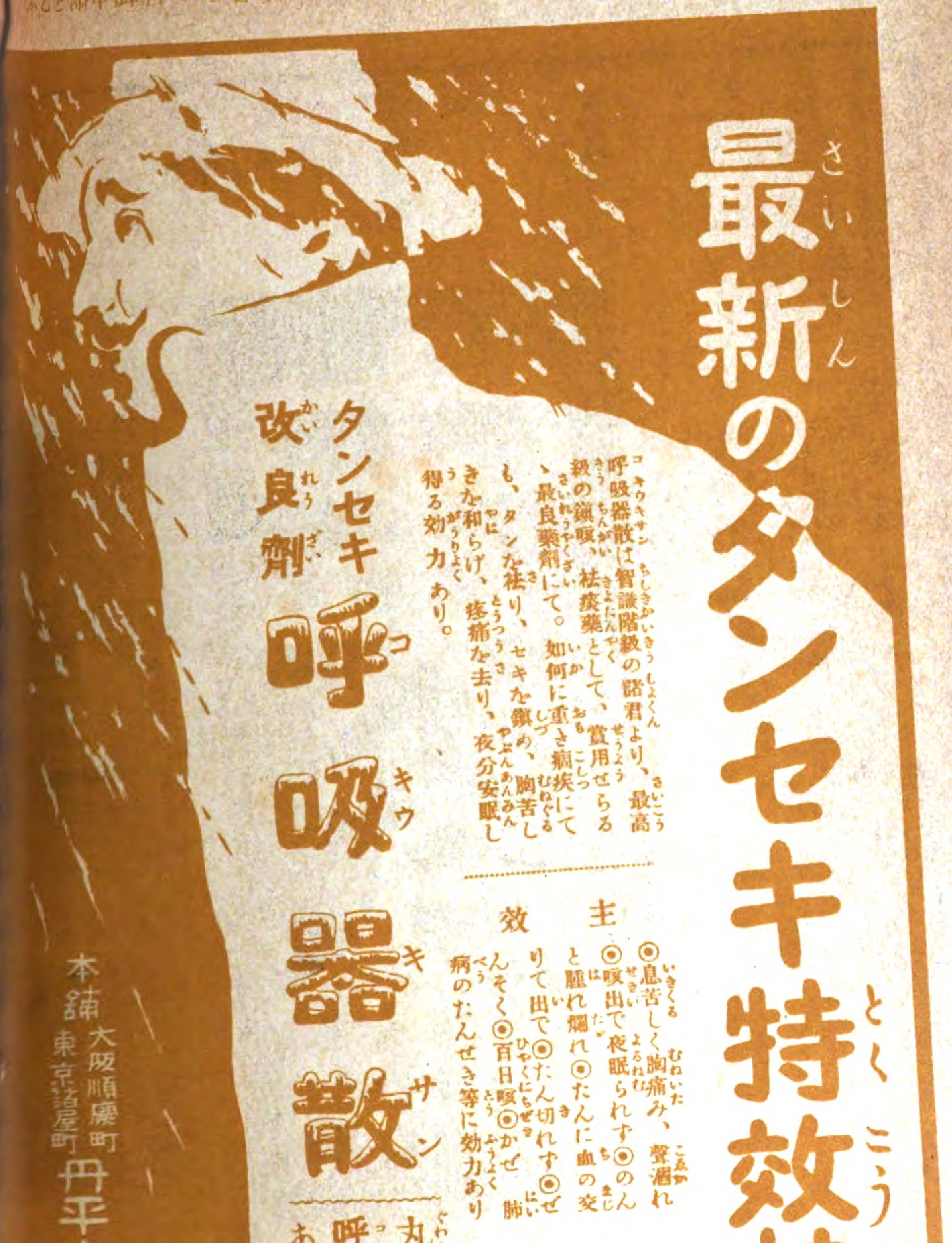
THE CENTRAL REVIEW

中央公論

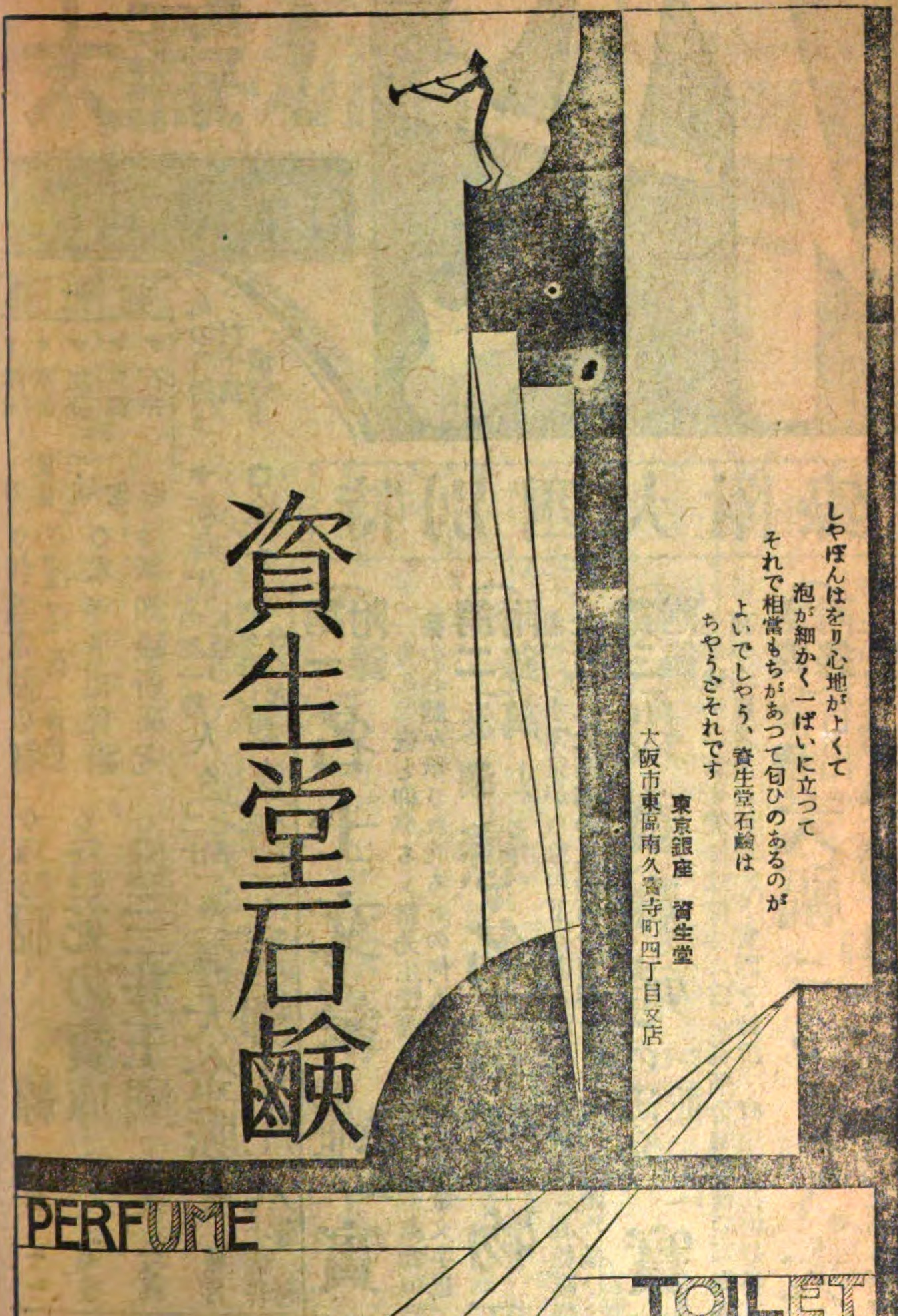
十二月號

第三十九年　第十三號　第四百四十二號

此廣告を見て御申込の方は中央公論愛讀者なる旨御申添を乞ふ



卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社


資生堂石鹸
しやぼんはをり心地がよくて
泡が細かく一ぱいに立つて
それで相當もちがあつて匂ひのあるのが
よいでしやう、資生堂石鹸は
ちやうどそれです
東京銀座 資生堂
大阪市東區南久寳寺町四丁目支店
PERFUME
TOILET

▼說　苑


クラブ
煉歯磨
クラブ煉歯磨
THE IMPERIAL
TOILET CLUB
MADE IN JAPAN
CLUB
DENTAL CREAM
TRADE MARK
理想の歯磨
歯を強く美しくするクラブ歯磨は欧米の高級品に優るよい歯磨であります



安蔬廬霜味　　小川芋錢筆

つて新年號より發刊

創刊の日近し!

■如何にして希望を達す可か……野間清治
■洋行土産（海外奇聞）坂崎[illegible]
▼名士名流結婚ローマンス……
▼軍神　泣く孝子清一郎（實話）……
▼世界珍聞新知識……
▼時計發達繪ものがたり……

五千名當選大懸賞募集

雜誌界で未だ前例のない大計畫です。特に創刊を記念する爲の懸賞募集ですから誰方も奮つて御投書下さい。詳細は本號にあります。

講談

■探偵小說 民の民……奥田野月
▼小說 加藤[illegible]之助奇策……向井瑞穗
▼小說 傑僧天海の一喝……喜多川眞之輔
▼逸傳 鬼將軍エフリー……高木哲夫
▼講談 不破數右衛門……南田畔太郎
■長篇小說 虎女……中村武羅夫
■武勇小說 劍難女難……吉川[illegible]治
■奇小說 肉饅頭……[illegible]銀月

四大附錄

■天下に比類なき精選記事の本文に加ふるに…………
■又と得られぬ次の如き大附錄四種…………

【第一附錄】趣味實益新案番附六十種
……これ丈で一册の値打は充分各種各方面の番附なれば家庭必備

【第二附錄】二十八大家苦心の結晶 人々よ覺めよ!祈れ!歌へ
……結婚葬祭、老幼青少年、各種職業者の所ゞ愛誦の名篇實に三十章

【第三附錄】各界六十名士 愛誦の金言名句修養訓
……聲名一世に鳴る諸名士が特に本誌に寄せられた金玉の大文字!

【第四附錄】新東京名所巡り競爭双六
……今までにない新式の面白い遊び方、繪は目も覺る程美しいもの

以上は本誌創刊號內容の一部にてトテモ擧げ難し。兎に角書店で評判をお聞き下さい。

十二月五日發賣

愉快の親玉!! 滑稽の大

面白

新年號は増大號で附錄つき

面白倶樂部の新年號を、是非誰方も御覽下さい！
今から到る處で大評判お待兼！【十一月五日發賣】

滑稽小說、漫畫物語、人情美談、滑稽落語、新小說、歷史小說、武俠小說、戀愛小說、奇談、怪談、探偵小說、武勇講談、

その他……面白いものは何でもあります



……その中の大表的選り拔き七代傑作……

滑稽—諷刺

武勇—戀愛

探偵—怪奇

人情—痛快

面白いこと

天下無比！

◆坂東俠客陣【武俠小說】……吉川英治

◆戀にらふ貴族の娘【革命哀話】……益田甫

◆夜寒讀本【家庭小說】……門脇陽一郎

◆飛模樣五人女【滑稽小說】……中條仙太郎

◆殺人魔【探偵小說】……大瀧邦夫

◆薄田森之助【新作講談】……鹿島魯山

◆妖婦秘事記【[illegible]新異聞】……大倉桃郎


こがらし吹ゆ……
赤熱のストーブを圍んで
サクラビールの微醉に
夜長を語る。
サクラビール
サクラビール
TRADE MARK
Sakura BEER
帝國麥酒株式會社

大正十三年

中央公論

十二月一日發行

拾二月號

第卅九年　第十三號

第四百四十二號

軍事教育案の爲に悲しむ

所謂軍事教育案は、當局が何と强辯しやうと教育に對する軍閥の壓迫であることを今日もはや國民の誰もが疑はない。而して識者の大多數が之を苦々しき事に思つて居ることも言ふを待たない。

策士の多い軍閥が何で斯んな馬鹿なことをするのだらう。併し之に依て國民思想の惡化を豫防するのだと觀るは當らない。國民の思想的傾向が自分の欲する樣にあれかしとは無論彼等の切願する所であらう。が、敢て進んで思想善導の任に當らうといふ程の自信を彼等が此方面に有て居ない事も明かだ。して見れば這次の提案に依て彼等の結局に於て達せんとする眞目的は、どうしても冗員の始末以外にないと謂はなければならぬ。師團減縮に因る將校下士の失業問題に應ずるといふ外に本案提唱の理由を發見し得ないのである。

さうすると人或は曰ふだらう、そんな輕い理由の爲に教育といふ國家的大問題を左右するといふ事はマサカあるまいと。私共はそんな輕い理由の爲に教育の左右さるゝを憤慨するのであるが、之にも拘らず軍閥の人々が斯くまでして教育の大事を顧みないに就ては、彼等が本來將校下士の失職問題といふものを我々と同じ樣に輕い事柄とは考へて居ないといふ事を識らなくてはならぬ。換言すれば、教育を犧牲にする丈けの重大な必要がそこに存すると信じて居る點に於て、彼等は私共と全然別種の見識を有することを識らなくてはならぬ。

今日の政治家が各種の政務の中國防といふものに格別不當の優越的地位を與へて居ることは屢々說いた。普通の政治家にして猶且然り、軍閥の人々が國防以外眼中何ものもなきは蓋し想像に餘りある。さて夫れ程國防を偏重する者に取て今日何が一番氣になるかといへば、言ふまでもなく一朝事變あるの日訓練ある指揮者の乏しいことである。兵卒は或は短日月にして作り得る。將校下士の養成は一朝にして出來ない。然らば折角作つた者をムザ〳〵棄てゝ顧みないといふのは、不經濟の極であるばかりでなく、私かに他日の變を思ふとき實に怖しい危險ではないか。加之、さらでだに近年頻に叫ばるゝ軍縮の聲に怯えてにや昨今は將校下士の志願者も著しく減つたといふ。今度の軍縮で若し復た失職者の始末を疎にすることあらん乎、それは國家に取つて大損失たるのみならず

袋て又大に士氣に關するのである。然らば之等の職を失ふべき者に對して相當の方策を講じ、而も一朝有事の際直に引き揚げて之を戰場に送り得る樣に謀るは、何を差し措ても爲さねばならぬ事ではないか。要するに斯んな考で軍閥の人は失職將校下士の最も適當な收容地として教育機關を選んだものに相違ない。

之と併せて我々は、此前の軍縮の際にも下士を小學校教員として使つて欲しいとの提案のあつたことを忘れてはならぬ。而して國防といへば何物を犧牲に供しても之れ丈は立てねばならぬと無條件にきめ込んで居る老政治家の多い事實に鑑み、民間輿論の反對烈しきに拘らず、此案の或は遂に實施を見るに至らんことを疑はぬものである。

私共は本來軍事教育そのものを無用とは思はない。尤も今日の文政當局者の樣に之を純ら兵役年限短縮の前提とするが如きは甚しき妄計だと信じて居る。結果に於て自ら兵役年限の短縮を可能ならしむるに至るは勿論であり、從て本案の計畫にこの點を顧慮するは差支ないが、教育の見地からしては、軍事教育は徹頭徹尾之を國民としての必要なる一資格として授くるものでなければならぬ。而して國民必須科の一としてやる以上、之は普通の教師がやるべきもので、專門の技師に托すべきものではない。國民として知らねばならぬ程の事は教師も必ず識て居なければならぬ筈だ。將校下士の力を藉らねば出來ぬ程の事なら、普通教育に於て始めから教へる必要はないのだ。實際問題としては、今日の教師に此方面の事をもつと切實に識らしむる爲に將校下士を煩すの必要はあらうが、彼等を招いて生徒に直接せしむるは斷じて無用有害だと確信する。

更にも一ツ本案の實施に付て憂ふるのは、之に因て新に年少國民の胸中に軍隊侮蔑の念を植え付けんことである。子供だからとて一から十まで言ふことを聞くと限らない。殊に今日のマセた子供は乾度常識に乏しい將校下士を馬鹿にするにきまつて居る。況んや今日の將校下士の素養を以てしては、在來の體操教師以上の尊敬を生徒間に博するの見込決してなかるべきに於てをや。學校は營舍とは違ふ。少くとも當該教師の面前以外に於ては冷評漫罵は極度に自由である。之を思ふと、我國軍隊の威信は或は之に由て遂に拭ふ可らざる損傷を受くることになるまいか。我々は寧ろ軍閥の名譽の爲に甚だ之を悲むものである。

軍事教育案の爲に悲しむ

所謂軍事教育案は、當局が何と強辯しやうと教育に對する軍閥の壓迫であることを今日もはや國民の誰もが疑はない。而して識者の大多數が之を苦々しき事に思つて居ることも言ふを待たない。

策士の多い軍閥が何で斯んな馬鹿なことをするのだらう。併し之に依て國民思想の惡化を豫防するのだと稱るは當らない。國民の思想的傾向が自分の欲する樣にあれかしとは無論彼等の切願する所であらう。が、敢て進んで思想善導の任に當らうといふ程の自信を彼等が此方面に有て居ない事も明かだ。して見れば這次の提案に依て彼等の結局に於て達せんとする眞目的は、どうしても冗員の始末以外にないと謂はなければならぬ。師團減縮に因る將校下士の失業問題に應ずるといふ外に本案提唱の理由を發見し得ないのである。

さうすると人或は曰ふだらう、そんな輕い理由の爲に教育といふ國家的大問題を左右するといふ事はマサカあるまいと。私共はそんな輕い理由の爲に教育の左右さるゝを憤慨するのであるが、之にも拘らず軍閥の人々が斯くまでして教育の大事を顧みないに就ては、彼等が本來將校下士の失職問題といふものを我々と同じ樣に輕い事柄とは考へて居ないといふ事を識らなくてはならぬ。換言すれば、教育を犧牲にする丈けの重大な必要がそこに存すると信じて居る點に於て、彼等は私共と全然別種の見識を有することを識らなくてはならぬ。

今日の政治家が各種の政務の中國防といふものに格別不當の優越的地位を與へて居ることは屢々說いた。普通の政治家にして猶且然り、軍閥の人々が國防以外眼中何ものもなきは蓋し想像に餘りある。さて夫れ程國防を偏重する者に取て今日何が一番氣になるかといへば、言ふまでもなく一朝事變あるの日訓練ある指揮者の乏しいことである。兵卒は或は短日月にして作り得る。將校下士の養成は一朝にして出來ない。然らば折角作つた者をムザ／＼棄てゝ顧みないといふのは、不經濟の極であるばかりでなく、私かに他日の變を思ふとき實に怖しい危險ではないか。加之、さらでだに近年頻に叫ばるゝ軍縮の聲に怯えてにや昨今は將校下士の志願者も著しく減つたといふ。今度の軍縮で若し復た失職者の始末を疎にすることあらんか、それは國家に取つて大損失たるのみならず

袋て又大に士氣に關するのである。然らば之等の職を失ふべき者に對して相當の方策を講じ、而も一朝有事の際直に引き揚げて之を戰場に送り得る樣に謀るは、何を差し措ても爲さねばならぬ事ではないか。要するに斯んな考で軍閥の人は失職將校下士の最も適當な收容地として教育機關を選んだものに相違ない。

之と併せて我々は、此前の軍縮の際にも下士を小學校教員として使つて欲しいとの提案のあつたことを忘れてはならぬ。而して國防といへば何物を犧牲に供しても之れ丈は立てねばならぬと無條件にきめ込んで居る老政治家の多い事實に鑑み、民間輿論の反對烈しきに拘らず、此案の或は遂に實施を見るに至らんことを疑はぬものである。

私共は本來軍事教育そのものを無用とは思はない。尤も今日の文政當局者の樣に之を純ら兵役年限短縮の前提とするが如きは甚しき妄計だと信じて居る。結果に於て自ら兵役年限の短縮を可能ならしむるに至るは勿論であり、從て本案の計劃にこの點を顧慮するは差支ないが、教育の見地からしては、軍事教育は徹頭徹尾之を國民としての必要なる一資格として授くるものでなければならぬ。而して國民必須科の一としてやる以上、之は普通の教師がやるべきもので、專門の技師に托すべきものではない。國民として知らねばならぬ程の事は教師も必ず識て居なければならぬ筈だ。將校下士の力を藉らねば出來ぬ程の事なら、普通教育に於て始めから教へる必要はないのだ。實際問題としては、今日の教師に此方面の事をもつと切實に識らしむる爲に將校下士を煩すの必要はあらうが、彼等を招いて生徒に直接せしむるは斷じて無用有害だと確信する。

更にも一ツ本案の實施に付て憂ふるのは、之に因て新に年少國民の胸中に軍隊侮蔑の念を植え付けんことである。子供だからとて一から十まで言ふこと〻聞くと限らない。殊に今日のマセた子供は屹度常識に乏しい將校下士を馬鹿にするにきまつて居る。況んや今日の將校下士の素養を以てしては、在來の體操教師以上の尊敬を生徒間に博するの見込決してなかるべきに於てをや。學校は營舍とは違ふ。少くとも當該教師の面前以外に於ては冷評漫罵は極度に自由である。之を思ふと、我國軍隊の威信は或は之に由て遂に拭ふ可らざる損傷を受くることになるまいか、我々は寧ろ軍閥の名譽の爲に甚だ之を悲むものである。

中央公論



第卅九年 第十三號
十二月號
第四百四十二號

我國の教育界が直面する一緊急問題

所謂軍事教育問題を中心として

大山郁夫

一 教育界の一波瀾

十月七日の『讀賣新聞』の第三ページの上欄に、一號活字で『全國の教育家が岡田文相を彈劾』と出てゐた見出しが、偶然そこを開けた私の眼を射た。私の注意は、直ちにそれに引き寄せられて行つた。これは私を、次の記事に導い

『澤柳政太郎博士を會長として、全國の有力な教育十六團體が聯合組織する教育擁護同盟では、さきに軍事教育、藝術教育、義務教育年限延長、師範教育の改善等の諸問題について、岡田文相の方針を訊したところ、文相は教育に精通する點は非常に深いけれど、それ以上に一として今日の時勢に適合する樣な教育意見を持合はせず、わけて新時代に痛切に要求される藝術教育に關しては何等理解するところがないと解かり、擁護同盟では種々熟議を遂げた結果、「斯かる大臣を上に戴いてゐては、教育の進歩を阻害すること夥しく、岡田氏にして今後尚ほその樣な方針で文部大臣として在職するならば、教育者は非常な覺悟を以て考慮する必要がある」といふ、大體に於て不信任を表明した意見書を、六日直接岡田文相の許に提出した。「彈劾の文字は文面には書いてないが、意味は明かに彈劾を含むもので、それによつて、文相と教育者側との間に、いよいよ宣戰が布告される譯だ」と、擁護同盟では語つてゐたが、今後教育界に於ける運行は、何かにつけて險惡になるだらう。』

私は、種々の意味に於て、右の記事に大なる興味を拂はずに居られなかつた。が、私は殊に、最近文部陸軍兩省の間の協議の主題となつてゐると傳へられてゐるところの、例の軍事訓練を中學以上の諸學校の課程の中へ加へようとする兩省當局の計畫を、近頃の二大問題として最も愼重に考察しつつあつた際であつたから、それを普通の記事なみに取扱ふことが出來なかつた。もとより私は、その記事の中に現はれてゐる所謂教育擁護同盟が、どういふ性質の團體であるかをも知らなかつたし【註一】、それに、何よりも先づ、右の記事が果して確實な據りどころのあるものであるか否かを明かにする便宜をも持たなかつた。けれども、右の記事そのものには、別にそれを根本的に虛報若しくは誤報だと疑はせる樣た節が、どこにも見出せなかつた。のみならず、近來の我國の教育界の時事の推移を、その背景をなしてゐる

一般の社會狀態の動きに交渉せしめて考察する立場を取るときには、それに報道されてゐるやうな事件が今日に於て起つて來たのは、單に當然なことであるばかりでなく、寧ろその起つて來たのが餘りに遲すぎた位だとも、私は考へられた。が、いづれにしても、右の一記事が、その時私の意識の上に、或る深い印象を貽したことだけは、たしかな事實である。

それから二三日が經過してゐるうちに、これと同種類の記事が、段々と他の新聞紙の上にも現はれ始めたのが、私の眼に留まるやうになつた。就中、十日の『東京日々』の朝刊の第二ページに出たものと、同日の『時事』（十一日附）の夕刊の第一ページに出たものとは、特に私の注意を率いた。前者は、矢張り教育擁護同盟會（『讀賣』の記事中の『教育同盟』より、『會』の一字だけが餘計に附けられてゐたが、明かに同一のものを指してゐるものと認められる）の名を擧げ、そして、同會が岡田文相の教育政策に對して猛烈な反對運動を企ててゐることを記るし、且つ同會の反對意見の内容の概要を示してゐた。それからまた後者は、特に軍事教育問題だけに關し、岡田文相と『教育界』（該記事には『教育界』とあつただけで、その如何なる方面のことかを具體的に指しては居なかつた）との間に横はる意見の相異の諸點を要約してゐた。それらの記事は、いづれも皆、一般世人の注意に値するものであつたことは無論であるが、私には特に意味の深いものであつた。といふのは、先づ第一に、それらは、私が數日前に『讀賣』で讀んだ記事を或る程度に裏書きしたやうな效果のあるものと、私に感じられたからである。私は無論、右に名ざした諸新聞の各々の記事の正確性に差等づけようとしてゐるものではない。けれども、新聞紙の誤報の最大原因の少くとも一つが、常に報道の敏速に關する競爭から來るものだ、といふことを念頭に置くときには、この場合には、同種類の記事が、數日を隔てて別々の新聞に載せられたことではあり、また他に別にそれに關する虚報もしくは誤報を生ぜしめるやうな種類の特殊な原因が

あらうとは考へ附かれなかつたところから、私は、それらは、大體に於て信頼し得られるものと見て間違がないと考へた。さうだとすると、それらは、前に引用した『讀賣』の記事の内容を、更らに或る程度に精密に闡明してゐるものと見ることが出來るのみならず、殊に『東京日日』のそれは、教育擁護同盟(會)の岡田文相に向つての反對意見の内容を掲げてゐるところから、この團體の立場を知る便宜を我々に提供してゐるし、從つて間接に、この團體の性質を髣髴せしめてゐるものとすることが出來る。かういふ譯で、私は、それに依つて、可なり啓發されたのを感じた。で、私は、幾分の煩はしさを厭はず、右の教育擁護同盟(會)の反對意見の要旨をその記事から借用して、それを私の論述の出發點とする。それは次の通りである。

『第一　軍事教育反對理由。

(一)中學以上の學校に軍事教育を行ひ、在營年限の短縮をなすは、有産階級の子弟に對する特典を重ぬるものである。

(二)陸軍に關する軍事教育を行ふは、國防の眞精神に反する。

(三)軍人が學校の職員となることは、學校長の統御に大なる障碍を與へ、教員の一致協同を損ふものである。

(四)軍事教育を採用することは、列國をして更らに好戰國として我國を眺めしめることになる。

第二　學校劇に關して。

文相の兒童劇に對する消極的な態度に多大の不滿を有するもので、脚本の選擇演出等については充分の注意を拂ふべきは勿論であるが、將來學校教育の一方法として、一層これを研究して採用されんことを望むものである。

第三　教育上の新主義。

教育上の新主義の採用に反對は、少數の進歩的新教育者の危險を過大視したものである。寧ろ文部省當局者が自ら進んで新教育法を研究して採用されんことを望む。

第五　年限延長問題。

年限延長問題に對する國論は既に一定し、今は唯その實行の時期、方法のみが問題となつてゐるのみである。今や弊履の如くこれを棄て去つて、何等提案の意志なき文相の言責を問はんとするものである。〔註二〕

右の引用は、餘りに長くなりすぎたやうに見えようが、しかし、最近の教育界に持ち上がつたこの波瀾の因つて來るところを尋ねることは、私の主題に密接の關係のあることだから、私はそれを避けることが出來なかつた。右の教育擁護同盟が何ういふ團體であつて、幾人ほどの員數から成立つてゐるのであるか、といふやうな點は、今でも私には全然不明であるが、しかし、それが教育思想の上に於てどういふ立場に居るかは、右に引用されたその主張の要旨の中にも、甚だよく表はれてゐる。そして、同時に、その立場は、近年來我國の教育界の一部に於て、まだ極めて微弱な程度に於てではあるが、しかし着々と醞釀されつつある一新傾向の反映であることも、私達には明瞭に認め得られるのである。それと、岡田現文相に依つて代表されてゐる舊式の教育思想との衝突が、所謂軍事教育問題以下の諸問題を機緣として演ぜられたのである。それは、私には、形式本位の官僚式教育方針に對する、新生の自由教育主義の反抗を、幾分間接的の形式に於てではあるが、兎に角反映してゐるものとして見られるのである。我々が、所謂軍事教育問題の社會的若しくは反社會的意義を批判するに際しては、まづこの事實の認識から進むのが最も順當だと、私には考へられる。そこで私は、次に、右の教育擁護同盟が提げて起つた要求を、時代の背景の前に置いて、それが現下の或る重要な社會問題に交渉して居るものとして持つてゐる意味を、出來るだけ明確に見究めようとしてゐるのである。

【註一】 本篇全部執筆後、筆者が或る確かな筋で調査したところに據ると、教育擁護同盟は、東京市内に於ける多くの教育雜誌の記者たちの主唱の下に、數年前に組織されて、今に存立してゐる團體である。それから、右に引用した『讀賣』の記事中にある『教育十六團體』といふのは、目下東京市內に存在する主要なる教育上の諸團體の總數に關聯してゐるものらしい。が、教育擁護同盟は、形式上は、別にそれらの諸團體が聯合組織してゐるものになつてゐないのであつて、寧ろそれの會員が、それらの諸團體の中に散布されてゐるといふのを、適當とすべきものであるらしいのである。また同記事中に引合ひに出されてゐる澤柳政太郎氏は、帝國教育會の會長ではあるが、教育擁護同盟には、會長としてでなく關係してゐるのだと聞いてゐる。

【註二】 岡田文相の政策に對する教育擁護同盟の意見書の內容は、私が今差し當り知つてゐる範圍內では、啓明會といふ教育團體の機關雜誌『文化運動』の十一月號に、今少し詳細に載せられてゐる。それは大體の趣旨に於て、ここに引用したものと同一であるが、しかし、それには、その諸項目が、次のやうに排列されてゐる。――(一)軍事教育に關する意見、(二)教育者の政治運動について(その項下には、教育者の政治運動參加に對する岡田文相の否認的態度が批難されてゐる)、(三)學校劇について、(四)教育上の新主義について、(五)義務教育年限延長、義務教育費國庫負擔金增額、並に師範教育改善。

二　時代錯誤の教育政策

所謂『護憲內閣』が成立したときに、官僚教育家の『生ける屍』の一つとも見られ得る岡田良平氏が、貴族院から拾ひ上げられて、その仲間に加へられたのは、江木前文相への接續物として見れば、その妥當性が誰にも頷かれようが、しかし、たとへ看板の上だけにもせよ、苟くも『護憲』と銘を打つた內閣には、決して不似合でないとはいへなかつた。けれども、それには、さうなる理由があつた譯ではある。即ちそれは、一方に於ては無論、加藤首相の頭腦から何時までも拔け切らないでゐる官僚意識、及び元老とか樞密院とか貴族院とかの樣な老成勢力に對する彼の過度の遠慮的態度から來てゐるものに相違ないが、しかし他方に於てはまた、文相の地位及び仕事に對する政黨者流の習慣的輕侮感から

も來てゐるのである。それ故に、新内閣の事業の他の方面に於ては、中途半端のものにもせよ行政及び財政の整理だの、名義的のものにもせよ、普通選擧の實施だの、微温的のものにもせよ貴族院の改革だのといつたやうな種類の、幾分か時代的匂ひのある樣々の方策が講ぜられつつあるにも拘らず、教育行政の方面に於ては、却て樣々の反動的色彩の濃厚な施設が、次々と計畫され實行されつつあるやうな、一見甚だしき矛盾と感ぜられる現象が起つて來てゐる譯である。

かうした事情の下に於て、岡田文相は、その就任以來の短き期間に於て、着々と官僚式教育家の本領を發揮して來たのである。即ち彼は、茲が自分の識見及び手腕の見せどころとばかりに立案したところの、例の學校劇に對する煩瑣な干渉政策の實行を手始めとして、自由教育及び創造教育の下に理解され得るやうなあらゆる教育方針を否定し、教育者達の手に殘されてゐる僅かばかりの範圍の自由をも奪取しようとする意氣込みを見せ、遂に最後に、現役陸軍將校たちの手に依る軍事教育を、中學以上の諸學校の上に强課しようといふ計畫を立てるまでの段取りに進んで行つたのである。この軍事教育計畫は如何に彼等が陸軍側の當局と共に苦心に苦心を重ねた辯解をしても、畢竟その實質上、教育の徹底的軍國主義的統率を豫想せしめるものである。この點は、私が後に明確に論述しようとしてゐることであるが、しかしそれは、誰の指摘をも須たずに、最初から公衆の本能が直觀的に認識したことである。しかも彼は、さういふ計畫を立てるに際しても、少しも教育界の内部の輿論に聽かうとはしないで、却て教育界の外部に立つてゐる陸軍側の當局と事を謀つて、一般教育界の上に測り知られないほどの重大な影響を及ぼす虞れのある施設を行はうとしてゐるのである。そこが官僚式といふなら、無論それに違ひはない。けれども彼が、さういふ官僚式教育政策を現代の教育界に押し附けることに依つて、幾らかでも望ましき教育上の效果が擧げ得られると思惟してゐるものとするならば、それは餘りに無鐵砲な時代錯誤だといはねばならぬ。無論、彼が彼の屬する内閣の勢力を後楯にして、飽くまでその官僚式教育政

策を押し通さうといふ段になれば、全體の上からいへば年來奴隷的に訓練されて來てゐる教育界に、縱しその一部に於てそれに反抗の氣勢を擧げる硬骨的集團の運動が起るにしても、全體としては、結局それに盲從することになるであらう。そしてその時、岡田文相は、陸軍側の當局と共に、凱歌——縱しそれが羊の群れを苛めて擧げる凱歌のやうなものであらうとも——の欣びに陶醉するかも知れないであらう。けれども、それは決して、終局的勝利である筈はない。それは必ず、或る時期に於て、收拾すべからざる破綻に陷る運命に遭遇するであらう。私は、所謂『世界の大勢』に即しそれらを言はうとしてゐるのではない。私は寧ろ、もつと手近の我國の教育界の下にも現在脈動しつつある一種の底流の方向及びその強度に關する私の觀測に基いて、それを言はうとしてゐるものである。

しからば、その所謂我國の教育界の下にも現在脈動しつつある一種の底流といふのは、一體何を指してゐるものであるか？　私はこれから暫らくの間、それの探求を試みよう。

三　既存制度の上に芽ぐむ新傾向

我國の國民教育制度は、明治五年に於ける『學制』發布以來、數次の改正を經て現在に及んだものであるが、しかしその根本精神は、明治の初期に官僚政府に依つて創定された形のままに持續されて來てゐるものである。そしてそれは、その本來の使命からいへば、所謂『德育』『知育』『體育』といふ風に三位一體的に觀念されてゐるその構成要素を通じて、『國家有用の材』を生產するやうに企てられてゐるものである。それからまた、その所謂『國家有用の材』といふのは、その實質を客觀的見地から解說すれば、この國民教育制度の創設者であつた官僚政府の政權の行使及び維持の上から見た通りの利用價値を具備する人物を概括的に指してゐるものだ、と言ふことが出來るものである。若しくは、

今それを少し内容的に言ひ現はせば、それは、個人としては、官僚政府の立場から見て望ましいやうな型の性格、知識、及び道德感の所有者であるところの、官吏とか、軍人とか、教育家とか、技術家とか、その他、農・工・商などの方面の實務家とかの地位若しくは職業への適應者を始めとして、國民としては、對外的には、盲目的愛國心若しくは無反省的敵愾心の衝動に依つて行動し、對内的には、治者階級に對する服從の『美德』、既存秩序に對する奴隷的追隨、因襲・傳統に對する無批判的崇敬、等・等・等に生きてゐるやうな種類の人々を、一網打盡的に包含した類名だ、とすることが出來るものである。

一體、近代國家制度の下に於ける各個の國家に於ける教育制度は、當該國家内に於ける支配階級に依つて、その功利的政略的見地から、自由に利用されてゐるものである。イギリスのパブリック・スクールや大學やが、治者階級の人材養成機關としての働きを盛に行つて居る點は、ジー・ディー・エッチ・コールなどがその諸著書に於て屢々指摘して居る通りであるが、しかしそれと同樣のことは、殆んどすべての近代諸國家の内部に於て、共通的に見られ得る現象である。それは無論、學藝及び技術の專門的分野に關しても言ひ得られることでもあるが、しかしそれは殊に、普通教育程度及びそれ以上の諸學校を通じて扶植され、普及されるのを常とする或る特殊の道德觀念に關してこそ、最も適切に言ひ得られるのである。この點に於て、ベートランド・ラッセルの意味に於ける『官府的宣傳』（official propaganda）が、國民教育制度を通じて、最も手廣く、且つ最も有効に行はれてゐることが、誰にも頷かれ得るのである。

けれども、近代國家制度の出現及び發達を裏づけてゐる諸多の政治學說が、一方に於て、ルネッサンスの主潮の一つであるヒューマニズムの思想の流れと或る密接なる交渉を持つてゐる通りに、近代諸國家の下に於ける教育事業もま

た、同じ思想の流れからの刺激や影響やを感じない譯には行かなかつた。殊に、文化國家思想が一般的に流布するやうになつてからは、教育事業の上にも、それに伴れて段々と新傾向が展開されるやうになつた。無論、この文化國家思想は、從來の支配階級の文化——貴族文化とかブルジョアとか言つたやうな——をその基調として來たものであるが、しかし、それにしても、それは特に教育事業の上に、或る直接の影響を及ぼさないでは置かなかつた。それは、少くとも表面上は、教育事業が、單純に支配階級の功利的政略的意味の教化機關としての性質だけに限局されるのを許さないやうになり、更らにその上に、もつと深い人間的意味の含まれた教化機關としての性質若しくは外觀が加味されて行く趨勢の端緒を作つた。それ以來、ヒューマニズムの系統に屬する近代思想家たちの啓蒙思潮に溯源し得られる自由教育とか、創造教育とか、人格教育とか言つたやうな、——しかし結局は教育の本來の使命として一般的に理解されてゐる『個性の開發』といふ一元に歸着せしめられ得る——諸主張が、次第に實際の教育事業の中へ浸入して行くやうになつた。

もつとも、かういふ教育上の諸主張の多くが、意識的若しくは無意識的に、支配階級文化の上に立脚せしめられて來たといふ事實の外に尙ほ、表面上だけでも文化國家の體面を繕ふことが、近代諸國家の生存上の安全の點からも非常に重要視されるやうになつた——それは、たとへば、彼等が彼等の『土地に對する饑餓』の滿足のための領土擴張の行動をさへ、『野蠻人の教化』といふことを一の口實として肯定を求めなければならなくなつたほども、それほども重要視されるやうになつた——といふ事實を顧みるときには、さうした教育上の新傾向も、より廣汎な見地から解釋するときは、矢張り一種の功利的政略的意味の籠つてゐるものだといふことが出來るのである。が、しかし、そこから今一步を轉じて、更らに或る他の立場から見れば、それは同時に、それ自身の裡に、一のより高き人間的意味をも含んでゐるものだ、と言ひ得られないとすることは出來ないのである。我々は屢々、生みの親の誰であるかを離れて、單獨にその兒と

性狀を評價することがある。かういふ意味で、我々は常に、既存の社會制度の下に於ける我々の生活の裡にも、來るき新時代若しくは新社會の生活の萌芽の隱されてゐるのを見る。殊に教育の場合に關しては、我々は、現代のそれの裡にも、少くともそれが、その基礎をなしてゐるところの支配階級文化から解放されさへすれば、そのまま來るべき新時代もしくは新社會の教育——プロレット・カルトの概念などに依つて髣髴と示唆されてゐるところの——の中へ移入され得べき、或る貴重な人間的教化の基礎的條件が包藏されてゐるのを見逃がすことが出來ない。否、若しさうしたものがそこに包藏されてゐないとするならば、教育制度の改造といふやうなことも、畢竟『無』から『有』を生じようとする手品に終らなければならないだらう、といふやうなことすら、我々の念頭に上つて來るのである。

しかし私は、しばらく我國の教育界の問題から離れて行つてゐたが、今は再び、その方へ立ち歸らなければならぬ。前に述べた通りに、我國の國民教育制度は、沿革的に——そして客觀的見地から——言へば、明治の初期の官僚政府の功利的政略的意味が、非常に濃厚に含まれてゐたものである。しかしながら、近年來資本階級が、經濟的に、社會的に、從て政治的にも、壓倒的優勢を占めるやうになつてからも、それが大體に於ては依然として、初期時代に創定された形のままに持續されて來たのは、一見不思議に見えないとではない。が、それにはまた、我々にも考へ附かれる樣々の理由がある。といふのは、まづ第一に、明治時代の官僚政府は、當初から、彼等がその創建に參加した新日本が、近代的資本國家の一つとして成長すべきとの已むを得ない譯を知つてゐて、そして自ら率先して、各方面の殖産興業に關する保護奬勵政策を盛に講じた程だから、無論學校教育の中へも、法制經濟諸學科以外に、理・化・工・醫學等の實用的意味の含まれてゐる諸科目を盛に採用し、且つ諸般の實業教育の普及にも引續いて努力して來て、現に今も猶ほそれらを實現してゐるので

ある。今この間の關係を、現今慣行の社會思想上の用語例に依つて表現してみると、普通教育の方面では、被搾取階級の勞働能率を高めるために役立つやうな種類の基礎的智識及び精神狀態の涵養が最も重要視され、大學教育を含めての專門教育の方面では、より直接に搾取階級に奉仕する社會的諸集團のために有用な專門的學藝及び技術、並に統治的事業への參加のために必須な法制經濟上の觀念及び智識の注入が主として顧慮されて居る、——といふやうなことが、少くとも大體論として述べ得られるのである。かういふ譯であるから、我國の國民教育制度は、この點に於て、毫も新興の資本階級の本質的不滿を買ふべき何等の理由を持つてゐないのである。だが彼等は、他方に於て、所謂國家道德の方面では、各種の國民化された、封建的道德觀念の維持に腐心する外に、新たに帝國主義的精神の振興を計り、從つて自由主義思想や創造的意欲やの抑塞に丹念に從事して來たことは事實である。しかしながら、産業生活の方面に於て、まだ自由・放任・無干涉主義の洗禮を受けた經驗もなくて、寧ろ政府の軍國主義的發展の庇護の下に、早くも帝國主義から來る利益の味を占めて來た我國の資本階級は、政府のさうした國民道德觀念の扶植に對してもまた、嘗て懷疑的態度さへをも取つたことがなかつたのである。そして若し、我國の資本階級の小さき一部の間に於てでも、自由主義の精神の動きの見られるものがあるものとすれば、それは寧ろ比較的近時に屬することである。即ち、少くとも最近に及んでは、實質上或る方面の商工業集團の利害關係の政治的表現を圖るために組織されたものと見做され得る實業同志會の政綱や、その黨首の武藤山治氏などがそこここで試みた演說やの上に、段々とブルジョア流の自由主義的精神の發現が見られるやうになつたことだけは、確かな事實である。それ故に、同會の政策の中に、理・工・農・醫の諸科の大學の如き、經營の關係上、國家の經營に依るを利とする種類のものを除き、その他の——殊に法制經濟等の——諸科の大學は、私立的經營に依るべきものだと、いふやうな趣旨が揭げられてあることは、充分我々の注意に値することである。

かういふ教育制度が、あらゆる教育上の新傾向――殊にヒューマニズムに立脚するそれ――の擡頭のために、思ひ切り不利益な地盤を構成してゐるものであることは、誰れの眼にも明白なことに見えよう。が、それにも拘らず、起るべく運命づけられてゐる新傾向は、すべての障碍を排除しても起つて來る。否、それは既に、そこに起つて來てゐる。そして、具眼者には、それがかなり鮮明に認められる。

四　教育界の新傾向の出生（上）

――門外漢としての私の立場――

私達のやうに、大學内に於て專門の一學科の研究及び講述に終始してゐるものは、もとより廣義に於ける教育に携はつて居るものといふことは出來ようが、しかし普通一般に理解されてゐる意味に於ける教育に從事してゐるものといふことは出來まい。もつとも、普通一般に理解されてゐる意味に於ける教育といつても、それを明確に定義づけるとは、私達には甚だ困難なことであつて、それは、寧ろ、以心傳神的に領會されるものとする方が正しいかも知れない。が、しかし、今強ひてその重要な一面を、不完全な人間の言葉で言ひ現はすとすると、それは、すべての人々の、人間としての生活の完成のために必要な一般的、基礎的知識及び技藝の教習、並に、各人の個性の社會生活への展開を助成するための促進的及び抑制的指導といふやうたことを以て、その本領とするものだ、と言へよう。若しくは、他の言葉で言へば、それは、各人の現實社會に於ける個人的及び協働的生活の準備的條件の賦與といふやうな意味を帶びる知識及び人格の涵養若しくは陶冶を期する合目的的施設の總體を指稱するものとして諒解されてゐるものだ、とも言へよう。もとより、かういふのは、個々の實際の教育制度の下に於て、かうした働きを現實にしてゐる教育が有效に行はれてゐるといふことを意味

するものではなくて、それは寧ろ、一般世人が教育といふものの上にさうしたものを期待してゐるといふことを意味するものである。そして、この意味に於ける教育は、今日の教育制度の下に於ては、『普通教育』の下に包含されてゐる初等教育及び高等普通教育の機關を通じて行はれるもの——若しくは行はれるべきもの——とされてゐるのである。『本來』の意味に於ける『教育』といふものは、主としてそれを指してゐるものであつて、それからまた、少くとも狹義に於ける『教育界』とは、さうした教育が行はれてゐる——若しくは行はれてゐると假定されてゐる——範圍內のことを指してゐるものと見做し得る理由がある。少くとも、一般世人が『教育界』といふ言葉を用ゐる場合には、彼等は意識的若しくは無意識的に、さういふことを腦裏に浮べて居るもののやうに、私には考へられる　いづれにしても、私は、本篇に於ては、『教育界』といふ言葉を、さうした意味に於て使用することにする。

若し『教育界』の意味を右の通りに狹義に限定するとが無理な解釋でないとすれば、私はまさしく、教育界に對しては、一個の門外漢である。で、さうした地位に置かれてゐる私が、今教育界に現はれてゐる一新傾向に就いて云爲したところで、それに何等の權威の伴はないであらうとは、私自身が、誰よりもよく知つてゐる。從つて私は、それに關する私の言葉に、如何なる權威をも要求しようとしてゐるものではない。しかしながら、私は同時にまた、かうも考へる。すなはち、若し私が、その方面に於て私の見たままのことを、單純な正直さを以て語ることが出來たならば、その結果は決して、全然無意味に終るものではあるまい、と。といふのは、教育界に於ける或る新傾向への動きが、私のやうな全然門外漢であるものにさへ、或る程度に銳敏に感じられるものとすれば、それは既に、或る方向に沿うて餘程進んで居るものに相違ない、との見込みも立たうし、またそれは、餘程底力のあるものに相違ない、との見込も立たう、と思はれるからである。いづれにしても、私は、私が今手にしてゐる問題に幾分でも透徹した照明を投げ得るために

は、さうすることは、私が當然辿らなければならない一の必要な過程だ、と考へるのである。で、私は、縱し極め簡單にでもせよ、それを試みようとしてゐるのである。

五　教育界の新傾向の出生（中）

——教育制度上の矛盾せる二要素——

我國の國民教育の『大本』は、前に述べた通りに、明治時代の官僚政府が、その功利的政略的見地から創定したものであるが、それには、當初から、相調和すべからざる二つの要素が含まれて居た。その一つは、主として所謂『德育』の方面に於て、また他の一つは、主として所謂『知育』の方面に於て、それぞれ別々にその根據を占めてゐたものである。前者は、封建時代から持越された傳統的道德觀念の國民化されたものから成立つてゐて、その根本に於ては、既成の權威及び秩序に對する理窟拔きの無批判的盲目的絕對服從を强要するものである。それに反して、後者は、自然科學及び社會科學の方面に於ける知識の教習の根柢に橫はつてゐる主知的傾向に依つて代表されてゐるものであつて、それは如何に低級な程度のものである場合にせよ、因果律的解釋とか、分析的方法とか、批判的態度とかから離れることが出來ないものである。この意味に於て、前者が『何故に？』の疑問を許さないものであるに反して、後者は端的に『何故に？』の疑問から出發するものである。

明治時代の官僚政府の功利的政略的打算の產物であつた我國の國民教育制度の上に、前者が無條件に採用されたのはどの點から見ても、極めて自然なことであつた。けれども、後者が矢張りその上に移し入れられたのは、維新開國の前後から、我國の爲政者たちが、諸外國の資本主義的帝國主義からの脅迫を鋭く感じてゐたといふやうな、當時の政治的

環境を考慮の内に加へなければ、確實に掴み得られないことである。かういふ政情に對應するために、當時の爲政者たちは、我國をして近代的資本國家の一つとして國際競爭場裡に打つて出ることを得しめるための準備として、所謂『實學』の各種のものを、諸學校の課程の中へ取り入れたものである。我國が遲れ馳せに資本國家圏内へ仲間入りをしたにも拘らず、比較的短少の期間内に於て、その農業國としての本來の面目の上に、更らに近代的商工業國としての外觀を加へることに依つて、『列强』の班中にその一地位を占めるやうになれたのは、それに負うてゐることが、決して少くはないのである。しかも、右の兩樣の教育方針が、永い間には、双方から衝突し合ふ點にまで進んで行つて、相互的にそれぞれの効果を相殺し合はなければならないやうな破目に陷つたのは、それを『運命の惡戯』に歸せしめても不自然とは見えないほども、それほども極めて皮肉な現象である。

國民教育制度の創定の當時から、『德育』及び『知育』の上にそれぞれに體現された所謂國民道德觀念や、實學尊重主義やの、本質的に相容れない二つの教育方針が、それぞれに別々の場面に於て、非常に顯著な効果を擧げたことは、世間周知の事實である。そのうち前者の中心點にせられてゐる所謂國民道德觀念は、對内的に、官僚教育家たちが虎の兒同然に愛撫してゐる所謂『淳風美俗』の維持のために相當の貢獻をしたことは、爭はれない事實である。のみならず、それは、現在に於ては、最近の社會的動搖の産物として生じた一種の社會思想の流布を防止するためにも、爲政者たち及び社會に於ける保守的諸分子に依つて、極度に利用されてゐるのである。けれども、それが最も偉効を發揮して來たのは、その對外的作用の方面に在ることも、同樣に疑ひのない事實である。すなはち、それは、盲目的愛國心とか、軍國主義的精神とか、對外的猜疑心とか、對異民族的敵愾心とか、領土擴張欲とか言つたやうな、同血に繋がれる多くの兒孫を産んで、それらを通して、戰時に於ては勿論、平時に於ても、常に國民の注意を、顯在的若しくは潛在的國際戰爭

の上に向はしめてゐるのである。我々は、昨年九月の地震直後のしばらくの期間に於て、多數の民衆の潜意識の裡に巣喰つてゐるかうした對異民族的憎惡感情の種々相が、不用意の間に際限もなく發現されたを見て、善きにせよ、惡しきにせよ、教育の効果の、時としては意想外に廣大なるものがあるに驚いたものである。

一方の『知育』の方面で强調されてゐる『實學』尊重の精神の教育もまた、多大の社會的效果を産んだことは、私が既に幾分觸れて置いたことである。が、若し今その上に一言を加へることが許されるならば、それは、醫學の方面に於てはもとより、理・化・工の諸科學の方面に於ても、相當の進歩を我國の學界の上に齎らして來たものである。これらの諸方面に於て、我國民は、よし西洋諸國民とはまだ如何なる點でも有利に角逐し得るところまでは漕ぎ附けて居ないにしても、我國民以外の東洋諸國民を遙に凌駕してゐるとは、確かな事實である。けれども、それと同じ方面に沿うて表はれた他の一の顯著な現象として、私が特に茲に注意したいのは、最近の我國の民衆の一部の間に於ける一種の社會思想の急速なる流布といふ一事實である。最近に於て斯う急速に流布し始めたこの種の社會思想は、從前の形而上學的社會思想とは異がつて、その根本に於ては、自然科學と同じく、實證的歸納的方法に立脚してゐるものであつて、しかも自然科學の上に見られる創造的の一面を、その改造思想の上に移し入れたものである。科學の本質的價値は、その原理の上にあるものか、それともその應用の上にあるものかといふやうな問題は、屢々一部の人々の間の議論の對象となつてゐるものであるが、私の立場からいへば、科學の全體系の上に於ては、その原理と應用とを峻別することは、實際上不可能なことである。が假りに、觀念的に科學の原理をその應用から分離せしめることが出來るものとすれば、もとよりさうして抽象化された『原理』は、或る特殊の人々——殊にその研究に直接從事して居る人々——に取つては、如何にも或る本質的價値があるものといへよう。少くともこれは、さうした人々の知的滿足——若しくは原理探求心の

滿足と言つてもいい――の道具となるであらう。が、しかし、科學がこの社會價値もしくは人生價値を要求することが出來るのは、一にそれの原理が、それの應用を通じて、創造的な働きをするところにあるのである。それは、單に自然科學に關して言ひ得られるばかりでなく、社會科學に關してもまた、同等の力を以て言ひ得られるのである。そして、社會科學に立脚する社會思想に於て、この創造的精神の一面を特に强く表出したものが、社會改造思想である。

私は、或る讀者たちに、私が私の主題から少しづつ離れかけてゐるやうに見えるであらうことを虞れる。けれども、私が今までに述べたことは、私が後に直接に軍事教育問題に對する私の意見を述べる際に、再び活きかへつて來るであらうところのものである。それ故に、私は、それをこの機會に語つておく自由を取つたのである。

私は今、私の議論の本筋へ歸る。所謂『德育』及び『知育』は、私が上に別に觸れる必要を意識しなかつたので觸れなかつた『體育』と共に、三位一體式の不可分的な存在だといふことになつて、我國の國民教育制度の中に取り入られてある。が、若し私の觀察が間違つてゐないとすると、それらの分布狀態は、初等・中等・高等といふ風に教育の程度の異るに從つて異つてゐるものである。詳言すれば、『知育』的色彩は、高等な程度の教育の方へ上るに從つて、益々その比率が加はるものであるに反して、『德育』的色彩は、初等程度の教育へ下る程、益々その比率が加はる觀があるものである。かういふ譯で、小學教育は、所謂國民道德觀念の基礎がそこで築き上げられるといふことの上から見て、教育の最も重要な場面だとされてゐるのである。もとより、小學教育に於ても、學童たちに對する知識及び技藝の授與は、非常に大切な意味を持つてゐるものであつて、そして、私達の立場から見ても、それは甚だ貴重な種類のものだと考へられる。けれども、國民教育制度の創設者及び維持者たちの意圖を、彼等の外的言動から忖度すると、小學教育に從事

する教員たちは、學童たちに對する國民道德觀念の注入の受託者としてのその他位に於て、最も重大な使命の負擔者と見られてゐるやうに見えるのである。

旣成の權威及び秩序に對する無批判的服從、及び因襲・傳統に對する盲目的尊重等の上に組立てられてゐる國民道德觀念の受託者としての彼等に、一切の創意の表現や、一切の新機軸の案出や、一切の新思想の移入が、嚴重な禁制の題目になつてゐるのは、極めて自然なことである。彼等は、この方面に於ては、メーリー・ゴーラウンドの樣に、始終一條の固定した軌道の上をグルグルと廻つてゐれば、それでいいのである。否、廻つてゐなければならないのである。彼等が一歩その軌道外へ逸出すれば、彼等は直ちにその地位に對する不適者となるのである。彼等の職務は、保存的であつて、進取的でなく、追隨的であつて、創造的でなく、模倣的であつて、發明的でないのである。彼等の處世の要訣は、出來るだけ機械人形のやうに動き、出來るだけ彼等自身の人間性をポッケットの中へ仕舞ひ込むことにある。彼等は、自治體の吏員などに對する彼等の交渉に於てこそ、『政治的』手腕を揮ふ機會を持つこともあらう。けれども、國民道德觀念の受託者としての彼等は、少くとも處世上、出來るだけ精確に、彼等に與へられた型に嵌まることを努める必要があるのである。

私の言ひ方は、或は表象的に過ぎてゐるかも知れないが、斷じて誇張的ではないと思ふ。私はまた、それを輕蔑的意味で述べてゐるのではなくて、寧ろ同情的意味で述べてゐるのである。若し私自身が、彼等と同じ境遇の上に置かれたとすると、彼等が取つてゐる態度以外の態度を私が採り得ようとは、私に思へない。それからまた、私が一般の小學教員たちに就いて言つたことは、より高級の教育者たちに就いても、無論それぞれの場合に相當の割引を必要としてではあるが、大體は適用が出來る、と考へる。

彼等がかういふ制約の下に置かれて居るにも拘らず、幾年か前から、『自由教育』とか、『個性教育』、とか、『創造的教育』とか、『教育の民主化』とかいつたやうな聲が、段々と彼等の間から漏れ聞えて、遂に私たちのやうな門外漢の耳にも入るやうになつたといふことは、私たちに取つては、一つの大なる驚異であつた。無論、かういふことが叫ばれるのは、恐らく『徳育』——少くとも國民道德觀念の指導原理——に關してではなく、學藝技術の傳授といふやうな、主として『知育』の下に於て理解し得られる側に關してであらう。實際、彼等には、『知育』の方面に關して、幾分かより廣き範圍の自由が割り當てられてゐるのである。そして、それには、樣々の原因もあることだらうが、しかし、國民教育制度の創設者及び維持者たちの功利的政略的打算に於て、暗々裡に、國民道德の受託者としての彼等の任務が、學藝技術の傳授者としての彼等の任務よりも、より重大なものだとせられ、從つてより嚴重な監督の下に置かれるべきものだとせられて來たことも、たしかにその原因の一つとなつてゐるものであらう。それは兎に角、『自由』とか、『個性』とか、『創造』とか、『民主化』とかいふやうな朗らかな聲が、次第に小學教員たちの間から聞かれるやうになつて來たことは、縱しそれが、童謡とか、自由畫とか、手工とか、戸外遊戲とかといつたやうな、比較的狹小な範圍内だけに限られてのことにもせよ、今のところ、それは問題でない。一波が萬波を生ぜしめるやうなことは、常に見られ得る現象である。が、さういふことよりも、『石に挫がれた雜草』が不可思議な生の力に押されて延び上るやうに、年來重き負擔の下にうなされてゐた彼等の人間性が、一たび或る間隙を發見するや、直ちにそこから外へ向つて活路を求めるやうになつたことに、或る深い意味がないとは、誰れに言ひ得られよう！

六　教育界の新傾向の發生（下）

——その本質及びその社會的原因——

古來の各時代の各國の支配階級は、その功利的政略的見地から、或は教會の、或は國家の名に於て、種々の形式に於ける庶民教育を企て、それを通じて、或る特定の社會的秩序の維持のために有效な宗教的信條とか、道德觀念とかを鼓吹し、宣傳し、扶殖して來たものである。さういふことに、多大の政治的利用價値のあることは、支配階級の本能が直感することでもあり、また忘却し得ないことでもある。かくて、近世紀に於ける民族國家形成の傾向の展開と共に、教育制度の國民化が漸進的に行はれ、それからまた、ブルジョアジーの勢力の昂騰につれて、政教分離運動が次第に完成されるやうになつたのである。かういふ譯だから、我々が教育制度の進化を社會的見地から考察する場合には、我々は、それの政治經濟的背景から眼を離すことが出來ないのである。

けれども、教育制度の國民化——若しくは國民教育制度の完成——が實現された情態の下に於ても、少くとも外觀上から言へば、必ずしも支配階級の功利的政略的見地と全然一致するものとは思へないやうな教育上の諸學說が流布されることがあるのは、一體どう說明していいものであらうか？

たとへば、鞏固な中央集權の下に國民教育制度を確立した西ヨーロッパ諸國の教育界に於て、個性の自由展開の要求を前提として打建てられたやうな種類の教育學說が盛に流布されたことは、第十九世紀の思想史上の顯著な一現象であるが、これは、如何なる原因から出て來たものとすべきであらうか？

私は前に既に、それに關する私の考察の一部分を、幾分冒險的に提供した。すなはち、私はそこで、ヒューマニズムの思想系統に屬する近代の教育學說は、同じ思想系統から流れ出たものである近代政治學說と調子を合はせてゐるものであることを言ひ、且つまた、近代國家は、その生存上の必要から、多少の程度に於て文化國家思想を支持してゐるところから、その教育政策の功利的政略的若しくは支配的意味を丸出しに曝らけ出す譯にも行かないし、從つて現存の支配

關係を直接に脅威しない限りは、あらゆる教育學說の存立を認容しない譯にも行かない狀態に在ることを言つた。

けれども、それだけでは、縱しヨーロッパ諸國の教育界の事情に關しては、不完全ながら、一應の說明が附いたものとするにしても、我國のそれに關する充分な說明が與へられたものとは見られないのである。といふのは、まづ第一に、我國の現存の國家制度の肯定のために、官選の法學者若しくは道德學者側から與へられて來た政治學說は、決してヒューマニズムの流れを汲んでゐるものではなく、寧ろドイツ流の、殊にヘーゲル派の全能國家主義的學說と、我國の宮廷史家から傳はつた歷史的記錄からの推論とを繼ぎ合はせたものから成立つてゐるものだからである。もつとも、明治時代の初期以來、我國のインテリゲンツィアの間に、ルソーや、ベンタムや、ミルや、スペンサーなどの個人主義的政治學說が傳誦されなかつた譯ではなかつたが、それらは皆、民間の處士橫議の上に現はれただけのものであつて、我國の支配階級は、決してそれには共鳴しもしなかつたし、また共鳴する筈もなかつたのである。それからまた、維新以來、我國を近代的資本國家の一つに守り立てることに沒頭してゐた我國の爲政者たちは、多くの場合に於て、帝國主義的及び軍國主義的思想の渴仰者として言動して居たことは事實であり、また彼等の頭腦の裡にへバりついてゐた官僚意識は、彼等をして警察國家主義的思想の使徒として民衆の上に臨ましめたとは事實であるが、しかし彼等が文化國家思想の信奉者であつたやうなことは、餘りに見かけられない圖であつた。それ故に、この點からも、我國の教育界に、自由教育とか、個性教育とか、創造的教育とか、教育の民主化とかの主張の出現のために好都合な何物かが期待され得る譯はなかつた。

それにも拘らず、明治時代以來徹底的に國民化された教育制度の下に置かれてゐた我國の教育界へも、早くから、種種雜多の教育學說が、ヨーロッパから移し入れられて、そこで複雜な渦紋を卷き起してた。教育界に對して門外漢であ

る私は、それに關する沿革的敍述を精確に與へることは出來ないが、それでも、私たちがまだ幼少であつた頃普通教育程度の學校に投げ入れられて、そこでの私たちの生活の一半が、個性や創意やを殺すために設けられたかのやうな官僚式教育の鑄型の中へ嵌め込まれて居た時代に於てさへも、旣にルソーや、スペンサーや、ペインや、ペスタロッズィや、ヘルバルトや、フレーベルなどの名が、我々の教師たちの口から口に喧傳されてゐたことは、私が私自身の往時の記憶を辿りながら、今でも尙ほ、髣髴として喚び起すことが出來る一事實である。

かういふ現象は、私の素人眼から見れば、教育そのものの本來の性質から推論して、始めて理解し得られることである。ところで、私が斯の如く『教育の本來の性質』といふ言葉を用ゐるのは、理想主義的立場からの教育の性質を見つめて言つてゐるのではなくて、寧ろ沿革的立場からのそれを念頭に置いて言つてゐるのである。如何なる形式に於てでもの學校教育が、支配階級の支配的意圖の下に於て、功利的政略的意味を以て行はれるやうになつたのは、諄々しく說明するまでもなく、或る支配力の組織としての國家制度――宗教國家としての教會を含めての――が、人類の社會生活の上に押ッ冠ぶさされるやうになつてからこのかたのことである。けれども、個性の社會生活への展開の助成――若しくは個人生活の社會生活への調節――といつたやうな意味に於ける教育は、如何なる社會生活の上にも當然に行はれてゐなければならないものであり、從つて、國家制度成立以前に於けるの各樣式の人類社會生活の上にも行はれて居なければならなかつたものであることは、必然的のこととして、我々に考へ得られることである。さういふ種類の教育を指して、私は、『本來の教育』と呼ぶのである。そしてそれは必ずしも學校といふやうな、形式的手段を通して行はれることを必要としないで、苟しくも人類の社會的集團の生活のあるところ。そこでの人々の、家族としての、隣人としての、及びその他のあらゆる意味に於ける協働者としての生活上の相互接觸の間に於て、極めて非形式的に、極めて自

然的に、極めて隱微的に、しかし極めて確實に、極めて現實的に行はれて來たものである。

かういふ非形式的な、自然的な、現實的な――若しくは恐らく『生活的な』といつてもよからう――教育は、或る意味に於て、『社會的教育』と稱することが出來るものである。少くとも、若し國家内に於ける支配階級が、その支配的意圖の下に於て、功利的政略的意味を以て行ふ教育が、或る意味に於て、『國家的教育』と呼ばれ得るものだとすると、私が今指摘した意味の教育を『社會的教育』と呼んで、それに對立せしめるのは、最も適切なことのやうに、私には考へられる。で、私は、以下本篇の終りに至るまで、『社會的教育』の言葉を持續して、それをどこまでも今言つた意味に使用しようと思つてゐる。

國家制度の下に於ても、社會生活は絶滅するものではない。國家――以下私が『國家』といふ言葉を用ゐる場合には、私は『國家内に於ける支配階級』を念頭に浮べてゐるのだといふことを諒解されたい――は屢々、その權力の行使に依つて、或る樣式の社會生活を絶滅しようとする。それを、近代國家は、殊に結社權の禁止若しくは制限に關する法律に依つて遂行しようと試みる。けれども、この點に於ては、他の無限に多くの點に於てと同樣に、國家は――近代國家も――決して、事實上全能的ではない。そして、國家の名に依る結社權の禁止若しくは制限は、決して實際上の結社の傾向と一致するものではない。實際上の結社――若しくは社會的集團構成――の傾向の盛なる增進は、最近世の各國家内に於て見られ得る最も顯著なる現象の一つである。けれども、私は今、この方向へ餘り深入りはしまい。私は、茲ではただ、國家制度の下に於ても、社會生活――若しくは社會的集團生活――が絶滅するものでなく、そして社會生活が存立してゐるところでは、そこに『社會的教育』が、極めて非形式的に、極めて自然的に、極めて隱微的に、しかし

極めて確實に、極めて現實的に行はれてゐるものであることを言ひさへすれば、私の差し當つての用が足りるのである。

現代國家制度の下に於て、私のいふ『社會的教育』を間斷なく行つてゐる社會的集團生活の中の最も普遍的な一樣式は、家族といふ協同體である。が、しかし、その他の樣式の社會的集團生活――その數例を擧ぐれば、大學とか、學會とか、勞働組合とか、隣保的協同體としての市町村の如き地方團體とかのやうな――の上に於ても、『社會教育』が、その構成員たちの生活上の相互接觸の間に、それと意識されないながらで、始終行はれてゐるものである。しかのみならず、『國家的教育』のために定められた國民教育制度下の學校に於てさへ、さういふ『社會的教育』が、教員と教員との、學童と學童との、そして教員と學童との生活上の相互接觸の間に、どういふ形式にといふこともなく、また何時にといふことなく、極めて自然的に行はれてゐるのである。

『社會的教育』の社會的環境との交渉、並にそれの發現の樣々の形式は、私は今それを問題にしまい。私は今寧ろ、國民教育制度下の學校が、一方に於ては『國家的教育』の機關であると同時に、他方に於ては『社會的教育』の行はれる場面でもあるといふ一點を、特に强調する。そして、この意味の『社會的教育』が、國家の指定に依つて課せらる所謂『社會教育』といふものは、全然別物であることは、特別に斷はるまでまでもないことである。かういふ譯であるから、學校の教員たちは、縱し彼等に割り宛てられる主要な任務が『國家的教育』の方面に在るにしても、彼等自身の教育者としての實際上の生活經驗からは、否でも應でも、人類生活史上から見た『本來』の教育である『社會的教育』の問題に直面しない譯に行かないのである。そこに、個性の社會生活の上への展開の助成といふやうなことが、彼等の關心の標的となり得る機縁があり、從つて自由教育とか、個性教育とか、創造的教育とかが、彼等に取つて新しき一問題と

なり得る素地があるのである。

ところが、彼等の意識中に於て、國家的教育の受託者としての任務が壓倒的優勢を占めて居る間は、彼等は個性の社會生活への展開の助成とか、創造的教育とかの問題を、社會人としての彼等の本來の使命として痛感し體得する點までには進まないのである。なるほど彼等はさうした諸問題に關する諸學說を、議論上の、若しくは原理上の事柄としては受容れる準備を持つてゐるであらう。けれども、彼等がさうした議論若しくは原理を、彼等の實行意志と密接に結び附けるまでには、まだまだ或る距離があるのである。

けれども、彼等の國家的教育の重要さに對する意識と、社會的教育の重要さに對する意識との均衡が、段々と後者の方へ傾くやうになると、さうなるだけづつ、彼等は段々と、自由教育とか、個性教育とか、創造的教育とか、教育の民主化とかに關する抽象的原理を、彼等の實行意思の上へ移し入れようと努力するやうになるのである。かうなつて來ると、彼等の興味の焦點は、最早必ずしもさうした抽象的原理の上だけに止まらないで、それの現實化のための實際的方法論の上にも及ぶことになつて來るのである。無論、當初のうちは、彼等はさういふ方法論を、國家的教育方針からの干渉の絕無な、若しくは緩漫な方面だけに於て試みようと企てる。けれども、彼等がその方面に少しづつでも深入りするに從つて、彼等は段々と、國家的教育——若しくは國家的教育の非社會的部分——に對する批判的態度に赴く傾向を示すやうになるのである。若しくはさうした傾向を示すやうになることが、考へ得られるのである。

實際問題は複雜である。實際上の國家的教育は、すべてがすべて反社會的だとはいへない。それは、一つには、社會生活が優勢になるに從つて、國家が常にそれに向つて妥協を試みるといふことからも來てゐる。で、個々の場合に於て、國家的教育が反社會であるか否かは、事實問題である。が、いづれにしても、現代國家の指令の下に行はれてゐる

國家的教育に、反社會的部分が非常に多く含まれてゐるといふことだけは、爭はれない事實である。そこに、それが、人類生活上の本來の教育である社會的教育と衝突し易い素地がある。殊に、官僚的政治の、若しくは、これらの兩者の結合の下に置かれてゐる國家的教育が優勢を占めて居る情態の下に於ては、社會的教育の自己表現をする範圍が、非常に狹く限局されるものである。それは、現在に於ては、自明の事理である。それ故に、現代の國家制度の下に於ては、教育問題もまた、結局は、社會問題に歸着する必然性を持つてゐるものである。

私は、この點に關する考察もこれ切りにして、次に、學校教員たちをして國家的教育に對比しての社會的教育の重要さに眼ざめしめるに至つた一般の社會的原因に就いて一言しようと思ふ。最近の國家生活の下に於て最も顯著な社會現象の一つは、社會的集團構成過程の進捗、及び各種の社會的集團に依る集團的利害關係の社會的若しくは政治的表現の努力の增進である。それは、社會學說若しくは政治學說の上に於ける多元的國家觀の擡頭の上に反映されてゐるものであつて、そしてこの多元的國家觀の勃興は、第十九世紀を通じて全盛を極めて居た一元的國家觀の凋落と、正確にリズムを合はせてゐるものである。かくて、社會學說及び政治學說の方面に於ては、一元的國家觀の上に基礎づけられたあらゆる制度は、新興の社會學說若しくは政治學說から、手きびしき批判を受けるべき運命に逢着したのである。だとすると、その同じ一元的國家觀の上に基礎づけられてゐた國家的教育の結晶を代表する國民教育制度が、この傾向の例外となるべき譯はない。そしてまた、このことが、教育界の上へも或る影響を投げ與へないで濟む筈もないのである。

他方に於て、國家的教育の機關としての學校教員たちが、彼等自身の教育家としての生活經驗から、社會的教育の上に存る教育の本來の性質に眼ざめるやうになると、彼等は、彼等と同地位に在るすべての人々が、この點に於て、同

一の社會的集團を構成すべき要素をなして居るものであることに氣附くやうになるのである。そこに、彼等の集團的意識及び集團的訓練の發生する基礎が準備される。もとより彼等が、或る形式に於ける教員組合に組織されない限りは、彼等の集團意識は粗笨なものの域を脱しないであらうし、また彼等の集團的訓練は緩漫な性質に止まるであらう。けれども、さうした粗笨な、緩漫な、集團意識や集團的訓練だけでも、一たび彼等の間に芽ぐんだ以上は、それらは層一層、彼等の眼を社會的教育の意義に、より明かに開かしめる樣になる傾向を示さないでは已まないのである。それは、集團意識及び集團的訓練の一般的本質から推論され得ることである。かういふ傾向が更らに一歩進むと、彼等は遂に、彼等自身を明確なる形式の教員組合に組織することに依つて、集團的自治を確立し、それに依つて、法制上彼等に對して統制權を行使する國家的教育の壓倒的支配に向つて、事實上對抗することを試みるに至るであらうことも、何の無理もなしに豫想し得られる。さうしたことは、すべての形式の『行政上のサンディカリズム』が發生するまでに辿る共通の過程である。

私は、我國の教育界に於ける新傾向の現狀の說明としては、たしかに餘りに行き過ぎた言ひ方をしてゐる。けれども、その新傾向が現在止まつて居るところは兎に角、將來向ふであらう道筋は、大體見當が附け得られると思ふ。けれども、それに關する將來のことを彼是いふのは時期尙早だとあらば、それはここで打切りにしてもいい。けれども、現在に於ても、嚴密に我國の國民教育制度に依つて要求されてゐる國家的教育とは全然兩立し得るものとはいへないやうな、自由教育とか、個性教育とか、創造的教育とか、教育の民主化とかの主張が、既に多くの教員たちの口に上つてゐる事實は、誰れにも否定が出來ないことである。そして、また將來のことになるが、さうした主張が、彼等の集團的自治の要求にまで高潮し、それが更に教員組合運動へと轉換して行くことは、極めて睹易い事理だと考へられる。もとより、教員組合運動は、一般の勞働組合運動と同樣に、勤務時間及び報酬、並にその他一切の勤務條件の改善といふやうな主張を合

ものであるが、それらのものは、教員集團の集團的自治の物質的根據を構成するものとして理解し得べきものである。我國の教員組合運動は、既に數年前から、少しづつ處々に開始されてゐた。ところが、それはその後、政府からの辛辣なる干渉に依つて、一時頓挫したかの觀があつた。けれども、それは、いつまでも頓挫したまゝでは居ないであらう。私は近頃、教員組合として發程しようとしてゐる啓明會――序にいふが、この啓明會は、社會的教育の意義に眼ざめた教育者たちの間に於ける新傾向を知るための有益な參考資料の一つとして、私が日頃尊重してゐる雜誌『文化運動』を發行してゐる團體である――の綱領及び宣言などを讀んで、私は特にこの感を强めたのである。

七　教育擁護同盟の主張の批判

私は、以上に解說した通りの教育界の新傾向を念頭に置いて、今一度、本篇の初めの部分に掲げた教育擁護同盟の岡田文相に對する彈劾的反對意見を振り返つて見よう。私はその時に述べた通り、『澤柳政太郎博士を會長として、全國の有力な教育十六團體が聯合組織してゐる』ものと『讀賣』に依つて傳へられてゐる教育擁護同盟が、どういふ構成要素から成立つてゐて、そして、どれほどの勢力を擁してゐる團體であるかを知らない。無論私は、それを知りたいと熱望してゐる。少くとも私は、若し私が今それを知つて居たとすると、本篇の論旨を進める上に、或る參考になつたことだらう、と思はざるを得ない。が、それは、今の間に合はないことである。私はそれ故に、茲では全然さういふ點を離れて、ただ該同盟の右の反對意見の諸項目だけに就いて批判を試み、それの社會上及び教育上の意義を指摘し、最後に、それが所謂『軍事教育問題』に對して取つて居る立場を、特に比較的詳細に考察しようと思ふ。

右の教育擁護同盟の反對意見は、無論岡田文相に向けられてゐるものであるが、しかしそれは、その文意から忖度すれば、個人としての岡田良平氏に向けられてよりは、寧ろ明らかに官僚式教育思想の一代表者としての彼に向けられて居るものである。官僚式教育思想及び政策のこの一代表者が、『護憲内閣』に於ける文相の倚子を占めて、そこから現內閣の教育政策決定上の中心人物となつて働いてゐるのである。そして、その教育政策の影響を最も直接に受けるものは、教育界全體である。しかも、一般社會生活狀態の現狀から見て、官僚式教育思想の最大特徵を概括的に舉げると、それは『國家的教育』の最も反社會的な部分の結晶だ、といふことが出來るのである。さういふ點に對して、教育擁護同盟が最も强硬な態度で反對してゐるのは、大に我々の注意に値することである。それは少くとも、この教育擁護同盟の性質を知らしめる上に於て、大に力のあるものである。で、それに依つて推論すると、該同盟は、他の點は何うあらうとも、兎に角官僚式教育思想に向つては、正面から反對の態度を取つて居るものであることが覗はれる。

いふまでもなく、今日の我國の教育界を通じて、苟しくもそこでの餘程舊式な分子でない限りは、岡田文相が代表してゐる樣な極端な官僚式教育思想に共鳴するものはあるまい。そして幾分でも教育の本來の使命――若しくは私の所謂『社會的教育』の精神――に眼ざめてゐるものは、それに對する多少の反感を懷いてゐないものはあるまい。ただ彼等は、個人々々としては、それに對して勇敢に反抗の聲を舉げる事が出來ない地位に置かれてゐるまでである。のみならず、彼等のうちの老巧な――もつと正確にいへば老猾な――連中は、表面上は、それを謳歌し讃仰してゐるやうにさへ、見せかけてゐるのである。かう云ふことを示す實例には、我々が教育界の人々に接する毎に、我々は餘りに屢々遭遇するのである。しかし、かういふ忌はしい僞善的慣行を別にしても尙ほ、心から官僚式教育思想に反感を懷いてゐる多數の教育者たちが、その官僚式教育思想のエッセンスで固めたやうな岡田氏を文政の首班に戴いてゐるとに依つて、

徹頭徹尾彼が立案する教育方針に依つて指導されねばならぬといふことは、何といふ皮肉な現象であらう！ 否、これだけならまだしも、例の軍事教育計畫の上に現れてゐる通りに、軍閥と同一の國家觀念の上に立つ彼の媒介に依つて、教育家集團とは全然別個の職業集團であるところの現役陸軍將校團の手に、學校教育の一部が割譲されようとしてゐるやうな、腑甲斐のない運命が、現に教育界の上に一大脅威として臨んでゐるのである。かういふ狀態の下に於て、教育者集團の自治の有無などといふことは、頭から問題にならないのである。が、それはもとより、その筈である。といふのは、我國の教育者たちは、今のところ、まだ有力に組織された教員組合を持つてゐないから、如何に重要なる教育政策問題に關しても、彼等の間の多數者の聲が、有效に世間及び爲政者たちへ傳達される方途がないからである。當面の軍事教育計畫に關しても、教育者たちの間に反對意見が非常に多いといふことは、なるほど諸新聞に報道されてはゐるが、しかし、それもその效果の上から見れば、畢竟一場の私語に過ぎない觀があるのである。――と、斯う私は、あの問題がやかましくなり始めた時から、考へ通してゐた。

　ところが、私達には全然意外の方面から、『全國の有力な教育十六團體が聯合組織する』ものだと傳へられる教育擁護同盟が、一隅から突如として立ち上つて、岡田文相彈劾の氣勢を擧げて、不注意な我々を驚かしたのである。その報道に接した私は、この同盟を構成する教育家の諸團體の個々のものが、その構成要素の性質及び構成員たちの數から見て、如何に微弱な勢力をしか有してゐない――これは無論假定的に言ふのだが――にしても、それら諸團體が聯合して作つた教育擁護同盟が、現前の教育上の重大問題に關して、教育界の内部の多數者の意見を組織して、それを我々の感覺にまでも傳達せしめた勇氣と努力とを、非常に貴いものに感じた。もとより私は、この同盟が企て始めた運動の前途を展開する手段を持つてゐない。それは或は、中途で挫跌しないとも限るまい。（さうならないことを、我々は切望す

るが。)けれども、その成敗利鈍の如何を問はず、私はそれを、教育界の上に早晩現はれなければならない或る更らに大なる運動の前驅と見做すことによつて、それの現在の狀態が要求すべく權利づけられてゐる意義よりも、遙かに廣大でもあれば深長でもある社會的意義を、その上に發見しようとするものである。

　私は上に、教育擁護同盟の岡田文相への反對意見を、官僚式教育思想に向つての正面からの糺彈として性質づけた。私は概括的にさう言つたのだが、しかし、若し我々がその內容として含まれてゐる個々の項目を吟味するときには、その點が一層明瞭になるのである。

　右の反對意見の內容は、(一)軍事教育計畫、(二)學校劇干涉、(三)教育上の新主張の壓迫、(四)師範教育方針、(五)義務教育年限延長の不實行等に對する抗議から成立つてゐる。そのうち、最後に擧げた義務教育年限問題は、私の當面の所論には、全然若しくは殆んど、關係がなささうだし、また第四に擧げた師範教育問題は、それに密接な關係があるにはあるが、さうした種類の事柄に不案內な私は、この際それに口を噤むのが至當であらうと思ふ。けれども、第一から第三までの項目は、私が上に概括的に言つたことを、具體的に裏附けて居るものであるから、私はここで、一應それらを見渡したい。

　軍事教育計畫に關しては、私は後に改めてそれに觸れることにするが、しかし、官僚の軍國主義偏重の教育觀が、最も濃厚にその上に現れてゐることは、容易に認知し得られることである。官僚の傳統的政策の上に於ける最も顯著な特徵の一つは、その對民衆政策の方面に於て終始國家主義を基調としてゐるのと同樣の根據から、教育政策の方面に於て軍國主義的色彩を過度に多く取り入れてゐることである。それは、既に現行の學校教育の上にも、相當に强く現はれて

ゐる。そして今度の軍事教育計畫は、それを更らに一層濃厚にしようとしてゐるものである。

學校劇に對する干渉方針は、官僚政治の他の特徴である、パターナリズムを反映してゐるものである。官僚式教育が、その根據としてゐる一種の頑冥固陋な國家觀念を規準として、學生の精神的生活機能を一種の鑄型に嵌め込まうとしてゐるものであることは、曾て一度は現行の國民教育制度下の學校教育を潜り抜けて來たことのある我々の、體驗に依つて熟知してゐることである。唯それが、我々の精神生活の上に永續的効果を留めて居ることの少いのは、一つには社會環境の進化が我々の生活上に及ぼした影響のためでもある。が、官僚式教育が有効に行はれば行はれる程、學徒の個性の芽生えが萎縮し、その創造力の成長が止まり、その自發性が追随性に變はつて行く虞れがあることは、たしかな事實である。個性愛護の教育精神は、決して個人偏重主義的教育思想の成果だけではなく、それには或る深い社會的意味が含まれてゐるのである。さういふとは、個性の社會生活への展開といふことが、人類生活史上に於て、如何に主要な社會的機能を盡して來たか、そして、また、如何に重大な社會價値を示して來たかの問題を考察するときは、直ちに理解し得られることである。ところが、官僚式パターナリズムに立脚する教育方針は、いふまでもなく、この點を全然無視して、その功利的政略から、學徒の精神的生活機能の上に、一定の鑄型を置くものである。そして、それが強行される狀態の下に於ては、自由教育とか、個性教育とか、創造教育とかは、問題にされる餘地が全然ないのである。岡田文相が就任早々採用した學生劇干渉政策は、この官僚式パターナリズムの最も適切な見本である。この意味に於て、それは、私の所謂『國家的教育』の反社會的方面を、最もよく代表してゐるものである。そして、その影響の及ぶところは、單に『藝術教育』の上に止まるだけのものではないのである。

教育上の新主義に對する岡田文相の否認的態度もまた、矢張り右の官僚式パターナリズムに立脚せしめられた教育方

針の延長である。私の所謂『社會的教育』の上に見られる教育の本來の使命に眼ざめた教育者たちが、最早各種の教育學説を、單に抽象的原理の事柄として玩味するだけに滿足しないで、それらを實行の上に移さうとするやうになればなるほど、彼等が方法論上の諸々の新主義の採用に赴かうとする衝動を感じるのは、極めて自然的なことである。そして、さうした傾向が、縱し從來の文部省が代表する『國家的教育』に依つて寛假される或る狹き範圍内だけに現はれるにしても、『社會的教育』の上から見れば、それはたしかに一進歩の表象だと見られ得るのである。もとより、その方面に於ける諸々の新主義が盡く妥當なものだ、といふことが出來ないやうなこともあらう。けれども、それらの當否は、個々の場合に就いて決せらるべきものであつて、一率的に否定されるべきものではない。で、岡田文相が、この方面に於て、一率的否定の態度を取つて居るものだとすれば、彼は彼の前任者の誰れ彼れにも勝つて、『國家的教育』の反社會的方面を丸出しにしようとして居るものだ、といはなければならないことになるのである。

教育擁護同盟は、右に述べたやうな諸點に對して、岡田文相に向つて、一抗議書を投げ附けたのである。それは、岡田文相に依つて代表されてゐる官僚式教育方針に對する該同盟の否認の態度の具體化である。私は、この同盟が、將來に於ては、『社會的教育』の本質への一層明確なる目覺めに依つて、この立場から、更に前進するであらう日を豫想する。少くとも、さう希望する。けれども、現在のところでは、彼等がこの立場に居ることだけでも、それには深い社會的意義があるのである。私は、その理由に依つて、該同盟の勇敢なる奮起を多とする。ただ、該同盟が強硬にその反對意志を表明して居る軍事教育計畫に關しては、私はそれに私自身の批評を最も簡短な形で附け足して、それで本稿を結ばうと思ふ。

八　教育の軍國主義化の危險

文部陸軍兩省の間の協議の主題にされてゐると傳へられる軍事教育計畫への世間の反對論は、樣々の根據から押し進められてゐるが、しかし大體上からいへば、いづれも皆、學校教育の軍隊化といふ點に批難を集中してゐるやうである。私にしても、無限に多くの方面から該計畫を批判することが出來るが、しかし、今はそのための時間を持ち合さないから、矢張り私の論述の中心を、同じ一點の上に置かうと思ふ。

學校教育の軍隊化といふ批難に對しては、岡田文相は陸軍側の當局と調子を合はせて、極力さうでないことを辯解してゐる。ところが、不思議にも、彼等が熱心に辯解すればするほど、彼等の言葉に對する世人の疑念が一層增進するとも、減退する氣遣ひはないと思はれる根據があるのである。それは、彼等の辯解が、少しも辯解になつてゐないからである。私は、差當り私の机上にある新聞紙の中から、岡田文相の辯明（十月十一日附の『時事』夕刊第一ページ所載）と、畑軍務局長のそれ（十月十日附の『東京日々』夕刊第一ページ所載）を擇び出し、それらを基礎にして、その點を明かにしよう。

岡田文相も畑軍務局長も、問題の軍事教育計畫が、國防充實――彼等は文意の關係上、この言葉を、明かに『軍備充實』と解釋されるやうに用ひてゐる――の意味を帶びてゐることを認めてゐる。すなはち、前者は『各國とも國防充實を圖り、學校等にて軍事教育が盛になりつつある』とか、『大戰の例に見て、兵卒は速成出來るが、將校は俄に養成出來ぬ』とか、いふ趣旨を述べ、更らに『軍事教育は兵營内でなければ行はれぬといふ考へを改め、何處ででもその教育を受ければ、それを認めるやうにせねばならぬ』とまで言つて、學校の兵營化計畫とでも言はるべきことを、平氣で露

骨に表明してゐる。後者は、この點に關しては、稍々遠慮的な語氣で『…副目的たる國防能力の增進も期待し得られるのであるが、この目的のために兵式訓練を實施することは有益である』とだけ言つてゐるにすぎないが、しかし、學校を國防機關——實は明白に『軍備機關』——の一つとしようとする意圖を隱してはゐない。それでゐて、問題の軍事教育計畫を學校教育の軍國主義化でないとは、どういふ論理の妙用から言へるのであらう！

國家制度が存續する限り、國防事業の無視することが出來ないのは、判り切つたことだが、それとこれとは、問題が異がふのである。國防事業——それを狹義に『軍備事業』と解釋して——は、陸海軍が國民の巨額の——我國の經濟力からいへば寧ろ不當に巨額の——負擔に於て、行つてゐるのである。しかし、若し軍部當局がその現在の狀態に自信を持たないといふのならば、その方面で何とか他の方法で處理されるべき筈のものである。しかるに、その不備の充足のために學校教育を左右しようとするのは、明かに軍隊至上主義から來たものである。彼等は、國防——實は軍備——は國民的事業だ、といふかも知れない。それは、無論さうであるが、と言つて、國防だけが國民的事業だ、とは言へないのである。否、彼等の眼には、或はさう見えるかも知れないけれども、一般國民の立場からは、國防が國民的事業だといふのと同樣に、産業も、藝術も、學問も、その他無限に多くのものも、等しく國民的事業だといふことが出來るのである。しかるに、國防——實は軍備——を唯一の國民的事業として、それをして、その他の一切の人間の活動樣式の上に君臨せしめようとするのは、これもまた、軍隊至上主義の産物でないとはいへないのである。

普通教育は、人生の各地位若しくは各職業を占める人々に共通的に必要な教育を授けることを、その主眼とするものである。それ故に、そこでは、專門的軍人に必要な知識だけを特に偏重すべきものでないことは、言ふまでもないことである。が、專門教育はそれとは異がつて、專門の學術技藝を教授するために存するものである。それ故に、專門の教

育の下にならば、專門の軍人學校も包含されていい筈である。けれども、事實上に於ては、文部省が管理する專門教育の下には、專門の軍人學校が置かれてゐないで、さういふ種類の學校は、陸海軍省の管轄の下に置かれてゐるのである。かういふことは、專門の軍人教育に關して、陸海軍省が文部省を信任することが出來ないところから出て來てゐるものである。ところが、陸軍省は、この點に關して自ら文部省を信任しないでゐながら、ただ文部省の管理下にある學校教育の一部に關しては、陸軍省を信任することを文部省に要請してゐるのである。そして、その要請を貫徹させようがために熱心に骨を折る文相も文相だが、それを切り出す陸軍省も陸軍省である。それは兎も角、それが軍隊至上主義の思想の產物でないとは、どうして言へるのであらう！

畑軍務局長は、今回の軍事教育計畫が軍備整理の結果として生ずる剩餘陸軍將校連の處分問題に關係がないことを斷はつてゐる。それは、或はさうであらう。剩餘陸軍將校連が生じたとて、何の理由もなく彼等を諸學校へ配置しなければならない譯はないのである。寧ろ問題は、何故にそれらの剩餘將校連が諸學校に配置されようとしてゐるかの理由の上に繋がるのである。この點に關して、我々に直感し得られることは、それは、陸軍の手に依る學校教育の一部占領の意圖そのものでなければならないといふことである。これは、陸軍に取つては、その功利的政略的見地から見て、非常に望ましいことに違ひはあるまい。けれども、陸軍の立場から見て望ましいことは、必ずしも、學校教育の立場から見て望ましいことと一致するものとは限らないのである。それは、極端な軍國主義者でない限り、誰れもが承認しなければならないことである。

かういふ論據から、問題の軍事教育計畫が、學校教育の軍國主義化でないといふ議論は、一個の詭辯——それも甚だ底の見え透いた一個の詭辯——だとしか、私には見えないのである。もとより、學校側から任意的に個々の場合の必要

に應じて、兵式訓練の目的のためなり、若しくは、その他の目的のためなりに、特に專門の軍人を聘して、講話をせさたり、敎授をさせたりするやうなことは、現在でも行はれてゐることであるが、それは、全然別問題である。今回の軍事敎育計畫は、それとは異がつて、陸軍省が選任派遣する現役將校たちを、全國の中學以上の各學校に配置して、彼等をして直接に兵式訓練の任務を行はしめることを、法制的に規定しようといふのである。その間には、學校側の任意選擇の餘地が、如何なる意味に於ても與へられようとはしてゐないのである。これが陸軍の手に依る學校敎育の一部占領でないとは、どうしても考へられないことである。

岡田文相は、今回の軍事敎育計畫が、陸軍側の强要から出たのではなくて、文部省が自發的に提案したものだといふ點を强調してゐる。が、この計畫が、文部省から出たものか、陸軍省から出たものかの事實は、それが、學校敎育の軍國主義化的性質を有するか否かの問題を決するための標準になるものではない。この問題は、どこまでも、該計畫そのものの實質に依つて決せられるべきものである。その點からいへば、該計畫が、學校敎育の（少くとも部分的）軍國主義化を意味するであることは、一點の疑ひを容れる餘地がないのである。が、この點を別にして、假りに岡田文相のいふ通りに、該計畫が陸軍省から强要されたものでなくて、文部省の發案に係るものだといふことを認めることに、多少の意味があるものとすれば、それは恐らく、岡田文相及び文部省の體面問題に關してであらう。すなはち、一部の世評は、この問題に關して、文部省が徹頭徹尾陸軍省に支配されてゐる點を批議して居るが、岡田文相はそれに對して、特に右の點を强調して、決してさうでないといふ意味を仄めかすとに依つて、間接に自己辯明をして居るものであらう。けれども、假りに岡田文相及び文部省の體面が、その辯明に依つて救はれるものとしても、それは、我國の敎育界を脅威する學校敎育の軍國主義化の危險を取り除く效果を少しも持たないのである。この點は、右の軍事敎育計畫の實現さ

れた場合に、法制上の規定に基いて諸學校へ配置されることになる陸軍省の管轄下の現役將校の、教育者としての資格に關する一般的考察に依つて、一層よく闡明されるであらう。

すなはち、右の軍事教育計畫に於て、諸學校に配置されることになつてゐる陸軍現役將校たちは、一般的には、何よりも先づ軍人としての職業意識に依つてその行動を指導される樣な種類の人々であることは、いふまでもないのである。尤も彼等は、その職業意識を『軍人精神』と云ふ樣な勿體振つた名で呼ぶが、しかし名はどうでも、それは實質に於て一種の職業意識（輕蔑的意味に於てでなく）に外ならぬものである。そして彼等が『軍人精神』と呼ばれるこの職業意識に依つて行動することとは、彼等自身が大に誇りとして居ることでさへある。無論、それは、彼等としては極めて當然のことである。若しさうでないとしたら、それは、軍隊内に於ける專門の軍事的訓練の失敗を物語るものだとさへも言へるのである。

けれども、軍隊内に於ての當然のことは、必ずしも軍隊以外の社會に於てもまた當然のことだとは、決して言ひ得られないのである。我々は我々の日常生活の上に於て、その實例を餘りに屢々見せつけられてゐる。今假りにその一例を擧げれば、軍隊内に於ける『常識』が世間に於ける『常識』と正反對の方向を指してゐるやうなことがあることは、始終街頭の人々の話頭に上つてゐることである。殊に、一般の職業軍人たちの學術とか思想とかの方面に對する態度が一種特異のものであることは、常に我々の視野に展開されてゐる諸事實に依つて確證されてゐる事である。この點に關しては、少くとも昨年の震災直後の或る期間に於ける或る種の諸經驗を、多少の戰慄感を以て、今に忘れ得ないでゐる人々が、世間には決して少くはないのである。

けれども、學術とか思想とかに對するさうした盲目的無理解の態度は、決して『軍人精神』と矛盾するものではないと、一般に考へられてゐるのである。否、それは寧ろ『軍人精神』の内容を構成する必須な一要素だと、少くとも軍部

當局の方面で考へられて居るとの推定を許す確證さへも、決して少い譯ではないのである。いづれにしても、軍隊内に於て當然なものが、必ずしも教育界に於ても當然なものと限つてゐないことだけは、たしかな事實である。殊に、學術及び思想と最も密接な關係に置かれてある中學程度以上の諸學校に於ては、その方面に於ける正當な理解を持たないものが教育の衝に當るといふやうなことは、不當然中の最大不當然とも言へるのである。かう言ふのは、現在の中學學校程度以上の諸學校の教育に從事してゐる人々の中に、學術及び思想の方面の無理解者が一人もないといふ意味ではない。否、私は茲では寧ろ、この上さうした種類の教育者をそこへ加へる虞れのあることは、一切避けるべきだ、といふ趣旨を強調しようとしてゐるのである。

かういふ點から考へても、現役將校たちをして、諸學校に於ける教育の一部を擔當せしめるといふことは、そこでの教育の目的上から見て、非常に有害なことである。ところが、この論據を承認するにしても、軍事教育が學生の團體的訓練に役立つといふ理由で、それを諸學校に引き入れることに贊成するものがないとも限らないが、しかし諸學校が必要とする團體的訓練は軍事訓練が與へ得る團體的訓練とは、全然目的性質を異にするものである。それは、その根本に於て、學生の自治的協働を增進するための團體的訓練を主眼とするものであつて、無批判的服從の精神に基礎づけられた軍事的訓練とは、全然別の範疇に屬するものである。それ故に、諸學校がそのために軍事教育に頼らなければならない理由は、毛頭存しないのである。

現在我國の各程度の諸學校の學生たちは、各種各樣の束縛の下に置かれて居ることの結果として、一般に潑溂とした自由精神を缺き、生々躍動する創造的意欲を失ひかかつてゐる。そして、彼等をかうした陰慘な境地から救ひ出すために必要なものは、この上、上官への無批判的絕對服從精神に立脚する規律づくめの軍隊的訓練を彼等の上に加へること

でなくて、寧ろ彼等の個性の社會生活への自由展開の道を開くことである。この意味に於て、我國の教育界が、この際殊に痛切に要求してゐるものは、より多くの自由教育であり、より多くの個性教育であり、より多くの創造的教育である。それは、一言にしていへば、『社會的教育』を『國家的教育』の反社會的方面からの壓迫から解放するといふことに當るのである。しかも、かういふことは、教育の本來の使命から見て必要なことであるばかりでなく、現代の國家環境の下に於ては、國家生活の安全を保つためにもまた、必要になつて來てゐることである。ところが、右の軍事教育計畫は、この要點を全然無視して、却て益々多く『國家的教育』の反社會的方面を擴大することに依つて、益々多く『社會的教育』の自由活動の範圍を縮少しようとしてゐるものである。それは、この意味に於て、我國の教育界の上に、一の絕大脅威を揭げてゐるものである。

我々は、我國の教育界のために、我々と同憂を懷く人々と共に、極力それと戰ふ覺悟を決めなければならない境地に追ひ結められてゐることを、痛感しない譯に行かないのである。

都會時代の崩壞

室伏高信

一

文明の各々の段階は世界の各々の分割である。世界の各々の分割は人間の各々の犧牲ではないであらうか。「賢い神が無益にも海と陸とを分割してから、ヴァジルの航海は既に世界の最初の分割が人間の最初の犧牲であることを敎へたのである。

都會と田舍との分割は文明の出發である。文明の各々の發展は都會と田舍との分裂の各々の發展である。私經濟の世界が終りを告げて政治的經濟の時代がこゝに生れた。無政府共産主義が沒落して階級的政治時代が展開してきた。社會問題は遠く都會と田舍との分裂に根ざしてゐるのである。

デダラスが迷宮を造り、ヘラクレスが地獄に侵入し、賢い神が都會を造つてから、人間は都會に住む動物であるかのごとくに思はれてきた。アリストオトルの言葉は文明の勝ち誇る言葉である。人々はそこに進歩があり、文明があると考へてきた。如何にも文明は、都會とともにあつたのだ。もろ〳〵の機械、もろ〳〵の科學、もろ〳〵の智慧は、都會とともに發生し、發達し、そして今日にまで至つたのだ。Nur die Städte sind Träger des Hellenentums. ――マックス・ウエバアの研究は獨り古代希臘についてだけ眞實であるのではない。近代文明に至つて益々然りである。文明の創造者、運營者、責任者は常に都會人である。アテネがあり、シラクスがあり、カルタゴがあり、アレキサンドリヤがあり、ロオマがあり、コンスタンチノオプルがあり、そして近代の商業及び工業都市に至るまで、文明は常に都會とともに、進んできたのである。都會なくば文明なし。都會なくば科學なし。都會なくば機械なし。都會なくば進歩なし。この命題には一點の疑ひもないのである。

科學、機械、進歩、文明の信仰者にとつては、都會は故鄕である。田舍（ラント）が故鄕（ハイマアト）であるのではない。都會がハイマアトである。まことにヴォルテエルによつてよく代辯されたごとくに、

近代人にとつては、或は凡ての文明人にとつては、倫敦の生活、巴里の生活は、エデンの生活よりもより願はしき生活であるのである。

彼等にとつては、都會は創造者である。神は創造者ではない都會は創造者である。一切の善きもの、一切の美しきものは都會から流れ出なければならないのだ。「遠き地方が結びつけられて世界を一つの都市にと化した」―― Annus Mirabilis の著者が歌つたように、世界を一つの都市にまで仕上げることは、文明人の最後の理想である。文明は、機械は、科學は、進歩は、「世界の都」を追ふて永い旅路を歩るいてきたのである。神の都ではない。聖アウガスチンの神の都ではない。人類は嘗つては神の都を追ふて歩るいた時代もあつた。それはしかしたゞなる迷信として斥けられたばかりではない。進歩にとつての「無用なる妨害」である。中世紀は人類の進歩にとつて無用なる妨害である！　コンドルセイの言葉に反對するものは、言葉のあらゆる意味において田舎者であるのだ。神の都は遠き彼方へと逐つた。文化都市さへもまた世界の片隅へと追ひやられた。永遠の休息を求めてダマスクスへと旅することの代りに、科學、機械、進歩の幻影を追ふて、人々は今や倫敦、巴里、紐育、伯林、東京へと、急がしい旅路をつゞけてゐるのである。

まこと、われ〳〵の祖先は、嘗つては人間が神の兒であることを信んじながら、この地上に神の王國を建てんとしたこともあつたのであるが、近代の文明人は、人間が猿の兒であることを信んじつゝ、智慧の王國をこの地上に建てたのである。

光と影とがある。進歩の反面は退歩である。文明の各々の進歩は人間の各々の退歩ではないであらうか。人々が文明の不斷の進歩に眩惑されてゐる間に、人間の不斷の退歩が行はれてゐるではないであらうか。Damnosa Quio non imminuit dies ?――時が世界をより善くしたのである。若しくはより惡くしたのであるか。

二

社會問題は都會とともに始つたと私はいふた。都會とともに始まり都會とともに終るべきものである。

資本主義が多くの誤謬と欠陥とに滿ちてゐることは今日ではあまりに多く指摘されてきた。自ら社會主義者に非ずとなすものであつても、若しくは反動主義者と自せらる人々であつても、資本主義を無條件に容認することは最早や彼等の良心の堪えざるものとまでなつた。英國勞働黨の一議員が議長を指し

て「ブルジョア！」と叫んだことは、ブルジョア國の英吉利においてさへ、議長に對する侮辱だとして宣告された。ブルジョアの名、從ひて商人の名は古の支那においてのごとく、印度においてのごとく、若しくは埃及においてのごとくに、一つの侮辱の言葉にまで落とされてきたのである。正に資本主義の道德的破産である。資本主義はその經濟的または政治的行き詰まりのきたらぬ前に、既に道德的破産を宣告されるに至つたのだ。

新らしい理論は出てこない。資本主義の强味はこゝにある。資本主義はそれ自身のうちに强味をもつてゐるのではない。社會主義の弱味のうちに彼自身を支へてゐるのである。

資本主義と社會主義とは、相對抗する唯二つの力であるかのごとき迷信が行はれてゐる。即ち資本主義に非ざれば社會主義であり、社會主義に非ざれば資本主義である。とするの迷信が一般に行はれてゐるのである。この迷信のごとく今日の世界を攪亂してゐるものはない。それは破壞的迷信である。科學的迷信は常に破壞的迷信である。この迷信あるが故に、資本主義に慊らざるものが、そしてまた社會主義の理論に滿足することのできない民衆の大群が、社會改造の十字路に立つて、日和見と、躊躇と、後退と、そして自滅の運命に彼等自身を任せてゐるのである。私は農民の大群を指してゐるのである。

農村問題は、言葉のあらゆる意味において、今日の世界において最重大の問題である。私の考では、後に述べるであらうように、資本主義も、社會主義も、この問題に面して、必然的に行詰まらなければならない運命のもとに置かれてゐるのである。

人々の眼は今や期せずして農村に向つてきた。農村問題は今や日本の財閥政治家にとつての選擧演說の流行語であるばかりではない。世界が農村問題の解決期に入つて、資本家も社會主義者も、少くとも英國のごとき純然たる工業國でない限り、この問題を閑却しては、何れも政治的權力を獲得することは不可能となつた。資本主義と社會主義とは、機械の爭奪を目的として對抗してゐるものであるにもかゝわらず、その政治的鬪爭の局面においては、それは正しく農民の爭奪戰であるといふことができるのである。農民は資本主義者であるか。若しくは社會主義者であるか。

私の考では農民は資本主義者でもなければ社會主義者でもない。彼は資本主義者にもあらず、社會主義者にもあらざる偉大なる第三の存在である。資本主義と社會主義との外かに何ものをも發見することのできない人たちにとつては、農民は解くべからざる謎である。永久に解くべからざる謎である。この謎を

解くに非ざれば、社會問題はしかしそのいろはをだも解決することはできないのだ。農民問題、從ひて農村問題は、社會問題のアルフアでもあり、オメガアでもある。人々は農村問題を或は資本主義の、或は社會主義の立場から解釋して、資本家にもプロレタリアにも非ざる農民を、或は資本主義の味方に引付け、或は社會主義の味方に引付けんとしつゝある。農民はしかし動かない。動かすべからざるモンスタアである。佃々乎耕而不顧。これ農民である。千古喩ることなき農民である。農民は農民である。農民としての自覺のあるところ、彼は自由主義者にも非ず、彼は社會主義者にも非ず。たゞ農民である。社會主義の立場から、若しくは資本主義の立場から農民に面すべきではない。農民の立場から、資本主義にまたは社會主義に面すべきである。

農村における地主對小作人の關係が、都會における資本家對勞働者の關係に類似してゐることを私は隱くさんとするのではない。そこに勞働搾取の共通性が存在することはたしかである。工業勞働者に對してのように、しかしこれあるがために、直に農業勞働者を社會主義に引つけることができるものゝごとくに考へるなら、それは徹底的な誤謬である。それは後に述べるであらうように一、都會に對する農民の社會經濟的關係を無視したものであり、二、農業そのものゝ性質から必然的に要求されるところの農民の自由人的傾向、三、農民の小社會的社會理想を理解せざるものである。こゝに社會主義の農民に對する運動は彼等のあらゆる宣傳と努力とにもかゝわらず全然失敗である。革命前に二千五百萬の無産農民をもつてゐた露西亞においてさへ、農民を社會主義革命に引よせる唯一つの道は土地を農民に分割するところの反社會主義的煽動のほかになかつたのである。西歐の諸國ではかくのごとき「土地を農民へ」の宣傳さへも農民に對しては何等の感激をも與へるの力がないといふことが、社會主義者の不平なのだ。ゴルテルのよくいふてゐるごとくに、かくして西歐の社會主義者は孤立である。一方に資本家があり、他方に農民があり、西歐の社會主義者は孤立である。

何故に人口の八割が農民によつて占められてゐる露西亞に社會革命が起り、西歐諸國のごとき工業の比較的進歩した地方においてこの種の革命が起らないかといふことは、マアクス主義者にとつては大問題である。それにはしかし何の神秘もない。露西亞には事實上彼等の所謂社會革命が起つたのではない。たゞ社會主義者によつて革命が起されたゞけなのである。西歐の諸國では、英國のような純然たる工業國を除くと、農民が尚ほ政治上の一半の要素であり、そして農民が社會主義的革命に參

加することを欲しないからである。

農民は何故に社會主義革命に參加することを欲しないのであるか。農民の階級的自覺が足らざるがためであるとなすことは社會主義者の間におけるありふれたる見解である。事實の轉倒である。農民は農民としての階級的自覺なきがためではない。自覺あるがために、社會主義の陣營に參加することを欲しないのである。即ち彼等が杢兵衛であり、太郎作であるがゆえに社會主義を恐れるのではない。彼等が農民であるがゆえに社會主義を欲せざるのである。

農民は一般に保守的だといふことはできるであらう。自由主義に對する保守主義の巣窟が農村にあつたことは何人もこれを拒むことはできないのである。この點においては「地代掻き集め人」としての地主も「傴背を育てる」ことによつてのみ生活を支へることのできる農民も、みな等しく保守主義者であることはたしかである。それはしかし凡ての階級の農民が封建主義者であるといふの如何なる意味でもない。地主制度は封建主義の柱である。「地代掻き集め」の地主が封建思想の擁護者であることには何の不思議もないであらう。自作農が、若しくは metayer が保守主義者であるといふことは、しかし彼等が封建主義者であるといふがごときこととは何のかゝはりもないのである。

農民はむしろ一つの革命階級である。最初の革命階級であり、そして最後の革命階級である。農民と革命とは、影の形に添ふごとくに、常に文明史の暗影である。世界の革命史から農民を除き去ることは、革命史の抹殺にも等しいことなのだ。スパルタクス革命は既に羅馬の獨裁政治とともにある。獨逸に農民戰爭のあつたことはあまりにも顯著である。英國にはこれより先きジョン・ボオルがあり、ウヰクリフがある。露西亞の農民はナロウドニキ以來常にこの國の革命傳統の擔任者である。佛蘭西革命が農民の援助なくして起りえなかつたであらうといふことは歴史家のしばしば繰返すところ、露西亞革命が農民の同情なくして成立することのできなかつたであらうことも、一點疑ひの餘地がない。それにもかゝはらず、佛蘭西の農民が反自由主義的であり、露西亞の農民は革命政府の敵である。まことに農民はブルジョア革命にも、若しくは社會主義革命にも參加する。それはしかし、農民が自由主義者であり、若しくは社會主義者であるがためではない。彼がたゞ封建主義に反對し、彼がたゞブルジョアー主義に反對なるが爲めである。否定においての一致である。建設においての、若しくは理想社會においての一致ではない。一度新社會の問題に面すると、彼は封建主義者にあらざる事は勿論、彼は自由主義者にも非ず、彼は社會主

義者でもない。されば如何なる煽動も、如何なる選擧演說も、それが封建主義であり、社會主義であり、若しくは資本主義である限において、未だ一つとして農民の心を燃やすことはできないのである。ただに燃やす事ができないばかりではない。農民は曾つては封建制度を革命し、やがて資本主義に抗議し、そしてきた今日は肩をすくめて社會主義から手を引くのである。こゝに封建制度の缺陷があるばかりではない。こゝに資本主義の誤謬があり、そしてまた社會主義の誤謬を見るべきである。

その誤謬は致命的である。農民問題に對して致命的であるばかりではない。またそれゆえにそれ自身にとつて致命傷であるのだ。

三

資本主義も社會主義も一つの都會主義である。一個の純然たる都會萬能主義である。都會のうちに生れ、都會とともに育ち、都會的世界觀と都會的經濟の要求のうへに立つところの、都會の、都會によつての、都會のための、特別なる政治的及び經濟的生活の要求である。結晶である。理想である。原理である。

人類の生活において久しく經驗してきたところは必ずしも都會生活のそれではない。或時は都會時代である。他の時代は反都會の時代である。即ち村落主義の時代と、都會主義の時代とが、交互に人類の歷史を記錄してゐるのである。前者が文明、後者が反文明なのである。

都會の煙の中から最初の文明が生れた。希臘の文明は鐵貨のうちから、羅馬の文明は銅貨のうちから生れた。都會は金の場所である。こゝに文明の場所がある。文明は常に一つの商業主義である。物々交換は野蠻である。或は半文明である。自給自足である。農村經濟である。不貨惡用商。農村の世界は不貨惡んぞ商を用ゐんやである。貨をなし、從ひて商を用ゐるは都會人である。貨は目的である。商は手段である。こゝに都會がある。こゝに都會人がある。鐵貨とともに希臘の都市國家があり、銅貨とともに羅馬帝國がある。地中海沿岸から、かくして新らしい世界の生活が出發した。文明がこれである。西洋文明がこれである。

（一）、こゝに一つの中間階級が生れた。それは一つの階級である。一つの社會經濟階級である。商人である。商人は町人である。農民は土とともにある。商人は金とともにある。生產のために働くのではない。利營のために働くのである。商人の社會革命的意義の一つがこゝにある。全人生產者的勞働主義の古代村落社會が破壞されたからである。全人勞働主義、全人生產

主義の村落社會が破壞されて、一つの搾取經濟、一つの寄生的大社會經濟が出發したのである。都會はその場所である。その腦髓である。

(二)、搾取は都會と農村の關係において起こされた。都會が搾取者として生れたのである。都會の職分がこゝにある。農村の疲弊が既にこの時に始まつた。「金の發明は物質的文明における一大發展をもたらした。」それは簡單な變化である。農民に與へた効果はしかし蒸氣汽罐の發明のそれのごとくに慘憺たるものであつた。それは地中海沿岸に革命をもたらした。希臘においてパレスチイナにおいて、伊太利においてそれを見ることができる。手から口へと生活しつゝあつた農民にとつて、それが如何なる効果をもちきたすであらうか？彼等は彼等の原料品を市場にもつてゆき、そして必要な貨物と交換するのを常としてゐたのである。妻のために羊毛と、小供の冬のために靴と、或は屋根の修繕のために瓦と交換したのである。貨幣制度とともに、彼等は彼等の原料品を金に代へるまでは、それによつて如何なる貨物をもうけとることはできなくなつた。その原料品は幾何に價ひするや？彼等には少しも分らない。それは彼等の管理の範圍外に屬してゐるからである。彼等は彼等の中間人が彼等に與へるだけ受取る。中間人は口錢をとる。一年の終りに彼等は彼等の餘剩が從來のごとくに存在しないことに驚くのである。――アルフレッド・チムマアンのいふごとくである。中間階級が成立して農民はその從來の平和なる經濟生活の基礎を轉覆されたのである。

(三)、土地は嘗つては共有であつた。土地は何人にも屬せず、神に屬する。神の土地が私有財產權のもとに置かれるに至つたのは、いふまでもなく、貨幣經濟の結果である。金が發明されてから僅に數十年にして、土地は一つの商品と化した。抵當制度がこゝに起り、利子の制度があり、「一年の終りに彼等の餘剩が從來のごとくに存在しなかつたことに驚いた」農民たちは、こゝに借金の方法を撰むのほかはなかつたのである。更に他の一年の終りに、彼等の收獲が彼等の借金を補償することができない時には、土地は彼等の手を離れてユウパトリッドの門に集中された。所有階級と無所有階級とがこゝに生れた。階級が生れたのである。小作人がつゞきやがて奴隸がつゞくのである。金が階級を造つたのである。都會が階級を造つたのである。文明が階級を造つたのである。

(四)、もろ〳〵の社會制度が革命された。階級があり、大社會がある。――農民的小社會から都會的大社會へと變つた。こゝに政治の必要が生まれ、權力が樹立され、從ひて國家なるもの

が始めて歴史の舞台にと登つた。

(五)、社會道德が一變した。黄金と權力とは二大理想にと高められた。村民自治の制度は打ち破られて貴族政治または町人的民主政治のもとに權力爭奪が始められた。町人の間には黄金を死後も尚ほ墓に伴ふの習慣さへもできた。正直と勞働とはこゝに輕蔑の的となつてきた。嘗つてはパリスは羊飼ひである。アチレは刻み、王の娘も河に洗ふことを恥とはしなかつた。「神は怠惰者を憎む」——詩人は神に代つて勞働を讃美したのであつた。文明はしかしかくのごとき田舍詩人を時代の力から葬つた。貴族主義と町人主義とが相併んで發達した。プラトオは商業取引を禁ずべしと主張したことがある。それはたゞなる反動思想として取扱はれたに過ぎなかつた。却つて商業はいよ／＼盛んになり、外國貿易もまた既にアテネの時代に隆盛を極めた。

(六)、都會の膨張がこゝに始まつてきた。都會は不斷の膨張者であるごとくに、日々にその領土を擴げてきた。希臘には人口十萬以上の都市がそこゝに建てられた。アテネとシラクスとは、紀元前五世紀において、この十萬を越えたといはれる。カルタゴは七十萬にまで達し、アレキサンドリアは、基督世紀の初めに、五十萬或は七十萬の大都市であつたといはれてゐるのである。羅馬時代に至つて、都會の膨張は、いよ／＼甚だしきを加へた。嘗つては農民的小社會の片田舍であつた伊太利の地は、カルタゴ戰爭の後に、權力と享樂との一大帝國と化した。人々は權力と富と享樂とを追ふて、都會へ／＼と集まつた。「移住民の群」が田舍から都會へと流れこむできた。農民離村がこゝにある。都會膨張の問題が既にこゝにある。羅馬市は、その盛時において、人口實に百萬にまで達したといはれてゐるのである。

羅馬文明の滅亡は、都市文明の滅亡である。希臘から羅馬へと、不斷に發達してきた都會的經濟、都會的大社會、都會的唯物主義、都會的商業主義は、羅馬帝國の滅亡とともに、再び村落的小社會、農民的自然社會へと還元し始めた。ピユエツク戰爭によつて、富と享樂と權力の絶頂に達した羅馬文明は、その腐敗と、墮落と、必然的死滅の絶頂に達して、内部的にも、外部的にも、崩壞の必然的過程を急いだ。凡夫物不勝天久矣。古代の歴史哲學であつた [illegible] の法則が世界の歴史を支配したのである。自然から文明への數世紀の後に、文明から自然への還元がつゞいたのである。

羅馬の世界都市は、茅屋の田舍町にと落ちた。大帝國は瓦解

して、小國分立となつた。人々は再び田舍へと歸つた。田舍（カントリ）が故郷（ハイマアト）となつた。營利は再び蔑しめられて、公正且つ公定價格の觀念が支配した。プラトヲの公正價格論が地中から掘り出されて、ギルドの規準となつた。富と、權力と、物的享樂の文明の代りに、ナザレの聖者が田舍の自然的精神をもつて置き換へた。富めるものは禍ひなる哉。カイザアのものはカイザアに返せ。法律と政治と軍人と奴隷の羅馬帝國の廢墟のうへに、神の王國が回復されてきたのだ。ネロとカリギユラの羅馬は、牡牛が神となり、神が牡牛となる神話の都となつた。信仰と傳說とは智の機制を打破して、素朴なる、牧歌的なる人々が、心靈の國の守護者となつた。基督は眞に甦るものだと思はれた。ヨセフは百年毎に生れ代るもののごとくにも思はれた。アラア・アクバアである。アラア・アクバアであり、基督は眞に人々の心に甦つたのである。

都會の時代は葬られた。都會精神は土とともに葬られた。唯物的精神は世界の中央から葬り去られて、公金でさへも盜金であるとされるようになつた。人間は土に還つたのだ。文明が沒落して、人々は、土に還つたのだ。

近代文明は、近代都市とともに始まつた。領土的財產と、煩瑣神學とが、商業主義の試練に遭遇してから、近代文明が中世紀主義に代つて出でた。

中世紀における大都市は、コンスタンチノオプルの一つであつた。それさへも、十萬の人口を出づることはできなかつたのであるが、商業主義の勃興は再び都會の黃金時代をこの地上に導いた。巴里は早くコンスタンチノオプルに代つた。倫敦はまたやがて巴里に代つて立つた。

英國は近代機械文明の祖國である。商業主義と工業主義とは、小村小農の英國を大都會の煤煙にと化した。一三七七年には倫敦の人口は三萬乃至四萬にしか過ぎなかつたものを、一六八五年には五十萬となり、十九世紀の初頭には百餘萬となり、今や七百五十萬に垂んとする。倫敦の變化は英國の變化である。一三七七年には倫敦に次ぐ大都市はヨオクである。人口一萬一千である。次いでブリストルの九千五百、コベントリイの七千、ノオルヰツチの六千、リンコオンの五千である。英國における四十二都市の總人口は、田舍人口に對し、僅に十五分の一にしか過ぎなかつたのである。純然たる農村國民である。牧歌の國である。ランスキンの所謂「燕麥を育てる」國民であつたのだ。

燕麥を育てる國民がマホガニイの前に腰掛ける國民にと代つ

た。十九世紀において、この形勢は最も急潮である。次の統計は十九世紀における英國の都會膨脹の生ける記錄である。

	人口二萬以上の都市數	全上人口總計	其他の人口
一八〇一年	一五	一、五〇六、一七六	七、三八六、三六〇
一八三一年	四三	三、四六六、八八〇	一〇、四二九、九一七
一八六一年	七二	七、六六七、六三三	一二、三九八、六〇一
一八九一年	一八五	一五、五六三、八三四	一三、四三八、六九一

十九世紀の終りには都會人口は既に英國全人口の過半數に達し、今日は七割以上である。

獨逸は、歐羅巴における第二の工業國である。獨逸の全人口は十九世紀において二倍し、二十五大都市の人口は五倍した。十九世紀の終りに二十五大都市であつたものは、二十世紀の第十年には四十八大都市とまでなつた。伯林は全獨逸のバロメエタアである。一八一九年に人口二十萬、一九一九年には三百八十萬である。

米國は勿論最近の農業共和國である。十九世紀はしかしこの國を次第に都會帝國に化した。

	一八八〇年	一八九〇年	一九〇〇年	一九一〇年
都會	一四、七七二千人	二二、七二〇千人	三〇、七九七千人	四二、六二三千人
田舍	三六、三八二	四〇、二二七	四五、一九七	四九、三四八

一八八〇年には都會人口の總數は全人口の三割に足らなかつたものが、一九一〇年には既に四割六分となり、今年の統計は都會人口が最早や五割を超えたことを示してゐるのである。就中市俄古のごときは膨脹の最も著るしいものであり、最近八十年間に人口八千の田舍町から今日は二百八十萬の世界都市とまでなつた。紐育の人口は今や六百萬に垂んとし、正に倫敦を凌いで世界の中心たるべく、その大半の道を歩んだのである。

世界の都會化である。文明は農民をキウスに變へてゆくと私はいふたことがある。文明が人間をキウスに換えて、地方は人口離村、都會は人口洪水である。十九世紀の初めには全歐羅巴を通じて人口十萬以上の都市が十四しかなかつたのに、同世紀の終りには百四十、そして今日では人口五十萬以上の大都市は三十一である。三十一大都市の人口總計は三千六百萬である。歐羅巴はこゝにある。大都會にある。都會人だけが歐羅巴人である。眞に歐羅巴人である。新らしい歐羅巴がそこにある。歐羅巴の文明がそこに生れ、そこに育ち、そこに絕頂に達して、亞米利加に渡り、亞細亞を征服し、亞弗利加を掠奪し、濠洲に餘剩文明を送り出したのである。世界が文明化したのである。西歐化したのである。都會化したのである。人口五十萬以上の大都市は米國に十二、亞細亞に二十四、そして今や濠洲にも、南

米にも、亞弗利加にも、續々大都市の群が並び立たんとしてゐるのだ。

　何故に人口は都會に向つて集中するか。何故に人々はその住みなれた故郷を、友を兄弟を、父母を、妻を、良夫を、その秀麗な自然の山水を捨てゝ大都會へ集まつてくるのであるか。

　都會は惡魔である。都會は常に惡魔的である。そは營利の場所、寄生の場所として始まつたのである。農村は神である。都會は惡魔である。文明は惡魔の勝利である。智の勝利である。物質の勝利である。こゝに都會の勝利であるのだ。再びいふ、何故に人口は都會に向つて集中するや。敎育のため、政治のため、享樂のため、軍事のために、或はアルフレッド・ウエバアのするごとくに、こゝに樣々なる理由を數へることはできるであらう。まこと、一つの文化都市は、その文化のゆゑをもつて一つの都會である。サラマンカ、ブリツケ、フロウレンス、ニウレンベルクは、今日も尙文化のゆゑをもつて人口のある分量を吸ひつけることができるであらう。文化都市の時代は、しかし文明の時代ではない。文化都市は反文明である。中世紀の遺物である。丁髷である。文明における都市は、文化都市ではない。經濟都市である。カルタゴのごとき商業都市に非ざれば、バアミンガムのごとき工業都市である。大都會は常に經濟都市である。米國の大をもつてしても、政治都市は、華盛頓のこれによつて知らるゝごとく、一小都市に過ぎないのである。

　人口の都會集中は、富の都會集中である。人口の都會集中の歷史は、富の都會集中の歷史である。富の集中は原因である。人口の集中は結果である。原因が結果を產み、結果がまた原因となる。富と人口とが同一方面に向つて集中される。英國も獨逸も米國も日本も、產業革命は凡ての文明國を倍加し、十倍し、百倍した。產業革命の半世紀（一八三〇―一八〇年）の間に、歐米における商業は八〇%を增加したといはれてゐるのである。都會の增大である。商工業の增大である。富の集中である。米國においては國富總計千八百億弗（一八一五年）のうち、テイ・ピイ・モルガンの支配下にあるもの、合せて二百三十億弗であるといはれてゐるのである。

　富の都會集中は、農村の關係的、若しくは絕對的衰亡である。米國においては關係的衰亡である。英國においては、絕對的衰亡である。歐米の商業が八百%を增進した五十年間に、英國の農民は正に半減した。今日では英國の農民は全人口の八分にも足らない。佛蘭西の如く寧ろ農民國と目せられるところであつてさへ、十九世紀の半頃から農民は全人口の半ばを下り、今日では四割一分である。獨逸では三割に滿たない。伊太利に三割四分

である。墺太利は三割一分である。米國は二割六分である。日本でさへも農民は今や全人口の半ばを下らんとしてゐるのである。

文明の進歩は都會の膨脹である。農村の衰亡である。商工業の増進、農業の衰頽である。文明の一進が都會の一進であるごとく、農村の一退である。文明の各々の進歩は、農村の各々の退歩である。農村の關係的若しくは絕對的退歩あでる。農村の衰亡によつて文明は成立するのだ。高度文明は、農村の滅亡である。農民の骨のうへに、文明は立つてゐるのだ。農民が滅亡すればするほど、文明は、都會は、大社會は、機械は、科學は盛大となるのだ。希臘においてのごとく、羅馬においてのごとく、農民の犧牲において近代文明は生れたのだ。農民の墓のうへに、近代機械文明の怪物が建てられたのである。

資本主義はかくのごとくにして、一つの都會主義である。都會萬能主義である。都會は母である。力である。秩序である。科學はこゝに生れ、宗教はこゝに否定され、神々は死して唯物論は時代の哲學である。波蘭にコペルニクスあり、獨逸にケプラア、伊太利にガリレオがある。唯物論の母はしかし英國である。マホガニイ製の國民の間に、唯物論の基礎ができた。そこにベエコンがある。自然哲學のみ獨り哲學である。そこにホツブスがある。知識は詩の花ではない。數學の實である。數學の實のみ獨り知識である。知識の目的は功利である。ベエコンの所謂功利である。快樂である。物的利便である。そこに價値がある。そこにのみ價値がある。金は價値である。マアキヤンチリズムである。マアキヤンチリズムは否定された。學說のうへに否定された。金はしかし價値である。價値の尺度である。人間は萬物の尺度であるのではない。金は萬物の尺度である。あらゆるものは貨幣に還元されなくてはならぬ。でなければ價値ではない。價値とはたゞ經濟的價値である。貨幣價値に還元することのできないものは、算盤玉をもつてはじき出すことのできないものは、最早や價値ではない。神は無價値である。數學的に經驗することもできなければ、功利の用にもたゝない。神は否定された。詩は否定された。價値とは財である。富である。富とは何ぞや。「それなくして間に合ふところのもの」である。それなくして間に合ふところのものが價値である。それなくして間に合ふところの人が價値ある人である。素朴と牧歌と、土と自然と詩と神とが元滅亡して唯物論が正に時代の哲學である。資本主義は言葉のあらゆる意味において唯物的文明であるのだ。

四

社會主義もまた都會主義である。明らかなる都會萬能主義である。それは資本主義を革命すると稱しながら、唯物論は彼の哲學である。科學は萬能である。文明は神である。財は價値である。人間は自己決定の動物ではない人間の意識が人間を決定するのではない。社會的存在が彼等の意識を決定するのだ。社會的存在は政治的であり、法律的であり、精神的でありうる。それはしかし何等の獨立的存在ではない。エホバは經濟的である。マンモンである。生産關係である。一つの社會的生産の方法が常に一つの創造者である。生産の方法が社會的意識を決定し、社會的意識が人間のあらゆる生活過程を支配するのだ。ヘエゲルにとつては理想は實在である。マアクスにとつては實在は物質の世界である。ヘエゲルの歴史は頭で歩るき、マアクスの唯物史觀は足で考へるし—

社會主義は足で考へる。社會主義の足は、百姓の足ではない。土臭い足ではない。商人の頭である。猿の頭である。猿の子孫として生れた社會主義は、歴史の凡ての過程を唯物的世界の所産に歸せんとす。古代亞細亞においても、埃及においても、原始社會においても、若しくは中世紀においても、凡ての文化は、人間のゼエレの奥から生れて、心の奥に訴へるところの、ある微妙なるものではない。微妙なるものは、論理と數學の猿の世界においては、たゞなる幻影である。蜃氣樓である。迷信である。彼にとつては、基督教は猶太の生産關係を、佛教は印度の生産關係を、道教は支那の生産關係を、回教は亞剌比亞の生産關係を反影する。今日の社會主義は、そして、現代世界の生産關係を反影する！

彼が誇るところの科學は、ブルジョア社會の産物である。彼の「指南車」とするところの唯物論は、ブルジョア精神である。機械生産はブルジョア生産方法である。ブルジョア機械生産から代議政治が反影されて、社會主義もまた代議政治の道を追ふて行かんとす。まことに人間の意識が彼を決定するのではない。一つの生産關係が彼を支配するのだ。ブルジョア生産關係がこれである。資本論が「資本主義社會についての論文」であるごとくに、唯物史觀もまたブルジョア社會についての、從ひてまた社會主義についての、歴史の根本動力を指示する、ブルジョア・イデイオロギである。ブルジョア社會の上部構造である。都會の猿の兒の頭から生れて、都會の財貨のうちに育ち、都會とともに葬り去らるべきブルジョア・イデイオロギイであるのだ。

こゝに階級鬪爭説がある。財の分配の基礎のうへに立つて、科學的社會主義の階級鬪爭説がある。社會の歴史は階級鬪爭の

歴史である。一つの例外を除いて、書かれざる歴史ではない。書かれざる歴史は、彼等の歴史哲學にとつては、ナンセンスである。歴史とは、書かれたる歴史である。die schriftlich überliefert e Geschichte である。文字により傳へられた歴史の範圍では、社會の歴史は、階級闘爭の歴史である。羅馬において然り、中世において然り。羅馬においてはパトリチカアとプレベエアアの闘爭である。貴族と平民との闘爭は、二つの社會經濟階級の闘爭である。貴族と平民とは、政治的ではない、經濟的階級である！中世紀においてはギルドの親方と職人と丁稚との階級闘爭である。職人から成上る親方が經濟階級である。職人が階級である。準備時代の丁稚が社會經濟階級である。先生と生徒とは經濟的對抗である。大學教授は搾取者である。學生はプロレタリアである！

共產黨宣言は、かくのごとき大膽にして粗大なる歴史的考證から出發した。彼にとつては、今日の社會は、勿論階級闘爭の舞台である。プロレタリア對ブルジョアの二大對抗である。社會のあらゆる分子がこの二つの階級に向つて潮宗する。ブルジヨアとプロレタリアとは現代社會における社會構成の一部分であるのではない。中等階級の一部、小商人、店員、廢業商人、職人、農民、――これ等の凡てのものがプロレタリアにと落ちなくてはならぬ。こゝにプロレタリアは人口の多數である。巨大なる多數である。壓倒的多數である。科學的社會主義における階級闘爭説は、かくのごとき前提のうへに立つてゐるのである。

プロレタリアとはたゞなる貧民ではない。ディオゲネスが如何に樽のほかに何ものをもたなかつたにしても、ゴドヰンが如何に貧困のうちに一生を終つても、マアクスが如何に瑞西行の旅費に窮しても、堯が往いて藐射姑の山に四子を見、窅然として天下を喪ふとも、彼はプロレタリアではない。プロレタリアとは生產手段から引離されたる勞働者である。彼の生活が、個別的には豐かであるもなきも、彼の報酬の如何にはかゝわることなく、凡ての工業勞働者はプロレタリアである。こゝにおいてプロレタリアが人口の大多數たるがためには、貧民が人口の大多數を占めることとは何のかゝわりもない。農民が如何に貧しくとも、農民が如何に野に飢ゆるとも、それはプロレタリアではない。プロレタリアたるがためには、貧しき農民がその生產手段から離れなくてはならぬ。生產手段から離れて或は工場勞働者となるか、若しくは農業それ自身が一つの大規模機械生產となり、一つの工場のごとく、若しくは一つの炭山のごとくに、一一つの企業のもとに、數百人、數千人、數萬人の勞働者を使用

するか、若しくは少くとも農民が他人の企業のもとに賃銀勞働者として働くこととならなくてはならぬ。

私はもとより世界が資本主義化しつゝあることを拒むものではない。今日の世界は、資本主義に向つて急速に進んできたと私はいつた。そこにルウラル・エキゾダスがある。そこに都會の人口洪水がある、それはしかし世界の全體を通じて都會人口が農民に超過してきたといふのではない。世界の全體を通じては、農民は尙ほ世界の過半數である。文明の程度が低ければ低いほど農民の割合は多數である。印度が然り、支那が然り、露西亞が然り、南米が然り、亞弗利加が然りである。

支那も、印度も、南米も、阿弗利加も、若しくは露西亞も、西歐の諸國のごとくに、工業主義の國家となることが可能であらうか。都會が人口の大半を占めて、農民が滅亡しつゝある少數の狀態にと落とされることが可能であらうか。かくのごとき想像は、後に述べるであらうように、勿論ナンセンスである。然らば農業もまた一つの大規模生産となりうるであらうか。

農民の間に機械の使用されてきたことは事實である。「除々に」、農民の間に機械が働いてきた。亞米利加において、特に機械農業の發展を見たのである。それはしかし農業もまた工業のごとくに大規模生産となることの第一步なのであらうか。機械は何故に工業に迅速に使用され、そして農業には何故に、カウツキイのいふごとくに、除々に使用されねばならなかつたであらうか。何故に工業は今日既に大規模の機械を使用し、或は既に一世紀若しくは一世紀以前から大規模機械を使用しつゝあるのに、農業は依然として多くは昔のまゝであり、鋤と鍬とによつて行はれてゐるのであるか。その機械を使用するといふも、簡單なる機械である。打稈機にしても、積上機にしても、七足結束機にしても、若しくは一日に七エエカアの土地を開拓する耕作機にしても、これを工業機械の大仕掛けにして且つ精巧なるに比べると全く同日の談ではないのだ。農業が工業のそれの如くに、大規模生産を必要としないからである。必要としないばかりでない。適しないからである。何故に適しないのであるか、アダム・スミス即ち曰く、工業は、農業よりも、より多く分業することができると。いひかへれば、農業はより少くサブデイバイドされうるものであるからである。

かくのごとくにして、マアクスの豫想にもかゝわらず、プロレタリアは決して人口の大多數ではない。プロレタリアが人口の大多數を占めてゐるのは、たゞ西歐の數國である。工業主義の國家においてのみ、プロレタリアは人口の大多數である。英國はその適例である。英國においては、社會は正しく二つの階

級に分割された。ブルジョアとプロレタリアとが對立して農民は無意味なる少數である。プロレタリアが ungeheure Mehrheit der Bevolkerung となつて、農民は無意味なる少數である。こゝに英國の社會は二大階級の闘爭場である。社會主義はこゝに適する。社會主義は、より完全なる科學的社會組織として、この國の正當相續人でありうるのである。そこにマクドォナルドがあり、世界の資本家と握手する。そこにシドニイ・ウエッブがあり、「瓦斯と水道」のうへに社會主義の殿堂を築かんとす。マアクスの豫言は、かくして彼の第二の故鄕において、社會主義的秩序の明日を夢みつゝ、正に實現の第一舞台にと入つたのである。

こゝにおいてエンゲルスは嘗つてその露西亞の友人に告げて曰く、社會主義の實現は一つの前提を條件とする。ブルジョア階級の存在がそれであると。また曰くこのことを理解することは、社會主義のいろはであると。正に英國的社會主義である。都會的社會主義である。西歐のブルジョア文明のうちから生み出された社會主義者であるのだ。

露西亞革命の經驗は、あらゆる點において、マアクス的社會主義が、一つの都會的社會主義であることを證據立てた。ボルシエヰキはマアクス主義者である。共產黨宣言と資本論とは彼等の二大經典である。彼等は、その政權の奪取とゝもに、彼等の經典に從つて、凡ての社會階級を廢止すべく宣言した。都會においては資本家階級が廢止された。田舍においては地主階級が廢止された。プロレタリア階級は、彼等自身を「支配階級として組織」した。彼等に從へば、それが一つの國家であつた。プロレタリアの獨裁政治なるものがそれであつたのである。

そして何ごとが起つたか。「共產黨宣言」と「資本論」の第二卷とによつて社會階級の如何なるものであるかを學んだところの彼等は、露西亞における全階級は、都會においても、田舍においても、地を拂つたかに考へた。事實はしかし複雜である。マアクス主義は二一天作の五である。事實はゴオチアン・ノットである。Aber Theorie und Praxis ist zweierlei.—レニンは政治家である。プロレタリア政治家中の逸品である。理論と實際とは二つの別物だと彼はいふた。彼は勿論事實をとつた。マアクス主義の理論を革命の渦中に葬つて、露西亞革命の與へた現實にと彼は面した。そこは農民の國である。農民の巨大なる群が、マアクス主義における階級的理論の荒唐無稽なることを冷笑しつゝ、彼等自身を一つの階級にと組織した。Zum ersten Mal in der Geschichte gibt es in einem Staats

nur diese zwei Klassen: Nur Proletariat und Bauerntum――レニンは再び發見した。彼は歴史上において初めてたゞ二つの階級の存在を見た。プロレタリア階級と農民階級とがこれであると。ブルジョア階級とプロレタリア階級のそれではない。プロレタリアと農民との二大階級である。

農民が一つの階級であるといふのである。プロレタリアが階級であるごとくに、またブルジョアが一つの階級であるごとくに、農民もまた一つの階級だといふのである。その農民の階級は、露西亞においては人口の八割以上である。正に「共産黨宣言」にいふところの人口の非常に巨大な多數である。そしてプロレタリアは人口の一小部分である。農民のそれに比べて、いふに足りないほどの少數なのである。

その人口の一小部分が政權を奪取した。その一小部分が彼等自身を支配階級として組織した。「共産黨宣言」を讀む。凡て從來の歴史的運動は少數者の運動であつたと。ボルシエヰキ革命も、かくして從來の歴史上の諸運動と同じく正しく少數者の運動であつたのである。そしてまた歴史上の凡ての運動と同じく、それは正しく都會の少數者によつて行はれた運動であつたのである。

プロレタリアと農民とは如何なる關係に立つたであらうか。プロレタリアが政權を獲得するに至るまでは、この歴史上において初めて存在した二大階級は、相提携して革命の事業に當つたのである。「戰爭同盟」である。都會及び田舍の古るき搾取者に對する攻守同盟である。古るき搾取者はやがて除き去られた。歴史上において初めて二大階級が存在したのである。この二大階級はこゝに如何なる關係にと進んだのであるか。

最初は「戰時共産主義」である。戰時共産主義のもとでは、農民の餘剩穀物は、殆んど無補償にも近い反對給付によつて、プロレタリア國家へと奪はれた。農民の手からプロレタリアへと奪はれた。人口の一小部分が、人口の巨大なる多數から奪取したのだ。その奪取は暴力による奪取である。强制徴收である。應ぜざるものは村を追ひ、そして十年以下の牢役である。羅馬のカリギユラのごとくに、露西亞の獨裁官は、農民の首がたゞ一つにてあることを望むだのである。かくのごとき農民壓迫がまたとあらうか。世界の多くの農民壓迫史の間にあつて、かくのごとく甚だしき壓迫がまたとあらうか。辨護するものはいふであらう。土地は農民に與へられたと。然り「土地は農民に與へられた。そして、穀物は奪はれた。鷄は與へられた。そして卵は奪はれた。牛は與へられた。そして牛乳は奪はれた」―

暴力的徴收が失敗に終つた時に新らしい奪取の方法が考へ、

れた。農業税の制度、また從ひて賣買制度の復活がこれであつた。革命露西亞の新政策と稱せられるものがこれである。そは如何なる意味、如何なる目的をもつてゐるのであるか。レニン即ち曰く「革命の大問題は今やこの最後の階級に對する闘爭である」と。革命の大問題は農民に對する闘爭であるといふのである。レニンはかくのごとくに宣言した。第三インタナショナルの第三回の會議においてである。第三インタナショナルは喝采をもつて彼を迎えた。農民に對するプロレタリア の闘爭である。ブルジョア階級に對するプロレタリア階級の闘爭が終つてから、農民に對するプロレタリア階級の闘爭が始まつたのである。そして露西亞においては、人口の大多數に對する人口の一小部分のための戰ひが再び始まつたのである。再び「共産黨宣言」を讀む。凡て從來の歴史的運動は「少數者の利益 のための」運動であつたのであると。露西亞革命において、私たちは益々その然るのを見るのである。

ボルシエヰキは都會人である。都會の知識人である。若しくは都會の下層民である。彼等の聲は、都會人の聲である。彼等の哲學も、彼等の社會學も、彼等の經 學もみな等しく都會人の聲である。農民は「無知」である。彼等にとつては農民は無知である。無知なる農民は絞りとるべき牝牛である。最初は暴力的掠奪である。次いでは賣買と税金とである。羅馬の獨裁貴族がしたごとくに、最初は農民からの掠奪である、次いではブルジョア階級のするごとくに、賣買と税金とである。こゝにネップがある。ネップ・ブルジョアがモスコウにレニングラアドに、彼等の權力を逞しうして、農民は再び壓迫された階級である。搾取された階級である。然り最後の階級である。私は三度「共産黨宣言」を讀まねばならぬ。ブルジョア階級は田舍を都會の支配下に屈服せしめたと。然り昔はブルジョア階級が、田舍を都會のもとに屈服せしめた。そして今日はプロレタリア階級が天下をとつて、再び田舍を都會の支配下に屈服せしめたのである。資本主義が一つの都會萬能主義であるごとくに、社會主義もまたかくして彼が明らかなる都會萬能主義であることを證據立てるに至つたのである。

五

かくして資本主義が一つの都會主義であり、社會主義もまた一つの都會的原理である。たゞに都會的制度、都會的原理であるといふばかりではない。資本主義も社會主義も、一つの田舍征服者である。都會によるところの田舍征服者である。彼はブルジョア階級によつて田舍を征服し、これはプロレタリア階級

によつて田舍を都會の支配下に置かんとす。今日が都會の時代であり、昨日が都會の時代であり、そして社會主義はまた明日も都會時代であるべく約束して立つたのである。

何故に資本主義は一つの都會主義であつたであらうか。また何故に社會主義は、一方にブルジョア階級と反對しながら都會的制度、都會的原理でなければならないであらうか。

近代都市は如何にして發達したであらうか。昔の農民都市に比べては勿論、昔の商業都市に比べて、若しくは中世の文化都市に比べて、近代都市は何故に今日の大發達を遂げたであらうか。

近代都市が發達した理由は二つに分けて考へることができる。一つは分業の發達である。社會的分業の發達である。二つは世界の發見である。

昔の農民は自給自足の生活を營んでゐた。農業が婦人の手によつて行はれ始めてから、農民の營むところの仕事は多種多端であつた。彼の仕事は家畜を育てるだけではなく、小麥を作るだけではなく、即ち田園に出でゝ耕すだけではなく、彼は同時に紡織者であり、裁縫師であり、靴製造人であり、大工であり、鍛冶職であり、左官であり、獵師であり、牧人であり、皮工であり、酒造家であり、味噌醤油の製造者であつた。晴るれば野に出でゝ耕し、雨ふれば入りて製造工業のことに當つたのである。こゝにおいて商業制度が生れるに至つても、大多數の農民にとつては、商業は多くの用をなすことがなく、農民は多くは自給自足し、餘りあるものと足らざるものとは、農業市場において交換されてゐたのである。しかも農業の性質は集中的でなくして分散的である。人口が一箇所に密集することは農業の性質と背くものであるがために、農業の發達によつて、大都市の成立するがごときことは勿論これなかつたわけである。

社會的分業がある程度まで發達し、大工や、左官や、鍛冶職やが、獨立の職業となるに至つてからも、それが一つの手工業であり、また交通機關の完備せざるがために、彼等の存在は、主としては一地方の農民によつて繋がれざるをえなかつた。即ち彼等の生活も、農民のそれのごとくに、主として分散的生活でなければならなかつたのである。

手工業制度が發達し、從ひてまた社會的分業が一歩を進めてから、農業的地方と、そしてより文明なる地方との交換が一歩を進めてきた。即ち工業品と農業的生産物との交換のためにする商業が一歩を進めたのである。アダム・スミスは十字軍の後における歐羅巴の商業について曰く、商業都市の住民は、より富

める諸國の工業品、及び高價な贅澤品を輸入して、大地主の虚榮心に投じた。大地主等は、彼等の土地から生産された自然的生産物の大量をもつてそれを買取つた。この時代における歐羅巴の大部分の商業は、それゆえに主として、彼等の自然的生産物と、より文明なる諸國の工業的生産物との交換から成立したのである。かくして英國の羊毛は佛蘭西の葡萄酒及びフランダアスの美しき衣服と交換され、同様にして波蘭の穀物は佛蘭西の葡萄酒及びブランデエ、佛蘭西並に伊太利の絹及び天鵞絨と交換されたのである。手工業が發達し、社會的分業が一歩を進め、商業が從ひて一歩を進め、また從ひて商業的にも工業的にも、都會的職分が增大するに至つたのである。

工業がしかし尚ほ手工業制度であつた間は、社會的分業の範圍は極めて狹く、農民は依然として紡績者であり、靴製造人であり、下駄職であり、裁縫師であり、酒造家であり、從ひて商工業的都會の發達は充分であることはできなかつたのである。

この形勢に革命的に變化を與へたものは勿論機械工業の發達である。機械工業の發達はただに都會における手工業者を驅逐したばかりではない。農民をその工業的關係から驅逐して純然たる田園耕作者にと化した。手工業者が機械と競爭することができなかつたごとく、農民もまた靴製造人としては、裁縫師としては、紡績者としては勿論機械と競爭することはできなかつたからである。かくして近代の社會的分業の時代がきた。機械工業とともに、從ひて工場分業の發達とともに、社會的分業の時代が開けたのである。農業と商工業とが分裂し、從ひて商工業の發達をきたしたのである。

その結果は都會と田舍との分裂である。機械工業は集中的工業である。手工業のごとく分散的生活のうへに機械工業を組織することはできない。機械工業は一面において大規模生産であり、從ひて多數の勞働者を必要とするばかりではない。他の一面においては勞働者が一定の場所に集中することを必要とする。機械に對する人間のアダプテエションである。アダプテエションが行はれて人口が一定の場所に集中し、かくて近代の大都市が、機械生産の結果として生れてきたものである。

近代都市の特質は機械都市であることである。農民都市に對し、文化都市に對し、若しくはただなる商業都市に對して、近代都市の特質は機械都市であることである。

近代都市を誕生せしめた他の一つの原因は、世界の發見である。世界の發見は航海術の發明に基いてゐる。ここに新大陸の發見があつたばかりではない。世界が切れ〲なる諸大陸、一つ一つの孤立から、一つの統一經濟の世界にと結合されたので

ある。正に世界の發見である。機械の發達が一層この關係を發展せしめた。汽車が發明されて國民的交易、國民的經濟の基礎が築かれた。汽船が建造されて世界的交易が可能にされた。亞米利加の棉花は英國に輸入され、マンチエスタアの製造品が、亞米利加へ若しくは世界の各地へと送り出された。マンチエスタアはかくして世界の市場である。世界的市場である。即ち世界都市である。羅馬の世界都市よりも、更に一層大規模なる世界都市である。

近代都市の特質は、かくして一つの機械都市であり、また一つの世界都市である。世界都市は、世界の市場である。その存在は一つの地方にかゝるのでもなく、一つの國のうへにかゝるのでもなく、世界のうへにかゝるのである。即ち田舍都市ではなく、國民都市ではなく、一つの世界市場なのである。

最初に田舍都市がある。一つの地方にかゝつてゐる一つの地方の經濟的支持の元に田舍都市がある。田舍都市は Ackerbürgerstadt である。百姓の町がある。百姓の市場から出で一つの田舍都市がある。一地方の農民によつてその發達が制限されたところの町である。やがて國民的都市がある。國民的都市は一地方の農民を相手として立つてゐるのではない。即ち一地方の農民を賣手としても買手としても、相手としてゐるのではない。地方から解放されたのである。マツクス・ウエバアの所謂解放された都市なのである。それはしかしまだ眞に解放された都市であるのではない。彼の食物は一つの國家にかゝり、彼の生産物の買手は一つの國民にかゝつてゐる。こゝにおいて都市の發達は、一つの國家のうちにおける農民の消費力並に生産力によつて制限をうけなければならない。國民都市は、かくして一つの國民を都會主義へと導くことはできないのである。

國民都市は、地方的解放の都市である。世界都市は、國民的解放の都市である。國民都市が一地方の農民の生産力及び消費力から解放されたごとくに世界都市は一國農民の生産力及び消費力から解放された都市である。彼の相手とするところのものは、賣手としても買手にしても、世界であるからである。世界都市の發達は、かくて一國農民の生産力及び消費力とかゝわることがない。彼の存在は、ただ世界の經濟の關係のうへにかゝつてゐるのである。

こゝに近代世界都市は自由である。世界都市は一國農民から自由である。一國農民の消費及び生産から自由である。一國農民の生産力が増大するもせざるも、若しくは一國農民の消費力が減少するもせざるも、世界都市の存在とは何等のかゝわりもない。彼は外國からの食物を食べ、外國市場を相手として彼の

生産を擴張し、若しくは維持してゆくことができるのである。彼の成長は自由である。國民的なる如何なる制限からも自由である。この意味において彼は國民主義者ではない。正に世界主義者なのである。

英國の例において見る。倫敦の世界都市は如何にして可能であるか。彼の食料手段が若し英國農民にかゝり、彼の生産物が若し英國農民の消費にかゝるとしたら、倫敦の世界都市は如何にして可能であるか。獨り倫敦ばかりではない。グラスゴオ、バアミンガム、リバプウル、マンチエスタアの世界都市は如何にして可能であるか。英本國の農民は今日は、僅に百五十萬である。倫敦の人口は七百四十六萬である。グラスゴオは百萬である。バアミンガムは九十萬、リバプウルは八十萬、マンチエスタアは七十餘萬であり、そして全人口の七割以上は都會民である。かくのごとき少數の農民の間にあつて、かくのごとき多數の都會人口が如何にして可能であるか。彼等は彼等の農民のうへに立つてゐるのではないからである。彼の生産物は遠く海を越えて諸國に消費され、彼の食物は、四千五百萬の人口のうちで、僅に一千萬人が英國農民の生産物によつて生活してゐるにしか過ぎないからである。

かくの如くにして近代都市の發達は二つの條件に掛つてゐる。機械生産の誕生と世界の發見とである。機械生産の誕生によつて社會的分業の發達を、從ひて工業の獨立並に都會集中をきたし、世界の發見によつて世界的工業を可能にし、從ひて世界的大都市の發達をもちきたすことができたのである

それゆえに近代都市の發達は工業主義とともにある。その誕生は工業主義の誕生である。その可能は工業主義の可能である。即ち工業主義なくして近代都市の成立を考へることはできないのである。この意味において近代都市は工業主義の都市である。一つの農民都市ではなく、一つのたゞなる商業都市ではなく、純然たる工業主義の産物なのである。

今日は工業主義の時代である。近代都市の時代は工業主義の時代である。農業都市が農民時代を表徴するごとくに、文化都市が文化の時代を代表するがごとくに、近代の世界都市は工業主義のシンボルである。然りシンボルである。世界都市があつて工業主義があるのではない。工業主義があつて近代の世界都市があるのである。工業主義は原因である。近代の世界都市は表徴である。

凡ての世界都市が工業主義の産物だと私はいふてゐるのではない。羅馬の世界都市は羅馬の帝國主義を代表する。工業主義の存在するところに、世界都市の成立が必然であると私はいふ

のである。近代の世界都市が工業主義の結果だと私はいふのである。

資本主義が一つの都會主義であることは、それが一つの工業主義であるからである。社會主義がまた一つの都會主義を脱することのできないのは、それが工業主義の約束のうへに立つてゐるからである。

六

今日は都會時代である。工業主義の時代は都會時代である。都會の自由なる時代である。自由なるは都會である。都會が自由であり、そして都會が權力である。世界都市はその中央に立つてゐる。世界都市は王である。主權者である。

私は都會は自由だといふた。近代都市は一つの地方からも、一國農民の生產力及び消費力からきたるところの如何なる制限からも自由であるといふた。即ち發展の自由があるのだといふた。それはしかしたゞに發展の自由であるばかりではない。また征服の自由である。發展の自由であるとともに征服の自由である。或は發展の自由であるがために征服の自由である。

資本主義の國家においては、都會は經濟生活の中心である。就中世界都市は世界經濟の一中心であり、そしてまた常に一國經濟の中心である。今日の倫敦がウヰリアム・リユウハスの食堂のために存在してゐるのでないごとくに、東京は田舍大名の贅澤場として存在してゐるのではない。そこに金融の中央機關がある。貨物の中央市場がある。株式取引所がある。米穀取引所がある。トラストがある。凡ての大商業及び大工業の本部がある。ビック・ビジネスがある。鐵道も、海運も、電信も、電話も、あらゆる制度は都會、就中世界都市を中心として設けられてゐる。世界都市はこゝに經濟的中央集權の場所である。經濟的中央集權があり、また政治的中央集權がある。都會は經濟的權力の場所であるとともに、またそれゆゑに政治的權力の場所である。華盛頓に白堊館の建てられてゐる米國においてさへ、政治的權力の場所は華盛頓の田舍町ではなくて、紐育の世界都市である。經濟的權力と政治的權力とが掌握されて、世界都市は征服者である。田舍の征服者である。近代的民主主義は都會民によつて行はれるところの田舍征服の制度である。あらゆる征服の機關が完備して、世界都市は正に獨裁者である。彼の一顰一笑は以て田舍を支配するに足るのである。都會が田舍のうへにかゝつてゐる時代は、資本主義の時代ではない。資本主義の時代は、一つの國においては、都會が田舍のうへに

かゝるのではない。田舍が都會のうへにかゝるのである。都會は主人である。田舍は奴隷である。都會人は征服者である。田舍者は被征服者であるのだ。

被征服者が征服者を崇拜する。奴隷が主人に恐怖する。そして田舍者が都會人を讃美する。都會は權力を掌握してゐるばかりではない。文明を代表するからである。即ち都會は金の場所であるばかりではない。金の場所であるがゆゑに、また文明の場所であるからである。科學と機械とはこゝにある。哲學も、藝術も、政治も、一切のものが都會に集中されて、都會は文明の腦髓である。新らしい知識、新らしい制度、新らしい機械、新らしい衣裝、新らしい流行、新らしい贅澤、新らしい女、新らしい一切の文物が都會から流れて、都會は正に文明の神殿である。神秘である。魔術師である。水銀から金をとる。馬鹿を悧巧にし、百姓の兒を學士にし、博士にし、大臣にする。田舍者を文明人にと化するのだ。こゝに田舍者の文明を崇拜せざらんとするもえないのである。が文明病患者となり、都會病患者となり、從ひて土を卑しみ、勞働を輕蔑し、食母を捨てゝ都會人の翻弄に任せることに何の不思議があらう。都會は誘惑者である。偉大なる惡魔である。昔の羅馬の農民は、都會人の享樂を羨み、土地を賣つて帝都に集つたといふ。今日の農民は、小作米を賣つて上京するの地主も、田園に止まつて耕作するの農民も、みな等しく都會の崇拜者であり、讃美者であり、また從ひて都會病患者である。都會によつて精神的に征服されたのである。都會によりて經濟的に征服されたばかりではない。また實に精神的に征服されたのである。都會は物質的征服者であり、また從ひて精神的征服者であるのだ。

たゞに征服者であるばかりではない。また搾取者である。都會は經濟的搾取者である。彼はその經濟的權力によつて農民を搾取することが可能であるばかりではない。また彼は農民の都會病を利用して彼が懷中を搾取するばかりではない。即ち權力と魔力とによつて農民を或は脅迫し、或は僞瞞することによつて搾取するばかりではない。資本主義の國家においては、外國貿易は、しば〳〵農民搾取の手段である。即ち資本主義の諸國においては、生産費の低廉にして且つ土地の豐富なる未開地方から米を、麥を、馬鈴薯を、棉花を、牛を、豚を安價に買ひとりきたつて、內地の市場に競爭を始めたのである。昔の羅馬の地主が外國からの安價なる奴隷を買ひきたつて內地の農民と競爭せしめたごとくに、今日の都會人は外國の安價なる農産物をもつて內地の農産物を壓迫するのである。農業の生産費が一方に增大するにもかゝはらず、農民の生産物の價格が、經濟學の

原則に裏切つて、下落せざるをえないのはこれがためである。こゝに農業の衰頽は必然である。穀物條令廢止後に於ける英國の實例はその最も顯著なる事例であるといはねばならぬ。

かくのごとくして都會は榮え、かくのごとくして田舍は滅ぶ。かくのごとくして商工業は勃興し、かくのごとくして農業は衰亡したのである。工業主義の行はれる限り、農業の衰亡は必然である。また從ひて都會時代の行はれてゆくかぎり、農村荒廢は必然である。何人も、如何なる政策も、この傾向を防止することはできないのである。一方に工業主義を謳歌しながら、また從ひて商工立國を謳歌しながら、他方に農村振興を叫ぶことは大いなる矛盾である。そはたゞなる政治家の欺瞞である。たゞなる選擧政策ではありうる。農村振興とは何のかゝわりもないのだ。たゞにかゝわりがないばかりではない。政治家が農村振興を叫びつゝある間に、農村は益々沒落のどん底へと落ちてゆかなければならないのである。農工業の調和さるべき時代は既に遠くへと去つたのだ。都會と田舍との調和さるべき時代は、既に資本主義の諸國から遠くへと去つてしまつたのだ。今日は都會時代である。昨日から今日へかけて、世界は都會時代である。都會は支配者である。獨裁者である。征服者である。搾取者である。田舍は被支配者である。被征服者である。被搾取者である。奴隷である。沒落であるのだ。凡ての資本主義の國家を通じて、かくのごときは、凡ての農村のうけとりつゝある今日の運命である。そしてうけとらねばならない運命なのである。

七

世界都市は永遠であらうか。都會時代は永遠であらうか。工業主義は永遠であらうか。商工立國は永遠であらうか。

人々は茫然として世界都市を眺めてゐる。そこは奇蹟である。誘惑的である。人間のあらゆる力がそこに生れ、そこに育ち、生々化々して、千年萬年、盡くるところなきがごとくに見えてゐるのだ。文明に慣れた人々は、今日の世界都市が、都會時代が、工業主義が、商工立國が、過去から未來への限りなき連續であるかのごとくに考へてゐる。人々は、文明に醉ふて、進歩に迷ふて、進化論の誤解から出發して、文明の黄金時代がやがてきたりつゝあるかのごとくにさへ考へてゐるのである。

人々は、都會が一つの始めではなく、一つの終りであることを忘れてしまつたのである。

世界都市は始めではない。凡ての都會は始めではない。一つの終りである。終結である。田舍の終結である。そしてまた時

代の終結である。

田舍は初めである。都會は終りである。都會があつて田舍があるのではない。田舍があつて都會があるのである。カインがありて耕し、アベルがありて物し、田舍があり、田舍の餘剰があり、そして都會がある。都會は後にきたるものである。

都會は商工業の場所である。田舍は農業の場所である。從ひて田舍は食物の供給者である。都會は田舍の食物のうへに立つのである。田舍は食物を創造し、自ら食ひ、そして尚ほ餘りあるものを都會に送るのである。この餘剰食物こそ都會の生命である。It must ever be true that the surplus produce of the cultivators, taken in its most enlarged sense, measures and limits the grows of that part of the society which is not employed upon the land. ――マルサスの人口論を讀むものは何人もこの一節を忘れてはならない。田舍の餘剰生產は、都會發達の限度でもあり、尺度でもある。都會は田舍の食物のうへに立つてゐるからである。こゝに都會の限度がある。都會の發達は田舍によつて制限されるのである。如何なる都會も田舍によつて制約されざるものはないのである。

私は、今日は都會が自由であるといふた。今日の都會は、食料手段から自由であるといふた。それはしかし都會が食料手段を自存するといふの意味でもなく、田舍の食物なくして都會が生存することが可能になつたといふごとき如何なる意味でもないことは勿論である。今日の都會が、一つの地方からも、若しくは一つの國家の農民からも自由になつたといふにほかならないことは、私の既に繰返して述べてきたところである。一つの地方、一つの國の農民から自由であるは、彼が他の地方、若しくは世界農民のうへにかかつてゐるからである。英國の都會人口が英國の農民から自由であることは、彼が波蘭の農民にかゝり、濠洲の、加奈陀の農民のうへにかかつてゐるからである。英國の工業主義は、ここにおいて世界の農民國のうへにかゝつてゐるのである。英國の都會人口はそれ等の農民のうへにかゝつてゐるのである。こゝに限度がある。こゝに尺度がある。

英國の食料輸入額は一年五億磅を超えてゐる。英國輸入品の過半は食料手段である。この食料手段こそ英國の都會人口を養ふところの手段であり、倫敦の、グラスゴオの、リパプールの、マンチエスタアの世界都市を養ふところの手段であり、また從ひて英國の工業主義を維持するところの手段である。然り五億磅の食料である。五億磅の食料こそ英國の基礎である。大英國の基礎である。大英國がよつて立つところのたゞ一つの道であるのだ。英國は如何にしてかくのごとき巨大なる食料輸入

に堪へるであらうか。六億磅に垂んとする彼の工業輸出品を有するからであることは勿論である。工業輸出額と食料輸入額とがほゞ匹敵する。前者は輸出貿易の大半である。後者は輸入貿易の大半である。英國の運命はこの二つのものにかゝつてゐる。二つは一つである。二つのうち一つを欠くことはできない。一つを欠くことは二つを欠くことである。二つを缺くことは凡てを缺くことである。言葉を換えていへば、英國の運命は、一、英國のために一年五億磅以上の餘剩食物を供給するの田舍の存在と二、英國工業品のために六億磅に近き世界の市場のあまされることとの二つにかゝつてゐるのである。そしてその何れの一つも致命的である。その一つを欠くことは英國の衰亡である。英國工業主義の破產である。獨り英國の運命が然るのであるのみではない。英國工業主義の運命は、またやがて直に世界の工業主義の運命でなければならぬ。

明日は如何。明日の英國は如何。明日の工業主義は如何。明日の世界は如何。

ロバート・マルサスが彼の人口論を出版したのは一七九八年である。彼の人口論は、今日はブルジョア帝國主義者の楯である。ブルジョア帝國主義者が、マルサスの人口論を楯として彼等の資本主義と、そして帝國主義とを辯護したことが抑々幾度であらう。そのマルサスである。英國の工業主義に向つて一大警告を與へたのは。彼曰く、棉花が米國から船に積まれ、數千哩を越えて他國へ送られ、製造されてそして再び米國の市場に送られるために、そこに陸揚げされることは、永續すべからざる事物の狀態であると。

彼の豫言と警告とから百二十餘年を過ぎた。事實は決して彼を欺きはしなかつた。

英國の工業獨占は長い間ではなかつたのである。佛蘭西がやがて英國の例に倣つた。佛蘭西が工業品の輸入國から輸出國になつたのは既に遠い昔のことである。獨逸もまたその例に倣つた。獨逸もまた工業輸出國となつた。伊太利も、墺洪國もまたその後を襲ふた。工業主義は疾病のごとくに西歐羅巴を侵した。西歐羅巴の工業化は實に驚くべき早さであつた。クロポトキンもいふてゐるごとくに、古るき時代に於て五十年を費しただけの進步が數年のうちに成しとげられたのである。たゞに西歐羅巴だけではない。波蘭のごとくに長く農民國であつたものでさへ、今日は工業輸出國である。たゞに歐羅巴においてだけではない。亞米利加もまたその例に倣つた。一八七〇年から九十年にかけて米國の工業生產は三倍に增加し、次の十五年間に更

に二倍した。一九一〇年から二十一年にかけて米國の工業既成の總額は五倍以上に増加し、一九二一年の輸出額は二十六億四千三百萬弗に達した。英國が四割を増加したに對して米國は五倍以上に達したのである。そしてその輸出總額において、米國は正に英國の塁を摩しつゝあるのである。マルサスのいふたごとくに、米國から棉花が積荷され、數千哩を超えて英國に輸入され、そこに製造されて再び米國に向つて輸出されることは、決して永續さるべき事物の状態ではなかつたのである。英國最大の工業であつた紡績工業は今日は衰頽の傾向にある。米國が英國紡績工業の消費者であつた時代は去つた。米國紡績工業は今や英國のそれに匹敵するのである。日本もまたその例に倣つた。日本もまた工業輸出國となつた。日本の工業輸出は過去十年間に七倍以上に達したのである。

工業輸出國とならざる國家であつても、工業は世界の各國を通じて勃興してきた。世界の各國が次第に自給自足の原則へと復歸しはじめてきた。一つの國が工業的天才を獨占するといふごときことは「五十年の時勢後れ」であるといはれたのも既に前世紀の終りであつた。こゝにおいて世界の各國を通じて、大都市が次第に人口を喰ひはじめた。亞米利加と日本とは勿論智利にもブラジルにも、メキシコにも、アルゼンチンにも、支那にも、印度にも、濠洲にも、人口五十萬以上の大都市が續々建設られた。就中ベノス・アイレスのごときは既に人口百七十萬に達するの大都市にまでなつたのである。

工業主義の國家にとつては、かくして彼の都會人口のために餘剰食料を供給するところの田舍が一方に減少した。他の一方においては、彼の工業品を消費すべき田舍が縮小されたのだ。製造工業が世界に分配され、また從ひて都會が世界に分配され、工業的國家の衰頽の傾向をもちきたしたのである。

英國の工業主義は既に下り坂である。彼の經濟的權力が既に米國に移つたばかりではない。彼の製造工業そのものが下り坂である。彼の貿易は既に久しく輸入超過である。その輸入超過は、今日は一年間に三億磅にも達するのである。この尨大なる輸入超過は纔に彼の運賃と、外國に投資されたる資本の利子とによつて償つてゐるに過ぎない。しかも英國輸入品の過半は食料手段である。食料手段は、英國の工業主義のつゞく限り、減少すべからざる輸入である。食料品の輸入を減少することは英國工業主義の沒落を意味するにほかならないのである。その沒落の日がきたりつゝある。資本の利子と運賃とによつて今日を支へてゐる英國は、今や第二の和蘭である。英國の運命は既に目捷の間に迫つてきたのである。

こゝに勞働黨内閣がある。英國の資本主義は、今やその高度の發達をとげて、英國の社會は、一方にマアクスの所謂人口の巨大なる多數であるところのプロレタリアと他方に人口一小部分であるところのブルジョアとの二大階級に分れてから、勞働者階級は彼等自身を支配階級にと組織するの日がきたのである。勞働黨内閣は、正に人口の巨大なる多數が勝利を占めたことの紀念でなければならない。英國の工場勞働者はたしかに勝ちつゝある。マクドナルドがこゝに大英國の宰相である。英國の工場勞働者は彼等の友を大宰相の椅子にと据えた。社會主義の實現の日がこゝに近づけりとは、彼等の期せずして信んずるところである。やがて勞働者のための黄金時代がきたるであらうといふことを、彼等の指導者等が、幾度彼等に約束したことであらう。その人たちは大臣となり、宰相となり、ウエストミンスタアの名譽ある代議士となつた。その瞬間である。英國の工業主義が既に沒落の道を歩るいてゐるのは。

然り工業主義の沒落である。工業主義の沒落は資本主義の沒落であることは勿論である。それはしかしたゞなる資本主義の沒落であらうか。工業主義が沒落して社會主義がありうるであらうか。工業主義の過程のうへに立てられた社會主義が、工業**主義の沒落とともに沒落しないといふことができるであらうか。**工業主義が沒落して、資本主義も、社會主義もともに沒落するのだ。マアクスの謂ふところの資本主義の行詰まりなるものは、また同時に社會主義の行詰まりを物語るものでなく何んであらう。社會主義者が資本主義の行詰まりを論じつゝある間に、資本主義も社會主義も、ともに沒落の道を歩るいてゐるのだ。然り一切の工業主義が沒落の道を歩るいてゐるのだ。

資本主義は機械生産のうへに立つてゐる。社會主義もまた機械生産のうへに彼の新社會を建設せんとするものである。

機械生産は大規模生産である。大規模生産は大社會を前提とする。大社會あり、大規模生産あり、機械生産の可能はこゝにある。例へば書物の例において見る。フリイマンに從へば、一冊の書物（一萬字と假定する）を造るためには、手工業のもとにおいては十一磅四志を要する。機械生産のもとでは、同じく一冊の生産費は三百六十七磅十六志である。一冊の書物の製造のためには機械は、手工業に比べて三十倍の費用を要するのである。機械が精巧と規模の大きさとを加へれば加へるほど、一冊の生産費は增大する。そはその生産の豫備行程における費用を增大することを意味するからである。即ち機械は常に大規模**生産でなければならない**のである。

機械の進歩は、生産の一層大規模であることを要求する。從ひて市場のいよ〳〵増大することを要求する。停滯ではない。現狀維持ではない不斷の増大を要求する。停滯は機械の死滅である。現狀維持は機械生産の現狀維持ではない。死滅を意味する。しかも尚ほ機械生産は、市場の一層増大を要求すべき他の一つの理由をもつてゐる。機械は勞働節約機關である。機械の改良は絶えず勞働を節約する。即ち不斷に失業者を製造する。この失業者を吸收するために、不斷に生産を擴大し、從いて不斷に擴大する市場をもたなければならないのである。

要之、機械生産の繼續は、市場の不斷の擴大を要求する。不斷に擴大する市場があるに非ざれば、機械生産は行詰まり、機械の死滅がきたらなければならないのである。

然るに事態はこれと逆行する。世界の形勢は機械に背いて走つてゐる。一方に不斷に擴大する工業的生産がある。世界の各國が先きを爭つて工業主義の國家とならんとしつゝある。市場はしかしこれに逆比例する。逆比例して縮小する。今日までの農業國が工業化すればするほど、工業主義の國家のために、世界の市場は縮小するのである。今日は正にその時である。一方に increasing supply である。他方に decreasing demand である。即ち機械生産のために世界は今や日一日とその領土を縮小し出したのである。

機械生産の沒落の日がきたのだ。工業主義の沒落の日がきたのだ。社會主義の死産が日一日と明らかになつてきたのだ。私たちは今その日に面しつゝある。

歐羅巴は老いた。資本主義も老いた。工業主義的社會主義は死産である。都會時代とともに、これ等の一切の都會的機械主義が、都會的唯物主義が、そして同時に文明そのものが去りつつあるのだ。

非醫者論

日本赤十字社奉天病院長醫學博士　小川勇

白馬、馬に非ず、庸醫、醫に非ずと云ひ得るか否かは知らぬが、病を醫し得るものを醫者と言へば、病を醫し得ざるものを非醫者と云ふてもよからう。

「人多き人の中にも人ぞ無き、人となれ人、人と爲せ人」と云へるが如く人多けれど眞の人と云ふべき人の少きが如く世間醫者多しと雖も、眞に醫者と云ひ得べきものは甚だ少し。人にして人にあらざるものを非人と云ふが如く醫者にして病者を醫し能はざるものを非醫者と呼ぶも至當なるが如し。此意味に於ける非醫者亦少なからざるべしと思へど、予の今茲に論ぜんとする非醫者は全く此れと異つて居る。即ち予の所謂非醫者とは醫師免許狀を有せずして病者を治療せんと欲するもの、又は治病し得ると稱して患者を取扱ひつゝあるものを云ふのである。例へば、天理教、黒住教等の如き、純宗教的のものを始め靈子療法、轉精療法、其他此種の所謂靈的又は精神的と稱する特種療法を指すのである。尚歐米に於ける「クリスチャン、サイエンス」「カイロプラクチツタ」日本に於ける紅療法、モミ療法等も之れに屬すべきものであると思ふ。併し「カイロプラクチツタ」の或るものは、元々醫者の發見するところにして、總ての病氣は脊柱の不整に依つて脊髓の一部壓迫せらるゝ爲め、或部を支配すべき中樞の作用障碍せらるゝが故に、發するものであるから先づ第一に脊柱に於ける其變化を發見し之れを整正さへすれば、自ら病は治癒し健康に復すると云ふのである。又東京に於て近頃桑井の婆さんとして有名なる、某女は久しく看護婦を業とし、多數の患者に接し居る中、殆ど總ての病氣は淋巴の循環障碍に因つて起るものなることを發見し彼女獨特の按摩法に依りて淋巴の運行を整理して萬病を治すると云ふのである、斯く、人體の解剖、生理的智識を根據として編み出されたる特種療法は假令其之れを行ふ人が醫師（免許狀を有する）にあらずとするも其根柢は現代醫學の智識を基礎とするもので、所謂整形外科又は理學的療法の部門に屬すべきものとも認めら

れるのである。

又氣合術とか靜坐法とか自彊術とか、禊とか云ふ種類のものには吾人の所謂體操又は一種の運動法などが含まれて居ることであるから其點丈けから見ても或種の病者に對する療法又は健康增進法としての價値を認めないわけには行かぬ。

併し大本敎に於ける鎭魂歸神の法及び靈子療法、精神療法等に於ける術者の指端より發する、所謂一種の靈子、靈光、靈力なるものゝ作用並に其の治療學說等に至りては未だ容易に吾人の信じ難き點あるを遺憾に思ふ。天理敎、黑住敎其他の宗敎的信仰に基く祈願、祈禱等の爲めに病者の治癒する事は古今東西決して、其實例に乏しく無いのであつて、吾々の如く所謂現代科學を基礎とせる實驗醫學の立場に立つて、日々患者を取扱ひつゝある內科醫の實地的經驗より之れを見ても、醫藥其ものゝ効力よりも、患者が醫者に對する信用の力、即宗敎的に之れを云へば全く患者自身の信仰の力によつて、病氣の治癒する場合が甚だ多いものである事を私は認めて居るから人間以上の神を信ずる人にありては、其信仰の力によつて、或種の病氣が治癒する位の事は別に不可思議でないと思ふ。

今翻つて多數の人々が金城鐵壁の如く、信頼して居る科學の研究し盡したりと公言し得る範圍は果して如何、他は暫く措き、日進月步の稱ある吾々醫學の方面のみに就て之を見ても、未知、未解決の問題は頗る多く單に臨床的治療の方面に於ても確實に醫者が患者を治癒せしめ得べき場合は、內科的領域に於ては「マラリア」に對する「キニーネ」、「ヂフテリー」に對する血淸療法、赤痢「アメーバ」に對する「エメチン」位のもので其他の病に至りては其增進を防ぎ、自然治療を補助促進し生くべきを生かしめ、死すべきを滿足して死なしむれば良醫の名を博するのであつて時醫は之れさへも爲し得ず、放置せば輕快すべきものに手を下して却て增惡せしめ、又は生くべきものを死なしむるのである。進步したと云ふ現代醫學の實情は此の如きものであるから、吾々は決して現代の醫藥、醫術によつて總ての病氣を治癒せしめ得べしとは云はぬ。さればこそ吾人は日夜汲々として之れが硏究を怠らぬのである。

然るに近時益々增加の傾向ある、予の所謂非醫者等の宣傳し且つ實行しつゝある所業を見るに、彼等獨特の法を施し又は之れを修得すれば忽ちに心身は改造せられ又如何なる難病奇病も全治せざる事無しと公言して憚らざるのである。以下少しく醫者と非醫者とを對比しつゝ論じて見度いと思ふ。併し予は豫め斷つて置く、現今醫者と非醫者とは互に他を排斥して罵り合ふ傾向があつて、常に議論が感情的に流れて正鵠を得難き嫌あれ

ど、予は努めて非醫者の友となり同情者となり、其内情と眞相とを諒解し可成公平なる立場に立つて事實上、効果あるものは進んで是を保護尊重して、益々其圓滿なる發達を遂げしめ、以て現代醫學の缺陷を補はんことに努力し度い考である。唯徒らに大言壯語し、事實に反したる宣傳を敢てし、さらぬだに病苦に悶へ、迷ひに迷つて居る可憐の病者の心理狀態を巧みに利用して、暴利を貪らんとするが如き沒德漢に對しては飽くまで之を追窮して可成害毒を社會から除き度いと云ふ考を持つて居るまでの事で、予は自分が醫者であるが爲めに、飽まで現代醫學の狹き城廓に立て籠つて、徒らに現代醫學の缺陷までも之れを辯護して猥りに非醫者諸君を攻擊せんとするものではないから、誤解をせぬ樣にして貰ひ度いのである。

凡そ治病學上には最も大切なる二つの要件がある。其一つは靈とか精神とか呼ばれて居る形而上の問題、即ち心の問題であつて其二は形而下の問題即ち肉體のそれである。現代醫學、殊に日本の如く專ら獨逸醫學に範を取つて居る（近來は獨逸のみならねど）醫學に於ては、物質科學即ち物理、化學、解剖、生理等の研究に基礎を置いて所謂實驗室内の事實、即實驗化學又は動物實驗等に依つて示されたる事實を根據として吾々人類の疾病をも、理論的に之れを治療せんとするものであるから、云

はゞ吾々人類を物質又は下等動物に準じて取扱はんとするものである。勿論現代醫學に於ても、心理學、哲學等の見地に立つて大いに心の問題を研究し、治病上にも、之れを應用せるものが無いでは無いが、所謂現代醫學の特色とするところは、之にあらずして、彼れにあるのであると云はねばならぬ、即現代醫學の長所は人間を直ちに、神の子と見做さずして、智情の大いに發達したる動物と見做したるところにあるのであつて、又一面に於て、陷り易き缺陷も此點にあるのであると思ふ。

現今日本に於て流行しつゝある非醫者の多くは、人間の動物性を輕視して、其靈的、精神的方面のみを大いに偏重し之れを處置する事によりて、肉體に現はれ來る總ての疾病をも治療せんと企つるものである樣に私には見へる、所詮人間は靈、肉、合體の一實在であると信じて居る予に取つては醫者も非醫者も治病上に於て、夫々應分の効果を揭げて居ると認められるのである。

然るに世間普通の醫者や非醫者は此事實を公平に認むるの餘裕を持たぬが爲めに、醫者は自ら學びたる醫學のみを信じて、他を容れず、非醫者は偶々自分の遭遇したる範圍の狹き經驗を過信して、自ら「神人」と稱し「神子」と號し天上天下唯我獨尊をきめ込み猥りに醫學を排斥し、醫學者を罵倒し、自らを

き、人をも欺き、敢て悟るところ無き狂態を演ずるに至るものが決して少くない樣である。

前にも既に述べた通り、現代醫學は未だ決して、完全なものでは無く、原因は解つて居ても治療方法の不明なもの、治法は解つて居ても原因の不明なものが幾つでもある事であるから、醫者の治療を受けて居る間は中々治らなかつたものが、却つて放任して置く中に治つた樣に思はれる場合もあるだらうし、又醫者の手によつて病氣其ものは十中八分通りまで治つて居ながらも、何か精神作用の爲めに、自分では殆ど不治症の如く悲觀して居つたものが偶々知人のすゝめ等によつて、非醫者の施法を受け、忽ち心機一轉して日一日と快方に向ひ、短期間の間に全快したと云ふ樣な實例もあるであらう、或は某醫が肺結核又は胃癌の初期ではないかと話したのを、患者自身は過敏性の爲めに全く眞の結核又は癌と診定せられたるものと誤信し、大いに悲觀に陷り、殆ど死の宣告でも受けたものゝ如く、悶へて居る際、結核でも、癌でも必ず、全治請合と宣傳する非醫者に會し、患者の喜び一方ならず、早速其療法を受けて見れば精神忽ち安定し、漸次快方に向ひ、遂に全快したりとせんか、此場合事實的には其患者は眞の結核もにあず、又眞の癌にもあらさりしが故に、唯心機一轉と共に快方に向つたものであつたとしても、此患者を取扱つた非醫者は唯患者の言を信じて結核又は癌と思ひ居りしが故に彼れの療法によりて結核も癌も全治せりと吹聽し、患者自身も、かく信じて疑はず、玆に於てか非醫者は得意となつて之れを宣傳し、廣告して、盛んに、自己吹聽の火の手を揚げ、患者は盛に禮狀などを送つて、之に油を注ぐが故に、一犬虛を吠へて萬犬實を告ぐの諺に漏れず、所謂目明千人、目暗千人の世の中なれば、遂に天下を騷がすが如き「靈覺者」とか「神人」とかの出現するに至る場合が多いのであらうと思はれる。

此種の非醫者の多くは、現代的醫學の基礎を爲せる、解剖、生理、病理、醫化學等に關する正確なる智識無きが故に、吾々の如き醫者が此等の學問に基きて、命名したる病名と彼等の所謂病氣とは必ずしも一致すべき筈なきのみならず、殆ど全然別個の見解の上に立たざるべからざるものなるに拘はらず、吾々醫者の命名したる病名を平然として使用し、某は肺結核であつたが全治したとか、某は胃癌であつたが根治した、などと大言壯語して居る。此事だけでも、既に不合理であり、僭越である。現代醫學を修得したものでさへも此等の病名を確實に附する爲めには、結核菌を證明したり、組織標本を作つて病的變化を十分研究した後の事であつて然らざる限りは經驗上より得たる推

定的病名に過ぎぬのであるから、內科的、臨床的に病名を附した患者の死んだ場合一々之れを解剖して見る時は生前の病名の正確でない事が隨分多いものである。それ故現代醫學の素養無き非醫者が勝手に名くる病名が正確であるべき筈の無い事は見易き道理である。

看護婦又は醫者の書生でも長く勤めて、見慣れ聞慣れに多少、現代醫學の素養あるもの、又は、獸醫出身の非醫者などは、幾分適當したる、病名を附する資格があるであらうが、全く醫學の素養なき軍人とか、僧侶とか、神職とか、其他官吏出身の非醫者などに現代醫學的病名を附するの資格なき事は明かである。其無資格者、無能力者が、肺結核とか胃癌とか命名し置きながら、偶々其病人が治癒したからとて「現代醫學に於ては難治又は不治と稱せらるゝ結核、癌さへも我が靈術を行はゞ忽ちに全快する」と宣傳するに至りては寧ろ滑稽といふの外は無い。

一概に非醫者と云へば、此名稱を以て輕蔑したものゝ如く憤る人々があるかも知れぬが決してさうではない、非醫者の中にはイエスや釋尊の如き偉人もあるであらう。前にも云へる如く所謂醫師にあらずして病者を醫するものを非醫者と呼んだのであるから、大宗教家が信仰の力に依つて病者を醫し、家傳の祕法、祕術等によりて、或種の疾患を治するが如き事は、予も亦あり得ざる事では無いと信じて居る。何か精神上の不安又は悶への爲めに或は不眠に陷り、又は食慾進まず、漸次身體も衰弱して、種々の肉體的疾患を起したる場合の如きは必ずしも醫師を煩はすの必要は無い。先づ第一に精神上の不安と煩悶とを取り去る事が治病の第一義である。其不安と煩悶とは果して何によつて起つたかを先づ調べねばならぬ。若し其患者自身信仰の足らざる爲めであつたなれば、宗教的先覺者の助けに依つて、信仰を起さしむるも適法であらう。若し金錢に窮して居た爲めであつたなれば、金錢を與へるもよからう、兎も角先づ其患者の精神上に大滿足を與へさへすれば自ら不眠を去り、食慾は進み、全身從つて元氣回復すべきである、金に窮せる者に金を與ふる事も滿足せしむる一法ではあるが、金に執着あればこそ、金無き場合、煩悶を起すのであるから金に對する執着の不可なる所以を覺らしむる事も、彼れに滿足を與ふべき一法であると云はねばならぬ。

此の如き患者に對する治法は、まだ外にもある。肉體の衰弱する直接の原因は不眠と食慾不進であるから、所謂、睡眠藥を用ゐて睡眠を促し、消化藥に刺戟劑でも加味して食慾を亢進せしむる事にすれば、それでも一定度まで、快方に向はしむる事

は出來る、現代醫學の療法は先以て、之れに類したものである。現代醫學的療法の大部分は所謂對症療法であつて、原因的根本療法では無い、それ故疼痛に對しては、鎭痛劑を、高熱に對しては、解熱劑を、不眠に對しては睡眠劑を、秘結に對しては下劑を、下痢に對しては、止痢劑を與ふる場合が多い。併し如斯、所謂、對症的療法にても之れを加へずして、放任するよりも、加へたる方が自然の良能を補けて、治癒に導くべきを知るが故に、吾々醫者は敢て之れを行ひつゝあるわけである。

唯、一、二、の特別の疾病に對しては、眞に原因的根本療法であると云ひ得る場合がある。前にも云ふた通り「マラリヤ」に對する「キニーネ」「アメーバ」に對する「エメチン」の如きは其適例である。詳く云へばまだ他にもある。尙醫學の進歩するに從つて此種の療法は、まだ〳〵進歩する事であると信ずる。即病氣の原因が眞に外來の細菌又は原蟲などのみである場合には、吾々の身體を害する事なしに、それ等の生物をのみ殺害し得る特種の療法をさへ發見すれば目的を達し得るのであるから、此れは學者の努力と時の經過とに任せて置けば可能であると思はれる。併し其他の疾病殊に吾人の心的狀態と、關係密なる疾病に至りては所謂現代的醫學が如何に進歩したからと云ふて、之れを根治し得べき見込みが乏しい樣である、即ち非醫者療法の乘ずべき餘地は玆にあるのであると、予は信じて居る。

吾々醫者の疾病觀は差別的即分析的見地に立脚し非醫者の疾病觀は、平等的即歸一的見地に立脚して居る、即ち吾々は一疾病毎に其療法を異にするが常なるも非醫者は萬病を一法によつて治癒せしめんとする傾向を持つて居る、何となれば非醫者の多くは吾々の肉體は靈力によつて支配せられて居るものであるから、靈力旺盛なれば肉體も亦强壯であり、靈力衰ふれば肉體も亦弱はる、從つて、病氣を起すと見て居るのであるから、肉體の强健を欲すれば先づ靈力を旺盛にせねばならぬ。肉體の病氣を醫する爲めには先づ衰へたる靈力を補はねばならぬと主張するのである。

而して其靈力を補つたり靈力に活氣を加へる方法に種々の形式がある。例へば靈子療法は術者の指端より火花が飛ぶが如くに所謂靈子なるものが發散して被術者の身體に移行し其作用によりて疾病は治癒し、健康は增進すると說明し尙此靈子には、吾々醫者の云ふ細菌、原蟲をも殺す力があると云ふて居る。所謂轉精療法の主張者も彼れの指端より發する不思議の力によりて萬病が治癒すると宣傳して居る。其外此れに類した術者は、東京丈けにも百人以上あつて各々一派を稱へ夫々相當の門弟を

有し彼等は地方に出張して各々師の道を傳へ、此亦相當に繁昌して居ると云ふ事である。又何たる聖代の盛事であらう。

是等數多の非醫者の中には相當の人格者もあり、又特殊の技能と數多の經驗とを有する人々もあつて、一定の疾病に對しては確かに現代醫學者の未だ及ばざる靈驗を現はし居るならんも唯一、二特殊の病氣にて而かも、醫科大學の博士、大家も匙を投げたと云ふ様な病人が治癒したからと云ふて、其以外の萬病も悉く同一方法によつて治癒し得るものと過信したり又實は自分にも確信なけれど一山張つて見ようと云う様な山師根性を起して、大々的宣傳、廣告を爲して、不治又は難治の疾病になやみ悶へ、心の迷ひつゝある可憐の人々を喰物に爲して居るものも少くない事であらうと思はれる。

予は年來非醫者的療法に就ては興味を持つて居るから日本に於けるものは、素より歐米に於けるものをも、機會ある毎に多少研究して居る。即予は唯無暗に非醫者を排斥せんとするものではなくて寧ろ其同情者であり、保護者である。併し予は未だ自ら現代醫學の窮極を極めて居らざると同じやうに、非醫者の全部を研究調査しては居らぬ事であるから、何處までも唯眞面目なる態度を以つて出來得る丈け、公平に醫者と非醫者との兩方面を比較研究した上、何れにても眞に事實上疾病治療に効果ある方法を選擇して實地に活用したいと云ふ者を以て居るのである。

轉精療院にも陸軍將校が多い、靈子療法にも、大本教にも、陸海軍の出身者が多い。何故であらうか。一々數へ立つれは非醫者の數は實に多くて、日本各地に夫々相當の勢力を持つて居る。即之れを信じて居るものが頗る多いのである。而かも其治病的方面に於ては、未だ醫者として充分に其眞價を承認し得べきものが少ないやうである。事實上から天下に蔓延して治病及風致上に大なる關係を持つて居る此等非醫者に對する政府の取締は果して如何であるか、此れも大いに考慮を要すべき問題であると思ふ。

吾々普通の醫者は醫師法によりて嚴重に總ての行爲が取締られて居るけれども、非醫者は病人を治療すると云ふ點に於ては、醫者と同樣なるに拘らず、普通醫者の使用するが如き醫藥又は醫療器を使用せず又醫師免許狀を有せざるが故に醫師法によりては何等の取締りを受けず、僅かに催眠術取締法なるものは制定せられしも未だ以上予の摘發したるが如き種類の非醫者を取締るべき法律なきを以て、國法を以て制限せられざる行爲は何を爲すも自由である事は憲法によりて與へられたる自由の權利内にあるから國民として自由勝手に行ひ得るのみでなく、

非醫者に對しては、特別の税金も課せざるに、病人よりの料金、往診料、傳授料等は非醫者勝手に之れを規定して隨時徴集して居るのである、それ故、不景氣で思想の動搖が甚しくて人心に一定した落着きのない現今の如き時代に於ては非醫者的療法の類は最も時代に適したる職業であると云はねばならぬ。近代殊に猫も杓子も此方面の修業に志し、慾と悪魔とを「神人」の衣で飾り、臆面もなく世間を往來して居る人間が實に多い樣である、それ故若し今にして政府者が之れを取締るべき特別の方法を設くるにあらざれば、害毒を社會に及ぼす事は明らかであると思ふ。

然るに政府者の或者は曰く、「お前の考へて居る位の事は、最前考へて居るのであるが何分靈とか精神とか云ふ事に關係して居るから中々取締りの方法が困難である、物質科學に基ける醫師の療法に對しては、夫々科學的に之を研究、調査して時々檢査なども行ひ、合理的に之れを取締るべき方法もあれど醫藥とか特別の器具、器械を使用せざる非醫者的療法に對しては、正確に之れを取締るべき方法がないから不得已放任してあるのである」と。又或は曰く「現代的醫學療法なるものも決して徹底的のものでは無く、幾多醫療を受けても、治癒せざる病人が澤山にあるに拘らず、其病人を所謂非醫者に連れ行きて治療を受けしむれば、其理由の如何は別として事實上治癒するものが多あるから、絶對に非醫者的療法を禁止して唯醫者にのみ、賴つて居たなれば、助かるべき病人をも空しく見殺しにせねばならぬ場合がある、それ故官憲の力を以て無下に非醫者を禁止するわけには行かぬ」と。一應皆御尤もの御說であつて、予も之れに對して絶對的に反對すべき理由を持たぬ、素より所謂非醫者中には、前にも既に述べた通り、事實上醫者の見放した病人を治癒せしめ得る者又は少くとも輕快せしむる丈けの能力を有して居る人があるのであらうと、予も認めて居る一人であるから、官憲に對して、非醫者全部を禁止せよと云ふのではない。近時盛んに續出する非醫者中には事實上病人を治癒せしむる丈けの能力を有せざるものが多數ある事と信ずるが故に政府者は何とか一定した取締法を設けて事實上病人を治癒せしめ得べきものに對しては、之れを保護奬勵して益々研究發達せしむると共に、實際病人を治癒せしむる丈けの能力無きものに對しては一般的治療を禁止し、大學病院其他政府監督の一定所に於てのみ研究せしむる事にすれば徒らに能力者を抑壓すると云ふ非難を受くる事なくして非醫者の弊害を取締る事が出來るであらうと思ふ。

予は試みに非醫者取締法の要點を左に略述して見やう。」

非醫者取締法要點

一、政府は政府當事者及帝國大學教授を以て非醫者取締調査委員會なるものを組織する事、

二、醫師免許狀を所持せずして病人を治療せんとする者（予の所謂非醫者）は其住所、氏名、治術方法の大要を記し、政府に屆出でしむる事、

三、前項屆出人に對し政府は第一項の調査委員會に命じ治病上果して屆出人の主張するが如き、實効あるものか否かを調査せしむる事、但し調査の方法としては此會に於ては治療法の原理を學術的に研究調査するにあらずして、先づ大學附屬醫院の患者を提供して一定期間治療せしめ、實際上の効果の有無を檢せしめ、其實効ある者に對しては、公然許可を與へ、實効なきものに對しては之れを禁止するを可とす、

非醫者を取締らねばならぬ事は以上述べた通りであるが非醫者療法が斯くまでに廣く深く社會の角々まで蔓延して蔑るべからざる實勢力を持つに至つたと云ふ事に對しては吾々醫師も社會に對して、責任の一部を負擔せねばならぬであらうと思ふ。少くとも現代的醫學の缺陷が那邊にあるかを反省して見ねばならぬ事であると思ふ。昔の醫學は「病は氣から」と云ふ點に重きを置き、氣を養ふことは體を強くする事であると考へて居たのであるから、肉體が衰へたり病氣に罹ると云ふ事は即ち氣が衰へ、氣が病んで居る結果であると信じたのである、從つて治病の第一義は先づ氣を引き立てる事であつた。氣とは即ち精神である、心である。昔の人は氣を練り心を磨くことに努めた。即精神修養を保健の第一義として居つた、それ故不健康であると云ふ事、病氣をすると云ふ事は精神修養の足らざる證據であると爲したものである。刀で切られて、痛いと感じ、火に燒かれて熱いと感ずるさへも未だ氣の弱い爲であると稱して我慢に我慢を爲さしむることに習慣づけたものである。習慣とか、鍛錬とか云ふものは、實に驚くべきもので、此樣な修業を重ぬる時には遂に普通の人間なれば痛い程度のものをも事實痛いと感ぜざるに至るのである。其他の病氣にしても、所謂氣の強い人と、氣の弱い人との間には其經過とか豫後とかの上に非常な差のあるものであるのは事實である、又同じものを喰べた場合でも全く平氣で喰べた時と、此れを喰べたら下痢でも起しはせぬかと心配しながら喰べた時と、人は何と云つても自分には決して障らぬと云ふ確信を以て喰べた時とを比較して見れば、其結果には大々相違があるものである。人間は感情の動物であつて精神作用の鋭敏なる生物であるから、試驗管内に於ける化學的變化

や、下等動物の體内に於ける生物學的變化などゝ同一な變化が人間の體内に於ても常に起るものであると考へるのは誤りである。然るに現代醫學の研究方針は物理化學の法則が其礎となり、これに動物實驗によつて得たる事實を有力なる參考資料として人間の生理、病理を研究して居るのであるから、知らず〳〵人間を動物的に考へ、動物的に取扱ふ傾向となり、人間特有の精神作用を或は度外視し、又は邪魔物視するに至り、人間をして、可成動物的ならしめんことを希望するが如き形勢がありはせぬかと思はれる。即試驗管内に於て此藥物と此藥物とを加へる時は如斯反應が起るから 人間の體内に於ても斯くあるならん、動物實驗に於て斯々なるが故に人體に於ても斯々なるべし、と學界の權威と信ぜられて居る獨逸の學者でもが一度發表する時は、彼れを崇拜する日本の學者は忽ちに之に雷同して、斯々なり、斯々ならざるべからずと宣傳する。宣傳に動かされ易き人間はこれを事實であり、眞理であると信ずるが故に人間特有の精神作用は可成之れを除外して、下等動物に類したる態度を取り、下等動物に起りたると同樣の現象の起るを見て滿足するが如き傾向あるにはあらずやと疑はるゝ點がある。所謂現代的實驗醫學の發達が隆盛となり一般人類が之れを信ずるの度合が高まれば高まる丈人心は益々此方向に傾き末枝末葉に渉りたる智識は大に發達するかも知れぬが人間の靈的方向は徒らに複雜なる枝葉に屬する智識のみ發展して、人間は漸次動物化するであらうと思はれる。成程醫學は日進月歩であつて昔に比すれば枝葉の末技に關する研究は大に進歩して來たけれども徒らに複雜になつたばかりで治病學上の根本義に至つては大した進歩を認めることが出來ぬ。之れに反して現代醫學思想の發達と共に却つて弱者、病者の數は增して來た樣である、何となれば元々の原因や誘因は同一であつても其故障の現はるゝ場所は澤山あるのであるから、其原因や誘因に依てのみ病名を附するのと、其故障の現はれた部分々々に從つて病名を附けるのとでは數に於ては非常の相違が出來るからである。

今日では神經衰弱「ヒステリー」を初め苟しくも所謂氣の弱き爲、又は氣力の衰へた爲に起る病氣でも、頭痛・目舞・胃弱(消化不良) 腹痛等其部位と症狀との異るに從つて夫々異つた病名のあるに拘らず、昔は氣の病」の一語に包括して居つたのである。從つて氣を強くすれば病氣も癒へ、健康も增進すると信ぜられたのであるが。今日では病氣の現はれてゐる身體の部分々々に病氣の原因も存在して居るものゝ如く考へる人が多いから日常の注意も局所的となり、胃が悪い時には粥でも食べてをれば頭を使ふ事や睡眠不足などは直接影響のないもの

ゝ如く考へて居る連中もある。甚しきに至つては烟草は止められぬが咳嗽だけは止めて異れよとか、酒は飲んでも胃病だけは起らぬ様にして異れよとか云ふ人さへもある。即ち病氣の起る源を直さずして病氣其のものだけを、直さうと希望する人々が多い、如斯思想が吾々一般の頭を支配するに至れば、所謂衛生思想が幾等發達しても、幾等醫學が進歩しても、唯徒らに、局所的、末葉的に流れて、根本に觸れないから、病者及弱者は益々增加するのみである。今日の醫學者の多くは所謂末葉の學には秀でゝ居ても其根本義を忘却して居るから、所謂非醫者をして現代醫學に對して鼎の輕重を論ぜしむるに至つたのであると思はれる。今日の若き博士連中の所謂臨床大家などの中には、肺結核の初期位の患者を診察した時にも、直ちに之れを殆んど不治の病と斷定して、正直にも、患者に直接其旨を告げ、且曰く、唯藥だけ飲んでも最早や利目はないから藥は與へぬから速に轉地でもするがよからう、グツ／＼して居れば一年内に死ぬるぞ、などと放言する人ありと聞く、此博士の診斷は之れを學術的に見れば決して誤りで無く其患者の實狀は其博士の言の通りであるかも知れぬが、併し此の博士は醫學丈けは知つてゐるが人生の何たるかを知らぬ若者であると云はねばならぬ。何となれば人生僅か五十年、七十は古來稀なり、と云ふにあらずや　されば吾人生を此世に享くると同時に、五十年乃至七十年後には必ず死ぬと定まつてゐる人生を六十を過ぎ七十になつても易者か醫者にか依つて死期を豫言せらるゝ迄はマダ何年でも生き得る者のゝ如き希望を以つて、其日／＼の生存を續けて行く所に人間味は存して居るのであると思はれる。果して之れが人生であるとすれば、七十を越へた人間に對して、御前は一、二年の後には死ぬるのであるから、今から何にも食べないで、靜かに死期を待つて居たらよからうといふ事と、診斷の結果、お前は肺病であつて一年の内には死ぬるから、最早藥を飲む必要のないといふ事とは全く同意義であらねばならぬ。兩者共、理論上には大過ないかも知れぬが人情味を缺いて居ると思ふ。吾々醫者としては、唯誤りなく病氣を診斷する丈けでは駄目である（誤診は尙一層駄目であるが）假令病氣其のものを癒し得ずとも病人だけは癒す技能がなくてはならぬ（病氣も病人も同時に癒し得れば此上なし）例へば一患者を診察した場合、其病人は到底不治であると認めても、直接患者に其事實を告げてはならぬ、患者には自ら悟らざる限りは死の間際に至る迄も可成死を知らしめず慰安と元氣とを與へる事に努力せねばならぬ。但し患者の家族又は近親等には早くから警告して居く事が肝要である。實際死期の迫つてゐる患者を診察しながら、それを知らざりし僞に

大丈夫ですと明言して置き其後一日も立たぬ中に死んだといふのでは感心出來ぬが、事實時期を知りながらも患者の落膽を防ぐ爲めに之れを患者に秘して近親に注意して置くと言ふ事は實地醫家に取りて最も大切なことであると、予は信じて居る。現代醫學者中には病氣を癒しながら、病人を癒し能はざる人と、病氣も病人も共に癒し能はざる人が多い樣であるけれ共、昔の名醫と云はるゝ人や現今の非醫者中には、病氣は癒し得ずとも病人を癒す人と病人を先づ癒す事に依つて病氣をも癒す人々がある樣に思はれる。昔或名醫があつて其人に見て貰へば癒ると云ふ評判が立つた、或日老人が一人の青年を連れて來て「此男には別に惡い點はなけれど夜になると盜みを働く病氣があるので實に困つて居る、名醫樣ドウゾ此病氣を癒す藥を貰ひ度い」と懇願した。サスガの名醫も此れに一寸困つたけれども、現代の博士達とは大に違つたところがあるので早速何か藥を調合して與へた。老人は大喜びで歸つた。不審に堪へないのは之を見て居つた。數多の弟子共である。先生は如何に名醫とは云へ盜賊の癒る藥を持て居らるゝ筈はないと恐る〳〵質問に及んだ。すると、名醫は「乃公も一寸困つたなれど折角自分を信頼して來たものを、そんな藥はないと斷つては老人の失望思ひやられたから不敢取 咳の出る藥を與へて置いた 夜アノ藥を飲めば咳が盛に出る、咳が多く出ては盜みの妨となる、自然盜みも出來ぬことになるではないか」と答へたといふ事である。誠に至言であると思ふ。現代醫家殊に臨床家には常に如斯心懸けが必要である。

吾人は一面非醫者の不都合なる點は飽く迄之れを糾彈すると共に、一面又、吾々現代的醫者の缺陷を研究して大いに反省する事が肝要であると信ずるものである。敢て予の思ふ所を述べて識者の教を待つ次第である。(完)

「競爭」の倫理と「協同」の倫理

――現代生活を象徴する二大思潮の考察――

一條忠衛

一　現代生活の二大特色

吾々の營む現代生活には色々な特色がある。その諸相を一々列擧したならば數限りもないことになるが、常にそれ等の中心となり根柢となつてこの現代生活を支配して居るものに二種の要因がある。これ等が現代生活の基本樣式となつて、現代人の全部が意識的にも又た無意識的にもその豫定の行動を續けて居るものである。それは競爭といふことゝ協同といふ事である。この二種の行爲は現代人の生活の上に兩極端に開展されて、各人の生活態度を特定するので、或者は競爭を以て自己の生活の唯一樣式と心得て居り、或者は共同を以て自己の生活の唯一樣式と心得て居る。その結果は玆に現代のやうな形の社會狀態を釀成するに至つた。

試に現代社會を一瞥すれば、そこには明に二箇の流儀に依つて色取られた別々な人間の存在することに思ひ附くのである。第一種の人間は競爭といふ觀念に由つて頭が固められてゐるので、何事でも人と爭つて勝利の榮冠を贏ち得ることを以て生活の本體と心得て居る。この種の人は爭ふことが好きであり、動もすれば人と爭ひたがる。人と爭はずには無聊で一刻も居られないと云ふ性質がある。爭ふことが本能となり、衝動になつて居る。隨つて人と爭ふことは人間の本性であり、勝つことが社會生活の原則であると信ずるに至り、負けることは非常な屈辱であると感じ、この上も無い不幸の運命であると思つて居る。それで勝たんが爲めに爭ひ、爭はんが爲めに事を構ひ、色々な準備と策略に腐心して、人の機先を制し鼻をあかすことを以て現代生活の眞相と解して居る。だから此の種の人は人と協

同して事を爲すことを好まない。それが大嫌ひであり、思ひも寄らぬ馬鹿げた眞似であり、全く無用の沙汰と考へて居る。唯だこの種の人々は自己の競爭の爲めに此の協同が有益な場合には、何時でも共同した形になつて居るが、それが不利益な場合には何時でも競爭に復歸するのが特徴になつて居る。それで第一種の生活樣式は結局、競爭を第一義としてそれに協同を加味した生活であつて、一種の矛盾生活に陷つて居るのが著しい特色である。

然るに第二種の人間はこれとは全く異る流儀の生活を營んで居る。この種の人は何事でも他人と力を協せて爲さうとする。協同といふ感念が根强く頭に出來上つて居て、人と一緒に事を爲すのでなければ滿足しない。單獨で仕事をすると云ふことは絶對に不可能であり、堪えられぬ苦痛であると心得て居る。それでこの種の人は衷心から人を使つて協同することが好きであり、それが本能となり衝動となつ居てる。隨つて人と力を協はせ事を共に行ふと云ふことは人間の本質であるとも感じ、單獨といふことは社會生活の原則に反するものであると信ずるに至り、人と協同しないと云ふことは非常な不合理な事柄に思ひ、仲間外れになつて孤立することはこの上もない不幸の運命であると考へて居る。それで人に便らんが爲めに協同し、協同せんが爲めに人の力を必要とし、萬人の協同行爲を以て現代生活の眞相と解して居る。だから此の種の人は人と爭ふことを好まない。それが大嫌ひであり、思ひも寄らぬ馬鹿げた行爲であり、全く無用の沙汰として考へて居る。唯だこの種の人々は協同の爲めに競爭が有益な場合には、敢て競爭することを辭さないのである、それは共同を成就する爲めの競爭として善意に解して居るのが特徴である。それでこの第二種の生活樣式は結局、協同を第一義としてそれに競爭を加味した生活であつて、これも一種の矛盾生活に陷つて居るのがその著しい特色である。

斯樣に現代生活には競爭を本位としてそれに便宜な場合には協同を取り入れて、その競爭の根本目的を貫徹しようとする樣式と、協同を本位としてそれに便宜な場合には競爭を取り入れて、その協同の根本目的を貫徹しやうとする樣式と二通りあることが理解される。その結果は何ういふことになるかと云ふに、この現代生活が二つに分れて競爭生活と協同生活との對立になり、何れも自己の生活目的の爲めに他の一方の生活目的を便宜に供した生活樣式を發揮して、全く異なる二種の世界をこの同一な社會の上に作らうと試みることになる。それが爲めに現代の社會には非常な混亂と紛糾とを生じ、全部の人間が悉く矛盾の生活に陷ることになる。第一の生活樣式に走つて見ても

第二の生活様式に走つて見ても、それは同様であつて、大なる不安の裡に捲き込まれながら、生き甲斐のある生活様式を暗中に模索して居る有様である。現代人の思想が混亂し動搖して、そこに統一を缺き、確信を失ひ、滿足も感謝も無く、毫も光明を見出し得ないのは全くその結果である。

この現代生活の失敗は如何なる原因に由來して居るかといふに、現代人の奉じて居る生活様式に對する倫理的反省が足りない結果である。競爭と謂ひ協同と謂ふ吾人の行爲に對する道德的批判の思索が餘りに不明確であり無責任である爲である。競爭といふことは善いことであるか惡いことであるか、協同といふことは善い事であるか惡いことであるか、それ等は人間の生活に利益を與へてゐるか弊害を生じて居るか。これは人生の大問題である。然るに現代生活の傳統的様式者はこの問題に關する倫理的意義を探求することを忘れてゐる。若し競爭や協同が善であり人間の生活に利益を與へて居るならばこれを奬勵しなければならぬが、若しこれが惡であり弊害を及ぼして居るならば、その缺陷を修理する倫理的價値の工夫を講じなければならぬが、現代生活の特定様式に色取られて居る人々の間には、それに對する要求が甚だ稀薄である。これが現代人の思想を今日のやうな形式のものに頽落させた原因であつて、混亂せる社會生活の桎梏に惱まされながら、政治や經濟や法律といふやうな刃物三昧で切り取らうとして、却つて互に傷け合つて居る次第である。これは現代人に取つて大なる誤解であり非常なる迷妄であるから、吾々はこれを倫理的に反省して健全なる自覺を求めて、その出發點を新にすることが肝腎である。

二　競爭の善的方面

先づ競爭といふことから考察するに、これには果して長所といふものがあるか。この競爭なるものは人間の生活に善い、利を與へて居るだらうか。遠く人間の歷史を按ずるに、人類が他の動物を凌駕して今日まで發達して來たのは確に競爭の結果であつた。即ち生存競爭に於て適者となつて存續した爲めであつて、自然淘汰の事實は隱れもない證據である。人類が手の働きに於て、頭の働きに於て、一段他の動物に秀でて自然界を利用し制御した爲めに、彼等との競爭に打ち勝つて萬物の靈長となつたのは、優勝劣敗の事實として否定することの出來ない事柄である。この意味に於て進化論が競爭の價値を認めるのは大なる眞理である。人間に競爭心がなく手の働きや頭の働きに於て他の動物に劣つて居たならば、到底今日のやうな萬物の靈長たる地位に進めなかつたことは疑のないことである。人間が現在

の地位を贏ち得て自ら萬物の靈長を以て任じ、正義人道を說き、人格品性を重んずるに至つたのは、全くこの生存競爭に於て他の動物を征服して、その適者の月桂冠を得た賜であつた。斯樣にして人類の文化といふものは動物に對する弱肉强食によつて作られ、その優者の歷史によつて編まれたのである。これは人類と他の動物との間に生じた競爭の利益であつた。

それから世界の歷史を見るに、人類五千年來の有史社會は實に競爭の歷史であつた。それは一面に於ては人種の反目であり、同族の騷動であり、階級の鬪爭であり、封建藩閥の確執であつたが、他面に於ては能力の爭となつて學術技藝を發達させた。つまり人間同胞の中に生存競爭が行はれたが、その間に能力が發揮されて諸種の文化が生産したのである。その中で最も尊いものは人間が個人の自覺に達したことであつた。以前は全く野獸と同樣に本能的に生存競爭して居たので、單に敵の勢力を挫き、その財物を掠め、その生命を絕つのが目的であつて、自己の能力をその要求の上に發達させた。然るにその結果は優勝者と劣敗者との階級を生じて、一方は一方の自由を束縛して、その能力の發達を阻止するに至つた。所が人智の進歩はこの專制武斷な厭制を免れて、個人の自由を解放してその能力を發揮することを工夫した。それは個人の自由を束縛せずにその能力を思ふ存分に啓發させる事であつた。そこで從來の野獸的生存競爭は其形を替へて、個人の自由を束縛せずにその能力を發揮する競爭となつた。それが即ち生物界に行はれる生存競爭原理を道德的に改造したので、自由競爭と稱せられるものである。そしてこれは個人主義及び自由主義の信條を爲すに至つたのである。

人間がその能力を十分に發達させるには、個人の自由を認めなければならぬことは最も明な道理である。個人の自由を認めれば競走は任意に行はれるので、個人の獨創力が他人の干涉を受けずに進取活潑な精神に由つて開發されるのである。そこで人間には責任心が生じ、獨立自營の精神が起きて來る。他人に依賴して爲すのでは無くて、自分の實力に依賴して正々堂々と競爭して、その目的物を獲得しようと欲するやうになる。從つて內省が行はれ、思索が續けられ、意匠が工夫され、創作が生れるのである。そこには智慧と勇氣と忍耐と勤儉と敏捷とが發揮される。その結果として個人の生産能率が增加して、競走の目的物を容易に取得することが出來る。從つてその社會には奮鬪努力の精神が高まり、獨立自存の人が多くなる。そして眼前の利益に血迷つて奇捷を漁ることなしに、合理的に自利を圖り永遠の利益に向つて競走するやうになる。そこでその社會の人間は各自の天分に從つて最も得意な方面に向つて、己の能力に

適切な業務に從事するので、その發達は著しいものとなり、且つ競爭によつて一層精錬されて偉大なる國民的成功を遂げることになる。殊に分業は自由競爭によつて個人の天賦の能力を傾倒する爲めにます／＼發達して、學術技藝は堂奥に入り精巧を極め、經濟的貨物は廉價となり需用の任を果せるものとなる。

斯樣に競爭の利益は莫大なものである。世界は實に文化の競爭場裏である。人性に固有する諸能力を開發することを競爭して居る。善は惡と戰ひ、靈は肉と爭ふ。國民の間には個人の競爭となり、國家の間に於ては國際の競爭となる。政治、法律、經濟、道德、科學、哲學、文藝、美術、音樂、體育等凡らゆる文化は、この地球上に於て日進月歩の勢で競爭されて居る。それが爲めに互に眞理を競ひ、修養を爭ふ。奮鬪努力は到る處に行はれ、獨立自存の精神は萬人を鼓舞して居る。智慧ある者は勝つて愚昧な者は負ける。勇氣のある者は勝つて卑怯な者は負ける。忍耐心の强い者は勝つて厭き易い者は負ける。勤儉の志に富む者は勝つて懶けて來る者は負ける。敏捷に立ち廻る者は勝つてのらくらして居る者は負ける。正直な者は勝つて不正直な者は負ける。これは實に天の理數であつて、競爭なるものがその根柢に於て人道的意義を有して、優勝劣敗の賞罰が覿面に與へられる結果である。そしてこれは個人主義自由主義の長所であつて、アダム・スミス、ベンザム、ミル、スペンサー、シヂウヰツク等が倫理上より極力提唱したものであつて、英米のアングロサクソン民族の社會がこれを實行して見て始めて今日の効果を奏し、個人の能力に於て又は國家の能力に於て著しい發達を遂げた近因である。

三　競爭の惡的方面

前述の如く競爭といふものには確に善い點があり、人間の生活に利益を與へて居る所がある。けれどもその裏面には非常なる弊害を伴つて居る。先づ自由競爭に於て個人の自由を認めてその天賦の能力を發揮することは甚だ結構であるが、それを公平に行ふには如何なる手段に據るか。若し平等的個人主義のやうに個人を心理的快樂の上から平等であると假定するならば誤つて居る。個人の能力は人格の普遍性に於ては平等な形式を有するが、その特殊性に於ては個人差律があつて百人百樣の內容を有して居る。先づ遺傳に於て異り、性格に於て異り、能力に於て異なり、教育に於て異り、欲望に於て異り、財產又は社會的境遇に於て異り、或は健康に於て異つて居る。斯樣な特殊性を有する個人が集まつて形成して居る社會に於て、個人の自由といふものは果して平等に發揮されるか何うか。或者はその自由

を發揮するに都合が好かつた爲めに一躍して優者となり、或者は都合が惡かつた爲めに爭はずして敗者となることが必ずあると見なければならない。それで平等的個人主義では自由競爭を公平に行はせることは覺束ない。隨つてその求める所の最大多數の最大幸福は反つて或者の利己的幸福を助成するの結果を招ぐのである。そこでその點を何とかして改造しなければ、競爭は人間の生活に大なる弊害を與へるものになる。

次に自由競爭を動物の生存競爭から歸納して進化論的個人主義に道德化した場合に、個人の自由が何ものにも束縛されること無しに、公平無私の間に發揮されるか何うか。それが依然として動物の生存競爭に於ける野獸性を發揮することが無いか何うか。自然淘汰の法則をそのまゝ是認して優勝劣敗を必然の道理と考へて、その人間の社會は優者の社會であつて劣敗者の社會でないと解すれば、自由競爭は強者の爲めには都合よいが弱者の爲めには甚だしく不都合なものになる。自由競爭が個人の自由を擁護してその能力を公平に發揮させる方法であるとすれば、弱者でもこれを庇護してその能力を發揮させて遣らなければならぬ道理になるので、これを犧牲に供して顧みぬことになればそれは個人主義に反する不公平な行爲になる。人格は何人に於ても普遍的に平等なものである。縱令特殊的に個人差違があるとしてもこれを個人の自由によつて實現するのが本務であるから、或者が自己の人格を實現する爲に他人の人格を手段方便として蹂躙するを以て公平であると解することは出來ない。

殊に人間には利己心といふものがあるから、上述の如き趣意の自由競爭に於てはこれが極端に發揮されて、自己の利益の爲に公益を無視する結果を生ずるので、私欲貪婪の社會を呈出する。單に競爭に勝ちたい一念から手段を選ばぬ行動に墮する傾向がある。そこで成功熱を煽り、奸智と陋劣と慘酷とが社會に行はれて來る。初は出來るだけ非難を免れる方法で隱密の間に行つて居るが、最後には必勝を期する爲めに露骨な手段を用ひる。そしてこれが世界の文化競爭の全局に亘つて普及される傾向がある。外交に於ては權謀術數となり、内地に於ては政權の爭奪となり、國民經濟に於ては貧富の階級鬪爭となり、學術技藝に於ては剽竊又は賣名となり、一切を擧げて人間をして奸智に長けさせ、僞善を獎勵し、人格を下劣ならしめる結果を呈する。殊にこれが物質的生活の上に遺憾なく發揮されるので、その生産に於ては亂雜な企業熱となり、投機熱となり、粗製濫造となり、卑劣な廣告戰となり、勞働者の爭議となり、遂に資本主義に化して勞働問題を惹起する。一方では農村の地主が土地を併合して止まないので、小作問題を惹起すると共に、多數の

人民は都會に蝟集して住宅問題を惹起し、都會の地主と家主をして貪欲飽くなき不生産的人間たらしめるのである。

その結果は遂に有産階級は自由競爭の勝利者となり、無産階級は劣敗者となるので、一方は個人の能力を自由に發揮することが出來ても、一方はこれを發揮することの出來ない境遇に陷る。そこで最大多數の人民には生活難が起き、教育が低下し、不衞生となり、智德が共に退步するやうになる。その結果は個人の智慧、勇氣、忍耐、勤儉、敏捷の諸德が衰へて奮鬪努力の精神がなくなり、獨立自存の風が失せて來る。幾ら正直に働いて居ても、効果がなく、反つて生活難は益々甚だしくなつて行くのに、一方に於ては狡猾な手段により不正直な眞似をして居ても饒かな生活に向いて行くものとすれば、道德觀念は全く倒產してその價値を失ふやうになるので、世道人心はいよ〳〵險惡になつて行くばかりである。殺人强盜も自ら起り、不逞無賴の徒も增加する譯である。そして此等の惡質者の子孫が激增して優良種の子孫が段々減つて行く。その結果として國民の能率が減退して生産が衰へ、有産階級も間接に自滅する現象を招くのである。又一方では無産階級に不平不滿を誘發して過激化し、暴力革命を夢想させるも必然である。これ等は全く個人主義に於ける自由競爭の惡果であつて、免れ難い自然の成行である。

斯樣に自由競爭が利己心の上に行はれるやうになれば、それが平等的個人主義であるにしても進化的個人主義であるにしても、個人の自由といふものが公平に行はれずに個人の能力は自己本位に發揮される。その結果は萬人に共通な個人の自由を自己の目的に使用して、自己の能力を發揮する爲めに他人の能力の發揮を束縛することになる。その爲めに競爭は依然として動物の生存競爭の域を脫しないものになる。縱令それが道德の觀念によつて理想化される結果として動物のやうに相搏つて嚙み合ふことは免れるとしても、甲の自己本位の爲めに乙がその自由を奪はれ、悲慘なる境遇に沈淪してその能力の發揮を遮斷されるやうでは、その精神も肉體も自然に退步して種族の消滅を招ぐに至るからして、これは動物が間接に嚙合つて一方を斃す行爲に外ならない。これでは個人の覺醒以前に於ける暴君の專制時代と何等異なる所がない。個人の覺醒によつて自由を認めて、能力の競爭を公平に實現して最大多數の最大幸福を企圖しても、尠しもその効果がなく、反つて弱肉强食の風を馴致して大失敗に終つたものである。唯だこの間に於て救はれた幸福者は、慘忍冷酷な强暴者のみになる。個人主義の據點地であつて自由競爭の本場たる英米の社會は、今やこの狀態に入つて惱ん

で居る。如何なる文化の競爭に於ても天下獨步の勝利を占めて、飛ぶ鳥を落す勢を示し、世界にその智徳を併び稱する者がないとしても、自由競爭に伴ふその强暴なる態度は反つて國家の禍になつて居る。又たこの個人主義に迎合して自由競爭を輸入した歐洲大陸の諸國に於ては、一轉して極端なる共產主義に激化し、暴力革命を謳歌する動因となつた。そして此等の思想は今や一齊に我が邦の社會を襲つて、思想界を動亂させて居る。吾々はこの時に當つて無暗に外來の思想に脅される卑怯の振舞を愼まなければならない。個人主義の提唱する自由競爭には確に善い方面がある。けれども又た確に惡い方面もある。それでその長所を取つて短所を矯める策を講ずべきである。さうすれば敢て暴力革命の思想に附和雷同せずも、現在の社會を立派に改造することが出來る。日本國民は飽くまで自重して最善の眞理を探求すべきである。

四　協同の善的方面

上述の如く、競爭には善い方面もあるが惡い方面もある。一利一害は免れない觀がある。けれども斯樣な思想の矛盾に由つて惱まされて居るのは、人智の尙ほ幼稚な爲めである。飽くまでその利益を擁護してその弊害を剪除する工夫を廻らすべきである。先づ自由競爭に伴ふ弊害は自己を本位として他人を排斥することであつたが、この點を改め直さなければならない。自己の利益を圖ると共に他人の利益をも圖る精神に出でなければならない。即ち私益と公益とを一致させて、最大多數の最大幸福を圖ると云ふ功利的自由主義本來の目的に反せぬ方法を執らなければならない。それには何ういふ觀念が必要だかと云ふに、協同といふ精神が必要である。最大多數の最大幸福を競爭に由つて求める外に、協同によつて求めることが肝腎である。個人主義の自由競爭にこの協同といふ精神のなかつたのが最大な缺點であつた。

生物の社會を見ても人類の歷史を見ても、團體的生活を營む者の間には協同といふ行爲が行はれて居る。生物の社會に行はれる協同行爲は本能によつて營まれて居るのだから事實は些か異なるが、人類の社會に行はれる協同行爲は有意的に行はれて居る。これは古代の人類に於ても同一の現象であつて、個人の意志が集合して社會生活を形成して居る。個人が單獨に孤立して生きて居れぬのであつて、團體生活の内に生きて居る。その呱々の聲を擧げてよりその死に至るまで、精神的生活に於ても物質的生活に於ても悉く皆な自己をその社會の中に見出して生活して居る。社會は個人の類同觀念によつて認識されて居るの

で、自我と他我とは同一の普遍我を内容として居る。社會を離れて個人なく、個人を離れて社會がない。個人と社會とは一心同體を爲して居る。その關係は有機的であつて統一されたる具體的實在であるから、その一方を選んで存在させることは出來ない。個人といひ社會といふ場合は、單にその協同の實在を異なる見地から客觀的に抽象した概念に外ならないので、その本體ではない。

　そこで個人の目的と社會の目的といふものは元來同一の理想である。個人の目的を離れて社會の目的はなく、社會の目的を離れて個人の目的はない。共に同一なる人生の目的を以て理想とするのである。即ち個人の至善は社會の至善であり、社會の至善は亦た個人の至善である。そこで個人の本務は亦た社會の本務であり、社會の本務は亦た個人の本務である關係を生ずる。これは全く人格の本質に由來して居る。個人の人格と社會の人格とは元來同一のものであるから、人格それ自體は主觀的な一箇の生命であつて、これを客觀的に見れば或は個人的のものとなり或は社會的のものとなる。それで個人の生命と謂ひ社會の生命と稱するものは、同じく是れ人格の生命を指して居るものであつて、唯一協同の本體を目して居るものである。だから個人の品性が墮落すれば社會の品性も墮落して、共にその本務を過り、至善を失ひ、理想に反して人生の目的に戻り、終にその生命を失ふことになるのである。

　ところで人間の利益といふものに就いて考へて見るに、これは人格の生命を開發してその完成を求める價値であるから、一面に於ては個人に關する利益であると同時に他面では社會に關する利益になつて居る。一見すれば、如何にも個人に專屬する利益のやうに見え、或は社會に專屬する利益のやうにも見えるけれども、共に人格に屬する利益である性質によつて、利己と利他とは同心一體のものになつて居る。それで個人の利益といふものも、社會の利益といふものも、單に孤立して居る價値ではないので、同一の人格的價値になつて居る。そしてこの資は人間の人格によつて創造されたものであつて、單に個人の力によつて作られたものでも無く、亦た單に社會の力によつて作られたものでも無い。若しこの資を創造することに個人が關係したと云ふならば、同時に社會も關係したと言へるし、社會が關係したと言ふならば個人も關係したと言へるのである。それで人間の利益といふものは個人のものであると共に社會のものである。「天下は一人の天下でなくて天下の天下である」と云ふのは、この點を喝破した言である。

　斯樣な次第で人間の生活といふものは協同に營まれて居る。

個人がその團體生活を爲せる社會の中に、協同の利益を分與されることによつて、人間の人間たる資格が實現される。先づ自己の身體を見るにそれは人類社會の一員としての協同物であつて、絕對に孤立した私有物ではない。その精神を見るに人類社會の思想によつて養はれたものであつて、協同の概念を使用して居るに過ぎない。隨つて政治、法律、經濟、道德、科學、哲學、文藝、美術、音樂、體育等凡ゆる文化は個人のものであると同時に社會のものであり、等しく人間の協同物になつて居る。個人がこれ等を創作する場合には社會も同時にこれを創作して居るので、その協同の力を己れ一人に私することを許さない。それで人間が此等に屬する人格の諸能力を發揮するに當つて、個人の有する自由といふものは協同の持物になつて居る。自己の能力を發揮する爲めに、他人の能力の發揮を束縛せずに、これを協同に發揮しなければならぬ義務がある。從つて遺傳に於て異なり、性格に於て異なり、稟賦、教育、德望、財産、境遇、健康に於て異なる特殊性を有する個人間に於ては、同情友愛して相互に扶助することに由つて各自の個性を公正に實現しなければならない。貪婪私欲の間に先駈功名して、優勝を誇るは誤つて居る。須らく劣敗の地位に陷る者を引き立てゝ智慧を與へ、勇氣を授け、忍耐、勤儉、敏捷の德に出でしめ、善につよく鍛に活きる奮鬪努力の人たらしめ、獨立自存の士たらしめねらない。斯樣にして個人に於ては賢愚聖凡の相違があつても、國家に於ては大小强弱の差別があつても、優勝者は劣敗者を陷れる事なしに、博愛同仁を以て協同の目的に向つて同一の成功者たらんことを企圖しなければならない。そして自己の成功の爲めに他人の成功は邪魔になると考へずに、他人の成功は自己の成功と共に協同の至善を實現する人格完成の勝利であることを覺悟しなければならない。そして大欲は遂に無欲であり、歡樂は終に悲哀であることに想到して、推讓知足の德を以て衆と偕に樂しむ精神に出でなければならない。これは人間が社會的動物であつて、孤立を許さぬものであり、その協同の中に生命を維持する性質のものだからである。

五　協同の惡的方面

斯樣に協同といふことには確に善い點があり、人間の生活に利益を與へて居る所がある。けれどもその裏面には幾多の弊害が伴つて居る。先づ協同生活の最も原始的なものは家族制度の生活であるが、それは家長權者を中心として集まつて居る團體であるから、個人といふ觀念が明瞭になつて居ない。自己の生きて居るのは家長權者の爲めに生きて居るので、家といふ團體の

手段方便になつて居る。それで自分の能力も學務も擧げて家長權者の爲めに奉仕するので、家といふ社會の財産となり奴隷となり、敢て生殺與奪の治下に置かれても辭さないのである。隨つて自己の生命といふものは家長權者に保護され、衣食物品を給附されて飼養されて居るのであるから、絕對の依賴心と無責任とを以て滿足して居る。だから自ら意志發動の主體となることが無く、家長權者の指圖を仰ぎ命令に服して居る。趣味、信仰、教育、職業、外出、賣買、贈與、結婚等一切の人事は家長權者によつて決定される。そして其處で初めて協同生活の實が全うされて、家族制度が維持されて行くのである。

これは人類の原始生活に於ける協同の行爲であるが、それが段々發達して國家的生活となれば、君主と人民とは協同の生活を營むことになる。そして君主は國家の絕對的權者であつて、法律命令の決定者であり、人民は君主の財産になつて居る。これは謂ゆる過去に於ける專制時代の協同生活であつて、君主は生殺與奪の權を握り、人民はその奴隷となつて飼養されて居る形である。それで國民は一切の行爲を擧げて君主に奉仕するので、君主あるを知つて自己あるを知らない。國民は何事でも君主の干渉を受けて、國家の許可を得なければ、一事一行と雖も滿足に出來ない狀態になる。それで政治は勿論、教育でも産業でも學術技藝でも皆な悉く政府の下知釆配によつて、左右されるので、自治といふ觀念がない。隨つて進取の氣象がなく、依賴心が强く、無責任であつて、謂ゆる愚民となつて盲從生活を續けることになる。そしてそこに初めて協同生活が全うされて、その國家が維持されて行くのである。これが謂ゆる國家主義又は帝國主義と稱せられるものである。愛國心といふものは全くこの爲めに設けられた協同觀念であつて、國家が他の國家と競爭して優越の地位を占めんとする兵法である。

けれども人智の進歩は斯樣な意味に於ける協同の觀念に捉はれて生活する事を屑としなかつたので、遂に個人の自覺となつて人格の自由を主張するやうになつた。從來の團體生活に於ける協同の觀念には甚だしい缺點があつたから、それを改良することが必要であつた。先づ協同の行爲には自己といふ觀念が不明瞭な爲めに、個人の自由を束縛する行爲が多い。家長權者や君主の意志を重視する爲めに、自己の意志といふものを輕視する點がある。家や國家を生活の目的に考へる爲めに、自己の生活の目的といふものを考へない弱點がある。その結果として自己の能力も業務も擧げて家や國家の生活の目的に對して、手段方便に供せられることになる。そして人格觀念がない爲めにその行爲が自律的でなくて他律的になる。そこで家や國家は一

時盛大を極めても、個人は次第に凋落して行く。先づ個人には創造力が無くなり、進取の氣象が無くなり、依賴心に富んで獨立奮闘の精神が缺けて來る。自發的に勇氣、忍耐、勤倹、敏捷の德を要する業務に携はることが出來なくなる。唯だ家長權者や君主から命令されて盲從しながら、愛家心や愛國心を奮ひ起してこれに當るに外ならない境遇に陷る。その結果は萬人を通じて同一模型の人物を製造して、英才の發達を阻害する。そこで個人主義の教へる自由競爭はこの缺陷を見事に論破して、その實効を奏したのであるが、今度は餘りに個人を重視して家や國家を輕視した爲めに、幾多の弊害を釀した。そこで再び協同の精神が必要になり、個人を尊ぶと與に社會をも尊ぶことになつた。ところでこの一體の思想的發達を顧るに、協同の本義は個人を極端に重視することを避けてこれを社會化する點にあつたが、餘りにこれを社會化して協同を謳歌した結果はその社會を極端に重視することになつて個人を輕んずる結果を招來するのである。殊に極端なる自由競爭に反對して協同の利益を提唱する時には、勢ひ極端なる協同思想に流れるのである。就中個人主義の自由競爭によつて勝利を占めた智識階級や資本階級に對して、劣敗者の地位に陷つた無智識階級又は勞働階級は協同思想を極端に振り廻はし、過激なる政策を主張して暴力革命を希望するやうになる。その結果は個人の自由も競爭の長所もみないで、唯だ劃一的に萬人を同一模型に鑄造して、職蜂や職蟻のやうに本能的に協同行爲に忠實な勞働機械を製造しようと試みるやうになる。然るに過去の經驗を見るに、家族制度や專制國に於ける協同行爲は權威によつて盲從した奴隷行爲であつて、機械的なものであつた。毫も能動的な所がなく、所動的なものであつた。隨つて無責任であり、創造力がなく、獨立心がなく、智慧、勇氣、勤倹、敏捷の諸德に缺けたのは必然の成行であつた。のみならず、協同行爲は屢々罪惡を働くために用ゐられ、朋黨比周を試み、殺人盜賊の所業に陷り、戰爭の道具に用ゐられた。殊に如何なる戰爭に於ても、その原因は競爭行爲に存するが、これを實行するものは必ず協同行爲である。然るに暴力革命論者は協同行爲の惡用の中に諸の善德を發育させようとして居る。その爲めに暴力を用ゐ權威を振つて敢行しようとするのである。その結果は何うなると云ふに、家族制度や專制國の社會と大差のないものになる。何ぜなれば個人の自由を束縛して協同行爲を偏重する道德觀念の中には自我の觀念が明瞭に起きて來ないので、道德の自律者たることが出來ないからである。道德は一面に於て他律的なものであるけれども、自律的な點に於て道德の眞相を發揮するので、そこに人格の觀念が

生ずるのである。然るに協同行爲を重視すれば他律的となるから、人格の觀念が不明瞭になる。その結果は暴力によつて自由競爭を廢して經濟革命を斷行したにせよ、他律的な社會に生棲することになるから、人格の自主權といふものは依然として無い譯になる。随つて家族主義や專制主義の時代と同樣に創造力がなく、獨立心がなく、無責任で、進取の氣象がなく、智慧、勇氣、忍耐、勤儉、敏捷の行爲は何處から探しても出て來る道理がない。單に權威者に强制されて社會奉仕の題目を唱ひながら機械的に盲從する一群の愚民を濫造するに外ならない。

六　人格の屬性としての競爭及び協同の本義

以上の如く、競爭と協同とには其れ〱長短の兩面があり人間の生活に利益もあれば弊害もある。善い所を執らうとすれば悪い所が附き纏ひ、悪い所を捨てやうとすれば善い所も葬るの結果となり、遂にその混亂せる折衷思想を廢めて、不滿足ながらも競爭生活に徹底するか協同生活に徹底するかに偏向するので、極端と極端とが正反對の方向に突進する形になる。その結果は競爭生活に徹底する者は協同の精神がない爲めに遂に人格の觀念に破綻を生じ、協同に徹底する者は競爭の精神がない爲に遂に人格の觀念に破綻を生じ共に人間の能力に一大缺陷を生じて自滅を招ぐやうになる。ところでこの自滅を禦ぐため各自の脫線を匡救して、正道を見出すには如何なる倫理的考察に從ふべきであるか。これは現代の社會問題を解決する上に鎖鑰となるものである。

思ふに競爭と協同とに關する從來の道德觀念は誤つて居た。これを正反對な矛盾觀念と見做して別々に取扱つて居たのが大なる缺點であつた。若しこれが正反對な沒交渉の觀念であるならば、その長所を取つて短所を捨てると云ふことは樹に竹を接ぐ抽象的空想であつて、具體的の結果に於ては長短共に捨てる結果になる。これでこれを正反對な矛盾觀念であると見ないで、共に至善を目的とする道德の同位的價値であると見れば、長所のみあつて短所は無いことになる。即ち競爭も協同も共に善行爲としてのみ存在の價値を有するのみならず、至善と相容れない競爭及び協同は眞の競爭及び協同では無いと云ふことになる。さうすれば競爭と協同とに隨伴した短所としての悪的方面は、至善を目的として共存しないことに由來する脫線的行爲になる。然るに競爭及び協同に對する從來の道德觀念に於ては、この至善を目的として共有する實在を有つて居なかつた。それが爲めに自由競爭に於ては個人の競爭そのものを直ちに至善の實在であるかのやうに誤信したり、社會共同に於ては協同

そのものを直ちに至善の實在であるかのやうに誤信したので、二者は永久に正反對な矛盾の方面に走つたので、弊害が百出した。然るに至善の實在は競爭や協同そのものにあるのでは無くて、人間の人格に存するのである。人格が個人と社會とを屬性として居るが爲めに、競爭と協同とは人格に陪隨する屬性になつて居る。

競爭は個人の目的を開發する爲めの人格的要具であり、協同は社會の目的を實現する爲めの人格的要具である。然るに個人の目的と社會の目的とは共に人間の人格的目的であつて、人生の至善を理想とする同一內容の異方面である。隨つて競爭と協同とは人格的目的を至善として共有することに由つて始めてその意義を發揮するのである。それ故、競爭を離れて協同はなく、協同を離れて競爭は元來ない譯である。然るにこれをあると誤解するのは同一實在としての人格の觀念を失つて居る場合であつて、競爭又は協同を抽象的に考へた迷妄である。その具體的實在としての競爭又は協同は、只だ人格的價値を共有する場合のみである。從つて競爭より脫線した利己と協同より脫線した利他とは、人格の平行線に有意的に重つた場合にだけ眞理になるのである。利己といふことも必要であり、利他といふことも必要である。けれども人格の觀念からして互に牽制して相調和し、至善の行爲に反せぬ範圍に於てその價値を發揮すである。競爭は常に協同の利他を傷けぬ範圍に於て行はれ、協同は常に競爭の利己を傷けぬ範圍に於て行はれるものになる。吾々の人格は一面に於て競爭によつて發達するが、一面に於ては協同によつて發達する。この二者は互に牽制して人格を發揮させるのであるから、協同なき競爭も、競爭なき協同も、共に人格の實現を全うする所以ではない。人格の修養は常にこの競爭と協同との圓滿なる發達に由來するものである。これは人格の精神的方面の發達に對して、動かすべからざる原則である。

この道理を尙ほ一層明瞭に理解するには、人格の他の一面を形成して居る吾々の生理的方面に就いて、身體の發達する事情に留意すれば好都合である。生理學の知識に依れば、大腦を解剖して見ると、下垂體と松果腺といふ二箇の內分泌腺がある。最初はこのもの丶機能が解らなかつたが、醫學の進歩によつてそれが身體の適當なる發育に關する機能であることが發見された。小兒の時に下垂體が害されると身體の發育が惡くなり、成長しても小兒の狀態を保ち、精神も生殖器も發達しない。又た下垂體が病的に發達すれば、身體は巨人のやうに發達しながら、精神と生殖器の發育が惡い。それから小兒の時に松果腺が害されると、早熟して成人のやうな態度になり、精神と生殖器

とが極端に發達する。又た松果腺が病的に發達すれば身體が普通に發育しながら、精神と生殖器との發育が中止して了ふ。それで下垂體と松果腺とが程よく互に牽制して調和を保つて居るので、身體と精神とが一箇の生命として圓滿に發達するのである。利己と利他との關係も亦たこれと同樣である。隨つて競爭と協同との關係も亦たこれと同樣である。競爭が無くても宜しからず、協同が無くても宜しからず、又たそれ等が極端に發達しても宜しからず、總てが調和して程よくその機能を保たなければ人格は發達しない。

論語の八佾第三に『子曰く、君子は爭ふ所なし。必ずや射か。揖讓して升り、下りて飮む。その爭や君子なり。』とある。これは世に謂ゆる君子の爭と稱せらるるものであつて、小人の如くに利害を以て人と爭ふ趣意のものとは異なる旨を述べた言である。君子は仁を以て心を存し、禮を以て心を存して爭ふのであるが、小人は不仁不禮を以て人と爭ふのである。從つて君子はこれを正鵠に失するも人を責めないで己を責めるが、小人は己を責めないで直ちに人を責めるのである。これは君子の競爭には仁義に基く協同の觀念があるが、小人の競爭にはこれが無いので、若しあるなれば朋黨比周の觀念が横つて居るのみである。即ち君子の競爭は人格的のものであるから協同の中に行はれるが、小人の競爭は非人格的のものであるから利己的に行はれ、徒黨の中に行はれるのである。それで君子の競爭は敗けても勝つても、友愛の精神に反せぬが、小人の競爭はこれに反して協同の本義を沒却するのである。これは全く君子の行爲には人格の觀念があり、小人の行爲にはこの觀念がない結果である。これに由つて觀ても競爭と協同とは人格の屬性であつて、互に調和して中庸の德を保つことに於て、その本義を明にする次第が理會せられる。吾々は君子の爭によつて協同の行爲を遂することが肝腰である。決して小人の爭に陷つて徒黨の生活に終つてはならない。

英國勞働黨内閣の沒落と米國共和黨の勝利

芦田均

十月末の總選擧に英國勞働黨が慘敗して保守黨内閣が之に代り、十一月四日の米國大統領選擧戰に共和黨のクーリッヂが、壓倒的多數を占めたことは今年下半期の國際政局に於て最も興味ある政戰として世界の耳目を聳めた問題である。

勞働黨は本年一月に政權を執つて以來僅に十ケ月、この間に外交方面に於てはソヴエート政府を承認し、賠償問題の解決の爲めに關係國の會議を倫敦に召集して經濟復興政策の實現に努力した。內政方面に於ては議會に多數を有たない結果、其年來の主張たる資本課税や土地國有、鐵道及電力の國有等の社會主義的政策を實行することは出來なかつたけれども、自由黨の援助を受け得る範圍内に於て、住宅問題の解決や、マッケンナ税法の廢止に努力し、殊にクラインスの財政政策は敵味方共に賛同を惜しまない程に鮮かな手腕を示したものであつた。

この間の治績は從來のいづれの内閣に比べても決して遜色のないものであつた。唯少數黨の悲さは議會に於てカスチング・ヴオートを握る自由黨の態度に一喜一憂して、多年勞働黨が在野黨として主張して來た政綱は一も實行し得ない境遇にあつた。從つて、保守黨は、素より勞働黨も自由黨も決してこの事態に滿足を感じてゐなかつたから英國の政界は之が爲に著しく安定を缺き勞働黨内閣の壽命が短命なるべきことは何人も豫想する處であつた。唯新なる總選擧に於て、保守、自由、勞働の三黨中いづれが多數黨となるべきや、いづれかの一黨が議會に過半數を制し得べきや、又は三黨鼎立の形勢は依然として存續すべきやの點は國際政局の將來と關聯して世界が多大の興味を以て注目した點である。

米國の大統領選擧は國際政治に對する影響に於て寧ろ英國の

政戰よりも意義の薄いものであるが、政治的競技として之を觀れば北米四十八洲の有權者五千四萬人を動員して、米國の政治家が數ケ月の選擧戰に沒頭する有樣は確に四ケ年目毎に到來する最大の劇的光景であるに相違ない。

クーリッヂの如き質實な、寡言な、そして民衆を動かす事を試みない政治家が果して如何なる程度まで反對黨をして之に乘ずる機會を得せしめるかが今回の選擧に伴ふ興味の中心であつた。そして十一月四日の投票は何の奇もなく共和黨に勝利の桂冠を與へた。八月の民衆黨大會に於て、マツカヅーとスミスとが相爭ひ前後百數回の投票を重ねて遂に兩派が決勝的の投票をあつめ得ずチエニング、ブライアンの妥協的提議に依つてデヴイス氏を候補者に推薦した時、消息通は民主黨の勝利既に危しと云つた。民主黨の弱點は統制の不統一から發足してゐる。

第三黨のラフオレツトに就ては世間は尚多少の望を彼の戰鬪力の上に措いた。素より第三黨が大統領戰に桂冠をかち得るものとは何人も思はなかつたけれども、時としてラフオレツトが共和黨候補者の地盤を侵略して過半數の投票をあつめることを不可能ならしめる機會あるべきことに興味を繫いだ、

ラフオレツト彼自身も、投票日の切迫すると共に共和黨の地盤たる東部諸州の遊說に全力を注ぎ、又或州では民主黨の候補者と共同作戰に出たのは明かに第三黨の戰略が其の點にあつたことを示したものである。

然し其の策戰も遂に何等の効果を齎さないで共和黨はハーヂングの當選當時よりも一層多數の投票を集めることが出來た。資本家階級と、保守主義とが勝利を得たといふよりも共和黨を敵に廻して戰つた民主黨と第三黨とが案外に弱かつたと云つて差支ないであらう。

○

十月廿八日の英國の選擧は從來の英國政治史に稀に見る激烈な競爭と、階級爭鬪的思想の發露とを示してゐる。

政權の爭奪戰に於て常にフエアー・プレーを忘れなかつたのは英國民の誇であつた。然るに今年の選擧競爭場裡に表れた現象は吾々にも多大の失望を與へた。それは勞働黨側から示した選擧妨害の態度である。倫敦グラスゴー其他の都市に於ても演說會場が混亂に陷つたことは決して珍らしくない。保守黨の領袖サー・ロバート・ホーンや自由黨の首領アスキス氏等の演說會も『赤旗の歌』や、喧騷の聲に妨げられた。保守黨の候補者ウイリアムス氏の如きは一壯漢の爲めにスンツキで毆打せられたので、直ちに演壇から飛び下りて、自ら狼藉者を會場から叩出

した。かういふ活劇は從來の英國には曾て見られない光景であつた。これは政治の民衆化に伴ふ暗い半面であると同時に、今回の選擧のイッシユーが多量に感情の分子を含んでゐた結果であると云はなければならない。

保守黨にとつては昨年の選擧に慘敗した苦い經驗に顧みて今年は是非とも會稽の耻を雪ぐべき天王山の關であつたから政界安定の爲めに議會に過半數を得ることを目標として全力をあげて奮戰した。

勞働黨は一面に於て自由黨の頽勢に乘じ、其地盤を蠶食すると共に他方保守黨を凌ぐ勢力を獲得しようとして力戰した。此間に立つて自由黨は黨の結束も堅からず、軍資も裕ならず、加ふるに其主張と政見は半は保守黨に奪はれ半は勞働黨に奪はれて、選擧場裡の論戰も生彩に乏しい感を免れなかつた。而して保守黨が在野一年間反對黨として常に勞働黨内閣の弱點を指摘し、又一昨年來感情の疎隔したヤンガー一派の純正保守黨と、聯立派のチエムバーレン、チヤーチル、バーケンヘッド等の智勇辯力とを融和せしめたことは今回の政戰に於て頗る其地位を有利ならしめたに相違ない。

○

勞働黨の成長は今世紀に於ける一大驚異である。一九〇〇年の總選擧に僅に二名の議員を出し得た勞働黨が一九〇六年には廿九名に增加し、一九一〇年には四十名を得た。それが一昨年の十一月には一躍して百四十七名の議席を得、昨年十二月の總選擧には百九十一名の議員と四百三十五萬の投票を集め得たのである。

勞働黨の擡頭は英國の政界に大きな變化を與へた。それは數百年間トーリー、ホイック兩黨對峙の政戰を續けてゐた英國の議會が、茲に三黨鼎立の新なる政界の分野に立つて、之に適應すべき政治を行ふ必要に迫られた事である。

元來英國の保守自由兩黨はブルジョアの覇道權道的觀念から發足した政黨であつて、中産階級以下の生活に接觸の少い黨派であつた。グラッドストーンやヂスレリーや所謂ヴイクトリヤ王朝の政客がウエストミンスターに典雅な雄辯を鬪はした當時に於ては、英國の議會は鑛夫の賃銀や、住宅問題に頭を惱ます必要のなかつた幸福な議會であつた。

歐洲戰後に起つた自由解放の思想は歐洲の中産階級無産階級をして、いづれも一齊に自己の運命の開拓を政治的手段に依つて行ふ希望を抱かしめた。即ち自由思想の發達と勞働階級の自覺とが茲に勞働黨の運動を生んだものである。

保守黨は社會の安定に重を措いて秩序の維持を現在の社會に求めようとする主張をもつてゐる。自由黨は個人の自由を強調し、自由不羈なる個性の發展を拱くる爲めに、自由を拘束する幾多の條件より人類を解放すべしと主張してゐる。此間に於て勞働黨の思想は個性の社會的及び法律的平均に重を措き、之を輕視する現在の社會及び國家制度を根本的に改造せんことを主張した。

一昨年十一月の總選擧に於て勞働黨は一躍して英國議會の第二黨となり、自由黨を凌いで所謂『陛下の反對黨』と稱せられる地位に立つた。保守黨は過半數の議席を下院に擁してボーナー・ローの內閣を組織したけれども保守黨が倒るれば之に代るべきものは勞働黨である事は何人も認めざるを得ない處であつた。

勞働黨が政府に立つ準備の第一は第二黨としての權威を保ち反對黨として堂々政府の施政に反對することであつた。然し議院生活に慣れない勞働黨の議員の中には傳統的に莊嚴なるべき議會開院式の議場に於て無作法な野次を飛ばす樣な不謹愼を行ふものもあつたのでマクドーナルドは極力議會の諄良な風習を尊重すべきことを力說し、黨の訓練を强調して勞働黨がこの點に注意しなければ議院政治は暴力政治に墮する外はない、そして規律を重んじ公約を嚴守する場合に於てのみ天下の信任を博することが出來るのだと力說した。

○

勞働黨の執權は昨年十二月の總選擧に初まる。時の內閣は失業救濟の手段として自治領に特惠關稅を賦與し、保護政策を採用することを焦眉の急なりと主張したのであるが、保守黨內閣の前首相ボーナー・ローは一九二二年十一月に天下に公約して新選擧までは關稅問題に手をふれないと聲明した行懸があるからボールドウインがこの政策を採用する場合には新しく總選擧を行ふより外に途はなかつた。

かくて議會は十一月に解散せられた。其結果久しく分裂してゐた自由黨は再び合同してロイド・ジョージとアスキス氏が同じ黨派に顏を合せる機運に向つた。この總選擧の主たる論爭は保護貿易と自由貿易との爭であつたが、勞働黨としては保護貿易にも自由貿易にも多くの興味を感じなかつた。其主張の根柢はむしろ產業國有並に資本課稅等の社會主義的立法であつて社會主義對資本の問題であつた。

十二月六日の總選擧に於ては議院の總數六百十五名の內保守黨は三百四十六名より二百五十八名に減じた。自由黨は百十六

名より百五十八名に増加し、勞働黨は百四十七名から百九十一名に躍進した。

この選擧の結果英國多年の傳統であつた兩黨對峙の議院政治は全く崩れて各派は少くも他の一派の支持又は好意的中立を俟たなければ政府を維持することが出來ない狀況に陷つた。

於是、如何なる黨派が政局に立つかは世界の視聽をあつめた問題であつた。然し保守黨政府は總選擧に大敗し、自由黨は議院の第三黨であるから、憲政の常道は當然勞働黨內閣の出現を要求したのである。

明けて一九二四年の一月、英國議會は勅語奉答の決議文の討議に依つて幕を明けた。自由黨と勞働黨の聯合は容易に政府黨を破つてこゝに愈勞働黨の領袖ラムゼー・マクドーナルド氏は英國の政局を背負ふて立つこととなつた。

勞働黨の執權は英國の政治史に一新紀元を劃したものである。それは兩黨對峙の政治形式が破れたといふ點から見ても、或は從來政治的勢力として無視せられてゐた勞働階級が初めて政權をとつたといふ事實から見ても、又は議會の少數黨たる勞働黨が政局に立つて政務を遂行し得たといふ點から觀察しても、いづれも保守的な英國人を驚かすに充分な出來事であつた。

三 勞働黨內閣十ケ月の治績は如何であつたらうか。

○

勞働黨內閣は少數黨の內閣であつた。從つて在野黨のフェアー・プレーに信賴するか、若くは自由黨の支持を受ける範圍に於てのみ其政策を實行することを得た。故に勞働黨內閣の活動範圍は主として外交及植民政策、若くは立法手段を必要としない行政手段に集中せられる結果となり在野黨當時に主張して來た資本課税や産業國有等の大問題は暫く其實行を延期して後日の機會を俟つことを聲明した。

勞働黨政府の最初の事業はロシアとの國交恢復の問題であつた。そして又ロシア問題のために政局を退くことになつたのも不思議な緣である。英國政府は本年二月一日正式にソヴエート政府を承認する通告を出した。それはソヴエート露內閣の事實上の統領であつたレーニンの病歿後十日目のことである。當時ロシア政府は幹部內訌の後をうけて黨員の動搖も靜まらない際であつたから、此刹那に於ける英國政府の承認は百萬の援兵を得たよりもソヴエートの勇氣を鼓舞したに相違ない。

勞働黨政府は東洋方面に於て新嘉坡の海軍根據地建築を中止し、更にアフガニスタンに對する攻擊準備を撤廢した耳なら

す、印度のガンヂイ一派の獨立運動に對しても極めて寛恕の態度を以て之に臨んだ。

歐洲大陸の安定は勞働黨年來の外交方針の樞軸であつて、之が爲めに佛國のルール占領に反對し、獨逸賠償金の削減を主張し、フランスとの協調恢復に苦心したのであるが、偶ドース委員會の報告が關係諸國に承認せられ、ポアンカレ內閣に代つたエリオが衷心から賠償問題の解決を希望した新機運に乘じて八月のロンドン賠償會議も遂に成効せしめることが出來た。所謂ドース案なるものが實施の第一期に入ることになつたのは何と云つてもマクドーナルドとエリオとの熱心な努力の結晶であることは否定することは出來ない。

勞働內閣の主張は從前から國際聯盟を活用して平和調停の機關とし、各國とも軍備を縮少し、徴兵制度を廢止すべきことを主張してゐた。この政見を實現する爲めマクドーナルドは九月初旬ヂエネバに赴いて、國際聯盟總會に出席し、エリオと共に『平和議定書』の礎石を据えた。

所謂『國際紛爭の平和的處理に關する議定書』が果して昨年六月に豫定せられた軍備縮少大會議の召集まで漕ぎ付け得るや否やは今尚ほ不明である。然し熱情に富んだ英佛兩國のラヂカルスが國際生活を力の政治から法律生活に引戻そうとした努力は人類社會に於ける一の新紀元をなしたものであることは疑を容れない。新議定書がよしや空文に終つたとしても、今後尚ほ幾多のマクドーナルドとエリオとが顯れて其實現を見るまで努力を惜まないであらう。

勞働黨政府は明かに其外交に於て成功を博したが、內政政策、殊に財政や社會問題を離れた純粹のポリチツクに於て遂に反對黨に敗された觀がある。

昨年十二月の總選擧に際し勞働黨は其財政政策として自由貿易、資本課税、消費税の輕減、年金増額、地主所得税等を約束したのであるが、スノーデンの豫算案に於ては住宅税の廢止、消費税の輕減、マツケンナ税の廢止等を實施した外、資本課税は當分之が提案を見合はせた。それはマクドーナルド、スノーデン等の漸進論者が現在實現し得べき範圍に於て其政策を實施し、先以て天下の信任を博し、黨勢の擴張を圖る考であつたからである。從つて勞働黨の一部には、政府が年來の主張を弊履の如くすてゝ、折衷妥協の政策に日を送るならば遂には勞働階級の失望を估ひ、黨の分裂を招くに至るであらうとの論をなす者もあつたが、マクドーナルドは隱忍自重して、極力社會主義的立法の提案を抑壓して來た。

然し、マクドーナルドの內閣が鞏固な內閣でなかつたこと

は、內閣それ自身に幾多の弱點をもつてゐた結果である。內閣員は經驗に乏しいのみならず、時として勇氣に乏しい觀があつた。黨內には共產主義に左袒する者があるかと思へば自由黨の主張と殆んど相違のない程の人もあつた。これは內閣不一統の根本の理由である。又內閣の政綱政策が明徹を欠いてゐる許りでなく首相其人も餘りに聰明な爲めに所說が徹底しないとの非難もあつた。然し內閣倒壞の理由は矢張り國內の政治的事情が反對黨をして勞働黨內閣の破壞を希望せしめたことである。

勞働黨政府を向に廻して、純粹の在野黨として進退する保守黨の立場は極めて簡單にして有利な境涯にあつた。勞働黨を攻擊して完膚なからしめても保守黨に於ては毫も失ふ處はない。反之、自由黨は內閣成立の當初、一時之を支持して政權をとらしめたものであるから少くも當分の間は政府を助けて難局を切拔けしめる義務を負うてゐた。

勞働黨政府は屢々前政府の政策を襲踏して來た。例へば失業救濟の方法に於ても、又倫敦の交通問題に關しても、乃至トルコ政策の表現であるローザンス條約に就ても悉く保守黨政府の政策に從つたものである。此等の政策に對して批評を加へるものは常に自由黨であつたから、其都度意見の相違を生じるものは自由黨それ自身であつた。そして自由黨の分裂を策する保守黨並に勞働黨の一部の人々は一齊にこの現象を歡迎したことは云ふまでもない。

斯の如く自由黨は進退共に拘束を受けて苦しい立場に居た。若し、勞働黨內閣が議會に多數を擁してゐたら自由黨は思切つて反對黨に立ち得た結果、國民の信望を集めることが出來たに相違ない。

自由黨は勞働黨と保守黨との中間にあつて腹背から挾擊されてゐる。曾て自由黨を支持した英國の中產階級と勞働者とは勞働黨の出現以來次第に河岸をかへて新黨に趨つた。勞働黨は自由黨の地盤を蠶食して成長したものである。

自由黨の存在の理由は多くの政論家によつて疑問視せられてゐる。常に折衷妥協を策する自由黨は勢ひ左右兩黨より挾擊せられる立場に居るが、中にも勞働黨が鋭意自由黨の地盤切崩しを策してゐることは前後數回の補欠選擧に於ても明白であつた。中央に於て政府を支持しつゝある勞働黨が、地方に於て勞働黨の搗亂策に蹂躙せられることは到底、ロイド・ジョージ以下の政客が認容し得ない處であつた。果然ロイド・ジョージ先づ怒り、優柔のアスキスも亦其態度を明白にするに至つた。かくて議會の解散は避け得ざる勢となつた。

○勞働黨政府と議會との衝突は第一次には英露協約の問題であり、第二次にはキャムベル事件と稱する內政の小事件であつた。然しそれは自由黨が議會解散の決心をした曉に於て初めて論戰となり得るものであつて、自由黨が勞働黨內閣を見捨てる覺悟をした刹那に內閣の命數は決したものといふのが正鵠を得てゐるかも知れない。

英國政府はロンドン會議の前途が決裂と妥協との間に彷徨してゐる八月の初旬(八日)にロシア代表ラコウスキーを相手として十八ケ條に亘る一般條約を締結した。兩國はこの條約により舊條約の中で改廢すべきものを列擧し、北海に於ける英國漁船の取扱を定め、更に從來最も難關と目せられた債務、沒收財產の返還、公債等の諸問題を規定した。本條約が世の注目を惹いたのは第六條乃至第十三條に定めた債務及び財產權の問題であることは云ふまでもない。其綱要を列記すると、

(一)ロシア政府は或條件の下にロシア公債所有者の要求に對して責任を負ひ、公債所有者と交渉を開くことの保障を與へる。

(二)英國政府はソヴエート露西亞が其債務を完濟し得ない狀況にあることを認める。

(三)戰時債務並に對露干涉に附帶する要求に就ては後日の審議に留保す。

(四)英國政府は議會の協贊を經てロシアの起債に保證を與へる。

(五)英國人の私有財產にして沒收處分を受けたもの、幷に各種の請求に就ては、調査委員を設けて賠償に關する決定を行ふ。

之に對して先づ反對の聲を揚げたものは保守黨である。ロード・カーゾンは上院に於て英露協定を攻擊し、英國は之によつて失ふ處のみ多く、得るところ少しと云ひ、商業代表機關に外交官の特權を認めたのは濫用の虞あるのみならず、本條約は懸案解決の豫約であつて、何物をも解決してゐない、虛僞虛飾の條約であると罵倒した。

ロイド・ジョウジも亦カーゾン卿に劣らない手厳しい攻擊の矢をこの協定にむけた。そして自由黨及び保守黨の新聞紙が筆を揃へて協定の批准に反對したのみならず、マンチェスター、グラスゴー、リヴァープール等の商業會議所も亦反對の態度を表示した。

政黨の驅引はこの機會に於て勞働黨政府に痛擊を加へること

を最も有利なりと判斷せしめたに相違ない。

然るに共産黨員の不謹愼な行爲から端なく政府攻撃の新なる事件を突發した。それはキャムベル事件の火の手である。共産黨の機關雜誌ウオーカース・ウキークリーの主筆にキャムベルなる者あつて軍隊を煽動して朝憲を紊亂する行爲ありたりとの嫌疑の下に軍憲の手に依つて告發せられた。檢事は一應この事件を起訴したにも拘らず、程なく不起訴の決定を與へてキャムベルを放免して了つた。

保守黨はこの措置を以て政府が共産黨の運動に左右せられ司法權に干渉したものであると云ひ、斯の如くんば英國憲政の前途を如何んせんやと息まいた。自由黨は早くから十月末に英露條約反對の動議を出す筈で、之に保守黨の贊成を得ることも略明瞭であつたから政府はこの反對決議の通過と同時に議會を解散する旨を聲明して居た。然しキャムベル事件の突發は勞働黨内閣に取つて、一層不利益な狀況を産み出したことは疑を容れない。自由黨は十月八日キャムベル事件を特別委員會の調査に附託すべしとの動議を下院に提出し、保守黨の全部之に贊同したから、政府は忽ち三百六十四對百九十七の少數を以て慘敗し、翌九日下院は解散を命ぜられることになつた。

本年十月の總選擧は之を昨年及び一昨年の總選擧に比べて共政爭の題目に著しく感情の分子を含んでゐる。從つて勞働對資本の爭鬪を思はせるやうな光景を到る處に現出した。少くも勞働黨の側からは、かく天下に宣傳してゐる如く思はれる。

○

總選擧は十月廿九日と發表せられた。解散の日から數へて僅に廿日間の日子を剩すに過ぎない。然し英露條約の締結と同時に保守黨は逸早く地方支部に訓令して總選擧の準備に着手し、ついで勞働黨も自由黨も之に倣つた。

運動費に於て最も豐富なのは何と云つても保守黨であつて資金の缺乏に惱んだのは自由黨であつた。

然るに總選擧間際に至つて更に政府黨に不利なる問題が突發した。それはジノビエフ書翰事件である。事の起りは第三インターナショナル執行委員長ジノビエフが英國共産黨中央委員會に宛てゝ、極力英露條約の批准に盡力するよう、又英國の現存制度を暴力を以て破壞する爲め英國軍隊の潰壞を企つべきことを訓令した九月十五日の密書が發見せられたことである。英國外務省は十月二十四日ロシア代表ラコウスキー宛てに前記の事實を指摘した上、斯の如き宣傳は英國の内政に關する直接の干渉であり、國際禮儀に反する行爲である耳ならず宣傳禁止に關す

る英露間の協定に違反するものであると抗議した。
　ラコウスキーは直ちにヂノウヰエフの書翰が揑造の贋物であると打消したけれども、其辯明は英國人の多數を首肯せしめるのに不充分であつた。赤化の觸手頻はるとの標語は英國の隅々まで反響して總選擧の形勢は次第に保守黨に有利に勞働黨に不利に傾いた。投票を終らずして早くも保守黨勝利の豫想が一般に行はれたが、開票と共に世人は其勝利の壓倒的なのに更に驚かされた。其結果は左の通りである。

保守黨	四〇四	勞働黨	一五〇
自由黨	三六	無所屬	六
立憲黨（保守黨の別派）			七
合計	（未開票　一二）		六〇三

　斯くして保守黨は下院の三分の二の勢力を占め、一八三二年以來の大捷を博した。政論家は之を評して安定を求むる人心の反映であると云ひ、勞働黨は之を以て反動的勢力の擡頭であると憤つた。
　此選擧に於て自由黨は一擧に百二十二名の議席を失ひ僅に三十六名の議員を當選せしめ得たに過ぎない。慘敗と云つても尚形容の辭に苦しむ程の大敗北を受けた。ロイド・ジョージは當選したけれども、アスキスは再び落選して、早くも政界引退の噂さへ傳へられてゐる。
　自由黨は事實に於て消滅した。今後再び擡頭の機會があるであらうかとは同情をもつ人々の間にも大なる疑問として殘されてゐる。ボールドウイン又はマクドーナルドに依つて爲し遂げ得られない事業が果して自由黨にのみ殘されてゐるだらうか。これが既に根本的に自由黨存在の理由を疑はれてゐる所以である。
　階級爭鬪といふマルクス派の思想が英國人を支配しないにしても、現狀維持の思想と現狀打破の思想は相對立して保守黨と勞働黨との分界を爲すことと必然である。この間に更に折衷的な自由黨の存在を必要とする理由は極めて薄弱であらうように思はれる。
　英國勞働黨の將來は今日に於ても尚ほ未知の或ものを包含してゐる。それは共産黨と勞働黨との消長如何の問題である。九月上旬にハルで開かれた勞働組合の大會では明白に共産黨の綱領を否決したけれども、勞働組合内部に共産黨の勢力の浸潤してゐることは掩ふべくもない事實である。將來共産黨が勢力を擴張する場合には、今日の勞働黨は次第に昨日までの自由黨の地位に押返されるのではあるまいか。然し之れは單に一應の

向としてのみ之を論じ得るに止ることは勿論である。

勞働黨内閣は十一月四日に辭表を出して、後壘を保守黨の領袖に讓つた。ボールドウイン内閣は舊聯立派の勇將チヤーチルを副總理の地位に据え、チヤエンバーレンを外相とし之に純正保守黨の政治家を配して大内閣を組織した。之に依つて多年不安不定の空氣に惱された英國の政界も小康を得ることが出來るものと觀測せられてゐる。

新なる人は新なる政策をとるであらう。從つて特惠關稅やマツケンナ稅も再び論議されよう、英露協定とジエネバの議定書の成立は危殆に瀕したようにも思はれる。シンガポールの海軍根據地は程なく工事を再開されるかも知れない。然し英國の國策は何人の内閣に於ても根本的に變動あるべきものでない、周圍の境遇も亦しかく容易に急激な政策の變更を許さないであらう。吾々は靜かに保守黨政府今後の施設を注視して批評を他日に期する外はない。

○

ロード・ロバート・セシルは歐洲戰後の米國の地位をナポレオン戰爭後の英國に比較したが、この比較は必ずしも當らない。十九世紀初頭の英國の覇業は歐洲内に止つてゐたが、現代に於ける米國の優越な勢力は全世界を厭倒してゐるからである。歐洲戰爭は全く新なる米國を產み出した。それは米國が數百萬の陸兵を武裝し、世界海軍の第一人者たる地位に上つた許りでなく、同時に世界に於ける最も優勢なる商業國、工業國、資本國、而して海運國となつたからである。かくて世界金融市場の中心はロンドンから紐育に移つた。現世紀に於ては國際金融の中心は直ちに國際政策の中心である。金の集る處が即ち權力の萃る處である。

歐洲は今、財政經濟的に疲弊の極にある。亞細亞は四千年の文明の痼疾よりまだ恢復後の衰弱に惱んでゐる。太西洋も太平洋も共に米國の力強い手を求めてゐる。歐洲の復興は米國の物質的援助によつてのみ期待し得る如く、亞細亞の開發は米國の方寸によつて決する處が頗る多い。これ即ち米國の覇業が全世界を厭倒してゐるといふ所以である。

斯く駭月すべき物質的進步を示した米國も其政治的制度の上に於ては今尙ほ南北戰爭時代の南北對時の政爭を繰返してゐるように思はれる。殊に本年十一月の選擧が示した結果は米國に於て歐洲流の政黨觀念が發達することは前途未だ容易でないとの感想を深くせざるを得ない。

米國の政黨は今尙地理的區分に其基礎を置いてゐる。東部、

西部並に南部がそれである。各地方にそれ〳〵其傳統と偏見と利害關係とを有つてゐて、それが政黨の組織に大な意味を與へてゐる。以下簡單に米國の政黨を作り出した各種の社會的勢力及び要素を觀察して見よう。

米國政黨の組織に最も大なる關係をもつものは各種の社會的團體であるが、これ等の團體は多くは同一の信仰、人種、階級及び職業に依つて構成せられるものである。これ等の團體と政黨との關係が延いて政黨その者の性質と機能とを表示するものである。

米國の政黨は地理的區分に其基礎を置いてゐると云つたが、米國の如く南北によつて其風土を異にし、利害を別にしてゐる地方に在つては、地方に依つて特殊な地方的感性が培はれ、是に人種と階級との關係が織り込まれて所謂ソリッド・サウスといふ堅固な政治團體が出來上るのである。

南部十一州は全米の人口百分の一を占める地方であるが、これは全部打つて民主黨で固まつてゐる。ニウ・イングランドと中西部諸州は常に共和黨に依つて握られてゐる。そしてメイン、ニウ・ハムプシア、マサチユセツツ、ヴアーモント、ペンシルヴエニア、オハイオ、及北西部のミシンガン、イリノイ、アイオワ、ネブラスカ等も九分通りは共和黨の地盤である。

前記の地方は殆んど固定した兩黨の地盤であつて大統領選擧に於ては殆んど向背を變へることはない。此等の地方主義が強い力をもつてゐるのは單なる感性のみの問題でなく、それに特殊な地理的地位と、經濟的又は人種的要素が結合してゐるからであつて、南部十一州の結束の如きは即ち其例である。其外、例へば關税法規、所得税、通貨等の問題に就ては東部の資本家と、生產者の多い西部の人々とは相反する利害をもつてゐる。又共和黨內の進步派の運動、農民運動等はいづれもミスシツピー流域及び其以西の諸州から起つてゐる。これ等は矢張り東部の資本閥に對する反抗の聲である。

更に經濟的條件に依つて區別すれば東部を中心とする銀行業及び製造業、南部を中心とする棉花栽培業及び舊式農業、西部に主力を有する新式農業は今日まで東部を共和黨に南部を民主黨に傾かしめ、西部は不確定の地盤のまゝに殘つてゐる。

地方的利害の外、職業に伴ふ階級的團體の勢力も政黨の形成に大な形勢を與へてゐる。南北戰爭以來米國に於て最も大勢力を持つ團體は實業家の團體である。之に對して中產階級を爲すものは農民階級及び小實業家、俸給生活者である。米國に於ける勞働階級は英國の如く大勢力なく、中流階級も其數に於て群を拔いてゐるが、政界の勢力は特に顯著なるに至らない。

實業の中心は北東部である、南北戰爭以來常に共和黨に左袒してゐる。然しいづれの國にもある如く實業家階級には事大主義者が多い、其州の大勢に從つて或は共和黨に或は民主黨に傾いてゐるのが大多數である。南部の實業家が多く民主黨に屬してゐる等も其適例として見ることが出來る。從つて實業家階級には嚴格な政黨觀念が存在してゐない。いづれも事業本位であり、保守的であることは南北を通じて同一の傾向にある。

中流階級、即ち組合外の俸給生活者や小商人、職業團體等は北東部及中部では共和黨に傾き、南部では多ゝ民主黨に左袒してゐるが、西部ではむしろ進歩派に趨る傾向を帶びてゐて、黨派の民主黨たると共和黨たるとを問はない。約言すれば中流階級には智識階級の獨立投票者も居るけれども、多くは一定の結合なく保守、自由等の傾向に依つて互に分割せられてゐる形である。

○

米國に於ける勞働黨の發達は極めて困難であつて、今後工場勞働者の數が一層增加しない限り、當分英國や佛國の域に發達せしめる見込はない。この事實は今年の政戰に於ても明瞭に證據立てられた處である。

組合勞働者は南北戰爭以來漸次に政黨的運動を開始したけれども、其進歩は極めて遲々たるものである。勞働組合は亦つとめて政治運動に吸込まれることを避け、主として各自の職業的利益を擁護することに全力を盡してゐる。今日まで創立された各種の勞働運動——勞働革命黨、合同勞働黨、社會主義勞働黨、並に近年の農民勞働黨の如きいづれも其大を爲すことが出來なかつた。そして共和民主兩黨は爭つて勞働者の投票を萃めることに腐心し、第三黨や社會黨も勞働組合に握手を求めてゐるが、いづれの黨派も彼等の投票を獨占し得たものはない。

農民を糾合して政黨を組織しようとする企は從來屢々試みられ、前世紀の末葉にはグリーンバツク黨とか人民黨とか稱する結社が出來、最近には無黨派同盟と唱へて北西部に農民黨組織を劃策してゐる者があるけれども其勢力は極めて微々たるものである。都市の勞働者と農民とを結合して政黨を組織せんとする企も同樣に失敗に歸した。これは主として各種の勞働團體を結合するに足る共通の目的がないからである。農民勞働黨が成長しない理由は（イ）都會と田園との利益の衝突、（ロ）都會人と田園生活者との間に勞働者統一に對する態度の相異してゐること、（ハ）共和民主兩黨より挾擊せられること等を舉げることが出來る。然し、其間に對する彼等の反抗心は其等の當然

に通じて相當に强烈であるから、之を利用するに於ては勞働黨の結束は決して不可能ではない。

米國に於ける異人種の勢力も政治的に之を閑却することは出來ない。勿論南部諸州の有色人の如く民主黨に對して大勢力をもつてゐるものと、常に變遷して固定しないものとある。例へば獨逸人系は共和黨か、又は進歩黨に趨り、愛蘭人は民主黨に左袒する。スカンヂナヴィア系の約三百萬人は共和黨、殊に進歩派を扶けてゐるに反し、波蘭人は民主黨に傾く者が多い。

斯の如く米國政黨の基本的組織には毫も政治哲學の要素を含んでゐない。從つて民主黨と共和黨とは年來相對峙してゐるに拘らず兩黨の政綱には恰んど共差異を認めることが出來ない。一九二〇年の選擧には兩黨の異る論點は外交問題に關するもので、而もウイルソンの聯盟に反對するか否かの點に止つてゐた。一八九二年には共和黨の政綱に二十項、民主黨に廿二項を數へたが双方の差のある處は關稅率に關する唯一項丈けであつた。

夫故に米國の大統領選擧は主として地方的又は人種的傳統により、之に大統領候補者の人氣と人格が決勝的大影響を與へる要素となるのである。

○

本年の大統領選擧に際し、共和黨は年來の傳統により前任大統領クーリッヂを候補者に推した。共選擧の綱目は、稅制改革及財政緊縮、對外債權の整理、保護關稅政策、農村救濟、勞働者の地位の改善、綱紀肅正等であつた。

民主黨は一九二〇年の慘敗に鑑み、又現政府の高官に非曲の行爲があつた後をうけて、國民の輿望に副ふ候補者を押立て、一擧にして共和黨の根據を覆へす計畫であつたが、六月より七月に亘る豫撰大會に於てはマッカヅーとスミスとの間に白熱的競走行はれ前後百〇三回に亘る投票を繰返して尙決せず、遂にブライアンの仲裁によつて漸くデヴィス氏を大統領候補者に推薦した。

民主黨の高唱する旗印は何と云つても先づ共和黨政府に對する攻擊である、共和黨を以て特權階級の擁護者であると攻擊し、差別的立法の是正と人權の擁護とを强調した。民主黨の共和黨政府に對する攻擊の焦點は左の數項であつた。

一、共和黨政府の腐敗
二、農村救濟の失敗
三、不正非論理的な關稅

四、共和黨の外交が米國を孤立せしめた事
五、税法改正に依り政府は特權階級を利益せしめたこと

第三黨の政綱は傳統的に旗幟鮮明である。それは一八四八年に於けるフリー・ソイル黨の奴隷問題以來常に同一の傾向にある。第三黨は既成政黨に對する民衆の不滿と經濟的社會的不平等に對する反抗の氣運に乘ずることを覗つてゐる。この運動を率ゐるものはワイスコンシンの上院議員ラ・フォレットであつて之に聲援を與へるものは農民勞働派、社會黨、勞働組合の多數、並に北西部に根據をもつ進歩派であつた。

共和、民主及び第三黨の大統領候補者の内で、個人的名聲から云つても最も有利な地位に在つたものはクーリツヂである。

クーリツヂは常勝の政治家である。選擧といふ選擧には一度も落選したことがない。彼は寡言にして實行を尊ぶ人である、そして正直、質素、勇氣、謹嚴を以て知られてゐる。一九一九年の九月ボストン市に起つた警察官の罷業に際し、州知事としてのクーリツヂが執つた果斷公正な措置は天下の耳目を聳てしめた。「法律と秩序」といふ旗印を以て善戰した奮闘振は一躍して彼を國民的人物にして了つた。然し彼の政治方針はどこ迄も健實な方針を捨てない。「政治には體裁を少くし、實質ある仕事を多くしなければならない」といふ主張である。

クーリツヂは人氣男ではない、然し現代の如き不安と險惡との世相に對照して彼の威嚴ある人格と、明晰な頭腦と忍耐とは米國の人心を繋ぐに充分である。米國人は人氣役者を捜し得ないで、健實な公平な大統領に一票を投じたものである。

民主黨の候補者デヴィスの名は米國に於て餘り知られてゐない、それは從來彼が米國の政界に於て著しい役割を演じた事のない爲である。彼は久しく辯護士として米國一流の名聲を博し、明晰簡潔な辯論を以つて聞えてゐる外、一時在英大使として、ウォルター・ページの後をうけて倫敦に使したことがある。彼はセント・ジェームス宮廷に使する以前から典型的の英國紳士であつたから、米國の民衆を動かす力に於て、ローズヴェルトやブライアンに及ばざること遠い、此點が今年の政戰に於て民主黨の頽勢を挽回し得なかつた主なる理由であるだらう。

第三黨の候補者ラフォレットの名は六年以前にはアメリカの民衆の前で公然と呪はれた名であつた。それは彼が米國の參戰に執拗に反對したからであつた。彼は平和論者、親獨派として凡ての悪罵嘲笑を身にうけたが、ウイスコンシンの州民は依然として彼に對する信任を失はなかつた。

戰爭が終り、引つゞいて農産物の價が低落するやうになつて彼の聲望は益々高くなつた。本年の選擧以前には南北ダコタ、

ミネソタ、モンタナ及びアイオワの諸州が彼の指導の下に動くと稱せられてゐた。

ラ・フォレットが大統領戰に當選のチャンスを持つてゐると、何人も信じてはゐなかつた。それは彼自身も重々承知してゐた、彼の目ざす處は上下兩院に於ける進歩派の勢力擴張である。一九二八年の大統領選擧に一層有利な戰を闘得んが爲である。

七月四日クリーヴランドに開かれた、進歩派大會はラ・フォレットの立候補を彼自身の政綱の下に支持すべき旨を決議してこゝに米國の第三黨は全國に向つて其旗揭げを聲明した。然し其大成はこれを永い將來に待つ外ないように思はれる。

北米の選擧戰は六月の豫選に始まつて選擧期日の切迫と共に三黨の巴狀戰は益々白熱化した。クーリッヂは多く首府を出でず、默々として期日を待つたが、他の候補者連は國中を遊說して力戰大につとめた。ラ・フォレットは專ら北西部を根據として共和黨の地盤及び東部に侵入し、共和黨も亦民主黨弱しと見て力をラ・フォレット討略戰に注いだ。前に述べた如く今年の改戰に於て興味の中心はいづれの黨派も過半數を得ずして大統領選擧が議會の手に移ることとなきやの點にあつた。ラ・フォレットの差當りの目標が之にあつた耳ならず民主黨も亦この僥倖を萬一する爲めにラ・フォレットと默契したやうな形跡もある。共和黨がラ・フォレット根據地へ突擊したのはこの策略の裏をかいたものであつて、今回第三黨の慘敗は專ら共和黨力戰の功に歸すべきである。

十一月四日の大統領選擧は共和黨に壓倒的多數を與へた。

クーリッヂ（共和黨）	三七九
デヴイス（民主黨）	一一三
ラ・フォレット（第三黨）	一三

この結果は豫て豫言せられた共和黨の得票を遙に超過するものであつて、民主黨の振はないことは餘儀ないとしてもラ・フォレットが僅に其の出身地ウイスコンシン州の十三票のみを得るに過ぎなかつたことは世人の均しく意外とする處であつた。

共和黨の勝利はクーリッヂの人格と共和黨の作戰の宜しきを得た結果であつたらうが同時に米國の人心が安定を希ひ、急進よりも常識政治に信賴せんとする傾向を裏書するものである。

米國に於て第三黨を組織し、之に勞働階級と急進的分子を糾合せんとする計畫の極めて困難なることは今回の選擧が明白に之を證明した。

大統領選擧に引きつゞいて行はれた上院議員の三分の一改選及び下院議員の改選に於ても共和黨の努力は一層有力となつた。

	(新上院)	(新下院)
共和黨	五一名	二四三名
民主黨	四一名	一八六名
農民勞働黨	一名	二名
社會黨	―	二名
所屬不明	―	二名

共和黨の大勝の裏面には選擧運動費の豊富であつたことも之を見逃してはならない。

大統領選擧の運動費は共和黨三百七十四萬二千弗、民主黨五十五萬二千弗、第三黨十七萬一千弗と稱せられてゐるが、この數ケ月間に共和黨の消費した資金は事實一億弗を超えてゐるとも、或は三億弗に上つたと云ふ者さへある。それは一九二〇年の選擧にシンクレアー會社が二千萬弗の運動費を寄附した事實に徴しても運動資金の如何に巨額に上るかは想像するに難くない。

新大統領は國務卿ヒユースの掛冠を承認するとしても、又は之が留任を希望するにしても外交政策に於ては殆んど多くの變化はあるまい。唯現在の米國當局者には日本の友人である政治家が決して尠くない事實幷に上院に於ける外交委員長や移民委員長が近く更迭すること等を思ひ合せて、日米國交の將來の爲

に吾等は新議會と新白亜館の主人とに多くの期待を置かざるを得ない

警視廳本來の職責とスパイ問題

警察權の濫用と間諜制度

長谷川如是閑

人間の心の働きには統一があると云はれるけれども、その統一とは、必ずしも心の働きが何時でも全く同じ態度を保つといふ意味ではない。いろいろの矛盾した心の作用が、一つ人間の心理に働いてゐる。例へば甲が乙に對して常に善良であらうと心掛けてゐる場合でも、甲は往々それを裏切るやうな心的態度を乙に對して執ることを免かれない。何かの場合に、乙が或る事柄に就いてどんな風に考へてゐるかを知らうとして、表面からそれを察しられないやうな手段で、探り出さうとするやうな方法を取ることがある。之れは即ち甲が乙に對して如何に善良の心を持つてゐても、時に免かれない方法である。

かういふ方法がどうして必要であるかと云へば、甲が乙を完全に知らうとする爲めである。互ひに何事かを知り合はうとする場合には、親子兄弟でも、また親しい友人の間でも、お互ひを知らうとしてゐることを覺られまいとして、いろいろの手段を運らすことのあるを免かれない。何故にさういふ手段を取らねばならぬかと云へば、人間は互ひ互ひを諒解することによつて共同の生活を完うすることが出來るのであるが、それと同時に個人は何かしら他人に全く知られない或る物を持つてゐることによつて、個人的生存を意味あるものと考へる傾きがある。言ひ換れば、人人は相知ることによつて社會的生活を營むのであるが、同時に他人の理解を超越するところに自己の個人的生存の根柢を置かうとする。

この人間の社會生活と個人生活の矛盾の爲めに、人人は他人の裡に、又、他の集團の裡に間隙を持つのである。普通解り合

ひの生活に於ても、家族同志よく理解し合ふ事が必要であるが而かも各の家族は各自の秘密を持つことによつて、自己の家族生活の安全が保たれるものと考へる。イギリスの如きは、他人の家庭を透き見した者が損害賠償の責任を負はねばならぬ、といふやうなこともある。が、社會的共同生活は互に相知り合ふことによつて保たれるのであるから、家族同志も亦各の隣人の家庭の内部に對して知識を得ようとする。そこで互ひに女中や出入商人やを通じて、お互同志の内部を知らうとする。之れは即ち各の家族は他の家族に對して間諜を持つてゐるのである。

平和の生活に於いて、各が他人の裡に間諜を持つといふことは、共同生活を可能ならしむる共同の心を成立させる手續きとしてであるが、人人は其處に、他人の裡に、自分と同じものを見出す場合もあれば、又、自分と違つたものを見出す場合もある。同じものを見出した場合には、其處に共同心の結帶を見出すのであるが、違つたものを見出した場合には、其處に一種の内部闘爭を見出すのである。此の後の場合は、人人が他に對して自分を防ぐ必要に役立つ譯である。さういふ内部闘爭の存在を氣附かずに過すといふことは危險なことである。やがてその爭ひが現實化した場合に、さういふ傾向の潜んでをつたことを知らなかつた方は、最も打擊を受くる譯である。潜在的の動機を知るといふことは、人間的生存の上で極めて有力の働きをするのである。從つて人と人、又は集團と集團とが敵對的の關係にある場合には、互ひ互ひの爭ひの心的並に物的事情について、最も正確に知り合ふことが、互ひの生存の上の必要なこととなる。だから特にこの場合に間諜が必要であることを感ずる。

間諜といふものの社會的の意味は、右に言つたやうなものであるが、それによつても明かである通り、間諜には二つの種類がある。

一つは共同生活の心的諒解を目的とするもの、

一つは爭ひの生活の必要を持つものである。

されば間諜は敵味方が互ひにそれを持つと同時に、戀人同志がお互ひの間にそれを持つ。一つを善意の間諜と言へるならば、他の一つを惡意の間諜と呼ばねばならぬ。が、善意の間諜も實は間諜が役立つ時には、其處に爭ひの動機を豫見するのである。戀人同志の間諜が動員される時には、爭ひに對する豫感が働いた場合である。而かも此場合は間諜が活動した結果、何等爭ひの動機が見出されなかつたといふことの爲めに、共同心が一層堅固に結び着けられるのである。だから間諜は要するに惡意の間諜が本質的である。

社會生活に於いて免かれることの出來ないかやうな沒道德的

の行動は、それが病的に昂進する危險を持つことは無論である。軍事、政治、商業、警察等の生活に於いて、間諜が極度に濫用されてゐるのは、即ちその病的昂進である。

今警察の場合に之れを限定して考へて見ても、警察といふ機關は社會的保安の機關である。保安といふことは即ち爭ひの要素が現實に働き出すことに對して防護するのが、その第一の順序である。之れには自然と人間との爭ひも包含されるが、今はその場合は姑く措いて、人と人との爭ひの場合に就いて云ふならば、爭ひのエレメントを見出すことが最も之れに對する賢い方法である。病氣に對して病菌を見出さなければならないやうに、社會的危害に對しても、それを原素に於いて捉へることが必要である。而かも之れを原素に於いて捉へることの爲めにはその爭ひの主體の內部生活に立入らねばならない。互ひの味方は、自己の集團の內部生活によつて自分の組織の原素的な知識を持つことが出來るが、敵方に對しては、全く外部的の地位にある。だからそれが不可能である。其處から間諜制度が出來上つたのである。即ち敵の內部生活に立入つて、彼の生活の原素的の部分に接觸するのである。

この制度は無論平和の生活に於いても、常住行はれてゐるのである。民族同志が互ひの生活の見習ひに往復する。學術修業に留學するといふやうなことは、同じ働きである。故に爭ひが起つた場合には、その平和手段そのものが一種の間諜手段であるといふことになるので、絕對にさういふ交通が禁止される。爭ひの場合は、あらゆる手段を以てこの內部生活への接觸を圖る。さうして爭ひの計劃に就いて出來るだけ無知であることを免かれやうとする。

社會的に右のやうな意味のある限り、間諜の制度は、內容は進化し變遷するであらうが、恐らくいつまでも繼續するであらう。警察の場合に殊にそれが濫用される傾向を持つ理由がある

警察は元來國家の機關ではなく、自治體の機關として發達した制度である。最も發達した警察は最も自治的である。それは二つの意味で自治的である。一つは反國家的である意味で、又一つはその組織が自主的である意味である。元來自治體そのものは本來の性質上反國家的のものである。從つてそれに隸屬する警察は、人民の側に立つて國家に對するといふ意味を有つ。けれどもこの働きは今日までの國家の作用が有力である爲めに、決して徹底しない。即ち警察は多くの場合國家に隸屬する。（支那のやうに國家が薄弱な國では、警察は人民の側、即ち商

業會議所のやうなものに隷屬して、國家に對抗するが、有力の國家ではさういふ現象は今のところ認められない。自治體に隷屬してゐるが、事實は國家の目的に全的に從屬する。）けれども第二の、彼自らが自主的の組織であるといふことは、往々徹底的に發展する。それは國家の生活又は自治體の生活を離れて一種の警察生活を組織する。私は假りに之れを警察ギルドと呼ぶ。

この警察ギルドは、國家がどう進歩しようと、自治體がどう發達しようと、自分だけの組織で進展して行く。而して警察自身の生活は、前に云つた如く、危害の知識を第一次的の要件とする。從つてその手段は前述の惡意の間諜を最も必要とする地位にある。普通の生活に於いては、寧ろ善意の間諜が一層必要なのであるが、警察に取つては、之れに反して善意の間諜は全く必要がない。普通人は假令間諜を働かした場合にも、それが何等爭ひの要素を見出さなかつた時に、滿足を感ずる。即ち善意の間諜に於いて滿足を感ずる。之れに反して警察は、その場合には失望する。間諜がそこに爭ひの要素を見出し得た時に滿足する。即ち惡意の間諜に於いて滿足する。この心理の爲めに警察が間諜に於いて特殊の地位を持つこととなる。間諜制度が軍隊と警察とに於いて最も發達した所以は其處にある。政治も亦在來の形式に於いては、協同の組織ではなく、支配の組織、即ち強力の組織であるから、之れ亦爭ひの過程である。其處で惡意の間諜が有力に立ち働く。商業も亦經濟的協同でなく、經濟的鬪爭であつて、一方の損失は他方の所得であり、他方の所得は必ず一方の損失であるといふ過程である。從つて惡意の間諜が必要となる。凡べて今日の社會組織は協同の過程に立脚しないで、軍國的征服以來の、そして軍國的征服と同質の、強力の組織に立脚してゐるので、間諜の社會的必要は惡意に濫用される。

警察はその意味に於いて軍隊と同じく、徹底的に間諜制度の利益を有つものである。而かも之れは、警察に於ては一概に排斥されない。

と云ふのは、今日の社會組織に於いては、特に複雜な組織的犯罪が横行する。この組織的犯罪は必ず一種のギルト的編成を持つものであつて、やはり政治團體、軍國團體、商業團體と同じやうに、一つの有機的の集團をなして、一種の犯罪社會を造つてゐる。イタリイのカモーラとかマフイヤとかいふ有名な犯罪團體の如きは、國際的に連絡を取つて丁度資本家團體又は勞働團體が國際的組織であるが如き、系統的の組織をもつてゐる。社會がかやうな犯罪ギルドと戰はねばならぬ必要を持つ間は、世界の警察は惡意の間諜の必要を[illegible]。日本の海

摸、博徒、故買者其他種々なる犯罪ギルドも亦、社會がそれと戰はなければならない集團である。警察は之れと戰ふ爲めには、所謂諜者を必要とする。さう事情が、警察から間諜制度を除き去ることの出來ない理由である。

ところが今日の各國家の警察は、右に云つたやうな必要を病的に濫用さしてゐるのである。彼等は社會がそれと戰はねばならない犯罪ギルドに對して間諜制度を用ゆるよりも、寧ろ他の方面にそれを濫用することによりて、反社會的の結果を持ち來たしてゐる。即ち警察は國家又は階級に隷屬して間諜を政治的又は階級的利害の鬪爭に濫用するのである。政治團體の運動に對して盛んに警察の間諜が利用される。又勞働團體その他の社會運動に對して盛んに間諜を警察側が利用する。而して今日の警察の間諜の最も有力なる部分は、この方面に使用されてゐるのである。ところが政治團體や勞働團體や、社會運動の團體は、決して犯罪ギルドではない。是等の運動者に對して綿密な間諜制度を利用してゐるのは、全く是等の團體を犯罪ギルドと同視する階級的心理狀態に基いてゐるのである。政治家にとつては反對黨が猛烈な運動を起すのは、電車内で掏摸に覘はれるよりも危險に感ぜられる行動である。故に政治家は反對黨の行動を犯罪ギルドの行動以上に危害視する。又勞働者のストライキは資本家に取つては、强盗に僅かばかりの現金を持つて行かれるよりも恐ろしいことである。從つてこの階級は勞働者の行動を犯罪ギルト以上に危害視する。又軍人に取つては、平和運動者が軍國主義撲滅の運動をすることは剽盗に襲はれるよりも恐ろしい。で、彼等に取つては、平和論者は剽盗以上の危險人物である。さういふ風に階級的利害が相手方を犯罪ギルド以上に危險視せしむる爲めに、警察機關を使用する力のある階級は、警察をして是等の非犯罪團體、即ち社會的の團體を犯罪ギルド同樣に取扱はしめる。從つて警察は是等の社會團體に對して、犯罪ギルドに對すると同樣の取扱ひをすることゝなり、間諜制度が盛んに是等の諸團體に警察側から利用されるのである。

されば警察が間諜制度と離るべからざるものであるにしても、國家なり權力階級なりがこの警察を利用して、犯罪ギルドでないものに對し、犯罪ギルドに對すると同じ手段を用ひさせることがなかつたならば、差し當り警察の反社會的性質は大部分滅却される譯である。(尤も政治的又は社會的運動團體が往々犯罪ギルドと同じ行動に出ることがある。警察が是等の團體を犯罪ギルドと同樣に取扱ふことを、その理由から肯定しようと

する。けれども是等の團體が純然たる犯罪ギルド的のものであるならば、それは社會的協同團體ではない。從つて之れを犯罪ギルド扱ひにするに差支へない。けれども今日是等の團體に於いて往々犯罪的行動が現はれるといふところから、それを全體に犯罪ギルド扱ひすることは間違ひである。のみならず、國家なり階級なりが是等の團體に對し暴力的壓迫を加へることが、概ね是等の團體をして犯罪行動を取らしむる動機となつてゐる。この强力的の壓迫が熄めば、是等の團體の犯罪行動も自然消滅する。）即ち國家が政治運動又は社會運動に對し、其等は一つの社會的協同の爲めの努力であつて、鬪爭による支配の過程でないことを諒解するならば、警察が今日のやうに是等の團體を犯罪ギルドと同樣に扱ふことは自ら已む譯である。從つて今の警察の反社會的行動は、決して警察そのものゝ責任ではなく、國家並びに權力階級の責任である。警察は只一つの武器として、之れを用ゆる者の意思により、善良の武器ともなり、凶惡の武器ともなるのである。

警察改造の根本問題を論じ併せてスパイ政策に及ぶ

法學博士　松井茂

總ての事業は人を離れて存在しないものであることは、古今東西孰れも同樣である。警察の根本問題も警察官の素質の改善が第一義であらねばならぬ。明治初年の我國の警察が光輝を放ちたる所以は、維新前の氣風を承け、一種の武士的精神が活躍して居たるが爲めである。殊に當時の警察官は武士より採用したる爲めに適當な人材も少くなかつた。譬へば會津の警察官が鞭韃に於て出藍の譽れありしは、畢竟會津には志士多く、殊に維新の際慘狀を呈したるの後を承けたので、士族救助の爲めに

警察官の募集員を同地に向けたが、彼等士族は思へらく、新成の警察官吏は棍棒を以て巡廻する如き者の類は、從來苟くも武士が日本刀を腰にせる者とは日を同くして語るべきものではなく、是れ全く足輕の徒に過ぎざるが故に斷じて之が募集に應ずる能はずとして拒んだが、藩公は苟も警察官吏は皇國の爲めに貢献すべき新たなる重大なる職掌である以上は、斯くの如き形式論に拘泥することなく其職に就くべしと勸誘したので、彼等も終に之を快諾し警察官吏の募集に應じたのである。斯くて百三十人の志士は東京に出でゝ全國の模範警察官吏となり、互に武士の面目を汚さゞるやう盟約を結び、獻身的に義士的行動を執つたる結果は、會津出身の警察官が能く我警察歷史の上に精彩を添へた所以である。

今日に於て斯くの如き警察國家時代の事を想見するときは種種缺陷の多かりし事もあらんが、又其間に存在せる氣風凛々たる活精神は今時に於ても之を尊敬思慕するの價値がある。而して今や警察官吏の素質低下し來りつゝある所以は果して誰れの罪であらうか。國民の生命、財産に直接關係を有する警察官吏の質の如何は、民衆の利害休戚に至大の關係を有するものである以上は、今に於て斯くの如き重要問題を輕視することは悔を千載に殘すものであつて、一日も速かに此問題を解決する必要がある。殊に一度警察官吏となりたる者に對し、之が教養、訓練を施すことは、警察官吏の素質の改良と並んで實に警察改造上の根本問題である。今や歐米では勞働者の爲めに勞働大學の設けさへある位である。直接民衆に接觸すべき警察官吏が夫れに相當する教育を受くべき要あるは云ふまでもない。獨逸が戰後財政不如意の際であるにも拘はらず、特に警察官教養の爲めに全力を注ぎつゝある所以も決して偶然でない。余が數年來微力を我國幹部警察官教養の爲めに致しつゝある所以も、畢竟するに警察官の教養が百年の大計上最も急務なりと信じたるが故である。然るに我國に於ては兎角未だ警察教育が一般に諒解されて居ないのは甚だ遺憾の次第である。而して斯くの如き教養問題は其性質上頗る困難なる事業にして到底他の特種教育の比ではない。何んとなれば警察事務は其性質上最も活動的なるもの故、活きたる教養を施す事が必要であるからである。故に實務に精通すると同時に、又社會の活事情にも通じ、更に又警察官の精神問題に對しても最も注意を拂ふべきものである、

獨逸普國に於ては近年財政上不如意を感ずるに係らず新に內務省內に警察教育課を設け、更に又高等警察學校をも新設したるが如き、孰れも皆世界の大勢上歐米文明國が其緊要なる事を自覺したるが爲である。我國の如き警察教育機關の存廢が、行

政整理の問題となるとは日を同じくして語るべき所ではない。又北京でも夙に大々的組織を以て高等警察學校を設立して居る位である。又昨年米國ニューヨークに開催されたる萬國警察會議に於ては、警察大學設置の說が唱へられたるのも偶然でない。國際警察の發達せる今日警察官が時勢に適應すべく警察智識の發達を期すべき事は云ふまでもない。是れ余の既往數年間警察教育の爲めに微力を致したる所以である。元來警察は國民の感興を離れては發達すべきものではない。それは國民が能く警察の高尚なる社會奉仕の眞意義に徹底せば、當然警察官吏の志願者も其の素質を高上するに至るに違ひない。歐洲に於ても曾て丁抹の總理大臣たりしリーベは其位置の然らしむる處如何なる方面にも其子の就職の爲めに盡し得るにも拘らず、其子が大學を優等にて卒業するに當り、進んで巡査の職に就きたるに對し父子は何れも喜んで滿足して居るが如きは、畢竟警察の職の高尚なる社會奉仕なることを自覺せるが爲めである。又米國加洲バークレー市の警察官が一度巡査となりて以來、實務の傍ら熱心に教養を行ふ爲に三ケ年の後は大學卒業生と同一の學力を有して居り七萬の人口を有せる當市として僅に三十三人の巡査を以て能く其の職務を遂行し得て居るのは、結局警察教育の充實せる爲に外ならぬのであるが、我國の現狀では中學卒業生も猶好んで巡査を志願することを望まざる實況にして、要するに警察の職責が未だ社會的に了解せられざるが爲めであつて、其の天職を一般に諒解せしめることは殊に我國情に於て最も急務なりと云はねばならぬ。是れ余の將來一生を國民警察獎勵の爲に致さんと志す所以である。

社會の進歩に伴ひ各種の危害は益増加するが故に、國民は各自災害防止の觀念に自覺するの要あるので、以つて又安全教育を盛んにすべき傾向を呈し來つたのである。即ち家庭、學校、社會の各方面に於て衞生、犯罪、防火、交通等に關し之が安思想の注入が急務である。又之と同時に警察官吏の教養が伴はねばならぬのは勿論にして、米國紐育に於ける有名なる前警視總監アーサー・ウッヅは夙に警察教養の必要を絶叫して云ふには、若しも國民が無教育なる警察官に生命財産を委託して敢て顧みざるが如きは實に其意を解し得ざる處であると、實に至言である。

今や我邦に於ても普選問題の絶叫されつつある時に於て、殊に昨年の大震火災の跡に徴するも國民の自警思想は尚ほ頗る幼稚たるを免れないのであつた、それは將來は益々國民の災害防止に對する安全思想を振興せしめるが實に刻下の急務であらねばならぬ。

此頃余が「警察の根本問題」と題する著書を公にしたる趣旨も、畢竟警察改造の根本義は國民に警察思想を注入すると同時に、警察官吏の素質及教養の改善が根本問題であると說いた所以である。要するに國民皆警察なりとの觀念に到達し來りてこそ我國警察の改善も始めて徹底的に遂行し得らるゝのであつて今日に於て國民が眞に警察改善の事に注意を拂ふに於ては我邦の警察は、必ず將來世界に卓越せるものとして其の覇を世界に爭ひ得ることも敢て難しとしない所である。

若しそれ以上所說の警察官の素質及警察官の教育改善並に國民警察奬勵の三問題の外警察組織や警察官の待遇問題等種々重要なる事項もあるが、畢竟此等は枝葉の問題に過ぎない。

全體災害に種々の類別がある以上は之が取締に關する警察にも其の種類の頗る多いのは云ふ迄もない。高等警察刑事警察、外人警察衛生警察其の他數限りはない、殊に外人警察は其措置宜しきを得ざれば國交上にも關係を及ぼす事もあるが故に、官民共に最も注意を拂はねばならぬ。獨逸の憲法では外人警察の事までも規定してあるが、畢意之は重大問題にして國民も外人警察の事は外人保護の點より留意するの要があるからである、由來我國の探偵術は佛蘭西の如く巧妙ならず、往々にして警察が外國人の感情を害する事も少くない、夫れは畢竟偵察方法が餘り露骨に失するが爲である。

歷史上我國の警察は德川時代に於ては武斷的、抑壓的であつて、兎角探偵政策に偏し、國民は徒らに警察の恐るべきを知りて親むべきを知らず、從つて又我國の警察は傳統的に、殊に明治初年頃に至る迄は專ら司法警察に偏して居りたるが、條約改正の議が旺んになるに從ひ警察及び行刑の事務の改善が急務とせられたるが爲め、是こに漸く警察界に法律其他の知識の注入が必要となり來つたのである。然れども因襲の久しき兎角往往警察は探偵臭に偏し、甚しきは或時代には高等警察と政治とを混同したる跡もないではない。又刑事警察も缺點もあつたが又德川時代の餘弊を受けた事も少くない、夙に之を憂へ殊に高等警察と政治の混同を反撃したる次第である、何となれば此くの如きは徒らに世人の反感を買ひ兎もすれば謂ゆる坊主憎ければ袈裟まで憎しとの喩への如く、終に高等警察以外の一般行政警察にまで影響を及ぼし其の進步發達上に迷惑を來す事も少くない、かの警察が衆議院議員選擧の取締に際し、候補者の豫定數を其筋に報告するが如きは時代錯誤の甚しき事にして、百害あつて一利がない。現內閣が此點に留意し、斯くの如き惡習を除去するに努めつゝあるのは、余の双手を擧げて歡迎する處である。

全體高等警察とは上は首相より下は警視總監等に至るまで高等の地位に在る者が自ら折衝して事件の大局に就いて之れが眞相に徹底すべきものである。曾て明治四十一二年頃伊藤公が朝鮮統監たりし時代、余は朝鮮警察局長として之れを補佐して居つたが、或時公は余が常に警察の事に熱中するの狀況を見て、余を揶揄して曰はるゝには、松井俺も高等警察をやつて居るぞと。そこで余は言下に答へて云ふには、高等警察は讀んで字の如く高等の警察で、閣下も御承知の如く歐洲では主權者や、首相等が自ら機微を察する程の性質のものである。閣下が朝鮮に於ける最上幹部の地位に在りて、責任上自から種々高等上の事を直接見聞せらるゝは當然にして、余の如き下官は其の次に位する者にして、閣下等は實に其本位にあるものなりと述たるに公も莞爾として首肯されたる事があるが、畢竟公は余を試みんとされたるものである。

近時法律の思想は十九世紀の末代より、個人の自覺の外に、個人は社會の一員としての自我なる自覺を必要とするに至り、所謂社會連帶の思想も起り來つたのである。又法律の觀念には眞實、誠實の原則が最も注意すべき現象となり來りたのである。曾て英國ロンドンに於て、警察署の視察係が社會主義者の群に化裝して入込み、其本部に於て社會主義者に關する事柄を取調べて内通して居りたるが、或日其結社に屬する社會主義者の一人は、警察署の窓下を通行したるに、自分の仲間と思ひたる者が警察の事務を執り居るに驚き、大なる問題を起したことがある。即ち警察がスパイを行ひたる手段が卑屈の方法に依りたるが爲めに、遂に議會の調査委員の問題となつたる次第である。全體警察に偵察行爲の必要なるは今更言を俟たないが、只其の方法が卑屈にして且つ迂拙なるに於ては何んの用をなさぬのみならず、却つて弊害を來すものである。流石は巴里の警察は此點に於て頗る其の宜しきに適して居る。抑も世の進歩に伴ひ、益惡事の横行することは想像以上で、各個人と雖も自ら警戒を加へねばならぬは勿論である。況んや外人警察の如きは國策上より見ても能く外國の眞相を明かにし置くの必要があるのである。要するに警察偵察方法は具體的にして道義的の方法に依らねばならぬのは勿論である、譬へば外人が我國に來りたるに際し、萬一警察官の態度が不親切にして、外國人を見るに徒らに探偵的態度を以てせんか、切角愉快に我國内に旅行を企てたる外人に對し不快を感ぜしめ、其極彼等は斷然として我國を去るに至るのは當然である、されば警察官の如き直接民衆に接する者は内に誠意を包藏し、例へばホテルなどに於て猥りに外國人の年齢を調べるが如き、其他警官の方法を採るが如きは固

る慎むべき事である。從つて又警察官が外國の語學に通ずべき事の如き必要には相違なきも、此等は抑々枝葉の問題である、畢竟內に誠意があれば自然に容姿に現るゝのは當然にして、外國人も直に其の誠意に感ずべき次第である。

近時社會の危險多くなるに從ひ、民間に於ても興信事業盛に興り、殊に獨逸では近時私立探偵の事業發達し、千九百年來營業法中に興信業なる資本狀態又は個人調査を本とする職業と同樣に取扱ふことゝなりた程である。又今や漸次立派な警察出身者の人々と其任に當る事となつたのである。畢竟此等の任務に當る者の道德心が其根據とならねばならぬのは勿論である。殊に近時人權の發達に伴ひ、刑事警察の發展は一面大に科學的知識の力を借ると同時に又一面に於ては刑事警察官の人格に注意せねばならぬ事となつたのである。余が刑事警察官に對し常に刑事道德の鼓吹に務めて居るも偶然でない。古來天下の志を抱ける人々は何れも此社會の活事情に徹底すべく誠意を以て環境の眞相の看破に努めて居る、普國のペートル大王自ら職工となりて工場に入り下情に通曉したる如き、獨逸普國のフレデリック大王が農夫と共に馬を並べて社會の眞相に通曉したるが如き、我國でも水戶義公の如き、北條時賴の如き、乃木將軍の如き、孰れも皆平民的の行動を敢てし衆と共に苦樂を共にして能く社會の活事情に通曉したるものである」

警察の權力は、正義の爲めに其の應用を見るべきものにして、古人の所謂、富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈、此之謂大丈夫と云ふ、氣骨がなくてはならぬのである。而して畢竟警察が權力を應用するのは一般民衆の自由の擁護の爲めである。例へば選擧の取締の眞意は選擧の自由を保護する事にして、要するに其の權力の根柢には常に正義の觀念が一貫されて居らなければならぬ。

人間には人格の尊重と自由の制限の二方面がある。而して警察の職責は人の自由を制限をするの點に在る、然れども其の權力の行使の方法に就ては大に注意を拂はねばならぬ、然らざればとかく越權の弊に陷入り易いものである。而して此點が殊に高等警察や、刑事警察の上に於て最も留意を要する次第であつて殊に立憲國家の警察は最も公明正大であらねばならぬ　萬一警察が國家の權力を振ふに、國家なる美名の下に橫暴を逞しうする樣なる事ありては到底國家を心服せしむることの出來ないのは勿論である。スパイ問題の如きも其弊に陷らぬ樣特に留意を要せねばならぬは勿論である。

萬一スパイが橫暴を逞しくするに於ては謂ゆる虎の威を借る狐となり、古來に於ても民衆が之を虎狼視した者である。元來

非立憲時代に於ては何れの國も盛にスパイ政策を行ふたもので殊に近くは露のロマノーフ帝政時代は其弊害甚だしかつたものである。我邦でも明治二十八九年頃迄は東京府下の警察間には刑事巡査の下に公然喋者の役を置いたものである。從つて又此の如き時代に於ける刑事巡査や高等巡査の思想は偵察道德の觀念乏しかりしは當然であるが、漸次探偵思想が科學化するに從ひ、刑事警察官や高等警察官の位置が向上し來り、此等の任務に當る人は人格者を以て宛ることとなり來り、現に墺國維納警察の如きは今より二十年前に於て既に大學卒業生等を以て各分科的に刑事警察の任に當らしめて居りたる實況である。

我邦今日の現況上に直にスパイを廢すべきか是れ容易に首肯すべからざる問題であるが其の運用の事に就ては愼重の態度を採り殊に之に對する監督は眼光紙底に徹し苟も民衆を過るとなき樣多大の留意をなさねばならぬ。而して是れ實に警察の信用に關する重大問題であらねばならぬ。

全體國家の權力は其の性質上常に強大であらねばならぬ、萬一國家の權力にして薄弱なる時には、其の保護力弱く、國民の危害之より大なるはない。支那の如きは即ち其の適例である。此意味に於て我國の警察も眞正の權力は素より益々強大であらねばならぬのは勿論にして、我國の新刑事訴訟法も之に鑑みる所ありて、人權の保護上一層民衆の防禦力を強くすると同時に、一面又國家の攻擊力をも一層強大ならしむる事となつたのである。是畢竟時世の實況に鑑み此の如き立法を遂行する事となりたる次第である。

スパイを憎む

安部磯雄

スパイを利用するといふことは今に始まつたことではなく、昔からありふれた事柄である。又それは日本に於てばかりではなく、程度の差こそあるが、外國に於ても從來スパイの利用が行はれて居たことは明かである。殊に現在でも私立探偵などは

盛んに行はれて居るやうであつて、單に或國に外國人が其目的で入込んで來るばかりではなく、或場合には其國の人間を買收してスパイに使用することが今では世界の何處の國に於ても行はれて居るらしい。然し外國に其例がある故に我國に於てもスパイを使用することが是認され得る理由とはならない。悪いことは結局悪いことである。譬へば世界到る處に賣笑婦が存在する理由を以て、それを止むを得ざる存在として肯定する議論は成立たない。外國の例はどうであつても、我々は我々の態度を以てスパイ問題などに對しても研究して見る必要がある。殊に最近警視廳のスパイ問題が起り、一般の人々が之れに對して新しく考へるやうになつた際であるから、此問題に關する研究は決して無益ではない。

　元來スパイはそれを利用する側にも悪い點があるが、今はスパイ其人に就いて考へて見たい。人間には種々弱點もあり、醜悪な性質もあるが、世に恐らくスパイ位醜悪にして卑劣な者は少いであらう。それは罪の深い點から云つても泥棒や詐欺と同日の論ではなく、それ以上の罪の深さを持つて居るものであつて、若し之れを職業とするに至つては世に之れ程さもしい職業はない。我々はスパイと云ふ外國語を聞く時にはそれほどにも感じないが、之れを日本語にして間諜、廻者、探偵、裏切者と云ふ時には、其言葉の異様なる響きを感ぜざるを得ない。裏切るといふ行爲は實に憎むべき行爲であつて、スパイが悉く裏切者であり、探偵が全部さうであるといふことは出來ないが、然しスパイや探偵には何うしても裏切者になる機會と可能性が多いことは爭ふことが出來ない。或人の身上に就いて探偵する爲めには先づ其人と親密な關係になることが必要であつて、即ち同志となり、友人とならねばならないが、斯くすることに依つて相手の不利を握らうとするのであるから、それは單に欺僞的な行爲であるばかりでなく、實は友人を賣ると云ふ結果になるのである。之れを行爲として見れば之れ程の罪悪な行爲はなく、之れを職業として見る時に之れ程卑劣なる職業はない。然し此裏切者にも全く一時的なものがあつて、それは職業的にではなく、唯だ秘密の企ある處などに入り込んで、同志の一人となり、中途變心して警察に内通する者であつて、それは普通スパイと云はず内通者と呼ばれる者である。内通其事が既に憎むべき行爲であつて、人として内通者となることは許すべからざることのやうに一般の人に考へられて居るが、而もそれをスパイに比する時には、内通者の罪は遙かに輕いものと云はなければならない。何故ならば内通者は元來利害に依つて動き、或は其人間の臆病な性質に依つてさうなる處の一時的變心者に過ぎ

ないのであつて、内通者の一時的なるに反してスパイは常習的、職業的である點に於て一層前者に比して罪が深いのである。

茲に疑問とせざるを得ないのは何故にスパイに對して世間が寛大であるかといふことである。此度警視廳のスパイ問題が起つても世間は飽く迄も之れを追窮しやうとはしない。元來スパイが平氣でスパイの仕事をやり得るのは何故であるかと云ふに、そこには世人の間に一の誤れる思想があるからである。即ちそれはスパイが或場合には國家の爲めに必要であるといふ考であつて、スパイ其物の行爲は否定するが、それを國家が必要とするといふ點に肯定の基礎を置くが故に斷然之れを排斥する態度に出でない。そこで斯ういふ矛盾が茲に生ずる。譬へば此處に外國に買收されたスパイがあつて、自國の秘密を外國に賣る場合には、國民は此スパイを國家の秘密を賣る賣國奴と云つて呼ぶ。然るに同じスパイでも外國に入込んで其國の事情を探る國事探偵であるならば、若しそれが外國に於て仕事が露見して殺されるやうなことがあれば國民は其人間を志士、愛國者として取扱ふ。然しながらスパイ其物の性質から云へば、それが外國の爲めにすると、自國のためにするとを問はず卑劣なる點に於て變りはない。目的は手段を正當ならしむといふ諺があるが、同じく卑しむべきスパイ的行爲が、其目的が外國の利益の爲めにする時は賣國的行爲であつて、自國の爲めにする時には愛國的若くは志士的行爲として見るのは明かに誤れる思想であつて、元來スパイ其物が絶對に是認され得べき行爲ではないのである。

斯くの如く國際的にスパイの使用が是認される結果、國内的にも政爭のある場合などにもスパイを利用することが當然のやうに思はれて居る。元來スパイは敵の事情を探り、或は外國の秘密を探ることに最初の起源を發したものであつて、それが遂に内國の政治にまでも利用せられるやうになつたのであるが其國際的であると、國内的であるとを問はずスパイが跋扈するといふ事實は決して喜ぶべき現象ではない。現在に於ては此種のスパイを使用することは盛んであるが、前にも云つた通り、スパイは結局裏切者となる可能性が多いのであつて、斯くの如き卑屈なる手段に依る探偵政治は呪ふべきものでなければならない。

更に私はスパイの特質に就いて考へて見たい。それには私自身に斯ういふ經驗を持つて居るが、それは明治三十二三年頃、今では日本勞働總同盟の事務所に使つて居る其頃の芝の統一教會の同じ建物の中に、後には勞働總同盟の前身である友愛會を

生んだ社會主義研究會があつた。其教會に通ふ一人の熱心なる信者があつて、會員の一人として私は五六年間も交際して眞面目な人物だと思つて居たが、其後私は或事情のために教會を遠ざかり、又社會主義の運動に於ても幸徳君や堺君から離れるやうになつたが、其直ぐ後に起つた事件として今云つた教會員がスパイであるといふことが分つた。私はそれを聞いて彼がスパイであることを信ずることが出來なかつた位であるが、それが事實として證明されてから其人間は排斥されて了つた。若しあれがスパイといふ種類のものならば、私はスパイといふものに對して實に厭ふべき感情を以て見ない譯には行かない、あゝして熱心なるキリスト教信者と化け、而も社會主義運動の時などには自ら進んで激烈なる議論を吐いて仲間の者を欺くといふやうなことは卑劣極る行爲であつて、初代の社會主義運動に於ては秘密といふ物がなかつたからさういふスパイの行爲に依つて禍されるといふことがなかつたけれども、若し其處に秘密があれば其當時の社會主義者は一網打盡にやられて了つたかも分らないのである。それほどまでにして假面をかぶり、さうしてまで人を欺く、スパイの役目をする人間は寔に憐むべき人間であるか、又其行爲や實に憎むべきであるとしても、スパイが單に秘密の内通者である場合には罪は淺い。か、それと同時にさういふ人間が彼の仲間を煽動し、何か事を起させてそれを報告材料とすることがある。此度のスパイ事件の遠島某なども支那問題に就き自分の仲間を外務省に闖入せしめ、一方警視廳に電話をかけてそれを通知して居るといふことなどは、單に仲間を賣るといふに止らず、彼等を煽動して罪に陷さうとするものであつて最も許すべからざる行爲である。

私はスパイの行爲から聯想して一の例を思ひ出す。それは鴨獵であるが、鴨獵は鐵砲を放てば鴨が集まらないので、廣い池の中に人馴つてい鶩を泳がせて鴨を呼び、一方池から幅一間ばかりの狹い溝を引き、兩側に土手を作つて置いて、溝の中には餌を用意して、カチ／＼と音をさせると、馴練されたる鶩は餌のある處に向つて溝に入つて來るのであるが、其時に鶩に導かれて同じく溝に入つてくる鴨を土手の兩側から網をかぶせて捕獲するのであつて、鐵砲のやうに音がしないから何度でもそれを繰返して鴨を捕へることが出來る。即ち鶩の囮に依つて鴨を獲るのが鴨獵であつて、それは恰もスパイのやり方と同じである。心なき鶩であるが故に、鴨獵の場合に於ける鶩の行爲を卑劣と云ふ者はないが、結果から云へば自分丈けは助かるが、他の鴨の命を奪ふ裏切り者であつて、それはそのまゝでスパイの行爲である。それは詐ひ、煽動することに依つて他を陷

のである。

之れを要するにスパイ的行爲は排斥すべき行爲であつて、さういふ行動をする人格は普通人の人格ではない。國家の名に於てするスパイと雖も普通人と其人格に於て異つて居るのであつて、其處には明かに人格の缺陷がある。從つて斯くの如き野卑にして下劣なる人格的缺陷者を利用する人間の心理は極めて陰險であるべき筈であつて、即ちスパイの利用者は又同時に自己がスパイとなる可能性を多分に持つて居るのである。斯くの如き惡事の共同者は常に惡因緣に依つて附纒はれるものであつて、其場合に於ける利用者は其惡因緣に依つて相手からつけ込まれるものである。そして弱點を握られてゐる利用者は此次ぎは相手の惡事を寛大に見逃してやらねばならぬ立場に立つことになるのが普通である。警察が利用するスパイが若し無賴漢であるならば、今云つた理由に依つて之れを抑へて行くことが出來ない爲めに、結局警察の威信は無視されることになる。斯くの如き例は從來屢々聞く所であつて、それは徳川時代に於ける日本の警察の歷史にも見られるが、今日でも外人などが日本に來て大切な金時計をすりに盜られるといふやうなことがあると、警察がすりの親分に賴むと直ぐに品物が出て來るといふのは、警察がすりを取締るにすりの親分を手馴づけるスパイ的方法を執つて居るからであつて、又賭博を取締るに賭博の親分を手馴づけるといふが如き遣り方は畢竟血を以て血を洗ふものと云はなければならないが、警察が斯くの如きスパイを使用して居る間は常にスパイの爲めに苦められるばかりで警察の目的は達せられることが出來ないのである。此意味から云つても日本の警察なども、最早時代遲れのスパイ政策に對する考を棄てなければならない時であると思ふ。

スパイ政治の最も盛んに行はれるのは、之れを歷史的に見る時には、專制政治の時代程さうである。從つて其國の政治の良否を計る標準は其國のスパイ政策の利用の程度如何に依つて知ることが出來る。それは要するに其政治狀態の不良な國ほど國民の不平や陰謀を恐れるが故にスパイ政策の利用が旺んになるのであつて、昔平家が天下の覇權を握つて隆盛を極めた時に、平清盛は自己の横暴から平家を憎む者のあらんことを懼れて、同じ服裝をした三百人の幼年者を京都の街に歩かせて、平家の惡口を云ふ者を密告せしめたといふことが日本外史にあるが、元來さういふことは内に顧みてやましい處があるが故にする行爲であつて、スパイの使用の絶えない間は其國の政治狀態の不良を語る證據であるから、此點に就いては政治家たるものは一國の政治からスパイ政治を驅逐することを理想としなければな

らぬ。併し其必要を單に政府の責任問題として茲で論じやうとするばかりでなく、更に私は今日の總ゆる思想團體に對しても夫れに關する注意を促したいと思ふのであつて、若し今日の思想團體が眞に公明正大な考を持つて居るならば、といふのは必しも其主義が穩健中正であるといふ意味ではなく、或場合には急激であつても差支ないが、兎に角其主張が公明正大であるならば秘密結社といふものゝ存在は要らなくなる筈であつて、思想團體の中には常に如何にスパイが入り込んで來ても差支ないやうにして置く事が必要である。公明正大なる處にスパイの入込む隙はない。我々は將來スパイ政治の排斥を期すると同時に、それを利用する餘地を與へないやうに、總ゆる思想團體がさういふ行動を執るやうになることを希望する。

スパイ政策の今昔

文學博士　三宅雪嶺

□

舊幕府は二種の探偵を使用して居つた。一つは諸藩の動靜を知るのであり、一つは盜賊の類を捕へるが爲めにするのである。外樣を始め或る藩で謀叛を起すまいかと心配し、種々の人物を變裝させ、事情を探らせた事は一と通りでない。始めの中、相應に手筈が屆いたけれど、後にさう行かず、探るべきを探らず、探るを要せぬのを探ぐるに努め、交通便利で遊ぶに面白い所に行き、面白くない所に行かない。それで世間が騷がしくなつた頃いろいろ手違ひが起り、防ぐに難しくなつた。之れは敵國に對する探偵であり、敵國に關聯して江戸に事變を起すかの恐れあるのがある。古い所で由井正雪、後になつて外國人と交通するが如きであつて、其の爲めに幾種探偵が活躍した。更に大小盜賊が出沒し、之れを探ぐるにも骨折れたが、政治探偵と殆ど沒交渉に過ぎ、何處で統一するかが定まらず、時として老中側で統一を念としても、組織立つて續かなかつた。井伊掃部とか、小栗上野介とか、統一を謀りながら、思はしく運ばなか

つた。

□

明治新政府が出來上り、始めの程薩長土肥が幕府を倒した形になり、何處ぞで謀叛を圖らぬかと、各方面に氣を着けた。盜賊の用心するは勿論でも、それよりも謀叛の起るのに頗る重きを置いた。明治六年征韓論で廟堂が分裂してから、殘留派で極力動揺を制しようとした。舊幕の遺習で上官が憚かられるのみならず、下僚を威壓し、指揮する人物があり、大久保内務卿の如き、各地の反抗運動を壓迫するに力を注ぎ、手足となつて働く者が懸命に奔走し、何處となく殺氣を帶び、反間苦肉の策も珍らしくない。以前にも惡辣な行爲があり、廣澤の暗殺に至つて隨分甚だしいものに屬するが、大久保が一味の徒與を率ゐ、政府の中堅を形造り、秩序安寧を維持しようとし、寧ろ敵國に對する態度に出で、際どい事をするのが能力を證明するかに見える。佐賀で江藤が兵を擧げ、萩で前原が兵を擧げたのは、輕率と云へば輕率、他で煽動した所があり、前原兄弟三人が刑で死んだなど、氣の毒とせねばならぬ。サン／＼煽てて從いてピシヤンと頭を押えたのである。

□

最も苦心したのは、薩摩の西郷に對してであつて、何とかして處分したく、ウカと手を着ける譯に行かず、樣々に苦心し結果が彼の如きに至つた。初めから八ヶ月も戰爭が續くと察したならば、別に考へた所もあらうが、それ程には思はず、たいした事ないと見て取り懸つたので、四千萬圓を費した。其の費の四千萬は後の幾億に相當する。それでも次から次ぎと變亂を鎭壓し、統一の實を擧げ、それだけ大久保内務卿の下に、川路大警視が居り、警察事務を一絲亂れぬ姿で執行した。組織及び機關が整つたよりも、上下の順序で命令の行はれる事、手の指に於けるに似て居る。薩摩が兵を擧げたのは、大久保と川路とが西郷等を暗殺しようとするので、政府に尋問するが爲めと稱したが、彼等の眼にさう映じたのである。川路は陸軍少將の資格で警官を軍隊に編成し、別働第二旅團と稱して出征したのであつて、當時の警視廳は一軍の司令部と見做して差支へない。警視廳が設けられ、最も力を振つたのは、廟堂分裂の後を承け、西南戰役の鎭定する迄であつて、後に警視廳が政府の爪牙と云ふが、當時實に爪牙以上であつた。警視廳で盜賊を捕へぬでなく、それよりも變亂の鎭壓に力を用ひ、政府の中樞となつて居つた。大久保と川路とで何でも出來る。全國の兵を動すことも出來る。

□

警視廳に嘗てさういふ地位を占めて居つた。全國の事情は手に取るやうに知れ、大久保と川路とで取計らう事が出來る。陸奥が事を起さうとしたのも、手に取るやうに知れて居る。大久保は其書類を机の抽斗に入れ、知らぬ顔をして居つた。何處から何う手を着けやうなど、大久保と川路とが相談すればよい。所で大久保が殺され、次いで川路が病死した。組織及び機關は此の二人で基礎を築いたのであつて、其の後時勢の變遷に伴ひ、それぞれ變改し來たり、必ずしも人物が劣るのでなくても、前の機關が殘つて、之れを運用する人物が變じ、いろいろ事が齟齬し、往々頓陳漢を免かれない。前には敵國に對する態度で探偵を放ち、首領たるものの意の如く處置し得たけれど、後には首領がそれほど密接の關係なく、大體を締め括り、故障がなければよいとなつて居る。大山巖とか、三島通庸とかいふ間は、下僚も悧かつたけれど、後にさう行かず、警視總監が薩摩の手にあつた時さへ、川路ほどに行かず、其の手を離れてから、下僚政治といふ狀態になり、内閣更迭毎に總監が代つてから、選擧取締りにこそ總監の意の如くすれ、平時どうでもよいやうに心得、甚だしきは土偶の坊同然に見做して居る。それで川路時代の組織が殘つて居り、政治探偵に關係するのが相應にある。舊自由黨に對し、舊改進黨に對し、反對黨に對し、探偵となり、劃策して運動したのが少くない。探偵で議會に暴露されたのもある。新井章吾と、前田下學とがさうである。それ程暴露せずに過ぎたのがあるは言ふを要せぬ。第一松方内閣が選擧干渉を敢てした時、巡査が人を切つた程であり、探偵が假面を脫し、志士の態度で運動した。

□

後に議會政治が整ふに順ひ、探偵の必要が減じたが、其の頃から思想問題が昂り、社會主義や共産主義や無政府主義やに探偵を放つべき必要を生じた。併し川路時代と違ひ、兵力を以て起たうとするのではなく、せいぜいで爆彈の製造又は買入れである。之れも無いと云へず、注意すべきものであるけれど、思想に興味を感ずる者は、思想を發表して足るとするに傾き、濫りに爆彈を擲げようと考へたりせぬ。一時爆彈で痛快を感ずるよりも、思慮に富み、時勢に通じ、年數を經れば何とかなると、考へて居る。思ふ所、言ふ所で現狀破壞を志しても、暴力に訴へようとせぬ。冗談半分に爆彈とか云ふものの、之れを抛げた結果が何れ位といふ事を知つて居る。それでは探偵が着き纏ふ効能なく、更に一層危險な所を見つけねばならぬ。その爲めに人一倍現狀破壞を叫び、露國から金を得、宣傳に使用し得るとか、上海で爆彈を製造し、之れを輸入し得るとか、煽て

乘りさうな者を煽て上げる。煽てに乘ると知るか知らぬか、殘を合はせ、それに面白いと挨拶すれば飛んだ目に合ふ。冗談も云へぬとは、其處であつて、冗談から駒が飛び出さぬと限らぬ。

□

探偵は何事かあれかしと望み、之れを漁つて歩き、少しでも手懸りになるのを捉まうとする。川路時代ならば、探偵の筋書を知り抜き、探偵を使用しても、之れに使用される事がない。大切な書類でも、押へて後の經過を見て居る。警視總監が度々變り、偶像同様になつては、探偵が一大事として密告すれば、之れは大變何とかせねばならぬと云ふ事になる。多寡を括つてせゝら笑ふのもあるけれど、それで功名手柄にしようとするのがある。せゝら笑つたりすれば、今の總監は思想問題が分らぬとか、思想善導に役立ぬとか、或る方面に噂が傳はる。其處で捨てても置けず、一網打盡といふことが起り、それで何の結果になるか。泰山鳴動して鼠一匹飛び出したりする。盜賊を捕へるのに、其仲間に入り、ぐるになつて告發するのがあり、双方から金を取つたりする。危険思想では事が起らなくては手柄にならず、手柄にする爲めに事の起るべきを望む。さういふ類が可いか何うか。治安を維持するが爲めに探偵が必要であつても、之れを濫用しては利が害を償はず、恐るべき害を醸す
ぶ。

□

川路時代は確かに敵國の事情を偵察するの必要があり、それでも起らなくて濟むべき變亂を起さした。當時敵が外國に在るなど、全く考へ及ばなんだが、川上操六が獨逸より歸つてから、他國の軍備を内偵する必要を生じ、當時假想敵國に欠くべからざるものとなつた。支那を内偵し、露領を内偵した。之れ歐洲に於ける佛露同盟、獨墺伊同盟との間に盛んであり、中にも佛と獨と一心に探索し合つた。假想敵國の事情を知るのが國防に必要であつて、陸軍は他の陸軍を探り、海軍は他の海軍を探つた。日本で海軍上に必要少いけれど、陸軍で亞細亞大陸に關係あるだけ、特殊の偵察を要し、それだけ機密費が多い。主として大陸に向ふべきであつても、内地で國防を妨げる恐れあるものを鎭壓しようとし、警視廳の探偵より以上に働くのがある。警視廳で或は之を知り、或は之れを知らぬと思はれはる。或る部分で知つて居るとしても、探偵同志互ひに相知らず、互ひに様子を探り合つたりする。その點で川路時代の警視廳と今の警視廳と著るしく違つて居る。前には治安關係の探偵を警視廳の一手販賣に屬し、今はさうでなく、他により多く腕を伸すのが

ある。之れも或る程度まで必要とし、程度を越えて有害となる。探偵は必要であつても、害を生ずるが爲め、憎まれ役であり、名稱も移り變りがある。前に細作と云ひ、間諜と云ひ、間者と云ひ、穏密と云ひ、岡つ引きと云ひ、犬と云ふたりした。今新たにスパイといふ語が擴りつゝある。スパイも政界の一問題でないとせぬ。

疑問のスパイ

黒頭巾

一、

警視廳といへば、直ぐにスパイを連想させる。抑、警視廳の前に立てられてある川路大警視、則ち最初の警視總監にこびりついてゐる千古の疑問たるスパイがある。

西郷南洲が擧兵の動機となつた刺客中原尙介等の一味は、第一の使命は西郷等の動靜を探偵するスパイたるにあつた。あはよくば刺客たらんといふは、第二の使命であつた。南洲は、此の如き政敵の卑法、陰險なる態度に對して、烈火の如く憤ほり、擧兵の決心をするに至つたことは、彼が、有栖川征討總督官に奉つた手書にも明らかである。然るに、これ等のスパイ的刺客を送つた者は、川路大警視に相違ないが、果して大警視一人の胸中から出たか、それ以上の大なる背景があるかが千古の疑問だ。大なる背景といへば、大久保甲東でなければならぬ。大久保は、如何に國家至上主義から割出したとはいへ、刎頸の交をした南洲に對して、かくの如き態度を執るほどの陰險、殘忍を敢てしたろうか。大久保ならば、隨分、やり得ないでもないとも思はれるし、眞逆、それまではとも思はれる。要するに、此のスパイは、大久保のところでは默認したくらゐで、萬事は、川路の秘策だろうと思ふ。

幕末から維新にかけては、敵味方ともに辛辣にして巧妙を極めたスパイを交換しておる。中原事件の如きは、頗る露骨なも

のだ。中原の一味のうちに、後年、有名になつた高崎親章などもゐた。

警視廳のスパイは、舊幕の岡引の系統を受けついでゐることは勿論だ。舊幕の岡引は、都下ばかりでなく、廣く諸大名、殊に外様大名に向つて試みられた。これ等は、上等のスパイで、國事探偵に屬する。

警視廳は、創立以來薩派に由つて築き上げられたから、探偵政治家は、薩摩人に多いようだ。川路以後、大浦兼武氏が名高い。警察の飯を長らく喰つてゐると、自然と、人を見ればみんな惡人のように見え出す。人を見る眼つきが違つて來る。それを警察眼といふ。疑問の眼を以て人を見てゐるから、どうしてもスパイを使はずにはゐられなくなるのだ。

二、

首相加藤友三郎氏が、意外の重患だといふ眞相を、逸早く偵知して後繼内閣の準備に着手したのは、與黨たる政友會よりも、却つて敵黨たる憲政會の方であつた。これが政友會には案外であつた。

加藤首相の病狀に就ては、馬場法制局長官や、宮田翰長等、左右親近の者が極秘にしてゐたが、帝大の佐藤三吉教授に診せたことがあつた。しかし、それも極秘といふことに賴み込んであつた。佐藤博士と、憲政會の中原徳太郎博士とは、極、懇親の間だ。それで醫者同志の話が出て、中原から首相の病狀を聞いた。佐藤博士は、決して、病狀を確つかり話さなかつたが、そこは醫者だけに、佐藤の口振りで、それが腸結核だといふことを、中原は見て取つたのだ。それを憲政の幹部に、大急ぎで注進に及んだのだ。

此の場合、中原の働きは、醫者でなければできない立派なスパイを勤めたのだ。

三、

列國は、互に、國事探偵を放つてゐる。密探や、獨探ばかりではない。彼我、ともに堂々たるスパイがゐるだろう。明治以來、吾國に來た尤も名聲ある外國のスパイは、露西亞のクロパトキン將軍であつた。

明治廿四年、露國皇太子の日本來遊の建策者はクロパトキンだ。當時、彼は參謀本部第一部長で、陸軍少將であつた。初め、皇太子の外遊は、瑞西、佛蘭西の方面といふ評定であつたのを、クロパトキンの考で、東洋の新興國たる日本の國情を探るが爲に、日本來遊を獻策し、それが案外、容易に採用された

のであつた。彼は、露國で未來の大軍人を以て期待されてゐるのみならず、日本の識者にもクロパトキンの名は注目されてゐるからといふので、變名して、文官服を着けて、皇太子に隨行して來た。

此の時のクロパトキンは純然たるスパイである。その後、再遊して來たときは、假面を被らないで、堂々とやつて來た。その時は隱くすことのできない名士になつてゐたのだが、彼の心持は、やはりスパイらしく働らいたことは勿論である。

四、

スパイが、古今未曾有の人氣を博した大舞台は、何といつても赤穗義士の復讐だ。

此の時は、敵方たる吉良からも、幕府を後援として、隨分、できる限りのスパイを放つたが、それ等は、皆、見事に、裏を掻かれて、十二月十四日の夜、吉良上野、在邸の一條は、適確に義士方に知られた。それについては、細井廣澤が內報したといふ說が古來、行はれてゐたが、一昨年、弘前で發見された義士關係の文書に據ると、荷田春滿も、此の事を大石に內通したことが明らかになつた。

荷田春滿も細井廣澤も、皆、一代の大家だ。幕府方にも遍ねく尊敬されてゐた。かういふ人達が、まさか義士の爲にスパイをやつてゐようとは、吉良方には全く思ひ掛なかつた。義士の大部分は身を挺してスパイをやつた。そして朝野の名士が、總掛りでスパイをやつて、それを援助した。實に、大仕掛のスパイ戰は赤穗義士の仇討であつた。これでは吉良に、翔天潛地の術ありとも、到底、隱れおほせようはない。

スパイの一語は、何となく、不快の響を持つてゐるものだが、赤穗義士のスパイだけに、世人に、痛快の感を與へる。

五、

幕末に、長州征伐に於ける廣島談判は、幕末史に有名な一幕だが、これにも疑問のスパイがある。幕府方は、遂に、それを解決するに至らないうちに、幕は下りた。

問題は、長州方の全權正使たる宍戸備後介（後ち子爵宍戸璣氏）の身上にある。わたくしは、氏の生前に、その事について親しく聞いておいた。幕府方は、宍戸正使を網乘物に乘せて、雨の夜に、方角も分らない大きな寺に連れて行つて、そこに押込めた。それ以後の談判は、そこで行はれた。幕府方も、隨分、亂暴なことをしたものだ。談判が長引くうちに、戰爭は始まつて、着々、幕府方の不利に陷つたが、長州の全權委員中

は、幽閉されてゐるから、世間の事は少しも知りようがない。それに乗じて、幕府方が高壓的に條件を提出すると、長州の使者が強硬な態度を持して讓歩しようとしない。それが幕府方には意外であつた。問題は、そこにある。

宍戸子は、當年を回憶して話す。或日、厠に行くと、簡單な文句を書いた紙片が置いてある。勿論、見せるために置いてあるらしい。讀んで見ると、戰爭は始まつた、幕府方は連敗だとある。何者の仕業か見當がつかない、文句も、筆蹟も拙づい。意味が分るだけだ。半信半疑で考へてゐると、翌日、また次の戰報が置いてある。次の日も、順々にさうしてある。とう／＼これは何者か、自分に好意を持つ者の仕業だと確信して、密かに、敵、味方の形勢を胸中に秘めておいたから、談判の席上に、非常な利益を得たのだ。後日になつて、此の思掛けないスパイは、幕府方からつけておいた賄方で、それが前年、江戸で宍戸氏の恩を受けたことのある男だといふことが分つた。

六、

スパイは劇的興味を惹くものだから、舊劇にもスパイを中心とするものが少くない。まわし者、裏切者、獅子身中の蟲などといふのは、これ等のスパイに浴びせられる痛罵だ。中には來國俊の一幕の如く、鍛刀の湯加減を知らうといふ藝術的の動機に出たものもある。

歴史上に、大袈裟な、まわりくどいスパイは、吾子の信玄を、後世までも親不孝の惡名を蒙らせるに至つた武田信虎だ。彼は、信玄と別れて、敵方の駿河に行つて、今川を頼つてゐた。そして、内々、今川の樣子を信玄の方に内通もし、裏切の味方を作ることにも苦心した。つまり大名の親子馴合のスパイだ。これは古今稀な皮肉なスパイの一つだ。

女髪結は、世間に有り觸れたスパイだ。彼等が受け取る多額の祝儀は、スパイの防禦ともなり、報酬ともなるのだ。

最近に暴露された警視廳のスパイ事件は、甚だ拙づい。舊幕の岡引以來の傳統的スパイは、止めた方がよかろう。

根本問題は制度と人物

今村力三郎

昔は犬と云つた、夫れから諜者、今は「ハイカラ」にスパイと云ふ。頭の古い私には、「スパイ」と呼ぶより、犬と云ふ方が、總ての印象が判然と映る、名稱は、犬でも、諜者でもスパイでも、畢竟高士の選ぶ職業ではあるまい。然れども、警察事務の遂行には、千百年後はイザ知らず、現在ではなくてはならぬ、大切の一役である。問題は、スパイ使用の可否に非ずして、上官が、スパイ使用の能力の有無である。「スパイ」を敢てするやうな人間は、一筋繩ではいかぬ人物ゆへ、使ふ積りの上官が、却つて「スパイ」に一杯喰はされることもあろふ。けれど警察全體の問題から見れば、スパイ問題は、枝葉の枝葉、末節の末節で、根本は制度と人の問題である。

現行制度は、警視總監は内務大臣に隷屬して、内閣の交迭毎に新陳代謝するのであるから、或事件が政治的色彩を帶びて居ると、總監初め部下の警察官は、躊躇逡巡して手も足も出ない。政治的色彩とまで行かずとも、資本家關係の事件でも、警察力は麻痺して用を爲さない。最近公然の秘密たる、前滿鐵總裁川村某の非行に警察は盲目同然である、其外會社ゴロと呼ばれて居る不良の徒輩に警視廳が手を着けたことがあるか。新聞の三面に、明日の總會には何某の率ゆる壯士と、某の配下とが血の雨を降らすだらうと書いてあるから、讀者は、ドンナ大事件が勃發するかと、翌日の新聞を見ると、其總會は平穩無事、春の海より猶穩かである。世上の識者ならざるも、此間の消息を解するに苦しまないであらう、獨り之を解せざるものは、我莊嚴なる警視廳あるのみである。

思想其ものは、直に社會の、安寧秩序を紊すものでない、唯之を實現せんとする、方法手段が、背法的であると、茲に刑事問題を惹起するのである。之と反對に、暴力は、其目的や、理想が、如何に高尚であり、合理であつても、暴力夫れ自身が、共同生活の安寧を脅威し、破壞するものであるから、警察の任務としては、思想の取締よりは、暴力の制限が先でなければな

らぬ。然るに近時の警察方針は、私の考とは正反對である、露骨に言へば無抵抗の思想家に強く、抵抗の暴徒に弱い。

警視廳の制度は、日本固有のものか、或は露獨の模倣か、私はまだ研究したことがない。維新後の歴史は、最初東京府が警察權を有し、江藤新平が司法卿となると、直に之れを司法省に捲き上げた、江藤沒落後、大久保利通が、內務省に奪つて今日に及んだのである。政權爭奪の爪牙として警察權を掌握することは寔に便利である。明治三十一年、進歩黨と、自由黨とが合併して憲政黨を組織し、其勢力を以て、大隈、板垣の聯立內閣の成立を見たが、星亨が怪腕を振つて、聯合を破り、內閣は忽ち瓦解して仕舞つた。此時自由黨出身の板垣退助は內務大臣であり、又同黨出身の西山志澄が警視總監であつたから、警察力を惡用して、憲政黨の本部を奪ひ、進歩黨の連中は、憲政黨といふ黨名と、本部を自由黨に奪はれたので、止むを得ず自ら憲政本黨と唱へて新政黨を組織したことがある。自由黨が賄策と警察力とを濫用して、黨名や、黨の本部を奪取したことは、同黨の歴史に一汚點を殘したものであるが、夫れは別問題として、政黨と警察力と結托すれば、餘程の無理が通せるから、政治に携はる徒輩は、常に警察との結托を謀るのである。每時、在野黨は口を極めて警察の不公平を攻撃するが、一朝、自分達が政權に有り附くと、昨日の事は忘れたるが如く、却て警察の不公平を歡迎する。萬一、公平無私の警察官があつたら、恐らく彼等の排斥を蒙るであらう。今度のスパイ事件で、警視廳の內醜を、外間に露出したのは、腫物が化膿して自然に決潰したと同然である、私は此自然作用を、進化の理法として大に欽重する。

警察制度の根本的改革は、現在の腐敗政黨と絕緣するにある、總監が政變と運命を共にするやうでは、石龜を路に轉ばす如く、手も足も出ないのが當然である。私の宿論は、司法警察權は司法權と同一の官廳に移すにある。夫れには行政官たる司法大臣の配下では駄目であるから、檢事總長を閣外の獨立官とし、檢事の手に收めるが宜しい。或人は檢事專制を憂ふるであらうが、縱令、檢事專制でも、腐敗政黨の專制には優る。檢事の專橫を防ぐには、大審院長をして判事の進退を掌らしめ、自由に獨立官の職能を發揮せしむる方法もある。是から先の議論は、大に研究を要するから、私の如き空疎の頭の持主の言ふべき限りでない。私は問題の提出者として、諸賢の考慮を促すに止める、警視廳は內閣の手足、スパイは警視廳の手足、私は手足の働きも必要を認めるが、頭腦の働きは手足より貴いものと信ずる。

スパイ政策是非

法學博士 堀江歸一

警視廳が密偵細作の輩を世間に放ち、彼等の寄せる牒報に據つて、行政の方針を決定する、少なくとも之を決定する材料に充てることは、世間公知の事實であつて、識者の常に苦々しく感ずる所であつた。何故に警視廳のスパイ政策に對して、世人は不快の感を持つか。

第一、スパイを働くが如き者は總て其心術の劣等なるを常とする。自家の利益の爲めには、如何なる所業をも爲すことを憚らざるのみならず、時に虚構の言を構へたり、不確實なる材料を整へたりして、牒報を發する結果は之に根據を置く警察行政をして途方もなき方嚮に就かしめる虞れなきを得ない。

第二、警視廳が警察官を使役して、或る事件を探査させることは、固より其職權として、當然爲す可き所に屬する。然るに其スパイを使役するや、實に警察官の探査する能はざる裏面の事情を糺明することを目的とするのであつて、随つて此目的を爲す爲めには、通例スパイに命じて、或る團體に加入させ、一の團體員として、團體内部の事情に通曉させ、其通曉し得た所を牒報せしめようとする。政治團體勞働團體を始めとして、何か或る社會上の計畫を有する團體の内には、必ず團體員中に斯るスパイの役目を勤める者が居り、金錢の爲めに團體の行動を其大小となく、當局者に牒報し、以つて監督の便を擧げしめる。即ちスパイ政策は團體員の内に、獅子身中の蟲を作らしめるものであつて、他人に敗德の所業を犯さしめること、斯の如きは他に類を見ないのである。

第三、スパイの如き、其人格の劣等なるを常とする。人格の劣等なる者が利益を目的として、牒報の任に當るとすれば、自己の利益を大ならしめる爲めに、益々事件を繁多にし、又複雑にし、時に犯罪の構成されるに至る狀勢を誘導しつゝ、其愈々構成される時を以つて、此事を牒報し、以つて自家の功績に充てんとする傾なきを得ない。果して然らば斯るスパ

ずの制度は其存在する結果として、却つて社會に波瀾を惹くするの嫌を免かれない。勞働運動や政治運動に聊か急進の趣きを生ずるや、必ず其内にスパイが加はり、啻に運動者の言行を諜報するに止まらず、スパイ自ら殊更に過激の言行を試み、運動者を誘ひ、煽つて、無理矢理に同様の所業に出でしめ、其出でた曉に、有無を云はさず、犯罪者として檢擧するが如き忌はしきことが幾回も行はれたようである。

即ちスパイ政策の行はれる爲めに、官憲と國民との感情を疎隔し、國民の政府に對する猜疑心を深からしめると共に、一部の國民を誘つて不徳背信の所業に出でしめ、加ふるに政府の施さんとする行政の基礎に不確實なる分子を導くものに外ならない。最近に遞島某と稱するスパイ事件が發露された。新聞紙の所報に據れば、警視廳が種々の方面に亘つて、某を利用しつゝあると信じて居つたのに、某は此信任を裏切り、不實の諜報を以つて、警視廳から金錢を詐取する方便に充てたと傳へられるが如き、要するにスパイ制度の如何に愚なるものであるかを具體的に表明したものと云へる。

故に一國の政治なり、行政なりをして公明正大のものたらしめるには、スパイ制度の如きは須らく之を排斥しなければならない。立憲政治は政治の公明正大を維持するものであると稱される。蓋し政黨の勢力に於ける消長が政權の得喪を決定し、而して其勢力の消長は一に民意の嚮背に依るのであつて、其間政略權道の乘ず可きもの少なきの結果である。然らば立憲政治とスパイの諜報に根據を置く警察政治とは何としても兩立す可からざるものであつて、立憲政治の下に、スパイ政策を横行せしめるのは、時代錯誤の甚だしきものであり、斯くて一國の政治を暗澹たらしめると云はなければならない。

警察と云ふ言葉を廣義に解釋すれば、社會の治安を維持することが含まれ、一方に警視廳は帝都の警察事務を處理する關係上、所謂高等警察の領域に立入り、事を未然に防ぐ爲めには、スパイを利用して、諸多の方面に於ける情報を蒐集しなければならないと考へるもの〻如くであるが、スパイ其人に信用を置く能はざる以上は、其諜報を基礎とする政治の如何に危險を極めるかは、多言を要しないではないか。岡ッ引、御用聞き、探偵、諜者と名稱には種々の相違があり、變遷があるとしても、彼等の一概に信用す可からざる、又尊敬す可からざる人であることは、古今を通じて、欺かざる事實である。然らばスパイを利用して、政治の方針を決定する材料に充てるが如き、政治の方策をして、求めて間違ひ易からしめざるを得ない。當局者にしてスパイを世間に放つて、人心の趨向を探らなければならな

い程、不安を覺へるならば、寧ろ一日も早く局を去ることを以つて、正しき道とする。殊にスパイを以つて、單純なる諜報の具とするに止まらず、更に一歩を進めて當局者の嫌忌する人物を罪に導く方便とするに至つては、政府たるもの、信を以つて、國民に臨む所以なりとするを得ないのである。

往年藩閥政治家が政權を壟斷した時代には、民間の政治家有力者にスパイを付け、何がな罪科を課する事跡を擧げるに勉めたるやに稱される。流石に今日は民間政治家にスパイを付隨はせる風は跡を絶つたようであるが、其代りに思想家や、社會運動家に對して、スパイ政策を用ゆるに至つては、我國社會に公明正大の風を缺くこと、依然として舊の如くであると云はなければならない。私は我國社會に光風を導く一手段として、スパイ政策の廢棄を必要とするのである。

警視廳とスパイ

石川半山

僕は警視廳廢止論者である、それも今日に始まつたことではない。過ぐる三十年間一日の如く、之を主張して居るのだ、日本國内の各府縣が、警保局の管轄の下に、警察部長を置て、相當に警察事務を擧げて居るのに、東京府ばかりが、警視廳と云ふ特設機關を要する理由がない、且つ之を特設せる爲めに、其の弊害は百出して居る、此の事に付ては、幾度か新聞や雜誌にも書き、演說でも度々やつたが、今以て警視廳廢止が行はれないのは、僕の甚だ遺憾とする所で有る。

警視廳廢止運動

明治三十一年大隈内閣が成立した時、僕等は警視廳の廢止を實行せしめようと思ふた、時の東京府知事は肥塚龍氏で、勿論熱心なる賛成者であつた。各府縣知事は警察の權を持つて居るのに、東京府知事だけは、それを持たない、それに東京市と云ふ

者が獨立の形になつて居て、表面上は兎に角、實際の市政は、市の當局者が取扱ふのだから、東京府知事と云ふ者は、市に對しては、餘り權力のない者で有る。實際に於ては、單に府下八郡の政治を支配して居る樣な者だ、そこで少しく有能の人が、東京府知事になると、此の地位ばかり高くて、實質の乏しい所に滿足せず、先づ警視廳を廢止して、警察權を其の手に握ること、各地方長官と同樣ならんことを望むので有る、肥塚氏も之を希望して居たから、僕等は大隈首相其他にも說いて見たが、何分にも當時の大隈內閣も、やはり今日の加藤內閣と同じく、聯立內閣で有て、特に內務大臣は黨派心の強い板垣伯、次官は鈴木充美氏、警視總監は土佐立志社以來の俊傑、西山志澄氏であつたから、苟くも任官したる自由黨出身の人が一名でも減少して、それが進步黨出身の肥塚氏の權力を增加する樣なことは內務省に於ては始めから問題にならなかつた、然かしながら僕等が主張した所は、それが實行されると否とに拘らず、確かに正論である、今日スパイの問題で、警視廳の是非曲直を爭ふが如きは、抑も末節枝葉のことで、苟くもかゝる性質の警視廳の存在する間は。スパイを用ふることは止む者ではない、又之を止めては、今の警視總監の一種の任務を果すことは出來ない、即ち今日の警察の弊を除くには、一刀兩斷に警視廳を廢止するに如くはない。

明治七年から

警視廳が始めて出來たのは、明治七年一月十五日で、其の制度は、巴里の警視廳の飜譯から採用した者が多かつた、舊幕府から引續き、明治の初年に於ける日本の新しい文物制度は、多く佛國の飜譯で有て、特に警視廳の如きは、ナポレオン三世の探偵政治の機關として、世界第一の評が有つたから、佛國の心醉者が、これを飜譯して、制度を作り、それから之を實行する時に、日本の舊幕時代の探偵政治に用ひられたる種々の方法を用ひたのである、而して警視廳創設の當初から、これが完成に努力したる大警視川路利良氏は、西南戰爭の終局したる翌明治十一年の冬、佛國に赴き、親しく巴里の警視廳の研究を遂げ、翌年歸朝した、然るに彼は歸朝したる十月十三日に突然死去したので、彼が親しく調査した所は、彼れの手に依て行ふことは出來なかつた、其の死亡が餘りに突然であつたから、毒殺されたのだらうと云ふ說も起つたが、其の眞僞は僕には分らない、兎に角これから憲法發布迄の間、警視總監の地位に就いたる大山巖、樺山資紀、三島通庸、折田平內、の四氏は、何れも薩州出身の頑冥漢で一方に保安法を以て、[illegible]を取締め、[illegible]の

大多數は、他縣出身の者迄、ワザと薩摩語を用ひざるを得ざる迄になし、他方に川路の持つて歸つた巴里式のスパイ政治の本領を發揮して、政府に反對する大隈、板垣兩巨頭を始め、自由、改進兩黨員を散々に苦しむる悪策を弄した者で有る。

專制政治とスパイ

凡そ專制政治の時には、スパイが必要で有る、民意が社會の表面に現はるべき機關がないから、不平黨は陰謀を企てざるを得ない、過激なる連中は、刀を磨き、爆彈を作る、政府ではスパイを使ふて、之を取締り、其の禍を未然に防止する必要が有る、然かし既に憲法あり、國會有りて、政府に悪政があれば、之を彈劾する道も立ち、新聞が自由に政府の非を論じ、輿論が政治の上に反映して行はれる樣になれば、警視聽も入らなければ、スパイは勿論不必要で有るべきだ、然るに憲政が發布され、國會が開けて後も、薩長藩閥が尙久しく政權を左右し、民意を阻止し、敢て民衆に向て、戰鬪を挑發する所から、自ら心に臆する所が有るので、スパイ政治が止められないのだ、今日迄も依然として警視聽を存置し、元老や准元老や、閥族の餘類は、常に警部や巡査の護衛に依て、心中に不安を抱きながら、始めて外出すると云ふ、憐れむべき囚人の境遇に落ちて居るのだ

スパイの人物

スパイを用ふることは、舊幕の昔からやつたことで、其のスパイにでもなる徒輩の性質は、多くは良くない、中には立派な俠客も有つたが、往々にして十手と捕繩を預かつて居る奴でも、悪るい奴が有つた、其の手先に使はれるスパイは、多くは前科者で有つた、賭博師か小盜か、雲助か護摩の灰か、而して女郎屋の亭主などに、十手と捕繩が預けて有つた例が有る、國定忠次に殺された長野遊廓の女郎屋の主人などは、十手と捕繩を以て、悪るいことをして居た、專制時代の役人の量見では、盜を知るは、盜でなくてはならぬ、悪人を捕へるには、悪人を用ひなくてはならぬと云ふので、スパイには經歷の良くない者でも之を用ひた、明治維新になつてからも、警視聽のスパイには、やはり此の方針を踏襲した樣で有る、山縣有明公が曾て僕等に向て申された

『諸君は官僚が良くないと言はれるが、やはり餅屋は餅屋で、民間の人々を、突然役人に登用しても、トント役に立たぬ者で有る、明治の初年に、我輩は屋根屋彌吉を或る任務に登備して見たが、其の結果は、餘り良くなかつた』

我が同志の人々が我等民間の國士を、官界に登備せよとの要

求に對し、山縣公が屋根屋彌吉に關する經驗を語られたので、共の比較を得て居らないと憤つた、屋根屋彌吉は一種の人物で、人に秀れた所も有るエライ親分には相違ないが、山縣公がそれを民間の政客の登傭談に引例したのは、間違つて居る、然かし兎に角、此の話に依て、有名なる屋根屋彌吉が、山縣公に利用されたことは事實で有る、而して果して如何なる方面の任務に就いたかは分らないが、何れ警察事務か、行政事務の一部に關係した者に違ひない、想ふに屋根屋彌吉の如きは、政府が用ひたる人物中の良い方で、警視廳がスパイに用ひたる多くの人は、兎てもこれだけの人物ではなかつた樣だ

警察官は民衆の親友

全體警察官の本旨は、民衆の親友たるべき者で有る、英國でも米國でも、警察官は民衆に馴れて居る、餘りに馴れ過ぎて、僕等が金をやつても平然として、之をポッケットに收める迄になつて居るのは、學ぶべきではないが、少くも恐ろしいと云ふ氣分はない、日本では『お廻さんが來る』と云へば、子供が泣きを止める程、警官は威張り、民衆は彼等を恐れて居る、警察官が民衆に恐怖される樣では、もはや彼等の職責を全くする資格はない

警察官は盜を捕へるばかりではない、道を教へ、群衆の混雜を制し、衞生に注意し、火事の起らない樣にし、流行病の時や、天災地變の時や、洪水や火事の時に、一番に驅け附けて、民衆の爲めに働らく人で有る、故に民衆は、彼れを慕ふべきで、恐れる理由はない筈だ、それを民衆が恐れると云ふのは、昔の岡引の風が殘り、專制時代の惡習が殘つて居るからだ

英國倫敦では戰時中、義勇巡査と云ふのが有つた、彼等は一定の職業あり、地位ある人々の間から、義勇的に出でて警察官の職務に服して居た、昨年の自警團の人々の如き者だ、然かし此の義勇巡査は、自警團の或る者の如く威張ることなく、實に立派な紳士が多かつた、而して本職の警官の多くが、此等の義勇巡査と伍して、少しも其の間に差別を見ず、從て何等の行違ひを生じなかつたのは、良民と警察官の交情が、平生から頗る親密で、何等敵視する所なく、又警官の人格も、相當に修養が有るからだ。

巴里の警視廳

巴里の警視廳は、今日と雖も、僕は餘り感心しない、帝政時代からのスパイ政治が、尙其の名殘りを留めて居る、共和政府を顚覆せんとする王黨の陰謀などには、もはや問題にはならない

が、獨逸や露國を始め、種々の不良分子が入り込み、巴里の各政黨の中に、露探や獨探が續出するので、スパイ政治が止まぬのかも知れないが、兎に角巴里の警視廳の空氣は甚だ良くない、僕はパスポートに捺印を得る爲めに、此の警視廳の門を潛つたが、其の中には日本の警視廳の模範となるだけの、忌むべき空氣が漲つて居た、役人が馬鹿に威張て、容易に事務を進捗しない、かゝる機關には、必ず裏門の有る者だから、僕は忽ち其の裏門の手を發見し、二十フランを投じて、容易に旅券の裏書きを得た、表面にいかめしい規則を楯にして、威張る所の警察官は、明かに『何故に裏門から來らざるか』と怒鳴りつゝ有るので有る、僕は餘り東京の警視廳に往かないけれど、我が警察官の間にも、往々こんなのが有りはしないかと恐れる。

スパイの犯罪製造

スパイ政治の弊は、若しも巨細に調べて見たなら、枚擧に遑あらぬことで有らうが、其の最も不埒なことは、犯罪の製造で有る、天下泰平で有ると、スパイの收入が無い、依て種々の犯罪を製造せんと企てる、各政黨政派に入り込んで居るスパイの如きは、頻りに何か騷ぎたがる、而して何とか大會、何とか行列の有る時に、其の中に、巧みに参加して、全く無罪の民衆を煽動して、特に犯行あらしめて、之を拘引して、自分の功名にするスパイが、大分多いと云ふことだが、僕の知る限りに於ても、それは事實で有る。

警視廳創立以來、スパイに依て、故意に作られたる犯罪の多い實例は、僕も聞いて居る、專制政府の政治家中の愚劣なる者は、スパイの虚僞の報告に欺かれ、大狼狽を極めることが多い、明治十四年の大隈參議退官事件の時に、スパイが其の筋への報告には『福澤先生の交詢社に、少からぬ銃器彈藥が有ります、これは突發に事を擧ぐる陰謀と見えます』と有つたから、伊藤、井上、黒田、西郷諸氏が大に驚いたと云ふ事實が有る、それから其の頃外務省の書記官で有つた小松原英太郎氏のと同じ紋章の提燈を附けた人力車が、早稻田の大隈邸へ入つたと云ふスパイの報告の爲めに、憐れむべし大隈侯とは何の關係もない小松原氏は、忽ち免官となつたことも有る、三島通庸氏が警視總監の時に、保安條例を發布して、民間の志士に對して皇城三里以外に退去を命じたことが有る、中島信行、中江篤介、星亨、片岡健吉、島本仲道、尾崎行雄、林有造、諸名士を始め、五百七十人の志士を放逐して、大騷動を演出したが、今から考へて見ると、其の何の爲めなりしやを知ることが出來ない、多分スパイが虚僞の報告をして、何か容易ならぬ陰謀でも有る様

に言つたので、三島氏が驚いて狼狽して、あんな大騒動をやつた者であらう、三島氏は多分惡人ではなかつたらう、寧ろ正直な人で、スパイに欺かれ、其の言を輕信した者で有らう、其の放逐された五百七十人の中には、平生何等政治上の運動に關係しない者も多かつたが、スパイの惡戯で、放逐者の中に加へられた。

スパイと大事件

これ等は專制時代の出來事だが、憲法發布され、國會が開けて後も、政府がスパイに誤られて、非常なる大失態を演出したことは、僕の確實に知る所だ。

或るスパイが、民間の或る男と相談して、政府から金を取り出して、或る男を米國へやつた、それは此のスパイが、政府へ吹き込んで、此の男を日本へ置くと、國家の禍になるから、三年間米國へやれと言て、それが行はれたので有る、然るに此の男が、約束の三年間米國に居らないで半年で歸朝した、其の後此の同じ男を材料にして、政府から一萬圓取り出さうとした或るスパイが有つて、その狂言が失敗した結果、途方もない大事件を生み出し、愚かなる當時の政府當局の狼狽と相待つて、大騒動となつたことが有る、僕等の眼から見ると、質に噴飯に堪へないが、スパイの暗中飛躍は、時々途方もない結果を生ずることの有る者だ。

昨年九月、大震火災の當時に起つた、或る大事件の如きも、明かにスパイの活躍に依る者で有る、探偵政治の弊を證明し得る者で有る、世間に現はれた犯罪者、その關係者の以外に、良くない、スパイが、其の犯罪の道を開き、陷穽を作り、而して犯罪者が出來た時には、知らぬ顏をして、舌を吐て、彼等の愚劣を笑ふて居るので有る。

警視廳廢すべし

今回警視廳とスパイとの關係が、世に暴露されて、問題となつて居るが、これはホンの一部分の事で有る、警視廳が用ひて居る或る一人が、活躍せる一部分が現はれたに過ぎない、警視廳が用ひて居るスパイは、とても十人や二十人ではない、政黨員の中にも居れば、勞働運動をして居る中にも居る、表面社會主義者だの、共產黨だの、無政府主義だのと言つて、頻りに騒いで居る中に、スパイが少からず居る、新聞記者の中にも、警視廳の機密費を受けて居る者が、可なり多いと思ふ、警視廳と云ふ專制時代の遺物を存置して、スパイ政治を繼續して往く間は、此の機關の周圍に、奇怪なる事實は、絕えないで有らう

スパイの政治は、暗らい政治である、苟くも明るい政治をなすためには、スパイの必要もなければ、警視廳は入らない、警察官が民衆の親友であると云ふ本旨を、徹底的に行ふには、警視總監と云ふ怪しい者は、必要でない、露國の專制時代に、ペテルボルグ府の警視總監が暗殺されたことが有る、これ迄東京の警視總監になつた男が、未だ一人も殺されないのは、此の暗らい政治の機關の中樞に坐しながら、割合に辛辣な惡事を行はず、從て民衆の深かい怨恨を買はなかつた爲めかも知れぬが、それでも三島通庸氏や大浦兼武氏は、隨分危ふかつた、今後スパイ政治が續くと、總監が殺される不祥事を見ないとも限らない、苟くも憲法あり、國會あり、文明國の制度を具備し、民意の暢達して、陰謀を存する餘地なかるべき現代の日本に於ては、もはや警視廳の必要もなく、スパイの必要もない筈で有る、幸ひに今や行政整理の時だ、此際斷然警視廳を廢止して、一東京府知事の下に、各府縣と同じ警察部長を置て、民衆の親友たる警察官を配置し、スパイ政治を根絕することにしたら、世間の騷ぎは、減少するで有らう、少くもスパイに依て作らるゝ犯罪は無くなり、スパイに依て煽動さるゝ騷擾事件は無くなり、スパイの虛僞の報告に依て、政府の大官を狼狽せしむることは無くなるで有らう。

目的に對する忠と目的の目的に對する不忠

杉森孝次郎

目的さへ善であればそれを達成するために有用な手段はしたがつて善だといふ考へは、古來の僞はらざる常識によつても信用を條件つきにされてゐるが、科學的、哲學的考察はこの僞はらざる常識を再認する。

つまり、目的だと考へられてゐる性質が、一層完全な反省と批判とに照らされれば、究極的のものではなく、それ自身が或手段的のものだといふ場合がある。そして、その目的を達するための手段が、その目的には忠實に見えても、その目的の目的に對して破壞的、否定的である場合がある。かゝる場合には、善き目的を達成すに役立つ方法だから、その方法は單純に善いにきまつてゐるといふ關係は成り立たない。或る投藥や手術は患部をば療治するかも知れん。しかしその投藥や手術は患者の生命を、その患部を療治すると同時に、得失相償はさる、すなはち、失が得を凌ぐ仕方に於いて破壞するかも知れん。副作用としての害が本作用としての利よりも大きいことがあるのだ。一つの方法によつて破壞される幸福が、それによつて建設される幸福よりも深い、全い、永いものである場合があるのだ。古來の僞はらざる常識は、かなりにこれを心得てゐる。そして、善き目的にむかつてさへ、手段をば功利的にのみは選擇せず、多少良心的に選擇することをそれは常に忘れなかつた。

スパイの性質や方法にも――かりにそのスパイを使用するものの目的は善だと普通に考へられる場合に於いてさへも――いろ／＼あるだらうが、或かたちのスパイは、信義、友誼等によつてもかなりに代表されうる種類の人生價値をあまりに無造作に、亂暴に手段扱ひする。それは、深い人情、義理の關係を淺い目的のためにもてあそぶ。ここに或かたちのスパイの最も悲しむべき、あるひは根本的に廢用にされべき惡または不完全質がある。泥棒仲間にさへも純眞な信義的關係が多少あるといふことは普通な事實であると同時にすこしも不思議でないが、人情を賣り物にして善なるまたは正なる目的を買ふにも限度があると、直覺的に、正當にいひうる。

司法、司直、司正、治安、正義、公善を目的とする方法は出來るだけ純粹に目的と同質または同傾向のものでなくては、そこに反省と改廢の餘地がある。

毒をもつて毒を制するの必要と、豫防注射の價値とをば充分に理解した立ち場に立つて、なほ且つ「聰明」は、司正、治安、正義、公善を達するための方法は、それ自身、極度にすくなく、絕無的に、よごれたもの、不正質、不善質、要するに不良性のものであることを必要として主張する。甘心的にスパイを使ふ心はその方法を發明する條件を缺く。

いはば高尚なる人格價値や品性價値を犧牲にさせるスパイ使用者も悲しい犧牲者だが、みづからスパイをつとめるものはさらに悲しい犧牲者だ。しかし、スパイをつとめない自由と、スパイを從はない自由とは、決して絕無でもなければ僅小でもな

い。殊にもスパイをつとめない自由は絶大だとさへもいへる。けれども、スパイをつとめるものがなくなればスパイを使ふことも出來なくなる。

カントは、かれの「永久平和」論のなかで、國際關係について、戰時にもスパイを使ふことの非を說いた。戰時にスパイを使ふことは、平時にもさうする傾向と習性を原因づけるといふのが、かれのスパイ制度批難の一論據であつた。勿論、さういつた關係も無視されない。同時に、しかしながら、もつと直接な、もつと深い惡もスパイ制度にはある。

出來るだけ平和的に、生產的に、文化的に、公明正大に、その方向にすべての制裁と戰鬪の方法が制限され、改正され、發明されて行くことは「大社會」、「大國民」、「大個人」を、有意義のそれらを證明する根本的一要件だ。大の代はりに進化的といつてもいい。

極度の侮蔑に値するスパイ及び警察制度

千葉龜雄

一

國民英學會であつた。ユニオン第四讀本の講演を聞いて居た頃である。その本の中で、極めて深い印銘を享けた一章がある、それだけを今までをおぼろ氣に記憶して居る。何でも南北戰爭だつたかの一將軍が、裏ぎりした爲めに社會から見すてられて、幽靈のやうな姿になつて、汚ない町の居酒屋で酒を飮んで居る……といふやうな事から、裏ぎり者の運命を、極めて深刻に描いた、たしか「裏ぎり者」といふ題であつたかと思ふ。それから私は、人間の胸に潜む裏ぎりの心理に出くはすごとに、人間の心理に、どんな醜くいものがあつても、凡そ裏ぎりの心理ほど、心を暗くされ、人生をいとはしいものにするものは無いと思ふやうになつた。それに比べれば、金持ちや、殺人者の罪惡はまだ救はれる。詐欺や、姦通や、まだそれぞれの、

或る點までの必然性が發見される。けれども、裏ぎりにあつては、救ひもない、容赦も出來ない。それを肯定すべき何一つの根據もない。ましてやそれが、利益を目的とする場合においては。

凡てのものの中で、他人の好意を利用することは最も惡いことだ。それは忘恩よりも惡い。ましてや、好意を利用してその秘密を知り、それを利益で賣るに至つては、罪惡が三重になる。獸類には、さうした技巧や、心的機構が始めから與へられない。たゞさうした人間たる權能を利用して、さうした罪惡を働らく點において、裏ぎり者は獸類よりも劣つて居る。私は、さうした心的機構を自分の中に發見して、無意識に、有意識に、それを利用する裏ぎる者の運命を悲しむ、運命といふ。なぜなら、裏ぎり者の心理を持つものは、運命だといふ外に云ひやうがないほど呪はれた者と思はれるから。あまりに人間でない下等な惡魔のやうな氣がするから。さうだ、惡魔の中でも恐らく最も下等に屬する者だ。

けれども私がもつと公憤するのは、裏ぎり者が、全く無恥で、裏ぎりをするといふ事よりも、それ以上にある。即ちさうした無恥な、暗い人生を、強いて挑發し、刺激して居る一つの制度が存在するといふ、その事である。

警察制度の存在である。」

二

遞島某の事件が起つてから、警察から、スパイ制度を廢せよといふ世論が聞かれる。それは今日の警察の起元と現在が、始めから、Spy Government であることを知らぬためである。警察そのものが、スパイの役目で起つたことを知らぬからである。そこでギボンの「ロオマ帝國興亡史」の中では、「ポリス」といふ言葉がたゞ二度用ゐられて居るだけだ。そしてロオマ帝國のいはゆる「警官」は、みな、一商人の「オフヰシアル・スパイ」といふ名で呼ばれて居る。またロンドンや、ニユウヨオクなどで、警察制度が永遠の制度として出來上つた時においても、警官といふ言葉の意味は、以下のやうに解釋された。曰く、警官とは、政府の給料を受けて政府に雇はれ、人民を監視し、政府の宣布した法度に、絕對的服從を強制するものであると、これが警察制度の起元を明らかにするものである。なぜとなれば、歐洲で警察制度の最も大發達に起つた必要は、いはゆる宗教裁判によつて、異教徒を探し出し、それを刑罰する爲であつた。そして、教會と政府の與へる宗教に違反する者の取締りに對しては、いかなる非人道な制度を設けることをも決して非

道であるとしなかつた。そこにスパイ制度が起り、雇はれたスパイ團體が生れた。そして、それが公然として警官の名を襲用した。教會の力が薄れて、國家の力が盛んになつた。今度は警官が教會の代りに、國家の使用人となつた。國家の民衆に對する態度や精神が、いくら反對なものになつて居ても、それは警官制度の關係することではない。たゞ國家の指さす制度に忍從させるために、警官が必死に働らくことになる。どこまで行つても、警官制度は、民衆に當面しない。その機構たるスパイ精神は、かへつて民衆そのものの間にスパイ精神を養なひ、お互ひを相猜忌せしめるか、或は民衆お互ひの秘密を盜み出させるかして、たゞその國家の望む利益にのみ向けさせる。だから、スパイ制度や、警察組織が、もつとも完全に働らき出し、また、その威力が猛烈を極めた時代は、いつもその國家が頽廢し、もしくは頽廢せんとする時代である。なぜなら、或る國家が頽廢し、もしくは頽廢しやうとする時代は、その國家の制度が、もう完成から爛熟に陷るり、政府者が、その文化の最盛を誇る時代であり。一方において、その文化と制度の爛熟は、民衆にとつて、制度の化石化と因襲化である故に、その化石制度を打破つて、新らしい時代をきり開かうとする新民衆の激動渦亂が、最も熾烈を極める時代だからである。

三

民衆は新しい時代を切りひらかうとし、國家は、そのさんらんたる文化を、在るがまゝにどこまでも喰ひとめやうとする。そこで國家は、兵力と警察の兩先驅をつかつて、反抗する民衆を壓倒しやうとする。警察たるもの大いに肌をぬがざるを得ない。ラシヤ帝政の始終を見よ、また德川幕府が滅亡せんとするに當つて、新徵組その他の警衛によつて、どんな亂暴を働いたかを見てもわかるのである。また、たとへそうしたどん底の史のみでなくともよい。スパイ制度を横行さした當時の、宗歴裁判時代の法律的取締りが、到る處に、民衆の不安と恐怖を起させたことは、各國における殺人罪が、夥しい數で增加した事實でもわかるのである。また、德川氏の耶蘇教禁制時代においては、僧侶その他を利用して、盛んに異教徒狩りを實行さした。そのスパイ制度の殘忍であり、非人道であつたことも、當時の野史がこれを示して居るのである。老子が、聖人起つて大盜起るといつたのも、そこで少しの皮肉でもない。法は法の爲に設けられず、全く法をなくすために在るといふ如き精神は、決してスパイ制度存立者の認めるものでは無かつた。彼等にあつては、民衆は大抵法の反抗者であり、且それを誘致すること

よつて、始めて治平に効用あるものと見られて居た。だから民衆を相疑はしめ、その人道を極端に滅却するやうな、スパイ制度の存在をも何とも思はしめない。

もし警察が、依然としてそうした精神で持續され、國家の意志と、民衆の意志とを、どこまでも離れ離れなものに意惟して居る限りは、その國家の意志がいくら間違つて居ても、警察が一意その國家の爲に、あらゆる苛辣非人道な方法を利用して、民衆を驅ることも認め得るとしなければならない。今日のスパイ制度が、そうした警察精神の上にまだ殘存することは、少しも怪しむに足らないのである。

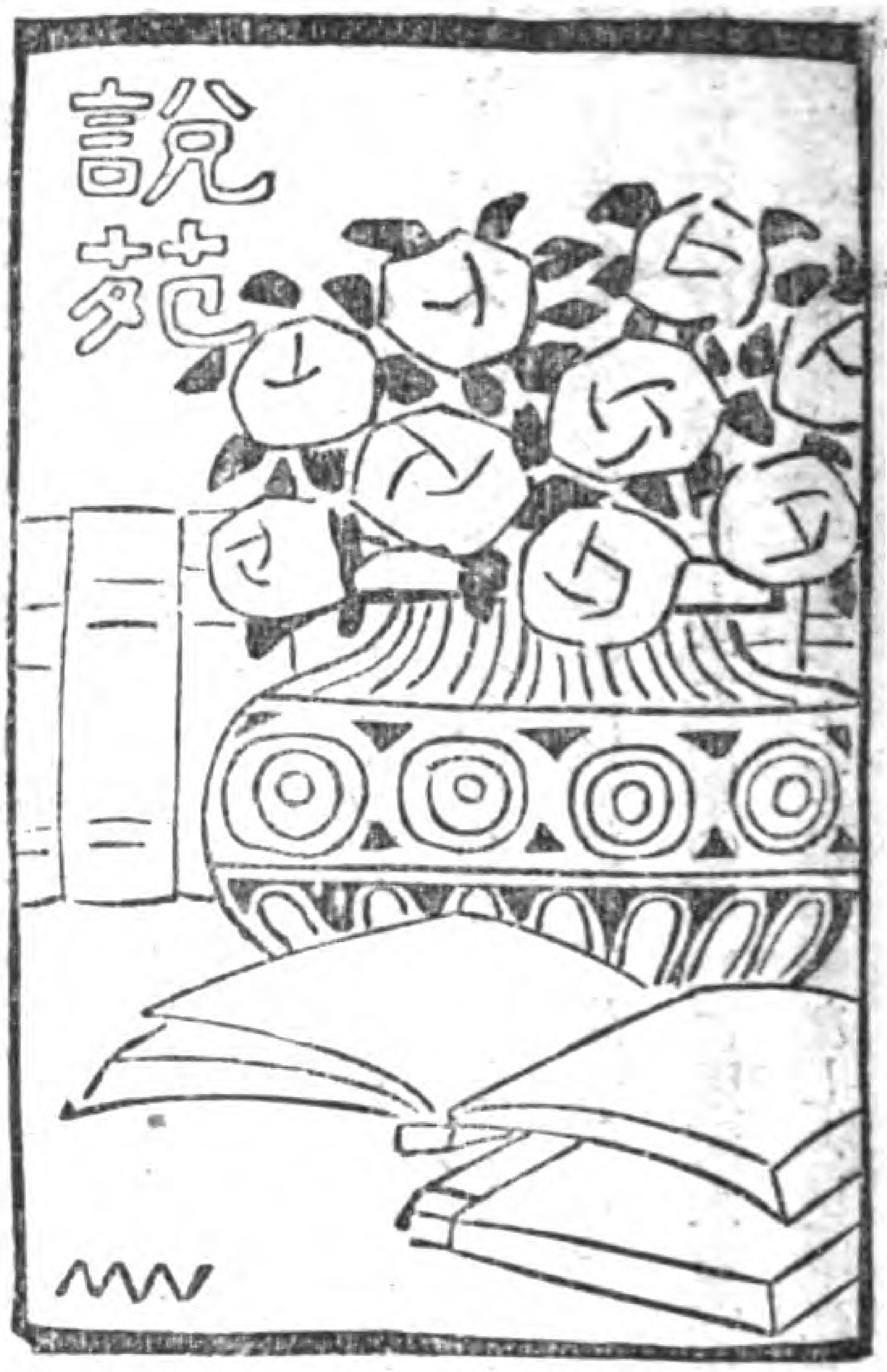
四

けれども今日以後の警察精神は、もう時代と侶なう變改を受けなければならない。もちろんそれは、國家の官廳として存在して居る限り、國家の法度を實行することがその職責であるに相違ない。また國家がかくして存在する限り、警察制度の存在はやみ得ないとしても、われ等は現代の警察當局者が、昔とちがつて、もつと民衆を人間的に考へる必要が出來て來たであらう事を見る。すなはち毒を以て毒を制する以上に、もつと有害で、人生を惡くし、暗くするやうな、スパイ制度といふ如き方式を捨てねばならぬ。つまり人間の世界において、スパイ的心理を刺激させるやうな犯罪搜索の方式を捨てゝ、もつと文化的な意識に依頼することが必要である。仲間を賣る！それは何といふいやな言葉だ。すでに裏ぎるほどの決心をもつものが、どんな醜悪な虚僞な手段を擇ばぬといへるか。そうしたものに依頼して、眞實の人間罪悪を知り得やうとすることは、恐らく神様でも出來得ない。スパイ制度の昔からの罪悪の、最も大きなものが、またこゝにある。ましてや見やうによつては、人間の罪悪といふものは、人類生活の最も深刻で、最も眞劍で、最も嚴肅な心的方面を表現するものである。その眞相を裁判するものは、最高の知慧をもつた人神でなければならぬ。しかしスパイ制度は、ひとり日本ばかりでない。歐米各國みなこれを利用して居る。それの最も多く力を注ぐものが、現代のやうな國家では、やはり何と言つても國事方面にある。しかし、それが前に云つたやうに、國家制度の反抗者が、或る場合にあつて、最も忠實な愛國者であり、最も眞劍な知識の主持者であるならば、そうしたものを取締るに、スパイの如き下劣な、無知な人間を利用することは、全く途を間違つて居る。これればかりでなく、彼等民衆の信念をして、徒らに過激な方面に向けしめる役に立つだけであらう。

次に、交通とか、衛生とか、そふいふ警察任務も、必ずしも權力を持たずに、民衆の合意で生活し合ふ時代になつたならば、それは當然、民衆自身の手でその任務を採り上げるやうになるであらう。そこでたゞ犯罪捜査が、警察任務の、一番重なものと考へられるのであるが、前に擧げたやうな、政治的犯罪は別として、一般犯罪でも、科學的方面の利用の稀薄であることが、つひ信頼するに足りない、無知な人間をも使用せねばならぬやうになつて了ふ。もし、科學の應用と發達が、もつと大規模に應用されたならば、多年、歴史的因襲に閉ぢこめられた警察組織をも、もつと、明るく、知識的に、また人道的に啓發することが出來るであらう。實際、今日の牒者もしくは犯罪捜査の手心は、隨分人格を無視したものであり、また知識と、能率を無視したものでもある。これでは、その成績の充分でないのも不思議ではない。

五

が、地底にのみもぐつてゐる土龍は、日光を見れば直ぐ死ぬる。元來が人間の暗黒面のみを凝視し、人類の犯罪心理ばかりを、始終擴大鏡で眺めてばかり居る。そうした職責をもつ警察人に、急に、あまりに人道的であることを求めるのは、或は矛盾であるかも知れない。要するに、警察や、裁判所の威力を、あまりに法外に威張らせる時代といふものは、決して好もしい時代ではないのだ。



經世眼と趣味眼に映ずる滿蒙

黑頭巾

其一

◉滿洲創造者は日本人なり。支那人にあらず。歐米人にもあらず。此の名譽と特權とは、日本人、自からこれを尊重せずんばある可らず。

◉漠々たる滿洲の大平原、天地の間に横たはること六千年、大なる一箇の空間たりしのみ。滿洲は日本に依つて甦へたるにあらず。初めて活きたるなり。

◉日本人の進出以前に於ける滿洲の過去は、歷史にあらず。無を重ぬるとも有に至らず。日出て動き、日沒して息ふ。かくの如き無意味のものを繰返すを以て歷史といふにあらず。世界に於ける、滿洲の歷史的地盤に初めて、一地の礎石を置くを得しめたるものは、日本人なり。

◉歐洲の勢力、東漸すること潮の如く、興安嶺を超えて東亞を侵さんとするに當り、これに對抗すべき日本の勢力、漸く勃興し來り、興安嶺を堤防として、以て狂瀾を防がんとす、此に於て、滿洲の世界的意義、始めて確立す。

◉存在は必ずしも塡充性を意味せず。六千年來の滿洲は、塡充性を滿足したるに過ぎざりしといふを妨げず。世界圖に於ける滿洲の存在の認められたるは、最近の事に屬す。

◉東漸の波濤、西漸の波濤と相拍つて、萬丈高濤の壯觀を現出す。その大舞臺は則ち滿洲なり。全世界に横流する東西の人種

的抗爭の潮流、此の大平原に渦卷きつゝあるもの、則ち生命を吹き込まれたる滿洲の光景にあらずや。

◉此の如き雰圍氣に生きつゝある滿洲。その一呼吸も、世界の均衡に影響を與ふるに足る。然かも、卒然として望めば、大地を浸す綠の、限りなき高粱の野、天に連なる、矮草の疎らなる蒙古の大沙漠。地球上の緊張したる分野に、何處にか、此の閑寂の天地を求むるを得ん。

◉六千年來の滿洲は「渾沌」なりき。目も、鼻もなき生存なりき。三十年來、此の大なる「渾沌」に向つて、忙がはしく、目を彫り、鼻を刻み、耳を穿ち、口を開かしめ、急速に、異常の努力を傾注したるものは日本人なり。

◉目、鼻、耳、口、初めて具はりて、「渾沌」忽ち消え、今の滿洲、世界の面前に出現し來る。五感賦與せられて、此に至つて、始めて滿洲魂あり。滿洲の生命と、歷史と、此より出發す。

◉感覺なきものは、生命なし。老大なる古滿洲は土地に過ぎざりしこと、譬へば魁偉なる軀幹にして感覺なかりし人の如し。今や、感覺の目覺めたる滿洲に、始めて生命あり。

◉田舍に行けば、往々にして舊家の邸內に廣漠たる空地の存するを見ることあり。物干場としては勿體なしと見ゆれども、物干場とする外なし、田舍には、それだけの餘裕あるなり。都會といふは、地上の物干場を空地に送り、地上には立錐の餘地なきものをいふ。都會と田舍の區別は則ち餘裕の有無ならずんばあらず。

◉世界の中世史と近世史との區別も亦た餘裕の有無に由つて表現せらる。世界に於ける空地としての滿洲は、則ち舊世界の、綽々たる餘裕を象徵すること、恰も田舍の長者屋敷の空地の如くならずんばあらざりし。今や、局促たる全世界の雰圍氣は、かくの如き大なる餘裕を示すを得ず。

◉生命を賦與するは則ち創造なり。滿洲は亞米利加の如くに、發見に由つて紹介されたるに非ず、その開闢は、遼遠たる太古に溯ぼるを得べし、作られたる儘にして放任せられたること、開眼せられざる木佛の如くなりし。開眼は創造なり。

◉吾等の祖國は、吾等の祖先が開眼したる國體の藝術なり。吾等は、現代の日本人が創造したる趣味の滿洲を觀ざる可らず。

其二

◉形式的には、滿洲は支那の中に含まる。吾等は、敢て、支那、滿洲といひ、實質的に、滿洲は支那の中に含まれざることを示す。含まざるといふは、價値を異にするといふにあらず、

隷屬せざる意味に於て。

◉列國は、未だ滿洲を以て獨立國と認めず、支那より言へば、その東三省を滿洲と爲す。然れども先きに、北京政府が露國を承認するに當り、東三省は、これを承認せず。動亂に際し、張作霖が露國と協約するや、北京政府は、東三省に國際協約を締結するの權利なきことを抗議す。

◉事實に於て、動亂以前の滿洲は、殆んど北京政府の支配を受けず、行政上には沒交涉の關係にあり。北京が、滿洲を放任したるにはあらず、干涉する能はざりしなり。譬へば貧弱なる一大家族が、母屋に住みて、その長屋に有力なる親族を同居せしむるが如し。門外に對する責任は母屋にあり、門內に於ては、長屋は必ずしも母屋に隷屬せず。國際的に見たる支那、滿洲の地位は此の如し。

◉白馬、馬に非ざるが如く、中華民國は必ずしも支那にあらず。北京を以て中華民國の首府なりとせば、中華民國の版圖は、萬里長城を以て東北を限るべし。かくして、中華民國と滿洲とを合はせて支那といふ。中華民國といふは、國家的の名稱ならざる可らず、滿洲が民國政府の節度に服せざるを見れば、實質に於て滿洲は中華民國にあらず。

◉支那といふは、民族的及び文化的の名稱たらずんばあらず。此の意味に於て、南北支那も、滿洲も悉く支那なり。

◉萬里長城は、支那民族の發達史に於ける、最も重大なる意味を有する事實なり。長城の築かれし後、長城以外を塞外といひ、支那の屬地となる。國家的及文化的に、これを屬國といふは誤れり、屬地といふを至當とす。

◉秦始皇の長城創築以來、三千年の久しきに涉り、文化及政治の木鐸は、塞內に限り、塞外は、その權利を得ず。譬へば塞內は土俵にして、塞外はその溜（タマリ）たり。塞外に、如何なる英雄の崛起するありといへども、土俵に登るにあらざれば、價値を認められず。

◉萬里長城と楊子江との間を以て、支那の舞臺とするは論莫し。然れども長江以南は舞臺たるを失はず。長城以東は則ち屬地にして舞臺にあらず。長城と長江とは、藩籬としての價値を異にす。最近の、滿洲の擡頭といふは、則ち長城をして長江と藩籬としての價値を接近せしめつつあるものなり。

◉古、塞外に王あり。皇帝なし。皇帝は塞內にあり。皇帝には萬々歲を稱し、王には萬歲を稱す。今、滿洲王なし。張作霖は節度使の形を以て、王以上の實を行ふ。然れども彼は滿洲の風雲兒なり、創造者にあらず。張の地位の向上は、滿洲の發達に伴ふ。

●輝やく黄金塔を見て、目、その中にありと思ふ可らず。滿洲は光にして、張作霖は則ち黄金塔偽らずんばあらず。日の登るに隨つて、黄金塔は、ますく輝やくなるべし。

其三

●血管は、直ちに、これを生命なりといふを得ず。然れども血管なければ生命なし。滿洲の血管は則ち鐵道なり。

●此の意味に於て、滿洲經營の第一策は、鐵道網の完成にあるは、識者を待つて知るを要せず。滿洲に於ける鐵道は、交通機關たると共に文化機關たり。海底の潛水器に酸素を供給する總送管といふよりも、地中の洞道に電球を送るべき電綫たり。電綫の伸ぶるところ、光明遍照の世界、隨つて拓く。

●滿洲の生命は、滿洲の鐵道が日本の手に歸したるときに始まる。鐵道網完成の時は、則ち滿洲の創造、略ぼ成功の時といふを妨げず。

●庖刀は武器の目的に使用せらるる間、これを經濟機關なりといふを得ず。滿洲に於ける最初の鐵道敷設者は露國なり。然れども、露國は侵略の目的を以て鐵道を敷く。これを以て、滿洲開發の爲にするにあらず。露國より見れば、滿洲の大平原は、唯だ、西比利鐵道を延長して旅順に達し、以て、太平洋に臨むべき爲の、軌道の敷地たるに過ぎず。

●南滿洲鐵道の敷設は、クロパトキンの主張に本づく。クロパトキンは、露國に於ける帝國主義の巨頭たり。太平洋の沿岸に、その鐵腕を揮はんが爲には、浦潮よりも旅順を擇ぶべし。彼得大帝以來の南下の理想は、クロパトキンに憑つて成就されんとしたり。クロパトキンの眼中には、南滿洲鐵道の使命は、專ら國境より滿洲を通過して、太平洋の不凍港まで、大砲を運ぶに在て、鐵道と砲架と何等異なるところあるを見ざりしなり。

●劍、短くして敵に達せざるときは、長槍を用ふ。クロパトキンの爲には、南滿洲鐵道は槍の柄のみ。或は、西比利亞より太平洋に送る砲彈を有効ならしむる爲の彈道とも解釋することを得べし。

●侵略主義に反對したる經濟主義の巨頭たウヰッテとす。彼の主張に依れば、哈爾賓以南の南滿洲鐵道を敷設するに反對し、浦潮を商港とし、哈爾賓より浦潮に至る鐵道を以て、專ら太平洋岸に於ける露國の經濟的發展を企圖するにあり。

●露國に於ては、南滿線は侵略主義を象徴し、浦潮線は平和主義を徴象す。ウヰッテ敗れ、クロパトキン勝つて、浦潮も亦た軍港となり、南滿線も浦潮線も、滿洲の鐵道を擧げて、ともに侵略機關となる。此の事、ウヰッテの回想錄に明らかなり。

●ウヰッテの說は、旅順を軍港としてこれを以て、南滿洲鐵道の終點とするは、明らかに太平洋の平和を脅威するものにして、日本、必ず、默視せず。隨つて日露の衝突は免かる可らずといふにあり。クロパトキンは乃ち、これに反し、日露の衝突を期待するものなり。

●吾輩、露國の爲には、クロパトキンの勝利が、その國運の平和的發展を阻害したるを惜む。然れどもクロパトキンなかりせば、南滿洲鐵道の敷設は、尙ほ若干の歲月を後れしは疑を容れず。滿洲の爲には、逆緣ながら、クロパトキンが殺生の陰謀、計らずも佛果を得たりといふべし。

●然しクロパトキンの南滿洲鐵道なかりせば、日露戰爭容易に、起らず。日露の衝突は早晚、免かる可らざりしとするも、かくの如く速かに起らず。南滿洲鐵道は、日露戰爭の動機、而して滿洲創造の因緣を爲せり。

●日露和平條約の未だ締結されざるに先だち、逸早く此の鐵道の經營に、合辨を提言せるものは米國なり。由來、米國が、機を捉るに敏なるを見るべし。然れども、此の時、米國が機に乘じて合辨の權を得たりとせば、戰敗の露國といへども希望するところにあらず。

●突然、飛び出して、日清戰爭の結果を奪ひたるは三國干涉なりしは、言に及ばず。三國干涉は武力を以て行はれたり。日露戰爭の結果を奪はんとしたるは、米國ならずんばあらず。當時、すでに日本の武威旺盛なり、武力を以て動かす可らず、則ち米國は金力を以て來る。

●三國干涉は積極的の牽制にして、米國の提言は、消極的の牽制なり。その牽制たるに至つては同じ。露骨と、婉曲なるとの相違のみ。

●今や、支那、滿洲に於ける日、米の勢力の抗爭は、尤も觀察に値す。排日の陰に、米國あるは、世人の知るところなり。當時滿洲鐵道、若し日米の合辨に歸したりとせば、今日に於て、滿洲に於ける日米の關係、恐らくは言ふに忍びざるものあらん。

●抑、南滿洲鐵道は日露戰爭の動機。日本人、國運を賭して、以て、露國の東亞侵略の鋒を挫き、東方の平和を確保するに至る。滿洲の野に於ける屍山血河、世界の耳目に明らかなり。南滿洲鐵道を露國の手より收めて、これを平和の目的に向つて經營するは、獨り日本の全責任に屬す。傍觀者たりし米國の協力を要するの理由なきなり。

●南滿洲鐵道の由來、これを外交上に觀れば、感興少からず。日本人の有する鐵道の歷史に於て、特に精采あるものなり。此

の事、此に詳論せず。當時、首相、桂、外相小村の二卿、能く内外の難局を排して、事を完くしたるは、此の鐵道の歴史に特筆せざる可らず。而して今の滿鐵創立の事業は、大將兒玉その事に當り、續いて大將寺内これを繼承す。

◉日露戰局は、クロパトキンの政敵ウヰッテ起つて、クロパトキンの跡始末を爲す。滿洲創造の歴史を論ずるには、ウヰッテを閑却するを得ず。ウヰッテの薨後、未亡人、その回想錄を抱いて獨逸に逃れ、出版の目的を達するを得たり。これに先だち、その政敵、彼の家宅を捜索して、同想錄を得んとして能はざりき。

◉南滿洲鐵道を中心とする國際的、秘史は、今や、支那が外交問題の中心となるに當り、殊に感興の湧くを覺ゆ。三國干渉の後、露國自から旅順を租借するの理不盡は言に及ばず。滿洲に於ける鐵道敷設の實際も亦た威力の表現に外ならず。露國以外の列國、かくの如き態度に出るを得るもの、恐らくは無かるべし。莫斯哥と、ペトログラードとの間の鐵道を敷設したると、南滿洲鐵道に於けると、その態度を同じくす。

◉露國時代の南滿洲鐵道は、單に軍事機關にして、生産的に利用せず。文明の機關、徒らに滿洲人の驚異に値するのみなりし。

◉劍を銷して佛像を鑄るとも、その功德は、日本が、露國の軍事鐵道を適用して、經濟的、文化的に滿洲を開發するには及ぶ可らず。

◉支那は、餘りに鐵道を崇拜するに過ぎずや。これが爲に、多くの借款を起し、これを抵當とし、軍閥は、また、その收益を押收す。支那の鐵道は砂糖よりも甘きし、利を漁さるの蟻、悉くこれに附く。

◉支那の鐵道は、創立以來、年を經ること未だ久しからずして、血管として見れば、卅年にして、早く既に硬化す。京漢鐵道、京奉鐵道、殊に甚だし。必ずしも曹錕、吳佩孚、張作霖といはず、群雄、すべて血管に寄生するに非ざるはなし。或は、軌道の敷かれざるに、逸早く寄生し、未生以前の血管をして、胎内に硬化せしむ。

◉若し、支那人が、滿洲に於ける日本に、崇拜しつつあるものを求めば、軍隊と鐵道となるべし。然れども日本の兵士は、體格に於て支那兵を凌駕せざるが故に、戰はざれば眞價を知らしむるを得ず。鐵道は、支那人が、日本に憧憬する唯一の崇拜物ならずんばあらざるべし。

◉軍隊を以て鐵道を警備するの必要なきに至らざれば、滿洲の理想境といふを得ず。日本に警備隊あり、東支鐵道には護路軍

あり。もつとも今の滿洲に於て、鐵道ほど尊ときものなし。武力を以て保護するは、已むを得ざるべしといへども、先進の文明國に、かくの如き、必要あるものなし。

其四

●乘物の速力は文化の標準なり。滿洲、殊に蒙古旅といへば、人をして、蒲鉾馬車と連想せしむ。汽車の窓より蒙古の沙漠を眺むるを得るに至らざれば、蒙古の開發は期せられず。蒲鉾馬車に搖られて數十日を送るは、文明人の堪うるところにあらずして、尻よりも、先づ、頭、疲れん。蒲鉾馬車は、自動車よりも畫趣あり。或意味に於ては、畫趣は文明の悲劇なり。

●鐵道として、日本人の有する、尤も優秀なるものは南滿洲鐵道なり。廣軌なるに於て、快速力を有するに於て、車體の宏壯なるに於て、牽引力の優越なるに於て、すべて本國を凌駕す。

●内地の汽車の第一印象は、窮屈なるにあり。汽車といへば、窮屈なる旅行を思ひ出す。滿洲の汽車は、車室寬大にして、吾心を伸び〱せしむ。安奉線と吉長線との外、興安嶺に、その一あるのみにして、すべて滿洲に隧道なし。車窓より望めば、遠き地平線、つねに眼前に展開しつつあること、大洋の船窓に於けるが如し。

●滿洲の大平原には、汽車のうちにも、寬大なる乾坤あり。日本の汽車は、身邊窮屈を極め、時々、隧道は、釣天井の如くに、人の頭上を壓迫す。行き詰まれる社會相は汽車の中に現はるる。滿洲の車室には、自から大陸の雰圍氣あり。

●日本の汽車には、車窓に映ずる風景、刻々に變化し、限りなき映畫の長卷を展開するの興味あり、初見の地方を經過するとき、山水の、映畫を鑒賞せんとするには、眼を車窓より離すを得ず、離せば則ち映畫の連絡を見落すべし　滿洲旅行は、それと全く感を異にす。

●行けども、行けども、同じやうなる大平原の光景、連續して車窓に映ずるは滿洲なり。初めて滿洲に旅行に來る旅客、明目張膽して、窓外の大風景を見詰むれども、日を經るに隨ひ、漸く眼を休息せしむるの要領を解するに至るべし

●車窓より見る日本の風景は、山水の繪卷にして、滿洲のは、概して、平原の、染模樣ならずんばあらざるべし。前者は、全部を遍ねく見るを要し、後者は、模樣を繰返す　車窓に倚りて、讀書しつゝ、時々眼を放つて窓外を見れば可なり。

●滿洲の汽車旅に於ける眼の生活は、單調、壯快にして、視神經を疲勞せしめず、硝子窓の二重なるも、亦た風塵を防ぐに可なり。日本人は滿洲に來れば、忽ちのんきになるといふ　一

人格の窓なり、明窓は精神を暢びしむるなり。

◉若し、夫れ、滿洲汽車ののん氣なる氣分をいへば、ホームを解放して、改札なく、入場劵の面倒もなし　唯だ此の二事のみにあらず。車室の寬大と、停車場の自由とは、大平原の氣分に副ふ。

其五

◉吾輩、初めて滿洲に來り、廿年遲かりしを悔ゆ、日清戰後、或は日露戰後に來り、爾來、時々、來遊せしならばと思ふ　然れども尚ほ未だ必ずしも後れたりと爲す可からず　過去に失ふところ、今後に回復するの、難きにあらざるべし。

◉吾輩、初春、帝都を發し、海路、先づ大連に上陸し、旅順及び、關東州を一巡し、北上して奉天に至り鞍山の製鐵、撫順の石炭を觀、四平街より四洮線に轉じ、鄭家屯より分れて、白音太來、及び洮南を極め、モリミヤウの喇嘛宮に至り、海の如き内蒙古の大平原を過ぎ、四平街に歸り、公主嶺の農場を觀て、長春に至る　滿鐵線の終點とす。

◉大連より長春に至る幹線、經過、及一泊するところ、營口に日清役以來の商勢の變遷を見、遼河の水上に帆船を喚せんとす。烈風を以て果たさず　陶然として、湯崗子の温泉に浴し、

遼陽の白塔下に古瓦を拾ひ、鐵嶺には龍珠山に登り、醉翁樓の闌干に倚つて、山河の形勢を望む　開原に、上巳の佳節に値ひ、雛壇を見る、若葉旅館の玄關に踞して、白酒を飲み、遙に家鄕を憶ふ。

◉長春より吉長線に架して、吉林に往復し松花江の水上に馬車を奔らし、痛快を呼ぶ。去年自働車に乘じて、鴨綠江の氷上を溯らんことを思ひしことあり、計らず、此に宿志を遂ぐるを喜ぶ　長春より一路、哈爾賓に到り、車を降ろや春畝公、遭難の地點を認め、脫帽して當年を偲ぶ　凡そ普通の滿洲旅行は、哈爾賓に到るを以て標準とす。

◉春畝公、哈爾賓に來りしとき、日本の陸軍大將、未だ一人も此に來るものなかりし　公則ち元老にして、率先して來る。此の事、蓋し、日本人、大陸進出の歷史に特筆すべし　その最期の壯烈は言ふに及ばず。

◉或はいふ、露國、また公を哀悼し、ホームに於ける遭難の地點に、記念を刻して、萬世に傳へんとす。吾が外務官憲、その事の、國際感情を刺戟するあらんことを恐れ、厚意を謝して、刻碑は則ち固辭するといふ。

◉哈爾賓の郊外、沖横川二士、殉國の地點に、巍然たる烈士碑あり。春畝公の最期、また内外の均しく、壯烈とするところ、

驛のホームに、刻碑なかる可からず。假令、無しとするも、行客、皆、識る。然れども當時、露國人の刻碑を謝絶したるは、失體たらずんばあらず。

◉蓋し、ホームに於ける刻碑は、旅人の足跡に觸るるを厭ふといふものあり。如何なる名山、靈峯も、悉く人の足下にあり。名山、靈峯、仰ぎ見るべく、登り踏むべし。地上の刻碑を踏んで通ほるも、何んぞ死者の神聖を傷けんや。

◉吾輩、北進を續け、哈爾賓を發し、露支國境を窮めんと欲す。興安嶺を超えて、滿洲里に至る。哈爾賓より廿六時間、身は漸く絶域にあるを覺ゆ。

◉哈爾賓より南歸して奉天に淹留すること二旬、此の行、奉天を以て、滿洲研究の中心とす。奉天は、略ぼ滿洲の中央にあり、南北に滿鐵線、東西には安奉線と、京奉線とあり、正しく滿洲に於ける鐵道の十字街頭に立ち、愛親覺羅氏の故郷にして、現在に、滿洲王の奉天府あり。風土、形勢及び、交通の關係、此の地を以て、滿洲研究の中心とするを妥當とすべし。

◉滿洲を見れば即ち支那を見ざる可らず。吾輩、當初、滿洲旅行を豫定とせり。然かも滿洲に居ること三月、支那を見ずして、自から安んずるを得可らず。安奉線に搭して北京に行く。時に奉天は春、尙ほ淺し、柳芽、微に黃を帶ぶるのみ。朝、奉天を發し、夕に山海關に近し、錦州以西、柳、悉く綠に、桃花、平野に滿ち、春風、春水、一時に來る。

◉支那遊の計畫、北京より洛陽に到り、漢口に出で、楊子江を下つて上海に遊び、海に浮んで北、天津に還り、泰山に登り、孔子の舊里を弔ひ、航して大連、旅順を歷て、奉天に歸り、大圓周を畫いて、以て支那を大觀するにあり。

◉北京に淹留すること四旬に餘り、感興泉の如く湧く。南下に先だち、偶、吾が左脚、象皮病に罹り、病を護つて奉天に歸るの已むを得ざるに至る。爾來、奉天に淹留し、全快を期して、安奉線を一見し、舟を鴨綠江に浮ぶ。朝鮮は即ちすべて一瀉千里に通過す。

◉此行、日數、半歲を超え、生來の長旅たるを失はず。脚疾に罹らざりせば、游蹤は、數倍して日數は却つて短縮せしならん。然れども病に由つて、支那の書を支那に讀み、滿洲の雰圍氣に浸ること久しく、大陸研究に得るところ少しとす可らず。芭蕉の「旅に病んで、夢は枯野をかけまはる」の詩境、吾輩、これを大陸に得たり。

◉北京に行かざりせば、或は、象皮病に罹らざりしやも知れずといふを得ず。旅行は出戰と同じ。戰士、必ずしも悉く無事還るを得ず。彈丸に中ることもあり。その時、出陣せざりした

ばといふは、愚痴なるべし。

●既に、滿洲を見て、更に支那に入るは、隴を得て蜀を望むにあらず。支那、滿洲は併せ觀ずんばある可らず。一班を見て全豹を見ざる、固より言ふに足らず。比目魚の一側面を見て、他の一側面を見ざるも亦た不可なり。

●支那の國としては、南北支那を對照するを必要とし、支那の民族としては、支那、滿洲を幷觀するを必要とし、而して滿洲といへば必らず蒙古を分離せしむ可らず。政治、經濟、文化に見たる支那、滿洲、蒙古の連環的研究をして、日本人の趣味たり、權威たらしめよ。

●大陸の雰圍氣、島國に養はれたる耳目を一新するに足れり。大陸の智識と趣味とを日本に普及するは、先づ、日本人をして大陸を一觀せしむべし。

其六

●滿洲は、日本人の植民地なり。日本民族の發展より見れば、即ち大陸に於ける新日本なり。今や日本は、あらゆる方面に行き詰れる。新日本の人は、如何に、その本國を見つゝありや。

●吾輩の滿洲遊、一には新日本を觀、一には、大陸より顧みて本國を覗んとす。雲に入つて雲を見ず。雲を出でゝ始めて雲を見るとき、明らかに雲の行衛を見る。

●支那、滿洲にありて、米國の排日案の實施を聞く。此の時の感想、定めて本國にありしよりも更に一層の深刻を加へたるを疑はず。排日は、由來、支那の人氣問題たり。支那の政治家、たとへ心に排日を期せざるも、口に排日を唱へて民衆に媚ぶるもの少からず。米國の排日は法律的にして、支那の排日は社會的なり。

●在米の同胞と等しく、滿洲の新日本は、痛切に、「排日」と戰ひつゝあり。勝敗の決は、但だ力に存せずんばあらず。精神、振はざれば力無きに同じ。滿洲の新日本は、日本人の力の前途を卜すべし。

●日清戰爭に、支那人始めて日本の弱からざりしに驚く。然れども未だ日本を以て强邦なりとはせず。日露戰爭を經て、支那人始めて日本の强きに驚く。當時、日本人、滿洲に全盛を極め、一兵卒といへども、光彩を生ず。

●支那人も亦た健忘性の民族たるを失はず。日露戰爭を半ば忘れ、日清戰爭を全く忘るゝに近し。當時將軍みな日本を畏る、況んや市井の人をや。今や、形勢一變し、俥夫といへども、日本人に對し、次第に增長す。彼が日本人に對する利權回收の聲は、彼等が擡頭し來れる雰圍氣の反映たらずんばあらず。

●多くの國民は事大主義ならざるはなし。その特に太甚だしきものを支那人とす。事大主義なるが故に、形勢を觀望するに巧なり。日本の對米外交の振はざるを見るや、彼等は、逸早く、その機微を直感し、以て、日本といへども米國に勝つ可らずとなす。これより米を揚げ、日を抑ふ。故に、滿洲の日本人の肩身を狹くしつゝあるものは、日本の外交軟、その一なり。

●日本の對米外交、振はざる間は、如何に鬼面烈辭を以て支那に臨むとも、支那人驚かず。彼等は最强者に附き、その他を侮る。

●交際は眞率なるを第一とす。お世辭の必要なし。日支親善、共存同榮の說、日本人の口より高唱せらるゝを惜しむ。大陸に於ては、支那人が主にして、日本人は客なり。此の言、須らく主人の口より挨拶せらる可かりし。

●先づ諛辭を送る者は、氣、餒う、弱者なり。支那人は、日支親善、共存同榮を以て、日本人の諛辭となす。或は、これを以て、腹に劍あり、口に蜜ありとなし、或は、これを以て、日本人の弱音となす。

●外交は、齊の管仲たるべし、鄭の子產たること勿れ。子產の外交は、弱者の外交にあらず。いかに巧妙を極むればとて、崇むに足らず。お世辭の余をさして綱渡りをする藝人の如くなればなり。

其七

●南下の爲の、露國の南滿洲鐵道は、その經營の首府を大連に置きしは、當然なり。固より大連を除いて、それ以上の適地なし。滿蒙開發を標榜して、北進を理想とする滿鐵の首府は、北方にあるべき筈なり。

●滿蒙經營の首府は、哈爾賓を理想的とす。然れども哈爾賓は、滿鐵線の外にあるを以て、問題とはならず。滿鐵線の北端を長春とす。南下の大連に對する北進の長春ならざる可らず。

●北滿及び蒙古に對する理想的關係よりすれば、長春は奉天に勝れり。然れども南北滿洲の中間に居り、支那にも朝鮮にも交通の要衝に當り、宛然として地勢上、滿洲の中心たる地位を占むるは、則ち奉天にあり。

●滿鐵より見れば、大連の使命は、「滿洲の神戶」たらずんばあらざるべし。大連を以て神戶とすれば、滿鐵の首府は、必ずしも貿易港に置くを要せず。首府は大局の針路を示すべき地位に置かざる可らず。

●滿蒙開發の一語が、現在及び將來に於て、北滿と蒙古とを意味するものとせば、滿鐵の首府を北移せしむるを要す。此の言、

今日に始まるに非ず。唯だ、實行を難しとするのみ。

◎古來、遷都は容易ならず。非常の雄斷あるに非れば能はず。奈良より平安京への遷都は、千年前の雄斷を想像するに餘りあり。露國の彼得斯堡に於ける、日本の東京に於ける、その遷都は、ともに與國の大氣象を表現するものにあらずや。滿鐵にして現實に補はれず、能く、その首府を北移せしむるを得ば、また、これ非常の雄斷といはずんばあらず。

◎滿洲に於ける首府の北移は、日本人、北進の雰圍氣を作るにあり。大陸に於ける日本の植民地を確保する鐵の鍵は北方にあり。南方の大連は本國との連鎖點たるべく、進出は、北方の長春、奉天にあるべし。

●本來、南滿洲鐵道が日本人の手に歸せし時、旅順は、これを一箇の要塞地帶たるに留め、關東廳を大連に置き、而して滿鐵の本社を、關東州を離れて、北移せしむ可かりしなり。

◎偉大なる大連の出現は、東洋交通線の中心たる地位を占有するを得るの日にあり。この時には、東の神戸、西の上海、此の二大貿易港の本能の幾部を吸收し、これを大連の能率に注入し、以て、大連の使命を著るしく重大ならしむるを得べし。

●南滿洲の地力は、略ぼ開拓せられるといへども、石炭、鐵、及び大豆、高粱、その他、牧畜、漁産は言に及ばず。將來の森林鑛區、北滿にあり。その未だ開發せられざる森林及び鑛料は、十將來の富を想像せしむるに餘あり。而して南滿洲より內地に續く廣大なる地積と、年々、增加する人口、すべてこれ大連の背域をなすものにあらずや。

●大連は、滿蒙の咽喉にして、朝鮮半島と、山東半島との中間に居り、築港完成の曉には、東亞大陸の北方第一の良港たるを得可く、海外の交通、貿易に於て、上海と、興味ある爭覇戰を開始するに至るべし。

●旅順は、關東州に於ける、避寒、避暑の適地たるのみにあらず、その風光の明媚なる、實に意料の外にあり。內外の激戰地にして、兼ねて風景地たるもの必ずしも少しとなさず、然れども旅順の如く、世界的大戰場にして、また能く一大風景地帶たるは稀なるべし。若し、最近世の歷史に全然、無知なる人物をして、旅順を遊覽して、二〇三高地の絕頂に立たしめば、無數の山邱波濤の如く脚下に起伏する絕景を嘆美するのみならん。

●然れども旅客をして、此の好風景を嘆美して已まさらしむるものは、眼前、平和的の好風景に連想する難攻不落と肉彈との追憶にあり。旅順は、政治、經濟の舞臺にあらず。今、此に工科大學あり、將來に各種の學校を新建して、滿洲の一大學府たらしむべし。

◉民族を學府たらしめよ。東亞大陸の北方を照らす光明たらしめよ。兵戈は鎖して、文化の光となる。人道の歴史に於ける一の感激たるを失はざるべし。

◉若し、それ茫々たる南滿洲。新日本の植民地、僅に十八萬人に過ぎず。その地積を以てすれば、本國と比較するに堪えず、その人口を以てすれば、滿洲を擧げて、東京市の一區に匹敵するのみ。此の、日本人、懸命の植民地の、地廣く、人少く、如何に稀薄なるかを知る。

◉南滿洲の經營、すでに十七年。日本の植民地として人口の增殖するを見ず。本國の人口、年々、六十萬人を增加す。一縣の人口、平均約百餘萬、日本は、土地を擴張することなくして、二年毎に、一縣を增加するの事實あり。南滿洲の人口は、本國に於ける著名なる一箇の市くらゐに過ぎず。

◉日本人の、將來の發展に於ける根本問題は人口調節にあり。而して現在の實情を以てすれば、滿洲は、此の問題の解決には、多くの交渉を有せざるに似たり。

◉日本人、懸命の植民地は、此の如し。日本人、自から能く、これを熟知し、併せて、これを研究せざる可らず。況んや、島國人を驚異せしむるに足る底の地理的の新趣味、大陸の國際的雰圍の目擊に由つて、挑發せらるべき民族的精神の緊張、旅行に由つて得るあらゆる新らしき知識、趣味、研究、愉快。目前に展開する寬濶なる別世界、すべて是れ大陸が、日本の旅客を誘致するに足るものなり。

◉日支は同文にあらず、同字なり。支那の文字といふよりも、近世に於て、既に日本の文字となれり。千年來、日本人が使ひ馴れ、熟得して、目と手と文字と一致したる今に於て、その形を同じくして操縱を異にする漢字の國土は、日本人には、別種の新趣味ならずんばあらず。此の趣味、歐米人にはなし。唯だひとり日本人にのみ有り。

◉平安京の大宮人は、關東の田舍を知らずして、海外の唐、宋に憧憬れたり。近來の日本人は、支那、滿洲よりも歐米の智識に富む。英、米、獨、佛よりも、支那、滿洲は日本人に新らし。

其八

◉「日本橋下の水は倫敦に連なる」といへば倫敦は近かきように思はる。事實に於ては遠し。滿洲は極めて近し。一衣帶水のみ。蒸汽に乘つて、海に浮びし經驗は、日本と滿洲との間より遠き波濤を渡れり。日本人海外といへば、隔地に思ふ。滿洲に行くは、旅程の短きのみならず、異境に行く感を起さしめず。

◉西天の長霧、玄海の波濤、必ずしも滿洲を隔てず。唇齒、

連埠頭に投錨すれば、岸上に一箇の新日本を發見すべし。二日の航路は、唯だ關門海峽より關東州に至るの廊下たるに過ぎざるなり。

◉鴨綠江の浪、右に安東縣を拍ち、左に新義州を拍つて流る。兩岸、青山、まさに握手しつつあるに似たり。萬壑の蒼翠、錯綜して重なり合ひ、その間より湧く汪々、洋々たる萬里の水、無數の筏を浮べて流る。江上の落花、いづれの山より來る。顧みて青山を望む、知らず、何處にか國境ある。

◉兩國の紅燈、交も〳〵江水に映じ、歌唱、相應ず。新義州の蝶は飛んで鎭江山の花に到る。謂ふこと莫かれ、長江、別ち國境を爲すと。請ふ、見よ、大鐵橋の長さ、僅かに萬壽山の廻廊よりも長からず。

◉安東縣に名ある旅館を元寶館といふ。その名は支那らしく響く。疊の坐敷にして、板椽あり、障子を開いて眺めば、平庭に秋草など栽えて蟲聲は愛すべし。

◉裏日本の山脈、海底を潜ぐつて、伏して復起き朝鮮半島となる。蜿蜒として鴨綠江を超えて安奉線に至る。安奉線、急行六時間半、その間、二十四の洞道あり、山を出でて、また山に入ること、吾が中央線を行くに異ならず。東京より山宵一帶、直ちに溪天に續く。

◉日本の中等學校には、英語を必修せしむ。然れども日本人にして、關東州に居ること十年にして、此の支那語を解せざるものは珍づらしからず。關東州に住するは、內地に居ると同じ。

◉大風蒙古の大沙漠を吹いて、黃塵、高く飛んで日本に到る。海峽以南、九州の天、濛々として黃なり。此の黃塵、何處まで到るを知らず、定めて九州を過ぎて、南に去るならん。

◉昔年、此の夏、奉天に滯留せしとき、「蠅、打てば、蒙古沙、散る網戶かな」の句あり。此の詩境、これを吾が九州にも發見するを得べし。但だ九州には網戶少きのみ。蓋し、日本も滿洲も、ともに蒙古沙の下にあり。

◉東洋交通網の中心を關門海峽と推定すべき理由あり。海峽を以て元標とすれば、青森に行くよりも大連に達するを近しとし、一は腰掛の汽車、一は安臥の船室、旅行の難易も亦た同日の談にあらず。

◉海峽と大連間の航海は、鹿兒島と那覇間よりも易し。「琉球と鹿兒島が地續きならば」の唄は、此にも唄ふべし。若し關釜線を擇ばば、半夜、投錨、一睡覺めて身は既に釜山にあり。下關より步して隣村に至るよりも氣樂なるべし。

◉東京を起點とするも、奉天に行くは、樺太に行くよりも易し。乃ち、樺太長官を訪ふよりも、張作霖を訪ふを近しとせず

んばあらず。況んや北海の嚴冬、航行の難あるをや。

◉祖國は、本來、必ずしも山と水とにあらず。國旗の翻へるところ、國語の響くところ、祖國の雰圍氣の漂ふところ。況して山川行程、一擧手、一投足の滿洲。日本の延長に非ずして何ぞや。

◉「趣味の日本」の新座敷を滿洲とすべし。母屋は木造、新座敷は煉瓦。木と煉瓦との相違のみ。木造の母家に、籐椅子を並べ、煉瓦の新坐敷にも疊を敷く。

◉炬燵を壁に伸ばして、ペーチカとなすといへども寢床は改まらず。米の飯を食ひ、湯衣を著る。箸なくては濟まず。兵兒帶なくては濟まず。但だ日本は木炭の國、滿洲は石炭の世界。

◉滿洲には、電車少く、俥だらけなり、馬と俥とは、日本よりも低し。滿洲の車は這うか如く、日本の俥は空を走る。俥夫か、皆苦力なるか目に著く。到るところ日本旅館あり、滿洲の旅路に漂ふものは、祖國情調なり。

其九

◉滿洲は、日本の風景論者の爲には、新趣味にして、また一大驚異たらすればあらず。日本にては、風景といふも山水といふも同じ、風景は悉く山水なり。人間到處有二青山一の一句は、到るところに實境なり。到る處に青山なきは則ち滿洲なり。

◉全體を以てすれば、滿洲に山なきにあらず。山といふよりも破格大の山嶽あり。それを長白山と興安嶺とす。かくの如き大山脈は日本には相像せられず。然れども一は、その東境を縫ひ、一は哈爾賓以北にあり。滿洲の大舞臺には、山、稀なり。山水といふよりも山野といふへし。山野よりも平原なり。尤も人を動かすものは、大平原なり。

◉滿洲の風景は水平線的なり。日本の風景は、縱に見るべく、滿洲のは横に見るべし。故に滿洲の風景は、科學的には、その延長を以て言ふべく、日本のは海拔を以て、その山水を言ふべし。

◉若し、海拔を以て論ずれば、滿洲は、すべて低級なり。その尤も高秀なるものといへども、六千尺を出るものあらず。此の廣大無邊の大地帶を擧げて、吾々か九州の高山に及ぶものなく、全滿洲の山は、皆、阿蘇山よりも低し。

◉渾べて北支那の山は低し。孔子は泰山に登つて天下を小なりとするは、眼界の壯感を意味す。泰山は、伯耆の大山よりも低し。唯だ平原に崛起するか爲に、特に、高峻を覺ゆるのみ。これを以て、滿洲の平原より望んで、名山となすもの、その海拔を以てすれば、日本アルプスの前の草山にも若かず。若し蟬坪澤ほどの高度を有すれば、滿洲にては、屈指の高峯たるを

す。

◉然れども名山は、必ずしも海拔にあらず。山、高きが故に貴からずといふは滿洲の事なり。筑波山は二三千尺に過ぎざれども、關東の名山たり。此の意味に於て、南滿洲の平原を俯瞰する山姿、巍然として名山たるを失はざるもの少からず。

◉南滿洲の名山を千山と閭布跨山とす。此の二山、各特殊の姿致を有して、相讓らず。吾輩、山に登らざりしも、湯崗子溫泉の林間より千山を望むに、雲際の連峯、鋸齒の亂れたるが如く、妙義の山頂をして長く綿亙せしむるに似たり。

◉孤峯、突亢たるものは、滿洲には得難し。山といふよりも峯なり。山脈の一峯に名づくるのみ。特立の噴火山なし。太古の休火山なきにあらず。長白山頭に火口湖あり。富士山型の名山は一もなし。支那人の趣味より見れば、富士山型は、憧憬に値せず。支那人に誇示するには、夏の日本アルプスこそ好かろべし。

◉大連より長春に至る。滿鐵幹線、七百哩の間、一の隧道なし。一路、髮の如く、遠く水平線上に續く。天涯の山影を望めば、大海に遠島を認むるが如し。隧道に疲れたる日本の旅客は、滿洲の大平原に來て、始めて大自然に解放されたるの感を爲さずんばあらざるべし。

◉此の時、山に登つて大平原を望む。孔子にあらざるも、誰か天下を小とせざらん。天風、吾髮を吹き、無限の大世界、脚下より直ちに天に續くべし。立馬吳山第一峯の句、吳山は滿洲にあらずといへども、這般の風景に於ける英雄の優越感を表現す。

◉山あるところ、必ずしも名山にあらざるも、みな以て優越感を滿足せしむるべし。吾輩、大石橋の夕陽に、山上の娘々廟を望む。山、必ずしも高からざるも、頗る風致あり。

◉山上の祠廟、必ずしも信仰の爲のみにあらず。優越感を滿足せしめ、直ちに靈境たるを思はしむるなり。

其十

◉山岳は、固より滿洲風景の特色にあらず。然れども滿洲に山は少なきが故に名物たるを失はず。若し日本の風景を説いて、先づ山を論ぜば、卷を終はるまで山ばかりなるべし。滿洲の風景、少數の名山を舉げなば、此の廣大なる圖、その餘は、すべて大平原なり。

◉關東州と、吉長線と、安奉線とに山あり。安奉線には鳳凰山あり。滿洲の山、鳳凰山を以て第一とす。かくの如き名山、日本にも得難し。一山、特立して、山頂、八葉の芙蓉をなす。峯

張り、溪深く、天意、特に、地上に麗はしき滿紫の岩塊を集めて、此の一大名山を爲すかと疑ふ。

◉鳳凰山の傳說に據れば、鳳凰去つて山空しく殘るものなり。鳳凰、翼をひろげて山上の空に舞ひしとき、地上の神仙郷、則ち此に在りしならん。山中、寺あり、畑あり、群巒の紅楓、千萬樹、恰かも活火山の火口の如し。山は此の奇景を包んで、鐵路の行人に見せしめず。鳳凰の古事は知らず、山、或は舊火山なり。火、滅し、烟、消えて、紅葉なほ燃ゆ。

◉山の登路に、大石標を建てゝ、直上青雲と題す。山中に、忽必烈の碑あり。忽必烈、此に來らず、恐らくは唐太宗を誤るならん。此の山に登り、馬を鴨綠江に飲ましむ、太宗の理想なり。

◉唐太宗は千山に登りしと傳ふ。鳳凰山は千山よりも美くし。鳳凰山ほどの峻峯は、必ずしも得難からず。山色の妍麗なること、かくの如きは極めて得難し。但だ此の山、水なし。鴨綠江には稍遠し。若し江上に聳えて、綠波に映ぜしめば、尠くとも及ばざるべし。

◉山水、併せ得るは、滿洲に唯だ吉林あり。吉林は虎の國。虎は長白山龕の深林に居る。長白山脈の群峯、吉林を遠卷して、滿洲に、別に一乾坤を開き、松花江、巴字を描いて、洋々として、そのうちに流る。

◉吉林は、滿洲の京都と稱す。吉林を以て見れば、風景、京都よりも美なり。鴨川は直流し、松花江は環流す。天地、京都に十倍して、衆山は三十六峯の比にあらず。

◉若し、細かに吉林と京都とを較べば、優美は京都に如かざるべし。可憐の小風景に富むに至つては、遠く京都に及ばず。吉林には、二三の名勝と庭苑とあるに過ぎず。支那人、趣味境を開拓するの努力を爲さず、東西文化の相違なり。然れども風景の規模、大にして、吉林の郊外とするには、山々、遠し。

◉吉林の空氣は乾燥し、京都は濕潤す。吉林の月色、殊に娟々たるも、京都の苔寺の趣致なし。閑かに茗を煮るの趣味は京都にありて、吉林に少し。京都の古趣を象徵するものは友禪なり。吉林の街頭、多く虎皮を掛げて賣る。

◉蘇東坡の詩に、青山、高士の如く、官衙に入り來らずの句あり。無數青山、樓頭に集まるは、吉林の滿鐵の公所なり。滿洲の公衙、趣味第一は、則ち此の公所ならずんばあらず。筆硯、淸雅にして、以て、此の樓上に留まること一年ならしめば、滿洲に於ける詩的生活の、會心事なるものなるべし。

◉山水併せ得るは、吉林に次ぐを安奉線の橋頭とす。橋頭は本溪湖に近し。本溪湖の名。久しく日本に、知られ、橋頭の風景は、滿洲にも、近來、始めて著はる。若し鳳凰山を以て妙義山

に比せば、滿洲の耶馬溪は則ち橋頭なり。

●吾輩、十二年前、鶴翁を、その碧雲館に訪ひしとき、彼、島國の山水の規模小なるをいふて、滿洲の風景の雄大なるを誇說し、自から別莊を本溪湖に築いて、骨を大陸に埋めんことを期すといへり。ベランダに、籐椅子に凭れて、汁粉を啜つて、豪語したる彼の面影、猶ほ眼中に在り。

●斯翁、いよ〳〵老健、頃ろ米壽の賀宴を東京に開く。天下の名客を本溪湖に招待することを爲さずして、却つて逆に大陸の名伶、梅蘭芳を招致す。さすがに彼も、島國の風景の中に老いんとするか。

●梅蘭芳は男にして、女の姿態あり。一代の婦人よりも婉よし。鶴翁、初めて梅蘭芳を北京に見たるとき、誤つて女となし、これを厚聘するに意あり、男と聞いて驚く。蓋し、彼の趣味、風景よりも女にあり。此の趣味に於て、支那人と同じ、支那に風景詩人少く、紅粉詩人多し。

●聞く、俳優中村芝鶴、嘗て張作霖に謁す。恭しく千言を呈すといへども、何も答うるところなし。唯だ一言、以て酬ゆ。いはく、此の一座に女優あるか。

●鶴翁の本溪湖の別莊、今、何如。鶴翁と支那人とには、女と、女優とは山水よりも好風景なり。支那人、從來、橋頭を天下に彰はさず。鶴翁は本溪湖を說いて。橋頭に及ぼさず。

●橋頭は、斷岸、急流に於ては耶馬溪に及ばず。然れども巖石に富み、風景、樹、複雜にして奇秀を失はざるに於て、自から別趣あり。釣魚臺をその第一とす。

●普濟寺は、河中の巨巖に特し、奔湍を隔てゝ、三面の斷崖、半空を際す。かくの如き趣致、日本に得易からず。然れども風情の掬すべきは、釣魚臺よりも、若草山に在り。此の山、名なし、假りに名づけて、滿洲の若草山となすのみ。

●此の若草山は、山形、奈良のと相似て、環境は全く異なり。奇峯、群立する間に、唯だ、一峯、靑、春風を錦つむ。釣魚臺を去ること僅に三四町、水聲のうちに芳草肥ゆ。芳草の叢に、杜鵑花多し。花草、殊に多く、野生の芍藥、もつとも多し。花時、恰も蒔繪の色紙に、艷彩を以て、滿面に芍藥花を畫くが如し。

其十一

●花の滿洲は必ずしも貧づしからず。吾輩、滿洲に來り、文化趣味の未だ開拓されざる大平野に立ちて、露國のチエホフを憶ふ。

●文豪チエホフの晩年には、生活も、理想も、すべて一花の中に

あり。庭園に、軒に近くまで、花草及び果木を栽栽し、廻廊を張りつめたガラスを埋め盡くすばかりなりし。

◉彼は、爽快なる朝、露滴る花を剪り、草の蟲を拂ひ、或は果實を摘み來つて客室の棚に置く。彼は、その土地よりも、寧ろ自から開拓せる花園に憧憬す。その住める土地は、彼以前には荒寥たりしを、花を植えて、文化の樂園を出現せしめたるなり。

◉チエホフは言へり、今より三百年、乃至四百年の後、すべての土地は悉く花園となり、人生の歡樂時代來るべしと。吾儕も亦た生來、花を愛す。支那人の所謂花顚たるを失はず。滿洲の大平野、幾多の花顚爲くんばある可らず。知らず誰かチエホフたるものぞ。

◉吾儕、大連に來り、花顚を問ふ。不幸にして、其の人に逢はず。沿線、到るところの都市、街樹、頗る美なり。街樹には、アカシヤ多し。薰風時節、滿洲の人は白花香裡に染まる。盆栽も亦た少からず。然れども、未だ花顚を知らず。奉天の夏に始めて、花顚に逢ふ。滿洲の花は未だ研究されざるなり。

◉滿洲は寒國、一年の過半は、花卉、みな人間とゝもに屋內に棲む。然れども煖房裝置の發達せるが爲に、屋內には却つて花多し。花、と、花の如き人と、雜然として同棲す。

◉旅順、長春及び哈爾賓など、露國人の經營したるホテルは、渾べてチエホフの面影漂ふ。玄關より、廊下、ベランダ、梯子段、食堂、すべて花木の盆栽を密に雜處し、紅、綠、花、果實押し合ひ雜沓す。人は盆栽を穿つて行く。花香、葉影、皿の上に映ず。盆栽の間に、往々にして小禽を飼う。長春のヤマトホテルにもつとも盆栽多し。雪中に自動車を下り、卒然として闥を排して入れば、忽ち身は常春の花壇に在り。花顚の樂園ならずんばあらず。東京の名ある植木屋といへども、花卉あり、此の背景なし。

◉滿洲より露西亞に至る、大自然は、索漠の天地。露西亞人、乃ち花卉の趣味を家庭に凝らす。チエホフの理想は、這般の環境のうちより生れ來る。日本は溫帶の國、色彩の天地なり。到るところ山近くして花卉、求め易し。自然の趣味は、屋外にありて、屋內にはなし。滿洲の沿線にも、日本人の經營する旅館には、かくの如き花壇の家、極めて稀なり。

◉上野の公園に、尼港事件の遺物展覽會に、石川少佐の紀念として、その小さき花壇に得たる押花の數片を發見したりしことを思ひ出す。彼等は、パルチザンに面しつつ、なほ花卉を培うことを忘るゝ能はざりき。單調にして廣大無限なる大平原に包まるゝ滿洲の家を花壇となせよ。そこに偉大なるチエホフの樂

圀、現はれん。

◉野の花の美くしきに、合行せざるは未開人なり。劍を帶びつゝ花に添ぐは文化人なり。啻に、花卉とのみいはず、將來の滿洲は、自然趣味を以て、その家庭を文化の樂園となさざる可らず。

◉盆栽と金魚とは、日本人の世界的特長なるべし。支那人には盆栽の趣味あり、伎巧なし。伎巧より見れば、支那人に盆栽なしといふも可なり。日本の子供の鉢植と同じ、唯だ手頃の花卉を、手頃の鉢に栽えたるに過ぎず。

◉純然たる支那人の庭園には、磚を敷いて、用地を露はさず。磚を割して、圀を描き、そのうちに木を植う。園樹は街樹と同じき生活を營む。老木は、後庭にあるのみ。庭園及び盆栽の稍見るべきは、北京にあり、滿洲にはなし。

◉滿洲王の王宮といへども、花卉は少し。王永江、于沖漢は文治派の頭目、その庭園には蕭[illegible]少し。すべて彼等の應援宗の精彩をなすものは、自然の花卉にあらず。滿洲王は、剣製の瓦虎を並ぶれども、卓上に盆栽を置かず。

◉日本人は多くの、草木に見馴れ、これを鉢植にするのみにては、好奇心を滿足せしむるに足らず。これを以て、伎巧を精練し、その極不自然の姿を、鉢の木に賦與して以て、月を愉ばしむ。幾寸の小木、能く蒼鬱たる森林の趣味を漂はしむ。かくの如き盆栽、未だ支那人に知られず。

◉然れども、吾輩、滿洲の日本人、山海の珍味と共に盆栽の材料を本國より取寄せ、滿洲の花卉を題材とすること少きを以て遺憾とす。滿洲の植木屋、概ね、九州、中國或は東京大阪より花卉を輸入しつゝあり。

◉日本の花卉を滿洲の支那人に賣るは可し。日本人、須らく滿洲の山野を探り その花卉を研究せよ。異彩を盆栽界に生ずべき珍奇の題材、必ず少しとせず。汽車の窓より見れば、野草の拾ふべきものを發見するの暇なし。杖を郊外に引いて、林邱に花卉を獲さるべし。

◉支那人の鉢植は、その花卉よりも、鉢こそ愛玩に値せずんばあらず。植木鉢は、趣味の旅客を驚かすに足るものあり。唐以來の陶器、その色、その形、ともに踏襲し、千年の雅致なしといへども、かくの如き、藝術味に、かくの如き安價なる植木鉢、日本にては得られざるべし。

其十二

◉日本の花は野に滿野なしといふべし。滿洲の花には、傾城の名花、なほ野にありて、人に知られず。これを發見して、世界の花

となすは、日本人の手中に任せずんばあらず。

●吾輩、石楠木の盆鉢を、滿洲に見たることあり。これを問へば悉く本國の産なり。抑、高山植物の趣味は、日本の花界に革命をなせり。啻に石楠木ぐらゐに留まらず、由來滿洲、蒙古の寒地、高山植物少しとせざるべし。

●滿洲には櫻少し。栽うるといへども、花稀なり。櫻花に該當するものは海棠なり。海棠を以て美人に擬するも、また日本人が櫻花を以てすると似たり。不思議にも、杜甫に海棠の詩なし。杜甫以後、大詩人、なみ海棠の詩あり。就中、陸放翁は自から號して海棠顚といふ。その後、世々海棠顚あり。

●支那の海棠は、日本のと稍、趣を異にす。鞏直立して花、垂れず。歌麿の美人のやうなる海棠花は彼土にはなし。葉、甚だしく茂生し、幹またぶこつなり。杜樊川は、支那のハーデーなるべし。その詩、意中の女の嫁して多くの子女を生めるを詠ずる海棠成陰子滿枝の一句は、能く海棠の面目を描き出せり。長恨歌には、楊貴妃を描くに、海棠を以てせずして、却て梨花一枝春帶雨の名句あり。

●白樂天の理想とせる楊貴妃は、必ずしも支那の海棠花の、あくどき艶麗にあらずして、嫋々として柔媚なること、却つて歐洲の女の如くなりしなるべし。しなくしたる女の線は、海棠に現はれずして、支那にては梨花に屬す。梨花は、日本の海棠の姿態を帶ぶ。

●李太白は、楊貴妃に擬するに牡丹花を以てす。牡丹花は支那人の所謂、花中王なり。日本ならば觀花の宴は、春は、櫻のかげ、秋は菊の園に向つて開かるべし。支那人の花宴といふは、牡丹花を第一とす。

●李太白の見たる楊貴妃は、必ずしも肉附の豐滿なる、牡丹花に似たるをいふにあらず。艶彩、煥發して、三千後宮の第一の佳麗たるを意味するなるべし。概していへば、支那人の趣味は濃艶にあり。貴人は牡丹の花壇を作る。然れども牡丹の花叢は、妖艶なる刺繡の花を見るが如し。清新の趣致、人を惱ますもの少し。

●滿洲の郊野、牡丹、芍藥の野生少からず。日本にて野の花といへば、直ちに、げんげ草をいふ。此の意味にては、滿洲の野は、勿體なきほどの野花の寶庫ならずんばあらず。

●草莽に美女なし。野生の牡丹、芍藥、概ね貴人の花壇に入る。支那人、女を生むことを重んず。たとへ民國の世の中となるといへども、男子は自から門閥あり。奇ずは、軍閥に付くにあらざれば、則ち綠林に投ず。美女は茆次に留まらず。貴人の閨を賑ぐるを要せず。悉く收めて金屋に貯へられ、鉢植の花と

なる。

◉大陸の野に多きは桃・梨なり。桃梨こそ人家の女に譬ふべけれ。支那人女を娶るは、みなこれを購ふ。金なければ妻なし。日本の結納は、玉帛にして、支那のは代價なり。貧賤なれば、花もなく、女もなし。富貴なれば、盆栽多く、太々多し。太々は夫人なり。支那人は、花壇と、多くの太々とを以て、その富貴を誇示す。

◉支那にては、女と花と、憧憬を一致す。女のあるところ、悉く、これを窺ひ、これを評價す。女、麗はしければ、人、ますます集まる。女は、澄まして、自から價を待つ。桃李、もの言はずして、その下、自から蹊をなすは、此の事なるべし。

其十三

◉吾輩、奉天にありしとき、三六橋と詩酒、徵逐す。三多、六橋と號す。その先、蒙古の人。自から海棠顚を以て任ず。嘗て、熱河の副都統たり。劍を脫して詩人となる、王永江、評して、將軍一轉して詩仙となるといふもの斯人なり。六橋、兼ねて畫を善くし、好んで海棠花を畫くに、[illegible]彩、鮮麗を極め、生ける花よりも美くし。

◉六橋[illegible]

すべく、風流、自から命じて、花に沒頭すること、彼の如きも亦た極めて稀なり。飲まずといへども、好んで花と女とを說き、品紫、評紅、往々にして奇句、口を衝く。

◉女は、顏の長きを以て美とす、長きほど佳しといふは、彼の說なり。支那の女には、顏の長きが少く、まろきが多し。これを以て、彼は日本の女の美と認む。支那の貴人、すべて女を談ぜざるはなし。孔孟を說いて、次ぎに女を說く。社交の雰圍氣は女なり。女と花と併せ說くこと、六橋の如きは得易からず

◉吳俊陞は黑龍江の將軍、勇武を以て滿洲になる。吾輩、彼に鄭家屯に逢ひしとき、酒間、彼、一滴を口にせず。突如として女を談ず。いはく、女の顏は、まろきほど美くし。まろきこと、月の如くなるべしと。

◉吳には文事なし。征戰と女とを說いて、花に及ぼさず。

◉吾輩、一夕。諸友と、六橋及李東閣を招宴し、詩[illegible]を爲す。坐上の妓、長顏たるものなきを以て、六[illegible]りとせず。東閣は書と篆刻とを以て滿洲に雄視す[illegible]にして、熱情あり。或は、滿洲のバイロンともい[illegible]橋、花を青び、夜間は[illegible]

を揮毫す。その報酬、僅に三千金。北京の梅蘭芳は、一夕、一幕の登場則ち三百金を贏ち得る。東閣、此の事を話して、文人の不遇を憤ほる。六橋、直ちに筆を執つて揶揄していふ、鶯は鴉に如かず、李は梅に如かずと。一坐、絶倒し、東閣偽に憮然たり。鶯は、坐上の美人、短頸にして、鴉の美に若かざるをいふ。

◉梅に名高きは梅蘭芳、而して梅花は、朝鮮、満洲、北支那を通じて甚だ少し。吾輩、庭上の梅樹を見たるは、北京郊外の湯山温泉に於てのみ。梅花と竹とは、北に榮えずして南方には多し。

◉日本には、竹に虎といふ。虎は森林に棲めども、千里の藪はなし。竹の分水線を為すものは黄河なり。黄河以南、始めて竹あり。満洲に酒仙、必ずしも少からずといへども、竹林七賢は則ち南方の醉仙たり。古文眞寶の竹樓記には、日本の詩人は共鳴すれども、満洲人は、これを理解せず。故に、竹は如何なる種類に属するものも、満洲にては、盡く盆栽に供す。

◉松竹梅は日本の祥物。みな支那より渡來す。松、先づ來り、梅來り、最後に、竹來る。それも亦た日本と支那大陸との交通の變遷を徴すに足る。此の三の中、満洲には、梅、僅にあり、竹はなし。共通の祥物は松なり。然れども松は、満洲に於ては、必ずしも祥物とするにあらず。

其十四

◉吾輩、蒙古草の種を東京に蒔き、花を開きしは、十八年前の夢となれり。博士鳥居龍藏、夫妻、カラチン王府より歸り、吾輩に蒙古草の種子を贈る。これを植木鉢に蒔けば、桃紅色の花を着け、頗る可憐なり。これを問へば、原名なし、野草なりといふ。これを諸友に頒ち、特、花咲く。二三年の後、また種子を結ばず、諸友の蒙古草も、亦た悉く絶ゆ。

◉此の春、吾輩、内蒙古に入る、雪風凛冽として青草を見ず。胡沙、吹く風に笑む可憐の花、いづくにありや。沙漠には、喇嘛宮にも花草なし、すべて樹木、稀なり。ところどころに喬木を望むは、唯だ楡のみなり。

◉春も秋も、野に花草多し。安奉線には、龍膽（リンドウ）多し。龍膽は野草の王なり。鈴蘭、もつとも多し。チキタリスと鈴蘭とは、强心劑として知らる。近年、南満醫學堂の藥學教授久保、山下の二人、鈴蘭を研究して、强心の注射液を造る。强心劑の一の福音たるを失はず、而して草根木皮の研究の新たらしきものといふべし。

◉漢藥としての草根木皮の研究は、支那、満洲に於ける科學的

趣味の、顕著なる一大項目たらずんばあらず。抑、支那の學問、渾べて草根木皮の如し。悉く原料の煎藥にして、一箇の精製したるヱキスを存せず。稀に、効力の充實したるものあり。奏効の徑路の不明なるもの少からず。毒にも、藥にもならざるものも多し。

◉草根木皮の効力は、一言にして約すれば曖昧なり。而して漢藥の大部分は、滋强、强壯の目的に用ひらるゝもの多し。虎骨、鹿茸、麝香、苷、これなり。藥舖の看板、すべて强壯劑ならざるなし。その世界的に有名なるものを人蔘とす。

◉人蔘と、滿洲の開闢とは密接なる關係を有す。先年、東京高師の教授博士矢部、滿鐵の囑托に由り、滿洲植物目錄を作る。滿洲植物學の嚆矢なり。然れどもその研究は、鐵道の沿線に限らるゝを以て、人蔘の探究に至らず。

◉鹿茸の珍奇なるもの、破格の高價に上る。現に奉天城中の一藥舖に賣るもの、題して價二千金といふ。鹿は華鹿、その皮に華紋あり、清朝のとき、これを官飼し、園丁は特に租税を絶す今、華鹿の滿洲に存するもの、甚だ稀なり。吉林の鹿苑は則ち華鹿。開原の附近にも、著名なる一苑あり。

◉一概に草根木皮といへど、漢藥は草木のみならず、金石も亦た用ふ。漢方藥、[illegible]金[illegible]を水に浸し、靈藥と[illegible]す。支那人の金銀[illegible]

拜は此に在つて極まる。豈、牛溲馬勃も藥となるのみならん。人蔘を金とし、少便を銀とす。人蔘の精、少便の凝華また藥に用ふ。

◉奉天の東陵、北陵は、清朝、太祖、太宗の廟陵をめぐつて春秋、野草の花園となる。秋、殊に多し。富士の裾野、淺間の裾野にも比すべし。草間に鳴蟲を聞く。此の大平原に鳴く蟲を憐れむ。

◉滿洲の野草、多種にして多様、試みに、これを移えて花壇を作らば、日本に見られざる新趣味の一なるべし。北陵の秋草のうち、桔梗のみを以てするも、五六種ありといふ。黄色のアヤメあり、日本にては、殊に珍とするもの、滿洲にては必ずしも珍ならず。

◉滿洲の夏、野は悉く小百合なり。街頭、卓上、悉く花瓶に小百合を挿む。一束十錢といふ支那人の牽牛花は、唯だ凡種のみ。時には、日本人の店頭、大輪、狂ひの牽牛花、朝露に艶やくを見るとき、日、爲に覺むる心地す。儒、佛と、牽牛花と菊花とは、日本に歸化して千年、かくの如く、高尙なるものとなれり。

◉野草は多種といへども、樹木は渾べて種類少く、單調にして多數なり。楊柳、桃李、アカシヤ、ライラック、ポプラ、皆然り。奉天城中の[illegible]に[illegible]ける、[illegible]の[illegible]たるもの

とす。花開いて、池塘に沿うて到るところ、各旗亭を作り、千人を容る、舞臺に設けて、歌舞せしめ酒池肉林に音樂を奏す。畫舫に美人を載せて、花を穿つて行く。池盡くるところ、蘆葦茫々、そのうちを群羊、徘徊するあり。池畔、嫁菜も芹も摘むべし。

◉花のみならず、單調にして大袈裟なるは、滿洲の大陸氣分ならずんばあらず。日本の趣味すべて變化、多樣なるを貴ぶ。その弊や、細緻に流る、細緻は象牙彫に至つて極まる。大陸の氣分は、寛大にして樸雅なり。その妙は自然的なるにあり。自然的なるが故に、期せずして巧を致すものあり。日本の趣味は諦視して、細觀すべく、大陸のは遠望して大觀するに宜し。

◉支那の文學も、藝術も、すべて大陸氣分のうちより生まれ來る。人工の建築、調度、すべて日本に比するに細緻、纖麗ならず、大觀すれば、頗る魅力あり。往々にして人を醉はしむるに足る。滿洲は文化の開發、支那に及ばず、近世、文藝の傑出するものなし。乾隆の高其珮、遼陽の人、鐵嶺と號す。その畫、日本にも舶載して知らる。その傑作は、北京の文華殿にあり。

◉文化より見れば、塞外は田舍なり。滿洲もまた未だ北京の田舍たるを免かれず。珍書なく、文人墨客稀なり。大官名士に讀書氣分少なし。奉天府の省長王永江は、滿洲文治派の巨頭にして、また奉天官場に於ける隨一の詩人なり。鐵嶺詩鈔二卷あり。金州の人、一卷は金州に二卷は奉天の作。その志、微微たるにあるか。詩人らしき詩にはあらずといへども、世事を慨き、英雄を論ずるには奇句あり。花月には情なし。吾輩、その亂世英雄如二猛虎一の一句を推して、集中の壓卷とす。

其十五

◉滿洲の趣味、豈山水、花月のみにあらんや。日常の生活すべて趣味の題目たらざるはなし。滿洲の空氣、極めて呑氣らしくして、その半面、趣味の餘裕を缺くものあるは、文化の開發未だ足らざるなり。支那趣味としては、支那の田舍たるを失はず、文化の地盤を爲すべき舊趣味の爛熟せるものなくして、國際的に新趣味、雜然として闖入す。古典約と、ハイカラとの雜揉せる植民地の氣分、そのうちにあり

◉支那の古典的の趣味は文房具に象徴せらる。明窓淨几といひ筆硯精良といふ、これ等のもの却つて少數の日本人にあり。支那人には稀なり。三六橋は自ら滿洲の硯王を以て任ず。愛硯家にして、硯を賣るは奉天の折田探二、滿洲の唯一人奉天にゐて、北京と、旅順、大連に往來す。

◉何佛上人、折田の硯癖に題するの句に、「雨の露、硯に落ちて

賦の數」といふ。日本の俳句には、古來硯の名句なし、日本にて、硯の研究は近來に始まる。杜甫の集中に硯詩、僅かに一編あり。吾輩、大陸に來り、始めて此詩を解するを得たり。硯そのもの、一箇の藝術品。高粱の海の中に、一の硯あるは多とすべし。蓋し、硯を愛して、時を消す。書かず、畫かず、但だ硯を撫す、幾分の悠長なるものにはあらずや。

●齊に、花とのみいはず、日本の歳時記は、滿洲には適用されず　滿洲の俳句は、これを本國に送るに、選者、その題材を解せず　滿洲の俳壇は、須らく自から滿洲歳時記を大成して、獨立せずんばある可からず。

●今滿洲の俳壇は、朝鮮と呼應し、三四の雜誌あり。高粱の如きは、その體裁、これを本國の俳誌に對照するも、なほ快感を覺ゆ。然れども、俳諧の興隆は、芭蕉の出現に由る。滿洲の俳壇の獨立は、刮目して一大家の出現に待つ

●試みに、滿洲の人事、風物を點檢するも、俳味の好題目と爲すべきもの少からず。滿洲にては詩を作る、可なり。俳句を作るは、大に可なり。詩を作らずとも、多く誦むべし、書は支那人に敵せず、宜しく日本の國語を以て、滿洲文學を創立せんことを要す。

●滿蒙の同行者はあり。年々展覽會を開く。支那人の學校には、滿蒙を教うるものなし。水墨畫に止まる。日本の代表的畫壇が、展覽會を滿洲に開くは太平洋畫會の今年、大連と奉天とに於ける展覽會を以て嚆矢とす。

其十六

●寒國には園藝は發達せず、日本にして戶外に放花する花卉、滿洲にては、概ね鉢植にあり。シュロ、蘇鐵、芭蕉の類はいふに及ばず、夾竹桃はみな盆栽にす。日本の西南の花、夾竹桃ほど、花の強くして花季の長きはなし、花を著くる間、約半年に渉る、滿洲にて、鉢にある夾竹桃を見れば、檻中の虎を思ふ。

●花より見れば、滿洲は草花の天下なり。初夏より秋初に至るの間、萬花、一時に開く、その餘、一切の花卉、珍木、悉く溫室にあり。紳士の家庭、第一にペーチカ、第二に溫室、若し溫室なければ、趣味の家庭をなすに足らず。一切の園藝、みな收めて溫室にあり。

●吾輩、滿鐵の沿線を遊歷するに、三四の溫室の特記すべきもののあるを記憶す。湯崗子溫泉の浴室、湯槽に副ふに溫室を以てし西洋の花草を植う。裝置の瀟洒なる龍紋大理石を以て湯槽を作り、隨時に眩らき陽光を帶びて、陶然として湯槽に倚るとき、飄然として身は裝置の中にあり。淡き湯の烟を透して一千花を眺むれば、優を偏して一花園、否溫室にとまる。

◉奉天の金城館、浴室に傍ふに温室を以てし、併せて低く金魚の硝子槽を列ぬ。錦鱗、花下に自得する。みな温室の世界の中にあり　所謂御殿の間に沿うて、長き温室の中に岩石、泉水を布置して、庭園を作り、長廊の朱欄に倚つて俯瞰す、硝子の天井を透して、月色、妍々として、温室の築庭を照す、窓を開かずして、雪、月、花、みな見るべし。

◉同じく粹山の大座敷、床の間の横に温室を開き、柱に凭れて、前に解語の花、横に無聲の花を見るを得べく、瀟洒として韻致あり。

◉開原の二葉の、二階の大座敷には、廣きベランダに岩石、竹木を布置して築山を作るは、また滿洲生活の一奇觀。そもそも世上、屋上庭園あり。二階の庭敷に、日本流の築山を作るは、珍とすべし。半年有餘の寒風、人をして、屋内の園藝に、かくの如き巧智を弄せしむるに至る。

◉大平原の國は、山水に饑えたるが故に、岩石だらけの造庭術が發達するは自然の要求なり。滿洲の築庭といへども、すべて大孤石を布置して、支那の壺中の趣致を現出すること、北京と同じ。東京より庭師を滿洲に送るに至つては、逆輸入なり。然れども樓中に築山を造るは、支那人、開闢以來未だ夢想せず。二階の築山は、則ち築山を盆栽にするものならずんばあらず。

◉支那に空中樓閣、或は壺中乾坤の語あり。未だ座敷の築山を聞かず。元來、滿洲には、樓閣、極めて稀なり。滿鐵以前、支那大官の家といへども、概ね平家なりし。西洋風の煉瓦町を滿洲に出現せしめたるは日本人なり

◉滿洲王の宮殿は、巍峩たる樓閣なり。張作霖、滿洲の變遷を語りて、滿洲は風強きが故に自分の壯年の頃まで、殆んど樓閣を見ざりしといへり。大平原に高く聳ゆるものは喇嘛塔のみなりし。

◉喇嘛塔は、煉瓦なるが故に、日本の五重の塔とは、趣味を異にす。喇嘛塔は、山なき滿洲の山ともいふべし。寧ろ高粱の海を照らす燈臺といふに近し。滿洲の野を行くに四顧茫々、一の目標を見ず。此の時、唯だ喇嘛塔の峙つあり。奉天の會戰に大將乃木の第三軍は、西塔を目標としたりといふ。

◉滿洲に於ける古今文化の相違は、喇嘛塔の聲價の變遷に現はる。今や、樓閣參差たる市街地は、目標としての喇嘛塔を必要とせず。依然として滿洲の風致を添うるに止まる。

其十七

◉蒙古に於ける喇嘛教の大本山は、沙漠の一大驚異なり。龍宮城は、果して海底に發見さるべきやを知らず。沙漠の海に浮び

出でたる喇嘛寺を遥に發見したる刹那、何人も直ちに、龍宮城を想像せずんばあらざるべし。平沙萬里、蒼茫として、何等の變化も、吾目に刺激を與ふるに足るものなく、廣大無邊なる單調の大波濤が、殆んど人を呑まんとするとき、夢か、現か、丹碧朱欄の五層樓を中心とする樓閣の一帶、縹緲として地平線上に浮び出づ。

◉趣味の蜃氣樓は、唯だ、これを沙漠の喇嘛寺のみに見るを得べし。伊勢灣といひ、越中の魚津といひ、海上の蜃氣樓は古來あり。然れども現實の蜃氣樓は鮮明を缺く。遠く烟霞を隔てゝ樓閣を望むに似たるものあり。沙漠の喇嘛寺は則ち然らず。天澄み、風、明らかなり。五彩、欄角、一々に鮮明にして、謂ける蜃氣樓よりも美くし。

◉大陸日々の記者、菊池秋城、また嘗て、喇嘛寺に至る。その說、頗る奇なり。いはく越中魚津の蜃氣樓といふは、則ち此の喇嘛寺の光景、遠く日本海上の空中に幻映して、裏日本の海岸に出現するものにして、その方位、距離等の關係も亦た不自然ならざるを想はしむ、魚津の附近には、蜃氣樓の本體とすべきものを發見せずと。此說、必ずしも架空の想像に非るべし。然れども恐らくは世人を驚かすに足らん。

◉大沙漠と丹碧朱欄、およそ、かくばかりの夢幻的コントラストは、古來、未だ嘗て地上に發見せられざるべし。その環境と趣味の上に毫も連絡的關係を有せざる一大製作物たることが、併せて一大驚異たるの價値を確かむるものなり。

◉今、東京の駒籠の書樓に、秋燈の下、徐ろに想を練りつゝあれば、紅い夕陽の淡く照らしつゝある沙漠の海、眼前に浮ぶ。疎ばらに殘る枯草の間より不意に飛ぶ立つ鵲、沙丘に馬を飛ばす支那兵の後姿、停車場に、汽車の窓前に賣り來る、湯氣の立ちのぼる油餅、蒼然たる暮色のうちに朧ろに望みし馬夜塔。實に蒙古の夢、現に、吾が卓上に甦へるかな。

◉吾輩、滿洲の旅行に、雪中を撰びしとき、知人を驚かせり。然れども熱國は炎暑に見るべく、寒國は氷雪に見るべし。若し、夏越後に往けば、尋常の國なるべし、滿洲の地方色を見るは雪中ならざる可らず。況んや滿洲の經濟季節は雪中にあり。交通の便は車を氷雪の上に奔らすにあり。特産の大豆は、かくして運ばる。雪天の下に滿洲の生氣、躍如たるなり。

◉鄭家屯より五時間にして、白音太來に來る。寒風蕭索として肌に迫まる。經過するところ、鄭家屯より一二時間ばかりの間、な丘陵に連山を認む、うちに索倫富士と稱する一峯あり。白音太來に近くして、漸べて山を見ず。支那人、朝鮮人、及び蒙古

人の雜遝して、徘徊するを見る[illegible]

◉市街を一見して、日活太來ホテルに投ず。吾輩は、馬車に乘り、出迎の滿鐵出張所員志賀君、羊毛帽を戴き、蒙古馬に乘る。玉ホテルは日本人の經營するところ、四の客室あり、その一には日本人の獸醫、寄宿す。ホテルとはいへども、索然たる温突宿なり。吾輩、滿洲に來り、始めて温突ホテルに宿す。夜、來訪の諸人、ホテルの主婦など、奥の一室に集まり、煖爐を燃やして徐ろに話す。恐く是今日、新知の人、ともに故郷を懷つかしみつゝ、しめやかに故郷の風物を話して五更に到る。

◉吾輩、一昨日の桃節句の所感を問ふ。主婦、悽然として答ふ。在留の同胞少く、草餅を搗くべき杵と臼となしといふ。吾輩、乃ち開原より齎し來れる雛餅を出して主婦と、その少女とに與ふ。二女、内蒙古に來り、六七年來、雛壇を見ず、雛餅を眺めて祖國の節句を夢みるものゝ如し。堅くなりし雛餅を、下婢に燒き、一口づゝに、徐ろに、郷味を味ふ。吾輩も亦た、此の光景に對して、暗涙なき能はず。

◉日本人の來往、甚だ少く、ホテルの經營、難事に屬す。晩春、更に家租の低きを求めて移轉すべしと聞きしが、吾輩、未だ滿洲を去らざるに、既に、此のホテルの廢業の報に接す。他年、吾輩、再び此の地に到らば、當年、夢の痕、如何の光景ぞや。

恐らくは[illegible]

◉薄暮、町を散策して、泥棒市を過ぎ、雜貨を見る、多くの酒場あり、小さき劇場あり、紅燈、白粉の娼婦、徘徊するあり。路傍の露店に、マドロス、パイプの一個を求め得て記念とす。

◉蒙古は古の夷狄なり。此の邊境に、マドロス、パイプは頗る珍奇の感に打たれずんばあらず。吾輩の蒐集せる内外のパイプのうち、新に一の世界的烟管を添へ得たるものなり。此の町に、舶載のタバコを見ず、マドロス、パイプは殊に奇なり、支那の烟草を詰めて吸ふならん。彎曲せる眞鍮のマドロス、パイプにして甚だ輕し。恐らくは山[illegible]なるべし。

◉蒙古旅といへば、蒲鉾馬車を聯想す。支那人は、これに馴れて、巧みに乘る。吾輩は、その窮屈なるを好まず。支那人の乘るは、妻兒と、蒲團、荷物など蒲鉾の奥に押込み、主人、ひとり斜めに蒲鉾の前に踞して、脚をぶらりと垂る。此よりモリミヤウの喇嘛宮に至る廿哩、往復一日程に餘るべし。

◉然れども此の旅行蒲鉾馬車と籍らむる外に途なし、併せて、馬賊を警戒すべく、護衛の爲に五人の兵士を從ふことを約す。此の町に、活佛の別莊あり、別莊は即ち齋宅なり。昔の日本の寺の大黒天を安置するところなり。初夜、別莊より、喇嘛宮が、郊迎の爲に自動車を回送せるを報じ來る。

◉活佛、最近に、一台の自動車を得たり。別莊に往來するが爲なり。固より此の沙漠に於ける唯一の自動車たり。此夕、既に、マドロス、パイプを得て、また明朝、自動車に乘る、吾輩の蒙古旅は、突如としてハイカラ旅行となれり。また以て、文明の新空氣、世界を馳けまわる大探偵の如く、蠻夷の隅々までも到らざるなきを見る。

其十八

◉天氣快晴、自動車に稱し、白音太來を發して、モリミヤウに向ふ。氷結せる坦途、タイヤー滑かに疾驅す。日本人、自動車に乘つて、此の沙漠を過ぐるもの、吾輩の一行を以て嚆矢とす。此の事を特記して、遙に、活佛の健康を祈る。

◉喇嘛教の研究は、興味多し、しかも百聞、一見に若かず。北京にも奉天にも、即ち淸朝の新舊二京、ともに喇嘛寺の巨刹あり、建築は蒙古のと相似たれども、環境と、雰圍氣と、全然、別世界なり。喇嘛寺は、蒙古に見たるを感激的とす。內外蒙古を通じて、喇嘛教の大本山、およそ五あり、活佛は即ち法王なり。モリミヤウは、その格式、第三位くらゐなるべし。

◉淸朝は、蒙古人を懷柔するに喇嘛教を以てす。僧侶たるは尊とく、活佛は尊嚴無比なり。如何なる帝王といへども、活佛の尊嚴なるに若かず。蒙古人を僧たらしむるは、慓悍の氣象を軟化せしめ、併せて人口の增殖を防ぐ。淸朝が長城の內外の民族に對する二大政策、漢人に對するには、考證學を以てし、蒙古人に對するは喇嘛教を以てし、ともに、此の二大民族を去勢するにあり。

◉活佛は選擧にもあらず、指名にもあらず。活佛が、次の活佛を暗示す。支那の古帝王、紫雲生するところに起りしといふが如し。吾が自動車未だモリミヤウに到らざる四五哩の邊、十戶ばかりの小部落あり。楡の老樹二三本あり。前代活佛の暗示を辿つて此の村に至り、一農家の小兒、七才ばかりなるが、暗示に符號するものあるを得たり。則ち今の活佛なり。

◉此の如く活佛の出現は垂示に本づく。未だ敎卷一枚をも讀まざるもの、突如として絕對無限の法王となる。大本山の長老、いかに學德あるも、活佛の候補にはならず。暗示は天意なり。故に活佛の出現は神秘なり。未開の民族にありては、統率者を神秘にするは、民衆の崇拜を喚起し、統率を確實ならしむる上策たらずんばあらざるべし。

◉吾が車を、喇嘛宮の大玄關に乘入るれば、喇嘛僧、出で迎へて立ちさわぐ。中に、前額に一大珠玉を嵌めたる支那帽を戴き、黃色の支那服を着け、容貌、不凡なる巨漢、群僧に擢んで一際

り、進んで握手し、其つ支那式の趣味に入る……して、軒

じて、更に、幾分の西洋趣味を加へたる第一應接室に導く。

◎活佛、亞普太米の町に現はるゝとき、蒙古人、爭ひ集まり、河岸に鮪(マグロ)を列べたらんように、大通りの路上に、俯して平伏す。活佛、則ち船橋を渡るように、衆背を踏んで進み給ふ。活佛の踏みし沙も崇拜に値す、何んぞ況んや、御足に觸るゝをや。背骨を踏まれたる蒙古人、以て、一代の光榮とす。蒙古人の幸福の源たる活佛は、今や、吾輩の眼前、咫尺の間に現はれ來るなり。吾輩の心は、好奇の刺激に、微に鼓動を覺えざる能はず。

◉大陸の佛像は、日本と、稍、趣を異にすること、佛教それ自身の變化と照應す。活佛の風采、態度は、御門跡と比較せば如何。吾輩の一行を導く巨漢を、大本山の執事なるべしと思へり。豈、計らん、活佛は、既に面前にあり。此の玉幢の巨漢こそ、尊とき活佛にておはす。千山の羅漢洞のうちには、此の活佛よりも、遙に優麗なる羅漢あり。活佛は、御門跡といふよりも、ハイカラなる蒙古の富豪とも見ゆ。

◉此の客室の粗樸なるは、金碧燦爛たる大本山の堂裏とは思はれず。構造は支那式なり。土間に沿ひて、高段炕座の間あり、卓を圍んで坐蒲團を置くこと例の如し。煖爐も、すべての調度も、みな田舍めきたるに、高段に置時計の二ツ三ツと、支那の大官

と共に握手せし活佛の寫眞……日本……

寫眞を飾りたるは床し。

◉活佛は早起し、未だ朝飯前なり、速かに、山羊の乳酪、その他の簡單なる蒙古式の朝餐を供す。東京に、お茶といふところなるべし。炒米と、バタ、牛乳豆腐、砂糖、チーズに似たる奶皮子なり。茶は磚茶、則ち奶子茶なり。活佛、吾輩と相對し茶を勸め、親しく周旋す。背中を踏まれたがる蒙古人の眼には、吾等の一行、果して如何なる貴人と見えしぞや。

◉活佛のお茶、畢はつて、長老、案内して、大本山の佛殿を遍ねく一覽し、五層樓に登る。一層毎に、佛像を安置す。光景、日本の佛寺と異なり、到る處、感興を動かす。本堂の大廣間は、千僧を坐せしむべし、すべて腰掛なり。大佛殿の壯觀、想像すべし。

其十九

◉大本山の寺號を集寧寺といふ。何人も唯だモリミヤウといふて、寺號をいふものなし。ミヤウは廟なり。修道院を降術寺といふ。數百僧、まさに讀經しつゝあるを見る。堂前の廣き舗石の道に、雛僧二三十人、日光麗らかなるところを求めて、群坐して、聲を張り上げて讀誦す。眼は、闖入し來れる吾等異國人に注がれつゝ。

◉修道院の堂中、一老僧、瘠せて高く、威あつて猛からず、白から慈嚴の妙相を具す。悉く衆僧の禮拜を受く。問はずして一山の善知識たるを知るべし。滿鐵の宣傳ビラに、正面に屹立せる喇嘛僧を畫くもの、斯人をモデルとするなり。吾輩は、あの畫よりも、此の老僧を清奇なりとす。喇嘛僧の風采は、則ちビラに明らかなり。吾輩、堂に入る。彼も亦た相見て、ともに一揖し、微笑相酬ゆ。

◉新海竹太郎の歡喜天、此の秋の帝展に物議を起せると同じく、世界の好奇心を煽そる絕對神聖なる天地佛は、蒙古に於ても、その全部、或は腰部以下に白布を覆ふを見れば、既に若干の問題たるを失はず。

◉天地佛は陰陽佛なり、世に秘佛といふ。蒙古にては必ずしも秘佛にあらず。モリミヤウの寺中、屋外に立てる秘佛の圖の如き、たとへ白布を覆ふといへども、掲げて見るを妨げず。奉天の綸嬰寺のうちには、奇怪なる男女體の抱擁せる秘佛の像あり。

◉喇嘛の教義、及び秘佛の研究は、此に評論するの暇なし。實を言へば、天地佛は、好奇心の對象たるほどの藝術感を與ふるものにあらず。醜怪なる獸體が嬋娟たる女性を抱擁する等身像は、殊に嫌惡を催さしむ。滿鐵以外滿蒙に、事業をなすものは大倉組あれば、[illegible]

らずんばあらさるべし。

◉民家の祭壇に安置する高四五寸ばかりの秘佛は、異國人の憧憬するところなれども、近來、漸く得易からず。肌守（ニマモリ）の高一寸許の小秘佛に至つては頗る得難し。すべて秘佛は、種々の獸面をあらはし、特に人面を有するものは尤も稀なり。これを以て、肌守の小秘佛にして人面なるものは、眞に、蒙古の秘佛とするに足る。

◉然れども、秘佛は時に、藝術的に取扱はるることあり。乾隆年中、作るところ、高二三寸の琺瑯（ニスデツ）の小秘佛、土偶にして、裏を朱にして、表を金にし、男女佛の姿態、微妙にして、淸貴なり。秘佛にして、かくの如き高尙なるものを未だ見ず。裏に蒙古字と、漢字と並べ刻す。

◉吾輩、遍ねく境内を巡歷し、僧舍を見る。その一二を訪ひ、喇嘛僧の生活を見る。僧舍は、構造、極めて簡單、玄關を入つて左右に室あり、各室は獨房なり。佛壇に並んで、雜然として器具、書籍を陳列す、槪ね大型の置時計あり。彼等、蒙古人が到處、置時計を愛玩するは、江戶人が和蘭のギヤマンを珍賞したりし心持なるべし。由來未開人の科學趣味を挑發するものは時計なり。

◉大倉組の[illegible]

塗ること、海戰の日本の軍艦の色と同じ。集學寺の五層樓より府瞰すれば、泥箱を整列したるが如し。

◉此の蕭然たる僧坊のうち、秘話の、秘佛よりも更に秘なるものなくんばあらず。喇嘛僧は肉食し妻帶せず、分桃、斷袖の書趣は、つねに泥屋根に絡まる。事實に於て、喇嘛僧の女犯は破戒にあらず。今や、蒙古人を去勢しつゝある、目に見えぬ大敵は梅毒にして、僧坊にも潜入しつゝあり。胡沙吹く龍宮城の仙境も亦た性の修羅の衢なるべし。

◉大砂漠にさまよふ煩惱の喇嘛僧を描くは、文學の新らしき題材たるを失はず。胡沙吹く風にも悟、開けず。零下四十度の氷地獄にも、迷は覺めず。東大陸の「物語の國」は、支那、滿洲よりも蒙古にあり。

◉活佛は懇ろに吾等の一行を勸むるに、二十日の後、大本山に開かるべき大法會まで留まれといふ。好意、多謝すべし。此の會、喇嘛僧の大衆、集まるもの三千、大砂漠の信仰界の偉觀とす。そのとき大鍋に牛を丸煮にして佛に供す。此の時、吾等、プログラム、すでに發表され、已むなく辭し去るといへども、今に於て、三千讀經の聲に、龍宮城の浮き上がる光景を目撃せざりしを遺憾とす。

◉活佛の書齋こそ、目覺ましき記念なりし。大陸旅行に、かくの如き感激的の發見を見たることなし。活佛、自から卓上を周旋し、火鍋を供す。火鍋は則ち寄せ鍋なり。牛、豚、雉、及び米。雉は砂漠に多し、米は白晋太來より來る。活佛、且つ煮て、且つ勸めつゝ、雉獵の趣味を語る。酒は高粱の燒酎、デザートは油餅。

◉活佛は獵を話すとき、もつとも油、乘り來り、顏、紅を潮す。獵は蒙古人の性命。日本人、兎を獵るに銃を用うるを聞いて笑ふ。兎は銃を用ひず、手攫みにするなどと、活佛、氣焔を吐く。仔狗（シーフー）、番犬なり、獵に訓練す。羊群を守つて狼を防ぐは、狼よりも强ければなり。

◉蒙古人、旅客に馬を贈與するを辭せざるも、決して狗を與へず。それほど狗は蒙古人の爲には寶物なり。主人には猫の如く、主人以外には虎よりも恐るべし。日夜、主家の城壁を固守して、外敵をして一歩も入れしめず。自働車より望むとき、村落の屋根、牆壁の上など、仔狗の、悠々、巡視しつゝ、四方を睥睨するを見る。蒙古の砂漠に多きは、雀、鳥、鵲、鷹、鶉、雉、鷲、及び、兎と狼となり。蒙古富士、則ちボーリー山の牧狩には多く狼を獲るといふ。

◉活佛自から語るところによれば、父、早く歿し、母なほ在り。彼は、母、十七才のときの子にして、長男なり、彼に、法王

の白羽の矢が立ちしは七才、今年三十九、則ち法臘すでに三十二年なり。吾輩一行に、一枚宛、親筆の御符を贈る。大字を請へば、後に書して贈らんといふ。その實は、彼、筆札に妙ならず、彼の秘書、悉く代書す。字はすべて蒙古字、支那語には自由なり。

◉此の大本山は、約二百年前、乾隆の初年、清朝の建立するところ、その後、唯だ一回、修理せしことあり。當初の建築、木材は長春の奥の伯都納（ペトナ）より、石は奉天方面の阜新縣より取る、ともに此を去る四五百清里あり。清朝が、蒙古の統治上、喇嘛教に深く望を屬するにあらざればかくの如き壯大なる土木を沙漠に起すを得じ。工事の難と、その巨費と想像するに餘あり。

◉此の日の饗宴こそ、吾輩の眼中には、奇異なるものなれ。かくの如き尊とき活佛の客室に、煖爐は、最下等の達磨ストウブにして、出入する給仕人の汚きこと、衣は垢じみて、ところどころ裂け破れて、和布に似たるあり。ストウブには石炭に換へて、牛糞を燒く。。牛肉を煮るに牛糞を用う。輪廻は舌の上に味はれつゝあり。

◉蒙古には燃料なし、雪中の寶物は牛糞なり。蒙古の雜草を食ふ馬糞は臭氣少しといふものあれど、必ずしも信ず可らず。寒冷にして凍結すれば、萬物、すべて臭からず。馬糞は、低價にして、牛糞は球玉なり。馬糞は燃力弱し。牛糞は、その代價の塊炭なり。野外には、馬糞塔、牛糞塚あり。

◉日本には、當年、束髮に牛糞を連想せしことありし。蒙古の牛糞は、とても束髮に似ず。色淡く、カン〱堅く、コロ〱として地上に散じ、叩けば石の響をなす。一見、碌々たる褐炭なり。これをバケツに入れて、煖爐の前に運び來り、火箸を以て挿んで投げ込む。活々（カツ〱）として紅く燃えつゝあるものは則ち糞炭なり。王公貴人の食卓に、牛糞を燒いて、御馳走に値するは、豈、世界的珍現象にあらずや。

◉蒙古人、郊野の牛糞の一個だも見逃がすことなし、白晉太來の兒童、町の糞風に、牛糞を拾ひ行くを見たり。唐の小說に、金牛、銀牛あり。行るきつゝ糞するに、みな黃金と白銀となりし。蒙古人より見れば牛は、悉く金牛、銀牛ならざるはあらず。芭蕉の句には、餅に糞する鶯あり。一茶には、雁の糞を詠ずるあり。蒙古の牛糞を、俳人に見せたし。

其二十

◉活佛は、食後、偶、手鼻をかみ玉ふ。客の前にも無遠慮に、床上に鼻汁を飛ばし玉ふ。手鼻は、支那流にては無作法にあらず。然れども活佛も、花のやうな女も、手鼻をかむを見ては、

興、覺めざる能はず。夢の如き龍宮城の主人公は、脂ぎつた顏して手鼻をかみ玉ふなり。

◉前代活佛の祭壇、則ち墳墓は、日本の寶篋塔を思ひ起すに足るものあり。支那人の墓が、唯だ一塊の土饅頭たるに過ぎざるに比すれば、素晴らしきものといふべし。北陵の太宗の墓といへども大なる土饅頭の塚に過ぎず。畑のなかに、累々として碁布する土饅頭は、日本人は、卒然として見て、墓と思ふものなかるべし。

◉日本にては、熊公、八公といへども、必ず石塔を建て、姓名を勒す。支那にては石塔は、非常の誇榮なり。山少く、石、貴とき故にてもあらん。支那の北邙といふは、京都の鳥部野の如く、石塔の林立したるにはあらず。必ずしも巨墓なしといへども、死者、必らず石碑あるは日本のみなるべし。支那人、日本の家に驚かざるも、墓には驚く。此の意味に於て、蒙古に於ける活佛の威勢を象徴するものは、その石塔なり。

◉活佛は、常に巨財を蓄へずといへども、信仰の小槌を有す。必ずしも財に苦しむことなし。必要に應じて、寄捨を命令すれば可なり。蒙古人また能く、その命令に忠實なり。活佛は田舍の長者なり。牛馬、雜穀すべて物資を有して、現金を有せず。今、羊は三百頭あるのみと、活佛言へり。

◉蒙古の家畜には、犬、猫、牛、馬、羊及び駱駝。殊に、駱駝こそ沙漠に適さはしきものなるべし犬は極めて敏感、猫は毛深く、むくむくして敏感なり。日本にては、猫を藝者に擬すれども、蒙古猫は、到底、藝者にあらず、山出しの下女なるべし。

◉吾輩、車窓より蒙古の沙漠を望み、忽ち勅勒歌を思ふ。勅勒川陰山下、天如二穹廬一籠二蓋四野一、天蒼々、野茫々、風吹草低見二牛羊一、穹廬は天幕なり。天を穹廬に比す、平野は穹廬一抔なり、以て、平野の大なるを想見すべし。

◉白音太來より四十七哩、鄭家屯より廿三哩の門達驛に、紅かき落日を望む。午後五時五十分頃、時は三月六日、紅光、燦として燃ゆ。極めて大たるルビーの如し。

◉此行、なほ逸話の錄すべきものあり。太平川驛に、湯氣の立ちのぼる油餅を購ふに、少しも熱つからず、蓋し、極めて寒冷の天地、微濕にして水分を帶ぶるもの、悉く湯氣を立しむ。驛長に、歸途、直に、熱つき油餅を擬せんことを望むに、驛長、笑つて快諾す。白音太來より歸るとき、驛長、車室に來り、導いて官舍に到る。驛長は支那人にして日本語を解する者なり。

◉汽車は蛙の如し、飛ぶよりも、停まること長し。此驛、停車時、殊に長き筈なり。然れども吾輩、發車に後れんことを憂ふ。驛長笑ふ、請ふ、憂ふるを休めよ、驛長、此に在る間は、發車

するとたしと。卓上、すでに四五の支那料理を按排し、別に洲餅の大皿あり。紹興酒あり。停車中に、汽車を離れて、小安を張るは、これを生來の一奇事とす。また遠く蒙古に入るに非されば、此の奇游なきなり。

其廿一

◉白音太來よりも、洮南の一夜、萬里絶域の感に打たる。ホテルといはずして、洮南旅館といふ。客窓、街路に近し。夜五更、胡馬の鈴、蹄の音、寒空に冴えて、續々、鳴つて家に響く。此の時の印象、長く忘るゝ能はず。

◉洮南線開通以來、未だ幾ばくもならずして、旅館は草創に屬す。溫突の坐敷なれども、白音太來に比すれば瀟洒たり。開通以後内地人にして、此に來る旅客は吾輩を以て先驅とす。

◉洮南と白音太來とは、蒙古經營の樞軸たり。通商も亦た漸く殷昌に赴く。城壁方一里、實に堂々たる邊塞の巨鎭とす。その中に、人口四萬許の都邑あり。停車場より、夕陽に、馬車を驅つて城門に入る。支那兵城門の内外に警衛し、或は鐵騎、到る處に馳せちがふ。朔風、蕭々、雲、凍らんとして、劍、嘶、鳴る。

◉二三十日前までは、此の地方、日本人の出入を嚴訶し、旅行免状と名刺とを必要とし、既にして免状を要せざるに至るも、尙ほ城門に誰何し、名刺を徵し、旅宿を確め、後、巡警、來て旅行の要件を問訊す。最近、これ等の事、すべて廢し、間もなく、吾輩、此に來る。

◉市街は整齊して見るべし。日暮に迫るを以て、鎭守使を訪はず。遍ねく市街を巡覽して、蘇鶏街毛頭に到る。寂しき所なり。此に楡の老木、枯れたる儘に立てり。蒙古人、天幕生活の發祥地なりと稱す。樹邊に、一の支那人立てり。吾輩の馬車を見て、忽ちしんぜうと叫ぶ。一語、寒空に響く。

◉しんぜうは則ち進上なり。支那人、進上を倒用して、日本人を見れば、乃ち進上といふ。何か吳れろの意なり。日露戰後、進上の一語、大陸に普及すといふ。然れども吾輩が聞きしは、此の時を始めとし、その本國語なるを思ひがけず。此の絶塞に、異國人の口より日本語を聞くは懷つかし。

◉日本人、此の地に居住するもの、男女合して卅五人あり、その中、女四人、その一は旅館の若き主婦とす。主婦、初めて來りしとき、近隣の姑、嫁、多く訪ひ集まり、異樣の風俗を嘆賞して已まず。或は衣帶を摸索し、からを評し、頭髮を撫でまわしなどし、主婦を囲くつて仔細に點檢すること、日本の娘が雛人形を愛玩するが如くなりしといふ。若し、吾輩が異域の人を見るよりも、日本女の和服は、彼等には、一大驚異ならずんば

あらざるなり。

◉此の一夜、吾輩、切に國旗のおかげを思ふ。僅々、少數の日本人、此の絶域に來り、武器ありといへども、自から守るには足らず。而して安然として自營し、游歷するを得るは、本國を背景とすればなり。

◉洮南に稅捐局あり、日本の收稅官なり。局長は夏雲翹、韓亭と號す。六十歲、稍、文事を解す。昔年、張作霖の微賤なりしとき、これをトして、英雄の相ありとなす。張、滿洲王となる後、一言の德を思ひ、拔擢して此に置く。これを以て、官事には通ぜざるも、聲望あり。

◉悠々として迫らざるは蒙古人なり。計數には、指を用ひ、手足四本を悉く用ひ、三十六を算するに止まるもの少からず、百を算するに至つては容易ならず。外蒙古に岩鹽を產す。蒙古には唯一の鹽の產地なり。洮南を去ること千二百淸里あり。蒙古人、冬、牛を率ゐて、遙々、鹽を求めさせに行く。滿洲にては、營口に製鹽灣あり。營口の海鹽に比すれば、外蒙古の岩鹽は、洮南にて、一斤に一錢やすし。

其廿一

◉蒙古人、耕作、運送には牛を用ひ、馬は專ら交通に用ふ。沙漠に尤も適するは、駱駝なり。一定の日數の食糧を一時に貯食せしむれば、旅行中、食糧の苦勞を要せざるは駱駝のみなり。北支那、蒙古、鐵路を離れては、尙ほ駱駝の世界なり。彼が大沙漠に、悠然として濶步するを見れば、その風采、現代を超越す。彼は、熱國にも適し、寒國にも適す。あの厚き毛は、夏初より脫落し、秋晩より醗生す。人間と同じく、彼は防寒外套を着くるなり。

◉沙漠の世界に、駱駝は元老、馬は現役なり。此の大天地に、すべてのもの皆、尨大、唯だひとり馬のみ小さし。丈低くして健脚なり。並足といふことなし。人を乘すれば直ちに疾驅す。精悍にして疲るゝを忘る。沙漠の沍寒に堪ふること、楡の木と同じ。蒙古人、雪中に馬を牽うるに、廐なし、馬は屋外に夜泊す。その脊に降る雪の寸々、積もるを平然として馬は安眠しつゝあり。

◉洮南旅館に、洮南の生活を聞く。鷄卵四錢、牛肉一斤廿錢、豚は卅六錢。但し正月相場なれば、普通には、これ以下なり而して一斤は百四十目なるを以て、すべて日本より遙に安價なるを知るべし。洮南は洮兒河の南にあるを以て名づく、上流にケゲン・ミヤウあり、此にも活佛あり。

◉洮南の東、沙漠のうちに沼澤あり。第一の獵場たり。鴨

雁、天を蔽ふ、落日を待つて下り集まる。かくの如き雜沓たる單調の大世界、人生は酒と馬とにあり、酒を飲み、女を呼ぶにあらざれば、馬を馳せ、獵を試むるの外に、事業もなく、享樂もなし。水郷に舟あり、曠原に馬あり、唐詩に、胡兒八歲能騎」馬といふ。馬は則ち蒙古人の下駄なり。

◉此の索漠たる世界の歡樂郷を昇平里といふ。游廓の一天地となし、大門を設く。妓を三等に別ち、第三階級は、廣街の裏にあり。大通りの路次は、昇平里の爲に開く。

◉洮南に滿鐵の公所あり、蒙古の研究に從事す。特に、醫員を置く。此の夜、旅館の主婦、俄に腹痛を病む。朝、吾等一行の出發するを送つて、南歸を羨やむに堪えずと言ふ。一語、愴然として人を動かす。萬里遠征の唯一の武器は健康なり。米國在留の吾が同胞といへども、病者の死亡率は、本國よりも多しと聞く。文化の先進國に行くすら、なほ此の如し、況んや深く未開の沙漠に入るをや。

◉蒙古の醫藥の未開なるは、遠く日本の千年以前の昔に過ぐべし。人は皆、自然に生れて、自然に死す。幸運にして強健維持する者のみ老人となる。長壽、極めて稀なること、強風の沙漠に大木の稀なるが如し。近來、蒙古人、また漸く醫師の尊ぶべきを解す。醫師を敬すること救世主の如し。聽心器は唯一の安全旅客なり。蒙匪といへども、聽心器を携帶するものに害なへず。

◉去年來、滿鐵の醫科大學、教授を團長とし、醫員の一隊を率ゐて施療團を組織し、夏を以て內蒙古に入り、天幕を張つて患者を招く。日本人の對蒙事業、彼等の隨喜を贏ち得るもの、醫術を第一とす。

◉今夏第二回の施療團、教授橋本喬、齎らし歸る奇異の象皮病者、醫界の話題となる。八面城の農夫、蒙古人、名は牛寶、四十二三。睾丸の周圍、六尺に餘り、切斷したる後、これを測定するに重量、約十九貫あり。象皮病の大睾丸は、世上珍らしからず。然れども、此の如き大物は、歐洲の醫書にも載せず、世界未曾有の大睾丸にして、茂林寺の文福茶釜を冷笑するに足るものなり。

◉吾輩、亦た偶、此の奇客を一見するを得たり。蒙古の貴重なる發見物、大睾丸ぐらゐに止まらざるべし。抑蒙古は研究の寶庫なり。未發の好題材、沙漠の沙に埋もれたるもの何んぞ限あらん。吾が大學紀要に鳥居龍藏、蒙古人の研究一冊あるのみ。爾後、吾國人、蒙古に向つて、未だ大規模の學術的探究を試みす。米國は、最近、年々、學術的探險隊を沙漠に送り、初に、恐龍の卵子を發見するを以て誇稱す。吾國には、今、唯だ、此

の旋導圍の一墟あり。

◉支那人といへども、醫師の六は排日をなさず。日本の醫術の信頼すべきを知るなり。而して支那、滿洲、大陸の大舞臺に亙り、歐米人も亦た漸々、病院を建て、醫師を送り、仁術を以て駸々として侵略を試むるの勢あり。就中、大陸の野に於ける日米、刀圭上の角逐は、外交と同じく、感興に未つるものあり、將來刮目に値せずんばあらず。

◉鄭家屯より白音太來に至る鐵路七十四哩は一年間に成功し、洮南に至る一線百四十一哩は、四月より十月に至る二百日間に完成す。一日半にして一哩を敷設するの割合なり。支那の鐵道なれども工事は滿鐵の手に成る。鐵道敷設工事の速力に於て、日本鐵道史の記錄を破れるは勿論なり。一路坦々、譬へば棊盤に罫線を引くが如し。抑、茫々として限り無き蒙古の大平原、此の簡單なる數字の上に浮び出るにあらずや。

其廿二

◉滿鐵沿線の勝景、趣味掬すべきもの少からず。先づ、その山川を言へば、旅順第一。而して旅順に遊ぶ者は、戰跡を一覩し　直ちに踵を回らして還り去る、留まること暫らくもせず。戰跡記念館に入つて、攻圍戰の模型を見、白玉山に登り、忠魂碑を仰ぎ、東鷄冠山に砲臺の舊址を弔ふに過ぎず。朝、大連より來り、夕に大連に去り、旅順に宿せず。

◉老鐵山、巍然として峙つ、群峯の秀なり。旅順より稍、遠し。水師營址、大將乃木とステッセル會見の記念地、自働車卅分にして達すべし。旅順の考古館、土器、石器及び古陶器多し、滿洲に於ける趣味の別乾坤なり。唯だ、此の考古館のみを以ても、幾日の悠遊、淸賞に値す。

◉然れども旅順に來る者は爾靈山に登らずんばある可らず。二〇三高地の一語、凜として響く。爾靈山は萬古の詩なり。海拔としては固より高からざるも、累積、波濤の如く脚下に起伏し、旅順城は仔細に指點すべし。戰骨、今、既に殆んど盡く、殘壘の間に、彈丸の散落するもの無數なりしも、支那人、亦た既に拾ひ盡せり。

◉山縣關東長官の金雉賓施記念の歌に「沖釣の舟は港に歸りゆく、勇む舟子の櫓の音、老鐵山上、雲はれて、波にゆら〳〵秋の月」は、巧ならざるも、また能く旅順の趣味境を歌へり。旅順は釣魚の佳境、露人の留與せる艦艇は化して自然の釣場となる。海底に沈沒せる軍艦は、理想的の魚巢たり。多く海鼠を釣り得るも亦た旅順の一興味なり。

◉旅順の新市街は官衙町なり。繁華は舊市街にあり。その夜、

同郷人諸君、吾輩の爲に、旗亭やよひに盛讌を開く。その中、三四十年來の舊識亦た少からず。郷里、茅庵の近隣の少年、儼然たる紳士となるものあり。吾輩の少年時を識るもの、交、當年を語りて、歡笑、堂を撼かす。同郷人、海外に相逢ふ、一夕の歡會、滿目の銀世界に春風郷を現出す。旗亭主人も亦た同郷、これを以て、周旋頗る情あり。

◉吾雅をして、詩人ならしめば、やよひ一夕の宴、詩篇、口を衝いて發す可かりしなり。萩村は、吾輩、竹馬の友、當時紅顏の美少年、今や白髮、吾輩よりも多し。清華は詩書双絕、吟聲、梁塵を動かす。此の聲、三十年來、始めて異鄕に聽く。大江は磊落にして頭腦明敏なり。彼の寓居は邱上にあり、崖に沿ふて櫻樹あり。春花爛熳として開いて、海風に笑ふ、人呼んで小川の櫻といふ。彼、平生、蠻聲を發して歌ふとき、必ず旅順一といふ、此の夜、更に張り上げて歌ふ「世界一の小川の櫻」

◉旅順は櫻花に宜し、世界一の戰跡は須らく世界一の櫻を以て飾るべし。萩村は元と騎兵將校たり。日露戰に脚に重傷して現役を去りしより、馬を以て趣味とし、馬に關する一切の趣味を網羅せんことを期しつゝあり。彼が愛翫の土偶の馬、嘗て、東宮の台覽を辱くす。考古館に藏する光端和尚の同乾のミイラ六個、また斯界の貴珍とすべし。

◉或は光端和尚を以て、支那公使たらしむべしといふ者あり、一說たるを失はず。然れども彼や、久しく大陸を縱橫し、その人物も亦た大陸的にして奔放なり。その豐富なる蒐集と、該博なる知識とは、恐らくは他人の追隨を許さゞるものあらん。須らく民族の雄として、虎を野に放つが如くに、これを大陸に放つて、その爲さんとするところに任かすべし。

◉旅順、大連間に自働車を通ずるの大道を旅大道、或は山縣道といふ。完成の曉、旅大、直ちに渾然として一區とならん。垣々たる公道、プラットホームに車を滑らすが如くなるべし。大道に沿ひ、老虎灘と星ケ浦とあり。ともに海水浴場にして、文化的の光景、大連の慰安場たるを失はず。

◉牛莊に始めて支那街を遊覽す。此の地に於ける日本人の市況は、また當年の繁華を見ず。遼河に架するに大鐵橋を以てして、彼岸の支那鐵道に連絡せしめば、理想的なるべきも、その事、容易ならず。

◉營口に、滿洲日報社の小川義和を訪ひ、主筆室に小憩を聽くは、半日の情樂を得たり。およそ雜然たるものは新聞の編輯局なり。此の主筆室の如く清雅なるは恐らくは天下に稀なり。編輯局にして書齋たり、應接室たり、書架、整齊して板の間に一塵を留めず。主筆は香爐に蘭を割り、衣桁端整、當くが如し。

風采は大口喜六と麻田駒之助との二人に似て、その中間にあり。静かに趣味の談論に耽けるに、初春の陽光、窓外の銀世界を照らし、一室の中、駘蕩たり。

◉滿洲の温泉は、熊岳城と湯崗子とを對稱し、別に安奉線に、安東に近くして五龍背あり。三者、各、特徴あり。互に、設備と環境とを以て勝さる。湯崗子をブル的とし熊岳城をプロ的と稱す。熊岳城は滿洲に於ける果實の國、就中、林檎あり、梨あり、夏、瓜、やすきこと礫の如し。温泉そのものは、皆、内地の雄者に比す可らず、環境は自から新趣味あり。

◉湯崗子は曠野の中にあり、遙に千山を背景とし、眼前千里なり。五龍背は五龍山下にありて綠樹に包まれ、遠く人寰を離るるの思あり。湯崗子は群游に宜しく、五龍背は閑游に適す。熊岳城には砂風呂あり。

◉大陸には火山少く、温泉稀に、支那人も亦元來、温泉趣味に耽けること日本人の如くならず。滿洲に温泉趣味を開拓するものは日本人なり。

◉温浴を以て民族的趣味とするもの、昔は羅馬人あり、今、日本人あり。江戶兒は朝風呂を條件とす。温浴の極致は温泉となる。支那風呂と、日本風呂とは、その組織を異にす。今の滿洲の温泉は専ら日本趣味を滿足せしむ。支那人に温泉趣味を鼓吹せんには、別に、新機軸の設備をなすを要す。

其廿三

◉鐵嶺の龍首山に登りしとき、光景なほ眼中にあり。始めて沿線の山水清游を爲す。山上に醉翁樓あり、滿壁みな聯句、その中、岩村領事の題語にいはく、「人立乘風、河山千里目。樓高近日大地一家春」、なほ自から日本の語調を帶ぶ。知事廣彭の題語にいはく、「東國有人、鶏黍三年約。西風愛我、山川兩度經」、此の知事、重ねて此に赴任せるなり、一讀、則ち支那人の口吻。

◉醉翁樓の闌干に倚り、暫らく銀世界の山川を望む。遼河は一條の白線となりて、氷野の中に混じ去り、白帆の遠映するを見す。支那文人の題語のうちにいふ、「閑來隨レ雁送二山月一、醉後呼レ龍耕二野烟一」、鐵嶺の春風秋月想ふべし。またいはく「樹外遠帆輕似レ鳥、雲間游客靜二於僧一」、洵に此の樓上の實景。

◉日本にありて支那の文學を讀み、誇大放誕となすもの、足、一たび大陸の地を踏めば、その悉く忠實なる寫生に非ざるはなきを知る。由來、支那文學、寫實に根柢す、日本人より見て想像力の豐富なりとなせしもの、必ずしも然らざるを見るべし。

◉鐵嶺山下、笙鼓の聲起る。これを問へば、死者の家、棺前に、樂を張つて幽魂を慰むるなり。樂音、微に哀調を帶ぶとい

へども、なほ饑餓として、閑寂なる銀世界の雰圍氣を動搖せしむ。邱腹に布を乾かすもの、枯草の地上に直ちに布を敷き、油繪の色采を以て强く塗れるが如し。

◉開原には囤を見る。囤は穀倉なり。アンペラを以て、高大なる圓筒の塔を捲き上げ、同じくアンペラを以て屋とし、その中に、大豆、雜穀を貯藏せしめ、一囤、約一萬金に値す。吾等の見たる一問屋の庭上の囤三十餘あり。然れども、これ未だ開原の最大とするに足らず。支那人の農産の富、これを以ても、その一斑を想見すべし。

◉開原驛長の語るところに據れば、支那人にして、大豆、豆粕の運賃、年額百萬圓以上を支拂ふものあり。日本人は、僅に、その三分の一に達する者、一人あるのみ。

◉開原の支那街を散策し、その問屋の組織を見る。光景、日本の勸工場の如くにして、中央を土間の通路とし、一側に雜貨を並べ、他の一側を以て、坐敷とし、田舍より集來する仕入の顧客の爲に、寢臺として提供す。則ち仕入の商人は、問屋に起臥して商品を吟味し、悠然、取引に從事す。支那人が、商賈の、親切にして經濟的なること此の如きものあり。

◉吾輩、此の問屋の事務室に至り、漢藥を購ひ、領收證を得たり。試みに取引の受取證を作らんことを求む。以て、支那人に對する經濟的觀察の一材料となさんとするなり。彼、從つて莫大の金額を記入し、印紙を貼し、印を捺して贈る。

◉四平街は、四洮線の起點たるを以て、要部として開原の中に、市街を現出す。四平街の名、極めて適はし。四洮鐵道の督辦馬龍潭、旅行中なるを以て逢はず。馬龍潭は奉天軍閥の一元老、陸軍中將の肩書を有す。滿洲軍人中の能書を以て知られ、頗る揮毫を好み、逢客には必らず揮毫を贈る。

◉此の夜四洮線鐵路局の日支人、吾等の爲に、宴を倶樂部に張る。國音、華音、雜糅して、また生來、初めて見るの春風郷たり。技師長中村謙介の鐵路公館に宿す。中村は吾輩の舊友なり。滿洲に來り、初めて知人の家庭に一夜を送り、日本人の滿洲に於ける生活を偲ぶ。鐵路公館は、煉瓦の建築、個々、庭園を擁し、宛然、整頓したる一箇の文化村なり。

◉南北滿洲の分水嶺は公主嶺にして、滿鐵の農事試驗場あり。車窓より試驗場を望めば、林木の點綴する牧場に、色彩の瀟灑なる建物見え、牛羊、點々、徘徊し、瀟洒たる風致、歐洲文學の一場面を爲す。此の地、風景を以て顯はれずといへども、滿鐵の趣味、沿線に得難し。

◉試驗場に、大豆の研究を聽くは頗る興味あり。若し、人生の高尚なる趣味は自然研究にあり。茫々たる滿洲の大平原、農耕

を以てすれば、米を主とする日本の瑞穗國に對して、南滿洲は「大豆の國」「高粱の國」たり。大豆、豆粕、高粱、石炭、すべて是れ滿洲の特産と稱すれども特産の字、必ずしも當らず、名産なり。故さらに特産の字を用うるは、その産額の莫大にして、南滿經濟の性命を爲せばなり。

◉日本に於ける農耕の一大急務は、米の收穫率を增加するにあると同じく、滿洲に於ける大豆の改良は、滿洲の發展を意味す。此の研究に從事する技師中本保三、その人、温秀、玉の如し。最近、研究の成績、漸く擧がるを聞く。改良種が、此の大平原に普及するは遠きにあらざるべし。

其廿四

◉牧畜の改良は、冷血なる科學者の眼中には、商人が算盤珠を彈いて計畫に從事すると異なることなかるべし。然れども、趣味の眼を以てすれば、自由自在に天物を變化せしむる意匠と仕事と、藝術的の興味、迸ばしる。すべての科學的研究は、すべて藝術なり。國際的舞臺の滿洲に、ひとり悠々として、精神的の享樂に耽けるを得るものは、此の自然研究なり。吾輩は、此の試驗場が、畫裏の光景に置かれたることを併せて祝福す。

◉牛、羊、豚の改良は、經濟的價値多し。然れども興味は綿羊にあり。奉天の毛織會社に、綿羊の毛を見、此に來て、忽ち生ける綿羊を見る。綿羊の趣味は、その尾脂にあり。

◉麝香の臍に於けるが如く、綿羊の資産は、その尾にあり、脂尾肥滿して扁平、廣く垂れて扉の如し、譬へば前垂を尻に掛けたるが如し。脂尾の重大なるが爲に、揃ひて脚の高き綿羊は、ヨチ〱として歩行す。穢、歩ければ、飯粒が足裏に粘着すといはずや。綿羊の大なる穢は、その尻に粘着しつゝあり。

◉科學的趣味に憧憬したるジョン、ラボックの如き高尚にして優秀なる銀行家をして、此の綿羊を見せしめば、必らずや、單にその毛の産額と、繁殖率とを計算したるに止まらずして、此の柔順、遲緩にして奇異なる動物に、執着の眼を注ぎしならんばあらず。

◉經濟上の物資として見れば、綿羊は、遠く平凡なる牛、豚に若かず。然れども、これを一箇の趣味的動物として見るときは、僅に、人生の理法を象徴しつゝある價値、◇かるものあるり。特に、これを滿洲に見るに於て、興味、更に多し。

◉綿羊の脂尾は、尚ほ駱駝の駝峰の如し。同じく是れ體內に於ける自然の食物庫なり、その營養を貯藏する倉庫なり。食物を用ひざる動物にありては、或は金庫ともいふべし。駱駝は、その金庫を背上に負ふが故に、苦にはならず。綿羊は、その尾

あるが故に、行動を束縛せらる。造物者の悪戯なり。

●此の奇怪なる脂尾は、臀部の後端に、づるりと緩るく下かり、譬へば鉢切れるやうな大財布を腰に下げたらんやうに見ゆ。彼は、羊の與一兵衛ならずんばあらず。狼は曠原の定九郎なり。彼は定九郎に遭遇すれば、走ること未だ三歩ならずして、逸早く、その大財布を攫まるゝなるべし。

●營々として、貯蓄の爲に生くるものは、駱駝と、寒羊と、支那人なり。彼等は身外に倉庫を造らずして、その身中に倉庫を造るその生存慾は貯蓄の爲に活きつゝありて、その身は、自然が自身を與へたる倉庫とも、銀行ともいふを得べし。

●支那には、銀行、未だ發達せず。支那人は、自からその財産を貯藏すること、駱駝と寒羊とに異ならず。駱駝も、寒羊も、ともに痩せて、駝背と、尾脂とのみ肥えなり。世、亂れて、支那、滿洲の野に、劫掠の行はるゝや、富人の家の、床下下は掘り返され、その厚き牆壁は悉く破壞さるゝを常とす。日本の長者の昔咄にある如く、彼等は、金銀を甕に入れて床下に埋藏するに非ざれば、則ち牆壁に塗り込む。

●秦始皇、儒を坑にし、書を焚きしに當り、藏書家、その書を壁に塗り込みて、難を免かれしが故に、後世、書籍に字して東壁といふ。支那人、東壁に塗り込むものは、六經のみにあらず。圖書館を造らんとは些ずして、自家の書庫にのみ秘藏は、支那人の民族性を表現す。始皇以前より袁世凱以後にまで、彼等は、寒羊の魂を失はず。

●歷史上の名ある書院、徒らに舊蹟のみを存して、藏書の存するものなし。それと同じく、支那人の銀行は榮えず。銀行は却つて危險なり。古人、名山に傑作を藏むるものあり、今人、大金を銀行に預け入るゝものなし。自衛の極は、これを體肉に藏するの外に途なきなり。而して自から作れる尾脂の爲に、その自由を失ふものは彼等なり。彼等は、自尾自縛ならずんばならず

●彼等の爲に、通俗の實情を表現すべき一篇の笑話を作らば、人を見たら蛙になれといふに換へて、人を見たら寒羊になれといはざる可らず。

●若し日本人を猿に似たりといはゞ、支那人は寒羊に似たりといふを得べし。猿の模倣性は日本人を連想せしめ、寒羊の尾脂は支那人の貯藏魂を象徴す。

●滿洲の支那人は排日を爲せども、日本の銀行に貯金することを辭せず。支那の銀行に比して、日本の銀行の極めて安全なるを知ればなり。寒羊は、その脂尾の厄介たるを自覺せざるべし。支那人は、自衛貯藏の、唯、危險なるを知り、漸く外國の銀行に依賴するに至る。政治家の巨頭は、外國人の居留地に逃

げ込み、富人の大金は悉く外國銀行に飛び込むは、支那人の現情なり。

◉蟻と蜂とは、勤勉の象徴なるべし。孜々營々として働らいて。疲るゝことを知らざる支那人は、蟻と蜂との如くにして、蟻と蜂との如くに貯藏庫を作ることとなし。

◉支那料理の、尤も珍味なるものに、熊掌と、燕巣とあり。燕巣は海[illegible]を集めて作り、自から食ふが爲に非らざれども、熊掌は元と自から食ふが爲に貯藏す。人間より見れば、均しく食物庫たり。支那人の金銀の藏は、熊掌にも比すべし。時々、これを竊して、獨り自から悅ぶ。牆壁は則ち燕巣なり。自からこれを食ふの暇なくして、早く、人に破らる。

◉世界は、皆て、支那を目するに、「眠れる獅子」を以てしたることあり。此の眠、深くして覺むるの時、未だトする可らず。然れども支那の民族性を諦觀すれば、勤勉にして機敏なる猶太たらずんばあらざるなり。

◉支那人に對する銀行家は、須らく支那の猶太魂を利用し、更に、その貯畜性を培養せしむると共に、その貯畜力を活用して、以てその開發に轉用せんことを期するなるべし。

◉猶太の資産は、後より望んで、これを測ることを得べし。第一回の奉直戰に於ける張作霖は、敗れて滿洲に退きしとき、奉天府中に發したる現金二百五十萬元なりしと傳ふ。これを以て見れば、彼や、頗る偉大なる猶太なりといふべし。

其廿六

◉滿洲の地中の富といふ者、石炭と鐵とを雄とするは論なし。石炭といへば、直ちに撫順を聯ふ。撫順の外、本溪湖と煙臺とあり。若し滿洲の石炭をして、自由に本國に輸入するを得しめば、本國の石炭を壓倒するは容易なるべし。その產額の巨大なるは石炭の上に滿洲ありといふも、必ずしも誇張に失せざるべし。

◉地中の富は概測の外なし。撫順は鑛區二千萬坪に餘り、炭層八十尺より五百尺に及び埋藏量十億噸を超え、一日の採炭は約二萬噸に及ぶと稱すかくの如くして、尙ほ二三百年の前途を有すべし。炭坑にして、かくの如く、强健、長壽なるものは世界的たるを失はず。日本の石炭は、將來、三十年の壽を以てトせられつゝありといへども、唯だ此の撫順の一あるも、[illegible]するを要せず。

◉撫順の外、煙臺は、埋藏量、約四千萬噸、一日の採炭約二百萬噸半無煙炭の本溪湖は、埋藏量二億萬噸を有すと稱せらる。本溪湖は大倉組の經營するところ、鶴翁の米壽の賀莚を催

き一個の裝飾品は即ち太湖の石炭なり。

◉昔の支那人　多く石炭の評價を理解することなかりしといへども、撫順炭は、多少の趣味ある歷史を有す。此の炭抗に近くして發達したる高麗燒は、恐らくは、此の石炭を利用したりしなるべく、近世、清朝の盛なりしとき、その地、奉天の北陵に近きを以て、風地を害するを嫌つて、採炭を禁じ、清朝の末年に至り、その禁を解く。

◉今や、撫順炭の聲名は、その露天堀にあり。北京に行けば萬壽山を見ざるはなく、滿洲に來れば、露天堀を見ざるはなかるべし。日光を見ざる者は、結構をいふ可らず。露天堀を見ざれば滿洲を說くこと莫かれ。

◉炭抗といへば、何人も地中の暗洞に於ける活地獄を連想せざるはなし。此の露天堀は直ちに大氣中に、地上に向つて堀る。ダンテの神曲、地獄篇の神秘なる悲劇は、露天掘にては、興味を失ふ。

◉靑天白日、堂々として地殼を抉ぐり、抉ぐり來つて暴露されたる、層々として重なる石炭層の大輪廓、譬へば廣大無邊なる螺殼を地球に嵌たらんが如し。珠寶を得んが爲に、大に、地を掘ることとあり。これと、是とは意味、全く相反す。これは掘るところのもの皆、穢物にして、眼前に展現する壯觀は、偷ほ前路の功程を示す。形は殼にして、殼にあらず、前途に得べき價の蓄積なり、希望の輪廓なり。

◉露天掘は費、少くして功多し。撫順の石炭、渾べて露天掘となす可らずといへども、露天掘は撫順の名物なり。今の新市街は石炭層の上にあり。やがて市街を移して、そこに炭坑、現はれん。

◉露天掘の蕪雜たる炭層の表皮は、泥炭を以て蔽はる。筍の上皮の如し。上皮を剝いで、始めて炭層に達するの前、泥炭の山を爲す。これを處分するが爲に、モンド瓦斯の工場を設け、モンド瓦斯を以て工業上の安價なる大動力を造る。かくして、皮も實も、みな以て動力の資源となる。撫順は、工業的動力の結晶せる天與の一大果實なり。

◉鞍山の製鐵は、滿洲の一問題たり。八幡製鐵所の以外には、かくの如く大規模のものなし。また東洋に於ける製鐵の一大勢力たるを失はず。然れども投資の莫大にして、財界の不況に遭遇し、此の大工業の停頓を免れず。鞍山の鐵鑛の中、貧鑛處理の新計畫あり。此の計畫にして、豫定の進捗を見るを得しめば血路、則ち開かれん。吾等鞍山に至りしとき、貧鑛處理の立案者、技師梅根常三郎の懇篤なる說明を煩はしたるを欣幸とす。

◉此の製鐵所は、滿鐵と、奉天府の于冲漢との合辦經營に成り

その製錬所は全部、滿鐵に賣るの契約あり。滿洲に於ける大工業經營の形式の一斑を見るべし。

◉抑、滿洲の地域の廣大なる、その地下の富、隨つて多種にして多量なりといへども、南滿の鑛業に於けるは、鐵と石炭との大規模の採掘の外、その他の鑛業は、交通機關の發達を待つを要す。北滿は、黑龍江畔の砂金、西比利亞と共に、世界的金產地として知らる。昔人の所謂、黑水は今や則ち黑龍江を意味す。

◉黑龍江省の砂金は、嘗て年額千五百萬圓に上りしことあり。今は則ち當年の盛況を見ず。黑龍江畔の山野、金砂子を塗れりと思ふ可らず。著名の產地を、漠河、呼瑪爾、太平溝の三とし漠河尤も著はる。漠河は額爾克訥河が黑龍江に注ぐ邊、東西四百支里、南北その半に達する地帶を總稱し、當年、金砂子の野たり。

◉今より半世紀の前、露人、南下して、漠河の砂金帶を發見し萬餘の露支人、その採掘に從事す。則ち大袈裟なる黃金の密獵に外ならず。その後、淸朝、討伐隊を送つて、露人を驅攘し、其後幾回かの曲折を經て、時に露人より買戻したることもあり遂に支那人の手に歸するに及び、また當年の盛運を見ず。支那人、辛苦して、露の立ちたる金帶を護りつゝあり。

◉露人、南下、侵略の眼、地上より地下に及ぶこと此の如し。これ未だ、その一例たるに過ぎず。蓋し露人その態度、大膽にして且つ頗る露骨なり。彼等は極めて寬濶、粗大なる如くにして、その中、自から纖密あり、巧智あり。その露骨なるは日本人を驚かするに足り、その機略は支那人を服するに餘あり。帝政、一變して勞農政府となるといへども、一貫したる侵略主義に本づく傳統的政策は、今に至つても、毫も變改したるを見ず。

其廿六

◉日本の領土は朝鮮を含んで、僅に四萬四千方里に過ぎず。所謂滿蒙は、約、その二倍に近く、七萬四千方里あり。たとへ其の地積が漠として不確實なるものにせよ、略ぼ、その廣大を想見するに足る。人口は則ち日本の七千萬に對して僅に二千四百萬、若し人口の密度を以てすれば日本が一方里、二千人を超ゆるに對し、滿蒙は三百人に過ぎず。試に、畫趣を以て論ずれば、これは群集にして、彼は山水の點景人物のみ。

◉此の廣大なる滿洲に在住する日本人、僅に十八萬人。若し、滿漢人と同じ密度を以て生活するものとせば、日本人を以て、七萬四千方里のうちの六百方里を填充するに止まる。況ん日本人が租借地に在住する密度に、此に止まらざるを以て、

に於ける日本人の生活地帶の狹少なるを想像するに餘あり。

◉所謂、滿蒙の區域は如何。大體に於て、東三省、及び西遼河の流域なる北滿地方と、嫩江の下流の一帶たる東部內蒙古とを含む地積をいふ。これとても、固より截然たる境界線の劃されたるに非るや勿論なり。

◉地勢を以て言へば、東北は山また山、興安嶺と長白山との二大山脈、自然の屛風を爲せり。西は漠々たる蒙古の大平原、南は則ち黃海と渤海。北は黑龍江を隔てゝ西比利亞に對す。蒙古の大平原は陸の海ともいふ可く、沙漠とアルカリ地と補綴し、興安嶺の森林、これを遮ぎる。遼河、松花江、豆滿江、鴨綠江、運河等の長江を以て、此の雄大なる自然人の血管とすべし。

◉滿洲の沍寒は驚くに足らず。北海道より樺太に至ると思へば可なり。その北方は、零下三十度に及ぶも、煉瓦の建築、防寒の設備、十分にして、却つて日本の冬籠よりも氣樂なるべし。唯だ、その冬は長し、燃料は生活費の大部を占め、電話帳の職業別に煖房屋の多きが目を惹く。旅行には別に、防寒具なくとも差支なし。

◉室內の水蒸汽、窓硝子に冷却され、霜、積もりて、凍つて解けず。ホテルなどの廁の硝子の霜に染著したるもの、枚に苔するが如く、能く久しさを保つ。日本の冬は炬燵の天下なり。滿洲の銀世界には、家のうち春風あり。

◉滿洲の春は、短かくして慌たゞし。短かき丈けに、一時熳として現はる。譬へば支那劇の如し、冬と春との間に幕なし。冬の幕、未だ下らずと思ふうちに、春の役者、既に舞臺に上り、柳綠、花紅、雰圍氣に充ち、鶯鳴、盛んに春の譜を奏しつつあり。支那劇には幕なし。春の幕、未だ下らず。薰風、新綠を煽り、高粱の波濤、地平線に湧く。銀世界より高粱の海に至るの間、一炊の夢のみ。

◉行政を以てすれば、東三省は、奉天、三道五十七縣。吉林は四道三十九縣、黑龍江は三道卅一縣。民政には省長を置き、その下に道尹あり、知縣あり。政權は軍閥にありて、省長よりも督軍は重きを爲す。滿蒙の覇王は張作霖なり。

◉蒙古を一括する蒙古王なし。蒙古王の名を占有するものは日本に佐々木照山一人あるのみ。東蒙古は四盟三十旗に分ち、各旗に首長あり。王といふは、その實、則ち此の大沙漠の一握土の首長たるに過ぎず。その生活、固より日本の小諸侯にも及ばず。

◉蒙古に行けば、土地をたゞ與れるものもあるように思ふは、一場の夢なり。大沙漠の一塊の土、みな所有權あり。內蒙古には、耕すべき地には、支那人の足跡、至らざるなく、大平原の

眞中に、小部落を生ず。水田の開拓すべきありといへども、商租問題の解決するに非ざれば、日本人、蒙古に進出するは容易にあらず。

◉日本人の農耕、概ね支那人の名を籍る。實際に於て、不便に堪えず。假令、蒙古の大野、拓くべきの利あるも、商租問題、解決するに非ざれば、安んじて投資するを得ざるべし。滿洲の租借地以外に於ける日本人の農工業の進展せざるは、主として此にあり。

◉年産二千萬石の大豆、三千六百萬石の高粱、三千萬石の粟、千萬石の玉蜀黍。小麥は、歐米に輸出すべく、綿麻、靑麻も四千萬斤あり。その他、雜穀無數。滿洲の地上の富、唯だ、これを以ても知るべし。

◉家畜の盛んなるを以てすれば、滿蒙は、「人間の世」といふよりも、寧ろ「畜類の天下」たらずんばあらず、馬三百五十萬。牛二百萬、騾と驢と七八十萬、駱駝四五千、緬羊と山羊と三百萬に近く、豚は遙に六百萬を超え、概算、千五六百萬に及び、三人集まれば必ず家畜二頭あり。滿洲の王者といふは、牛、馬、羊の王たるなり。

◉滿洲は海岸線短かく、漁業、言ふべきものなし。魚は、古來、專ら河魚を料理し、趣味としては黒龍江の鯉あり。長江には、堅氷を穿つこと井を鑿る如くにして、綵水を沈み、また併せて魚を釣る。廿四孝は、滿洲にては編くに足らず。竹なきを以て、雪中の筍の掘るべきなしといへども、氷を破つて鯉を得るの王祥は、到るところにあり。

◉滿洲の野を縁ちどる山林の富は、世界的に林業を脅威するに足るものなくんばあらず。長白山麓、吉林の深林は既に世間に知らる。興安嶺の札免公司は、日、支、露の合辦の名を以て、日本人の經營に屬す。その事業の進展如何は、將來、滿洲林業の一大問題たり。

◉長春、哈爾賓間の運輸が東支鐵道の手にあるは、則ち札免公司の材木をして、白山に出するを得ざらしむる所以なり。從來、哈爾賓、長春間の鐵道を買收するの機會果してなかりしや。北滿、經營の爲に、多大の犧牲を拂ふも、此の間の鐵道を日本人の管理に歸せしむ可かりしなり。然らざれば、北滿の管鍵、他人の手にあり。ひとり札免公司のみの問題にあらず。

◉日本人、哈爾賓以北に莫大なる投資を敢てして、以て、大事業を經營するは、ひとり札免公司あるのみ。これを以て、吾證、特に、札免公司を擧げて、日本人、北滿經營の一班を論ずるのみ。

◎近ごろ奉協定の成立するや、哈爾賓に於ける東支鐵道の支

配は、赤露人に移り、直ちに、運賃率を改定し、その結果、滿鐵に少からざる影響を與ふべき、必至の勢を示す。北京の日本公使、カラハンに交渉するに、露奉協約が、日本人の既得の權利に抵觸するなからんことを期待するを以てするに、カラハンこれに答へて、勞農政府は、東支鐵道に關する日本人の權利及び利益の保留を承認するを得ざるを以てす。

●更に、カラハンの回答にいはく、東支鐵道に關する露支協定は、何等、日本及び日本國民、乃至、投資第三國の權利及び利益に影響するものに非ず。蓋し東支鐵道に關しては、支那以外の各國及び各國民は、かゝる權利を有するものにあらずと。蓋し露奉協定に對する日本が既得權の關係は、今後、もつとも注目に値するものなり。

●若し、東支鐵道に關する露奉協定が、事實に於て日本人、既得の權利と利益との保留を承認せざるときは、日本人の爲に、哈爾賓は、恐らくは、單に、趣味の都たるに止まるべし。露人の侵略的南下を喰止むべき北方の第一線とはならざるべきなり。

其廿七

●哈爾賓は露都モスクワに發して遠る。露國人、東方進發に於ける發源地にして、則ち東方露西亞の首都なり。哈爾賓の南、車程、約廿分にして故郷屯あり。故郷屯は元と支那名にあらず、露國人の命名するところ、原名インデンダンスキイ、譯して故郷屯といふ。南下の露國人、此まで歸り來れば、遙に哈爾賓を望んで、故郷の感をなすの意。哈爾賓の重大なる意味、此にあり。

●多くの旅客は、趣味の哈爾賓に眩惑さるゝを常とす。然れども、これ露國人の初より期待したるところに非るなり。日露戰爭に次ぐに革命の騷亂を以てして、停頓に重ぬるに頓挫を以てし、哈爾賓の主權、支那人に歸し、市街は、日、支、露三國の街、鼎峙の形勢を以てし、國際的の滿洲に國際的の繁華區を現出せしめ、三國に、三個の歡樂鄉あり。花の如き露西亞女、燦然たるキタイスカヤの廣衢に滿ち、公園の並木道を徘徊し、夜を徹して歌ひ躍る。

●美くしき硝子壜に充つるウオツカの美酒、天よりも澄みて明らかに、趣味の豐滿にして野卑の饒かなる露西亞料理、卓上に列し、少婦、猫の如く、直ちに人の膝に上る。飲み且つ食ひ、歌ひ且つ舞ひ、夜を以て日となし、自動車は曉に至るまで舞踏場の前に滿ち、紳士、官人、日高くして眠未だ覺めず。公私、百事の交渉、すべて午後より夜に到る。

◉哈爾賓の驛前、馬車の列を以て環堵をなし、その中露西亞馬車、ドロスキイのみはく悉く露人の馭者なり。露人、元來、眼中に支那人なし、ドロスキイは、馭者と客と同乘するを以て、馭者に支那人を用ひず。

◉歡樂の哈爾賓は則ち墮落の露西亞なり。蒙古人の振はざるは、性慾の濫費の爲なりと稱せらる。青年あり、老人なし。多少の老人ありといへども、衰殘して枯木の如し。露西亞女は優曇華の花の如し、その全盛は眞に短かし。青春の夢一朝にして凋落し去る。美女、忽然として老婆となり、趣味の姥櫻あることなし。

◉革命前の露西亞女は、支那人とダンス世ず。支那人も亦た舞踏場に闖入することを爲さず。雲上の仙女と地下人との如くなりし。近來、支那人の勢力、擡頭し來り、露西亞人は益々壓迫され、墮落せしめられ、當年の品位を失ふ。所々のカフエー、支那人を得意とし、露西亞女と支那人のハイカラ青年と、蝶の如く舞ひ、舞ふ。

◉白黨の露人は、西は巴里に、東は哈爾賓に去つて集中し、僅に舊露西亞の面影を存すといへども、困窮して自ら支ふる能はず。寶色は彼等の實情なり。寶玉は市場に奔り、女は娼婦となる。赤黨の露人といへども、支那人に壓せられ、東清鐵道の巨利は、並べて支那人に壟斷せらる。白黨赤黨ともに伸ぶる能はず。かくの如くして東方露西亞の首都は、『侵略主義の美しき殘骸』として、空しく松花江畔に横たはりつゝありし。

◉松花江畔に展開し行く無限の大野の壯觀、人をして茫然として停立せしむるに足る。墨田川に數倍する松花江は結氷して、多くの船舶を氷藏し、夏は洋々たる紺碧の流に、露西亞女が無數に泳いで人魚よりも美しく、豐麗にして發達せる曲線美は、草色の遠く連なりて、藍色を染めなす空を背景とする畫趣の中心をなす。

◉哈爾賓の銀ブラはキタイスカヤを逍遙するにあり。日本人の巨頭、そのうちに唯だ松浦商會あり。その五層樓に登れば、全市を大觀すべし。支配人三上北斗、多年、モスクワに往來し、商賣は露人を顧客とし、露語を操つること邦語の如し。キタイスカヤの市街の美觀は必ずしも人を驚かすに足らずといへども、その構造の頑丈にして沈靜なる室内の色彩の濃厚にして強烈なるとは、自から露西亞趣味を表現し、露西亞女と露西亞料理とに協調す。

◉露奉協定は則ち滿洲に於ける露西亞の復活なり。紅旗、光を放ち、略侵主義の傳統的精神、悉く鋒鋩を暴露す。哈爾賓を中心とする北滿一帶を露西亞が占有せざるべからずといふクロパ

トヤン以來の高潮は、事實に現はれて、哈爾賓の光芒今より刻刻に變化するならん。

其廿八

◉趣味の滿洲、容易に語り盡さず。吾輩、既に、現在に於ける地上の大半を說く。地史、地殼の趣味、また說くべきもの無くんばあらず。黃土を第一なりとす。漠然たる神秘の上古に當り、地殼、漸く冷却し、無數の氷河、廣大なる山谷を下るに際し、岩石を磨削して、これを粉碎し、細末となす、恰も谷を以て藥研に擬するかと見ゆ。既にして地球の表面に渦卷く大風、歐亞の中部に起り、此の粉末を、遠く四方に飛散す。その分布の廣くして、また尤も厚きは支那の黃土（Löss）なり。

◉黃土は支那及滿蒙に分布し、塞外には則ち蒙古に多し。蒙古沙の風塵は則ち黃土なり。杜甫の詩に、屢々霾の字を用うるもの則ち是なり。日本の火山に、皆、火山灰といひ、阿蘇山のみ火山灰をよなといひ、霾と書す。南下して遼東半島に到れば、唯山かげなどに堆積するを見る。風に吹きつけられたるなり。

◉支那人古來、黃を貴ぶ。地に黃土あり、河に黃河あり。支那の創世紀の基調をなすものは、此の黃土たりしや疑なし。黃袍、黃瓦は王權を表現す。支那史の最初の元首は黃帝なり。遠は尊黃の由來を趣味に隨せるものあるは奇想なり。支那人、遊牧より農耕に移る時黃土を崇拜したるべし。黃を貴ぶは生活の實際に起源するなり。

◉日本に得難くして、滿洲に、必ずしも珍とせざる三葉蟲（Trilobite）は關東州、三十里堡、復縣の娘々廟、及び煙臺炭坑にも得る。撫順炭田の頁岩には、新生代、第三紀の淡水魚を藏す。植物の化石には、撫順炭坑の新生代、第三紀の樒、及び本溪湖炭坑の古生代、二疊石炭紀の鱗木あり。長春附近の陶家屯炭坑産の、中生代、珠羅紀の公孫樹あり。

◉普蘭店の東北、一里許、泥炭の産地より約三百年前に埋沒したる蓮實を得るは、殊に奇とすべきものあり。水に浸せば、芽を生じ、小さき花を開く。風情、尤も可憐なれども、高く成長することなく、壽も亦た短かし。此の蓮實や、清朝の創建以前に開落して、久しく土中に、その精華を埋藏して、今に至つて春風を忘れざるものなるべし。

◉龍は、藝術的象徴とばかり思ふ可らず。亞米利加の學術探險隊は、外蒙古の沙漠に、龍骨及び龍卵を發見し、恐龍の卵なりと稱す。龍は、支那人の有史以前に、地上に生活したりしや。此の龍卵は、普蘭店の蓮實の如くに、風雲に際會せば、乃ち孵化するを得べきか。

●人間以前、滿蒙の野に生々、繁榮したりし生物、多く、その殘骸を存せずといへども、地中に發見する古生物は、以て、大陸の前世紀を想見するを得べく、その精者は則ち龍なりしを知る。茫漠たる、興安嶺よりゴビの大沙漠に至るの大世界は、これ等の怪物の跳梁するに任かせたり。流星の光、風沙の聲、凄涼たる天地なりしかな。

●外蒙古、興安嶺の麓、ウジユムチンの小丘に發見されたる大隕鐵は長二尺四寸二分、幅八寸一分、高七寸にして、重量は十八貫を超え、世界的の大隕鐵とす。その餘、大隕鐵なほ少からず。

●龍紋岩（Ieryptozone Limestone）は大理石の、殊に美麗なる渦卷を印するもの、龍紋の名、眞に空しからず。金州、及び三十里堡に産す。これを建築の裝飾とし、或は浴槽に用ふるに、身は飛雲鄕にあるが如し。滿洲の岩石の尤も美的なるものなり。

●滿洲には地震なし。唯だ風沙あり。煉瓦を積み上げたるばかりの建築も極めて安全なり。地を動かす地震なく、世を搖かす革命は屢あり。俗謠に「奉天の空飛ぶ沙風が金銀なれば、喇嘛塔のほとりに咲く花を、みんな買しめ、庭に植えて、あの花散るまで眺めたい」といへるは、大陸の情想を表現せるものなり。

●鄭家屯に大紅樓あり、奉天に大白樓あり。ともに支那人の感嘆するところなり。大紅樓は當年の鄭家屯ホテル、此の紅煉瓦なき僻地に、突兀として聳えしもの、今や、巨廈、續出して復た人を驚かさず。大白樓は朝鮮銀行、奉天の大廣場を俯瞰し、滿洲の中原に峙つ石造の白館ならずんばあらず。

●幾年ならずして、奉天の大廣場に、大旅館、奉天のヤマト、ホテルを現出せしむべき計畫あり。願はくは、雲影、龍影の錯綜する龍紋岩を以て、その壁を飾り、その卓を作れ。支那人、乃ち驚いて、大紅樓、大白樓以上となし、直ちに、これを目するに、飛雲閣或は龍樓、を以てするならん。

其廿九

●哈爾賓より車程廿六時間、露支國境に滿洲里あり。日本の領事館を置く。在留の日本人百廿名、そのうち外務、陸軍關係を除き、七八十名の中、賣笑婦は三十人ありと稱す。福島中佐、西比利亞を單騎、縱斷せしき、一の日本人に逢はず、唯だ數名の日本婦人を見たりといふ。今より三十餘年前、日本婦人、大陸を股に掛けて横行したること此の如し。今日、滿洲里に、意外に多くの日本婦人を見るは、固より驚くに足らず。

◉南に、北に、日本婦人、屢、男子に先んじて、遠く異域に闖入す。生活の脅威に駆られて、深林に遁るゝ栗鼠の如くに、隠れ行く。これを目するに探險、遠征を以てす可らずといへども、本國を離るること數千里にして東西を辨ぜず、望郷病に罹らず。死して祀られざるを悔ひず、一個の土饅頭の下に、一塊の骨肉を留め、やがて大平原の一撮の土となり了るを覺悟す。生死は念頭になし。その日〳〵の享樂に生くるものは彼等なり。

◉革命前、露人の全盛時、彼等は多く潮汐に進出したるも、革命後の勞農政府は、公娼を禁ずるを以て、驅逐せられて四散し、興安嶺の南北にも漂泊し、行き盡くして、滿洲里に滯る。日本官憲の取締の嚴なるを以て、羽翼を伸ばすを得ず。

◉當時、露國の兵士は、金多し、娼婦の前に、財嚢より金銀を攫み出して、小遣の要るほど取れと云ふ。日本の兵士には、此の金離（カネバナ）れあるを得ず、支那人は捨てゝ顧みられざりしも、革命後、露人の勢力、衰ふるに及び、漸く、花街にも覇を稱し來る。支那人は突如として登樓することなし、概ね、二回、三回、冷觀せざるはなし、茶、烟草を供し、或は熱湯に浸たせるタオルを供すること、支那の平康里の如くすれば、その後、必らず登樓す、朝に碧眼を迎へ、夕に辮髮を送る。櫻花園の客が、故郷を説くを聞くを以て、却つて煩に堪えずと爲す。

◉彼等の心は未だ全く枯れたるに非るなり。風のまに〳〵吹き送らるゝ蝶の如し、風に逆つて運命を開拓するを得ず、渾べて自由なし、故郷を語るは、神經を刺激するを恐るゝなり。若し故郷病に罹らば、望郷臺なし、彼等は生に堪へざるべし、興安嶺の北、萬里の邊境に於ける此の「小さき人肉の市」必ずや小説家の筆に上るべき詩境、少しとせざるべし、

◉滿洲里の日本人、未だ商業の多く言ふべきものあらず。旭洋行は食料と雜貨とを賣る。その外、藥舗あり、豆腐屋あり、斬髮屋あり。旅館も一つあり。尤も多きは料理屋にして一區をなす。吾輩一行、停車場を出でて、故らに、徒歩して、夕陽に、邊境の都邑を視察す。計らずも日本人の床屋を認め、入つて道を問へば、エプロンを掛けたる主婦、閾を排して出で、懇ろに指示す。

◉滿洲里は、日本人の住居する東亞の最北の町なり。吾輩、此の感激的の都に二三日の逗留を試みるを得ざりしを遺憾とす。僅に一宿して則ち去る。朝、領事館に田中領事を訪ひ、小時、話す、歸路の寢臺券、既に掌中にあり。日程を變更するを得ず。

◉邊寒の物價、牛肉一斤僅に九錢、而して日本の豆腐は却つて十錢を値す。此の一事、以て滿洲里を想像すべし、近來、不景

氣、豆腐は極めて贅澤とせらる。羊一頭二十圓、これを滿洲に比すれば、半價に値せず。

◉滿洲里行一氣に往來し、海拉爾にも、齊々哈爾にも停らず。齊々哈爾は黑龍江省の府にして、將軍吳俊陞の居るところなり。此の行、專ら雪の興安嶺を見る。

◉大連より滿洲里に至る四日間の汽車程、その間、多種多樣の紛々たる興味、すべて此の偉大なる風景のうちに純化され、溶解し去る。知名なる畫家にして、再び此の鐵道を經過して、興安嶺を知らずして過ぎし者あり。憶ふに、靑草の長ずるとき、見て以て「翡翠の陸の海」に蒼波の起伏する邱陵となせしならん。乾坤一白、銀世界のとき、唯だ是れ、果てしもなき銀の海なり。

◉回想すれば、滿洲の生活趣味は關西の延長なり。大連は、關門海峽の都市を煉瓦町としたるに過ぎず。原敬の政策、行政上の滿洲をして內地の延長たらしめたるに止まらず、萬事、內地の延長を想はしむ。黑龍江に合流する牡丹江が、半里の間、煉江を劃して流れ行くが如く、滿鐵の鐵道地帶に於ける內地味が、一條の眞田紐の如くに、大平原に橫たはるを見るのみ。

◉滿洲の川、澄めるものなし。唯だ一の牡丹江あり。源頭、深林あり、水澄みて鏡の如し。水に眞珠を生ず。此の水、引いて水田を造るべし。

◉日本人、大陸に來る者、皆、旦那たり。大工、左官は支那人を以て下職とし、水田の耕作には朝鮮人を用ゐ、仲夫は悉く支那人。大陸の勞働者に日本人無し。豆腐屋といへども、支那人をして擔がしめ、己は則ち洋服を着けて、その後より行く。

◉支那人は不景氣を知らず、日本人の經濟は頗る振はず。支那人の勤勉、努力は外國人を驚かすに足る。日本街の市價、高きこと本國に讓らず。支那街は萬價すべて賤なり。水の低きに就くと同じく、金銀は、すべて薄利多賣の支那街に注ぐ。

◉支那の大陸に來らば、その生活は、支那化するを得策とせず。日本人の生活趣味は餘りに純なり。譬へば極めて純なる油の如し、これを外國の水に混ずるも、渾和することなし。大陸に於ける日本人の高價なる生活は、經濟戰に於ける日本人の戰鬪力を殺ぐにあらずや。

其三十

◉今より五十年前、露國の有名なる旅行家、ブルジユワリスキーは東方より歸り戲言していはく、支那を征服するには、露國の一大隊を以てし足ると。これ大西鄉の部下が、朝鮮半島を確保するには、吾が一大隊を以て足れりと豪語せるに比して、遙

に、大膽にして傲慢なる宣言といふべし。然れども、近世、露國が支那と九千哩の國境を接觸せる以來、支那に對する露國人の抱負は、かくの如くならずんばあらざりし。

◉然るに、露國の南下に對する支那の自覺は從來の禁を解いて外蒙古及び興安嶺の方面に漢人の移住を許し、且つ極力、これを奬勵するの政策を執れり。革命後の支那も亦た續いてかくの如し。これを以て、滿洲人のみの滿洲及び蒙古に、最近半世記の間支那人移住の勢、滔々として堤防を決するが如く、今に至つて、ます〳〵汎濫、横溢しつつあり。

◉滿洲及び蒙古の天地に、外蒙古を除くの外、到るところ、忽ち漢人を見るべし。滿洲人、蒙古人は注意して發見するを要す。人口のみを以て言へば、山東の移住民尤も多し。滿洲は山東人の天下なり。軍閥は奉天省にして、民衆は山東人なり。山東人の大部は勞働者なり。或は雁燕の如く往來し、或は樹木の如く土着して繁榮す。

◉近世に於ける露支の交渉の大勢は、玆に概述するを要せず。今より廿五年前、一八九九年、ヘーグに始めて、萬國平和會議開かれ、その首唱者が露國皇帝なるは、世人を驚かせり。當時或は露國皇帝の眞意を疑ひし者少からず。蓋し戰國の勢、或國を敢たんとすれば、必らず一面に平和を高唱す。この間、露國が、種々の方法を以て西比利亞鐵道に於ける外國旅行者を制限したるは、西比利亞に於ける露國の兵力東漸の眞相を暴露するを嫌ひしなり。

◉萬國平和會議は、事實に於て、萬國の一詐、歐洲の列國を意味す。西方列國の軍備を緩くせしめ、以て、露國は專ら東方の經營に、全力を注がんとしたるなり。クロパトキンは曰く、亞細亞より歐羅巴に進出せんとしたる巨大なる民族の移住は、滿潮時に於ける大洋の波の如くにして、一波起れば一波次いで、これを追ひ、第一波は衝突進するのみなりしが、やがてまた、此の大波瀾は、干潮の如くに、東方に向つて退き去りたり。狂瀾を支へて、歐洲を保持したるは、吾がスラヴ族の大功にして尙ほ現在、將來に於ける黃禍を防禦するは、吾が露國人の天職なりと。

◉彼、クロパトキンは、黃禍の一語を標出して、歐洲列國の同情を喚起するに力むるものあり。黃禍に注意したるは、さすがに獨逸皇帝のみたり。その餘の列國、未だ此に思ひ到らず、廿世紀の劈頭に於ける黃白人の衝突、則ち日露戰が露國人の敗北に歸せるは、白人却つて黃人を助けたるものあるが爲なり。米國が日本に同情したるは怪むに足らず。何となれば、米國は早晩、歐洲列強の共同の敵たる事は、いふなり。殊だ英國が日本を

掠けたるは、歐洲の自衞上より見て奇怪とするに足ると。かくの如きは、豈、その侵略を飾るの雄辯たるものにあらずや。

◉彼得大帝以後、アレキサンダー三世が西にバトーム無税港を設して、英國を驚かし、東に西比利亞鐵道の大計畫を建てたるを以て、宇內統一を理想とする大帝の傳統的精神の表現の、殊に雄なるものとし、これに次いで、クロパトキンの東方經營の主張とす。而して、その南下の精神を說明するの、尤も大膽にして雄辯なるものは、クロパトキンを第一とし、眼中、支那なく、日本なく、極めて傍若無人なり。

◉最近の奉直戰に、張作霖が奉天を出でざるは、北方よりする赤露の壓迫に依るとすべし。山海關の戰爭起るや、露國は、國境に兵力を集注し、兵士を汽車に隱くし、枚を銜んで續々として南下す。奉直戰に際し、滿蒙に爲すあらんとするの意、知るべきなり。

◉日露戰後、直ちに、滿洲鐵道を歐羅巴、及び亞米利加の共同保護の下に置かんとせし米國の提言は、則ち黃禍問題を世界的に解決せんとしたる第一歩なりといふは、クロパトキンの說にして、滿洲の野に於ける日露戰爭は、唯だ前衞の衝突たるに過ぎざるのみなりといへり。今、クロパトキンの世にあらず。然れども露國の政治家の血管を流るゝ南下の傳統的精神は衰へず。抑、商人としての露國人は、寛大、無邪氣、鈍重にして親愛すべし、その政治及び政治家は然らず。

◉日清戰後、支那人の覺醒が急に進みたるはいふまでもなし。日露戰爭に於て、支那人が、露國人必ずしも勝つ可からざるに非るを自覺したるも亦明らかなり。支那人が北方防禦の勇氣を加へたるは、これが爲にして、この事、必ずしも露國人を待たずして知るべし。

◉歐洲列國に年々增加する莫大の人口は、半ば工業に由つて生活しつゝあり、而してその安全なる工場地帶を求むれば、歐洲外の東亞大陸に於けるを急とすといふは、クロパトキンが、その南下說を潤飾する所以にして、主眼は、自國の利益にあり。彼は露國の通商及び人口調節の大策に本づき、滿蒙を、その勢力の下に置く外なしといへり。これ露國に於ける傳統的南下策の本音ならずんばあらず。而して歐米列國が、東亞大陸に凝視しつゝあるも亦た事實なり。

◉此に於て、滿蒙に於ける日本の立場は、まさしく露國と正面衝突を爲すものにして、同時に列國とも、その利益を共にすべく、而して從來、二大戰爭の結果、再び滿洲を占領し、此に樹立せる日本の優越權は、これを確保せざる可らず。一面に見れば、支那人、また此の大平原を以て、自國の版圖に於ける植民

地と爲し、駸々として移住、修築を進めつゝあり。

●茫々として千里にひろがる滿蒙の大平原、趣味眼に映ずるもの、容易に說き盡す可らず。誠に日本の植民地にして、海外の新日本ならずんばあらず。日本人は進んで、これを見、その趣味と、及び、民族進展の途に横たはる此の大平原を考察せよ。日、支、露三大民族の暗闘、及び此に土着する支那人を基調としての、日本人の關係、支那に勢力を扶植しつゝある米國人の努力、その他、英佛、諸外國人の通商的、信仰的の活動、おほよそ、是等の勢力の施展が、此の無限の大平原に渦卷きつゝある大光景を見よ。

趣味の滿洲は何程說くべきもの頗る多し　今、唯だ、その大概を擧ぐ。大連、奉天、哈爾賓は、逗留、稍久しく別にいふべきものあり、此の際、滿鐵を始め、新舊相知諸友の援助を辱くすること少からず、一々列擧せず、此に記して感謝を表す。

十月二十九日　黒頭巾再記

圓山應擧

——本朝畫人傳の六——

村松梢風

一

寶暦といふ年號の頃だつた。

京都四條通道場の金蓮寺といふ寺の境内に、さゝやかな借家をして、細い煙を立てゝゐる年の若い畫工があつた。畫工は、本名を圓山岩次郎と云つて、本國は丹波國桑田郡穴太村だが、數年前、それは彼が十七歳の時で、寛延二年といふ年だつた。それまでは田舍で全く我流で繪を描いてゐたが、本統の繪師にならうといふには矢張り立派な先生に就かなければいけないといふので、其の年のこと、兩親も共々故郷を引き拂つてこの京

都へ出て來て、狩野派の畫師石田幽汀の門に入つて、斯の道の研究にいそしむことになつたのだつた。

彼の父は藤左衛門と云つて、其の家は代々農家だつた。家道は近年傾いて極く貧しかつたけれども、苗字を名乘ることを許され家柄は勝れてゐた。藤左衛門の妻は、篠山侯の家臣で木下某といふ儒者の娘だつた。藤左衛門に嫁して、享保十八年癸丑五月朔日に一子を生んだ。それが岩次郎だつた。

岩次郎は、後年畫師を志すくらゐだから、小兒の時から繪事が好きだつた。兒童の遊に加はらず紙と筆とを持つて繪を描いて娯んでゐるといふ風だつた。もし識者が觀たならば其の筆には驚くべき天才の萌芽が認められたかも知れなかつたが、彼の兩親はそれには氣が付かなかつたらしかつた。假りに少しは氣が付いたとしても、それで我が子を畫師に仕立てようと考へるまでには立ち至らなかつたといふのも無理はないことだつた。兩親は矢張り此の子を農業に從事させるつもりだつた。で少し成人すると夫婦は其の子を田や畑へ伴れて行つて農事を教へやうとしたけれども、岩次郎は一向其の仕事には身を入れる樣子がなかつた。何時の間にか家へ逃げて歸つて來て、そして繪を描いてゐるのだつた。藤左衛門夫婦も一人息子の事だから別段其の行末を案じ出した。そこで或る時藤左衛門は村内の臨濟宗の金剛寺といふのは菩提寺でもあり其の住職とは懇意でもあるので、寺へ行つて和尚に會つて忰のことを相談すると

「さういふ事ならとにかく息子さんを寺へ寄越して置いて見てはどうか、私が教へて遣つて直るものなら直して上げようし若し直らぬものならいつそ今のうちに出家得道させてしまふ方が善かも知れぬと思ふが」

と和尚は云ふので、岩次郎を金剛寺へ預けることにした。だが寺へ預けられても岩次郎の畫癖は改まらなかつた。隙きを見ては何かへ繪を描くのだつた。けれども此の寺の和尚も矢張り藝術に就いては少しも理解を有つてゐない人だつたので、岩次郎が小兒のうちから繪に凝るのを見て普通の子供が惡戯に耽るよりも一層困つた事のやうに考へてゐた。そこで藤左衛門と相談して、いよ／＼出家させようとしたところが、岩次郎は驚いて、寺を逃げ出して自分の家へ歸つてしまつた。岩次郎は十二歳だつた。

藤左衛門は仕方がないので其の後は放任して子供のするが儘にして置いた。岩次郎はます／＼繪に熱中して行くのだつた。併し此の土地には師匠がないので、彼は何でもよそにある繪を見ては眞似て見たり、鳥類だの動物だの草花だの、さうした物は實物を手本にして描いて見るのだつた。勿論子供の岩次郎は

さうして自分が繪を描くことに就いては、ただ好きで描き度いから描くといふだけのことで、何の意圖も有つてはゐなかつた。世の中には畫師といふものがあつて、それが職業的に存在してゐるといふことすらも子供心にはよくは分つてゐなかつた。併し、追ひ〳〵齡が長ずるに從つて、さういふ事も分つて來ると、彼はどうでも繪師になりたかつた。父親に向つて其の希望をのべると、藤左衛門は暗い顏をして、我子の顏を眺めるのだつた。彼も今では悴を百姓にしやうといふことは全く諦めてゐた。むしろ進んで悴の希望を成就させて遣り度い位に思つてゐた。が如何せん資力が無い。岩次郎を都へ出して良い先生につかせるにしてもそれには金が要る。藤左衛門の身分では其の金の工夫は付かないのだつた。彼は熱心な我が子の希望をいつまでも聞き流しにしてゐた。

併し岩次郎は相變らず我流で畫を描いてゐた。近頃では誰れが見ても感心するやうな繪を描くやうになつて來た。そして其の狹い地方では此の子供の描く畫は可成り有名な物の一つになつてゐた。岩次郎が來ると、人々は紙を與へて畫を描かせた。鎮守の宮の祭禮だの盆の灯祭りの地口行燈の繪だの、さうした時は岩次郎が出掛けて行つて筆を揮つた。そして此の年のいふ [illegible]

のない輕蔑とを受け乍ら、草深い片田舍の生活の中に一點の色彩を投じつゝ大きくなつて行くのだつた。

或る時岩次郎は近くの町へ遊びに行つた。すると或る家で彼を呼び留めた。それは其の町で白粉だの燕脂だの賣つてゐる小間物屋のやうな店だつた。

「お前さんは穴太村の藤左衛門さんとこの息子さんだね」

と其の家の主人は柔和な顏を見せて云つた。岩次郎が「さうだ」と答へると

「一つ繪を描いて吳れないかね、お前さんが見えたら賴もうと思つてゐた處なんだ」

と云つて主人は、白粉の包紙を澤山それへ持つて來た。

「どんな物を描くのです」

「さうさね、數が多いからあつさりした繪でいゝんだが、松なぞはどうだらう」

「じや松を描きませう」

岩次郎は店先へ上り込んで、自分で繪具を溶いて描き始めた。松の繪を二三枚描いてゐるうちに一寸うつりのいゝ構圖を思ひ付いた。これは綠の繪具と墨だけで描いた雌松の圖だつ [illegible]

主人も感心して側で見てゐたが、家内の者たちの評判になつた繪
などを面白がつて眺めてゐた。するとと表を一人の武士が通り掛つたが　此の繪を見るとツカ〳〵と這入つて來て、土間へ立つたまゝ後ろの方から眺めてゐた。
「これこれ、一寸其の繪を見せてくれ」
一枚描いてしまつた時武士は云つた。主人は漸く氣がついて、
「これはどうも、存じませんで失禮いたしました、さあ何卒御覽下さいまし」と云つて描き上げた繪を武士の手に渡した。
「此の子は何處の者かな」
「へい、此の子は穴太村の藤左衞門といふ人の息子で――時に小僧さん、お前の名は何んと云ふんだつけ」
「岩次郎と申します」
「何歲ぢやな」
「十三で御座います」
「ほう、十三で是れだけ描くとは偉いもんぢや、して誰は何方に就いて稽古したのぢや」
「否え、誰にも敎はりは致しませぬ」
「獨學とはます〳〵以て感心ぢやな。御亭主、此の繪を一枚身共が貰つて行つてもよいか」
「へい〳〵[illegible]
武士は其の畫を懷中へ仕舞ひ込んで立ち去つた。其の武士は龜山侯の家臣だつた。翌日武士は君侯の御前へ出た時此の話をして、懷中から例の稚松の畫を出して御目に掛けた。
「成る程、圖樣と云ひ、彩色の具合と云ひ、小兒の筆とは思はれぬな、面白い繪ぢや、手許に納めて置くぞ」
と殿樣は云はれて、其の畫を手文庫の中へ仕舞はせたのだつた。けれども殿樣は直きに其の事は忘れてしまつたので、稚松の圖も何時となく反古と一緒に行方が知れずになつてしまつた。かうして岩次郞の描いた畫は、一度は領主の御目にまで留まつたのだつたけれども、それが動機となつて岩次郞の運命が開拓されるといふ處までは行かなかつた。岩次郞は依然たる村童だつた
岩次郞は諸方へ行つて繪を描いた。誰れでもそれが少年であるがゆへに興味を有つのだつた。段々其の評判が廣まつてしまひには可成り遠方から呼び迎へられて繪を描かされるやうなことがあつた。さういふ時には藤左衞門が附いて出掛けた。其の度ごとに多少の謝儀を貰つて歸るのが、一家の者の生活費にはならなくても、それを補ふだけのことはあつた。
岩次郞は十七歲になつた。其の頃になると彼は青年畫家として一層廣く田舍を廻つて步くやうになつた。其の年の春彼は但

馬國まで揮毫旅行をしに行つた。そして或る土地で畫を描いてゐると、其處へ立派な僧侶が來て、岩次郎の畫を見て

「お前さんは若いにしてはなか〳〵よく畫く、それに就いて、一度お前さんに見せ度い物があるから、わしと一緒に寺へ來て見なさらぬか」

と言つた。岩次郎は何んだか分らないが隨いて行くことにした。此の僧は、但馬國の名刹として知られてゐる大乘寺の住職密英上人だつた。上人は岩次郎を寺へ伴れて行くと、其の寺に秘藏されてある處の數多の古名畫を陳列して、其の室へ岩次郎を伴つて行つて、

「さあ、爰にある澤山の畫を見なさるがよい」と言つた。

岩次郎は駭いてしまつた。それは彼がいまだ嘗て想像したこともないやうな名畫ばかりだつた。彼の魂は其の一つ〳〵の畫の中に吸ひ寄せられるのだつた。彼は可成り永い間茫然として其處に立ち盡してしまつたが、やがて何とも云ひ難い羞かしさが心の中に湧き起つて來た。

「是れが本當の畫といふものだ」

と岩次郎は感激に燃ゆる眼で眺め乍ら思つた。勝れた藝術家の威力がピシ〳〵と岩次郎を鞭うつのだつた。悔恨と羞恥の情が彼の全身を冷たくした。

「どうぢやな、かういふ畫を見たらどんな氣持がしたかな」

と上人が穩やかな聲で云つた。岩次郎は悲しくなつて、疊の上に兩手を突き、頭を下げて、恰も罪を犯した人間が悔ゐあらためた時のやうに、さめ〳〵と涙を流して泣いてゐた。

「和尚樣、何卒御免し下さりませ。私はもう決して繪を描くことは致しせぬ」

「はて妙な事を云ふ人ぢや、何故畫を描くことを廢すと云ふのぢや」

「でも私は恐ろしくなりました。私などが畫を描いては罰が中りさうに思はれます」

「はゝゝゝ、そなたは矢張り子供ぢやな、これ、よく聽きなされ、此處に掛けてある畫は皆、唐土や日本で名高い繪師の描いた物ばかりぢや、併し此の繪師たちとても神ではない、皆最初はそなたの描くやうな拙い畫を描いてゐた人達ぢや、それが難行苦行して畫の修業をしたに依つて、最後には名人になつたのぢや、そなたも力を落さず、此の人達に劣らぬ程の立派な繪師にならうと心掛けたらどうぢや」

「畫の修業をするには、どういふ事にすれば宜いかお敎へ下さりませ」

「先づ良い師に就くのが第一ぢやの。唐土では、畫といふ物が

幾千年の昔からあつた。日本でも、今から千年餘り前、奈良に都のあつた頃からすでに立派な畫があつた。それから今日までの間に、數知れぬ澤山の畫師が現はれて、おの／＼畫の道といふものを開いたのぢや。そこで、是れから畫を學ばふとする者は、先の人が開いて與れた道を尋ねて進まなければいけない、自分勝手に道も無い處を幾ら歩いて見ても、目的の地へ到れぬのぢや、其の道を敎へてくれるのが師である、されば良い師に就いて學ばねばならぬと申すのぢや」

「お言葉はよう解りまして御座います、私も良い先生の處へ參つて敎へて頂き度いと思ふて居りまするが、家が貧しくてそれが出來ぬので御座います」

それから岩次郎は問はれるがまゝに是れまでの自身の生ひ立ちを上人に物語つた。上人は、此の少年が生れながらにして有つてゐる畏るべき畫才を十分認めてゐたので、其の前途に多大の興味を持つたのだつた。

「それではわしが、そなたの修業に要る金を貢いで遣らうから、一日も早く都へ出るがよい、師もわしが世話して遣らう」

と上人は云つた。岩次郎は天へも昇るやうに喜んだ。此の話は間もなく實現されて岩次郎は京都へ出て、石川幽汀の門に入ることになつたのだつた。彼の兩親も年老いて一人息子と離れて暮すことは出來ないところから、僅かばかり殘つてゐる田や家財を賣り拂つて伜と一緒に故郷を出たのだつた。

二

其の時代は將軍家重の治世だつた。元祿享保の二大隆盛期を通過したところの、其の時代の社會各方面の文化は、まさに爛熟の域を通り越して頽廢期に入つてゐた、これを繪畫界のみに徵して見ると、依然として勢力を擁つてゐる狩野、住吉、土佐などの諸流は、今や形式に流れて古法を墨守するのほかに何等新生命が見出されなかつた。狩野派は探幽出でて將軍の繪所となり曠世の才を以つて國内の畫界を統一し、筆を揮ふこと六十餘年、一代の畫風を創定して此の方、尙信常信の巨匠が相繼いで出現したので、諸侯の畫師は悉く其の派の人々を以て充たされるに至つて、畫界の實權は完全に狩野派の手に歸してしまつた。併し、狩野派は探幽に於て既に完成されてゐたので、尙信常信の後を享けて出たものには、最早進むべき餘地が殘されてゐなかつた。加ふるに其の地位は甚だ安全な立場に置かれてゐるために、進取的氣魄を失ひ、形式に拘泥し、徒らに父祖傳來の粉本を祖述するのほかに能力になくなつてゐた。

土佐家は日本に於ける最も古い家柄であつた。遠祖を土佐掾

光に發し、遠く平安朝末期より其の流れを傳へてゐる。足利の末亂世に相遇して其の嫡流は斷絶したが、德川の初世に及んでから狩野探幽より稍遲れて土佐光起が生れ、京都に住つて家風の畫を描き、從五位下左近將監に叙せられて禁裏の繪所を預るに至り、土佐の家名を再興した。光起の子の光成父の畫風を學んで拙からず、代々京都に住んで繪所を預つてゐたが、狩野家に壓せられて年を經るに從つて活氣なく、たゞ光起の餘光によつて家を立つるばかりの有樣だつた。住吉家は土佐の支流で、江戸に出て狩野家と相竝んで將軍に仕へ、勢力土佐の本家を凌いだ。其の祖は住吉内記廣道（如慶）に出て、子廣住（具慶）に傳へ、父子相繼いで名家の聲を得たが、其の子孫は萎靡して少しも振はなかつた。

寛永の頃、岩佐又兵衞が現はれて浮世繪を創め、京都では、本阿彌光悦が、刀劍の鑑定、磨礪を本業として、洛北鷹が峰に大虚庵を結んで、餘暇を以て書畫兩道に筆を揮つて光悦流の元を開いた。降つて元祿に至ると、江戸では英一蝶が出て、狩野派より一變して町繪を廣めた。京都では其の時尾形光琳が出て、光悦の流れを汲んで新に光琳風の一派を開いた。浮世繪は菱川師宣に依つて正風を拓き、其の後は諸流に岐れて發達を遂げたが、此の一派は何れも平民階級の鑑賞を博するに留まり、畫壇に於ける勢力地位は極めて低かつたので、未だ以て他派と拮抗するだけの力はなかつた。光琳の後は、弟乾山が兄の畫風を陶器に應用し、門人渡邊始興、立林何帛等が師の風を維持したが遂に其の風も衰へて、後年京都の伊藤若冲が是れを學び、諸流を折衷して一家を成すにとゞまつてゐた。

あらゆる流派が今は往く處まで往き盡したかの觀があつた。局面轉回の機運は次に來るべき時代の産物だつた。此の時に當つて、舊習を打破し、繪畫の上に一生面を開くべき役目をつとめ得るものは、長崎流傳の寫生畫と、南宗文人畫をのぞいては他にはなかつた。

寫生畫は、享保年間清人沈南蘋の長崎渡來に依つて初て日本に流傳された。沈氏名は詮、字は衡齋、南蘋と號す。清の吳興の人で、丹青の技に長じ、好んで花卉鳥獸を描き、本國で既に名を成してゐた。筆法精緻纖毛の細を盡し、賦色濃艷を極め、宛ら實物に接するが如くで、而も能く神を傳ふるのであつた。南蘋が日本へ來たのは、長崎奉行の招聘に依つたので、享保十六年十二月に來り、同十八年九月歸國した。

沈南蘋の畫は概ね沒骨描法を用ゐて、それは宋代花鳥の大家黃筌父子の風を祖述して、更に寫生の新意を附加したものと云はれてゐる。彼は性雅澹で、金があれば直ちに散じて人を扶

けるのが好きであつた。それが爲めに、日本へ來てゐる間も常に行李が空しくなつた。

南蘋の風を受けて初て我國に一派を立てたのは熊代熊斐であつた。熊斐は通稱彦之亟、其の家は代々長崎の唐通事を務めてゐたが、沈南蘋が來ると就て學んだ。南蘋は彼の技能を愛し、盡く畫法の秘蘊を傾けて遺すところがなかつたので、熊斐はよく着色の花卉翎毛を寫して、更に師法の外に出るところがあつた。就中虎と墨竹は彼の尤も得意とするところだつた。彼は性任俠を好み、權力と金力の前にはことさらに屈せず、また膽力があつた。或年幕府から熊斐に向つて虎を畫いて上るやうに命じて來た。其の時たま〳〵海外から虎を船載して來たので、熊斐は其の檻の側へ行つて寫生しやうと思つたところが、虎は靜かに臥してゐてその活動の態を見ることが出來なかつた。そこで竹竿を以て突くと、虎は忽ち震怒して、頭を上げ毛を立てゝ咆哮した。人々は怖れて逃げ去つてしまつた、が熊斐は獨り從容として筆を持つてそれを寫生して歸つた。

南蘋の寫生畫はこれより廣まつて、熊斐の子に繡山、繡游、翊に江越繡浦があり、何れも南蘋風を描いた。門人からは眞村蘆江、僧鶴亭、月湖、林君棻等が出た。君棻は江戶に住み、南蘋派を京畿の間に行つたのは鶴亭がはじめであつた。また有名な建部綾足も、長崎へ來て熊斐に就いて畫を學んだのだつた。

綾足は畸人だつた。彼は字は孟喬、凌岱或は吸露庵寒葉齋等と號した。畫のほかに國學を加茂眞淵に學び、小說を作り、俳諧をよくし、また片歌を唱へた。彼は奧州の士人の子であつたが、少年の時故あつて故鄕を出て、京都東福寺に入つて僧となつた。而して喝首座に上つた。彼は俳諧を好み、加賀の人几隱に就て學んだが、或時几隱が「僧として此の技に耽ることの甚だしいのは餘り褒めた事ではない」と云つたので、彼は大に怒つて、やがて寺を出て伊勢に行き乙由に學んだ。さうして伊勢派を唱へたが、遂に還俗して江戶に來て、淺草雷門の前に住ひ俳諧を以て業とし、涼袋と號した。雷門の風神が巨きな袋を負ふてゐる像と相對してゐるところから、付けた號だつた。後に凌岱と改めた。それまで彼は正式に畫を學んだことはなかつたが、天性斯の道を好んで運筆甚だ自在だつた。そこで、彼を愛してゐた或る大名が其の畫才を惜んで、三百金を與へて、長崎に至つて熊斐に就て畫を學ばしめた。併し凌岱は、其の金を以て吉原の遊女を請出して來て家に置いて、單身長崎に向つたが留る事六年、業成つて歸つた。大名は早速彼に命じて畫かしめたところが、其の畫は墨痕模糊として、何物とも見わけが付かなかつたので「何の圖であるか」と問ふと「是れは山の芋で御

座います」と答へた。大名は大に怒つて直ちに彼を追ひ拂つた。凌岱は南蘋を祖述して、更に別に一家を成した。其の門人に楫取魚彦があつた。

沈南蘋の寫生風は斯うして漸く諸國に傳播したが、それと同時に、當時支那に流行した文人畫、即ち水墨を主とし氣韻を重んずる南宗の一派もまた清客に依て傳へられた。支那人で寫生畫を描く者が來朝したことは少なかつたが、文人畫を描く者は前後に澤山來往した。其の初めで而も尤も筆格の正しかつたのが伊孚九であつた。伊孚九、名は海、號は數種あつたが、字を以て行はれた。南蘋と同じ清の呉興の人、貿易に從事し、享保五年二月初て日本へ來たが、其の後も度びく來往した。書畫共によくして、其の畫は蕭散淡泊であつて甚だ風韻に富んでゐた。

純粹の文人畫を日本に傳へたのは伊孚九を以て嚆矢となしたが、併し其の前にも、舶載の典籍を研究して南宗文人の畫を試み、畫道刷進の先鋒となつたものが無いではなかつた。それは祇南海、服南郭等のともからであつた。そもく支那に於て畫に南北の二派が生じたのは唐代に始り、北宗は李思訓を祖とし、南宗は王摩詰より創つてゐる。北宗は即ち院畫であつて、主として朝廷の畫院に仕ふる者の畫をいひ、南宗は即ち文人畫で、讀書講學の士が畫くところの畫をいふのであつた。後世此の二派が畫の二大流派を成し、各々名家を出して覇を爭つた。我國の東山時代の繪畫は、此の北宗の中で多く禪寺に行はれた畫風をば傳へたものであつた。然るに北畫は帝室の厚遇を受けぬ爲め却つて逸樂偷安の風を生じ、金碧燦爛の畫を作つて俗眼に投ぜんことを求むるに至り、畫風甚だ卑俗に墮つた。それと反對に南宗からは明代に至つて文徵明、董其昌の如き詩文書畫に通達せる文人を輩出して、書畫一致を稱して書法を以て畫筆を行ひ、氣韻を主として形似を求めず、好んで水墨の山水蘭竹の類を描き所謂文人畫の體を拓いて天下を風靡するに至り、遂に北畫は萎靡して振はなくなつた。此の文人學士の畫を初て日本で試みたところの祇南海は、紀州藩の儒臣で、通稱を與一郎といひ、詩文をよくし、また書に巧であつた。畫を作つて甚だ氣韻に富んでゐた。服南郭は京都に生れ、名は元喬字は子遷、また芙蕖館と號し、通稱を小右衛門といひ、若年にして江戸に下つて物徂徠に漢學を受けて盛名があつた。物門の人々、經義は太宰春臺を推し、詩文は南郭を推すのであつた。畫號を周雪といひ、一度び大和郡山の柳澤家に仕へたが後致仕して風流韻事を事として終つた。同じ時代に彭城百川があつて、京都に住み、元明の古蹟を摸して其の風格を唱道した。以上の人々に續いて出た

ものが柳里恭であつた。

柳里恭は柳澤氏、名は里恭、字は公美、淇園、竹溪、玉桂等の號があつた。通稱は權太夫、郡山柳澤氏の一族で且つ其の老臣であつた。彼は性濶達洒落で、客を好み、訪ねて來る者があればこれを養つて才不能を問はなかつた。家祿も是れが爲めに常に乏しく、さま〲の逸話の持主となつたが、彼は文武兩道に長け、人の師たるに足るべき藝が十六あつたと云はれてゐる。殊に畫をよくし、好むところは設色の密畫であつた。其の趣は頗る元初の錢舜擧の畫を髣髴せしむるものがあつた。

かうして、寶暦の頃になると、先づ京都に文人畫が興つた、其の最も熱心なる研究者は池大雅であつた。大雅は、寶暦元年熊野に詣で、和歌山に至つて祇南海を訪ふた。其の時南海は秘藏せる清人繭尺木の畫譜を大雅に附與して「子この書を閲して須らく文人學士の畫を作れ」と云つた。大雅は大いに喜び、日夕手を放たず、其技これより大いに進むと傳へられてゐる。

社會の機運は、從來の狩野土佐の末流の畫に厭き、何物か新奇の物を求めて止まなかつた。文人畫の勃興も、寫生畫の傳播も、等しく沈滯萎靡せる局面を打破せんとするの運動である點に於ては異るところはなかつた。

即ち、丹波國の一寒村に生れた岡山岩次郎と呼ぶ村童が、繪畫に志を抱いて京都へ出て來た時勢は、さういふ時代であつたのだ。

三

岩次郎が師事した石田幽汀は、狩野派の畫家で、其の師は鶴澤探鯨であつた。京都の狩野派には、山樂を祖として京狩野と呼ばれた家と、探幽の門人鶴澤探山の後裔と二家あつた。然るに鶴澤家は探山以來名手を輩出させたので其の勢力は寧ろ狩野家の上にあつた。探山門下に山崎如流があり、如流の門下からは、勝山琢舟が出た。琢舟は名は章翰、法橋となり、のち畫風を變じて、土佐を學び春日繪所となつて子孫相襲いだ。探山の子が探鯨守美であつた。

幽汀は名は守直、法橋に敍せられた。濃彩緻密の畫を作り、それに光琳の風を加味してゐた。が、彼も時勢の影響を受けた一人で、晩年は餘程寫生の傾向を現はしてゐた。

岩次郎も、初めのほどは狩野正統の畫を學んでゐた。が、時代の潮流はいつまでも彼を其處に留めては置かなかつた。彼が影響されたのは云ふまでもなく南蘋の寫生畫であつた。併し、其處にも久しくは留まつて居られなかつた。彼はやがて支那の古蹟を研究し、明の仇英、唐寅等の畫風を喜んだが、就中元の

錢舜擧に私淑するに至つた。さうして數年ならずして獨立したのであつた。

彼は最初は洛陽山人關岩二の名で畫いたが、廿二三の頃から其の畫に閑一嘯としるした。併し彼の畫は賣れなかつた。修學の費は裕英上人の情に依つて續けられたが、獨立して見れば無論自力で生活しなくてはならないのだつた。その上彼には養はなければならない兩親がある。彼は其の生活の料を、漆器の下繪を畫いたり、仕入れ物の扇の繪を畫いたりして漸く得てゐた。

彼は非常な勉强家だつた。晝間は主に內職に時間を取られるので、夜間に自身の畫を描いた。が、寒中でも儉約して炭をたくといふことはなかつた。手足から全身まで凍えて筆が把れなくなつて來ると、彼は用意してある水風呂へ飛び込んで來て寒さを凌ぐのだつた。

其の時分の事、四條通の商人で中島勘兵衛といふ人があつたが、或時長崎の商人から和蘭眼鏡といふ物を買ひ込んだ。それは西洋の銅版畫が二十枚ばかり付てゐて、其の眼鏡で此の繪を覗いて見ると、ちやうど現今の寫眞のやうに見える。銅版畫のことを當時は俗に繡繪と云ひ、此の眼鏡を和蘭からくりと云つて、一時非常に流行したのだつた。處で、勘兵衛が、一つ此の繪を寫して見度いものだと思つて畫工を物色してゐたが、誰かから道場の金蓮寺の寺內に居る畫工は大層巧いといふ話を聞いて、一嘯のところへ賴みに來た。さうして描かせて見たところが、緻密精巧眞に驚くべき出來ばえだつたので、大いに喜んで、其の畫を版におこして世間へ賣り出したのだつた。

彼が西洋畫を研究するやうになつた動機はそんな事からだつた。

日本に西洋畫が輸入された初めは遠く室町時代からであつた。其の後天正の頃堺の貿易が開かれるに及んで、さまざまの西洋の事物が舶來して我國人の生活に多大の變化を與へた。基督敎の傳來に依つて宗敎畫が輸入され、西洋の畫が我國人の眼にしばしば觸れるやうになつた。日本人で西洋畫に名を得た最初の人は山田右衛門作であつた。右衛門作はもと有馬家の臣で、天草叛徒の一方の大將であつた、亂半ばにして歸順したので許されて江戸へ來たが、後再び切支丹に關係して終身禁錮の厄に遇つた。彼は純粹の油繪を描いたのだつた。切支丹嚴禁の結果輸入を禁止し、西洋の技術を學ぶ者も絕えてゐたが、元祿の頃には浮繪と稱する油繪が坊間に傳はり、八代將軍吉宗が西洋の科學の精緻を知つて宗敎に關はらざる圖書の輸入を許可して以來は、西洋學術の研究が漸く緒に就き、天文、地理、醫學等の

進歩を見たが、これより典籍に依つて西洋畫も輸入されるやうになつて來た。其の頃に當つて逸早く西洋畫に指を染めたのが風來山人平賀鳩溪だつた。天正以來中絶してゐた西洋の文明が再び輸入されるに及んで、あらゆる方面に、其の影響を具體化して見せたのが風來山人であつた。

鳩溪の後を受けて、純粹の油繪を描き、日本の洋畫家の眞の始祖となつたのが司馬江漢であつた。江漢は鳩溪と交つて其の影響を受け、長崎へ行つて油繪の法を學んだのだつた。

併し、江漢は、延享四年の出生だから、円一嘯即ち後年の圓山應擧に比べると十四歳の齢下である。だから圓一嘯が、和蘭からくりの畫を描いた頃は、江漢はまだ繪筆さへ持たぬ齢頃だつた。

圓山岩次郎は、飽く迄も寫生に立脚する自己の畫風を既に確立したのであつた。そして彼は、支那の沒骨寫生の畫によつてもまだ十分に滿足出來ない寫生の極意を、西洋の繪畫によつて教へられたのだつた。併し、彼はさうして多分に西洋畫の影響を受けはしたが、それは寫生の精神のみにとゞまつてゐた。描法や畫の風韻の上には些かも其の影を見なかつた。これは何處までも東洋個有の繪畫だつた。彼が最も尊崇して止まないものは錢舜擧であつた。錢舜擧は趙子昂と共に元初の人で、子昂も嘗て彼に從つて、畫法を尋ねたと云はれてゐる。人物山水をよくし、最も花鳥を工みにした。寫生を善くし、畫風穠緻清麗を極めて、明代花鳥畫の先蹤となつた。

岩次郎は、日本に傳來した錢舜擧の畫があれば必ずそれを臨摸した。卅歳頃になると、彼の舜擧の模作は原畫と見分けが付かないくらゐになつた。其の頃彼は圓氏、圓夏雲、仙嶺等の號を用ひてゐたが、卅四五歳の頃、錢舜擧の一字をとつて應擧と號した。

應擧の畫は既に大成したのだつた。彼は寫生を以て、旗幟を立て、直ちに天然造化を以て粉本となし、自由自在の筆を揮つて清新の畫を描いた。彼の名聲は嘖嘖として都鄙に藉くに至つた。其の頃から彼は四條高倉東立賣仲之町に門戸を張つた。

其の頃、三井寺圓滿院の門主大僧正祐常上人と云へるは、二條綱平公の二男で、月溪と號し、畫を好まれたが、應擧の畫を愛し、召して其の近習として、大いに寵遇された。應擧は其の寺の所藏になつてゐるところの數多の古畫を臨摸したのでますます技が進んだ。

彼は數年間圓滿院に仕へてゐた。そしてその間に數多の傑作を其處に遺したのだつた。

七難七福圖は其の中でも代表的の作だつた。これは祐常上人の命によつて畫いたもので、三卷の圖卷より成り、三年の日子

を費して明和五年に描き上げたものだつた。三卷の内二卷は七難の圖で、一卷が七福の圖である。そもそも七難七福とは、仁王經にある地震、洪水、火災、風難、鬼難、兵難、盜難、病難を七難とし、尊貴長壽より僕從財寶車馬米穀錢帛多く宮殿廣く莊嚴なるを七福とし、是れは敢て七と限らない。併し人は皆七難即滅七福即生と云つてゐる。應擧の難福圖卷は勿論七難に重きを置いたものであることは云ふまでもない。七福の方は、それを對照することに依つて七難の意義を一層深刻ならしめる爲のものであると見られる。卷首の地震の圖以下七難の光景は、一見慄然たらざるを得ない程陰慘凄愴を極めてゐる畫である。それは人間の生に對していかに酷たらしい運命が待ちもうけてゐるかといふことをハッキリと見せつけたものである。七難七福圖を觀る人は、それに依つて應擧の人生觀がどれ位まで現實に即してゐたかを知ることができる。と同時に、繪畫の領域が、現實を離れて想像架空の世界に馳らうとするのを、直接人間生活の上に引き戻した所の偉大な努力であることを認めるに違ひない。

寛政年中光格天皇が此の七難七福圖卷を叡覽ましまして、いたく御感賞あらせられ、勅して門外にいだすことを禁ぜられた。稱して出門禁止ノ畫といふのであつた。

明和四年には岸頭飛雁圖を畫き、同六年には山水の畫、童子遊戯圖等を畫き、八年には孔雀圖を畫き、安永元年には瀑布圖を畫いた。其の年の夏はことのほかの暑氣だつた。其の頃祐常上人は疾を得て褥に就いてゐたが、應擧に命じて是れを畫かせたのだつた。その圖は、巨巖怪石の間飛瀑轟轟の勢を起して落下するの狀を畫いたもので、一見膚に冷氣をおぼえしめるやうな想ひがあつた。法主は愛賞措かず庭前の松の樹に此の畫を懸けて日々眺められた。

應擧の畫名は今や天下に響き渡つた。知るも知らぬも其の名を稱へて、畫に志す者は翕然として其の門に集まつて來た。應擧の樣式は從來の日本畫にはたへて見なかつたところの新らしいものであつた。題材の取り方と、表現の方法と、二つながら從來と全く異つて、彼獨特のものとなつてゐた。斯うして、所謂圓山派の樣式は確立せられたのであつた。

四

安永六年の事、京都の呉服商が數人で相談して、大きな衝立を造つて、祇園八坂神社に奉納することになつて、應擧に揮毫を依賴して來た。應擧は承諾して、斷髪の圖を描いた。此の衝立が奉納されると、洛中洛外の評判となつて人々爭つて來觀し

た。其の鷄が眞に逼つてゐたゝめに、たま〳〵猫がこれを見て躍掛して迫つたといふ話なども傳へられた。其の後應擧は毎日祇園社へ行つて人々の批評を聽かうと思つたが、誰一人是非を云ふ者はなかつた。すると或日一人の百姓體の老爺が來て此の衝立を觀てゐたが、やがて嘆息するやうな調子で獨り言ともつかず

「どうも畫としては巧いものだが、惜しいことに此の人は鷄の季節を知らない」と云つた。

應擧は大勢の人の中にゐて其の言葉を聞いたが、やがて老人の跡を追つて其の家まで行つて、禮を厚くして、鷄の羽毛が季節によつて變化する有様を詳しく教はつたといふことであつた。

同じやうな逸話が幾つも傳はつてゐる。

或時彼の處へ來て鷹の畫を乞ふ者があつた。應擧は挨本を檢べて見たが心にかなふものが無かつた。そこで急に大阪の某侯の邸に行つてまのあたり飼鷹を見て寫生して歸り、あらためて此の圖を揮毫して依頼者に贈つた。すると暫く經つてから、或る鷹師があつて此の畫を觀て「是れは饑えた鷹を畫いたものだ」と云つた。應擧が其の理由を問はふと思つてゐるうちに鷹師は去つてしまつた。そこで彼は門人を大阪へ遣つて、前日の鷹について尋ねて來させると、それは山から捕獲して來たばかりでまだ餌を與へてない鷹であつたことが判つた。

また或る時彼は野馬の圖を畫いた。すると一人の農夫が之れを觀て「之れは盲目の馬を畫いたものだと見える」と云つて笑つたので、應擧が驚いて其の理由を尋ねると、農夫が答へるは

「馬が草を食ふ時は必ず眼を閉ぢるものだ、それは草の尖で眼を傷けぬ爲めの用意である、處が此の馬は眼を開いたまゝ草を食つてゐるところを見ると、開き盲目に違ひないと申したのです」

と云つたので、彼は大いに會得したのだつた。

また或時、彼は臥猪の圖を人から乞はれた。應擧は嘗て猪の臥したのを見たことはなかつた。そこで常々其の事を心に思つてゐた。すると、八瀬の方から、薪を負ふて平常彼の家へやつて來る老婆があつた。應擧は老婆に向つて

「お婆さん、お前は猪の臥してゐるところを見たことがあるか」と訊いて見た。

すると老婆は「山へ行くと時たま見ることが御座います」と云つた。

「それでは、この次ぎにもし見掛けたなら知らせてお呉れ、お禮は澤山上げるから」

老婆は承知して歸つた。それから一月ばかり經つた頃、老婆の家の後ろの竹籔の中へ猪が來て臥してゐた。老婆はそれを見だして大喜びで京都へ走つて來て應擧の處へ報らせた。應擧も喜んで直ぐ樣門人を二人ばかり伴れて八瀬へ行つて見ると、猪はまだ竹籔の中に臥してゐた。そこで筆を採つてこれを寫生して、婆さんに禮をして其夜家に歸つて來た。彼は早速これを清畫してすつかり描き上げた。すると、鞍馬の方から來る老翁があつて、其の翁がめずらしくやつて來た。應擧はまだ猪の事を考へてゐるので

「あなたは猪の臥してゐるのを見たことがありますか」と訊ねて見た。

「見ますとも、私の村の方は山中のことだから、猪が臥してゐるぐらゐはよく見ることで珍らしくはありません」

「左うですか、では一つ觀て頂かう」

應擧は臥猪の圖を取り出して見せて「如何です」と言つた。すると老人は熟々眺めてゐた後で

「此の畫は大層善く畫けてゐるやうですが、しかしこれは臥猪ではなく病猪です」と云つた。

應擧は駭いて其の理由を訊ねた。翁が云つた。

「凡そ猪が叢の中に睡つてゐる處を見るのに、毛髮が怒り立つて、脚を嶮しく折り屈めて、自然に勢ひのあるものです。處が、私は一度山中で病んでゐる猪を見たことがあるが、それが全く此の畫の通りでした」

應擧は初めて悟つて、翁に臥猪の形容を尋ねると、翁は非常に詳しく說明してくれた。そこで彼は前の畫を捨て更に新しく臥猪の圖を畫いた。それから四五日經つと八瀬の老婆が來たので應擧が試みに野猪のことを尋ねると老婆が

「どうも不思議で御座います、あの猪は翌朝籔の中に死んで居りました」

と云つたので、應擧はいよ〳〵鞍馬の翁の卓見に感服して、再び訪れて來るのを待つてゐると十日ばかりしてやつて來たので、後に描いたところの畫幅を出して見せると、翁は驚嘆して「是れこそ眞の臥猪です」と云つたので、應擧は喜んで厚く翁に謝した。其の畫は尤も奇絕なるものとして當時評判だつた。

或人が應擧に夕櫻の圖を依賴した。これが描き上ると實に美事な出來榮えだつた。構圖がいかにも夕櫻で、まさに暮れなんとして、花が俯向いてゐるところ、其の有樣が實によく寫してあつた。そして、櫻の花の側へ光の無い三日月が畫き添へてあるのが、一層春の夕べの柔かな情趣をあらはしてゐた。應擧自身も得意の作であつたので、依賴者に殊の外喜んで愛惜してゐ

ると、意外にも、此の畫に對して批を打つ者が現はれた。或人がこれを見て

「應擧といふ人は寫生の大家と聞いてゐたが案外である。成る程櫻はよく畫いてあるが、此の三日月が嘘である。此の三日月は八月頃の三日月である」と云つたのだつた。

應擧はこれを傳聞すると駭いて早速其の人を訪問して問ひたゞしたところが、其の人は天文の研究をしてゐる人で、三日月の位置といふものは月々によつて變化するものであることを說明して、自身が多年かゝつて寫し取つた月々の三日月の形を教へて呉れたのだつた。

應擧が畫に心を用ることは斯樣であつた。併し、彼が餘りに畫の形似に重きを置き、且つ概して題材を卑近な處に取るところから、其の當時に於ても、また後世でも、彼の畫は氣韻の乏しきものとして一部からは劇しい批難を受けてゐた。

應擧が曾て沈南蘋の筆になる黃鳥梅花に栖止するの圖を見て「此の畫は黃鳥が大に過ぎ樹が甚だ短い、是れが此の畫の失である、これは小幅中に全樹を描いたからだ、黃鳥は四五寸あるあに、樹は三尺に足らない、どうしてそんな道理があらう、古人にも往々斯かる失がある、畫をなす者は宜しく大小の分、主客の勢を辨し、而して後布置をなすべきである」と云つたので、彼は徒らに形似に囚はれて畫意風韻を解せざるものだと云つて却つて應擧を批難した者もあつた。

形似を輕んじ氣韻生動を以つて畫の生命とする南畫家や、胸中萬卷の書あり、其の想おのづから筆墨となつて發し、氣韻の超然たるを以つて理想とする文人學士の多くは、應擧を町繪師として卑める風があつた。

狩野派の寄傑曾我蕭白の如きは、當時に於て最も應擧に慊厭たるものゝ一人であつて、彼は常に人に語つて「畫を望まば我に乞ふべし、繪圖を求めんとならば、圓山主水(應擧)よかるべし」なぞと云つた。蕭白は、如鬼、鸑山、鬼神齋等の號があつた。伊勢の人で、京攝の間に遊び、初め高田敬輔に畫を學び、後に曾我蛇足を慕つて、蛇足十世と稱し、其の遺志を得たりと云はれてゐる。彼の志は、狩野、雲谷末派の衰頽を憤り、其の本に返つて、直ちに東山時代の骨髓を得やうとするのにあつた。併し乍らそれらの畫風は、本末を問はず既に厭かれて、世人は別に淸心の意を求めてゐる時代であつたから、蕭白の畫が喜ばれるわけはなかつた。元來彼は性剛直にして狷介、多血多恨の人間であつたゞけに不遇に處してます〳〵狂屈して、世を憤り人を罵り、其の畫は醜怪を極めて悽愴の氣が人に迫つた。或夏納涼の遊に、勝山琢用が佐野の舟橋を畫いて、それへ讚

干を附けたのを見て蕭白が、「舟橋に欄干のあるわけはない、そんな畫を描くと京都の畫師の名折れになるから書き直せ」と云ふと、孫舟は「是れは探幽の圖に倣つたものだ」と云つて承かなかつた。果ては双方云ひ募つて、蕭白は矢庭に脇差を抜いて孫舟に斬り掛けたが、傍らの人々が押し留めたので漸く無事に濟んだ。また或時、本願寺の法主が使者を蕭白の許へ遣はすと、使者は傲然として戸を叩いて「蕭白は在宅であるか」と云つた。すると蕭白は内から大聲に呼んで「蕭白とばかり呼ばれる蕭白は居らぬ」と答へたのであつた。さういふ風だから多くの人は彼を狂人扱ひにしてゐた。誰も彼を容れて呉れるものはなかつた中に、唯一人大雅堂ばかりが蕭白と親しく交つてゐた。

當時京都の畫壇で、應擧と對抗する者は大雅堂一人だつた。應擧に依つて圓山派の寫生畫が天下を風靡したやうに、我國の文人畫は大雅堂に依つて初て大成し、其の名聲は遠近に震つた。安永二年應擧が四十一歳の時、大雅は五十の賀莚を、其の門生等に依つて、祇園町の相馬屋に開いたが、それから四年經つて安永五年大雅は沒したのだつた。

應擧は、以上のやうな批難攻擊に對して少しも屈れなかつた。彼は飽く迄も形象を重じ、寫生を金科玉條として邁進した。

彼は曾て門人に訓へて次のやうに云つた

「凡そ圖畫の法は、物質を寫して精神を傳ふるに外ならない。其の術は物を製作するのである。苟も其の物の理に精しければ從つて巧妙になる、譬へば文學の士が博覽強記であれば、詞藻湧くが如くで、筆を下して縱横自在である、寫生の功を積めば、畫に於ても同樣である。若し粉本のみを守つて物の理に明かでなかつたならば、文學の士が寫字三昧にして止まると同じである。古人の曰く、記傳は其の事を叙して、其の形を載すること能はず、賦頌は其の美を詠じて、其の象を備ふること能はずと、是れを傳ふるものは畫圖である。故に新物を寫して新圖を作るに非ざれば畫の用をなし難いのである。かの豪放磊落、氣韻生動の如きは、物象を寫し得るの後に於て意會するであらう、初學の輩の決して倣ふべきことではない、初學の者は、寧ろ運筆遲鈍なりとも、構思に心を盡して、物象を寫すことを專一になすべきである。近世の諸家が後進を導くのを見るに、概ね古圖を臨摸させて了れりとして、却つて新意を出すことを禁じてゐる、古圖を以て直ちに自己の物として、名を記し印を下して怪まない、斯樣な事では畫を描いたとは云はれない、それは譬へば李杜の詩を題し、人丸赤人の歌を詠じて自己の胸臆より案じ出したと稱して人を欺くが如きものである、譬

者より見れば、耳を掩ふて鈴を盜むが如きものでまことに浩嘆するに餘りあるのである。それであるから、私の門に遊ぶ者に[illegible]に及ばしめるのである。蓋し字を學ぶ法から云つても、先づ楷書を學び然る後草書に及んでゐる、畫を學ぶの法もまたかくの如きものである、是れが私の家の畫の學則である」

應擧は、自然を自分の見た儘に描いた。そしてその自然を美化して、從來何人も試みなかつたところの新しい表現法で描いたのだつた。

五

或る年應擧は駿河迄旅行をすることになつた。それは富士を描くためだつた。彼は今まで一度も富士を描いたことはなかつた。何故かといふと彼はまだ富士を見たことがないからだつた。むかし細川幽齋は古歌以上に出ないと云つて、また芭蕉は未だ富士を見ないからと云つて、どちらも富士を詠じなかつた。應擧の場合は云ふまでもなく彼の寫生主義に據ることだつた、併し彼とても、寫生することの出來ない物に就ては想像の筆を揮ふのだつた。例へば龍のやうなものである。彼は龍を度び度び描いた。さういふ場合には、想像を驅使して理想畫を描いた。が、富士の如く、萬人知悉の畫題に對して、實況を寫さずして輕忽の筆を下すといふことは勿論なかつたのである。處[illegible]應擧に富士を描かせて見度い。費用は如何程でも負擔するといひ出したのであつた。單にそれだけなら應擧も餘り進まなかつたかも知れないが、駿河の原宿の名家で植松某といふ者がかねて應擧の門人になつてゐて、その植松からも度び／＼書面で招聘されてゐる矢先きだつたので、そこで急に思ひ立つて出掛けることになつたのだつた。

九月の初め頃、應擧は門人を一人伴れて京都を發つた。其の日は大津に住まはせてある妾のお花の家で泊ることにした。其のお花といふ婦を彼が世話をし始めてからもう七八年になるのだつた。婦は元は屋敷勤めなぞしてゐた者だが、ふとした事情から應擧がそれを世話することになつて、婦の郷里が大津であるところから、母親と二人其處へ住まはせて置い、折り折り京都から通つて行くことにしてゐるのだつた。元來應擧は謹厚嚴格な男で、酒も澤山は飮まず、勿論遊蕩などはしなかつた。何處迄も眞面目一方の男だつた。さういふ風だから、お花に對しても深切に面倒を見てやつてゐた。婦の方としても、母一人娘一人の境涯で應擧以外には力と頼む者もないのだつた。

應擧がお花の家へ行つた時、お花は體の具合が惡いと云つて寢てゐたが、應擧が來たので少し無理して起きて、髮を撫で付けたり薄化粧をしたりして、二階の湖の見える座敷へ來た。夏痩せの恢復しない體に少し季節より早い袷を着た肩のあたりが痛々しいやうに見えた。

「無理をして起きなくつてもよいのに」

「それでも旦那樣は駿河の方へおいでになるんださうでは御座いませんか、當分お目に掛れないんだと思ふと、じつとして寢ては居られませんもの」

「なに、一と月も經てば歸つて來るのだ、歸りにはお前の喜びさうな土産を深山持つて來ようから、それを樂みに待つてゐるがいい」

「でも、一と月といふと長う御座いますね、それに妾は此の頃のやうに病氣をしてゐると、毎日氣が鬱いで、何んとなく悲しくなりますから、一と月もお歸りがないとほんとに心細う御座います」

「それが詰まり病氣のせいだから、せいぜい養生をするがいい、一と月ばかりは經つて見ればわけないものだ」

と云つたけれども應擧も何んだか心掛りだつた。一と晩泊つて翌朝は早く京へ向つて發足した。伊勢路は應擧も珍らしくなかつたが、東海道の旅は今度が初てだから、道中の風物が悉く眼新らしく感じた。日數を重ねて駿河路に入り、原宿の植松家を訪ねると、主を初め一同で下へも置かず歡待するのだつた。其の地は富嶽を頭上に仰ぎ、全體の觀望を恣にするには屈竟の地だつたので、應擧は數日此處に足を留めて心ゆくばかり富士の寫生をした。富士を寫生すれば最早用事は濟んだわけだが、人々に引き留められるまゝに、清見潟の名勝を探りなどしてあちこち日を暮してゐるうちに、早くも京都を出てから、一ヶ月餘りの日數が經つてしまつた。十月の中ば頃になると、富士は裾近く迄眞つ白に雪を着た。其の頃になつて應擧は歸路についた。

三河邊りの或る小さな宿場へ着いた日は、秋雨が蕭條として濺ぎ、見る物がすべて寂しかつた。日が暮れたので其の宿で旅籠を取つた。何んとなく佗しい氣分なので、夕餉の膳が出た時、門人を相手に平常よりは少し多く酒を飲んで床に這入つた。すると門人も間も無く隣室で寢についた。板屋根をうつ雨の音が身にしみるやうに感じられた。が間も無く彼は睡りについた。

何時頃かわからなかつた。應擧は何かに呼び醒されるやうな

氣持がしてふと眼を醒ました。と、首筋のあたりにゾッとする寒氣を感じた。彼は變な氣持がして頭を廻して枕元の方を見遣つた。すると其處にお花が立つてゐた。お花は、病床から脱け出して來たばかりのやうに、瘦せ衰へ、蒼ざめた顏をして、しよんぼりと立つてゐるのだつた。應擧は駭いて聲を發さうと思つたが出なかつた。婦も何か云ひ度げな表情を口許に浮かべてゐるばかりで、悲しさうな眼付きをして應擧の顏を見守つてゐた。その間にどれ位の時間が經過したか分らなかつたが、應擧には可成り長い時間だつたやうな氣持がした。彼は非常に息苦しくなつた。そして苦しんだ揚句にはツと正氣に返つた。お花の姿は消え失せてゐた。自身はビツショリ油汗を搔いてゐた。そしてお花が立つてゐたあたりには微かな有明の光が尾を曳いてゐた。

　應擧は最早眼が冴えて睡れなかつた。お花の病氣の事が心に懸つた。翌朝は早く發つた。そして幾日か目に大津へ歸り着いて見ると、彼の留守中にお花は急に病が重つて死んでゐるのだつた。彼女が最後の息を引き取つたのは、應擧が三河の旅籠で夢ともうつゝともなくお花の姿を見たあの夜のことだつた。

　應擧は自分の眼に殘つてゐるお花のまぼろしを畫にして描いた。其の畫は間も無く人に所望されて遣つてしまつた。其の頃から彼は幽靈を畫くことに妙を得て來た。應擧の畫く幽靈は、尋常に觀るとさう尋常人と變つた面相をしてはゐなかつた。ただ異る處は眼中の趣きだけだつた。それだのに、一見竦然たらざるを得ないほど悽愴の氣に滿ちてゐた。日本の幽靈畫は應擧によつて全く畫格を一變したと云はれてゐる。彼が此の畫を描いてゐる時のことだつた。其の家の下婢が、晩景に及んで何氣なく主人の畫室へはいつて行くと、幽靈が立つてゐた。下婢はきやツと云つて其の場で氣絕してしまつた。下婢が見た幽靈は應擧の畫であつたことは云ふまでもない。

　江戶本所押上の最盛寺に納められた地獄變相圖は、應擧の此の種の畫の中でも殊に有名な作だつた。それは夢幻のうちに地獄を見るやうなもので、全く地獄の寫生だつた。

　其の頃京都の風俗として、好事者の間に、美人半身の像を畫き、燕室に揭げ香煙の間から是れを見て、漢の李夫人の故事を擬して戲れとする風があつた。

　應擧のところへ出入りをする仕事師があつた。或る時、應擧の家の隣家から火事を出したことがあつたが、其の時その仕事師はまつ先に驅け付け非常な働きをして消し止めて、應擧の家を無事に救つて吳れたのだつた。應擧は非常に感謝して賞金を贈つたところが、仕事師はそれを受けなかつた。それでもた、

て受けて貰ひ度いと云ふと、彼は應擧のところへ遣つて來て、應擧に會つて云ふことには

「私が少しばかり働いたのをそんなに仰つて下さるなら、金は頂戴したくないが、その代りに私の體に繪を描いて頂き度い、それを刺靑にして永く紀念にしたいと思ひます」と云つた。

「繪を描くことは手易い業だが、私はどうも人間の體へ書くといふのは好ましくない、どうか絹地へ描くからそれでいゝとして下さい」

と應擧は云つた。が仕事師は承かなかつた。仕事師が畫幅を貰つても掛ける處がない、是非共脊中へ書いて貰ひ度いと云ふのだつた。で應擧も仕方がなく

「では書きませうが、圖は何にしませう」

「一つ、幽靈を書いて戴き度いんですが」

「宜しい、承知しました」

應擧は其の場で筆を採つて脊中へ一杯の幽靈を書いて遣つた。仕事師は大喜びで、直ぐ其の足で刺靑師のところへ行つてそれを刺靑にして貰つた。

さあ仕事師は得意だつた。當時日本一と云はれる應擧に刺靑の下繪を書かせたといふので、何處へ行つても裸體になつた。誰でも其の刺靑を見て驚嘆しないものはなかつた。處が、本人の仕事師は、何分脊中のことなので他人に見せるばかりで、自分では其の彫靑を見る機會が無くて過ぎた。

さうかうするうち祇園祭が來て、仕事師は神社へ行つて何彼と手傳つて働いてゐた。勿論彼は裸體になつてゐた。が、其の時何氣なく、神前の寶鏡の方を振り向いて見ると、凄まじい形相をした怨靈の顏が鏡の中に映つてゐた。彼は駭いて靑くなつてしまつた。

それから此の仕事師は何んとなく心が臆して、脊中の刺靑が自分の眼さきにチラ付いてゐた。だん／＼それが嵩じて來てしまひにはブラ／＼病にかゝるやうになつた。そのはなしを或る寺の和尙が聞いて氣の毒に思つて、仕事師を寺へ伴れて來て幽靈の顏をすつかり灸で燒き消して遣つた。すると其の病氣も直ぐに癒つた。

此の時代は、京都の文物が最も爛熟した時だつた。美術が進步すれば工藝も發達してゐた。西陣の金田忠兵衛は、代々機織に從事する家柄であつたが、非常に家業に熱心し意匠を凝らして新樣を出した。應擧に依賴して賀茂競祭圖、競馬圖等を畫かしめて、是れを繻珍に織つて賣り出した。また其の門人等にも種々の下繪を畫かせたのだつた。

其の頃、金工として名聲のあつた一宮長常は、通稱を柏屋忠

八と云ひ、京都に住つてゐたが、類ひなき名手で、殊に魚介、草木の寫生を善くした。知恩院宮家諸太夫樫田阿波守といふ人が、長常に小柄を彫らせ、其の下繪を應擧に畫かせることにして誂へた。長常は承諾した。そこで樫田から應擧に下繪のことをしかじかと云つて遣ると、應擧は早速注文通りの繪を畫いて送つた。それを長常の處へ持たせて遣ると、長常は一見して、「此の下繪では彫れない」と云つた。何故かと云つて尋ねて見ると、長常が云ふのには

「應擧といふ人は畫が上手であるために、私に彫らせやうと思つて、平常の私のたがねくせを其の儘に畫いてある。惡いたがねくせだから自分では常に直さうと思つてゐるのです、また、此の癖といふものは、癖を彫らうとして彫れるものではありません、癖を直さうと思ひ乍ら彫つたものに、おのづから其の人の癖が現はれるのです」

と話したので、樫田も、流石物の上手といふものは異つたものだと感心して、其の小柄は彫らせるのを止めにした。此の事を聞いて應擧も長常の見識あるのに敬服して、それが緣となり其の後は度び〳〵長常のために下繪を畫いた。天明年中、朝鮮國王より清帝に獻上する手爐の製作を依賴せられた。長常は應擧の下圖によつて、火屋に重ね菊の透彫を施して精巧無比の特技を發揮したのだつた。

六

應擧は、初名は氐、のち應擧と改めた。字は仲選、或ひは仲均といふ。雪汀、一嘯、夏雲、僊嶺、僊齋、仙嶺等は皆少壯時代の號である。幼名岩次郎をのち主水と改めた。彼は多く落款の上に年月を記した。そして明和安永の頃には、藤應擧と落款をしたが、天明の末頃以後はどういふわけだか源應擧と改めた。

落款は必ず謹嚴な楷書で書いた。應擧は無學で落款の文字以外には字を知らないなどと云ふ者さへあつたが、勿論そんな事は嘘だつた。彼は勿論文學には長じてゐなかつたが、併し興が浮び來ると、口を衝いて吟を成すことも少くなかつた。或る時莊周夢蝶圖を作つて吳月溪に贈つた。其の圖の上に題して

　貧人多夢神　福人多夢祿
　余非貧富人　書畫入夢足

又、老狸皷腹の圖に

　陰とめて一人樂しむ春の夜は花雪よりも月はまされり

紫茄子の圖に

　山越の駒のわたりに多けれど今年始めて三つ斗りに

などゝいふのがあつた。

平常は謹嚴重厚の人だつたが、矢張り時には飄逸洒脫の行をすることもあるのだつた。或親しい人が應擧に畫を依賴して且つから云つた。

「どうも先生のは落款が餘り短くて何んとなく物足らぬ氣持がします、何んとかもう少し長く書くことは出來ませんか」

それは在來の京都の畫師は朝廷から官位等を申受けて、それを長々と書き込んで得々としてゐる風があり、世人もそれを重んじる風があつたのだが、應擧に限つて名前ばかり記すことが、一部の人には多少さういふ不滿を伴つてゐた事實もあつた。併し應擧はさういふことは大嫌ひだつた。官位の高下に依つて畫の價値を許するなどは以ての外の事である、ゆへに畫家は何處までも一布衣の身で居て、畫其の物の價値だけに依つて許され度いものであるといふのが彼の主張だつた。彼は禁裏御繪師に任ぜられ、宮中の御座敷の襖を澤山描いた。櫻町天皇より五七桐の御紋を拜領し、或ひは參內揮毫名印を許され、官位昇敍の御沙汰を蒙つたりした。が彼は、後世畫道の衰微になるべきであると稱して固く辭退したのだつた。

處で右の注文に對して

「宜しい、長く書きませう」と應擧は答へた。

畫が出來上つて來たので、其の人が見ると

「日本鍛冶宗匠來伊賀守藤原金道東隣應擧」と落款が入れてあつた。

應擧の文學的方面の顧問役を勤めたのは、皆川淇園だつた。淇園は享保十九年の生れで、應擧より一つ齡下だつた。同じく京都に住つてゐて、應擧とは莫逆の交りがあり、彼は畫を應擧に學び、應擧は淇園に就いて文學故實等の智識を仰いだのだつた。

淇園は名は愿、字は伯恭、有斐齋筇齋等の別號があり、通稱を文藏と云つた。京都の人であつた。生れて穎異四五歲にして能く字を識り、十五歲の時韓人と席上唱和して詩句甚だ工であつたので、韓人驚歎してそれより名を擧げた。長じて博學海涵經學文章を以て名聲海內に震ひ、京都文人の頭梁として、門人三千餘人を數へた。公卿諸侯の中にも彼に弟子の禮を執つた者が尠くなかつた。

彼は非常な讀書家で、居常几に凭つて書を讀み、月を越えても、歲を重ねても、しばらくも其所を離れなかつた。平常人を俟つには、貴賤にかゝはらず迎へたり送つたりはせず、一室に座つたきりだつた。召使の者が室の掃除をしても座席の邊りへは手を附けさせなかつた。或る時たま／＼外出したので家族の者が其の熊の皮を取り除けて見たところが、畳がまつ黑くなつ

て腐朽してゐるので、座を上げて見ると床板まで腐つてゐた。

一面彼は親孝行な事でも有名だつた。其の父は晩年脚疾で駕籠にも乘ることが出來なかつた。そこで洪園は官に請ふて車を造つて、僕にそれを曳かせ、自分が側に附き添ふて看護をしながら名山勝地を遊行させて歩いた。

彼は呉春や蘆雪とも親友だつた。洪園も晩年は驕奢を事とし、甚だ酒食を嗜み、絲竹を愛し、歌妓を携へて鴨河の上に縦飲し、詩文書畫を乞ふ者があれば人を擇ばづ報酬に隨て應ずるといふ風になつたので、大分批難する者も出來てきた。

呉春松村月溪、名は春、字は伯望、通稱嘉右衛門、存白また允白と號す、三菓堂とも云つた。京の金座の平役だつた。初め大西醉月に畫を學び、のち蕪村の門に入り、併せて俳諧を修めた。蕪村は兼てその畫を評して、春や人物は呉彬に愧ぢず、花鳥は林良に唐突すと云つた。のち更に應擧の風を慕ひ、その門人たらんことを乞ふた。應擧は辭して、われ如何ぞ君が師たるに堪へんや、たゞ共に學び共に勵むべきのみと云つて、是れより莫逆の友となつた。しかし呉春は未だ應擧の畫訣を會得することが能きなかつた。するとたま〳〵天明八年京に大火災があつて、應擧も呉春も共に燒け出されたが、其の後暫らく呉春は應擧の家に同居し、その間に、畫道を討論して、つひにその奥旨を悟つたのだつた。かくして呉春は蕪村の風を一變し、好んで寫生をなして、一家の面目を開くに至つた。彼の家は四條通東洞院の東にあつたので、世人は其の風を四條派と稱した。呉春の門下からは、岡本豐彦、松村景文の如き名手が出て、師風を傳へて四條派を盛んならしめたのだつた。

呉春は、青年時代は甚だしい遊蕩家で、島原の青楼に居候をして、帳面付けをしたり、遊女の文の代筆などをして糊口を凌いだりしたこともあつた。其の後、攝津の呉服の里に隠れて、一とせ春を迎へた。其の時から、氏を呉、名を春と稱したのだつた。彼は頗る多藝多能で、俳諧並に書道を善くし、文筆に達し、また管弦に通じてゐた。性甚だ洒落で、酒を嗜み、醉餘興に乘ずれば書畫を揮洒して、人に與へた、知つてゐる人でも知らない人でもそんな區別は無かつた。勿論謝儀の多少なぞを氣に留めたことはなかつた。或る時も彼は一杯機嫌で、水墨の酒瓶を描き、みづから酒徳を讃せる長歌を題して、側らにゐた門下生に與へた。すると彼の細君が立腹して

「揮毫を賴む人が毎月詰め掛けて來て、此の通り山のやうに絹が溜まつてゐるのに、貴郎はお酒ばかり召上つてゐて、ちつとも揮つてくださらない、家だつて一文もお金が無くて困つてしまふじやありませんか、それだのに、お金にもならない繪だと

喜んで書いてお遣りになる、一體どういふお考へですか」

呉春は笑つたばかりで答へず、ごろりと肱枕をして空睡をしてしまつた。

七

應擧には、三男三女があつたが、長男次男は家事を繼承して各々一家を成した。長男は應瑞、字は義鳳、怡眞堂と號した。應瑞の門下からは岡師南峰、中島來章等を出した。次男は應受、字は君賚、別號を水石と稱した。彼は母方の姓を襲いで木下と稱した、畫は兄よりも勝つてゐた。

應擧の門人中には頗る多士濟々だつた。呉月溪、渡邊南岳、土岐済美、佐々木應祥、植松應頌等は皆其の門下であつたが、殊に應擧の十哲と稱せらるゝは、長澤蘆雪、駒井源琦、山口素絢、森徹山、吉村孝敬、山跡鶴嶺、奥文鳴、龜岡規禮、木下應受、福地白瑛の人々だつた。しかし、應擧門下の巨擘は呉月溪と長澤蘆雪とであつた。

蘆雪は名を魚、字を氷計、淀の藩士であつた。彼がいまだ若くして日々淀から四條の應擧の家に通つてゐる頃の事だつた。或る時非常な寒氣で、通ふ道にある小川が凍つて、魚が氷の中に包まれてしまつてゐた。魚は動くこともどうすることも出來なかつた。蘆雪は師の家に行つてからも、終日其の魚の事が氣に懸つてゐた。で、晩景にまた其處を戻つて來て見ると、氷は殘らず解けて、魚は自在になつて嬉しさうに其の中を泳いでゐた。蘆雪は翌日此の事を師匠に話した。すると應擧は

「それは面白い話である、私の畫もてうど其の魚と同じやうであつた。師に就いて多年學び、其の間艱難辛苦の修業を積んで、漸く氷の解けたやうに、今の畫は自在になつた。お前達皆々是れは心得て置くべき事だ」と大勢の弟子達に向つて云つた。

蘆雪は此の師の言葉の意味を悟つて、其の後は特に模寫縮寫に精を出し、丹青設色の法式など工夫鍛錬して研究の功を積み、つひに名手となつたのだつた。彼は永く此の事を忘れない爲め、名を魚と改め、水の中に魚の字の印を用ゐた。

蘆雪の畫も矢張り其の魚のやうだつた。彼は後には其の獨特の畫才を發揮して、應擧の風に從ふ事が出來ず、別に新意を出し、走筆縱横、好んで奇想天外の畫を作つた。その構思と布置の妙に至つては應擧に勝るものがあつた。さうかと思ふと、ある人が、蘆雪の畫に細密な物を見ないが、あれは畫き得ないのだらうと云つたのを聞いて、彼は一寸四方の中に百羽の鳥を畫いて見せた。而も筆力充滿して應擧を凌ぐばかりだつた。けれ

ども彼は只覇氣が多くて、畫に沈厚を缺くきらひがあつた。

性行も應擧とは變つてゐた。或時皆川淇園と相談して、祇園の某寺に於て、蘆雪が畫き、淇園が題詩を揮毫して人に配つた。人々は爭つて求めたので、數日の間に莫大の金を獲た。そこで兩人は相携へて妓樓に登つたが、一日で其の金をみんな費消つてしまつた。

蘆雪が名古屋の某樓に於て席畫をしたことがあつた。其の時彼は大筆に墨汁を含ませ、黑くろぐろと紙面の半分ばかり塗抹した。一座の人々騷いで看てゐると、傍らに漁舟四五を描き添へた。熟視すると、それは巨鯨が海波の上に半身を現はせる圖であつた。

また或時彼は播州高砂へ行つて揮毫した。すると或人が宿を訪ねて來て、墨繪で蜥蜴を畫いて貰ひ度いと云つた。さすがの蘆雪も是れには弱つた。畫けないと云ふのも業腹なので、蜥蜴を買つて來て寫生を初めたが、どうも蜥蜴と見えない。何枚となく畫いて、自分だけでは些か蜥蜴らしく見えて來たので、其の繪を持つて近所の婦小供の遊んでゐる處へ行つて「是れは何が描いてあるか判るか」と云つて訊いて見ると、誰れも判らないと答へた。蘆雪はガツカリしたが、又々宿へ戻つて蜥蜴の寫生を始めた。さうして畫いては見せ、畫いては見せしてゐるうちに、到頭誰れに見せても直ぐに蜥蜴だと判る樣になつた。蘆雪は初て安心して、依賴人に渡したのだつた。

蘆雪の代表作は嚴島神社の山姥の圖である。それは筆法頗る雄健、氣魄豪放、一見鬼氣人に迫るものがあり、最も彼の特色を能く發揮してゐる作である。

駒井源琦、山口素絢等は、蘆雪に比する時は餘程劣つてゐた。當時、源琦は蘆雪と竝んで應擧門の二哲と稱されてゐたけれども、彼には蘆雪のやうな氣魄才能はなかつた。只彼は篤實老熟の人で、綺麗巧緻な畫をよくした。彩色の手腕に至つては師を凌ぎ、常に側にあつて施彩の助手を務めたのだつた。彼は殊に唐美人を描くことに長じてゐた。雲髮媚るが如く細腰綺羅にだに堪へざるが如き圖に於ては、到底師も及ぶ所ではなかつた。

山口素絢は、源琦の唐美人に對して、和風の美人を得意として畫いた。素絢の畫は、筆力に於てはむしろ源琦に勝つてゐたが、品位の缺くる點で劣つてゐた。

渡邊南岳は、圓山派を江戸に傳へた人であつた。彼は京都の人で、應擧に學び、後光琳の風を慕つて一家を成した。彼は一時江戸へ出て盛名が喧傳された。鈴木南嶺、大西椿年、谷文一等の如きも江戸に於て南岳の法を受けたのだつた。

應擧の晩年のことだつたが、或時彼の處を一人の若い繪師が訪問して來た。それは岸駒であつた。應擧が對面すると、岸駒はかう云ふのだつた。

「私は近頃獨立して門戶を張つて見たが、一向門人も付かず客もありません。そこで考へ付いた一策でありますが、今日から私は先生の惡口を申しますから、お斷りに上りました。私如きが如何に惡口を云つても先生の御損になりますまい。しかし私はそれで少しは畫けさうに見えるから、依頼者があるかも知れませぬ」

「面白い、お遣んなさい」

と應擧は笑つて答へた。岸駒は禮を述べて、畫の話をして歸つた、が、それからといふもの彼は、口を極めて應擧の罵倒を遣り出した。處が、此の計略が中つて「岸駒といふ男は偉く應擧を罵倒するさうだが、どれ位畫けるか試しに畫かせて見よう」と云ふ物好が出て來て、それから彼はとん〱拍子に賣り出した。といふ話があるが、自家廣告に巧みな岸駒のことだから有りさうな話である。同時に應擧が如何に重きを成してゐたかといふことも想像するに難くない。

其の頃、京都の或る料理屋が、めつきり客足が減つて困つてゐた。其の家の主人はかねて應擧とは懇意だつたので、一日應擧の處へ遊びに來て、其の話をして

「此の分では近く店を閉めなければなりますまい」と云つて料理屋の主人は嘆いた。

すると應擧は暫く考へてゐて

「それは誠にお氣の毒だ、處で、私に一つ妙案がある、それをやつて御覽なさい」

それから間も無く應擧は、一幅の畫を描いて其の料理屋へ贈つて、奥まつた小暗い座敷へ掛けさせた。それは美人湯上りの圖で鏡を振り返つてゐる處であつたが、其の鏡面に映つた影には、亂髮、鬼色、目眥横裂、口角滴血、物凄い形相で、見る人悚然として諦視することが出來ない位だつた。すると忽ちその事が評判になつて、幽靈の繪を看に來る客で繁昌し始めて客足を恢復し、其の料理屋は以前に勝る盛大に赴いた。

寛政の頃だつた。或年谷風梶之助が京へ興行に來た。その時さる大身の人の招待で應擧は谷風と同席した。すると其の人が

「應擧先生は當時日本一の畫師だが、谷風關も日の下開山の横綱である。御身等二人で力較べをして見たならば面白からう」

と云つた。

それは面白いと人々が囃し立てるので、「では折を見て力較べをしやう」と云つて兩人は笑つて別れた。それから四五日經つ

と、或晩人の寢靜まつた時になつて、應擧の家の庭前のあたりでズシンと物を落す音がして、同時に家がミシ〳〵と鳴つた。駭いて人々が飛び出て見ると谷風が汗を拭きながら立つてゐて、其の傍に　十五人位でも動かせさうもない大石が轉がしてあつた。

「先達て力較べの御約束をしたから、鞍馬山から、庭石を拾つて持つて來ました」と谷風が云つた。

谷風は間も無く京を去つたが、其の翌年又遣つて來て「先生去年の御約束はまだですか」と云ふと應擧は

「私のはまだ出來ない」と答へた。

其の又翌年も谷風は來たが、應擧は力較べの物が出來てゐなかつた。三年目に又谷風が廻つて來た時、應擧は漸う約束の物が出來たと云つて、一幅の畫を谷風に贈つた。それは弦を張つた弓が實物位の大さに畫いてあつた。應擧は其の畫についてかう云つて説明した。

「私は三年前から度び〳〵此の繪を畫いて見たが、どうしても弦が引けない、張り切つた弦であるから、一と息に描かなければ力が伴はない、が、中途で息を切らず而も定木で引いたやうに眞直ぐな弦を描くのは實に骨が折れた」

と云つて、畫き損じを出して見せた。それが長持へ一杯もあつたので、さすがの谷風も吃驚してしまつた。

八

天明七年の夏、應擧は但馬國の大乘寺へ行つて其所の襖を二た間畫いた。一間には山水、一間には芭蕉を畫いた。彼は青年時代に其の寺の住職密英上人に激勵され、剩へ修學の資まで仰いだ其の恩義を終生忘れなかつた。自分の今日あるは全く密英上人の賜物であると常に人に語つてゐた。で、今度上人が其の寺を再建されるについて、其の報恩の爲めと、一つは自己の作品を不朽に傳へんが爲めに全部の畫の寄進を申出たのであつた。

其の後彼は毎年大乘寺へ行つて、自身も畫き、門人達にも畫かせたので、大乘寺は應擧及び其の一門の傑作を以て充滿されるに至つた。後世では俗に其の寺を應擧寺と呼ぶやうになつた。

天明八年、京都に大火災があつた。應擧の家も類燒を免れ得なかつた。彼は一時一家族を伴れて、故郷丹波の穴太村の金剛寺に避難した。金剛寺は、彼が幼少の時出家させられやうとして預けられた其の寺だつた。だから彼に取つては殊に懷舊の情に堪へないものがあつた。彼は其の寺に滯在中に寺の襖三十二枚に波濤の圖を畫いた。それはまことに澎湃の聲が耳の前にあるやうに思はれるのだつた。彼は山國に生

れ、生涯京都にあつて滅多に旅行をしなかつたので海に親しむ機會は少なかつたにも係はらず、海洋の描寫は非常に神に入つてゐた。此の外に彼は其所にゐて群仙圖及び山水圖等十餘幅を書いた。

寛政二年には大内裏御殿の畫の御用を仰付つて、清涼殿、一之間、御床張付、御袋戸棚、御小襖、御小座敷、違棚等に、富士、海、農業圖等を謹寫した。

其の時彼は五十八歳だつた。昇殿揮毫を許されたにも係はらず御辭退して、自宅にあつて終日通宵筆を揮ひ、深夜殘燈の下に在つてもなほ眼鏡を徹することなく、水墨に親しんでゐた。

寛政六年には讃岐琴平神社の襖、屛風等に、七賢圖、山水圖、龍圖、瀑布圖等を畫いた。同じ年東本願寺の蓬萊仙奕圖を畫いた。

其の翌年は京都に居つて應擧寺の孔雀圖、鍾鬼圖を畫いた。其の時、龜山侯から使を受けて畫の依頼を蒙つた。彼は其の爲めに歸國の途中丹波の大江山を通つたが、其の地の風光に見恍れて、三日間山中に留まつた。そしてすつかり此處の寫生をして京へ歸つて、後是れを侯の爲めに畫き上げて奉つたのだつた。それは八曲屛風一双の山水圖だつた。此の保津川の圖は、彼の山水畫中で、大きさに於ても、出來ばえに於ても最も傑れた作だつた

應擧は、花木、禽獸、魚貝の類を描くことに於ては古今獨歩の技を有つてゐたが、而も其の最も得意とするところは寧ろ山水にあつた。彼の畫くところの山水は殆んど畿内の範圍を出なかつたが、それは彼が旅行を好まず、遍く名山大澤を跋渉するといふことをしなかつたからで、勢ひ其の畫くところの風景は小規模に落ちた弊はあつたけれども、それだけに、京畿地方の特色を一層強く現はしてゐるのだつた。保津川の圖は、後に朝鮮の聘使が是れを見て「畫筆の妙神に入る」と云つて感歎措かなかつたといふことである。

彼は寛政五年に一度病に罹り、間も無くそれは本復したけれども、其の後は歩行も自由を缺き、眼も霞んで來た。保津川圖を畫いて一ケ月ばかり後、其の病が俄然再發して應擧は世を去つたのだつた。四條大宮西入る悟眞寺に葬つた。法名は圓擧無三一妙居士と號するのだつた。

追記

私は曾て帝室博物館所藏の應擧の寫生帖四卷を觀たことがあつた。併しそれは餘程前の事で今は詳細に其の記憶を語ることは出來ないが、其の寫生は花木、禽獸、魚貝等の何れにも亙つてゐて、殊に禽、獸の如き動物の描寫に在つては宛ながら活きて

動くかと怪しまれるばかりであつたのに驚嘆したことを覺えてゐる。處が此度び應擧傳の起稿を始めた十月中の事、同じ博物館で古畫模本展覽會を開き、陳列畫中に應擧の保津川圖及び鯉魚水禽圖があると聞いたので、參考の爲め一見して置かうと思つて出掛けた。出品畫は總數五十一幅をかぞへ、法隆寺金堂の壁畫を初め、本邦の古代佛畫及び繪卷、屛風類掛物類にわたつてゐたが、皆明治卅年頃迄の間に、畫壇各流派の大家が、神を凝らし時間を厭はず模寫したものだけあつて、何れも實に美事な畫で、原作も必ずかくやあらんと思はれるものばかりだつた。模本も此處迄行けば大したものだと感心した。他の畫に就いての感想はしばらくおき、應擧畫であるが、保津川八曲屛風一双は寺崎廣業之れを模し、鯉魚水禽六曲一双は、鯉魚を渡邊香涯、水禽を結城素明、おの〱半双づゝ模したものだ。保津川屛風は現今西村總左衛門氏所有になつてゐる。それは何といふ名畫であらう、此の畫の前に立つてゐると、身自ら其の地を踏んでゐるかのやうな氣持がするといふほか云ひやうがない。岩石、其の上に生へてゐる數株の松、屈曲しつゝ奔流する溪流、其の中に泳いでゐる鮎、柔かな岸べの草——よくも斯うまで寫生の神に入つたものだと驚かざるを得ない。此の畫について見逃すことの出來ない點は、彼が是れ程物の眞を描寫しながら、而も其の筆法頗る蒼古たる事と、八曲屛風一双の大畫面に描き出されてゐる山水は、極めて局部的である事の二點である。其の岩石、松樹等の描法に至つては後に見た馬遠の山水を想はせるまでに峻峭の氣を帶びてゐる。現代の所謂寫生派の畫とは全く似ても似つかぬものである。彼の畫はどれを見ても大規模な畫圖ではない、多く部分的活寫である。部分を描いて猶周圍を彷彿せしむる處に、彼の大手腕があるのである。山水畫と云へば直ちに、前景中景に遠山を描き、樓閣を配し人物を點ずるものときまつてゐた世の中に、應擧の出現は、時代人の眼に如何に大きな驚きを與へたか想像するに難くない。鯉魚水禽圖を見ても同樣の感が起る。それは當世の花鳥畫家がするやうな纎弱な線や工藝的彩色法に依つて畫いたものではない。眼を近寄せて見ると可成り荒い剛勁な筆で描いてある、數歩を離れて之を觀ると、鯉魚も水禽も眞に悠々として水中の游泳を樂しんでゐるやうに見える。まことに迫眞とは此の事である。私は非常な快い時の吐息をつきながら秋晴れの博物館の廣庭へ出たのだつた。

江戸時代の旅費調べ

彌次喜多の旅費——赤穂義徒の旅費——和蘭使節の旅費——幕末時代の旅費

松川二郎

東海道の島田、金谷、御油、赤坂、中山道の沓掛、追分など、昔の宿場であつた土地には、どことなく然うした——『宿場町氣分』と云つた樣な、一種のカラアの殘つてゐるものである。ガランとして寺の本堂じみた、大きな古びた旅館には、何うかすると、六十路から七十路にちかい風呂番若くは庭掃の爺やが居て、その若い頃迄は未だ行はれてゐたといふ俗謠などを、歌つて聞かせることがある。

人の惡いは鍋島、薩摩
暮六つ泊りの七つ立ち。

明七つと云へば今の四時だ、三百も五百もの同勢を引作れた大々名が、こんなに急がし相に出發して行くには、本陣は徹夜の大騷ぎであつたらう。

『へゝ何うも古い事だでね、最う大抵は忘れてしまつただが、さうく〵まだこんなのも有ましたべえ』とて、爺やはうたふ。

松本丹波の糞丹波
糞といはれても錢出さぬ。
錢は內藤豐後の守
袖からぼろが下り藤。

金紋先箱匹輿を擁してシタニ、シタニの警蹕の聲嚴めしく練歩いた天下の諸侯も、かげでは相當惡口も叩かれたものだ。尤、松本丹波や內藤豐後は十萬石以下の小大名で、內所も餘り裕福ではなかつたらうが、

お國は大和の郡山
お高は十と五萬石
茶代がタツタ二百文。

は些か以外の感なきを得ない。郡山の藩主は水野から松平、本多、柳澤と幾代も替つてゐるが、十五萬石を領したのは柳澤ばかりで、享保九年吉里の時代に川越から移封されたのであ

る、從つて此俗諺も、左程古い頃のものではない。『成金代名』であつた柳澤吉保の子孫が、こんなケチな唄を東海道へ蒔散らして歩いたかと思ふと、興味は一層深い。代々の殿様算數には明かであつたか、當主伯爵は統計學者である。

だが、二百文は「お話」であらう、いかにケチであり、又物價の安い時代であつたにしろ、豈夫國持大名が二百文の茶代は置けなかつた。『百も無い』と云ふのは、江戸時代素寒貧の標語であつた。それを二倍して二百と云つた處に、一種辛辣な皮肉味がある。但白米一升四五十文で買へた時代の『百も無い』は、今日の『電車賃も無い』に比して、程度がちがふ、矢張り昔の方が住みよかつたのかな。

處で、『江戸時代の旅行には、一日どれ程の旅費を要したものであらうか。』と云ふ問題が起つて來る、支那の戰爭よりも呑氣な問題だ。何故斯様な呑氣千萬な問題を、私が擔ぎ出したかといへば、私は去る八月下旬秩父の山の中を旅行中、山から轉落して左脚を少々挫き、もう一箇月以上も寢てゐる。足の先が痛むだけで、他の部分には少しも故障がないのだから、毎日退屈で退屈で仕様がない。かゝる折、昔の旅行家の取つたコースを、圖上でトレースして見るのも、一の大きな慰藉である。殊に、以前から心掛けてゐた「江戸時代の旅費」を探究するには、寧ろ絶好の機會だつたのである。

友人大江素天君の嚴父が城崎温泉入湯日誌と曰ふものの中に、如左記載がある相である

二　錢　和田山より二里車代
一文半　出石にて茶代
三　錢　豐岡より城崎迄船賃
五　錢　しらせん出し（割勘の事か）
十　錢　旅館七日分茶代
五　厘　梨子三個代

俥賃も船賃も一里一錢の割合、一日十錢も有れば、大威張りで旅が出來たらしい。右は僅かに四五十年前の事なのだが、實に隔世の感、とはこの事である。然し乍ら、古人の路銀の詮索といふ事は、必ずしも容易の仕事ではない。何故ならば、素天君の如うに、をやぢの古い小遣帳を引張出して原稿の種にするいたづら者があれば格別だが我等の先祖、特に武人文人など申す種類に屬する人間は、金錢のことなどを口にし、又筆にするを、甚賤しとした習慣から、曾て戰費のことを書き入れた軍書の無いが如く、旅中の小遣などを書付けて、後世の好事家を喜ばせやうと志した紀行者は、殆ど一人も居なかつたからである。

彌次喜多の旅費

十返舍一九の「東海道中膝栗毛」は、固より一篇の旅行小說で、しかも、俗惡、幼稚な滑稽劇を濫發して、低劣な笑ひを讀者に强ふるにすぎないものではあるが、著者が手にをへない道樂者であつただけに、よく社會生活の裡面に通じ、又好んで金錢を口にする。且その數字たるや、ほゞ信憑するに足るものと私は思ふ。時は恰も、江戶文化の爛熟時代とも稱すべき文化文政、私の興味は、先づこゝに引き付けられざるを得ない。

膝栗毛の中から金錢に關する部分のみを摘錄して見る。

○川崎の宿外れにて。馬方『歸り馬だ酒手で行かう、じば(二百)で乘つてくんさい。』

相談が出來て兩人とも馬(輕尻)に乘つた、神奈川迄は二里半の距離。

○程ヶ谷にて 留女『お泊りなさいませ、お旅籠は二百づゝ』

田舍者『否々さうは出し申さない。……百十六文づゝも出し申さう』 女『そんなら外へお泊りなさいませ』

○小田原にて。下駄穿きで据風呂に入つて釜を踏破つた損料南鐐一片。

○箱根山中にて。スツポンを一匹買取つた、此代價四文錢六枚即二十四文。

○沼津の茶屋にて。酒と肴の代四十二文、內譯は分明でないが相場は上酒三十二文、同並二十四文、肴は二十二文と十二文の二種。

○府中(靜岡)の二丁町遊廓にて。『何と何處ぞへあがらうか』『待ちなよ、確かこゝは一分と十匁と二朱だけな。壁のすにしよう。大方十匁だげな……』云々。彌次郞が若衆へ祝儀に南鐐一つはづむと、お返しに安倍川餅を重箱に入れて持つて來たとある。

○安部川にて。渡し賃一人前六十四文、外に酒手十六文づつ。

○岡崎の先の白子の茶屋にて。九十二文、此內譯六十四匁惣飾(二人前)二十八文酒、北八曰く『旨くねえ代りに高いもんだ』

○大井川にて。川越人足が二人で八百文と吹掛けるのを、二人はそんなら徒涉りすると行すぎる、と人足が跡づいて曰ふやう『川流れア二百附けて寺へやるから、流れた方が安く上らあ』。問屋場の役人曰く『お二人なら蓮臺で四百八十文……此川の渡賃に負けるといふはない。』

○日坂の旅宿にて。巫女を頼んだ料金二百文。

○掛川の茶屋にて。酒二合六十四文。
○猿が番場の茶屋にて。鶴昇四人に彌次郎も加はつて鱈ふく飲食ひした支拂が三百八十文。
○池鯉鮒の手前今村の建場にて。名物の砂糖餅一個三文、うづら燒同三文。
○池鯉鮒にて。草鞋一足十六文。
○鳴海にて。有松絞の相場（一反）十二匁、十四匁八分、十五匁、二十一匁等數種。
○伏見町藤の森の茶屋にて。甘酒一杯十六文づつ。
○京都。――祇園の田樂茶屋にて飲食代十二匁五分。梯子一挺二百文。按摩（二人分）百文。
○大阪。――易者の見料十六文。貸衣裳屋支拂ひ二人分にて一貫八百文。新町の九軒（茶屋）にて藝妓抜きの遊興代四十一匁四分、但彌次喜多の外に案内の男と合せて三人分である。

とは云へ、斯く列擧したのみでは何の興味もない、少しく解剖してみなければならぬ。そして其の中から、或る結論を引出さうとするのである。

◇

徳川時代の貨幣制度は、甚だ複雜であつた。或時期に於ては、寧ろ亂雜と云つてよい程、複雜であつた。從つて當時の物價を、正確に今日の物價に換算對比することは困難で、大まかなところで我慢しなければならぬのを遺憾とするが、兎に角當時の錢の勘定方は（かけ放れた時代の錢の勘定法などに無關心な極めて少數の讀者に對しては、かゝる説明も必要があらう）、銅錢一錢を文と云ひ、十錢を一匹（又は十文）と云ひ、百錢を一結（又は百文）と云ひ、千錢を一貫と云ひ、四貫文を以て一兩とした。又一兩判以外の金銀貨には二分、一分、二朱及び一朱の四種類あつて、その價格は二分は一兩の半分、一分は二分の半分、二朱は一兩の八分一、一朱は二朱の半分（兩の十六分一）であつた。しかし金の價の貴かつた時代であるから、一般市井のやゝ大なる取引は、專ら銀をもつて行はれた、「もんめ」が即夫れで、銀六十匁を以て金一兩としたのである。十匁は兩の六分一、十五匁は同四分一、即一分と云ふに等しかつた。

彌次喜多の旅行、――一九が『膝栗毛』を書いたのは、文化十一年（紀元二四七四年）であるから、元文小判の行はれてゐた時代である。元文小判は重量三匁五分弱でその内金は二匁三分銀が一匁二分であつたから、今日の金價に換算すると凡十二圓内外に當る。此比價に依つて前掲程ケ谷の旅籠料二百文を、今日の貨幣に換算すれば六十錢に當り、草鞋一足・甘酒一杯・易

者の見料（各十六文）は各五錢弱、酒一合九錢五厘、安部川の渡し賃十九錢と云つたやうな計算になる。昔の一兩と今日の一圓とは、全然金の分量が異るから、我々が唯だ漠然と考へて居る程、物價は安くなかつたのである。

「も一つの方法は、米價を基準として割出す方法である。所謂『米遣ひの經濟時代』で有た當時のことは、金價を標準とするよりも寧ろ諸物價の基調を成した米價から割り出してゆく方が、興味もあるし、又經濟事相の眞に觸れ易いのではないかとも考へる。文化・文政は米價の安い時代で、文化後期の平均相場は、一石六十匁と見るが至當であらう、即ち小判一枚あれば米が一石買へた。今日の相場は一石四十圓から四十二三圓であるから、取も直さず其の頃の一兩（購買力）は、今日の四十圓内外に當つてゐる此標準で右の宿料を換算すれば一泊二圓、酒一合三十二錢草鞋一足十六錢、甘酒一杯同上、今村名物砂糖餅一個三錢、といふ勘定になる。一泊二圓といふ宿料は、今日でもずつと田舍へゆけば、左程珍らしい宿料ではなく、時に一圓七八十錢位の家も無いではない。

さて是から、各論に入る。

◇

川崎から神奈川迄（二里半）の駄賃馬二百文は、今日から換算すれば今日の六十錢に當り、一里二十四五錢の割合、乗合自動車の賃金と略ぼ等しく、米價から測算すれば二圓に當り、一里は約八十錢、今日の人力車賃と大差ない。

駄馬及び人足賃に就いては、享保三年日本橋の高札に、『品川迄二里。荷物一駄、九十四文乗懸荷（人共）九十四文、から尻一疋六十一文、人足一人四十七文云々』の掟があり、寶暦年間中山道輕井澤の駄賃附には、『坂本迄二里八町。本馬百八十文、輕尻百二十文、人足八十八文云々』とある由である。享保は文化より百年も以前で、且つ米價は一石三四十匁であつたから、一里四十六七文の駄馬賃も格別安直とは云へない。寶暦の米價は文化時代と伯仲し、從つて駄馬賃の率も亦大差ない如く見えるが、川崎神奈川間の道路坦々砥の如きに反して輕井澤坂本間は有名な碓氷峠越の難路である。金額は同一でも實質に於て非常に安いと云はねばならぬ。東海道筋と信州の山の中とは、當時にありても矢張り生活程度が違つてゐた、物價も安かつたと見るべきであらう。

南鐐一個。これは二十町遊廓で彌次郎が若い衆に呉れた祝儀。南鐐とは二朱銀のことである。一朱銀や一分銀の鑄造されたのは文政天保以後で、當時銀貨といへば南鐐二朱銀より外に無かつたから（丁銀・豆板銀は別として）、一般に單に『南鐐』

と呼んでゐたのである。『白金詰之銀、其表若詰之銀』で、銘とは上質の銀の事、南は『大明南金』などの南から來[illegible]で格別の意義はない。源平盛衰記に『南鐐』といふ名馬が出てくるが、太く、逞く、其毛色白きが故に、斯く命名されたとある。——おッと餘談に亘りすぎる、二朱は今日の金にして五圓、いかいかしみつたれの彌次喜多にしては、馬鹿に張り込んだものだ、府中（靜岡）は十返舍の故郷だつた哩、それ位の札びらは切らずばなるまい。娼妓の揚代上一分は十圓、中十匁は六圓半、下二朱は五圓に當る、玄米一石六十匁の時代としては、無理のない相場であつたらう。但『品川女郎衆は十匁……』といふ唄は、格安な所を云つたもので、要するに場末相場なのである。次は有松絞の相場——。

	（米價の換算）	（金價換算）
十二匁	八圓	二圓四十錢
十四匁八分	九圓八十五錢	二圓九十五錢
二十一匁	十三圓五十錢	四圓二十錢

この値が一般物價に比較して、安いものか高いものかは、一寸私には判斷がつかないけれど、十五匁に二分足らぬ十四匁八分などといふ、僅かの差で巧に買客の心を囚へんとする惡賢い値の付け方は、すでに其頃から行はれてゐたと見える。

『鍋燒うどん——』と來れば、後には極まつて『按摩上下さアんびやー——くもん』だが、その三百文とは何時頃の相場なのか、彌次喜多の拂つた按摩代は二人分で百文で行つた。百文あれば一升の米が買へた。是も適當の相場だ。巫女の謝禮二百文に對して、易者の見料十六文は些と酷の様な氣がする。大井川の輦臺渡し四百八十文は略ぼ今日の貸切自動車代に匹敵してると觀てよい。

◇

祇園の田樂茶屋で十二匁五分（七圓ほど）のつけを出されて、滅法ぼられたやうに騒ぎ立てるのは、受取れぬ話のやうに思ふ。道中の掛茶屋でさへ上酒は三十二文とある、京で評判のお茶屋で六十文（無論酒も灘の生一本であらう）は、當然すぎる程當然な値段ではないか。今日でも秩父山中の旅館などにては、お銚子一本三十錢から三十五錢である。が格別それを廉いとも思はぬ。都會の旅館や料理屋では六十錢位が普通だ。格別それを高いとは思はない。都會の六十錢を高いといふならば、田舎の三十五錢も亦、高いのである。要するに酒がちがふ。『田樂茶屋は名物だけに値も高い、』一九はそんな噂を聴いて、彼の喜劇を仕組んだのではなかつたか。すりや、責め二三十匁位のつけを出すべきであつたわい！豆腐の田樂といふもの、當時未だ江戸には行はれず、關東人には珍らしい名物であつた

らしく、太田南畝（蜀山人）の改元記行（享保元年、膝栗毛に先立つこと十三年）にも、その田樂茶屋の模樣面白く書いてある。

……祇園の社に詣で、門邊に出づれば、赤き前垂したる女共、手を連ねて人を止む。左右に葦簀掛渡したる床に上りて、名に負ふ豆腐の田樂といふ物にて、飯食ひ酒飲みつ。女どもの豆腐切る音喧し。隣の簀の中に、浮かれたる樣の人數多ありしが、女を呼びて豆腐切らしめしに、速く俎を携え來りて、切る音、七草囃す音にも似通ひたり……。

妙な調子をつけて豆腐を切つたるは、今日三味線入りでつくる博多餅と同じく、一種の宣傳策であつたであらう。しかし豆腐田樂は、祇園名物といふよりも、寧ろ「目川菜飯」と共に目川の宿（草津―石部間の小驛）の名物として名高かつた。此事は右の改元記行にも出てをるし、土御門卿の「東行説話」には、『菜飯田樂、我も好もしくはあれども、さながら打付にも言ひがたく（著者は公卿であつたから）……、白き扇たたみて褄いたう焦がしたるやうなを持ちて來りぬ、人の目顏忍びて、そと食ひて見たれば』、味は思ひの外まづかつたとある。所謂名物に旨いものなし乎。

大阪新町の九軒で鼓鼓ぬきの遊興。此の費用四十一匁四分（二十七圓餘）も、當時東都が一泊やっと一日が[illegible]と、驚く程高いものではあるまい。貸衣裳は上着が太織で、下着は小紋、北八が二が女物で間に合はせた。その損料の書付を取上げて、北八が「何だ〆て一貫八百文、此奴高え／＼ちつと負けて貰つてくんなせえ」と云ふは尤千萬、これは確かに不法な値と私も思ふが、愛は十返舎も、本氣で書いてゐるのではない。

かくて想ふに、當時は二兩か二兩二分もあれば、五十三次の旅は出來たものらしい。

赤穂義徒の旅費

旅費概算表をつくるに、最も簡便な方法は、宿泊料に三・五で乘じたものを一日の額とし、之に豫定日數を乘ずれば、求むる答が出てくる。これは私が多年の經驗から得た計算法であつて、殆ど誤りなきことを自信してゐる。仍ち宿料が二圓内外であれば一日の費用は七圓前後、三圓乃至三圓半位の地方ならば、一日の費用は十一圓乃至十二圓五十錢、大都會で一泊五六圓も要する地ならば、一日十八圓以上二十圓前後の標準で、旅費を準備しなければならない。但、旅館の茶代は宿泊料の五割、女中のチップは之に準じ、汽車賃汽船賃等は此計算以外だが、極めて短距離の馬車賃、乘合自動車賃、小遣及び[illegible]のビール代等は此中に含むと見てよい。

餘談に亘るが、この茶代といふ奴が、旅行者に取つては頭痛の種だ。まことに善くない慣習ではあるが、今日の如き宿料では、茶代をやらなければ、旅館營業は成立つまい。損はしないにしても、其の利益は極めて稀薄なものであるに相違ない。誰しも無駄な金は費ひたくない、と言つてけちな眞似もしたくはない。そこで自然、茶代で頭を惱ますことになる。特に、私の如く、一年の中ほぼ半ばを旅で暮らす人間に取つては、容易ならぬ問題なのである。

私は最初十割主義を採つてゐた。宿料三圓であれば茶代も三圓を置いた。私如き貧書生に取ては、過分では無いかと思ひつつも（確かに過重の負擔ではあつた）長い習慣で、變更ができなかつたのだが、去る大正七八年頃の宿料暴騰に會して、終に實行し切れなくなつた。彼頃は地方でも新潟、富山、仙臺などいふ大都會の一流旅館は、安くて五圓、高いのは七圓、一流の市街でも名ある旅館は、一泊三圓半から四圓が普通であつた。と云つて今更、知らない驛前の安宿へ泊る氣にもなれず、已を得ず茶代五割減を斷行して、自ら旅費の調節を行つた。今日は宿料が下落して、五割では些か氣の毒と感ずる場合もないではないが、其代り五割でも多過ぎると、思ふ樣な家もタマにはあるのだから、一定不變、宿料三圓五十錢であれば、キチンと一圓七十五錢の茶代を拂ふ。然り、恩惠的意味で與ふるのではない。寡少なる宿料の請求に對して、補償の意味で支拂ふのである。

話は元へ戻つて、文化文政時代の二兩二分は、その購買價値からいへば約百圓に當る。是だけあつたら、今日でも何うにか斯うにか、五十三次を徒歩で行けさうに思へる。

◇

箱根神社に所藏せらるゝ大石内藏助の『預り金請拂帳』なるものは、赤穗義士軍用金明細書とも稱すべき、貴重なる古文書で、義士研究者に取ては極めて興味のあるものだが、その中に、

金十兩　瀧立仙江戸へ下るに付用意として
金三兩　同路銀として、共に千葉三郎兵衛の手を經て相渡
金五兩二分　三郎兵衛出府に付、用意並路銀として相渡

など記載されてゐるのを發見する。即ち當時（元祿十四五年頃）に於ても、二兩二分乃至三兩といふのが、東海道五十三次の『標準旅費』であつた。

元祿小判は元文小判に較べると稍や品質が善く、一兩の金價は十三圓五十錢ほどに當るが、元祿十四五年の頃は米價が貴くて一石九十匁位の相場であつたから、その購買價値は今日の二

十七八匁位のものであつた。然し此の米價騰貴は、元祿八年（此年慶長小判を改鑄して品位を劣化した）以後同末年に至る、僅か數年間に於ける一時的現像にすぎなくて、その前後即元祿賓暦時代の平均相場を求むれば、矢張六十匁内外と觀ねばならぬ。從て二兩二分乃至三兩は、矢張百円から百二十円位に當る。

東海道五十三次を十三日間の旅として、私はこの總旅費を算出したのであるが、無論それには根據がある。源光行（海道記）は十四日間で京都から鎌倉に到着してゐるが、當時は未だ箱根越の道は無かつたらしく、足柄山を越えて逆川（酒匂）へ出た。それより四十六年後の阿佛尼（十六夜日記）は、箱根を越えてゐるが、日數は同じく十四日を費してゐる。老婦人としては、健脚寧ろ驚くべきものである。以上は倶に鎌倉時代だから、江戸時代に比して交通は遙かに困難であつたに相違ない。

江戸時代に入つては、蘭人ケンフエルは二回の往復ともに、京都江戸間を十二日で達してゐる。土御門卿（東行説話）は十一日にて川崎に達し、十二日早朝すでに江戸に入つた。これは餘程急行の部だ。大石内藏助が初度出府の際は、山科から江戸迄十三日、再度の下向には鎌倉まで十六日を費してゐるが、これは荷物の多かつた爲と、他に事情もあつたから除外例とする。太田南畝（改元紀行）は十三日で江戸から京都に達した。

爰に面白いのは、ケンフエルの旅行紀中に、「參勤の大名は、——京都より江戸迄を十三日間に行かねばならぬ。たゞ血族の大名と、薩摩公のみは此の規定外だが、彼等は大抵此以上の日數を要する』と書いてをる事である。或はさういふ内規があつたかもしれない。「改元紀行」は旗本の士であつた太田南畝が、享保元年幕命により大阪の銅座へ出張した時の紀行で、所謂官費旅行だ。江戸京都間を十三日間で行つたのは、乃ち右内規に依據したものとも見られる。

東海道百二十五里、是を十三日で踏破するには、一日平均九里半强を行かねばならぬ。途中には箱根、鈴鹿の兩峠があり、宇都、小夜附近も山路である、多少は駕籠や馬を利用するとしても、樂な旅ではなかつた。殿樣は駕籠でも、お伴は徒歩だ、脚が健でなければさむらひといふ職業も勢まらなかつた譯である。私の徒歩行程は一日平均六里半六里の日は多少餘裕があり、七里の日は少々草臥れる、古人の足跡を顧みて、些か忸怩たらざるを得ず矣か。

然し實際は、三兩はかゝらなかつた。二十一兩一分と銀十匁四分二厘、これは大石内藏助初度出府の折の總費用で、東海道

往復の路銀と、二十日間の江戸滯在費とが含まれてゐる。此行、往きには奥田將監外四士を同伴し、復りには進藤源四郎外三士を同伴した、外に一二名の家來をも作つてゐたであらう。一行の凡ての費用が此會計から支出せられたか、或は滯在費等は各別であつたか、その内譯はわからないが、金三兩あれば、當時東海道往復が出來たと、視られぬでもない。

尤、どんなに高くも、安くも、旅の出來ることは今も昔も變りはない。享保頃の『定め』に、泊々にて木賃錢主人一人三十五文。召使一人十七文云々とある。

和蘭使節の旅費

次は、長崎—江戸間の一往復旅行に、七千二百兩（今日の三十三四萬圓）を費したといふ、痛快なやうな、氣の毒なやうな話をする。

曾て瀧川玄耳氏から、『ケンフエルの「長崎から江戸まで」といふ旅行記は、是非一度讀んで見給へ。面白い事も面白いし、又非常に參考となることが多い』と勸められて、私は初めてそれ（衞藤利夫氏譯）を讀んだのであるが、いかにも、私の眼を通した旅行記中で、此書ほど私を益した書は、後にも前にも無かつた。

ケンフエルとは五代將軍綱吉時代に、長崎に居た蘭醫で、元祿四年及び翌五年の兩度、和蘭使節に隨行して江戸へ、彼れが『所謂參勤旅行』をした。その際の見聞を細大漏らさず記録したものが、此旅行記である。當時長崎の和蘭商館は、在バタヴイア總督の管下に屬し、總督は每年一回、江戸の將軍に使節を送る慣例であつたらしい。ケンフエルは一日の中に幾つの橋を渡り、その橋の長さが幾百步あつたかまで勘定した机帳面な人で、此の異國の旅に於て、彼は日々遭遇する總ての物象、凡ての事件に對して、驚異の眼をみはつた。そして、此國の如何なる旅行家もが『平凡、誌すに足らず』として、顧みなかつた事柄をも、彼は克明に書付けて置いてくれたのである。

今日我々が徳川時代を眺める眼と、當時ケンフエルが日本を眺めた眼とは、丁度同じものである。當時にありて『極り切つたこと』が、今日我々には疑問である如くに、彼にも亦疑問であつた。しかも此旅行記は、彼れの單なる備忘錄でなくて、本國人に讀ませる爲に書いたものだ。此點が即ち今日我々が、本書に依つて敎へらるゝ所、甚多き所以なのである。——然し、私が爰に引用せんとするのは、主らその旅費に就てゞある。

◇

彼等が一回の旅行に要せる費用として、彼れの示せる概算表

一。

○一日分の食料及宿泊料五兩、陸上一箇月の旅行にて……三〇〇兩

○江戸大阪間に於ける荷物運搬費。馬四十頭、人足四十人、舊來の協定に由り馬一頭十五兩、人足一人六兩の筈であるが、實際の支出額は………一、八〇〇兩

○旅中雜費として一行中の人員に配付したる金額…………六〇〇兩

（蘭人は一人五十四兩。其他身分に應じ各高低がある）

船一艘の備入費、船頭給料、船内設備費、同修繕費等…………六〇〇兩

○海上旅行中の食料其他……六〇〇兩

○諸手當…………六〇〇兩

○乘物及駕籠の備賃、渡し賃、其他雜費……………一、二〇〇兩

合計七千二百兩、以上は純旅費と觀るべきもので、此外將軍、幕府の重臣及び長崎奉行等に對する獻品財物等の費用四千八百兩をも加算する時は、其の總額一萬二千兩に達したといふ。さりとは、驚くべき莫大な費用である。

元祿四年五年に、米一石の價四十匁から五十匁、金一兩あればば一石二三斗の米が買へた時代だ。購買價値から云へば、當時の一兩は今日の四十八圓以上に當る。然らば純旅費七千二百兩は三十三四萬圓、總經費の一萬二千兩は五十七八萬圓に相當する譯である。金價から換算して見ても、當時は未だ慶長小判の使用せられてゐた時代で、慶長小判は品位が高く重量四匁八分の内四、〇五匁が金であつたから、今日の二十一圓程に當る、即ち慶長小判七千二百兩は十五萬圓强の實價を有する。

一行の人員が、可なり多數であつた事は推測できるが、同時に、百人の二百人のと云ふ多數ではなかつた事も想像できる。一日の宿料小判三枚だつた、と云ふ事に依て想像ができる。私の計算法即ち一日の宿料二兩に三・五を乘じ是に所要日數六十日を掛けると、六百三十兩といふ數字が出る、外國人でもあり荷物も多かつた樣だから、若干の割增を認めて、大衙發で二を乘じて見た處で、漸く千二百六十兩となるにすぎない。何としても、五千兩の七千兩のと、要する旅行ではなかつた。

恰も鷄の毛でもむしり取るやうに、彼等蘭人の隨行者、若しくは其の指揮者等が、如何ばかり猛烈に、蘭人達の金を貪り取つたか、二三の實例を擧げて説明して見よう。

諸手當六百兩の中、三百兩は「一行の司令長官たる奉行」への心附である。その「奉行」とは、一行の旅行[illegible]として附け

られた、長崎奉行配下の一與力である。與力などは、餘り身分の高い士ではない。當時三百兩あれば四百石の米が買へた、今日四百石の米を買ふには少くも一萬六千圓を要する。これが彼等の隨行員指揮官たる一與力に對して、贈らねばならぬ手當であつた。幸福なる與力よ、一度江戸迄行つてくれば成金になつたぞな。

大井川渡しの條に、『其賃銀は河の深さ水の高さに應じて高低あり、之を計るには岸に立てる標柱を以てす。吾等の渡りし時は、水甚淺くして膝に達せざりしも、馬一頭に付五人の介添人を附けられたり』とある。水嵩高き時は、十三人を要するのだ相である。

或時は又、『鯛は、日本語のめでたいのたいで、公式の宴會には無くてならない魚だ。或宴會に用ひられた二尾の鯛は、其價小判百五十枚であつた』なぞと、途方もない駄法螺を吹かれてゐる。一尾四千圓の鯛が、どこの國にあるものか。

然し、無法な金を取られてゐるとは、蘭人自身百も承知であつた。荷物運搬費千八百兩の註に、その過半は通譯の懐中に入るのだと云つてるし、京都で買ひ物をした條にも、『此地にて我我に賣らるゝ品物の高價なることは、殆んど出島（長崎の蘭人居留地である）に於て、物價を決定する一定の人ありて、出來得る限り吾等に不利なる評價を成せるものと、殆ど相匹敵する程なり』と書いてある。

『ノリカキとて、二個の行李と一個のアドフスキイとを具へ、旅人を乘せて行くべき馬は、一里三十三文にて之を傭ふことを得べく、カラシリは同じく二十五文、人足及籠舁きは十九文なり』

と、駕籠や駄馬の相場をも心得てゐた。私は今日これを讀んだだけでも、背に冷汗を感ずる。と云つたら昔の男が、「利いた風なことを言ふな、お前達の時代にだつて、否つい四五年前迄は、異人相場といふものが行はれてゐたではないか。今日だつて地方へ行けば、絶無とは云へないぞ」と怒鳴るかもしれない、いや益々冷汗が、流れる流れる。

だが、當時の蘭人等が、かかる暴虐に近い行爲をも隱忍しつつ、極端に窮屈な通商をつづけてゐた處を見ると、彼等は又彼等で、其を償うて餘ある、暴利を貪つてゐたかもしれない。一概に此方ばかりが、恐縮することは要らないかも知れないのである。

◇

『比丘尼とて、歌を唱ひ、旅人を慰めて物を乞ふ乞食の女あり。

『山伏（ヤマボス）は旅人に向ひ、長き長き言葉にて何事をか語りて、語り終るや否や、介殼にて作りし喇叭を吹立てゝ、驚くべき響きをなす……。

江尻より淸水港を望見して『其處には皇帝（將軍のこと）の軍船數隻を繫留せり。軍船と稱すれども實は第一級の荷船にすぎず……。

赤坂（アカサツャ）にて『各旅館には必ず相當の娼妓の數を蓄へ、厚化粧を施して客に侍せしむ。之を以て此町は公娼の倉庫といふ稱呼を得たり……。

ケムフエルの觀察と批評は、つねに斯く奇拔であり痛快である。當時興津の淸見寺附近に、『九軒或は十軒の瀟洒なる』蔭間茶屋の在つたことなども、彼の旅行記に依て、私の始めて知り得た事實の一であつた。陰間が此地の特產であつて、その陰間を賣る如く裝ふて、實は色を賣つてゐたと書いてゐる。且、始終鹿爪らしく嚴肅その物の如き風を裝うてゐた『一行の司令長官たる奉行』も、こゝではその乘物（ノリモン）を出て、是等の少年と共に半時間餘を費消したことを素破拔いてゐる。

祇園の『宏大なる鳥居（トーリー）』を出ると、『娼家を以て滿たされた町』があつた。それに就てケムフエルは、左の如き不思議な叙述を試みてゐる。

『是等の娼家は、各戶に就き二人以上の娼婦を蓄ふることを禁ぜられたり。是各戶をして斯る商賣の爲に、大に富むことを得ざらしめんが爲なり。最も美なるものゝ價は一夜三文、中位に在るもの二文、最下等なるもの一文なり』と。

京都市史によれば、今日の祇園新地は、元和初年頃には未だ一面の畠地であつた。その畠の中に、祇園や淸水參詣者の爲の休茶屋などが、ぽつりぽつり出來始めて、正德の頃にはすでに立派な花街となつてゐたらしいが、元祿の初期時代には、此ケムフエルの記載に依ても、ちよんちよん格子式の下等な娼家があつたに過ぎなかつたらしい。或は私娼窟の如きもので、あつたかもしれないと思ふ。

それにしても、一文二文といふ相場はあるべきでない、著者の聽き違ひか、譯者の書き違ひか、原文を見ないから判然せぬが、兎に角文は匁の誤りであらう。當時の一匁は今日の約八十錢に當るから、二匁は一圓五十錢三匁は二圓五十錢だ、東京にもつい近年迄、ワンダラーなど云ふ家があつたからね、二匁三匁の私娼も其頃としては不思議でない。殊に、元祿は男色の大に流行した時代で、京の宮川町は、所謂かげま茶屋（小供茶屋とも云つた）が軒を並べてゐた處である。その揚代に大小の別あり、小といふは一時（今の二時間）一限りの[illegible]で、昔は

二三種、酒は客の飲る程を勘めて、金一分であつたと云ふ。當時の一分は、米價換算で今日の十圓餘に當る。

『御酒肴附にて金十圓』。今日でも時々は斯うした廣告を、都新聞などで見受ける。無論駒込とか五反田あたり、場末の待合ではあるが。

幕末時代の旅費

栗本鋤雲の『登嶽日記』は、弘化三年の夏金峰山に登つた時の紀行で、弘化三年は江戸時代も已に末期、明治といふ年號になる僅か二十二三年前である。詳細な紀行は回祿の災に罹り、後日小遣帳に依て追記したものだといふが、如何にも、小遣帳から生れ出たやうな紀行である。

閏五月二十五日。晴。早發、國領村にて午飯、火酎二、小蕊を用ゆ、價二百七十二文、肴に炙卯鹽魚あり。午後驕陽炙るが如し、日野宿玉屋に投宿、旅泊價二百二十四文。二十六日。午後疎雨遠雷。早發八王子驛を過ぎ駒木野驛鍛冶屋に午飯す。八十文、殽に鹽炙の香魚を供す。小佛嶺を踰え二瀬越を渡り甲州の地に入り、上野原に投宿す。宿價二百三十二文。此家の標記に、米價一舛百六十四文に付旅籠代増、右の通りと書しありし。

是日途中費す所、二瀬越にて火酒一器八文、香魚鮨一個五十文、煮香魚一尾十二文。渡し錢八文。關野にて饅頭の餡に鹽を以て糖に代ふる者一個八文。草鞋二十四文。

二十七日。朝疎雨、晴れて後發す、鶴川に至り又雨降り、乍ち止み虹見ゆ。長峰猪の目を過ぎ猿橋に至り午飯す、價八十文。

是から以後は知人の家に泊り、知人の案内で山にも登つた爲か。路用のことは誌してない。宿屋の茶代、女中のチップ等に就ては、少しも記載がない。それは『膝栗毛』などにも、矢張り一個所も見當らない。茶代などいふ惡風は、いつの世よりかは始まりけむ、昔は一般下ざま迄は行はれたかつた事のやうである。

白米一舛百六十四文の時代に、二百廿四文乃至二百三十二文と云ふ宿料は、安すぎる。更に僅一日の平均路用は四百六十文それで處々で一杯やつてゐる、鮨の安かつたことも、羨ましい限りだ。

鹽味饅頭は播州赤穂の名物とのみ思つてゐたら、八十餘年前已にこんな山の中で賣つてゐたのである。その鹽餡で、圖らず河上肇博士を想ひ出す。私は氏がまだ「讀賣」に入る以前から或る關係で氏を知つてゐた。氏は駒場の農大の講師をしてゐた

のだが、その頃一寸流行つた『無我愛』宗に熱中して、大學を飛出し、「讀賣」に入社して筆の人となつた。そして社會主義評論や産業視察記など、同氏の連載ものは、若い學生の多い同紙の讀者には、可なり歡迎せられてゐた。氏は頗る貧乏だつた。尤その頃は、誰だつて、文筆にたづさはる者は、皆貧乏だつたのである、十年かそこいらの後『文筆成金』が續々輩出しようなどゝは、夢にだも想はなかつた時代である。『三つ揃ひ三十五圓』といふフロックを、氏は年中着てゐた。が、一帳良ぞろひの編輯局内では、氏のフロックは寧ろ異彩を放つてゐた位のものだ。然し懐中には、常に金は無かつた――甚失禮な推測だが。僅少な月給も、貰ふとすぐ本を買つてしまつたやうである。

社のわきの河岸ぷちに、稲荷ずしだの大福餅だのを並べた屋臺店が、毎日出てゐた。正午になると、氏はよく給仕にその大福を買はせて、暖爐の鐵板の上で燒いて、晝食代りに食べてゐた。大福に甘いのと鹹いのと二種あり、氏は毎に鹽餡の大福を買つた。確かその頃は一個一錢だつたと記憶する、可なり大きな奴で、三個もあれば氏は滿腹したやうであつた。誰だつて貧乏ではあつたが、鹽餡の大福で腹をこしらへた人は、河上肇氏と、それから今一人、前橋伊八郎といふ論説擔當の老記者とのみであつた。

此頃、多年各地で買集めた繪葉書の整理をやつてゐると、行李の底から肇氏の寫眞が出て來た。自署して私に贈られたもので、例のフロック姿のキャビネ板である。私は懐かしさに、暫らく見詰めてゐた。今は何うだかその頃は痩せてゐた。飄々乎とし、仙人じみた風格、鹽餡時代の博士の面目躍如たりである。

あの大福は、正宗白鳥氏も上司小劍も、よく食つたものだつた。

◇

登嶽日記の著者は、そこから富士に登つて、甲府へ出で、昇仙峽の勝を探つて猪狩村の圓右衛門を訪ふた。丁度「御嶽新道」(昇仙峽こと)が開けたばかりの時で、個人でその道路を開いた圓右衛門は未だ生きてゐた。新道ひらけて一番にやつて來たのが平岩飾齋、次が横山湖山、三人目が著者栗本鋤雲で、湖山とは僅かに一旬を隔つるのみだつたといふ。

圓右衛門は大に喜んで、鋤雲を金峰山に案内し、其家に一泊せしめ、翌日甲府まで送つて出たところ、鋤雲が宿痾を發して吐血した爲、彼は五六日滯留して看護し、病少しく和らぐを待つて、谷村なる鋤雲の知人方まで送り届けた。そして一旦甲府へ歸つたが、翌日再び暇を聞いて谷村に到り、その病状を問ふ

た。三十餘年の半生を傾けて、獨力此の勝境を開いた百姓岡右衛門翁は、初對面の一遊客に對して、斯く迄懇切な人間であつた。私は寧ろ此點に於て、翁をより多く敬慕したい。昇仙峽の岡右衛門翁碑には、こんな事蹟は誌してなかつた。

鋼雲は、病氣に罹つたのみでなく、六月十八日午後から始まつて、翌月初旬に亘る大雨、及び之に伴ふ出水の爲に歸路を沮まれて、東京に歸着いたのは七月十一日であつた。而して特に、

九日。午前小雨時々來り、午後全く晴れ、大和田川水落ち渡るべし、即發し（八王子）日野驛に宿す。此日輿を捨てて歩す。草鞋の價米論に加へず、宿價亦米時に増さず。

と書いてゐるのは、此記の目的が、多雨の年と雖、夏間暑熱を失はざれば、水害を免るゝの地は、稔を損ちざるを證し、併て物價年を逐ふて倍徙するを證せんとす』るにあつたからである。即ち稲の登熟季又は收穫季に、霖雨があれば、直に物價の暴騰を來す恒例であつたのが、今年は不思議にさういふ現象もなかつた。經濟事情の漸く變化しつゝあることを、彼は發見したのである。——同時に、その古い小遣帳をくりひろげて、

『ふゝん彼の頃は、鮎の煮たのが十二文、酒が一カップ八文だつたなあ。少時の間に斯うも物價が騰つたのかな。斯うして書付けて置いたら、百年も後の人が見て、何んなに驚くだらう。』

こんな氣持で、鋼雲は此紀行を書いたものらしい。仍で今日私のやうな人間が現はれて、

『へえ、鮎の煮びたしが十二文で、鮓が五十文か。俺が此間多摩川の上流で食つた鮎の鹽燒は、一皿八十錢だつたぞ。一皿は即ち一尾だ。』

と書く。もう二十年も經たら、一尾十圓の鮎を食つた男が、又此つゞきを書くであらう。

酒に對する社會的、生理的批判

井上正賀

一

右手に黄金、左手に劍、而して口に正義人道（？）を唱へながら、自から世界の覇者を以つて任じて居る米國は殊勝にも徹底的に法律を以つて禁酒を斷行した、とは確かに近來の世界に於ける興味ある出來事の一つである。歐洲戰亂中ロシヤもその改造前には禁酒令が發布された。

而して、世界に於ける一部のキリスト教徒が頻りと禁酒を主張して居ることは、みな、人々の知れるところである。そうかと思ふと世界一般に於ける酒の消費量は年々に増加し、我邦でもビール、葡萄酒の消費量は増加一方である。日本酒の造石高は年に依つて多少の増減はあれど大體に於いて増加の方である。米は之れが爲めに年に二千萬石内外が費さるゝから、或る論者は頻りとそれについて氣をもんで居る。要するに酒は社會的にも、個人的にも常に物議を醸すの材料となつて、從つて之れに關して的確なる批判を試みることは非常に興味ある重要なことゝ思ふ。

二

すでに、太古原人時代に酒が用ゐられて居つたことは、現に濠洲の生蕃が極めて原始的な釀造法に依つて一種の酒を造つて居るのを見ても明らかである。我邦の神代時代、數千年前のエヂプト、アッシリア、バビロン時代にすでに盛んに葡萄酒、ビールに似た酒などが用ゐられたことが種々なる事實に依つて知られて居る。特に葡萄酒などは、只その汁を搾つて、皮と共に瓶に詰めて密閉して冷たい場所に於いて置けば獨りでに醱酵して容易に酒となるから、古き時代にも、盛んに用ゐられて居つたものと見える。支那ではその文化が古い丈け、それ丈け極めて遠き時代から用ゐられた形跡があり、その原料としては、米、粟、麥などの原料を用ゐて一種特殊の種々な酒類を造つて居つたこ

とが明である。彼の老酒（ローチュー）などはその名の如く餘程古き時代から用ひられたものと思はるゝ。そして、支那には古くから種々な精力劑を溶かした酒を用ゆる風習がある。またアメリカのインヂアン中にも特殊の酒が行はれて居る。要するに酒類は極めて古く且つ廣く人類一般に用ゐられて居つたことは確かだ。

三

恐らくかゝる古き時代には只人々が勝手に造つて、勝手に飲んだものに相違なく、元より高き租税とか、禁令とかはなく、極めて自由にその功徳に浴して居つたらうと思はるゝ。近代になつて、社會の狀態が複雜となるに從つて、種々なる理由、特に精神的煩悶者、勞働者、單なる享樂者などがその特殊なる生理作用を濫用して、過度に之れを用ゆるの風漸く盛となり、從つて、種々なる弊害百出し、爲めに禁酒說、節酒說が起る他方には酒を讃美する者も現はれ、酒に對する利害兩方面の論議漸く盛んとなり、今に至るも、その是非の判斷容易に決せざるの有樣である。茲に序手に少しく述べたきことは、世人の多くは禁酒說とキリスト敎と關係があるやうに考え、また、キリスト敎徒は禁酒は恰もキリストの意であるが如く考へて居る樣であるが、それは大なる間違で、キリスト自身は啻に酒を禁ずることを弟子達に向つて語られたることもなきのみならず、却つて婚禮の席にて奇蹟に依つて水を葡萄酒に變じて列座の人々にふるまはれて居る。たゞ、その弟子達がキリストの意を曲解して勝手に酒の害のみを說いたもので、キリストは斷じて禁酒論者ではないのである。

四

およそ、何事でも、何者でも、その性質、性狀が漠として廣大なるものは、それに對して、議論百出で、それを是とするもの、非とするもの計り知るべからざるものがある。之れを人物に例ふれば、日本の產出したる大人物の一つたる西鄕隆盛は今でこそ、上野に銅像となつて萬人の喜隨尊敬を一身に集めて居るけれども、西南戰爭には國賊として、あわれ、鄕里城山の露と消えたのであつた。象を數人の盲人が手さぐりで見て、或るものは足をさぐり當て、太き柔かき棒のやうなものだと云ひ、或るものは象牙をさぐつて、大きな堅き角のやうなものだと云ひ、また、或盲人は耳をなでゝ、毛皮のやうなものだと云ふたと云ふ。之の例へ話は以て酒の如き漠たる複雜なる性狀を有するものゝ批判に引き合ひに出さる可きものである。もし、それ、それを大所、高所より達觀して、その全體を見極め或はその微

細なる點をも研究して、之れを巧みに應用するところにその價値の眞價が見はるゝのであるとすれば、吾等は酒そのものゝ性質を先づよく研究し考慮して後、徐ろにそれを應用するの道を講ぜねばならぬ。

五

米國其他の禁止論者の禁止說は元よりその害の方面のみを見たところから來て居る。乃はち、酒は家庭を破壞し、筋肉を痲痺せしめ、身體組織の細胞を萎縮せしめ、血管を硬化し、性慾を興奮し、神經系を害し、知覺を失はし、精神を錯亂し、判斷力を鈍くし、記憶力を失はしめ、罪惡を增長せしむる等の數限りなき種々の理由を列擧し、統計的に之れを證明し、以つて、社會的、個人的に害あるものとの斷定から、禁止令を發布したものである。

然かし筆者の露骨の考から云ふと、米國が禁酒令を斷行した眞意は、その有する、猛烈なる國家主義の高唱から國民の體質を改造し、優良なる體格の所有者を造り一朝事あるときの用に備えんが爲めであると見拔いて居る。之れを後に述べるところの生理作用から見ると、酒は寧ろ中年以上の老者には生理上必要だけれども、戰場に送り出すやうな青年、壯年者には生理上の必要は少ない。かゝる時代には思想未だ堅まらず、寧ろ酒を濫用して、徒らに種々なる害毒を流し、身體を害し、一朝事ある際の大なる缺陷を來たすのは事實であるから、かゝる立場から斷然として禁止令を實行したのであらうとも思はるゝ。かゝる具體的の論議に迄果して米國當局者が思ひ及んだかどうかは斷言しなくとも、少くとも、禁酒令と彼國の國家主義の高唱とは離る可からざるものであると云ふことに讀者は最大の注意を拂つて貰ひたい。

六

之れを個人について見ても、禁酒を斷行すると云ふことは容易ことではない。況んや、國家として之れを斷行すると云ふことは極めて困難なことである。然かも、その萬難を排してまで米國が之れを斷行したことは、その志や小ならざることを示して居る。我邦の識者は此點に深甚の注意を拂つて貰ひたい。

禁酒を斷行し、而して排日を斷行し、その次の斷行は果して何んであらうか。「衣到骭、袖到腕、腰間秋水鐵可斷、馬觸斬馬、人觸斬人、十八結交健兒社、北客若來以何酬」とのアノ兵兒の歌を米國が先づ實行したかの觀がある。吾等の同胞よ、兄弟姉妹よ、來る可き何物かを迎ふるの覺悟がなくてはならぬ。

七

さて、かくの如き米國の禁酒の斷行が果して、合理的であるか、世界人道の立場から考へて、國民の酒に對する意思の自由を奪ふことが天意に協ふか、どうかと云ふこと〻が、米國がイツ迄之れを實行するかどうかと云ふこととは自から別問題であるが、吾等は、それは、米國が爲にするところあるが爲めの人爲的行動であつて、必ずしも自然的の行爲ではないと思ふ。吾邦の軍隊では戰時中總攻擊の際にその行動を花々しからしめんが爲めに特に酒を用ゐたことの可否は別問題としても、酒本來の性質から論ずれば、それが百藥の長となり、或は百毒の長となるのは、それを用ゆる方法、分量、時期など〻連關して決定すべきもので、如何なる毒物でも、用ゐ樣に依つて藥となることは人々のみな知れる如くであるから、吾等は酒の如き極めて複雜なる性狀と生理作用を有するものは、よくその性狀を研究して以つて百藥の長たらしむることが吾等の正しく勉むべきことであると思ふ。抑も、人類に備えられたる靈智靈能天地間の萬物を化して利用厚生の用に供することに於いてます〳〵その眞價が發揮せらる〻のである。吾等は酒を百毒の長たらしめずして、須らく百藥の長たらしめたいと思ふのである。

八

況んや我が邦に於いては、昔から冠婚、葬祭の大儀に酒を用ゆるの習慣があり、か〻る習慣が必ずしも惡しいと斷定することは出來ない。飮食の友は眞の友にあらずなど云ふ東洋の言葉もあるけれども、吾等は互に相親む可きものに自然に造られて居り、その親交の一つの媒介物として互に酒盃を交はすことは決して惡しき習慣ではない。實際問題として社交上から酒を除けば極めて無趣味なものとなり、又人生それ自身が單に實質的にのみ生活するものに出來て居らぬ以上は、特に宴席に酒をヌキにして、心に愉快を感ぜざるに故意に笑顏を造るやうな僞善的行爲をする必要もなからう。好まぬ人は飮まぬでよし、好む人々は任意的に飮んで大いに樂しみ、大いに働くことは之れまた、人生を意義あらしむる所以と思ふ。だから筆者は禁酒論者でもなければ別段に飮酒論者でもなく、飮むべくして飮み、飮むべからずして飮まず、任意的に人々の自由に任かすべきものと思ふ。『酒なくてなんの己れが櫻かな』と古人は歌ふたが、これは實際的に一面の眞理を穿つたものだ。酒は飮食物中でも一番萬人の嗜好に適するやうに出來て居る。されば、吾等はよく〳〵酒の性質、性狀、生理作用を研究して用ゆること尙ほ他の飮食物の

性狀や生理作用を研究すると同樣、若くはそれ以上でありたい。なぜかと云ふと、酒は以つて百藥の長たり得可き可能性があるからだ。

九

人々の知れるが如く酒には日本酒、ビール、葡萄酒、ウイスキー、ブランデー、ベルモット、シャンパン等數へ來れば數十種からあり、從つて、その成分、性狀、生理作用を異にし、一口に論ずることは出來ない。只その共通の點としては、何れもアルコール分を含むことであるが、然かも、そのアルコールにしても、原料の種類に依り製造法の異なるに依り、他の成分との配合の異なるに依り、酒の種類の異なるに從つて自からその分子の構成に差異があり、從つて生理作用にも影響を及ぼすのであるから、種々研究を要するのである。今酒の一般生理作用を論ずる前に、少しく主なる酒の種類の個々について少しく述べて見やう。

一、日本酒、　は云ふまでもなく米より造り、從つて米の含有する特異の成分と味とを有し、少量の蛋白質物をも含み、諸種の酸類を含み、ヴイタミンA、Bを含み、糖分を含み、之れを單に滋養飲料として考へても、相當のカロリーもありて、誠に良好な飲料である。特にその成り立ちがアノ、タカヂアスタスの製造原料たる麴菌の作用に基づくのであるから、自からヂアスタース其他の極めて身體に有効なる消化醱酵素を含み、食物の消化を助くるの作用もあり、之れに微溫を加えて之れ等の作用を振興せしめて飲むのであるから、アルコールの生理作用をヌキにして考えても、生理上極めて有効なものである。況んや、之れ等の成分が平均十四パーセント位のアルコールと抱合せられ、丁度人身に好適なる分量のアルコールを含むのであるから、適量例へば、大人が一日約一合乃至二合内外の量で用ゆる場合には、生理上から見て、身體に大なる効果を與ふるのである。

二、ビール、ビールは麥から造る丈けそれ丈け、米から造る日本酒とは自からその成分を異にして居るのは云ふまでもない。同じく、蛋白質と云ひ、澱粉と云ふても、米に含むものと麥に含むものとは自からその分子の構造が異なり、從つて生理作用を異にして居るのであるから、同じ酒類でもその原料の異なるに從つて自からその生理作用を異にするのである。大體に於いて、麥は米とは異なつた方面に於いて身體に精力を與ふるもので、糖分が興奮性を帶び、性慾との關係も多く、競馬などに特に蒸麥を用ひてその精力を猛烈ならしむるに見ても、これが明

らかである、されぱビールは又日本酒の及ぶ可からざる特異の生理作用を有して、適宜に之れを用ゐるに於いては疲勞を慰し、元氣を恢復せしむる上に効が多い、そして、ビールはアルコールを含むこと酒類中最も少なく、僅に平均五パーセント位のものであるから、獨逸あたりでは之れを酒類の部に加えず、普通の飲料として、婦女子、子供に到るまで、日常飲用するの風がある。ビールはやはりその原料より來るヴイタミンを含み、消化酸酵素を含み、而して、その製造の際に用ゆる苦味料ホツプは苦味を有しながらも人々の嗜好に適する風味を有し、胃液の分泌を促して健胃劑としても相當効果のあるものであり、尙ほビールの沸々たる泡沫は夏季渇したる際などには、冷藏庫の冷氣と相待つて人々の飲慾をそゝるのである。されば、吾邦に於いてもその消費高年々に高まり、日本酒を壓倒するの傾向さへある。又冬季とても濃厚なる食品を調和するの効があり、活氣旺盛なる人體には最も適當なるものである。

三、葡萄酒、　葡萄酒が單に嗜好飲料としてゞなく、また、藥用として廣く一般に用ゐられるゝのは人々の知るところであるが、之れを適宜に用ゆる場合には病人や虛弱なものには大なる効果がある。玆に葡萄酒と云ふのは眞に生葡萄酒のことで、市場に多くある砂糖を混じた甘味のものではない。葡萄酒はその名の如く葡萄果の汁を搾り醱酵せしめたもので、米や、麥から造る日本酒やビールなどとは、自からその成分と生理作用とを異にして居る。その之れ等と異なる主なる點は、その酸味と澁味の多きことである。本當の生葡萄酒なるものは慣れないものには酢ぱく、澁く誠に飲みにくきものであるが、その眞の味を解し、數百年を經過し、一瓶の價また數十金、數百金を數ふるやうなものは所謂美酒として何物も及ばざる特殊の風味を有するのである。而して葡萄酒のアルコール分は殆んど日本酒と同樣で平均十四パーセント位のものである。そして、その葡萄酒の含める特殊の酸味と澁味とは他の成分と相待つて身體に大なる効果を爲すもので、酸味は血管の硬化を防ぎ、身體の過剩の礦物質の蓄積したるを溶解して筋骨を若返らし、澁味は筋肉の弛緩を引き締めて活力を增ましむる等の作用を爲すのである。葡萄酒に比較的多量に含めるコハク酸などは他の成分と相待つて誠に良好な作用を身體に及ぼすのである。

四、ウイスキーブランデー等、之れ等は何れも以上述べた酒類に比して、アルコール分强く、三十、四十パーセント位のものさへある。之れ等は種々の穀類より製し、米國あたりでは主として玉蜀黍から造つて居る。又日本の燒酎、泡盛などは酒粕を蒸溜して製することもあるし、甘藷其他の澱粉質を含有する植

物から製するのであつて、その原料の相違によつて自から風味に差異を生ずるのは云ふまでもない。之れ等の酒類はそのアルコール分が多い丈けそれ丈け之れを飲用する場合には神經系を刺激する事多く、血液の循環をも猛烈に運進し、從つて心臓の鼓動を劇しくし、身體虚弱なものに相當害があるが、强壯なものが適當に用ふる場合には人々の考ふる程には害のあるものではない。ウイスキーなどの上等品は特殊の良好なる香味があつて、飮酒家の飮慾をそゝることが極めて多い。故伊藤博文氏はブランデーの愛飮家であつて、常に之れを用ひて、議會で演說の際でも常に酒氣紛々たるものがあつたといふ。之れ等の强烈な酒類でもその原料、製造方法異るに從つて自らそのアルコールの分子の構造を異にし、從つてその香味や生理作用が異なるのは云ふまでもない。

五、支那酒、　支那酒にはその種類極めて多く、老酒、高粱酒、紹興酒、五加皮酒、梅酒、等色々なものがあるが。主としてその原料は米其の他の穀類が多く、餘程日本酒に似て居る。されど、老酒、紹興酒などを除くの外は概してアルコール分强く中々强烈である。而して支那酒について特に述べることは、昔から、支那人は酒に種々な材料を溶解して用ふる風習のあることである乃はち、蛇、虎骨、トカゲ類、五加皮、何首烏、諸動物の臓腑、肉や角の類、諸種の植物等を永く酒に侵して自然との成分の溶解するのを待つて用ひる習慣があり、中にもマムシ酒なるものは精力劑として優等なものとして貴ぶ風習がある、かゝる酒類は現代の學理上から云ふでも必ずや相當効果のあるものゝやうに思はるゝ。

六、諸酒類、　すべて、果物、例へば、林檎、イチゴ、梅、バナゝの如きもの又、諸種のイモ類例へば馬鈴薯、甘藷の類それから何れの穀類でも、いやしくも、糖分、澱粉質を含むものは何れも醱酵せしめて酒類を醸造され得るもので、從つて、世界中には色々の酒がある。臺灣の生蕃は粟から一種の酒を造るとさへ云はれて居る。南洋やアフリカの世界未智の土人中にも定めし特殊の色々な酒があらう、これ等は何れも自然の本能に從つて創造したもので、如何に酒類が本能的に古く廣く人類の飮料として重要の部を占めて居るかが分る。

十

要するに酒の酒たる所以は、その含めるアルコール分が根本義を爲して居る。されば、酒の正當なる批判を爲すには、そのアルコール分が如何なる狀態に身體若くは精神上に影響を及ぼすかを會得せねばならぬ。これに關して次に述べることにす

る。實にこれが本文の主旨である。

第一、酒は血行を促す。吾等の身體は運動をしても、マツサージをしても、入浴をしても、種々の藥物に依つても、或は精神的興奮作用に依つても或る程度迄血行を促すことが出來るのであるが、酒類に依るほど、長く、強く、而して氣持よく、頭の先から爪の先き迄普偏なく、血行を促すことは出來ない。酒を飲むと全身の皮膚が紅を潮し、眼の中迄も赤くなるのを見ても分る、之れは酒が體中に入るや、否や、直ちに神經系統を刺激し、先づ胃壁の吸收、活動力を促がして、吸收せられ、次に心臓に至つて、その鼓動を一層旺盛せしめ、以つて全身に亘つて血管の疏通を佳良ならしむること、恰かも血球が是迄自分の足で歩いて居つたものが、急に馬上に跨り若くは自動車に乘つて速度を早めてカケ出すが如き狀態に置かるゝものと思はるゝ。人體に於ける血行の速度は普通の狀態にては、大體定まつて居るやうなものゝ、吾等の日常の動作、飲食物、精神作用等に依つて或る範圍内に於いて常に絶えず刻々に變化して、變動常なきものと見ねばならぬ、たとへ、睡眠中とても、睡眠前の飲食物の種類、分量、運動狀態、精神狀態に依つてやはり血行狀態に變動のあることを免かれぬのである。かかる血行の常なき變動は、所謂生活力の旺盛を示す所以で、かくて、身體の新陳代謝を促がし、健康體の自然の狀態と見做すべきである。すべて、天地間の何物でも、何事でも刻々に變化し行く可き狀態に置かれ、變化そのものが生命とも見らるゝ。されば、酒を用ゐて常に適當に血行を促すことは極めて健康に適するものと見ることが出來る。

されど、茲に餘程注意を要することがある。それは、吾等の身體の大部分を占むる血液の性狀、成分は日常の飲食物の種類に依つて大變に異なるもので、吾等が日常その身體に最も適合する飲食物を用ゆるときは、血球は最も旺盛活潑で、そして身體各部の要求する完全なる成分を身體の諸部に運搬するのであるが、それと反對にもし、その飲食物が不適合であれば、やはり不適合な成分を輸送し、血行盛んなればなる程それを運搬する分量が多くなるから、その結果は有害となる。されば酒類によつて血行を促すと同時に身體に適合する飲食物を攝取することに注意を拂はねばならぬのである。身體に適合する飲食物は人々の年齢、體質、境遇、職業男女の別等に依つて自ら異るものであるが、概して、所謂酒の肴として適當なるものは、酢の物、漬物、刺身、海藻類、小魚類、果物、オロシ、壽司等がよい。要するに身體に適合する飲食物を攝取して、そして、酒類を適量に、適當の時期に用ひて血行を促がすこと、尚ほ血球を馬に乘せてムチをあて、時として、快遊を試むるが如き方法を取れば、

そこで始めて酒の効が完たからうと云ふものだ。

第二、酒は人を醉はす。酒の酒たる所以のものは人を醉はす點にある。煙草を飲んだり、面白き話や、感動した話や、美人に出くわして醉えるが如きと形容することはあるが、酒が人を醉はすことに比すれば論ずるに足らぬ。醉ふと云ふ言葉は何だか妙に取れる、不眞面目、モウロウ、精神錯亂、判斷力亡失、怠慢、自暴自棄、ヤケクソ、良心麻痺などのあらゆる地獄の道にでも落ちて居りさうな言葉と隣り合つて居るやうにも考へられ、從つて、之れが禁酒論者の武器となつて居るのである。然かしこれは實際上から見ても、所謂酒を惡用し、多量に飲み過ぎて、却つて酒に呑まれた場合のみを考へたので、始めからすべての人を見溢びつて意氣地なきものと斷定した考へである。彼の陶然として醉い、玉山崩れ、何んだか蓬萊山にでも登つて羽化登仙したやうな氣持になるのは酒の力でなくてはなれぬ。世には酒を飲んで、怒り出し、何かに當り散らさねば氣がすまぬと云ふものもあるけれども、また、酒を飲むと、何んとなく面白くなり、隱し藝を出さずには居られなくなつたり、氣が大きくなり、不平、不滿、煩悶がサラリと消え失せて、ニコ〱するものもある。その酒を飲んで人が怒つたり喜んだりするのは、それは人々の平生よりの潜んで居る性質、思想に基くので、酒を飲んで不平が口を突いて出るやうな人は、酒を飲まなくてもイツかはそれが現はれる。酒は一方から云へば吾等の本心を最も露骨にサラケ出さしむる一つの媒介物とも考へられる。彼のイチコが死人の靈を誘ひ出して種々なる事を云はしむると同樣に、酒は人心の本體を誘ひ出すものとも見える。乃はち酒は或る意味に於いては人に對して活殺自在の偉大の力を有するものとも考へられ、吾等はかゝる偉大なる力を巧みに利用するやうなより偉大なる力を得ることを勉むることが最も賢い方法と思はるゝ。

それは吾等の日常の修養に依つて到達さる可きもので、酒に呑まれずして本當に酒を飲むの域に達すれば、酒は吾等を確に無上の幸福に導くものと云ふことが出來る。

第三、酒は人を不老長壽に導く。それが本文の最も主要な點である。從來、八十歲、九十歲も生きて健康長壽と云はれた人々を調べて見るに、酒を極めて嗜んだ人もあるし、また、全く飲まぬ人もある。筆者の祖父などは八十六歲で此世を去つたが、殆んど一滴の酒も飲まず、祭りの御ミキを持て餘したと云ふ位である。現に長生して居る西園寺公などは餘程左キヽの樣である、要するに長生と云ふことは人々の性狀、體質、修養の程度、合理的生活法、思想等種々複雜なる事實の總合であつて、

從來百歲內外の壽を保つには酒は重大なる關係は持つて居ぬやうに思はるゝ、そして、現に熊本には百十六歲の老女があり、日本にも百歲を超えて居る人はあまり田舍には珍らしくない樣であるが、之れ等の人々は別段吾々が研究する如く現代の科學を應用して長壽法を研究し之れを實驗して居ると云ふのではなく、只偶然にも、その人々の行動が自然の理に協つて而して長生して居ると云ふのに止まるが如く思はるゝ。けれども若しも吾等が現代の誤まらざる本當の學理を究め、それを應用したならば古人の夢想だも及ばざる長壽を保ち得る可能性があると云ふことが考へられる、生理學などの眞面目に研究せられ、應用せらるゝに至つたのは比較的新らしきことで、約五十年位のものである、だから學理の應用に依つて長生したと云ふ人には未だ見當らぬ筈である。而して學說は單に器械の方面、戰爭の方面、富の方面、思想の方面にのみ應用せらるべきものでなくして、實に人生の不老長生と云ふ方面にその主力を傾倒す可きものであると思ふ。その一端として筆者は玆に酒を應用して、その方面に貢獻することについて聊か批判を試みようと思ふ。

其一

酒の血行を促すと云ふことは不老長壽の方面から見て誠に耳よりのことである。吾々の疾病、老衰と云ふことは一方から見れば、身體の血行が完全に行はれず、新陳代謝が不良な爲めに種々なる老廢物質、主として、礦物質などが身體の諸部に滯積して組織を硬化し、血管を硬化しそれが爲めに病菌其他に對する抵抗力を減殺する結果であると見ることが出來る。況んや、身體に不適當なる飲食物を攝取する場合にその害が益々甚だしく、それが爲めに筋肉は彈力を失ひ、生活機能が不活潑となることが夥だしき等色々な害が從つて生ずるのである。されば今吾等が年齡、體質、氣候等に應じて常に合理的にして身體に適當なる飲食物を攝取して消化し、之れに加ふるに嗜好に應じて種々なる酒類を適當の時期に適當な分量に用ゐて常に血行を盛んならしめば、老廢分は常に尿其他の形態に於いて體外に排出せられ、體內には有用物質のみが殘り、爲めに身體は輕々しく、氣持よく、活氣に充ち旺盛なる生活機能を維持することが出來るのである。

其二

身體は常に入浴に依りて皮膚面に積る垢又は不用なる外皮を除去することは健康上極めて有効である如く、また、酒に依つて血行を促して體內を淨除するの必要がある。されば酒は體內の

淨除役を司どるのもと考ふることも出來る。乃はち吾等は常に内外より身體を淨除して老廢分の滯積することなからしめば病を防ぎ老衰を防ぎ所謂不老長生の法を實現し得るのである。かゝる點から考えて酒は實に巧みに應用すれば廣大無邊の功德を身體に爲すものである。昔から寢酒と云ふ言葉がある。それは寢る前に酒を飲むと睡眠を促がして氣持よく熟睡することが出來るからである。その理は酒は血行を促がすから晝間腦を使用した爲に、腦に集中した血液が酒の爲に全身を循環して平等に全身に血液を撒き散らすからである。睡眠は或る場合に於いては食物よりも大切なのであるが、その大切な睡眠が酒に依つて促がさるゝとすれば此の點丈でも酒の功や大である。

其三

血行を促がし、睡眠を促がし、加ふるに酒自身に相當のカロリーと滋養分を有するのであるからその効果大なるは自から明らかで、巧みに之れを用ゐさえすれば、過度に肥滿の人は瘠せ瘠せたる人は肥え、老人は若返り、衰弱せるものは丈夫になり、老衰といふことを知らぬやうになればイツ迄長生するか見定めが付かぬこととなる。それから、筆者の研究を基礎として考ふるにアノ酒に醉ふと腹立たしくなつたり、悲しくなつたりするはその人の性狀が惡しく所謂、根性の曲れる人で邪念多き[illegible]であるから、かゝる人が色々世人にもまれ、名賢智識の説を學び、修養を積みて善人に立ち歸れば、必ずや如何なる人でも酒を飲むと面白くなり愉快になり、樂天的となり、煩悶は消え去るのであつて此點に於いても酒は以つて人を天國に導びく價値があるとも云えやう。

其四

聖書に「豚の前に眞珠を投げ與ふる勿れ、否らざれば、振返りてそれを噛み破らん」とある。何物でも理解のない人の前には土塊の如きものとなるのである。されば、酒を飲むに足る資格のないものが之を飲めば身を亡ぼすの具となり、酒に對して理解のあるもの、資格のあるものが之を用ゆれば眞珠を眞珠としてその價値を發揮することが出來るのである。だから能く酒の性質を理解し、その奔馬の如き性狀を使ひこなせば、以つて千里の馬たる價値を發揮せしむることが出來るのである。吾等が酒を不老長生の仙藥たらしむるも、また、身を亡ぼすの具たらしむるも、たゞ之の呼吸如何にあるのである。

以上述べ來つたことは、佛教で云へば大乘教に屬すべきもので赤裸々に酒に對して眞理と思ふところを述べたのであるが、吾等の社會は賢愚の雜交に依つて成り、修養の積んだ人もあれば足らざる人もある、青年もあれば老人もある、大體に於いて社會には酒に御せらるゝ人が多くて、酒を御するに足る人が少ない。乃ち酒を呑むのでなくして、酒に呑まるゝ人の方が多い。だから國家危急の場合とか、國民が眞劍味に乏しい場合とかには或る期間、生理上酒の必要の比較的少なき、少年、青年、例へば廿五歲以下位のものに向つて國家が法律に依つて禁酒を斷行することは必ずしも非合理的のこととは思はれない。米國の禁酒令に對して我が爲政者は如何なる意見を有するか未だ具體的のことを聞かないが、將來、國家の興廢の分るゝ非常時に際しては、相當の除外例を設けて、國家として一時的例へば戰時中とか、その準備中とかの時期に限り禁酒を斷行するの必要に迫らるゝことがないとも限らない。我が爲政者が事の理非は兎に角としても、尙ほ米國の如く、何事でも、徹底的に、テキパキと、やつてのける丈けの決斷力があるや否や、世の識者と共に筆者は靜かに成り行きを見やう。

『年の暮』の人々の對話

所――市內、山の手、不便なる裏町。文筆勞働者、護國寺秋天の假寓。

時――冬の初め。晴天。うららかな日の光が、物乾竿に懸けつらねた洗ひざらしの襁褓を照らしてゐる。庭前の銀杏に百舌が來て鳴いてゐる。

人――主人、秋天、年齡四十歲位。勞働者とは云ひ乍ら筋肉勞働に從事するのではないから、矢張四角な袖の有る通常の木綿着物を着てゐる。生活が極めて不規則である爲め體は瘠せて顏色もよくない。ただ元氣で持つてゐるらしく見えるがそれさへ附け元氣かも知れない。

――秋天の糟糠の妻。ひす子。年三十位。名は糟糠の妻と云ふが、實はぬか味噌を付けることより、借金の言譯をする方が本業である。だから之は言譯の妻と云つてもいいところだ。

――まだ此外にも妙な人物が多勢出るが、其都度、御紹介と說明の勞を取ることにしよう。

ひす子　（更に一抱への洗ひ物、子供の襦袢やら赤い着物など、露の滴れるのを運んで來て、日當りのいい軒端の竿に懸けながら）今日は、まあ、何て好い日和でせう。こんなのが本當に小春日和つて云ふのでせうね。

秋天　洒落れた言葉を覺えたね。

ひす子　何が。

秋天　でも小春日和だなんて。

ひす子　あら、いくら私でも小春日和くらゐの事は知つてますよ。別に洒落れても何もしないぢやありませんか。

秋天　さうかい。併し、お前さんは今年から小春日和が一年に二度づつ有るやうに成つた事は、知るまいね。

ひす子　ええ、……

秋天　昔から小春日和と云ふのは冬の始め、丁度今頃あることとなんだが、今年は此春もう一度小春日和が有つたんだ。それは家でとつてる東京ヨタ〳〵新聞の記者が、それを製造してくれたんだ。五月始め頃のことだつたかなあ。今日はポカ〳〵かく好い小春日和だと書いて有つたよ。

ひす子　あなたはよくそんな事を記憶してるひまが有りますのねえ。新聞のアラを拾つてる暇があつたら、原稿の一枚も餘計に書いて下さればいいのに。

秋天　（緣端で日なたぼこりしてゐたが、洗物を上の竿へ懸けられ日をさへぎられたので、一寸嫌な顏をしたが、止むを得ず他の日なたを見つけて移動しつつ）……天氣豫報には大暴風雨とでもあつたのだらうな。

ひす子　いいえ。晴天と出てましたわ。子供たちは今日學校の運動會があるので、昨夜から夕刊の豫報を見て大騷ぎしてましたが、今朝はもう大悅びで早くから出かけて行きましたわ。

秋天　そりあ、まあ、まぐれ當りとしても、當つてよかつた。氣象臺の天氣豫報も、さうバカにしたものでもなかつたな。

ひす子　さうですとも。あなたの豫報よりやよつぽど確實ですわ。

秋天　僕の豫報と云ふと。

ひす子　何でも氣象臺の正反對で行けばいいと、いつも仰言るぢやありませんか。二三遍それが當つた樣だから、私は其つ

もりで、豫報に四五日雨天續きと有る日を見て、洗濯物をどつさり鹽に漬けて置いたら、本當に雨が降りつゞいて、ひどい目にあつた事がありますもの。あなたの新しい久留米を洗つて幾日も乾かないでゐる中にカビが生えたことがあるでせう。あれもあなたが氣象臺をバカにした罰よ。オヤ、何でせう。小鳥が山の樹へ來て鳴いてますよ。いい聲だこと。

秋天　百舌鳥だらう。成程よく囀るな。

ひす子　まだ他の鳥もいろ〳〵ゐる樣ですよ。先刻雉が何かに驚いて高い樹に飛び上つたの見て。

秋天　うん見たよ。

ひす子　何うしてここはこんなにいろ〳〵の鳥が來るのでせう。田舍にゐたつて、こんなに直近に鳥が來ることなんかないわ。

秋天　餌があるからさ。餌の有るところには鳥ばかりぢやない。人間も餌の有るところへ集るさ。餌が無くなりや誰も來やしない。多忙にて御ぶさた致候と極り文句が出來てらあ。何か儲かり相な事業でも起すと、門前忽ち市を成すが、貧乏すると友達さへも寄り付かないさ。

ひす子　山には蟲が澤山ゐるからですね。田舍の山にでも此れほど澤山はゐませんよ。さう云へば二階の蜂の巣は何うしました。

秋天　ずゐぶん大きな蜂の巣が出來たものさ。しかし昨日見たらもう皆な巣立ちをしてしまつて、蜂の子は一匹もゐない。

ひす子　先達て文ちやんのおでこを螫したから、巣をこはして全滅させるとか仰言つたのは、何うしたんです

秋天　その積りでゐたが、彼等が巣の周圍にたかつて子を養ふ樣子を見ると、殺生するのも可哀相だし、それに又面倒くさくもあるから、捨てて置いたのさ。併し能く可き根氣が有るものだな。巣立ちをして、又何處か暖い場所に見付けて巣を營むのだらうが、あんなに澤山子供を産んでは全くこれを育てるのが大變だらう。氣を付けてみてみると、親蜂は朝から夕まで殆んどその事に掛りきりの樣だつた。

ひす子　私たちみたいなのね。私なんかもう何年にも芝居一つ活動一つのぞきやしないわ。正月から暮まで働きつづけで、若い時を過してしまふと思ふと、つく〴〵悲しくなるわ。

秋天　それは僕だつて同じことだ。僕たちばかりぢやない。動物は誰も皆さうなんだ。盲目的に子孫を作り盲目的に子孫を愛し、それを育てるために盲目的に働いて、それで一生が終るんだ。それが生物の運命なんだから仕樣がない。

ひす子　併し世間にはお金は澤山あつて子供は出來ない人だ

つてあるわ。そんな人たちは生活の不安も苦痛も知らないで、人生を享樂するためにだけ生れて來た樣に見えるぢやないの。

秋天　なあに、矢張、さういふ人たちだつて苦勞はあるさ。苦勞の少ない人は又それだけ苦勞に堪える力が少ないから、苦勞を感じることは我々と同じ位なものだらう。苦勞を分量で計つて比較することも出來ないけれども。よく注意してみて御覽。貴族や金持のお坊ちやん方の書く文學物には却つて悲觀の色合が濃く、我々貧乏人の話には。――附元氣かも知れないが――却つて威勢のいい調子が高いから。

ひす子　さうでもない。やつぱり時には愚痴も出るわ。

秋天　グチぢやない。本當の話さ。苦しいには苦しいからな。しかし僕たちは決してへこたれやしない。あくまで奮鬪的に行くさ。

ひす子　でも此頃は殆んど原稿も書かないやうだし、遊びにも出ないし、すつかり物臭になつてるぢやないの。

秋天　しばらく休戰といふ形だ。見てゐろ、これから目ざましい活動が始まるから。

ひす子　いつも乍ら、あなたのは口ばつかり。（此時、玄關に人の聲す。ひす子玄關へ行く）

近所の人　こないだお預りしましたおあいの汲取券を待つて參りました。

ひす子　これは、まあ、恐れ入りました。さあ、何うぞ、お上り下さいませ。

近所の人　いえ、今日はさうしちやあゐられません。これを今すつかり配つてしまいませんと。ええ、それから、今度は一荷に就き五錢、半荷の方は三錢づつの値上げになりました。お宅の分は一荷が三枚と半荷がこんなに澤山有ります。來月からは札が要りませうから、これだけ有れば多分餘る位だと思ひます。

ひす子　左樣でございますか。どうもお世話樣でした。さよなら。

（近所の人歸る。ひす子緣がはに戻る）

秋天　何んだい。

ひす子　Aさんがおあいの札を持つて來て下すつたんです。おあいも來月から一荷に五錢づつ高く成るのですと。

秋天　經費節減をしたり苛斂誅求をしたり、お役所も仲々多忙なわけだな。

ひす子　今度の市長に成る早々ですわ。

秋天　やれ／＼、新市長手始めの成績には、おあいの値上げだつたかい。

ひす子　今に成つて考へると、矢張後藤さんが一番傑かつたわ。田尻市長の時分には、いつ迄しても汲取りに來ないでさんざん惱まされてゐたのに、後藤さんに成ると直ぐおあいは汲取るしゴミ箱は綺麗に成るし、本當に助かりましたわ。それが永田市長に成ると、もうそろ／＼ダラシなく成つて、あの地震の後なんか何うでせう。幾日も捨つぽかしで汲み取りに來やしないんだもの。

秋天　さう／＼。あの時は恐れ入つたね。丁度近所で夜警の寄合をしてゐた晩のことさ。警察からのお達しだと云つて、區役所は當分多忙でおあいの汲み取りは出來ないから、銘々勝手に處分する樣に。と觸れて來たもんだ。そこで皆が裏の川へ流さうかと云ふものも有れば、空地を掘つて埋めやうかと云ふものも有り、板橋まで使を遣つて百姓に汲み取りに來て貰はうかと云ふものも有つた。何處の家にも避難民の一人や二人は轉がり込んでると來てゐるから、おあいは遠慮なく溜る。實に閉口させられたね。

ひす子　あれで私はつく／＼永田市長はだめな人だと思ひました。

秋天　まあ、そりや、あの際で、責は市長さんばかりにも有るまいよ。全く手が足りなかつたからもあるだらう。

ひす子　併し、役所は手不足だと云ふそばから、傳染病豫防の宣傳をして歩くやら、人のお勝手へ雲助みたいな男を連れ込んで來て薄つぺらな石油乳劑を撒くやら、そんな手間はいくらも有つたのですわ。石油乳劑くらゐ私たちにもまけるものをわざ／＼人足をよこしてさせ、さうしておあいやゴミは捨つぽかしでですもの。

秋天　どうもすみません。あやまります。併し、それがお役所仕事と云ふものなのだから、何うぞそのお積りでゐて下さい。その代り、いづれ近い中に何處のお役所でも澤山馘首して、日頃怠慢の罪を國民の前に謝しますから。

ひす子　私、なにも役人の馘首なんかお願ひしやしないわ。

（此時、又玄關に人のけはひがする。ひす子慌てて出てみる。名刺を受け取り緣端に戾る）

秋天　（名刺を見て）お通しておくれ。ほほう。珍客だな。

（秋天も立つて玄關に行かうとして緣がわで出逢ふ）

秋天　やあ。お珍らしいね。さあ、さあ。

（珍客を案內して秋天座敷へ入る）

珍客（庭の向ふの紅葉した山を見て）ほほう。こりや、すてきに佳いお住居だね。此山は何だね。

秋天　あの叢の枯葉に埋れて陸軍省御用地と彫つた小さい石

が立つてゐるよ。恁ふいふ山を持つてるんだから、陸軍省は日本中での大富豪さ。

珍客　全く、いい山だ。東京の中にこんな深山の趣を備へた山が有らうとは、誰も一寸氣が付かないところだ。

秋天　陸軍省が天下の大富豪であることに、皆が氣付いてゐるか知ら。まあ、陸軍省が東京市内に持つてる地面だけでも實に素張らしいものだが。

珍客　日本の政府は常に貧乏だ／＼と昔からグチばかり云つてゐるのに、何うして陸軍省ばかりそんなにブルヂョアなんだらう。文部省などと來たら、學校すらロク／＼建て得られないのに。

秋天　そりや、明治年間に於ける長閥の勢力を語るものさ。今の陸軍の大財産は長閥の遺産なんだよ。何しろ西南の革命以來、對手もないのに何個師團と云ふ全く無駄な軍隊をすら、全く長閥の私腹を肥す目的のみから今日まで設置し續けた位だからね。

珍客　だが、今度はいよ／＼四個師團縮減てえことに成るんだ相ぢやないか。してみると、それらは長閥の衰亡を語るものだらうかね。

秋天　さうかも知れない。併し、まだ／＼陸軍は大ブルジョアだよ。師團縮減のために多少の軍人が減られるにしてからが、その減首手當は豐富なものだ。おまけに少なからぬ恩給まで付く。

珍客　そこへ行くと、吾々教育家なんて哀れたものだなあ。

秋天　ふん、君も減られたかい。

珍客　いや、まだ切られやしないがね。

（ひす子紅茶など持ち、改まつた樣子をして入り來り、珍客に對ひ叮嚀に挨拶する）

珍客　初めまして、奧樣でございますか、私は秋天君と同窓の者で、學生時代から始終御厄介になつて居ります。

秋天　大分、挨拶がうまく成つたな。教師なんかしてると、口だけは一人前に成るなあ。

珍客　だつて、此位の文句は誰だつて云ふ當り前の紋切形だらうぢやないか。

秋天　でも、その紋切形が素人には一寸出來ないぜ。

ひす子　宅の口の惡いのには、本當に困つてしまひます。學生の時分からこんななんですか。

珍客　相變らず昔からメートルが上がりましたよ。

ひす子　メートルを上げたり脫線したりですわ。

珍客　結構です。君にはそれが出來るんだから。私たち教育

家と來たら、全く教室内の囚人だね。白墨を持つて懲役をつとめてゐるやうなものさ。

秋天　さうでもない。近年教育家拂底で、大分教育家を優待してゐるやうぢやないか。

珍客　優待と云つたつて知れたものさ。轉任する時の月給が幾分か高く成るには成つたけれどね。それつきり上へは上りつこないんだから詰りやしない。教育家がまさかストライキやサボタージユも出來ないしね。

秋天　それでも教育家の生活は、生活その物がサボタージユみたいなものだらうがな。暑中休暇と冬の休暇と試驗休みと日曜と祝日を除いたら、一年の中に働く日が幾日あるかね。それで月給はシヤン〳〵と入るんだから、こんな甘い商賣はないぢやないか。それで不平を云つちや、罰が當るぜ。

珍客　その位、自習の時間を與へられないでは、學問が古く成つちまうさ。

秋天　と云ふと態のいい話だが、實際休暇を利用して勉強するやうな心懸の者が幾人あるか。教會の牧師は十八の歳に覺えた說教を八十に成るまで繰り返すもんだ、とワイルドは言つてるが、學校の教師なんて、皆なそんなもんぢやないかなあ。大學教授とか何とか云つたところで。

珍客　ところが、教師の方はそんなに長く働かせてくれないよ。若い時分にや月給が少なくつて、早く俸給が殖やし度い〳〵と毎日考へてゐる。いいかね。するとキリストの言葉ぢやないが、求めよさらば與へられんで、まだるつこしいけれども少し宛は上る。それを樂みにして服役してゐると、まあ鰻登りに上つて行くね。その間は樂みのやうなものだが、いい加減登つた時分に成ると、必ず首に成る。高給の老教員を一人置く金で、新米の教師を二人置く方がトクだと云ふ算盤勘定から來てゐるんだ。

秋天　トクで其上頭の新しい活氣のある奴が雇ひ込めるから。その方が生徒も助かる。さう〳〵僕たちが學校にゐた時分、フランス語の教師でよく水涕を垂らす人が有つたのを君も知つてゐるだらう。

珍客　さうして懐から新聞反古の細切を二枚くらゐ出してチンとかむ先生か。いまだにあの様子は忘れないね。だが、あれが自分たちの未來の寫眞とは、あの時分、全く氣が付かなんだね。

秋天　そんな老教師に教はる生徒を氣の毒とは、君思はないか。

珍客　そりや氣の毒かも知れないが、こつちも喰はずにやゐ

られないからな。我々が免職されれば生徒は助かると君は云ふけれど、免職された我々の方は浮べないよ。俸給を貰つてゐてさへ、滿足に食へやしないんだからね。自分は人の子弟を教へる身でありながら、自分の子弟を教育するだけの資力さへないものが、我々の仲間にや澤山ある。

秋天　さうか。君は子供が有るかい。

珍客　あるともさ。六人ある。

秋天　なに、六人。よく拵へたね。子供の多いなんかは今時あんまり自慢には成らないぜ。

珍客　何も僕は自慢してやしない。君は無いのか。

秋天　有るさ。僕にも丁度六人ある。丸で相談でもした樣だね。

珍客　それでは奥さんが骨が折れますなあ。

ひす子　ええ、今も丁度それをこぼしてましたところでございますの。女も實際大へんですけれど、それだけ食ふお父さんに成ると、又容易ぢやございませんのね。

秋天　うまい事を言つてゐやがる。僕ばかりの前だと、子供で骨を折るのは自分ばかりのやうなことを言つてゐるくせに、他人が現はれると又[illegible]しやがる。

ひす子　でもお察ししますわ。

秋天　しかし同じ貧乏をするなら、教育家はまだしもいいよ。こないだも青山師範の老先生のために教へ子たちが祝賀會を催したのを、僕は新聞で見て羨しいと思つたよ。僕たちも昔の中學の先生の爲めに像を建てて、獻上したことが有る。二千人弟子があれば五圓づつ集めても、一萬圓は集る勘定だからな。まあ、家は貰はないでも、尊敬されるだけでも惡くはないぜ。

珍客　ところが、大ちがひ。尊敬どころの話か。今の生徒と來たら、教師が來るとすぐ仇名を付けやがる。

秋天　君も付けられたか。

珍客　無論さ。一人だつて仇名の無い教師なんて有るものか。

秋天　さうかい。そりや面白い。何と付けられた。

珍客　面白いぢやあない。大迷惑だ。

秋天　そりや何地でもいいが、仇名は何といふんだ。

珍客　蛋と付けられた。何で私が蛋なのかサツパリ分るまい。

秋天　蛋はよかつた。あははハハ。君には昔から蛋らしいところがあるよ。

珍客　なあに、それがね。よく訊いてみると、私が宿題を作

山出して夜間彼等を苦しめるからだとサ。それに此頃の學生は、君なんかが想像するよりや摺つ枯しでね。一寸した事にもストライキだ。それで又教師と來たら生徒を煽動するのが上手な奴でなけりや、校長にゴマを摺るのが巧者な奴ばかりさ。だから、もう、教師はつく〴〵いやに成る。

秋天　君は中學の教師になんか成つたからいけない。女學校の先生に成ればよかつた。

珍客　いや、女學校は猶いけない。

秋天　なぜ。若い女學生は無邪氣だらう。

珍客　どうして。其反對だ。彼等にや無邪氣なんか藥にしたくも無い。無いからこそ無邪氣が貴ばれるんだ。昔から女子と小人……

ひす子　いゑ、本當に然ですわ。

珍客　普段思つてるものだから、つい口から滑つちやつた。奥さんの前ですけれど、女子と小人養ひ難し、なんだ。

秋天　そんなにいやなら、教師なんか直ぐ止めちまつたらいい。

珍客　そこがさ。止めれば早速飯が食へない。いくじのない話だけれど。それで監獄のやうな中に服役してゐるんだ。

秋天　無期徒刑を希望するわけかね。

珍客　さうさ。ところが、今度こそ、いよ〳〵この首が怪しく成つて來たんだ。何しろ、もう十七年から教師をしてゐるから、地方をあちこち歩いてだけれども、兎に角もう高給の筆頭だよ。で內々もう其運命の來る頃だな、と思つてゐると、今度の經費節減だらう。

秋天　あれは官吏だけぢやあないのか。

珍客　官吏は無論さ。中等學校教師も學級の多いところは、二三人づつ減ずることを得、といふんだ。もう今度こそ屹度やられるねえ。實は、そんな腹もあつてね。浪人したら何んな商賣を初めやうかと、その樣子を見る爲めに、上京した次第なのさ。祖母の三回忌といふのをダシに使つて國元へ歸省した序でだ。

秋天　何か儲かり相なのが見付かつたかい。

珍客　一つも見付からん。前にゐた中學の同僚で懇意にしてゐた男が印刷屋を初めたから、儲かるなら私もやらうと思つて行つてみた。日本橋のゴタ〳〵した狹い町のバラックだがた。日本橋と云つても商店の一軒もないやうな町があるなあ。

秋天　有るよ。だが、話は成る可く簡單にっ

珍客　今日は忙しいのかね。君。忙しけりや、今日はもうお暇まして又來るよ。

秋天　いゝから、も少し悠くりし玉へ。たゞ僕は話の結論が早く聞きたいんだ。

珍客　まあ、聞き玉へ。行つてはみたが印刷屋も私は餘り感心出來ん。地震前からやつてゐて燒け殘つた連中は、よかつた相な。

秋天　何の商賣だつてそりや然だ。

珍客　私の友人のやうに、夏から初めた者はサツパリ不可ん。印刷屋は震災後島渡異常の好景氣だつたところへ、政變が有つて選擧の印刷物や何やで又一つ賑つたが、五月から此方、パツタリ仕事の注文が出ない相だ。友人はひどくコボしてゐたよ。君、何うだね出版の方は。

秋天　ダメだ、ダメだ、第一資本からして可也かかる。一萬や五千持つて初めたのではまるで線香花火みたいなもんだ。出版をやるには金力と智力と膽力と、此三拍子揃はないでは、てんで物に成らない。君なんか其三つとも缺いてゐるんだから、そんな商賣には手を出さぬ方がいい。

珍客　でも、素人出版をやる者も澤山あると聞いたがな。

秋天　いたづらに洛陽の紙價を高からしめるだけの話だがね、ただし、運の好い人は別物だよ。（此時、洋服屋の注文取庭を廻つて入り來る）

洋服屋　唯今あちらで聲をかけましたが、何方もお見えにならない樣ですから、失禮ですけれど勝手に此方らへ廻りました。

ひす子　あら、さうでしたか。ちつとも聞こえなかつたものだから。

秋天　何方も見えないから、奥の方へ浸入するとは、近頃物騷な男だな。

洋服屋　何うもすみません。今朝からメッキリお寒く成りました。

ひす子　本當に今朝の寒さつたら、すつかり霜が降つたんだもの。

洋服屋　そこで早速外套の御注文を伺はうと存じまして、上りましたわけです。

秋天　霜を踏んで外套到る、と云ふ洒落か。

洋服屋　たゞ今丁度かういふ良い品がございますものですから、ぜひ先生にお願ひ致したいと存じまして上りました。ええ、駱駝の極上等です。

秋天　上等では高いだらう。上等でなくても君のとこは高いんだから。

洋服屋　ところが全くお安いんです。ですからわざく、持參

いたしたわけなんですがな。これ、手に取つて御らん遊ばせ。この通り輕い、丸で羽根みたいなんですから。

秋天　とてもダメだね。そんな贅澤品、とても僕等に貰へやしないから。君、何うです。何かあつらへてやつては。

珍客　え、私かね。私は今それどころぢやない。

洋服屋　先生、先達ての背廣は如何です。あれは好い品ですぜ。

秋天　君んとこの品は、何でも皆いいんだね

洋服屋　さうですとも、あれは縞サージぢや無類飛切で、何處へ出しても退けはとらない品です。第一、品が宜しうございます。

珍客　服屋さん。今年は何んなのが流行ますね。

洋服屋　形ですか。

珍客　いえ、切地は。

洋服屋　左様、まあ、若い人ですと、スーデツト。こゝに御座います、此んな柄ですなあ。又暖いのは矢張メルトンで御座います。

珍客　私らのは何年前の流行だか、こんな古い物で間に合はせてるが。

秋天　十年も辛棒して着通うせば、流行は又戻つて來るよ。あはハハ。

洋服屋　先生、本當に如何です。この駱駝をお召なさいませ。

秋天　そんな贅澤な物が、僕たちのお召料に成るものか。

洋服屋　いえ、ちつとも贅澤なことは御座いませんよ。此召物ばかりは幾等上等でありましても、決して贅澤とか奢侈とか云ふことにはなりませんのです。お召物は、謂はゞ先生などの御職業に譬へますれば、本の裝幀のやうなもので御座いまして美しくすればするだけ本其物の價値を高く致すことに成りますから、決して無駄な虚榮ではないのです。

秋天　ヒヤ〳〵。

洋服屋　ヒヤ〳〵ぢやございません。本當です。で、御座いますから、當節月給取の皆さん方が卻つて――私などがさう申すと生意氣に聞こえませうが――卻つて身分不相應に贅澤な品を御注文なさいます。つまり之は奢りではなく投資なのです。大臣だ大將だ博士だと云ふやうな御身分柄のお方は、上等品でもよければ氣まぐれに木綿の布子を着ましても、大臣大將博士の肩書が背景に御座いますから、それは何ちらでも宜しうございます。けれどもお若い會社員さんなんかは小ザツパリした身裝でもなさいませんと、誰も對手には致しませんね、ですから、

して贅澤ぢや御座いません。

秋天　よし／＼。分つた。おい、大藏大臣が此人のやうに下情に通じてゐたら、奢侈税なんてバカなもので味噌を付けやしなかつたらうになあ。

洋服屋　そんなお讃めにあづかつては、何か奢らなきやなりませんかね。

秋天　生意氣云つてやがらあ。そんな事を云つてる間に早く若い月給取のところへ、それを賣りに行つたらよからう。

洋服屋　それは先生の仰言います通り、若い腰辨さんなら、手前共がお勧め申すまでもなく、御注文下さいますが、併、お金を頂くだんに成ると、仲々容易ぢやございませんからね。まあ、茲だけのお話ですけれど、會社員さんやお役人さまのは皆月賦です。ええ、月賦は結構ですけれど、何れ多い中には必ず幾人か誠られるお方が有りまして、その分は迚も頂かれないことに成ります。そこで手前共の方では其取れない賤金を、お拂下さるお花客さまの頭にかけます。正直のところが。若し然いふ事が絶對に無かつたら、洋服はもつとぐつとお安く願へるのです。之は本當のお話ですよ。ところで、今年の冬は何方らの方でも、よほど犧牲者が出ますよ。諸官省のお役人さまの首なんか、今度は紫散に飛ぶ相ぢやございませんか。

秋天　うん。大分やられるだらうな。何しろ一割減と云ふ呼び聲だからな。他人ごと乍ら怕ろしい。

珍客　いや、こつちは他人ごとぢやないよ。サラリーマンは洋服屋にさへ對手にされないんだから、かなはんね。

秋天　僕たちだつて、同じことだ。少し長く病氣でもしてみたまへ。それこそ何んなに落ぶれることやら。忽ちの中に借金が山の樣に出來ちまふさ。だが、さういふ場合には何う云ふ種類の借金から拂つて行く順序だらうね。

珍客　矢張衣食住の中では、食が一番大切だから米代から先きへ支拂ふだらう。米代が拂へないと云や、よほど困窮した結果だ。

秋天　僕たちの仲間には、米代が拂へなく成つて、毎日蕎麥を食つて暮した男がある。その蕎麥の代も拂へないので近所の蕎麥屋に借金がたまり、借金が溜ると次々に遠くの蕎麥屋から取る事にして行つたところが、とう／＼切通しの坂を下りて下谷まで行く樣に成つた相だ。さうしたら注文を聞いた蕎麥屋が「本郷の龍岡町から下谷までの間には他に蕎麥屋も御座いませうから」と云つて斷つた相だ。家賃の滯納位は浪人者には止むを得ぬことだが、蕎麥で籠城するのは聊か心細いね。

珍客　浪人して暫く何の收入も無かつたら、誰も皆そんな事

に成るのだらうなあ。

秋天　まあ、君、そんなに今から取越苦勞をしないでも、又その時に成つて、成るやうに成るさ。時に、洋服屋さん。我々にも出來る樣な、何か儲かる商賣は有るかい。

洋服屋　そりや、幾らもございませう。併し只今のところは、何の商賣も不景氣ですなあ。

珍客　一層一思ひにカフエーなんか、何んなものだらう。

秋天　君にそれが出來るかい。夜おそく成ると醉拂ひがやつて來て、手におえないぜ。

珍客　いや、醉拂ひ位何でもないさ。私は中學生すら對手にして來たことを思へば。

秋天　よく／＼教師にはこり／＼してゐるな。君が醉拂ひさへ嫌でなけりやカフエーもよからうよ。學問の切り賣りもウヰスキーの量り賣りも、大した變りはないや。

珍客　カフエーではウヰスキーを一杯幾ら位で賣つてゐると思つたら、家に依つてちがふが四五十錢は大抵の家でとるね。さうして一壜で二十杯位はくめるだらう。

秋天　もつと多くゝめるよ。

珍客　さうすると一壜五六圓の物を用ひても可也儲かる。

洋服屋　だめですよ。仲々さう此方の勘定通りにや行きませんよ。店舗の裝飾やら電燈やらストーブやら蓄音機やら、いろいろ拔くと、儲けなんか殆んど後に殘らないでせう。此頃のカフエーをのぞいて御覽あそばせ。何處も淋しくて化物が出さうぢやございませんか。

秋天　その化物が出なかつた日にや、誰もカフエーになんか行く者は有りやしない。みんな化物見に寄るのさ。

洋服屋　いや、その化物とはちがひます。兎に角、此不景氣では、何の商賣も振ひませんよ。實は手前共も此不景氣には弱つてるんです。はて、何うも大變お邪魔いたしました。此オーヷアは是非先生にお勸め申上ますよ。では明日でも又上ります。奧樣、左樣なら。

（洋服屋出て行く。それを見て珍客も歸り仕度をする）

珍客　さあ私も失敬しよう。突然出て來て長いお邪魔をした。

秋天　まあ、いいぢやないか。たまに逢つたのだから飯でも食つて悠くり話さう。

ひす子　まあ、およろしいぢやございませんか。ほんとうに何も有りませんけれど、もうぢきお晝ですから。

珍客　奧さん、折角ですが、今日は他に豫定の行動がありますから。いや、君、失敬する。奧さん。失敬します。

（珍客歸る）

秋天　あの男は學生時代には仲々元氣がよく、そしてステキな勉强家だつたが、今日見れば何だか影が薄いな。

ひす子　あの方はお幾つです。もう髯のあたりにすつかり白髪に成つてますね。

秋天　なあに、まだ四十そこ〱なんだ。ああいに糞マジメに藝者買一つしずにリーダーの譯讀なんか教へてゐると、人間も早く老ひるんだよ。何一つ樂しい事はしずに、愚直につとめた報酬として最後に馘首されるんだから、サラリーマンほど氣の毒なものはないさ。

ひす子　では、おたんと藝者買ひをなさいまし。若返り法でも何でも御遠慮なさらずに。

秋天　もう妬いてやがる。併し、實際の話だ。金に苦勞の有る者は何うしても早く老ひる。八十に成つても尙ほ矍鑠として居られるのは、全く金の力だよ。金よりも何よりも人生の一番の寶であるところの若さを失ふのが、貧乏人の最大不幸さ。

ひす子　もう分りましたよ。おかげさまで私なんかも、もういいお婆さんですわ。

（門の方に小さな靴の音。洋服姿の小學少年の聲）

少年　唯今。

ひす子　はい。お歸り。

少年　（玄關にて靴をぬぎ、座敷へ入る。手に果物の籠を下げてゐる）お母さん。これ。

ひす子　（籠を受取り）これ、何うしたの。

少年　今。ね。お寺の前で花ちやんに會つたら。之をねえ、水菓子屋で買つて、僕に渡したの。重かつたよ。だけど、僕走つて來たの。

秋天　ああ、今日だつたな。非中のお爺さんが來るとか云つて、手紙をよこしてゐたつけ。

ひす子　さうでしたわね。あなた何もしないで家にゐる位なら、驛まで迎へにいらつしやればよかつたのに。

秋天　僕も忘れてゐた。なあに、爺さん元氣だから、一人で來られないことはないさ。

（門の明く音）

少年　花ちやんだよ。屹度。

（少年走つて行く。花子と少年と話す聲。二人座敷へ入る。秋天便所へ立つ）

花子　今日は。叔母さん。御ぶさた致しました。皆さん、お變りはなくつて。

ひす子　ええ、ありがたう。今度はずゐぶんお久しぶりだつたわね。震災以來でせう。

花子　でも、もうすつかり下町は復興しましたのねえ。流石東京だと思ひますわ。

ひす子　さうですつてね。私震災後まだ一度も下町へ行つてみないから、世間が何う變つてゐるか少しも知らないのよ。相變らず毎日襁褓の洗濯ばかりも、つく〴〵飽き〳〵したわ。

花子　赤ちやんは、おねんね。

ひす子　ええ、向ふの部屋に先刻から寢んねしてゐるのよ。今年は皆に病氣されて、そりや私困つたわ。お宅でも皆さん、御丈夫。

花子　矢張、代る〳〵患てますの。今も雪ちやんは肋膜で寢てゐるの。

ひす子　何處でも、子供が多いとねえ。しよつちう誰かしらお醫者にかかつてゐるわ。

花子　叔父さんは。御勉强。

ひす子　油を賣つてゐるのよ。今お歸りのやうだわ。まあ。御悠り、足でも伸して樂々となさいよ。あゝ、それから、只今は、子供にお土産をどつさり有がたう。

花子　あら、おはづかしいやうな品ですわ。お土産はお祖父さんが後から持つて來てよ。(間) 叔母さん。私、今度はお願ひがあつて上京したのよ。叔父さんが許して下さるか知ら。ねえ、叔母さん。私、職業婦人に成りたいと思つてますの。

ひす子　さう。職業婦人にもいろ〳〵あるけれど、なあに。タイピスト。それとも女優。

花子　あら。女優なんて、とても私なんかの柄にないわ。私、なれれば成り度いけれど。帝劇でなくつても、蒲田でも何處でもいいけれど。

ひす子　では、あなたは何をお望み。

花子　私。私なんか事務員くらゐしきや成れやしないことよ。でなければ女中奉公の口を探して頂きたいの。

ひす子　女中の口なんか降るほど有るけれど、成つたつて詰りやしないわ。それに、あなたなんか普段勞働しつけない人に迚ても勤まりつこ有りやしないしさ。

(秋夫はばかりから出る)

花子　叔母さん。叔父さんには默つてゐてね。今のこと。でも屹度叱られますもの。

ひす子　だつて、花ちやん。叔父さんにお願ひしたいと、先刻言つてたぢやあないの。話さないでは、お願ひ出來ないぢやありませんか。

秋夫　何だい。花子はまた鶴見の花月園へ行つて馬にでも乘りたいのか。

花子 (叮嚀に叩頭をして) 御ぶさた致しました。

秋天 花子、お祖父さんは何うした。途中でまいちやつたのか。

花子 (俯向いて笑つて) 祖父さんは、兄さんの會社へ寄つてるんです。もう直き參りませう。

(門の外に俥の止つたけはひがする)

花子 あら、參りましたよ。祖父さんが。

井中の老爺、うん、確かに此家だ、あの山に見覺えがある、

(獨言ちて木戸から庭へ廻る)

ひす子 井中の小父さんの聲ですよ。

井中の老爺、やあ、今日は、皆なマメかの。

ひす子 おや、いらつしやい、さあ、どうぞここからお上りなすつて下さいませ、

秋天 ああ、おぢさん、いらつしやい。もう先刻に花子が參りましてから、おぢさんのお出でをお待ちしてました、どうぞ此地らへ。

井中の老爺、うん、まあ、しばらく此山の景色を見せて貰はう。滿山の紅葉だ、これは何さまの地續きとか云つたの。

秋天 陸軍省の御用地ですよ、

井山の老爺、やれ〳〵、こゝにゐても鉄砲に[illegible]んで來ないかの。いくら年寄つても定九郎のマネはしたくない。

秋天 相變らず、おぢさんは云ふことが皮肉だな。あれはおぢさん大久保の射的場の話ですよ、ここは射的場が無いから大丈夫です。

井中の老爺、さうかい。それでやつと安心した。今孫一の勤めてる會社へ寄らうとして下町を通つたが、下町も小さな家がもうすつかり建ち並んだの。

ひす子 時におぢさん、まだお晝飯前でございませうね、これから家でも御飯の仕度をするところですが。

井中の老爺、いや。その心配御無用、たつた今。悴と料理屋へ寄つてすませて來た、

ひす子 おや、さうですか。家へ來て召し上つて下さればいいのに。

井中の老爺、わしは田舎に住いたし、口も好かないから、ソバでも食はふと思つたが。孫一が何か大きな料理屋へ案内したよ。其の料理屋のだかいは大きいお客は私しらの外には一人も無いやうだつたが。よくあれで商賣に成るものだて。

(此の對話の間に花子は小學少年とその弟たちを連れ、何處かへ遊びに出る)

秋天 何しろ日本[illegible]一すから、我々も[illegible]か。

けて飲むより、そりや疊の上に座つてくつろいで酒を飲る方が望みなんだけれども、兎に角日本料理は手輕に行きませんよ。一寸藝者ぐらひ呼びたくなりますしね。だから景氣のいゝ時は客があるが、此の不景氣では客脚が遠いでせう、カフエーすら、この頃淋しい相ですから。

井中の老爺、さうかい。東京もそんなに不景氣かのう、まあ、田舍の不景氣と來たら、とても話には成らないよ。

ひす子　でも、今年はお米はお高いやうぢやございませんか。

井中の老爺、米に昨今少し相場が出たが、それは地主さんが一寸うるほう丈けの話で、その地主も今年のやうに不作では米が少し位高くても上りだかは却つて少なかんべえ、絲だとて安くはないが、それでも少しも景氣が引きたゝない。

秋夫　そんなにいけませんかね。

井中の老爺　いけねえのいけなくねえのつて、お前、夏から、御承知か何うか、農村は水爭ひだ。何だつて、ちつとも雨がふらねえ。水神さまも榛名さまも拜むだけ拜んだ。それでも雨はぽつつりとも降らねえ。之で先づ百姓は大弱りさ。

ひす子　しかし、凶年と云ふほどでもないのでせう。

井中の老爺　無論、凶作といふほどではないが、豐年にしろ凶年にしろ、とても今の分では田舍に花は咲かないよ。何の内閣も農村振興のお題目を叩かぬものは無いが、迚も今のやうでは、農村の振」しつこはありやしない。小作人は小作人で苦しみ、地主は地主で苦しみ、自作農は自作農で苦勞しつづけだ。百姓は朝は暗い中から起きて夜は夜なべまでして働く。田も作る畑も作る、ウンコも汲むブヨにも食はれる、養蠶も飼やあ賃機も織り草鞋も作る、まづいものを食べて氣の利かない裝をして、面白い物を見る事も聞く事もなく、ただ税金を奉るだけに生きてゐる動物だ。あれでは全く人間が辭職したくなる。青年が田畑を捨てゝ東京に走り小娘が家庭を離れて女工となる、もう無理はねえ。東京は景氣がいいとか惡いとか云つてるが、田舍は何年でも不景氣一點張りで通してゐるんだから、今更不景氣なんて云ふだけ無用だ。

秋夫　でも、おぢさん、いつだつたか大變お百姓さんの鼻息の荒い年がありましたね。さう〳〵大正八年の秋さ、丁度箱根へ行つた歸りに山越しをして道了さまへ參詣し、あれから松田の停車場へと向つた。その時よ。あの邊の村の道を銘仙の着物か何か着て自轉車に乘つて意氣揚々たるお百姓も見たし、又停車場では背中へ背負つて歩いてもいいやうな大きな金時計を見せびらかしたお百姓たちが五六人、日光までの二等切符を買つ

てましたつけよ。家あたりへおあい波みに來る者があまであ小意氣な風をしてゐましたぜ。

井中の老爺　さう云はれれば、如何にもそんな事も有つた樣だが、百姓だとてタマには良いお天氣もなくちや堪るもんかよ。此頃ぢやあ、もう、いつもの年なら嫁とり聟とりの多い師走に近いんだが、今年ばかりは祝儀せえも出來ねえ。何んなヤクザ祝儀でも今日日は千や八百の金はかかるからのう。

秋夫　それもさうですが、何んなに不景氣といつても結婚ばかりはしないわけにはゆきますまい。

井中の老爺　ところが然う簡單にいかねえのさ。ただ金が不足で嫁が貰へねえばかりでなくて、村に依つては女工に多く出るんで百姓の嫁になり手がねえ。東京の工場へ來た者は無論だが、他所の工場でも、一度工場の自由な味を占めた女は、窮屈な百姓屋の嫁になる氣は無くなるんだ。だから本當に今の若い者はおやげねえのさ（可哀相の意味）

秋夫　時に、おぢさん、お宅には娘たちが澤山あるが、それを早く嫁にやつたらいいでせう。第一花子なんか、もう年頃なのに、何時まであゝして家に置くつもりなんです。

井中の老爺　うん、わしも然う思はんでもないだ、仲々氣に入つた聟はないものでのう。こちらが宜いと思ふ樣でお氣に召さず、向ふで嫌はれるところは此地らがいやと來ら。

秋夫　結婚に我儘は禁物だ。お互ひが勝手な注文をしてゐた日にや、緣談の纒りつこはない。貰つてくれ手が有つたら、直ぐ與れる事さ。

井中の老爺　いや、生物と成りや犬猫でも、さうオイソレと與れる事は出來ねいよ。花子も去年の春女學校を出たで、二三申込みはあつたが、近頃田舍の青年には藝者を買ふことが流行物でのう。貧乏人に與れるもおやげねえし、さうかと云つて少し金廻りのいい家の悴に茶屋酒でも飲まねい奴はねい。悴はあの通りの堅藏だもんだから、さう云ふ青年には與れねえと云ふしさ。

秋夫　藝者買ひをするしないは、いい聟の標準には成りませんよ。つまり金が有るから藝者も買うんで、無けりや買ひ度くも買ひやしない。だから、若い時マジメのやうに見えても、それは必ずしも倘（あて）にはなりません。年取つてから女狂ひをしないとも限らない。四十過ぎて藝者買ひの味を覺えたのなんかは、到底も療治の施し樣がない。やるならまだしも若い時にやる奴の方が始末がいいでせう。昔から云ふ事だが、之はハシカと同じやうなものでしてね。少しは道樂をするにしても、親から讓られた金の十八よりはましでせう。何の彼のと、理屈を云はずに早

く片附けることですよ。娘がいやと云ふには仕様もないが……

井中の老爺　いやと云ふでもあるまいが、花子は何んでも田舍にゐるのが嫌ひで、東京へ奉公に出たい様なことを云つてるだ。それには悴も持てあましてるだよ。

ひす子　（先程赤ん坊が眼を覺めして泣いたので、一寸隣室まで立つたが、赤ん坊を抱き乳房をふくませつつ、又戻つて來てゐたので）さう云へば、先刻も花子さんは、そんな事を云つてましたよ。女中奉公か事務員にでも成りたい様な事を。

秋天　若い女の云ふ事なぞが、一つも本當に成るものか。娘たちの口と腹とはいつも違つてるものだ。そいつをハイ〳〵つて取り上げてた日には、却つて怨まれるやうな事に成るぞ。お孃さん育ちで來たものが、今更女中奉公なんかが出來るものぢやないし、又事務員だつても、さうだ。丸ビルの事務員なんかは三十圓の月給を取るのに、月々の化粧代ばかりでも四十圓も使ふ相だ。美顔術だの美爪術だの舶來お白粉やクリームの代ばかりでも、少くはあるまい。一寸見はキレイに見えるから、田舍娘なんかの世間見ずの考へでは、大變いい様に思ふけれど、開いて極樂見て地獄さ。

ひす子　それに、あんな所へ出てゐたら、何うしても貞操だつて、保證出來やしないし。

秋天　それは三十圓の月給を貰つて四十圓のお化粧代を拂ふと云ふんだから、何うせただ事では治まらないさ。自分の金を持ち出して道樂に働いてゐるものは別として。しかし、貞操なんてー何うでもいいつて云ふわけでもないがー貞操も要するに金の問題と性の問題だよ。之れを道徳問題として扱ふのは、舊い考へ方だ。男子だつて、金と性慾の多少で、石部金吉にも成りや道樂者にも成るんだからな。

ひす子　我田引水の論だわね。

秋天　何が、我田引水なもんか。何も世の中を知りもせんくせに。

ひす子　どうせ、私は何もしらない女ですから、ハイ、外でどんな事をしてゐるやら。

秋天　何だと。

井中の老爺　これ〳〵。年寄の前で夫婦喧嘩など見せてくれるな。花子を事務員にして惡ければ、しやしないから喧嘩は止してくれ。

秋天　いや、僕は本人が成り度いなら、活動女優で有らうと事務員であらうと、何に成らうと反對しやしないが、女つていふ奴は、何かといふと、すぐにやれ無邪氣で純の、やれ貞操が何うで何のと云ふのが癪に觸るんです。女なんてモト〳〵門

付きで淫亂で見榮坊のくせに……

ひす子　さうですとも、〳〵、何とでも仰言しやい。悪口は此人の商賣道具なんだから、迚も私たち素人が敵つこありやしないわ。ただ、商賣道具を家使ひにしちや些とばかり不經濟ぢやないこと。

秋天　それ見ろ。貴樣の方がよつぽど口が達者だ。ああ、併し、女つてものは、皆なこんなものだ。だから僕は驚きはしない。

非中の老爺　これ〳〵、もう好い加減にしろ。そこへ誰か用の有るお方が來てござるぢやないかい。

(見ると、緣側の前に、見馴れぬ若い男が何か洋服の布地の樣な物を澤山かかへて立つてゐる。鳥打帽を冠り服洋を着てゐるが、よくよく見ると異人だ)

異人　買つて下さい。安いです。いい所、安く賣ります。トクです。

秋天　いりません。家では誰も洋服を縫ふ人有りません。

異人　これ買つて縫はせる安いです。洋服屋で買ふ高いです。

秋天　いらない、〳〵。今日私忙しいです。

異人　本當に、これ安いです。

(秋天默つて手を振る。異人しやう〳〵に歸る)

秋天　(一人言のやうに)今日は、いやに洋服に祟られる日だな。

非中の老爺　今のは何だね。異人のやうだが。

秋天　大方ロシヤ人でせう。可哀相に、國を亡命して、知らぬ他鄉で切地の行商をして歩くのでせう。あれも、革命の生んだ悲劇の一つです。

非中の老爺　ははあ。ロシヤ人かい。支那人には物を賣り歩くのが時々田舍へも來るが、異人でもあんな事をする者が有るかのう。

秋天　貧乏すりや、人は何にでも成るんです。家でも手が十分有つて、縫ふ暇があれば、買つてやつてもいいんですけれど……子供は男も女も洋服に限りますからね。

非中の老爺　うん、此頃は田舍でも子供の洋服が流行つてるよ。だが女が洋服を着た恰好は、見つともないのう。あれでも異人の眼にはよく映るものかなあ。

秋天　なあに、日本の女がまだ洋服に關する知識が淺いからですよ。私なんかにや分らないけれど、洋行歸りの人に聞くと、向ふの女の寢卷に着る物を着て、平氣で[illegible]往來を歩いてゐるのが幾らも有る由で、西洋人が見たら[illegible]人と思ふだら

う、なんて笑つてましたよ。

井中の老爺　なんだか、此前、それ、博覽會に來て婆さんと二人で上野を歩いてる時、洋裝の女を見たつけが、餘り見つともなかつたので、婆さんは國へ歸つてから、一週間あまりも、夜に成るとうなされて眠れなかつたと云つてゐたよ。妙なことが流行り出したもんだぞ。

秋天　行く／＼は女の洋裝も、今よりもつと流行りませうよ。活動しいい相ですから。何うです。こないだの明治神宮のオリンピツクの競技に女子で一千メートルの競走をやつたものが有りましたよ。近頃は女も水泳だの庭球だのと、運動が壯んになりましたから、服裝もだん／＼變るでせう。

井中の老爺　なんだか家の娘どもも皆なテニスとか何とか云つて、あつてこともねえ、すいのう（ゆでた饂飩を釜から拗ひ上げる柄の長い笊。田舍で使ふ道具）みたいものに十兩も出して買ひ込んで來た。女もだん／＼お轉婆に成るのう。やれ／＼、怕ろしいこつた。

（此時、花子と子供たち外より歸る）

少年　お母さん。僕たち、今お隣の兄さんにラヂオを聞かせて頂いたの。

ひす子　それや、よかつたのね。面白かつた。

少年　うん。ピアノみたいな音が聞こえたよ。その後で、何か可笑しいお話が有つたの。

花子　ずゐぶんよく聞こえるのねえ。私ラヂオは初めて聞いたわ。

ひす子　この頃大流行りですの。東京にはラヂオフアンはずゐぶん有るわ。

秋天　おぢさん、無線電話ですよ。遠くの方で音樂でも話でもするのが電線無しで何處ででも、聞けるのです。アメリカの方では、それこそ大變な流行で、貴婦人なんか洋傘の柄にアンテナアを附けて置いて、道を歩き乍ら音樂を聽く人もあるとか云ひます。日本もやがて然う成るでせう。

井中の老爺（不安相に）うん。怕ろしい世の中に成つたな。今に家の中の話でも何でも他所の人に皆な聞かれて終うやうに成るだらう。私はただの電話を聞くのさへ氣味が惡いと思つてゐたのに、ああ、おつかねえ世の中に成つたもんだ。まご／＼してゐると、人間は化物みたいに成つちまうだらうのう。やれ／＼、俺みたいな昔者は早く死ぬこつた。

ひす子（子供たちに）さあ、皆な御飯にしませうよ。花子さんも一緒に食べてしまつて下さい。

（子供たち大悦びで、花子も共に次の間へ退く、

秋天　孫一は何うです。元氣ですか。

井中の老爺　相變らずトバス者で弱つちまうさ。去年大學う出たちうに、まだ嫁を貰ふいくぢ（意氣の方言）もねえ。學校にゐる中に運動にばかり熱中してゐてロク／＼勉强もしなかつたもんだで、まだ月給も上らねえ始末だもの。そのく世頭の毛べえテカ／＼させてへエカラ野郎で手におえねえ奴さ。國の方へ些たあ送金でもするやうだといゝけれど。

秋天　おぢさん、そんな事を言つたつて無理ですよ。まだやつと專經學校を出たばかしぢや、いくら法學士だつて下宿代くらゐしきや取れやしません。國元へ送金なんて飛んでもない。

井中の老爺　いや、それだけなら我慢もするが、時々病氣だとか何だとか言つて、いまだに無心を言つて來る。早く嫁を貰つてやらねえちうと、又バカな金を使はれても困るからのう。

秋天　まだ今から女房なんか持たせられては可哀相です。

（玄關に人の聲）

聲　ここで一寸。いらつしやいませんか。

秋天　ええ、居ります。何方。

聲　私細井簡四です。東京商文合作社細谷のことですがね。

秋天　あゝ。細井君ですか。内の者ですから、御遠慮なく、こちらへ。

（細井、はいる。友に挨拶などあります。）

井中の老爺　私は之から一寸明治神宮へ參拜して來よう。夕方までには歸つて來る。

秋天　さうですか。いつていらしやい。

（老人奥へ行く。子供たちと花子も一緒に明治神宮へ行くことに成る）

細井　では、用から先へ片附けてしまひませう。（メリンスの風呂敷の包みを解き、書類のやうな物を出して、擴げ）例の低利資金の願書ですがね。ここと四とこ書き損ねたところがあるんですが、そこへ訂正の判を頂きたいと思つて。甚だ御面倒ですが。

秋天　いえ、何う致しまして。君こそ大變ですねえ。迚も我々無精者には、君の役目はつとまりませんよ。

（秋天二階の書齋へ行き印を取つて來る。細井受取り四個處ほど捺す。印を返す）

細井　どうも御面倒かけました。

秋天　どう致しまして。

細井　では、私、失禮します。これから直ぐに東京市の方へ願書を出しに行きます。

秋天　まあ、いいでせう。[illegible]

もう少し、話し玉へ。

細井　あ、それから、私獨斷で――急いでゐたもんですから――あなたを商文會の會長さんに祭り上げたんですが、會員は皆な確かな人ばかりですし、又私どもが何んでもやりまして、決して面倒の起るやうにはしませんから、どうぞ此まゝ會長に成つてて下さい。又書類を書き直すのも厄介ですから。お年役と思つて。

秋天（不承不精に）ええ。ただ、今はお金を下げて貰ふ時ですから、皆さんの心も一致してますが、金が下つて家が出來て、今度月々返すつてえ時に成ると、何しろ十五年といふ永い月日ですから、いろ／＼面倒が持ち上りやしないかと思ひましてね。私のやうな無精者でなく、もつと圓滿で根氣の強い、まあ貴君みたいな人に會長に成つてて頂きたいんです。私が年尚と云ふ順かも知れませんが、第一之れは十五年といふんだから長命な人を役員にして置かないと將來困るでせう。だから、その點でも、あなたみたいに身が丈夫で年のお若い方がいいんです。

細井　そりや十五年といふんですから、乾度いろんな問題も起るでせう。併し、要するに返金と云ふ簡單なことなんです。

秋天　それがです。多勢の中には、いろ／＼身の上に變化も起りませうしね。死ぬ人だつて無いとは限らんでせう。そんな事を言つて、僕が一番先きに死なんとも限らないが：：

（此最後の自分の言葉の爲めに、秋天は我ながらゾツとするほど怖ろしさに打たれる。細井も氣味惡く感じつつ）

細井　そんな事は有りません。併し、まあ、病氣する事や、いろ／＼都合の惡いことも起るでせう。そんな位のことは、乾度あります。

秋天　文士なんて、毎年のやうに番附の變るものですから、收入にもいろ／＼變化が有ると豫想しなきや、なりませんしね。

細井　ですから、一つ別に此商文會の組合員の中で、共濟會を起しませう。そして萬一の場合は共濟會の積立金から返金する。さう云ふ事にでもしたら、皆さんが安心してやれるでせう。

秋天　地所はもう見付けましたか。何處か心當りが有りますかね。

細井　もう市内には殆んど無いでせうよ。まあ探せば何うしても郊外ですが：：

秋天　郊外は近頃ずゐぶん泥棒が多いやうですね。强盜もあり詐欺もあり、まるで袴垂や鬼童丸時代の京都のやうな狀態で

すから、誰も枕を高くしちや寝られませんね。

細井　詐欺と云や、こないだ代々木の電話詐欺は何うです。巧妙に成つたものですね。

秋天　こないだの校友會へゐらしやいましたか。秋の。

細井　いゝえ、參りませんでしたが、暴漢が現はれて校長に糞を浴せたと、新聞に有りましたね。

秋天　小穢い暴漢も有つたものですなあ。

細井　それから大倉男の祝賀會を脅かす連中だの。世の中はだん／＼物騷に成りますね。

秋天　つまり綱紀の頽廢ですよ。ああまで鼠賊の横行すると云ふのは。しかし、大倉男の祝賀會は問題にする價値が有るには有りますね。此不景氣な、此節約を奬勵してる、此經費節減の犠牲者を出しつつある時代に、あんな豐太閤の醍醐の花見然たる豪華なマネをすると云ふのは。ただ國民の反感を惹くといふだけぢやないもの。カルウソー一枚のレコードを聽くにすら奢侈として、政府は重税を之に課してる時代なんだから。此際、日華親善をダシに使つて梅蘭芳を傭ふなんて事は。

細井　時に支那の動亂は何うです。豪さうな奴が走馬燈のやうに次々に出て、たわいもなく消えて行きますね。

秋天　まるつきり見當が付かない。五胡十六國なんて時代の再現でせう。亂世の始まりですね。

細井　支那のことなんか何うでもいいとして、團右が死にましたね。

秋天　本當に。實際惜しいことをしましたよ。演藝界落莫の感を深くしますね。いや、近頃は面白い人間が遠慮なく死んで行く。そして下らない奴等が無暗に社會の表面に出現して、目ざはりでならない。

細井　安成さんも此夏亡くなられましたが、呑み仲間が逝つて淋しくはありませんか。

秋天　安成貞雄ですか。（と暫く悵然としてゐたが、又慨然として）自ら高等幇間と名乘つて賑かな面白い男でしたが、今の世の志道軒といつたやうな、名物男を一人失ひましたねえ。彼も死ぬ前夜コクテルを八杯呑んだといふが、さう聞いたら一層カクテルが美味いやうな可怕いやうな氣がして來ましてね。なんだか取り止めのないグチに成つてしまひました。此んな話はもう止めませう。

細井　や、私はもう失禮します。大變お邪魔いたしました。これから直に市會へ行きます。

秋天　御苦勞さまですね。では宜しく。何もお構ひしませんでしたね。

(細井歸る。秋天何か淋しさうに考へ込む。)

秋天　靜かに成つたな。

（玄關でカタコト立て付けの惡い格子戸を閉める音。つゞいて力の無い咳拂ひ）

？　御免。

秋天　はい。何方。

？　本屋です。滄洛書店です。

秋天　うん。滄洛書店か。さあ、は入り玉へ。

書店　(叮嚀に叩頭をして) 大變遲なはりまして申譯有りません。丁度、假に親戚に不幸がございまして、寺の方へ廻りましたものですから、つい、お約束より時間がおくれまして。誠に相すみません。

秋天　さう〳〵、今日でしたね。お待ちしてゐました。持つて來て下さいましたか。

書店　へえ。へえ。實は。誠に申上げにくいんでございますが、何うも當月は、いやはや、もうそれは御承知でございませうが、この五月頃から世間がどつと不景氣になりまして、殊に此出版界と來たら實に慘憺たる光景です。もう七八月と成ると、例年この月は書店の振はない月でございますが、まづ今年つくらい甚だしく不振な事は、私ども覺えて無いことでございます。

秋天　併し、此春はすばらしく賣れた相ぢやないかね。世間の評判だが。

書店　へえ。そりや評判どうりなのでございます。全くよく、それこそ羽根が生えて飛ぶやうに賣れました。だから、品を持つてた人は、例へローズ物でも何でもトツトと出て行きますから、大變優勢だつたのです。何しろ大震災の結果、世間に品が全然拂底に成つたものですから、置きさへすれば、何んな品でもずん〳〵はけて行きました。ところが、先生も御承知の通り、拙宅はあの通り三方から火をかぶりまして、それこそ何を取り出す暇もなく、店に置いた品は勿論、家財道具に至るまでキレイ薩張に燒けてしまひまして、バラツクは出來たが賣る可き何物もないのでございます。早速新刊物をと存じましたが、下町に有つた大きな印刷所がこと〴〵く燒けてしまひ、それへ持つて來て、各新聞社の全燒したために、それを山の手の印刷屋で刷つてゐるやうな次第で、我々までが其のとばつ散りを食ひ、春は春で、あの政變にぶつかりましたので、選擧の印刷物やら何やら、印刷所の繁昌は目が廻るほどであるのに工場は少なく職工も亦た燒死者はあり、都落ちをきめたものは有り少數と來てゐるので、印刷の工賃は暴騰する、さて然うなると、工場主

の利息は途方もなく荒く成り、前金で拂つてでも行かなければ、てんで對手にしやしません。よし引受けたとしたところで、いつ迄でも延期してちつとも此方の注文通りにはしてくれませんで、それで勘定はギウ／＼取りに來る。私どものやうな燒け出されはたゞうろ／＼と彼地へまごつき此地へまごつきしてゐるだけのことでした。ですから、他所さんが新刊物を出して飛ぶほど賣れる時期を、こちとらは指をくはへて見てゐたものです。殘念作ら燒出され黨の腕前には資金が乏しいから、如何とも策の施しやうがございません。皆さんは日本移民が米國で排斥された。米國は非人道的だ、怪しからんと額に青筋を立て〻仰言いますけれど、我々金の無い者は日本の中ですらも排斥されて居ります。而かも世人は日本の中での日本人排斥に就いては平氣で居ります。矛盾いたしてるぢやございませんかね。

秋天　それで、結局何う成りました。

書店　まあ、まあお聞き下さいませ。その中から、是も何も、何うやら金工面をいたしまして、私どもも二三點賣れるものを出すには出しましたが、後その景氣に乘つていよ／＼刷り出さうとした時には、はや世間さまの方が不の字と來てしまつたのです。運の惡い者は、何うにも致し方はございませんよ。

秋天　一つは皆さんが餘まりお調子に乘つて、澤山出し過ぎたためではありませんかね。

書店　そこです／＼。荒村の中、品が無いために燒け出された下町の小賣店の書棚に飾る可き何物も無くては、飾りに貧弱で一日も耐へられません。そこで小賣店はお客様へ賣るほかに、書棚へ詰め込む必要からも、新刊物を無暗と要求したものです。さあ出たわ、ビッチリ書棚に詰つてゐるのに後から／＼新刊が續く。迚も市場で吸收しきれぬほど出て來るわ。いえ、それでも、また品の置きどころが無いわけではございませんですが、品を置けば賣金を版元へ拂はんければなりませぬ。そこへ來て　さあ世間不印で一寸も金が動かない、小賣店も苦しいから、まだ店に置けば賣れるものでも、一月と置かず目の敵にしてトットと返して參ります。甚だしきは、やうやく新刊を送り付けて、まだ新聞廣告も出さない中に、まご／＼すると、もう氣の早い奴は送り返して參ります。あの日の出の勢ひのあつた例の「女性倶樂部」ですら――之は雜誌のお話ですが、此七八月は、何うでございます、返品七割といふんだから、ギヤフンと來るぢやございませんかね。その他推して知る可しです。いえ、本の方はそれよりもつと惡い。先日も何ですよ。私がたま／＼店に居りますと、前の大通りを本を詰め込んだ箱を山ほど積んだ馬力が通るぢやありませんか。家かしら、と思つてゐると幸ひ道

りすぎる樣ですから、一つ何處へ行くかと馬方に訊いてみました。すると共れは新宿の無茶苦茶閣への返品だ相で、驚く勿れ、馬力に積んで十六臺と云ふのですからね。それがたつた一軒の店だけで然うです。持つて來られても、こちとらでは置きどころもございません。

秋天　まあ、それが君の家のでなくてよかつた。

書店　いや、幸ひ私共では、そんな無茶な出版は致しませんから、そんなに返品の有る筈もございませんが、これでも色々他所さんの失敗の飛つ散りを受けたことが、積り積ると仲々大きうございますよ。先達つても、私の極く近い關係の分散堂がもういよ／＼いけなくなりまして、その借金を引受けたのが五千圓で、その形に紙型の三つ四つ讓られはしましたが、金の方に約手の振出人になつてゐたものですから、すぐ現金で吐き出させられました。更に一つ印刷所が、之も矢張約手で三千圓と云ふもの、復興資金として借り入れたものですが、印刷屋の方も春の樣な景氣はなく、矢張出版界が沈滯だと詰り順々に押せ／＼で不振に成つて參り、とう／＼こないだ沒落しました。するとその三千圓が直ぐ私の頭にかかつて參ります。之は約手ですから待てシバシは有りませんしね。

秋天　さうですか。それは大變だ。時に君の方の四種の分は。

書店　えへゝ、まあ左樣な次第でございますから、實はその、只御同情に甘えまして、と思ひまして。

秋天　うん。しかし、そりや困つたなあ。少しは何とか成らないかね。

書店　無理さんだん致しますれば五十や百くらゐのところですと、何とか成らんことはございませんが、唯今もだん／＼申す通りの次第でございまして。

秋天　…………

書店　では、どうも永喋りを致しまして、飛んだお邪魔をいたしました。左樣なら。

（沒落書店歸り行く。）

秋天　あんまり、あの男が面白く喋くるから、つい釣り込まれて之も世間の知識の仕入れと思つて聽いてゐたら、詰らない結果に成つちやつた。あゝ、何うしよう。兎う何處も此處も手が詰つて來ては。

（この秋天の獨り言の間に、ひす子襖を開けて姿を現はす）

ひす子　何うなさいました。沒落書店は持つて參りまして。

秋天　あゝ（溜息）大へん損をしたので拂へないとさあ。

ひす子　えつ。一文も置いてかないの。本當ですか、私は

とうに困つちまうわ。

秋天 ………………

ひす子 あなたは書齋に閉ぢこもつてゐれば人に會はないでもすむけれど、私はさうは行きませんもの。本當に、私、何うしませう。牛乳屋は、そりや毎日矢釜しいし、西洋食料店だつて、もう百五十圓もたまつてるし。

秋天 そんなに溜めなきやいゝのに。

ひす子 さういふ非常識なことばかり言つて、何處まであなたは私を苦しめるおつもり。買ふ時ばかりキングジョージを持つて來いの、日本の安煙草は僕には飲めないからオツクスフオードを持つて來いの、スキツツルのチーズだサルチンだ、ビールだつてドイツのビールが美味いの何のと、贅澤ばかり言つてるんですもの。二月もすりや、それ位には成るわよ。

秋天 そんなに買つたかなあ。

ひす子 そんなにぢや有りませんよ。子供がハシカに罹つた時の、お醫者さんの拂ひだつて、まだ其儘に成つてるぢやないの。今度また若しか子供が病氣でもしたら、あなたは何うなさるお積り。私や、もうお醫者さんに會はす顏がないわ。

秋天 そりや子供たちばかりぢやあない。自分が病氣したつて同じことだが、今そんな事を言つてゐても始まらない。困ればまた何處からか入つて來るだらう。

ひす子 困つたことになつたわねえ。私このお金をあてにして方々へ約束したんですもの。それが皆嘘になるわ。

秋天 困りや、誰だつて嘘くらゐ付くよ。嘘のつもりでなくも結果は嘘になるんだから。

ひす子 さうして私に嘘を吐かせたことにして、女つて嘘つ付きの見榮坊だなんて、よくも、まあ言はれたものだわ。ええ、口惜しい。〳〵。〳〵。

秋天 しつ。まるで喜劇だ。そんな聲を出して、非小のおぢさんに歸つて來てから聞かれたら、何うする。

ひす子 だつて何うしやうも有りませんもの。

秋天 しつ。だまれ。〳〵。家ばかりのことぢやない。此冬は世間一般に何處も不景氣で、誰を見ても不安に襲はれた顏ばかりなんだ。あきらめろ。〳〵。

ひす子 知りません。私、知りません。

（終り）

老農を父として

田中貢太郎

北海道へゆく途次なりとて永瀬氏登山して曰く御父君には御病逝のよし驚き申候熱誠率直活氣潑剌の眞人間一種感激の涙を濱風に揮つて君と小生とを迎へられし御俤今もなほ目に在り嗚呼世を去りませしか風木の御歎や切ならむ御母君これより寂しくおはさむ御自重御自重念入候

六月十五日　芳衛

大町桂月翁から斯うした過分の弔問を受けた私の父は、本年即ち大正十三年五月二十八日を以て老農としての一生を終つた。父は寅の歳生れの七十一歳であつた。寅の歳と云へば安政元年である。安政の元年と翌二年とは、我が國が彼の大地震に襲はれた歳で、元年は西部諸國が激しく、二年は東部諸國が激しかつた。有名な江戸の大地震はその二年の東部の地震に屬してゐた。

私の故郷は高知縣長岡郡の最南端になつた三里村と云ふ海村で、一方は山地になつて十市稻生五臺山など云ふ諸村に境し、一方は沙洲からなつた平地で浦戸港の左岸を形づくつてゐる。戸數八百、人口五千、一方里にたりないこの村は、南岸に太平洋の湖があつて、そこでは白い波が沙を捲いては捲き捲きしてどう、どう、どうと云ふ緩い不斷の律動を傳へてをり、北岸には入江の、のたりとした水が干潟をこしらへては消し消しして、復たそれをこしらへてゐる。父はその村の中央になつた仁井田と云ふ部落で、安政元寅年七月二十七日を以て生れた。彼の安政元年十一月四日五日の西部諸國の激震の日は、母に抱かれて津浪を避け、家から北に當る私達が清導寺谷と呼んでゐる寺のあつた山の麓へ行つて、數日間そこに露宿してゐたと云ふことである。

父は五十に近くなるまで海員をしてゐた。狹い海岸の村では農業に從事するにしても土地がすくないし、漁業と云つても地曳網を曳く位のもの、鹽をたくか、造船所の多い西部の種崎と云ふ部落へ行つて船大工になるか、鍛冶屋になるか、小商人に

なるか、汽船や帆船の船乗になるか、それ以外に無産者の子弟の取るべき生活の方法のないためでもあつたが、父が海員になつたに就いては他にも理由があつた。それは私の家が藩の舟手の家であつたがためであつた。

南の島國の土佐へ封ぜられた山内家では、參勤交替をはじめ上國と往來して有無を相通ずるために、私の村へ船役所を置いてたくさんの船を備へてあつた。藩主の乘る御座船、御手廻、荷船、川船。大小の船舶を納れる船倉が仁井田と種崎との間になつた入江の岸に建ち續いてゐた。私の家はもと種崎で、その藩船の舟手を勤めてゐた。御座船の船頭が御座水師、御抱水師。舟手とはその下の一般の舟方を指す詞であらう。田中氏遠祖御祖代代御鑑とした祖先の命日を書いた先祖書きに據ると、田中家先祖(文永申年十月七日歿)、田中甚六(天保八酉二月十一日歿)、田中甚八(天保八酉五月十一日歿)、田中虎藏(天保八丁酉八月十九日歿)、田中鐵藏(文化三丙寅十二月十八日歿)、田中庫助(明治十八年九月二十三日歿)などの名が見えるが、その人人が皆舟手であつたかどうかは判らない。ただ田中庫助と云ふのは

私の祖父で、私が五つか六つの時まで生きてゐて、船にゐたことはわからないが、祖父が乘つてゐた船に關係した話などを聞かされたり、祖父が用ゐたと云ふ港の出入に五分一の役所に差

し出した、背を眞赤な漆で塗つた黒い大きな櫓の文箱を[illegible]見せられてゐたので、祖父の御船頭と云ふことに疑ひを持てなかつた。

祖父は肥つた肩幅の廣い男であつたやうな感じがする。私はその祖父におぶはれて、海岸の畑の方から歸つて來たが、その手には祖父の作つてくれた紙の旗を持つてゐたやうに思はれる。何時であつたか父の留守の時であつた。無論父は船に乘つてゐたのであらう。ある夜母が大きな聲をするので、眼を開けて見ると、表座敷で寢てゐた祖父が蒲團の上に坐つて、諸肌を脱ぎ、いつも中床の刀架に架けてある脇差を拔いて、それを逆手にして白刃の所を腹の方に向けてゐるのを、母が行つてその手をつかまへながら人を呼んでゐるところであつた。表と奥との境の襖を開けてその敷居の上に置くことになつてゐた行燈の灯は、物凄くそれを見せてゐたので私は頭へあがつた。と、そこへ、掛金をかけてない勝手口の雨戸を開けて、私の家の物置に住んでゐた虎次と云ふ婿が來て、母に力を添へてその脇差を取つてしまつた。

「伯父さん、おまんは、なぜ、こんな事をするぜよ、」

と、虎次が云ふと、祖父はむつくりと頭をさげて俯向くやうにして、

『をらか、をらは、浦戸山が燒けたきに、生きちやをられん、』
と云つた。虎次は、
『そんな事があるもんか、浦戸山が燒けるもんか、それや夢よ、おまんは夢を見たのうし、』
と云ふと、
『さうか、夢か、うむ、』
祖父はさう云ふかと思ふと、横にぐつたりと體を寢かしてしまつた。浦戸山は浦戸港口の右岸になつた丘陵で、今はその丘陵が南になだれて海中に突出した所に燈臺がある。私は浦戸山の燒けたがために自殺しなくてはならないと云つた祖父の心理狀態を考へてみることがある。

その祖父は荷船を宰領して江戸へ往來してゐたところで、部下の舵子(かこ)が漆の密賣をやつて、あらはれると祖父の命であると云つた。それがために祖父も罪に問はれることになつたが、糺明の結果、罪狀が明になつて祖父の冤罪は晴れた。そこで二人の舵子は仁淀川限り追放と云ふことになつたが、祖父も部下不取締と云ふことで船頭をやめられた。舵子が追放せられる時、その兄弟が私の家へ來て泣きながら、
『どうかして、赦してもらふやうに云ふてくれんけよ、おれが可哀さうぢや、』
と云ふと、祖父は、
「なにもせん、をらでさへ、船をやめたきに、した者は、しかたがないわや、」
と云つて冷然としてゐた。その小氣味よかつた祖父の態度を父が傍で見てゐて私に話したことがある

祖父は通稱を鐵藏と云つてゐた。その祖父はある日便所へ行くと云つて、勝手の土間へおりたところで卒倒したが、これがその終焉であつた。それは明治十八年九月二十三日のことであつた。母に聞くと祖父はその日は朝から氣分がすぐれないと云つて寢床にゐたとのことであつた。明治十三年三月生れの私はその時五つであつた。祖父は文政四巳正月二日生れの六十六歳であつた。祖母は私をいつもおぶつて、東隣の私が物心がついた比にはもう取り拂つて甘藷畑になつてゐた栗と云ふ寺の庭へ行つて、
「ほんちきちん、ほんちきちん、」
と云つて守をしてくれたと云ふが、それは記憶がない。祖母は浦戸村の生れでお梅と云ふ名であつた。歳は五十八。明治十五年七月に亡くなつてゐる。

祖父は澤田と云ふ家から來て私の家を繼いだ者であつた。祖

父の時代の戸籍謄本を取つて見ると、祖父は田中貢藏と云ふ者の養子と云ふことになつてゐるが、それは普通の養子でなしにその當時の風習に從つて、血統の絶えた家へ籍を入れて格式か何かを得たやうに思はれる。と云ふのは私の祖父は、澤田源六と云ふやはり舟手を勤めてゐた者の長男であつて、法律上の手續きのいらない當時であつたから便宜に從つて外へ出たとも思はれるが、しかし藩政時代の嫡統を重んずる時代にあつて、家を繼ぐべき兒が出て他家を繼ぐと云ふには、義理か、それでなければ利益かがなければならないのである。私は祖父は好い格式を得るために、血族の關係も何もないが、ちよつとした關係から私の家を繼いだものだと定めてゐる。

祖父の出た澤田家は私の家の西隣にゐて、鹽もたき、魚の仲買もやり、阪神地方へ野菜や生魚の輸出もやり、最後には錢湯をやつてゐたが、今は高知市外の潮江村の阪神航路の汽船の發着所で旅館をやつてゐる。その澤田には今は當主になつてゐる、私と同年で小學校にも一緒に行つてゐた熊太郎と云ふ再從兄弟があつて、いつも一緒に遊んだものだ。私はその澤田の家で曾祖父の源六老人を見たことがある。それはなんでもその家の庭先にあつた大きな榎の木に若葉の見える明るい晝間のことであつた。熊太郎の母即ち源六老人の孫娘が、庭の流槽の傍で米を搗いでゐると、何か氣にくはない事でもあつたのか、平生も奥の室の一段低くなつた所で寢てゐた源六老人は、片手に柄の長い座敷箒を持つて、いざりのするやうに白い腐つた魚の肉のやうな兩足を前にやりながら、そつと音のしないやうにねぜりおりて來て、孫娘の米を搗いでゐる釜を覗つていきなり箒を突きあて、

『ランペン彈が、はつし、たア、』

と云つた。と同時に釜は前向けにひつくりかへつてしまつた。

その源六老人の二男で澤田の家を繼いでゐた私の祖父の弟は、三平と云つて穏な心にゆとりのあつた男で、てにはなどのたのしみをやつてゐた。てにはは所謂前句附（まくづけ）である。三平老人はよく鍬を持つたなりに畑を打つことも忘れて、畑の中に衝つ立つてそのてにはを考へてゐたと母が云つた。ある時てにはに『高いものかな高いものかな』と云ふ題が出ると、近藤といふ家の老母は、『三平が魚の高さけしからん、』と附けたとも云つた。三平老人は魚の小賣などもやつてゐた。この比のてにはに『かゆいものかなかゆいものかな』と云ふ題が出ると、三平老人のてにはに『雨夜の猫[illegible]獨り寢の蚊帳』と附けた人があつたと、三平老人のてにはに附隨して聞かされたこともある。この三平老人は、仁井田に二

人あつた居眠り男の一人であつた。その附近にはずずぐり」と云つて蚯蚓を糸に指して、それを鰻のゐさうた所へ浸け、寄つて來る鰻を片手に持つてゐるしやくひ網にしやくふて捕る釣方があつて、雨あがりの水の濁つた時などには、そのずずぐりに行く者が多かつた。三平老人もそのずずぐりに行くが、居眠りをするので、時時鰻にその道具を持つて行かれて仕方なしに歸つて來たものだ。

三平老人には、お楠といふ姉娘と、楠太郎、虎次、長次と云ふ男の子があつて、楠太郎が家を繼いでゐた。即ち熊太郎の父である。三平老人の小供達は、皆私の父を、

『おいとう、おいとう、ひがしらのおいとう、』

と云つて呼んだ。もう今はお楠ばかりが遺つて、楠太郎も虎次も長次も亡くなつてゐる。そして、そのお楠さんは、十市に縁付いてゐたが亭主にも小供にも死なれたので、高知市の料理店に奉公してゐると云つて、父の葬式の日に來てくれて、昔の思ひ出をこまごまと話した。

父は松次郎と云つてゐた。その父には源太郎と云ふ兄があつたが、それは明治六年十二月二十五日に亡くなつてゐる。その源太郎伯父は、先祖書きには源治郎となり、年も二十五歳となつてゐるが、村の戸籍簿には源次郎となり、年も二十二になつてゐるが、源治郎で二十五歳で亡くなつてゐる方が正しいらしい。源治郎伯父には家内があつて、伯父が無くなるとやはり仁井田の私の家から十町ばかりも東になつた弘内と云ふ家へ再縁してゐて、私の家とは親類のやうにしてゐたが、もうその女も七八年前に亡くなつてゐる。お楠さんは、源治郎伯父と父との事を話して、

『おいとうは、学がきらひで、學校へいこと云はいで、おんちやんが困つた、源太郎の方は、好きで、ようできた、おんたし兄弟でも、違ふちよつたきにのうし、』

と云ふやうなことも云つた。その源治郎伯父も父も、家業に從うて早くから海の人となつてゐた。私はその事に就いて父に聞いてゐないから判らないが、私の家の事を知つてゐる村の人が、時とすると世間話の中で、私の家は村で一番古い汽船乘りだと云ふやうな事を云ふので、明治元年に二十前後であつた源治郎伯父は、土佐藩に買ひ入れた汽船に乘つてゐたやうな氣がする。土佐藩に買ひ入れた汽船であつたか、それとも他の船であつたか判らないが、舳に女の裸像を彫刻した汽船があつて港へ出入してゐたと母が話したことがあつた。母は浦戸港口に近い種崎のこれも册手であつた。森岡常七と云ふ者の娘であ

つた。

母は女の裸體像を彫刻した船を夕顔號と云つてゐたが、ついするとその船に父が乘つてゐたことがあるかも判らない。父はそうして内地の港から支那朝鮮の港港にも行つてゐたので、文字はなかつたが東洋の事物にはよく通じてゐた。それについて父に敎へられた事は、かうして遠くにゐた父は萬一の場合に何時でも家へ歸れるやうに旅費を持つてゐたといふことであつた。私が東京に出るやうになると、父はよくそれを云つて聞かした。

『をらは親や兄弟が死ぬるとか、病氣になるとかした時には、何時でももどれるやうに、旅費だけは放さなかつたぞ、』

しかし、父が東洋の港港をさまよふてゐたのは若い比のことで、母を迎へるやうになつてからは、おもに土佐と神戸大阪の間を往復してゐる近海航路の船にゐた。そして、四日目か五日目に船が入つて來ると、歸つて來て遲くまで酒を飲んだ。父は小學校に行つてゐる私のために、半ズボンの少年服を買つて來てくれたこともあつた。

もう祖父もとうに亡くなつてゐたし、妹が生れるまで父の船に行つてゐる間は、私は母と二人で淋しく暮らした。母は私の家へかたづいて來るまでは、高知市の深井と云ふ山内侯に遠州掛川から隨いて來たと云ふ由緒のある家へ奉公してゐたので、時時私を其所へ連れて行つたことがある。そこは追手筋の街筋になつた所で、その家の前では有名な吉田東洋が暗殺せられてゐる。そこは庭に大きな池のある家で、じやぼんの木がたくさんあつて、行くたびにその實をもらつたものだ。深井家はもうその比所謂士族の商業で、家祿を失くしてしまつて零落しはじめたところであつた。母は家にゐてもよくその深井の話をした。その母はいつも機を織つてゐた。胃ケイレンを起すのが持病で、そんな時には私が裏の井戸から水を汲んで來て、お粥をたいたり、自分の喫ふ飯をたいたりした。

父は勤勉な質を持つてゐた。すこしの時間でも空費すると云ふことはなかつた。船から歸つて來ても時間があれば、畑へ行つてすこし作つてある茶園に肥料をかけたり、麥を蒔く比なれば麥を蒔き、甘藷を掘る比なれば甘藷を掘ると云ふやうにして、暗くなるまで仕事をした。そして、朝はもう二時頃から起きて、飯をたき、茶を沸かして、私達の起きるのを待つてゐた。それでまた時間があれば、家の者の穿く草履でも作ると云ふありさまであつた。

それに手先の器用さがあつて、何を[illegible]し、家の修繕をやり、垣のたけを入れると云ふやうなことまで、他人の手を借りなかつた

しかし口が吃つて世才がなかたつので、家のことは何から何まで母がやつた。それだけ何所か莊重なところがあつて、知つた人からは信頼せられてゐた。

　これは海に經驗があるためで、そんなためでもなからうが、土佐へ新に回航して來る船があると、きつと父が水先案内になつて、その船を乘つて來たものである。文字のない父は、免許狀を得て上になることができないので、三等運轉手の所謂カウロマステンをやつてゐた。港の出入に鉛の分銅を附けた繩を潮の中に投げ投げして、水深を計り、それを歌を歌ふやうに知らしてゐるそのカウロマステンであつた。

　何時であつたか父は陸の人となつて、浦戸港へ小舟を乘り出し、滿潮と干潮の水深を計つて、それを高知市にある汽船會社へ每日通知してゐたことがあつた。その時懷中時計のなかつた父は、會社からくれた大きな八角時計を自分で縫つたヅツクの鞄に入れて持つて行つたのを覺えてゐる。

　その前後であつたか、母が土瓶を度度こはすので、父は土瓶を水に浸しておけばこはれにくいと云ふことを何人かに敎はつて來たものか、新らしく土瓶を買つて來て今も私の家にある大きな瓶に浸けてあつた。それを母が知らずに井戸から汲んで來た水を入れた。土瓶はぐらぐらとでんぐりがへつて、緣にあたつてこはれてしまつた。母は驚いて早速それに似た土瓶を買つて來て瓶に浸け、私に、

『お父さんに云ふまいよ、』

と口留めをしたが、私はそれがおかしいので、夕方父が歸つて來ると、母の顏を見て、

『ドの字、ドの字、ドの字はどうぜよ、』

と云ふと、父が氣が注いて、

『ど、どびんを割つたかア、』

と云つて怒鳴つたので、母が笑ひだして、皆で大笑ひをしたことがあつたが、これも今はなつかしい思ひ出の一つである。

　老病で寢込んでゐても氣にくはないことがあると鎌を持つてにじりおりて來て、孫娘の磨いでゐる米をひつくりかへした源六老人から流れた血は、祖父にも父にも傳つてゐた。やはり父方の激しい感情を傳へてゐて、男のやうな傲放なところのある母は、その祖父とよくいがみあつたと話して笑ふことがあつた。

　父はよく云へば謹直とでも云ふやうなところがあつた。人に對しては飽くまで向ふの氣心を酌んでやると云ふふうであつたが、相手の出やうによつては最後までは默さなかつた。私が不

郷の金助町に住んでゐた比、父が孫を見に上京したことがあつた。その時父の乗つて來た汽車は夜の十一時頃になつて着いたので、それを迎へて二人で家の近くまで歸つて來た時には、もう十二時を過ぎてゐた。二人が默默と伴れ立つて自分の家の出口になつた路次の中へ入らうとしたところで、そこにゐた刑事の一人が出て來て、

『おい、何所へ行く、』

と云ふやうなことを云つて呼びとめた。すると父は勃然と怒つて、その時肩にしてゐた土産物の漬物か何かを入れてゐた樽を放り出すなり、刑事の胸倉をぐいと掴んだ。

『他人(ひと)が通つて行きよるものを、咎めるとはどうなら、』

私は父に刑事のことを云つてその手を放さし、刑事にはあやまつて家へ入つた。父がかうして他人と爭つたことを見たのは後にも前にもたつた一度であつた。父の話に支那あたりで船にゐる比、暴風雨の日仲間の支那人が何かやつたので、辮髪を指に捲きつけて押へつけ、靴を穿いた足の痛くなるまで蹴たところが、その支那人は船が着くなり陸へ逃げて行つて、再び姿を見せなかつたと云ふやうなことを聞いてゐるが、それは話の前後がわからないから父の性行を判斷する材料とはならない。

父は骨の高い、潮風と陽に晒された皺深い長い顔をしてゐた。私の長男が容貌から骨格から何所か父に似てゐる所がある。父は煙草と酒が好きで、酒は若い比は冷酒であふつてゐたが、體を痛めて血を吐いてから溫酒を用ゐるやうになつたと、これも父の口から聞いてゐる。近海航路の船に乗つてゐて、四日目か五日目に歸つて來てゐる比には、七八合位飲んでゐたやうに思ふが、酒には刺身か酢の物か、どうしても生魚がなくてはならなかつた。

酒がまはつて來ると堅く締つてゐる口が開いて來る。舌もいくらか滑になつて來るので、冗談も云へば世間話もしたが、やがてその世間話は壓迫者に對する不平に變つて來る。

『蚊の血ばア吸うと、すぐ、りきみだす、酒飲みほど、いかん者はない、』

酒の匂ひを嗅ぐこともきらいな母は、父の興をそぐので母との爭ひになる。かうして持つて行き所のない無産者の虐げられたる不斷の不平は、わがままも手傳つて母に向つて注がれる。夏などは蚊の聲に交つて、その荒い詞が外戸にもれたが、小供には一言たりとも荒い詞を使つたことがなかつた。私が高等小學校になつて眼に故障ができ、高知市の眼科病院に入院することになると、その間、母に匿して小遣にと臍錢をすこしくれたお、それほど小供には細い愛情を持つてゐた。

父は心ゆくまで酒を飲むと、そのまゝそこへ横になつて假睡をして、母がいくら起しても夜半過ぎでないと寢床に入らなかつた。父はその當時濃い口髭を生やしてゐて、母が剃らさうとしても酒が浮くと云つて剃らなかつた。すると、ある夜、醉つて假睡をしてゐる所を母が剃つてしまつたので、朝になつてそれと知つて苦笑したこともあつた。

これは日清戰役當時のことであつた。高等小學校に行つてゐる私も、將來の生活の手段を考へさせられるやうになつた。その比は自由民權熱のほとぼりがある比で、子供の頭を支配したものは大臣宰相か軍人かであつたが、私は軍人になるには腺病質で體が弱いので、やはり學問でゆかなければならなかつたが、ますます家業の衰へてゐる私の家では、私を中學校へ入れて高等の學問をさす資力がなかつた。私は學校へ行くことができなければ、やはり父のやうに船へ乘つて履歷をこしらへ、機關士か船長になつて、そのうへでおもむろに世に出やうと思つた。

『船乘はいかん、船乘は人間の屑ぢや、それよりお前は大工になれ。』

と云つた。自分の受けた屈辱と苦心とを考へて、自分のやつた仕事を小供にやらさうとしないのは普通の人情であるが、父はとりわけて海員の不道徳な生活が厭であつたらしい。父はあんなに長く海員をやつて港港をさすらつてゐても、男女關係の事は一度たりとも口にしたことがなかつた。私が後に若い男の群に入つて、酒を飲みながら馬鹿なことを口にしてゐると、父は人に向つて、

『うちには、あんな事を云ふ者はなかつたに、あれは、どうしたもんぢやらう。』

と云つたと云ふことを聞かされて、大に恐縮したことがある。とにかく父は私を海員にはさせないが、大工にはしようとして熱心であつた。それは母の弟が種崎で造船所をやつてゐて、造船が好境に向つてゐたからでもあつた。

母には三人の弟があつて、それぞれ運命を開拓してゐた。すぐ次の弟の銀太郎と云ふのは、給仕から郵船會社の支店長にまでなつてその時高知の支店にゐた。次の弟は百次と云つて、これが一徒弟から造船所を持つてゐる者であつた。次は茂之助と云つて、これも樽屋の徒弟から船に乘つて、今に機關士にでもならうと云ふところであつた。その母方の小父達はその當時兄弟の内に一人しかなかつた男の子の私に興味を持つてゐた。わけて銀太郎小父は、私を大工にしてゆくゆくは大學の專科あたり

で造船學を修めさせようと云ふやうな意向を持つてゐたので、父もその氣になつたものであつた。

そのうちに私が眼病になつたので、眼に異狀のある者は學問はできないと云ふことになり、友人達は海軍兵學校へ入學するために海南學校と云ふ山内家の經營にかかる中學校へ入學する傍で、私は柿崎の小父の家へしぶしぶと行つたのであつた。しかしどうしても大工が厭であるから、假病をこしらへては家へ歸り、漢籍を教はつたり、詩を作つたり、小說を讀んだりしてゐるうちに、秋田の木崎へ代つてゐた銀太郎小父が、朝鮮釜山の支店長になつて行く途で病氣になり、向ふへ着くなりそのまま亡くなつてしまつた。私はもう學校へ行く望みもなくなつたので、いよいよ大工が厭になつたところで、腺病になつて數回大手術をしたので、それを口實にして止めてしまひ、私を愛してくれた村長の平田貫稔翁の世話で小學教師となり、それから高知市で新らしく發行になつた實業新聞と云ふ新聞の記者にもなつたが、どうも滿足ができないので、とうとう東京へ出ることにした。私のすることを不安な眼でみてゐた父は、

『五十になるまでは、をらが家を見るきに、それから先は、おまへがやれ、』

と云つた。父はまたこんなことも云つた。

『をらは、おまへから世話にならうとは思はないが、をらは、十七八の歲から、親に每月五圓の金と一俵の米をやつてをつた、すこし、考へるがいい、』

と云つた。私が父から痛いことを云はれたのはそればかりであつた。それは明治三十六年であつた。私は上京したところで、すぐ病氣になつたので歸り、再び東本山村（大杉村）と云ふ山村へ行つて小學教師をしてゐて、明治四十年になつて更めて上京して今に及んでゐるが、放蕩粗頼の私は、遂に父に安心を與へることができなかつたのを恥づる次第である。

父は私に宣言したやうに、五十前後から全然陸の人となつて胡瓜や茄子などの栽培をはじめた。私の村では寛政十一年御座水師の幾之丞と云ふ者が、御座船を泉州堺に寄せてゐた際に胡瓜の種を取つて來て栽培したのがはじまりで、村にひろまつてゐたが、明治四十年比高知縣下に於ける製鹽業が廢止になると、製鹽によつて生活してゐた村の人人がそれに眼を注けて、大大的に從事するやうになり、この二三年來は、京阪地方に輸出して年收十四五萬から二十萬を得るやうになつてゐる。その胡瓜や茄子の栽培には私の一家も古くから關係があつて、近頃調査した村の胡瓜茄子栽培の歷史には、澤田德六、田中倉助の

名を見ることができる。父が胡瓜や茄子の栽培に從事しはじめたのも家に傳つてゐるさうした經驗を基にしたものであらう。

胡瓜や茄子を栽培するには、一種の溫室仕掛の苗床をこしらへて、それに一月の中旬に種を播き、殆んど夜も晝もつききつきりで、寒溫乾濕の調節をはかり、苗が大きくなればそれを二回まで床替をして、四月中旬に本植をするのである。苗を育てる間の苦心も一とほりではないが、さうして本植をした後の朝夕の灌水に要する勞力はその數倍も多いものであるが、五六七三ケ月の短い期間に於て、一反あたり三百圓から一千圓の收穫があるので、皆がそれに熱中するのであつた。

父はその胡瓜や茄子を栽培するに妙を得てゐると云つて、郡の農會あたりからは父を名ざして參觀者をよこした。潔癖で家になれば室から庭にかけていつも掃いてゐる父は、畑にまで箒を持つて來た。

『お庭造りぢや、』

と、母がよくそれを笑つた。

畑の隙があると何時も空を見て雲の徂徠するのを見たり、波の音を聞いたりした。船にゐて天候に注意する癖を持つてゐる父の晴雨の豫言はよくあたつた。

『この日和にどうぢやらう、のうし、天文くりに聞かんといかんか、』

と隣の人人はさう云つてよく私の家へやつて來た。

『おんちやん、降るらうか、のうし、』

天氣が怪しくなると必ず皆が父の所へ聞きに來た。父は雲と波の音と、その日見た潮の色によつて、

『東南風波があるし、雲がこれぢや晩にはやつて來るぞ、』

とか、

『さにしが、せりよる、まだ雨は降らんぞ、』

『……あ、波の音が南へまはつた、日和はまた後もどりぢや、』

と云ふやうなことを云つた。父はまた畑へ行くに懷中時計を持ち、マッチを用意してゐるので、附近の畑にゐる者が、

『おんちやん、なん時ぜよ、』

『おんちやん、火をかし、』

などと云つて寄つて來る。煙草好きの父は、その人達が來ると畑のへりの青薊などの咲いてゐる所へ腰をおろして、煙草を喫み喫み話すのであつた。そこには庄屋松と云ふ共同墓地のある松林があつた。あたりは胡瓜の畑に胡瓜の畑が續き、茄子の畑に茄子の畑が續いて、それが磯際にまでなだれてゐる。

父はこの二三年、胡瓜を作ることはすこしにして、あつちこつちから頼まれて苗を育ててやつてゐた。

父は私の子供を可愛がつてくれた。わけて長男の辰夫を可愛がつた。私がはじめて長男を連れて歸つたのは、今年十三になる長男が五つの時であつたから、もう七八年になる。父はそれまでは東京へ來てゐたので、長男は顏は知つてゐた。父は長男を喜ばすために、ある日、私と長男を伴れて入江の岸に繋いである小舟で、がさみと云ふ東京あたりでよく喫つてゐる海蟹を採りに行つた。その小舟は父が浦戶港外へ手釣りに行くために求めた小舟であつた。潔癖な父はその小舟をいつも綺麗に洗つて光らしてあつた。このうへ釣に行くには天氣の良い日を見すまして行くので、父が出かけると母が『今日は御座船が出たきに、日和がよかろ、』と笑つたものである。

蟹採り網は直徑二尺もあるやうな周圍を太い針金にして、それに目の荒い網を張り、三方に手繩を附けて、それに標の附いた長い繩を附けてある。蟹を採る時には網の中央に魚の頭とか骨とか餌になるものを縛り附けて、それを海の底に沈め、時を見計つて急に曳きあげるのであるが、餌に寄つて來てゐる蟹はそれがために足を網の目に絡まして、逃げようとしても水の壓力があるので逃げられない。さうして安々と捕られるのであつた。私達は十四五もその蟹採り網を投げた。その日は霧雨のやうな大きな雨が入江の上を後から後からと降つて通つた。私達は長男を番傘の下に坐らしてあつた。

長男は網に足を引つかけてあがつて來る蟹を見て手を拍つて喜んでゐたが、雨がやんで陽が出て來ると何時の間にか眠つてしまつた。さうなると私達もはりあひがないのですぐに止して舟を返した。その網は父が船にゐた比オランダ人のやつてゐたのを見てゐて作つたもので、今では父に習つて皆がそれをやつてゐる。

一昨年歸つた時には私達はまたその蟹採りにも行き、太平洋の海岸へ行つて、がうなを蒔餌にして波にひたつて磯釣もやつた。それには、ひやうご、ちぬご、すみひきなどと云ふ小魚を半日ばかりの間に五六十尾も釣つたことがあつた。二人の傍には長男達がばちやばちやとやつてゐた。

歸つてゐる時には私は父の相手になつて酒を飲むことがあつた。父はこの數年每晚四合の晚酌をやつてゐた。昨年の夏支那から歸つてみると長女と長男を歸せと云つて、父から金まで送つて來てあつたが、私は長い旅の後であつたから小供だけ氣の置けない學生に賴んで父の許へやつてあつたところで、彼の大地震になつたので東海道線のやや復舊するのを待つて、十一月になつて小供を迎ひに行つた時、この時にはいつになく寒くと早

早父と酒を飲んだ。それは朝の十一時比であつた。私は關東の地震の後で土佐にも地震があつて、井戸の水が濁つたり、海水が狂つたりしたことを新聞で讀んでゐたので、小供に、

『早く歸るぞ、今度は土佐の地震だから、この邊は津浪にさらはれるからね、』

と云ふと、父が笑つて、

『おどかすな、そんなことはない、この邊は高いきに、津浪は來やせん、』

と云つた。父は長男が懐いてしまつたので、手許へ置くつもりだと云つてもう村の學校へ入れてあつた。

その時父と私とは、一升の酒を飲んでしまつて、二升目の酒になつたところで、父が醉つて杯を持つてゐる手が利かなくなつた。

『まあ、ほんまに、手が利かんやうになつても飲むらうか、』

と、母がれいによつて叱るので、父は苦笑して次の室へ行つて横になつた。

私は父の許に五六日ゐて、長男はゐると云ふので、長女だけ伴れて歸ることにして、父をはじめ二三の友人に送られて港へ來つたところで、長男も歸りたくなつて歸ると云ひだした。父に云つて置かなければならないので、一人の友人に長女と長男をつけて棧橋の上にゐる父の許へ知らせに行かせて歸つて來たが、それが父との最後でつた。父はその日家へ歸つて長男を惜しがつて、

『をらあ、家へもどるも力がなかつた、鳥を飛ばしたやうなもんぢや、』

と云つたが、後には怒つて、

『しやんと、あいつにだまされた、もうたんにも送つてやるな、』

などと云つたと母や隣りの人が云つてゐた。

父は亡くなる二三日前、即ち五月二十三日比胡瓜の畑にゐたが、急に仕事をやめて草の上に腰をおろし、隣の畑にゐる勝喜と云ふ小供のやうに可愛がつてゐる若い男に、

『勝喜、をらは、もう、腰の機械がとまつてしまふた、』

と云つて笑ひ笑ひ煙草を喫み出したが、その晩は酒もいらないと云つて飲まなかつた。しかし翌晩になると同じやうに飲んだ。今年になつてから父の酒量は三合五勺になつて五勺へつてゐた。その日父は庄屋松の山寮の墓地へ行つて、草を拔いて掃除をしたのであつた。

その翌日、即ち二十五日の日も同じやうに畑へ行つて、夕方に歸り、流槽の傍でお茶をしてゐた母に、

『松魚があるか、』

と云ふので、母が、

『松魚はないが、鰺がある、』

と云ふと、

『鰺でもかまはん、』

と云ひ云ひ手拭を持つて隣の錢湯へ行き、湯の中で二三人の者を相手にしてはしやいだ後、あがつて戸外へ出たところで卒倒した。ちやうど來あはせた鹿さんと云ふ男が、

『田中のおぢさんが、』

と云ふと、湯屋の長男が飛んで出て來て抱きおこした。父は氣がついたのかそれをふり放して、とつとと自分の家へ駈け込み、座敷へ半身をあげるなり倒れてしまつた。肴をかまへ酒を溫めて待つてゐた母は、驚いて醫者を迎へ、親類の者を集めて介抱に手を盡したが、もう一言も發しないで二十八日まで昏睡だけは保つてゐたが、その朝の午前十時になつて祖父常助の後を追ふて、貧しかつたが安らかな一生を終つた。

私は二度目の支那の遊行から歸つてゐるところであつた。私はその前前日、馬場孤蝶翁はじめ二三の知人と逗子ケ浦へ遊びに行つてゐて、二十六日になつて歸つて見ると、『チチチウブシタイノチニベツデフナイ』と云ふ電報が來てゐた。私は早速に驚いたが、生命に別條ないと云ふのを頼にして、『スグカヘラウカヤウダイシラセ』と云ふ返信つきの電報を打つて待つてゐると、二十七日の朝になつて、『ヤウダイワルイスグカヘレ』と云ふ返事が來た。私はそのままその晩の汽車で大阪まで行き、それから汽船に乘つて、二十九日の朝土佐へ着いて見ると、見知りごしの舊友の顏が四つ五つ棧橋の上に見えた。私ははつと思つた。父はもう前日亡くなつて葬式のかまへをしてゐるところであつた。

私は家へ歸るなり父の死骸の置いてある次の室で、母や百次小父や、百次小父の伜の萬次郎などの居る所で、萬次郎の顏を見ながら、

『それが、さきに死ぬると思ひよつたが、やつぱり親爺がさきに死んだねや、』

と云つた。さうして私は俯向いた。

夕方になつて父の葬式は終つた。三十日の高知市發行の高知新聞と云ふ新聞には、かうした父のために記事を載せてくれてあつた。

『著述家田中貢太郎氏の嚴父田中杢次郎氏は、去る二十五日突然腦溢血に罹り、長岡郡三里村仁井田の自宅で安靜療養中であつたが、二十八日午前十時遂に逝去。田中氏は二十九日朝

入港の汽船便で歸縣するを待つて同日午後六時葬儀を行つた。享年七十二才。惜むべきである。田中家は代々山内家の「お船かた」で、松次郎氏の兄源太郎氏は山内家が最初に買入れた有名な夕顔丸の水先案内を勤めたこともあり、維新後に於ても東洋各港間に渡航して兄弟打揃ひ殆ど一生を海上生活に暮したが、松次郎氏は年五十才にして歸郷して胡瓜の促成栽培を試みたが、頗る成績がよく、今日同地方に於ける促成栽培の鼻祖として重んぜられ、特に苗づくりに妙を得、近郷にまで促成用の苗を供給するほどであつた。貢太郎氏は支那再遊の旅から歸京間もなく危篤の急電に愕かされて歸郷したが、臨終に逢ひ得なかつた譯である。氏は語る『父に對して一向孝行をようしなかつたことを今更乍ら殘念に思ふが、父は子供や孫のことを一生心配してくれた、そして一個の善人としてその一生を終へたことを滿足とする、大正九年恩師大町先生が歸縣した時、仁井田に赴いたが父が巡航船の棧橋まで迎ひに來て居り、大町先生が「田中も○○○○○○へ入つたが、金はないから……」と語り、父が金のことなど少しも思はぬと喜んで泣いたことが今でも目の前に浮ぶ、子供の時には、母にかくれて小遣錢でもくれるといふ様なやさしい父であつた」と流石に暗然たるものがあつた。』

大阪朝日新聞には三十一日に高知電話としてその記事があつた。

「田中松次郎翁　著述家田中貢太郎氏厳父松次郎翁は、數日前腦溢血に冒され、長岡郡三里村字仁井田の自宅で靜養中、二十八日逝去したので、二十九日午前貢太郎氏は海路歸縣、午後六時葬儀を執行した。同家は代々舊藩主山内家の御船方であつた爲め、前半生を海上生活に過した翁は、五十歳の頃漸く郷里に落付き、胡瓜の促成栽培に力を注ぎ、遂にその鼻祖として郷黨に重きをなし、殊にその苗作りは巧みであつた。享年七十二」

大正十三年歳晩記

今年歳晩記

近松秋江

今年もゝう、又、歳晩記を書くやうになつたのかと思ふと氣が引けるやうである。しかし、まだあと二た月はあるのだから、その間に、どんな悲しいことがあり、慨ばしいことがあるかも知れぬから、今年について回顧するには、まだやゝ早計に失するやうであるが、かう、しみ〴〵と暗く曇つて、雪空のやうな景色になると、何となく冬を急がれるやうな、氣ぜはしない心地がする。

季節は、まさに、これから一年の内でも最も氣分の落着く、懐しい晩秋初冬の候に入るのである。自然はその間暫くは凜然として水晶の如く美しい透明な世界となる。凡そ一年の中で、晩秋初夏の五月か、この十一月一と月くらゐ天地の美をしみじみと味はゝせらるゝ時間はないのである。

美しい秋晴の日が、ものゝ二日か三日もつゞいたと思ふと、又すぐ雨模様の、沈んだ曇り日がつゞいて、つく〴〵と此の世が佗しくて耐えられないやうな心地が犇々と身を取卷いてくる。私は、そんな時、どうしたら、この欝結した心を晴れやかにする術もがなと思ふ。

それでも恵み深い自然は、そんな陰氣な日ばかりを續けてはゐない。低氣壓が二三日で去つてしまふと、今度は全く別な世界に生まれて来たかと思ふやうな、美しい、輝かしい秋晴れの日を恵んでくれる。

十月の末から十一月の初にもなると、色づくとも思はないう

ちに、いつしか庭の銀杏葉がやゝ黄葉んで、數年の叢竹の蔭にある楓の枝も一つ二つ昨日の時雨に急に紅葉した。その脇にある寒椿と山茶花との蕾が一日々々と肥つて來たのが、このほどから俄に眼に付くやうになつた。梅もどきの眞赤な實が、宛ながら初冬の氣持ちを表象してゐるかのやうに、澄みきつた庭樹の蔭に眼につく。

やがて十一月も末になりて、銀杏葉は落ち散り、楓の紅も凋落して、山茶花の花のみは長く寂しい庭に今年の花の名殘りを惜んでゐたが、それもいつしか霙まじりの寒雨に追々散落してゆくと、世界はそれから全く冬季に入つてしまふのである。

今歳の、自分の一個の上の出來事といへば、秋の初めに家内が流行性疑似腦炎が因で急病に罹つて二ケ月に近くも病院に入つてゐたことであつた。それまで、母乳ばかりで育てゝゐた乳兒が、ふつつり乳に離れたゝめに、それをも二十日ばかり小兒科の病院に預けた。私は毎日二ケ處の病院を見舞はつてゐた。折柄佗しい秋雨の降りつゞく日などには、家にゐてじつと女中を對手に留守をしてゐる身には堪えがたい寂寥を感じた。そして牛込の方の病院を見舞つたついでに、その近くの草花屋から秋海棠だの萩だの芙蓉などを買つて來て、それを狹い庭先に植えて、わづかに佗しい眼を慰めたりしてゐた。一名斷腸花の稱ある秋海棠こそは、丁度自分のその時の心地を表象してゐるかのやうであつた。

やがてそれ等の花の季節も過ぎて、たゞ末枯れた莖枝の名ごりが淋しく庭の隅に見棄てられてゐる。

今に又暗い冬が襲ふて來ることを思ふと、何となくメランコリイに沈んでしまふ心地がする。私も近來は夏よりも冬の方が、寒質身體に障るやうであるから、今年の冬は何處か海に近い溫暖な土地に家族を避寒にやりたいなど、考へてゐる。そして自分も時々そちらに行つて居らうかと思ふ。

私も丁度來年は人生五十年が來た。けれども私は格別これを驚きもせず、心細いとも思はない。何となれば、それは、もう今まで度々考へて、待ち受けてゐたことであるから。本當をいへば此の五十といふ年は、もう五年も六年も前から待ち受けてゐた。四十七八の時から、もう五十年になつたくらゐの氣持ちでゐたのだ。自分の年齡について一向感慨も起らぬほどであるから、今又歳が更まらうが、どうあらうが、何等の感想も起らぬ。たゞ自然とゝもに推移して敢て逆らはぬ心である。

もしそれ自身以外の事で、世界の文化がどうなつたとか、日本の國家と社會がどうなつて行きつゝあるといふやうなことは、あんまり問題が大き過ぎて、自分たち、こんなことを考へ

てみる柄でないやうな氣がする。私はたゞ自然とともに推移つて行くところに限りなき樂みがあるのだ。で、今のところ、空想にして樂んでゐるのは、此の冬をどうして、何處に居て過さうかといふことである。自分の些やかなる借家に、もつと防寒設備をして、何處へも行かず此處にゐて冬を越さうか。それとも湘南又は駿河灣に近い暖地にいつて一冬を過さうかなどゝ思つてゐる。沼津から南伊豆の西海岸の方の景色のことなどが懷しく考へられる。交通の不便を忍んで、あちらの方へいつて見たくもあるが、今年の秋の初、自分が伊香保に五六日往つてゐる間に家人に急病が突發したことを思ふと、何だか、あんまり遠くへ往くのも心配である。が、年中そんなことを思つてゐては、とても自分の生命が縮まるやうな氣がするから、何處か海端に溫泉の湧く、靜かな、都人のあまり雜沓せぬ暖地に行つて過したいやうな氣が頻りにしてゐる。此の間沼津の方に長く住んでゐる若山牧水氏に書を寄せて、彼方のことを訊ねてやつたら委しい返事をもらつた。そして伊豆の土肥溫泉の案内を送つてもらつた。それを見ると土肥溫泉のことが、今の私にはひどく懷しい土地のやうに思はれて來た。淸鮮で豐富な海魚、溫い泉、四圍の雜木山、黃金色の柑橘の實れる、眞紅な椿の花の咲いてゐる暖地の冬の日ざしの靜けさといふやうなものが、私の眼に見えてゐる。

歲復た逝かんとして一年の事を回顧して別に稽ふる所なし。只その折々の節物と共に推移して自然の心と等しく生きたいと念ふのが、今年歲晩の感である。

歲晩の名家

横山健堂

一

他人の歲晩を考察するのは、わたくしどもの歲晩の興味でなければならぬ。

「梟よ、のほほんどころか年の暮、」梟を見付けたが、いかにも一茶らしいが、さすがの一茶にも、年末の切迫さが想はれる。そこになると蕪村は鶯だ「鶯の啼くや師走の羅生門」美くしいではないか。女は更にやさしい。同じ鶯でも、「押し寄せて、鶯一羽、年の暮」は智月だ。

一茶の辛辣と皮肉とは、歳晩に於て、その鋭どさを加へてゐる。「町中を、よい年をして節季候、」或は、「寒念佛、さては貴殿でありしよな」なども、それだ。「節季候や、七尺去つて小節季候」は、嘲笑を帶びてゐる。蕪村は上品だ、悠々として迫らない、「御經に似てゆかしさよ、古暦」「ゆく年の瀬田をまわるや金飛脚」などと済ましてゐる。芭蕉は、どこまでも解脱だ。「人に家を買はせて我は年忘れ」「せつかれて年忘する機嫌かな」或は「盗人に逢うた夜もあり年の暮」「分別の底叩きけり年のくれ」等の句を誦すれば、年頭も年末もない。

旅寝の年末は感慨、殊に深し、芭蕉の句に「年くれぬ、笠着てわらじはきながら」蕪村、その後に題していふ、「芭蕉去つてその後いまだ年暮れず」、芭蕉は不滅の人だ。

其角は騒々しい、俗情、發露してゐる。「大晦日ねいつたうちが年忘れ」或は「年の瀬や、ひらめのむ鶴のものおもひ」の如き、彼の面目、躍如としてゐる。こういふ人だから、大高源吾を見つけて、「年の瀬や、水の流と人の身は」とやつてのけたのだ。「年忘れ劉伯倫はおぶはれて」は自分の醉態をいふのだらう。

年を老ての年末は、若がりたい念が先に立つ。鬼貫に、「鏡を磨がう春待つ老の若盛り」といひ、其角の強がりでも、「流るゝ年の哀、世に白髪さへものうき」の弱音を吐いた。しかしそれが老人の本音だ。

諦きらめたのは、宗因の「暮れやすし、こんなことなら百年も」だ。彼は腹を据えた、「來る春や、甯卯の間と岩城山」、十萬堂には、茶目氣があつて、そして靜かだ。「としの急ぎ背きとむなしや只の狀」或は「揉みにもむ歌舞妓の城や大晦日」などといふかと思へば、「併ひとり師走の野道、梅の花」

嵐雪の雅びやかにして弱い氣分は、「畑中に、よし野、靜や煤拂」に現はれてゐる。丈草の「行燈を消せば鼠の年忘れ」は昔が偲ばれる。惟然坊の「錢湯の額かげ淸き師走かな」は、忙中の閑氣分だ。丈草に比べると、去來は神經が細かい、「神鳴もさわぐや年の市の音」「年もはや牛の尾ほどの便かな」

太祇は世情に通じてゐる、「嵯へ行く屏風もおくや年の暮」「居風呂の底ふみ抜くや年の[illegible]湯のあら湯へ入る座頭かな」たとは、その一班が知られる。大江丸には市井氣分があり、蕭踏

舍には侍氣分が溢れてゐる。大江丸には、「こがねなる世は面白し年一夜、」蕪陰舍は則ち「煤拂や思ひがけなき朝月夜」「わが頼む人皆若し年の暮」「われをたのむ人もありけ、年の暮、」大刀の切味がある。春泥舍には、「常よりも遊ぶ日多し年の暮」穿つたものだ。几董は徹底してゐる。「年かくすやり手が豆を奪ひけり」、題は除夜、青樓に遊ぶといふのだ。

二

上田秋成は、剛腹にして、白眼を以て一世を睨んでゐる。田舍に行つてゐた年の暮、「世の中にさはらで年もくれにけり、八重葎さへかれし垣根は」は、その寒生涯が想ひやられる。久しぶりに京に來て、年を迎へたとき二つの長歌を作つたが、感慨と才氣とともに迸ばしつてゐる。

秋成が、いつも力瘤を固めてゐるのに反對に、平々然として、極めて樂觀的の氣分を見せてゐるのは蜀山人だ。彼の年末の歌のうちには、一つも陰氣な、窮屈な心持はない、いつも春風だ。世を茶化してゐる。

　いまさらに何か惜まん神武より二千年來てくれてゆく年、
　年波のいまやこえんと門々にたてし師走の末の松山
　大年やことしはわけて去年よりもめでたき年の暮のおしまひ
　ゆく年をしめゆううちにくる春をまつやま〇やの聲ぞ聞ゆる

如何にものんきではないか。此頃のように不景氣の聲のうちに年が沈むような話ばかりする人々は蜀山人の歌を讀んで見るが可い。しかし茶化してゐるうちにも諷刺はある。除夜に兎を質つたといふて、

　門松のかぶせを守りくる年のあら玉うさぎ得たるうれしさ

來年は、よくやろうといふ心持が見えてゐる。

中江藤樹が、熊澤蕃山の岡山に出仕するのを送つたのは年の暮だ。

　舊年無ニ幾日一。何意上ニ旅亭一。送ニ汝青雲器一。愧ニ吾犬馬齡一。梅花鬢邊白。楊柳眼中青。惆悵滄江上。西風數ニ客醒一。

此の雄偉なる師弟の別れる心持が、歳晩氣分のうちに溶けてゐる。歳晩の作として千古の名篇だ。堂々たる近江聖人の面影が偲ばれる。

三

山陽、及び、その塾では、除夜には、徹宵、詩會を催うして年を送つた。守歲といふことは、儒者、文人の中には流行したが、殊に山陽塾では重きをおいた年中行事の一つになつてゐたので、その遺風が、その子の支峰の時までも續いてゐた。その

賑やかな氣分で年を送迎した光景について、わたくしは支峰の門人から聞いたことがある。此の趣味は賴家の門人には、みな傳はつてゐる。こうした光景を考へると、山陽が、年の暮に、さびしく木曾川を下るときの詩に、獨在二天涯一年欲レ暮、一篷風雪下二濃州一の心持が始めてよく分る。己が家の除夜の光景が山陽の眼中に浮んだのだ。

山陽の詩集に歳晩の作が多い。その特色彼が家庭に執着してゐる心持だ。故鄕を出た翌年の暮には、一出鄕關歳再除、慈親消息定何如といひ、五年めの除夜には、故鄕の兩親、吾子の事を話し合つて眠らないでゐるだろうと想ひやりを述べてゐる。九州の遠游を試みたときは下關で、年を送つた。赤間關守歳詞がある。だれでも三十九、四十の歳晩は殊に感慨が深い。山陽にも平頭四十驚二吾老一の一句がある。漢學者は四十以上を翁といつたから、今人に比べると、感慨は格別だ。近來は、四十は老人ではない。山陽一族には、詩人だらけだから、互に、除夜の詩を送つて、それにまた後れ馳せながら和韻などしたものら[redacted]ると旅行が少くなつた、晩酌をやりながら子供を眺めて樂んだ。除夜の作に、「讀書二吾儂一併說レ汝、遍知老母坐二宵深一」といひ、故鄕の老母が、子と孫との噂をして、夜ふかしまで起きてゐるだろうと言つた。それから順々に除夜の詩があつて、
十六才がおしまひになつてゐる。

山陽の晩年に近づいてからの除夜の作には、おい〳〵世帯のよくなつて來るのが分る。妻償二舊債一了、兒著二新衣一成、貧家祭酒婦、燈火亦覺レ明といふのは、貧家と口では言つてゐるけれど、山陽が始めて工面の好い年末を味はつたのだ。その次は、ます〳〵好くなるばかりだ。

細君拮据辦二盞饌一、婢辨二辛盤一僕掃レ家。獨有二主翁無二一事一出從二村路一覓二梅花一

一體、山陽は、思の外、經濟の觀念が發達してゐて、身後に妻子の不自由ないようにしておいたほどだが、此の詩を見ると、もう稲々になつて、家族は年を送るよりも迎へる方が忙がしく、主人公は悠然として、梅見と洒落れてゐるのだ。彼が晩年の除夜は　寒儒ではなかつた。慾をいへば限りがないが、山陽は浪人儒者としては、好い身分になつてゐた。倹儉自發に、斯口は殘羹冷杯にも飽くこと能はされども、斯手は則ち國民の[redacted]といつたのは、その氣性を述べたものだ。

工面が好くなつたといつても、茶山や、小竹などとは比べものにならなかつた。

人品は三舘の第一流といはれた陽山の晩年の遺稿を見る

と、山陽の門人だけに、除夜の詩が多く見える。その特徴は、遠く別れてゐる兄を思ふといふ一事だ。同窓一半誰非ㇾ客、隔地千山獨憶兄といふのは、山陽塾にゐたときの作だ。唯だ此人は、少しも酒を飲まなかつた。相手には、みんな飲ませて、自分だけは汁粉を啜つてゐたそうだ、除夜の詩に、酒のことが書いてあるが自分が飲んだのではない。これは山陽流でない、しかし汁粉の忘年會も、除夜も珍づらしい。古今詩人中の殆んど唯一人かも知れぬ。且收ニ擬儷手一、强自把ニ觥籌一とあるのは、孕く、已むを得ずして杯を手にした眞實の句だ。除夕與ㇾ梅瘦作ㇾ雙といふのは、痩せてゐるばかりではない、酒を飲まない彼一人が、梅花と同じく寒い姿だつたのだ。

四

山陽といへば竹田を連想する。竹田は詩人として山陽以上と思ふが、竹田には除夜の詩が見當らぬ。歳晩の歌が二首ある。

村はしの霧消の森に影さしてたく火ほのかに鈴の音する、(神樂)

夜もすがら佛の御名を數へつゝ唱へてあかす窓のともし火、(佛名)

竹田は歌も好い。その畫と同じく幽靜の域に入つてゐる。

山陽から見れば大先輩だが、備中鴨方の西山拙齋、これは一世の大儒であつた。樂翁公が老中として、學界に波瀾を捲き起した異學禁といふ大問題は、拙齋が原動力になつてゐる。然るに拙齋は、徳、一代に高くして、非常な貧乏だつた。備中玉島の小野泉藏、これは舊家で富豪だ、山陽の詩文のうちに屢見られる名だ。此人にも詩集がある。此人が、拙齋にも從學したことがある。或年の暮、よく〱拙齋の手許を知つてゐる彼は、若干の金を包んで、歳暮のしるしとして、謹んで贈呈した。拙齋は、おかげで年を越すことができた。その禮狀が小野家に殘つてゐたが、眞に、大儒の面目を窺ふべきものがある。その文句に、嬉しくて、妻子もともに、貴家の方に向つて遙拜したと書いてある。他人なら、ともかく、多少の批難があるかも知れないが、拙齋としては、その赤裸々な、正直な精神の暴露に外ならないのだ。却つて、彼の人物の尊といところが分る。

同じく貧儒としても、山梨稻川は、言語同斷に徹底してゐる。稻川は、その學識、氣概、いづれの方面から見ても大家だ。今は故人になつた角田浩々歌客や、中村春二の二君の曾祖父に當る。これは前の藤陰とは反對に、大した劉伯倫であつた。酒の爲に腸胃を害して死んだ人だ。その酒と、貧乏とは、ともに甚だしかつたが、半面には、非常な樂天家でもあつた。或年の暮

に、極度の切迫に壓されて、さすがの彼も、のん氣ですまされず、とう〳〵越年の金を借りに、二三里、遠方の知人のところまで出掛けた。金談は、速かに整うたが、相手も亦た傑物であつた。そして飲相手だ。まあ一杯といふわけで、忘年の酒を振舞つた。稲川、金を懐ろにして對酌した。一杯また一杯、主客ともに陶々然として、年を忘れた。年末を通り越して正月の三日まで佳境が續いた。醉歩蹣跚として家に歸つたら、世間は既に春風であつた。留守では、金が出來ないから歸らないのだと思つてゐたら、豈、計らん、出來て、安心して飲んでゐたのだ。此所まで徹底すると、大悟だ。文句は無い。

五

酒で年末を魅して仕舞へたのは藤田東湖だ。東湖の酒は、此に言ふ必要はない。彼が三十四才、天保十年江戸での忘年會にはおもしろいことがある。此の時、横井小楠も來會した。東湖は、醉態爛熳であつた。小楠が詩を作ると東湖も、それに次韻したが、翌朝になつて、詩の後半は、何を書いたか忘れたといつてゐる。小楠に送つた手紙のうちに、どうぞ、あの詩稿を一度返してくれ、敢て惜むわけではない、義經が弱弓を取返したと同じ心だと書いてある。餘程、大醉したものと見える。此晩の忘年會のとき、どうしたものか、小楠が金を少し落して知らずに歸つた。使を遣つて禮狀を送り、同時に、金の事をいふてやつた。東湖の手紙に、あの後、杯盤を片付けた際、金貳銖、遺失してあるのを發見し、お預かりしておいた、乃ち正に返璧すると書いてある。金貳銖は、十二錢五厘だ。此の東湖、小楠といふ兩雄の間に行はれた遺失金一件は、歳晩の史的餘興でなければならぬ。

東湖は政治家だ。交際には力めた。頗る清貧であつた。夏物、かやと冬物とを質に入替する手紙は傳はつてゐるくらいだから、彼の歳晩は思ひやられる。然るに嘉永五年の暮、彼四十七才、俸祿が復舊される内報に接したときの手紙のうちに、例の東湖更に承知せず、どつこいと持こらへとあるのを見ても、その度胸の程は推しはかられるではないか。

蘭學者の大槻磐水は、六十二才の年の暮に歌がある。

槻弓のはるは六十路に三そへて射るが如くに過ぎし年の矢、

洒落の歌だ。別に年暮の狂歌に、

苦は樂の種とはかねて知りけれど、けれども〳〵年の暮かな。

磐水には漢文は澤山ある。こういふ狂歌じみたものは、年晩だけに限られてあるのは、注目すべきことだ。年末多事、漢詩

は面倒で、手軽な狂歌がよかつたのか、狂歌が適さはしいと思つたのか。いづれにしても、歳晩の爲に動揺を起したことと見られる。此人は、始めて和蘭正月、則ち太陽暦の新年宴會を催うしたことは有名だ。そのときの主賓は、漂民の幸太夫だ。百年前の大ハイカラだ。それにしても太陽暦の新年宴會だけをやつて、太陽暦の忘年會をやらなかつたやうなのは、もの足りない。

伊能忠敬の生涯は、努力の結晶だ。老ゐて益、精神旺盛だ。五十以後に、測量の大偉業を始めたので、新年も年末もなかつた。(文化八年、)六十八才のとき、大旅行をした。東海道藤澤から測量を初めて、十二月の十七日興津までをすませ、それから無測量で西進し、續いて薩摩まで行つた。春の手紙のうちに、伏見より淀、山崎街道を大晦日に、攝津國郡山驛に越年、一日逗留、正月二日同驛出立、西宮驛に罷越候とある。年末に向つて、此の大旅行を始めたのでも、彼の心持は推察される。彼と共鳴した間宮倫宗は此の頃、忠敬の深川の宅に寄寓してゐたが彼も亦年末に向つて、てうど此の時、蝦夷地探險を思ひ立ち、年内に松前まで到着したく、その前に、忠敬の郷里たる佐原にも、わざ〳〵立寄りたいと考へた。それに就いて、忠敬から前以て、佐原の親族に送つた手紙のうちに、「日本に稀なる大剛者の間宮」と斷言してゐる。英雄、英雄を識る、此の一句、間宮に對する鐵案だ。此の二人の俊傑が、年末に、東西に分れて大旅行の出途に上つたのだ。彼等は、惜時の精神から、かういふ態度になつたので、物徂徠が、年末、年頭も、迷頭でもつて一心に机に向つてゐたといふのも、此の類だ。

大村益次郎が二十歳で、長崎に蘭學修業に行く前、豐後日田の廣瀬淡窓の塾にゐた。その年の除夜、塾で詩會が開かれ、題は守歳。そのとき、大村は七律一詩を作つた。宜闌守レ歳上二樓臺一、終夜孤明人往來。臘與二寒燈一迎レ日盡、陽兼二瑞靄一送レ年開。新含二翠眼一南江柳、已吐二幽香一北塢梅。往事回頭忽似レ夢、明朝會レ友酌二香杯一。大村の七律は珍づらしいから、此に紹介した。英雄の胸中、餘裕あるを見るべしだ。

六

吉田松陰及び、その松下村塾の歳晩は、國事の爲に、一圖に奮鬪的だ。松陰二十二歳、十二月、脱藩して江戸を出發し、東北游の旅行を試みた。先づ水戸學を研究の爲、水戸に行き、その二十九日、瑞龍山に登り、黄門の墓に謁し、太田で年を送つたのを手始として、年々、戰争のやうな歳晩を送つてゐる。二

十五歳、春、下田で米艦に投ずるの壯擧、破れて、その年の暮は萩に送り還されて、郡山獄で除夜を過ごした。年の暮に、獄中で、幽囚錄を書き、除夜の詩に、壯士休レ爲二歳暮哀一の一句がある。

松陰、二十六歳の除夜は家に歸つてゐた。松下村塾をはじめる前年だ。作文五十篇、讀書五百許、一年了二課程一今夕轉容與といひ、國事に奔走の間に、豫定の讀書課程を完了して、好い氣持になつてゐる態度が見える。此の夜、別に記二往時一の一篇を作つて、下田投艦の時の回憶を書いた。二十九歳、則ち彼が最後の歳晩だ。再び野山獄に投ぜられ、生死、未だ測る可らざるの時にあり。除夜の句に、

燈火の影、靜かなり、年の暮。

國事犯の大罪人として、獄中の除夜の一句はこれである。燎原の火のような、何物をも燒盡さずんば已まざる革命の烈火たる彼の情熱、此人にして此の靜かな句がある。哲人としての面影が此の句に見られる。

[illegible]

る。耕作は年、僅に十二、正月の二日に來て、新年の賀を述べて、書物を習つて行つた、その態度を激賞した松陰の文章である。その中に、閭里の禮俗を一洗し、枕戈横槊の風を作るのい。

休

が、松下村塾の第一義である。此の故に、除夜に至るまで、年賀に來ます、講學を續けて來たのだ。然るに新春になると、年賀に來るものはあるが未だ講學に來たものはない。耕作が眞先に來た、群生に魁たるものである。群生に魁たるは則ち天下の魁たるの始だといつて、塾生を鼓舞したのだ。その文中に、天下之事迫美、何有二於除新一といふ句がある。それが精神的に武裝した年末、年頭の松下村塾の標語になつたものである。およそ太平が續くと、世の中が沈滯して、年末、年頭の俗事が多くなつて來て、それが人を拘束する。須らく世俗に超越し、紛々たる雜事を抛つ可きだ。松陰の所謂、禮俗を一洗するの氣概は、いつの除夕にも思ひ出されるのだ。

新島襄が、初めて米國から歸朝して、鄕里の上州安中に歸省したのが、明治七年十一月の末で、それから廿日餘りの歲晚を父母の膝下に送り、此の間に、初めて傳道を試み、更に同志社を大阪に建設するの目的を以て、年末に掛けて上方に往つた。同志社の創業は、かくの如く年末に出發してゐる。

七

近いところで、紅葉山人と[illegible]

紅葉山人の自筆の葉書に、

愚父徳太郎、長々病氣之處、療養不相叶、今○時死去仕候
に付、此段申上候也

明治五十九年十二月三十一日

男　夏彦

追而香奠の儀は、一切、現金にて拜受仕度、遺言に因
り、御參考迄に申添候

これを書いたときの事實の話は知らないが、古より文人、多く窮すといふことを示した諧謔だ。紅葉の年末の手紙のうちに、「歳暮の事とて、何となけれど、毎日さわ／＼と致し、實に座の世とは此の事なるべく」と書いたのがある。

獨歩には、大に歳晩の氣分を暴露したのがある。その一には、

「すつかり暮に相成り候、小生は未だ文章世界で苦しみ居候」

とある。操觚生活、有の儘だ。その次には

「何しろ年末で金は入用、原稿はつかへて居て、小生も大しよげの體に御座候。同病相憐むとやら、一つやけむくれに、大に飲むこと如何、頓首

暮の十一日の手紙だ。眞情、流露してゐる。こういふものを見ると、年末の窮境にゐても、自分たちの生活が藝術化せられてゐるように思はれる。年末を映畫に撮つて見ると、現實が美化されるのだ。

大正十三年十一月五日、

歳晩劇談

長田秀雄

年の暮れてゆく感は、やはり日が暮れて夜になるやうな氣持だ。あはただしくも大正十三年がくれてゆく。——一年の回想

は、丁度、電燈の光で照らしだされた家の内の出來事をみるやうに、現實とはちがつた回想の色調に包まれてなつかしくも思出されるのである。

全く大正十三年は何と云ふおびたゞしい年であつたであらう。前の年、突如として東京を襲つた震災の跡かたづけと、人事百般の復興との中に、たゞ、もう飛ぶやうに過ぎてしまつた――これは恐らく何人も感ずる處であるだらう。

今年の前半期の終りまでは、まだ劇場も建ちそろはず、俳優たちは地方興行に出るか、休むかしてゐたので、東京の劇壇は、荒凉寂寞をきはめてゐたが、後半期に入ると、世の中の不景氣と逆比例して、目ざましい演劇の活動がはじまつた。

帝國劇場が新らしく出來上つた。そして、動亂中の支那から、若い美くしい名優の梅蘭芳がやつてきた。

梅が日本へ來たのは、これで二度目である。

この前四五年前に來たとき、私たちは、國民文藝會の連中で、梅を招待して一緒に飯を食つた事があつた。

今度は、帝劇の新築落成の第一回興行の初日に招待されて行つてみた。

やはり昔ながらの美くしさである。

初日の出し物は麻姑獻壽である。筋書によれば西王母の誕生日に、仙女麻姑が多くの花から造つた不老不死の仙酒を獻じて、そこに集まつた仙人仙女とともに壽を祝ふと云ふ筋である。

梅は永久に若くて美くしい仙女麻姑に扮した。孔雀の羽にかたどつた煌くやうな衣裳をきて、しなやかに舞ふ梅の姿をみると、私は彼の唄ふ歌の意味も分らず、音樂も分らぬながら、すつかり魅せられてしまつた。

全たく藝術には國境がないと、思はない譯には行かなかつた。

彼の指端をかざる長い銀の爪は指端に電氣の光を吸集めて、燦然と輝いてゐた。

一日置いて、私たち演劇新潮の同人は、梅を新潮社樓上に招待して、支那料理を食つた。

黒ビロウドの長衣をまとつた素顔の梅は、通譯をする人に伴なはれて、やつてきた。

梅の美くしさは眼にある。身體のこなしにある。いや、眼にあると、から私たちは、帝劇の初日に舞臺を見つめながら話合つた。

が、かうして素顔の梅をみると、さて、何處が美くしいのか、取立てゝ云ふ事が出來ない平凡な氣がする。眼に情味深く

しい。眼千兩と唄はれる大阪の雁次郎の眼によく似てゐる。膚の色も白皙である。身體のこなしも優雅である。聲も女性のやうに甲高くなく一味の曇りを帶びた何とも云へない快よい響を持つてゐる

が、彼の美くしさは、決してその部分部分にあるのではない。たゞ、全體の調和にあると云ふ氣がしてならなかつた。女性の美くしさのやうに濃艶でなく、男性特有の荒い感(かんじ)もなく、云ふならば中性的な調和に、彼の美があるのだ。靜かな透明な美くしさだ。情熱に曇らされない美くしさだと、彼が優雅な指先に銀のさじを持つて「清湯銀耳(チンタンインアル)」を少しづゝ喰べてゐる姿を見て、私は考へた。

會食がすむと、梅は帝劇出演の時間がせまつたので、早速歸つて行つた。私たちは、梅の後から、帝劇を、また見に行つた。

その夜の出し物は「審頭刺陽」と云ふ芝居であつた。陽勤と云ふ惡人が、明の嘉靖帝の時に、莫壞古と云ふ人の妾雪雁に横戀慕して、莫が無實の罪で殺された後(あと)で口說く。雪雁は、陽勤を欺いて身を任せるために深夜陽の屋敷へ行く。そして寢室で陽を刺殺し、自分も自殺すると云ふ筋だ。梅は妾の雪雁に扮してゐた。陽勤を刺殺するとき、編んで兩肩に垂れてゐた黑髮をしつかり口に喰へて一極強い律(リズム)の跳躍をする。男が死んだのを見ると、帳臺にかけてあつた長劍をぬいて、斜(なゝめ)にわが頸(くび)を切るのである——悽愴な感(かんじ)の深かい幕切れであつた。

私はその芝居からもかなり强い感動をうけた。

梅蘭芳のやうな美くしさは、今の日本の俳優の中には、全たく見當らない。支那では國貨のやうに大事にしてゐると云ふ話だが、あれ程美くしく育てられた人間は、實際人間の中の寶物と云ふ氣がする。

德川末期の女形、たとへば、杜若岩井半四郎のやうな人は、或は、これ位の美くしさをそなへてゐたかも知れない——今の日本は過渡期だ。完成した美くしい物は、みんな壞(こわ)されてゆく時代だ。たまたま隣邦から花のやうな俳優がきて、われわれの東洋の沈靜な美を、眼前に見せてくれるのも結構な事である。

大正十三年の後半期には、築地小劇場の新らしい運動もみた。尾上菊五郎のめざましい舞踊もみた。新劇協會で正宗氏の「人生の幸福」を立派に演出したのもみた。

が、今回顧して、一番心に殘つてゐるのは梅蘭芳の舞台である。そして、あの美くしい素顏である。

あはだだしい歳

田中貢太郎

波ここ許や須磨の浦ならぬ歳の瀬の波ここ許に寄せて、この一年間の自分の身を考へてみると、今年ほどあはだだしいおちつかない苦しい歳に逢つたことはない。

正月一ぱいは例によつて酒にすごしたが、その一方東光閣と云ふ書肆で出版した支那物語集『女囚』の装釘などのために、この書肆の係の者と時時逢はねばならなかつた。そしてこれがやつとできあがつて數部の小册子と印税をもらつた日は、朝からの雪であつた。私はその雪の中を書肆の若い男と伴れ立つて、近くのカフエーを彼方此方と歩いたが、その若い男は間もなくチブスで歿くなつてしまつた。それはやさしい少女のやうな感じのする男であつた。私が今年いやな物を見たり聞いたりしたはじめは、このやさしい店の友の死であつた。

昨年の大地震にも何のさわりもなかつた私は、非常に幸福な氣持ちに殺されながら二月十二日、東京を出發して滿鮮巡行の途にのぼつた。滿鮮には至る所に酒友がゐて、夢のやうな放埒な世界を見せてくれた。その放埒の世界に遊んでゐる私に對する新聞の記事も亦放埒であつた。十九日の京城日報には『物語作家の田中貢太郎さんが來た。山東省へ行く途中、十八日朝飄然として入城したのである。髪も長くして一見大黒様のやうに福福しい（尤も懐工合は分らぬが）顔をした氏は、盛に酒麥の滿を引きながらメートルを上げる「朝鮮は初めてだ、京城に四五日居て山東省に行く、ナーに遊びにさ、去年は上海から廣東に行つて大に飲んだ、向ふはウイスキーが安いからね、二圓五十錢も出せば上等のウヰスキーが飲めるに、阿片も吸つて見た」と云ふやうな訪問記事を載せ、その翌日あたりの人蔘湯と云ふゴシツプ欄には『入城中の物語作家田中貢太郎さんは、是までテンで洋服といふものを着た事がない。去年上海に洋行する時、思ひ切つて洋服を新調した、勝の緒切つて以來、洋服とい

ふものを着用に及んだのは此時が初めで、今度の朝鮮旅行が其二回目とある。なんの事はない貧乏大黒が打出の小槌を質に置いて洋行に出かけたと云つた恰好。其貢太郎さんの色情哲學が面白い。色女といふ物は、ひもじい思ひをさせると愛想をつかしてしまふ。故に何時までも蜜のやうな甘い交情を續けて行かうと思へば、三度三度必ず飯を喰はせるものだ。鼻の下の心配がなくなつたら次は着物さ。だと。但是は自分の體驗ではないさうだ』としてあつた。

青島新報といふ青新島聞には『田中貢太郎さんに逢つた。其の夜屋根裏に歸つてから、今日買いた大亞文化の創刊號を開いて見ると「凉亭」と云ふ氏の文があつた。その書き出しの一行にかうある。蒲留仙五十前後の痩せてむさくるしい詩人、胡麻鹽の長いまばらな顎髯を生やしてゐる。これは山東省淄川の菜山村にある凉亭で、聊齋志異の材料を得るために、淡巴菰と茶を携へて旅人を待ち、その牛鬼蛇神の珍らしい話をさせてゐる蒲留仙である。弟子の李希梅が、先生のやうな學問と文章を持ちながらこんな事をして一生を終るより、都に出て官途につかれては、と勸める。蒲留仙は、いやわしも若い時には、いろんな大望を懐いたが、考へて見れば大官となり、大儒となり一生に名をあげたところで、ほんとうに樂しいか樂しくないか判らない、學者なんといふものは、例へてみれば夜と晝とのある世の中に、晝だけの單調な世界に一生あくせくしてゐて、淑奇恍惚の夜の世界を知らないやうなものだと答へてゐる。さてまへがきがながくなつたが、田中貢太郎さんに接した印象を書くには、これだけの文句を引用した方が餘程よく顯れて ゐると思ふ。と云つて此の蒲留仙のタイプは寧ろ玄耳さんに髯をつけたに似てゐるが、そして貢太郎さんはぶくぶく肥えたまるで達摩さんに顎髯をつけたやうだ。玄耳さんに對してゐると、酒を飲んでゐる時でも壓せられてゐるやうだが、そこへ行くと貢太郎さんにはさすがに如才がない、舊知のやうに喃してくれるので、ついつりこまれて此方が多くしやべらされてしまふ、』と書いてあつて、これは京城日報よりは手心をしてくれてあつた。

奉天毎日新聞の森田富義は、ハルビンまでこの酒徒に隨つて行つてくれた。若い友人である森田の筆になつた「ハルビン情調」と云ふ記事の中には、『私達は潮時を見て、長崎縣人だと云ふ主人と、天草生れだと云ふ女將を呼んで、一切の事情を打ち明け、ハルビン名物の裸踊を見せてくれとせがんだ。しかし主人は、もう禁止されて踊る女が居ないと答へた。これでも二人は昨日の近藤さんの話を持ち出して。熱心に賴んだ。すると主人は田中さんの さした盃をグツと飲みほしながら暫く考へた

後、それでは心當りの舞踊場や、女郎屋を廻はつてみましようと、快く案内を引き受けてくれた。』と云ふやうな至極穏かならん記事が載つてゐて、若い結婚でもしようと云ふ際であつたら、皆邪魔になることばかりであるが、ただ一つ奉天で張作霖に逢つた記事だけは、書いてもらつて別に悪い氣がしない。それはサンデー毎日のゴシップである。『この程滿洲見物に出かけた田中貢太郎氏は、何かの氣紛れで、張作霖將軍に會見した。この紹介者が恐ろしく信用のある人だつただけに、いつもなら拳銃を持つた護衛兵を身近く置いて、警戒怠りない將軍も、つい安心してたつた二人差向いで對談した。時は陽春しかも暖爐で温められた室内の暑さと、著て行つた一張羅の冬服地の分厚さに惱まされて、長髪長髯の村夫子貢太郎先生、汗をかくことしきりだつた。それでたまらなくなつて、旅行以來一度も洗つたことない手巾の汚れを氣にしながら、出さうか、出すまいかともぢもぢしてゐたが、禿げあがつた額を傳はつて來る汗の氣味悪さに、辛抱出來なくなつて、思ひ切つてヅボンの背後のポケットへ手をやつた。その瞬間である。今まで熱辯を振つてゐた張將軍が、一種異樣な短い叫聲をあげて、電氣仕掛の人形のやうに彈かれた如く飛びあがつた。つまり出來そくなつた支那芝居の面のやうに人相の餘りよくない貢太郎氏を刺客と間違へたのである。ポケットに忍ばせた汚れた手巾を短銃と間違へたのである。さう解るときまり悪さうに座席に戻る將軍を尻目にかけて、ニヤリとした貢太郎氏は一枚十圓の原稿料を貰つたよりも愉快だつたとか……。』これは針小棒大的の記事で、こんなこともなかつたが、酒徒一代の逸話であるから、これは消さずにそつとして置くつもりである。

四月になつて旅から歸り、これから紀行文でも書かうと思つてゐると、弘田直衛が高知市から代議士の候補者に立つと云ひだした。弘田なら打ちやらかしてもおけないので應援に行くことにして、五月一日出發して大阪まで行つたところで、中止したことが判つた。私は腹が立つてしかたがないので、高知の新聞社にゐる友人に、『弘田の馬鹿野郎が中止ーたと云ふきにこれから琵琶湖めぐりをして東京へ引返す』と云ふ葉書を出し、數日大阪に滞在して大津に引歸し、五月八日、紺屋ケ關から湖上を往來してゐる氣船に乘つて、湖北の今津と云ふ村へ行き、別れて二十年あまりも逢はなかつた故郷の先輩で醫師をしてゐる吉岡誠敏翁を訪うて、そこで一泊して翌日竹生島へも行つた。三井寺、石山寺。改築中の瀬多の唐橋。粟津の松原。義仲寺の芭蕉塚と旭將軍の五輪塔。滋賀の都の址。山前の弘文天皇の陵なども見て、東京へ歸つてみると、沖鳴台の連中で佐原へ行く

ことになつてゐた。私は馬場孤蝶翁から『遠くの方へ旅行してゐる君には旅行の内には入るまいが、是非行け、』と云ふ手簡までもらつたので、まだ支那以來の遊び心地が殘つてゐた私は、その一行に加はつた。

それは五月二十四日であつた。私達は佐原の旗亭に二泊して、香取神社に行き、潮來にも行つた。佐原の旗亭では二枚折の屏風に寄せ書きをした。

春が行く
佐原の里の小酒盛
入齒抑へてとつをいつ
有明節に春の行く

これには『孤蝶翁大にうかる』と云ふ題をつけてあつた。今年は噂をされる因緣があると見えて、その時の事も東京日日新聞の雜記帳に書かれた。『田中貢太郎君、さき頃惡友善友數名とつれだつて水鄉潮來にあそんだ、佐原から和船を驅し、酒を積んで、行く行く飲み且つ談じたが、いづれハク學多サイの士とて、行行子も三舍を避けるにぎはしさ、中にも桂月門下の名をはづかしめぬ酒豪貢太郎君は、傾けること實に三升餘、その勢で眞菰に關する研究を話し出したが、どこで調べて來たか、眞菰に關する俗諺の解說、植物學的分析などと、微に入り細を極めて一同をアツとおどろかせて「どうだい、オレの知識の該博さは、」といふ所、やがて船が潮來につくと、貢太郎君岸に飛びあがつて、水邊の一植物を引ぬき、眞菰の實物はこれだよ、と一層の得意顏で皆に示すと、船頭セセラ笑つて、旦那、笑談云はつセエ、それや蒲ぢやねエか、に、同君說法の百日目に屁をこいたやうな顏だつたと』と甚だけしからんことを書いてあるが、しかし私は幸福であつた。

その一行には安成貞雄君がゐた。そして、二十六日になつて歸つて見ると、故鄕の老父が腦溢血が發して危篤に陷つてゐた。老父のことは本誌に出てゐるから此所では云はない。老父は五月二十八日になつて沒くなつた。その老父の葬儀萬端をすまして七月になつて東京へ歸つたところで、その二十二日の夜になつて、安成貞雄君が老父と同じやうな病氣でまだ四十歲の春秋に富む身を以て沒くなつた。私は八月十二日、安成君と緣故の多いカフエ・リオンで催した泊鷗會の追悼會の席上で、多少の感慨を以て安成君に對する思出を述べた。そして十月になつて俗に豆腐地藏と呼ばれてゐる小石川戶崎町の寺で行はれた鈴木泉三郎君の葬式にも臨んだ。高山辰三君の夫人の沒くなつた悼みにも行つた。

非常な幸福の歲と思はれてゐた今年は、非常な不幸な歲で、

そして、私の永久に忘れることの出來ない歲となつた。かうした中にあつても氣まぐれな私は、何もかも忘れたやうな顏をして、杯を手にしたり、郊外に散策をしたりした。七月二十九日には、夜來吟社の連中と多摩川の奥、御嶽の麓に近い三田村へ行つて、鰻を釣ると云つて置き鉤などをつけ、翌日は後れて來た連中と一緒になつて運座をやつた。十一月六日には、洎鷗會の連中と調布から府中、國分寺へと遠足をした。

東京の家ではべつにかはつたこともなかつた。たゞかはつたのは、飼つてあつた猫が私が土佐へ歸つてゐる間に家を出て、たまに隣へまで姿をみせることがあるが、どうしても家へ入らないことゝ、私が支那へ行つてゐる留守にもらつてあつたエスが、十一月の六日の晩にあかん坊を五匹生んだことであつた。その他には二十年來生へるにまかしてあつた髯を剃り落したことである。貧乏は平生のことであるから之は取立てゝ云ふことは出來ない。

幼時の思出

上司小劍

あした正月
門松立てゝ
……………

子もり女が口を揃へて、こんな唄をうたつてゐる。十人からのコオラスで、賑やかなことだ。一番大きいのが、十五六歲、頬に面皰を吹き出してゐる。小さいのは十歲ぐらゐ、自然に指揮者ができて、棒こそ振らないが、なか／＼うまいものだ。私も其の頃十二三歲で、正月の嬉れしい盛りであつた。私の其の時分に居た山間の寒村は、今でもなほ陰曆を用ゐてゐるといふから、私の少年時代はなほのこと、太陰曆の正月を學校の正月と

言つてゐた。したがつて、太陽暦の歳晩もやはり學校だけの歳晩で、一般の村人はまるでとんぢやくしてゐない。

あした正月
門松立てゝ

のコオラスの始まるのは、陰暦の歳晩で、師走の二十五六日頃から、子守りどもがこの唄をうたひ始める。

私の家は神社の廣い境内にあつて、門を出ると、左の方に舞樂の舞台ともお神樂堂とも付かぬ大きな建物があつて、この高い床の上が、しじう村の子守り女どもの遊び場所になつて、歳晩のコオラスもそこからおこるのである。高い天井に燕の巣があつて、楣間には、牛若丸が鞍馬山の天狗に劍術を教はつてゐる拙劣な繪の額が一つかゝつてゐる。

私の父は郷里の奈良を出て、そこで長いこと神官をしてゐた。徳川時代には幕府との關係で、可なり優待されたお宮であつたらしいが、幕府の滅びた後は社格も低く、廣い境内も荒れ果てゝ、麥秀の嘆があつた。私は少年の頃、日本外史を讀んで、其のお宮の祭神の下らない人物であるを知ると、父が衣冠を着けて其の祭神の前に平身低頭してゐるのを可笑しいと思つた。おれだつて、大きくなつて、少し勉強すればこの宮の祭神が世に在つた頃よりはズツとえらくなつて見せるぞ、なぞと思つたりした。さうしてまた、猫も杓子も死ねば神として祀るこの國の習慣に就いて、幼い頭で考へてみたりした。耕せば十數丁歩の美田を得べき土地を、神社の境内として荒廢させておかなければならぬ理由がわからなかつた。さうして、廣い〳〵土地が空しく棄てておかれてあるのを其のまゝに、小學校移轉改築には、多くの良田が潰されて其の敷地になつたのなども、私には不可解な一つの出來事であつた。

なんだか話が横へ逸れたけれど、私が生ひ立つたこの山間の寒村の荒廢した廣い神社の境内は、いかにも歳晩の一週間を迎へ送りするにふさはしいところであつた。今でもおほかたさうであらう。境内にある大きな銀杏の樹が二本と椋の樹が一本と、太さはいづれも、一人の人が二本の手では抱へきれない。銀杏の葉は晩秋の頃に落ちつくすが、椋の葉は歳晩になつても枯れたまゝで、枝の上に風が鳴らすのを待つてゐる。黄色い皮と肉とに包まれた其の實は、葉が落ちてもまだ殘つてゐる。皮と肉との中には黑い核子がある。正月の追羽子に使ふ羽根はこの黑い核子に挿されて、一と目二た目、三やこし……と、羽子板を鳴らすのである。

『無患子（椋の實のこと）三年磨いたつて、白くはならない。』

下女の長湯を嗤ふ言葉は、これであつて、よく父の口の端に

上つたものだ。全く私の家の下女はいつも色の黑い女ばかりであつた。

風がひゆう〱と吹いて、椋の葉が枝に鳴つてゐる。おひおひと歳晩に近づくのである。十月の亥の日が、先づ歳晩の前觸れのやうにやつて來る。そろ〱と氣ぜわしくなるのだ。『お事多さんでござります。』かういふ挨拶が、私の家と村人との間に交換される。亥の子のぼた餅を作るのが、正月の餅の練習のやうなものだ。亥の子の餅はお萩で、餡のと黃な粉のとがある。この日私の家では、攝社の嚴島神社を開扉して祭をする。そこには辨天の木像が祀つてあつて、辨天の前には農工商に象つたいろ〱の木像が並べて置いてある。柚がおひ〱黃色くなつて、それが神饌の中に加はつてゐる。細い木を心に、藁を卷いて、藁の上を繩でかゞつた三尺ぐらゐの太い棒のやうなもので、ぽん〱と地上を打つて歩くのが、この夜村の子供たちのする一つの行事で、其の音がまるで餅を搗くやうだ。

『亥のころ餅や、一つ祝ひまへう。』と、さう言つて、子供たちは辨天さまへの參詣者の、前後左右にぽん〱と藁の棒を鳴らす。中には大供もまじつて、若い女の參詣者だと見ると、ひどい惡戯をしたりする。

十夜の晩に
重箱拾ふて
開いてみたら
牛のくそ

子守り女によつて、こんなコオラスがうたはれる。それは十夜前後のことで、亥の子と十夜とが過ぎると、いよ〱、もう歳晩は近いのである。さうして霜月も暮れ、師走の二十日頃から、そろ〱餅搗きが、方々の家で始まる。

餅つきすつぺらぽんよ

村の樂團ともいふべき子守り女の群れは、そろ〱こんな唄をうたひ出す。どこそこは一石五斗搗く。いやあすこは二石搗く。などと、餅を搗くことの多少で、村の分限が定まるのである。

舊暦の師走は極寒だ。宵から炬燵を入れて、眠らないで、翌朝の餅搗きを待つ。臼から杵から、蒸籠まで、前夜までにスッカリ用意されて、大きな笊には、餅米の洗つたのが、白く雪の積つたやうに盛り上げられてある。一年に一二度しか使はない特別の大きな土竈には、これもこの時と、味噌豆を煮る折りとよりほかには用ゐない大釜をかけ、松薪を山のやうに積み上げて、火はもう絶えず釜の下に燃えてゐる。

誰れも眠るものはない。下男の[illegible]

どに、蒸籠も杵も臼も一時に活動を初めるのは、眞夜中の午前一時頃でもあらうか。一番鷄の啼いた時、大釜の下には、火がドン／＼燃えて、蒸籠からは湯氣が心知よく溢れる。初めの一臼は主人自身が杵をとつて、御寮人と呼ばるゝ其の妻が水取りをする。しかしそれはたゞ一つの形式で、野球の始球のやうなもの、主人に代つて直ちに下男の頭が杵をとり、一番女中が赤い襷も鮮かに、水取りをする。『餅つきすつぺらぽんよ』のコオラスが、居並んだ人々の間に起る。やがて空臼を搗かせた笑ひ聲が、コオラスに代つてドツと起る。搗かれた餅は、片端から小餅にまるめられ、鏡餅に作られ、おろし餅や手のくぼとなつて、人々の口の端には大根おろしや餡が附いてゐる。十幾臼かを搗き了つた頃、東の空がほの／＼と白みかゝる。

かうした情景は、村の大百姓の家で行はれる歳晩の餅搗きに見るところで、小人數の私の家なんぞでは、こんな大百姓の家に賴んで二斗か三斗かの餅を搗いてもらつた。ずツと昔し、私のまだ生れない頃には、五石からの餅を搗いたさうで、私の家の餅搗が村一番の大がかりであつたといふけれど、私のおぼえてからは大概私の家の餅搗きは大百姓の家に併合されて行はれた。さうして私は、よく前夜からそこへ泊り込んで、餅搗きの賑ひに浸つたのである。

　正月三ツ日は米の飯
　春は悲しや大根ぼり

餅搗きも濟んで、大晦日にもなると、村の子守り女どもは、もうかうした正月の唄をば一種の哀音を含んだコオラスでうたひはじめる。

反動的の大正十三年去らんとす

小川未明

短かいやうでも、一年の推移には意義があります。昨年末に於て、今年に期待したところは多かつたが、それは美事に裏切

られてしまひました。震災直後に、こんどこそは、精神的文化の萌芽が見られるだらうと思つたことも、空望にすぎなかつたのを今に至つて悟るやうな有樣です。

今夏、私は、汽車の中で、米國人と獨逸人と室を同うしました。彼等は、避暑地から、東京へ歸る途であつたのです。米人等は、列車に乘込むと魔法壜からコヽアを注いで飲んだり、ウヰスキイや、キユラソーの栓を拔いたり、また、いろ〱なものを食べたりしました。それに比較して、彼等獨逸人は、晝食に、麵麭の一片と林檎を割つて食べてゐるだけで、何かにつけて、其の質素なのを思はずにはゐられませんでした。獨逸人ならば、祖國の現狀を思慮せずにはゐられないからです。思慮する者にとつては、一身の贅澤や、虚榮は思ひもよらぬことであつたからです。私は、こゝに、しみ〲と獨逸人氣質を觀取せずにはゐられませんでした。大戰後なほ獨逸國家の破滅しないのは、これあるがためです。そして、未來に於て怖れられつゝあるのもこれがためです。

日本に遊ぶ外國人等は、日本の男女等の服裝などを見て、餘りの贅澤に驚きつゝあるといふことでした。

あのやうな震災を被り、あのやうな經濟的の打撃を受けてゐながら、しかも、その深き痛痍の癒えざるのに、早くも、青年男女の服裝の如きが、災前にもまして、華美を極めるといいことは、もとより自省心の不足にもよるけれど、甚しい反動的社會現象と見做さなければなりません。

過日關税に依つて、輸入贅澤品の課税は、一層重からしめられたけれど、これが、享樂階級の道德心を刺激するに足らなかつたことは、その後に徵しても明かです。

同じやうな現象は、すべての方面に於て見ることができます。經濟的に、いよ〱緊縮し、いよ〱堅實であるべきものが、いよ〱擴大し、いよ〱放埒となりつゝあるが如き、反動的の現象は、また、思想の方面に於ても現はれるのであります。大戰後は、世界の全般にわたつて、著るしくナショナリズムに傾倒しつゝあるには相違ないけれど、我日本の如く、暴力によつて、一切を處理せんとするが如き、錯時代的の行動の跋扈するところも少ないやうに思はれます。

私達、常に、理性のみの勝利を信ずるものにとつて、眞の憲政の精神が、これ等の徳によつて破壞されつゝあることを深く慨かんとするものです。英國今度の選擧に於ては、保守黨と勞働黨と對立するに至りました。全世界が、斯の如き、反動期にあるとはいへ、彼は、その間に勞働の時勢の推移と、進歩的國民の態度とがこの一事にも現はれて、ゆかしく感ずるのであり

ます。

日本の如き、何といつても、まだ資本主義發達の過程にあります。一般民衆の自覺は、それに拮抗するだけ發達してゐないことも事實です。無產者の生活は、いよ〳〵苦るしくなりたがら、戰術の不備は、徒らに、犧牲者を多く出すにとゞまりて、社會改善の前途の遠いのを轉た歎ぜしめます。今一年間に、大阪の交通勞働爭議をはじめとして、大小の爭議は、無數であつたけれど、小數を例外として大概は、資本家の勝利に歸したやうです。

たとへ、資本家側の勝利に歸したとしても、事實、最多數者の生活が、危期に瀕する限りは、現狀の維持は到底永續し難く、社會は、不安から脫れない譯です。

彼の郵船會社の罷業時に際して、社會の一部には、つひに灰色の智識階級すら、漸く動き出すに至つたと言つた者があります。しかし、その意氣に、氣慨に、實力等に於て、所詮、頹廢階級の名に背かず、爲に、人心を一新するだけの新鮮味もなく、花々しさもなかつたことは、世間の視聽を聳動せしめた事件だけ、何となく物足らなさを感ぜしめました。

假令、その結果は、如何樣であつても、彼の郵船會社の罷業の如きは、所謂インテリゲンチヤの動搖を示したものです。

智識階級が、それ自身不安に堪えずして、自から動き出すとも、また、無自覺にして陶醉するものを外的から、餘儀なく突き動かされんとするも、何れにしても、この階級にゐる者は足場の、刻々に崩壞しつゝあるのを感ずることだけは、爭はれざることです。前にも擧げたが、英國のこのたびの選擧によつて、夥しく、自由黨の影のうすくなつたことも見逃すことのできない事實です。とはいふものゝ、すべての文化に於て、遲れつゝある日本に、將來の普選を期して、社會民主黨が擡頭せんとしつゝあるのです。

翻つて、過去一年間の文壇を見るのに、そこには、以上の如き動搖をも見ることができなかつたばかりでなく、震災最後の氣不況に原因して、却つて、搾取を逞しうせんとした、一般の資本主義的毒牙から、脫れることはできなかつたのです。一方には、所謂無產派階級の機關雜誌の凋落と共に、文壇の傾向は、逆轉して、興味中心主義となり、やがて耽美的となり、いよ〳〵思想から分離して、藝本位の藝術が、流行するに至つたのです。藝術といひ、科學といひ、苟くも、基礎を社會の進化に置き、人生利福のために目的を置く限りは、共等の有機的關係を無視して、從來の因習に閉ぢ籠つて存在の意義を示すことができないのは勿論のことです。しかるに、文壇人は、何か、し

自身が特權を有しつゝあるやに考へてゐます。かく考へることそのことが、舊文化の囚はれに他ならないのです。

卑怯の批評家や、日和見的の人間によつて、當面文壇の事實が、さまぐ\に批評されるとしても、無產階級の新藝術は、他の勞働運動や、社會主義的運動と同じく、たとへ、彼岸に到達する手段を異にすと雖も、其の目的が、新社會の建設にあり、舊文化の革命に存する限り、舊藝術とは、その道德的見地に關し、人生觀に關し、また、感情表白の技巧に就て、一切別個のものであり、獨創的のものでなければならぬこと、そして、兩者に、瞭然たる差別のあるべきことを、私は、屢々呼號したことであつたのです。そして、何人と雖も、今となつては無產階級の反逆的藝術の主張と存在の理由を否定することはできないと考へてゐます。

最後に、私は、殊に、今年に於て目立つた、反動的現象の一例として、所謂土地分讓と文化住宅の建設を擧げたいと思ひます。細民は、その日の衣食に窮し、無料宿泊所の軒下に集まり、失業者路上に溢るゝとも、彼等に、社會共同の責任を感ずる心なく、自分さへよい生活ができれば足れりとするところに、プチブルジョアの道德觀が現はれるのです。自分達の周圍がますぐ\紳士的に、ますぐ\文化的にならんことを誇として、それを文明としてゐます。そして、この社會組織が存であることを、實際に、感じてゐないのです。彼等は智識かでなく、眞に實感から、自分達の生活をよりよくするためには、この社會をより善くしなければならぬといふことを知らないのです。

もう一つ、反動的の現はれとして、今年から、來年にかけての重大なる懸案があります。中等學校以上に豫備軍事教育を授くること、これです。

國民精神の修養と軍事教育とは、性質上混同すべきものでないことは明かです。また、このことは、學問の獨立といふことからも矛盾してゐます。即ち、人類の共存と共榮と平和を理想とする文化の精神は一切の暴力を否定して、理性の徹底に、これを求めなければなりません。暴力は、いかなる場合に於ても暴力です。私達は、また國民として、正義のための戰を決して否定するものでない。健全なる國民は、常に、萬一に處する覺悟を有するものです。もとより軍事は、平和のための軍事には相違ないけれど、これを學園に置くことは、根本の性質上から見て矛盾するものです。

減師のために、青年學生が、斯の如き代價を拂はなければならぬものなら、寧ろこの際、[illegible]學校を[illegible]してでも、學校に留め

備軍事教育を避くことを拒ばなければなりません。—訴ふるも、また、叫ぶも、斯の如くにしく反動的であつた大正十三年は、こゝ數旬の後に、永久に過ぎんとします。私達は、多大の希望を明年に繋ぐものです。畢竟、そのことは愚であらうと、人生は、爭鬪と欲求の中にのみ、潑溂として、存在するを知るからです。——十一月八日——

歳晩の出來事二三

久保田万太郎

べら棒すぎて話にならない。——十二月まへの晩、電車から下りそくなつて顔に怪我をした。

つれがわたしのあとから乘るはづみに下駄を落して飛下りた。それをみて、わたしも、附合に急いで飛下りた。——それがいけなかつた。——足をすくはれてたちまち前へつんのめつた。

馬鹿げて、また、早い電車だつた。

三筋町の——小島町の樂山堂病院のまへでの出來事だつた。——知つてゐる醫者へ行つてすぐに手當をしてもらつた。大したことはなかつたが、眼鏡の玉を毀して、右の眼の下を切つたといふかどで、顔中、ぐる〳〵卷に繃帶を卷きつけられた。——倖で日暮里までかへつた。

痛みでもするかと思つたが、その晩、いゝ鹽梅にそんなこともなくつてすんだ。よく眠れた。——あくる朝、いつものやうに七時にちやんと眼がさめた。

『この分なら行かれる……』

さう思つて茶の間の火鉢のまへにすわつた。

といふのは、その晩、大阪へわたしは立たなくつちやアならなかつた。外の二三の用は、何も、明日にかぎつたことはないのだが、ことのついでに請合つた講演といふ奴がある。それ

間に合せるには、どうしても、その晩のらなければいけない。——延ばすといふことは止めるといふことになる。……

飯をすませて、田端の、下島先生のところへ行つた。

『まア、どうなさいました?』

『電車からおつこちました。』

『まア、あぶない……』

玄關に出て來た奥さんはあきれたやうに眉をひそめられた。

改めて、また、先生にみてもらつたが、大したことはやつぱりなかつた。藥さへつけて置けばいゝ程度だつた。大阪行きのことを話すと、

『いゝでせう。——心配はありません。』

先生は言下にいはれた。

うちへかへつて、二階の、自分の部屋に入つたとき、朝起きたときのやうな緊張感の心もちのうへにいつか消えてゐるのを感じた。寢の足りないかたちに體がだるい。何をする氣もしない。——夕方までねてやれと六疊のはうに床を敷かせた。

とろ〳〵としたかと思ふと、すぐ、眼がさめた。びつしより汗をかいてゐた。

此奴はと思つて熱をとると八度八分あつた。

か、ときつたことにそれを誰にも云ふことが出來ない。——いへば足どめを喰ふ。——大阪へ行けなくなるにきまつてゐる。——じつとしてさへゐればどうにかなるものと信じて、わたしは、そのまゝ、また、蒲團をふかくかぶつた。

再びとろ〳〵として眼をさました。四時だつた。熱をとると、檢溫器の水銀は、さらに上つて九度を越してゐた。でも、あたまはゝつきりしてゐた。間もなく、わたしは階下へ下りた。——縁側に立つと、知らないうちに、時雨のやうな雨が、暗く、庭のうへを濡らしてゐた。

『何時ふりだした?』

『いましがたです。』

茶の間からうちのものはいつた。

座敷を拔けて、わたしは、廊下に置いてある椅子に腰を下ろした。硝子戸越しにみえる崖下の光景。——いつもいふ田端のそこはもう構内の、入交つた幾筋もの線路をへだてゝ、三河島、尾久のはうへつゞく遠い町々。——その町々の間々に散在する田圃の名殘。——それもゝうみる影なく枯々になつたけしきが、冷めたい、しら〳〵とした感じの雨の中に心細く殘つてゐる。もう冬だ。——踏切のあたりに、近く、一つ二つ見えだした燈火の、濡れこしつとり、だん〳〵あかるくなつて來るのも寂しい。……

急にわたくしは大阪へゆくのが嫌になつた。無理をして、今夜、汽車にのることのいはれなさをはつきり感じた。――鉛筆をとつて、すなはち、電報用紙にわたしは書いた。

、ケガヲシタ、ユカレヌ、イサイフミ。

至急報でそれを郵便局にうたせにやつたあと、二階にかへつて、完全にわたしは病人になつた。

うちのなかにも、ちきに、鈍くあかりはついた。

あくる朝になると雨は止んでゐた。あざやかな月かげが硝子戸にさしてゐた。――熱をとると七度五分しかなかつた。寢卷にかさねた浴衣を取替へて寢直した。傷も何ともなければ料簡もいつもとかはりかなかつた。いつそ氣拔のした工合できじ〳〵と晝までくらした。

そこへ久しぶりにMさんが來た。

『今日は、一寸、おねがひがあつて上りました。』

あらたまつてMさんはいつた。

『何です?』

『實は、その、みていたゞきたいものがありましてね。』

『みていただきたいもの?』

『短冊です。』

『誰のです?』

『夏目さんのですが……』

さういひながら、Mさんは、風呂敷を解いて眞新しい桐の箱を出した。――なかに四季そろつたものが入つてゐた。

夏だけわたしの知つてゐる句で、あとは、春も、秋も、冬も、みんなわたしに馴染のない句ばかりだつた。

『お買ひになるんですか?』

一わたりみてわたしはいつた。

『たしかなものなら買つてもいゝと思ひましてね。』

『お値段は?』

『さきでいふのが三百五十圓。』

わたしはもう一度み直した。――曾て鈴木三重吉氏のところでみたいろ〳〵のもの、芥川君のところでみたいろ〳〵のものがなぜか眼さきにいまさらのやうに浮んだ。

『いけませんか?』

わたしの顔いろをみてMさんはいつた。

『いけないともいゝともわたしにはいへませんが……』

『……?』

『たゞどこか勝手の違ふやうな氣がします。』

『………』

『いへば、韻致の、夏目先生らしくない……』
『それです。』
Mさんは遮ぎるやうに
『實は、わたくしも、はじめにみたとき ふつとさう 思ひました。――どこかに、どうもうそがある……』
『でも、わたしでも、由來それほどみてゐるわけでないんですから口幅つたいことはいへません。――大きにかういふ手があつたりすると申譯のないものが出來上ります。』
『が、それは……』
『もしお預りしてよければ、明日でも、間違ひのない人にみてもらつて上げます。』
わたしは押していつた。
『さうすればわたしも安心です。』
『そんなお手數をかけることもないと思ひますが……』
『わけのないことです。――芥川君のところへ持つて行けばいゝんですから……』
で、二三日、あづかることにした。――その話はそれでうち切つて、あとはいつもの、附合の話、講釋の話、喰ひものゝ話。――うか〱と三時過ぎるまで饒舌つた。
Mさんのかへるのと一しよにわたしも外へ出るたくらみをした。一人で出るといへば必ず枱が出る。Mさんといふつかればいけないといはない。――いはないに違ひない。――さみ越して、わたしは、階下へ着物を出すことをいひつけた。」
『いゝんですか、そんなことをなすつて？』
Mさんは心配した。
『うちにゐたつてはじまりません。――熱はもうないんですから……』
外へ出るとうちにゐては分らなかつた風がかなり烈しくふいてゐた。青い空に綿のやうな雲が鬧つてゐた。
銀座までとにかく電車で伸した。尾張町で下りてとりあへず眼鏡を買つた。――もの〱しい繃帯の手まへ岡田へは氣がさして入れない。――かういふ時と思つて、田丸屋のそばの、まへから聞いてゐた支那料理屋をさがして入つた。
燈火のついたところでそこを出た。ライオンの角でMさんと右と左にわかれた。――わたしは梅坊主の一世一代をみるために、暗い裏通りを、帝國ホテルのはうへあるいた。
六時からと思つたら七時からだつた。演藝場のまへの吹きつ晒しにしばらく待たされた。グリルに入るぐらひの知惠はあるが、意地になつて、わたしは、木戸をあけるまでここに立つてゐた。――勿論わたしばかりぢやアない、四五十人の人が、み

んな、時計をみながらぼんやり待つてゐた。

『梅坊主をみるのにこんな思ひをするとは思はなかつた。』

わたしは、あとで、結城桂陵君をつかまへて文句をいつた。

『不都合だよ、君。』

『でも、さういつても、帝國ホテルで早くあけないんだから仕樣がない。』

結城君は、それがくせの、眼をくる〲させて

『昨夜も、それで、お客を五十人ばかり返してしまつた。』

『分るやうによくいつてやり給へ。――どこの國に、七時からはじまるしばゐの、六時になつても木戸をあけない間拔があるもんぢやアない。』

かういふ場合、わたしは、まだ、癇癪を起すことが出來る。――わたしにとつてはそれがよろこびだ。――單純な反撥とのみわたしは恥ぢたくない。……

雀踊あご合せ、輕口かけ合話、住吉踊、二人羽織、かつぽれ、風流深川ぶし三下り手踊（さういふいひかたをするのを久しぶりで聞いた）――さういつたところで梅坊主は御機嫌をとり結んだ。――十五六年ぶり（ことによつたらもつとになるかも知れない）でめぐり合つたわたしにすると、一座の大ていがみ覺えのない若い時代になつてゐるのがさびしかつた。――たまたま住吉踊のなかにふる馴染の瀧松をみ出して、わたしは、わづかなところでうもれ木のまま死んだ不幸な金丸のうへに悲しみをまたあらたにした。

お客は「二人羽織」をもつとも喝采した。が、わたしにいはせれば、「二人羽織」はもと、岩でこの演出曲目のなかにはあつたが、この一座の演出曲目のなかには入つてゐなかつた。もしこれによつて梅坊主がみとめられたのなら、みとめられないはうがいゝ。――梅坊主がけれんをうりものにしてどこが面白い。

……

が、仕舞の深川をみてわたしは安心した。何をいふこともない。帝國ホテルの演藝場から、わたしは、公園の、青木の玉乘の定小屋だつたいまの大勝館の見物席へ苦もなく拉しられた。――十五六年まへの夢がまざ〱とわたしに返つて來た。――そのかけはしのあまり容易にかけられたのにわたしは驚いた。

十時に終つて外へ出ると空は暗かつた。雨けを含んだ星のひかりは鈍かつた。――冷めたい風のなかをわたしは數寄屋橋まであるいてタクシイに乘つた。

夜があけるとやつぱりいゝ天氣だつた。空は、飽くまで、水

のやうにふかく晴れて、風もなかつた。——下島先生のところから芥川君のところへまわるつもりで、わたしは、昨日の夏目先生の短册をもつて興樂寺のわきの坂を下りた。——濡れた銀杏だのさくらだのの落葉がしづかに下駄にふれた。

自笑軒のまへをとほると支那人の傘うりがあの門のなかへ入つて行つた。——米屋に、今朝は、精米機の音が聞えないで、塀に引つかけた目白の籠に日かげが無心に懷しく澄んでゐた。

冬。

このまんま、五日と十日、すべてをほつたらかして捨てくらせたらどんなに仕合だらうと思つた。

この二三日、八つ手の白い花ぐさが眼にみえて伸びた。（十三年十一月）

除夜の鐘

宇野浩二

私などには、歳暮とか年始とかいふ季節の行事は、直接自分の生活に關係がないから、從つて餘り興味もない。これで、家にさういふ行事の好きな老人があるとか、學校にでも行く子供があるとかすると、多少影響されて興味も生ずるかも知れないが、さういふ者たちをも持たない、私のやうな生活者には、大晦日曜日とか、祭日とかと同樣、それ等のものとは餘り緣がない譯である。——だが、こんな風にいつてしまつては、話にならないだらう。

どちらかといふと、私は年始より歳暮の時分の方が好きである。正月の時は私の方でも怠つてゐる代りに、他所からも挨拶に來る人は稀であるから、家の中は妙に用事のない、退屈な世界を現出する。といつて、平生なら氣輕にステッキでも持つて、散歩に出るとか、友人を訪問するとかするのだが、正月には無暗にそれも出來ない。仕様がないから、この二三年、正月三ケ

日程の間は、私は家に引つ込んで原稿を書くことにして居る。正月を除いて、不斷家庭の外に下宿の一間を借りて、そこへ出かける習慣になつて居る私は、三日とつゞけて家に居ることは、病氣の時でゞもある外は決してないことである。

正月の町が氣が拔けたやうな、退屈な氣分に充ちて居るに引きかへて、年の暮の町は活氣に充ちて居る。といつて、忙しいのは他人のことで、私自身は少しも忙しがることはないのだから、その中をゆつくりと散歩することは自由だし、懐中に少し小遣錢でもあれば、買物することなどもよろしい。――だが、こんな風にいつても、これも亦話にならないだらう。では、一つ題を定めて「除夜の鐘」についてゞもいはうか。

除夜の鐘といふものに就いては、私も多少の感慨がある。あの鐘が鳴ると、どんな借金取も、鬼も私の家の入口の鈴のついてゐる格子戸を開けることはない、と私は考へた。それは丁度子供の頃に聞いた童話のやうな感じで、私自身その童話の世界の人のやうな心持で、あの鐘の音のするのを待ちもうけた記憶がある。もつとも、その頃の私は何も十二月三十一日に限らなかつた、一日であらうが、十日であらうが、午前であらうが、午後であらうが、その鈴のついた格子戸が開く音がすると、習慣的にはつと縮み上つた。次第に臆病になつて、私はその音を聞いても、次の間で首を縮めたまゝ直には返事をしなかつた。そして、鈴の音につゞいて「御免なさい」とか「今日は」とかいふ聲に依つて、その訪問者が誰であるかを確めやうとした。それが聞き馴れた友達のそれである時は、私は勢よく返事をして立上つたが、さうでない時は次の間の母親に合圖をして、彼女に玄關に出てもらふことにした。その度毎に彼女はなさけなさうな顔をして、澁々立上つた。私は彼女に向つて、私が留守だといつてくれと頼む言葉の代りに、右手を左右に振つて見せた。が、それでも、相手が餘り屢々足を運ぶ債鬼である場合には、彼女は斷り兼ねて、結局私が出なければならなかつた。

どんなに私がこの鈴の音を恐れたか、――それは今から七八年前の記憶であるにも拘らずた今でもどうかすると、家にゐる時など、三度に一度、或は五度に一度はこの鈴の音に思はずはつとして、胸を踊らすことがあるのでも分るだらう。さういふ境遇の私の家のことだつたから、年の暮の心配は一通りではなかつた。が、心配するだけで、何の商賣もしてゐないし、何の仕事も持たなかつた私には、手を束ねて、三十日と過ぎ、三十一日と暮れて行く日を見てゐる外はなかつた。

「お母さん、除夜の鐘といふのは、丁度十二時に鳴るもんですかね？」と私は母に問ひかけた。

「あゝ、さうですよ、」と彼女は何か他の事を考へてゐるやうに、そつけなく答へた。

「それが鳴ると、借金取が來なくなるんださうですね。」

「あゝ、」そして暫くしてから、「もう借金取さへこゝの家には愛想を盡かしてるかも知れないよ、」と彼女はがつかりしたやうにいつた。

私はそれには答へなかつた。が、心の中で、七時、八時、九時、と指を折つて、して見ると、もう泣いても笑つても六時間だぞ、おゝ、もうたつた六時間、六時間たつたら暫く平和が來るぞ、と心から期待したものである。もつとも、もう大晦日の夜になつてからは、何といつても商人の家などと違つて、借金取に來る者はなかつたのだが、それでも鐘の音を聞くまでは何となく安心出來ない氣がした。やがて、十二時と共に鳴り出す鐘の音の何といふ和やかさ！　まつたくいつもとは違つて聞える（といふよりも、その頃私は平生は時の鐘の音に注意したことなどなかつたが、）子守唄のやうな響の鐘の音！――だが、こんな風にいつても、これも亦いけない。實は私はこゝで、特に私の心に殘つてゐる過去の幾つかの除夜の鐘の音の記憶を書かうと思ひ立つたのだが、それでは餘りだらしがなくなるから、せめてその中の一つだけを拔き出して見やう。

私の友達に本屋をして居る者があつた。それは友達、――といふよりは、友達附き合ひをしてゐたといつた方が適當であらう、私より五六歳の年長者で、以前古本屋として相當の成功をした者であつたが、それを弟にゆづつて、その二三年前から出版の方に手を出してゐた。ところが、それがだん〱うまく行かなくなつて、いろ〱と苦しい算段をした後で、二進も三進も行かなくなつたらしかつた。で、當時は彼も亦私同樣無職の狀態であつた。もつとも私は零(ゼロ)で苦んでゐたのだが、彼は負(マイナス)で苦んでゐた點では、私以上であつただらう。以前は私は彼の出版業を助けて、彼から月給をもらつてゐたのである。そして彼は可成り苦しい狀態になつてからも、私には缺かさず月給をくれてゐた。多分、今いふ年の暮の、半年ほど前の月までもくれてゐたかと思ふ。

私は彼から月給をもらへなくなつてからは、殆ど無收入で暮してゐたのだが、その頃は母親を親類に預けてあつたので、自分一人さへ生きてゐればいゝ境遇だつたから、割合に呑氣に、友達の家から家を押しかけ居候のやうなことをして日を送つてゐた。それ等の友達も大方は私と隣同志ほどの貧乏人ではあつたが、中で一人、千葉縣の津田沼の海岸で、何にもしないで親からの仕送りで夫婦生活をしてゐる一人の友人があつた。友

人といつても、三四ヶ月位の淺い交際の友人であつたが。その友人が、(私は彼のところへも、或は三日、或は一週間、と居候になりに行つた。)始終私に自慢して、百や二百の金に困ることがあつたら、いつでも自分に相談してくれ、自分の手元になくても、自分は最早や數年津田沼に住んでゐて、村長始め、收入役や、助役も懇意にしてゐるし、現に村の金持二三人と、合資で或る事業をしてゐるから、その位の融通ならいつでも出來るといひいひした。

無論私として見ると、早速貸してほしかつたのだ。が、そんな百、二百といふやうな金はどうして借りていゝか、どうして返していゝか見當がつかない事なので、いつも聞き流してゐた。考へて見ると、彼も亦私がさうであることを見込んで、そんな法螺を吹いたのに違ひなかつた。

ところが、今いふ暮の三十一日のことであつた。友人の本屋が私を尋ねて來て、いつになく弱つた顏をしながら、懷から一枚の書付のやうなものを出して、これで二百五十圓金をこしらへるところがないでせうか、といふのだ。「これ」といふのは約束手形であつた。彼は曾て私に月給をくれた程であるから、一度も私にこんな相談を持ちかけたことはなかつた。又私がこんな相談を受けられる者でないことを彼とて十分知つてゐる筈であつた。それを、よく〳〵のことだつたと見えて、そんな事をいつて來たに違ひない。何でも一月十五日何々銀行で支拂ふといふ約束手形で、無論相當の利息で割引してくれていゝといふのである。私は思案に餘つた末、ふと津田沼の友人を思ひ出して、その事を彼に話すと、では、一緒に津田沼まで行つて紹介してくれないかといふことになつた。

途々、汽車の中で彼が白狀していふには、この金は或藝者(彼の情人であつたのだらう、私も一二度會つたことがある、しかし、彼は彼女のことを情人だと私にいつたことは一度もなかつた。)から正月の出の着物を全部借りて質に入れた、それを出してやるための必要なのださうである。藝者の正月のことだから、それがないと稼業が出來ない、自分自身の苦痛なら如何やうにも忍ぶが、人の迷惑のことであるから、と彼は縷々と私に口說き立てた。

そして、津田沼驛で下りて、友人を尋ねると、彼は幸ひ在宅してゐた。用件をいふと、二つ返事で、自分は待合せがないか、すぐに近時に精米所をして居る友人があるから、その人のところで間に合はして來ようといつて、彼は出て行つた。私たちはほツと一と安心した。が、やがて主人が歸つて來ていふには、尋ねた人が留守で、一時間ほどしたら歸つて來るさうだか

ら、それまで待つてくれといふのであつた。ところが、それが一時間が二時間三時間と待つても、一向埒があかなかつたのである。

簡單にいふと、この友人は病的な嘘つきだつたのである。後で考へて見ると、百二百の金ならいつでも出來るといふことは勿論、その時精米所の友人に頼みに行つたといふことから、從つてもう一時間したら歸るとか、今ちよつと歸つて來たが、急ぎの用事で又隣村へ行つたけれど、直に歸つて來るとか、さういふことが悉く嘘だつたらしいのである。そして、彼はたゞ何の意味もなしに、一つ吐いた嘘に又一つ重ね、それを償ふために又一つ重ねるといつた風になつたのであらう。その外に强ひて求めると、そのやうな人物であつたから、友人に乏しいらしかつた、それに細君がヒステリイらしかつた、だから、彼は一時間でも二時間でも多く、稀に來た友達を引き止めておきたかつたといふのであらう。

か、時が經つと共に、そんな事とは知らない私たちの氣持の苛立ちといつたらなかつた。殊に當事者の本人にして見ると、待ち遠くはあるし、といつて時と共に、こゝが外れたとして、最早やそんな時間になつて、東京へ歸つたところが、迚も金の出來る的がないのであるから、彼は時計の秒針の音に胸をえぐられる思ひだつたに違ひない、やがて、九時にもなつてした。

「でも、あんなに向うもいつて居るのだし、大方こちらの用事の趣きも傳へてあるのだから、まさか間違ひはないでせう、もう少し、もう少しお待ちなさい、」と津田沼の友人はいつた。

そのうちに、津田沼を最後に出る上り列車の時間も過ぎた。十時になつた。私たちはあきらめて、津田沼から二十町の道を、船橋まで歩いて、そこから東京行の電車に乘ることにした。（その頃はまだ船橋までしか電車がなかつたのだ。）

友人は不機嫌になつてゐる私たちが辭退するにも拘らず、私たちを船橋まで送つて行くといつた。そして、あそこなら十一時半近くまで電車があるから、なるべく遲くまで精米所の主人を待つて、そして出かけやうといつた。私たちは仕樣がないので、その言葉に從つた。が、結局精米所の主人は來なくて、十一時の時計の音を聞くと共に津田沼を出發した。

それから海沿ひの道を二十町行つたところで、船橋の電車の停留場に來て見ると、終電車は十一時かつきりなのだ。私たちは電燈ばかり赤々とついてゐる。がらんとした停車場の改札口の柵にもたれて、十分間も溜息をついてゐたが、もう仕樣がないから、これから津田沼へかへつて、元日は津田沼で迎へようとな

ると、友人は忽ち上機嫌になり出した。さすがに大晦日のことだから、船橋の町もそんな時間にも拘らず割合に賑かだつた。街道筋に赤い提灯の出た汁粉屋を見つけて、

「お汁粉をどうです、食べませう。」と津田沼の友人がいつた。

彼は二人とも甘黨である私達の機嫌を買ふつもりだつたのだらう。が、上戸である彼は、私たちの汁粉を食べてゐる間に酒を注文して、するめか何かで滿足さうに盃のふちを舐めながら、獨りではしやいでゐた。

「困りましたな。」と私は本屋の友人をかへり見て、慰めるつもりでいつた。

「えゝ、仕様がありません。」と彼は寂しさうな笑顔をしていつた。

その時、ゴーンといふ除夜の鐘が鳴つたのである。

「萬歳、萬歳、さあ、除夜の鐘が鳴つた。今から大正何年だ。お目出度う、お目出たう。」と津田沼の友人が盃を上げながら叫んだ。——とかういふ話である。

除夜と貧乏

德田秋聲

私もこれで隨分いくつもの年越しをしてゐる譯だが、除夜といふと必ず貧乏といふ言葉が聯想されるほど、餘り幸福な除夜を送つてはゐない。學生であつた頃ユニオン第四讀本にアンデルゼンのマツチ娘といふ話が出てゐて、クリマスの晩に於ける貧しい少女の幸福な夢を描いてあるのが、まだ西洋文學など知らない私にも興味をもつて讀まれたものだが、私には信仰がないから、その事もまた貧乏の慘さを豫想させるだけであつた。勿論マツチ娘とちがつた意味で、さうどん底におちてもゐなかつた私の貧乏生活にはづゐぶん懷かしい思ひ出もあるのである。少年時代は、同じ貧乏でも、直接生活に面接してゐた譯ではないから、氣分のうへでは可なり暖かい風が吹いてゐたが、物質的には負目を感じたことも多かつた。筆で生活するやうに

なつてからも、不斷は不斷で苦しかつたが、大晦日といふものが、來る年も來る年も餘り樂しいものではなかつた。殊に貧寒な下宿屋生活の除夜などは、むしろ腹立しいくらゐ寂しくて慘であつたが、さういふときに訪ねて來た友達と、夜ふかしをして氣焔を擧げるのも愉快だし、冷眼にあはたゞしい町を見て歩くのも悪くはなかつたが、時が時だけに暖かい家庭をもたない放浪者の心は、殊に寂しいものであつた。

しかし除夜の氣分は理屈なしに好きである。不斷は感ぜられない切迫した氣分のなかにも、どこか暢びりした餘裕のあるのもいゝし、あわたゞしい中に嚴粛な感じのあるのも好い。私は門飾りをしたり、神棚に七五三を張りかへたり、鏡餅を飾つたりするのは、何だか父祖代々仕來たりの常套々々繰り返すといふ意味ばかりでなく、何となくわざとらしく更まつたところのあるのが嫌ひで、除夜に限らず、何か習慣的な禮儀じみたことをするのに、特別の興味を感じてゐるらしい老人や女達に反感をもつことがあつたが、それも年を取るに從つて、さう厭ではなくなつたばかりでなく、貧寒に育つてひねくれて來た私の慘さを繰返へせないために、いくらか子供の氣分を樂しく幸福にする様に、仕來たりのことは矢張り仕來たり通りにした方がいゝと思ふやうになつた。私としてはづゐぶん苦々しいことだが、日本の除夜の氣分や正月の感じは、やはりさういふところから出て來るのだから仕方がない。肉食を盛んにする時分には、毎日々々三度々々の米の飯を食つてゐる日本人も少し何うかしてゐると滑稽に感じたこともあつたけれど、今はやはり米の飯に還元したやうに、飾藁の匂ひなどが、何か清新な感じもするのである。福壽草を冷やかしてゐる男の慘めさを輕蔑したいやうに感じたが、それも亦歳晩の樂しい光景の一つである。勿論今でも、三四年前の景氣のよかつた頃に、銀座なぞへ行つてみると、ブルージョア階級がぞろ〳〵出歩いてゐて、贅澤品を飾つてゐる何の店にも、奢侈を競ふ男女が、黒山のやうに集つてゐるのを見ると、反感も起るには起きたが、客觀的に見てゐれば、それも都會の除夜にふさはしい光景として、何となし晴々する氣分にもなるのである。

大晦日は私に限らず、貧乏人の多い日本では、出來一つの脅威であつて、大晦日といへば借金とか質屋とか、ひどいのは夜逃とか首を縊るとか云ふことの意味の代名詞のやうに響いたのは、徳川時代は知らず明治以來おそらくずつとさうだつたのだらうと思はれるが、今は一般にさうひどい貧乏人もなくなつたので、大晦日といふ文字にも、さう言つた人世味や趣味も失はれたやうに思ふ。

想　華

高野山にて　三寶鳥を聽く

荻原井泉水

もう于蘭盆である。院では、玄關に近い廊下に大きなきりこ燈籠をつるした。其の四方に垂れた白い長い紙の尾がひら〱と風に翻へるのに、秋風を感じさせられる。私は院主に乞ふて、亡母亡妻の新盆の爲めの供養をして貰ふために、些かの志を紙に包んだりした。私がこゝに來た時、さかんに鳴いてゐた時鳥も、鶯も、いつか、鳴かないやうになつた。而して、庭石の間から、しく〱と、蟲が細い糸のやうな聲をふるはし初めた。山は里よりも早く、暦通りに秋が訪れて來るのである。

×

庭に出て、まだ夕明りが殘つてゐるかもしれぬと思ふ杉の木を仰ぐと、其梢には、既に青白い月の光がさし届いてゐる。月も、もう是ほどに明るくなつたかと思ひながら、私は外へ出る。足は壇場のしづかな影を求めてゆく。御影堂を初めに七堂の灯が、かんがりと灯つてゐる景色はいつもの通りであるが、其灯を包んで杉の深い影が伸びてゐたり、草の影もないほどたゞ白く平らに敷きつめてゐる月光の中に、堂の軒の角木が、黒い直線の模樣を描き出してゐたりした。

所々に立つてゐる常夜燈は、月を見る人のやうに、自分の影を曳いたまゝ、じつと立つてゐた。私は、根本大塔の燒跡が一段と高くなつてゐる其上に攀ぢ上つて、其大きな礎石の上に、腰をおろして、今は影も形もない塔の眞上と思ふ中空に、高い杉の梢をはなれて澄む玲瓏とした月の懸つてゐるのを打仰ぎつゝ、天に此月あり何ぞ造塔を要せんなどゝ思つたり、種種間錯鈴鐸增幡微風搖擊珠鬘瓔珞半滿月等而爲莊嚴といふ船若理趣經の章句を口ずさんだりした。而して、院に戻ると、門は既に閉ぢられて、其前に立つてる大きな石標に「眞如親王御遺蹟親王院」と深く刀を入れて彫り込んだ其文字がくつきりと月の光に照らし出されてゐるのである。

×

越後の良寛の遺墨展覧會の折に、釜の蓋の裏に書いた「心月輪」といふ字を私は見たことがある。其文字も實に好く出來てゐたし、釜の蓋の圓いのを月輪と見た即興の心にもほゝゑまれた。然し「心月輪」といふ語の出處は解らなかつた。所が爰に來て、眞言宗の本などを覗いてゐるうちに、それかと思ふ心當りが見出された。眞言の行者は禪定に入る時、心の內に月輪を觀想する、といふ事をする。その譯は、我等の心內の佛性といふものは月輪に似てゐる、新月の時は實に幽かなものであるが、一日一日と光暉を增して、十六日に到つて圓滿するやうに、我等の心內にも元來、十六菩薩の德を具へてゐるので、其を開發して了れば即ち完全に智惠の眼を開き、煩惱の曇りを去つたことになるといふのである「心月輪」――此の意味を以て良寛を見ると、一段と其味が深く思はれる。其月も、まことに我が一夜一夜に明るく照りすゝむのである。

×

けふも月が佳い、斯うした明るい夜には此の院で、三寶鳥（佛法僧）が啼くといふので、私は夜おやゝ更けて、

に月の澄むのを待つて、其を聞きに出掛けて行つた。每年、此山に來られるT博士は此鳥を聽く爲めに、奥の院へ通つて三年目に漸く宿願を果したといふ。牧水氏の紀行に、木曾で七晩徹夜して漸く聽いたといふ話もあつたかと思ふ。此山では此鳥を聽くと聽きえぬとに依つて、佛緣があるか無いかとも云ふ。

閑林獨坐草堂曉　三寶之聲聽二一鳥一
一鳥有レ聲人有レ心　聲心雲水倶了々

弘法大師の此詩あつてより、所謂、佛法僧の三寶の名を呼ぶ靈鳥として、佛教的の寓義さへも添へられたのである。私のゐる院の主任の話に依ると、此鳥は餘程、靜穩を愛する鳥らしく、決して人里近くには來ない。月がよく冴え、大氣が澄み、如何にもさはやかな氣持だとしんみりするやうな晩に、ぽつと鳴くのである。聲はブッポウ、ブッポウ、……と三四たび續けてブッポウソウと鳴いて鳴きおさめる。最後にソウといふのは引き聲で小さく僅かに聞きとれる位だといふ。兎も角、高野山の名鳥であり、他所では聞き難いものだといふので、私はどうかして聞きたいと念じながら出掛けたのである。まるで百千萬刧難遭遇の微妙法でも聞かうとする者のやうに——。一の橋を越えて墓碑の中の道に踏入ると、杉の木立がみつしりと月の光を遮つてしまふ。それでも疎らな枝を洩れる其光が太い杉の幹に、又は宏大な五輪塔や寶篋印塔の上に青白い斑らな影を印して美しい、梟がホーホーと鳴く。其夜は丁度、于蘭盆の魂迎へに當つてゐたので、寺院又は民家に緣故のある墓では、裸の蠟燭を竹にさして供へてあつた。其の淡い光が別に、墓の上に墓の影などを描き出して、淋しく見られる。私は大師の廟前にまで來た。そこは拜殿の陰であり、空には杉が殊にこんもりと枝を張つてゐるので、殆ど月の影はさゝない。拜殿は燈籠をともしたまゝ締め切つて、裏手に參拜者が隨時に線香をさゝげる爲めに、線香の箱と火鉢と、其價を入れる爲めの錢箱とが置いてあつて、人とてはゐない。其處の緣は廟前に

誦經する者の爲めに、禪堂の單のやうな風に、薄緣が敷いてあり、既に一人の男が端坐して珠數を爪ぐりながら低い聲で光明眞言を唱へてゐた。私は線香に火を移して廟前に供へてから、其男と少し離れた所に座を占めて、口のうちで心經を誦してゐた。線香の火は深い香盤の中でかんがりと赤くて、雲のやうな烟をもや〳〵と吐いてゐる。その後ろ瑞籬の上には、七八本の蠟燭が搖ぎもせずに澄んでゐる。其光を受けて、香盤の上に釣つた眞鍮の灯のない燈籠が氣味惡いほど大きな影を屋根裏に投げかけてゐる。左右の花瓶には樒（佛前の花は大抵高野樒である）などが活けてあるのであらうが、其は暗く其中に交つた車百合が──蠟燭の灯の方に向いてゐる其の大きい花だけが──ほんのりと赤く光つてゐる。少し目を移すと、納骨堂に寄つた方の杉の木の間に僅か月明りの空が見えて、その小さな空間に星が一つ篏まつてゐる。いかにも佛法僧が鳴きさうな夜である。私は經を誦しながらも、耳を澄まして、何か鳴くものはないかと注意してゐた。納骨堂の前に手洗の水をおとしてある其清水がジヤボジヤボと幽かな音を立てゝゐる。ギエーッ〳〵、杉の木がきしみでもするやうな聲がきこえる。「むささび」が鳴くのである。しかも、ブッポー（佛法）といふ其に似た聲すら聞こえない。やゝ久しくすると、遠くにカラン〳〵といふ音がする。それは石の舖道に鳴る「人間」の足音らしく、だん〳〵に近づいて來る。やがて廟前に現はれたのは、僧と寺の子僧達との六七名で、「櫻池院」といふ提灯をさげてゐる。其一行は廟前に燭を點じ、供物を置き、僧は錫杖を鳴らしながら暫く誦經をして、別に廟前の灯を新しい燭に移して歸つてゆく。精靈迎へに來たのである。──これは前夜來るべきものなのであるが──暫くすると、又も精靈迎への一行として「龍泉院」といふ提灯をつけて下手から現はれ來る。こんなに人の來ることが頻繁で、しかも錫杖などをから〳〵と振られては、三寶鳥はとても鳴きさうもない。先に見た星を見ると、星はいつか其杉の枝の間を外れて他へ移つてしまつて、たゞ月光の空間だけになつてゐる。夜も餘程更けたらしい。山の夜は、殊に奧の院は──こゝの老僧は

八月でも炬燵を用ひてゐる——なか〳〵寒いのである、先から光明眞言を唱へてゐる男は、時々寒さうな咳をしては、まだ誦しつゞけてゐるが、私は今夜はあきらめをつけて、次にはどてらでも持つて來ることゝして戻りかけた。

×

「大門でも、佛法僧は鳴くことがあります」——と人が私に教へてくれた。大門ならば私の居る院からは近い。なるほど其邊の杉の森の深さでは三寶鳥が啼きさうに思はれる。門の前の廣場が急に崖になつてゐる所、杉の茂みの下に大きな杉の切株がある。此上で一晩、坐禪をしたらば氣持が好いだらう、ふと眠りこけでもすれば谷底へ墜落しなければならない、面白い所だ、とさう思つて見覺えておいた切株がある。けふは是非其鳥を聽かうなどと、いふ野心は持たずに、たゞ其切株の上に坐禪をしにゆかう、さう思つて、此夜は十五日の月がやゝ更けるのを待つてから、厚い座蒲團の一枚と其下に敷くべき新聞紙とを持つて出掛けた、あたりの木木を拂つて、がつしりと立つてゐる大きな樓門の姿は、滿月の光を浴びて、端然として美しい嚴めしさであつた。切株は露にじつとりとしめつてゐたが、其上に蒲團を敷くと、まことに佳い座所となつた。私は提灯を消して、其根元に寄せかけておいて、靜かに脚を組んだ。すぐ、眼の下は深い谷で、杉がみつしりと生へ埋めつゝ、月の光を吸ひとつて反射させないらしく、それは一面に黒い海のやうに果てしなくひろがつてゐる上に、蒼白い霧がむや〳〵と漂ふて、其だけが月の光に浮いて動くのである。凉みの人が二三、折々、話しながら門の邊りに來ないでもなかつたが、其等の人も、金堂の十一時の鐘が鳴りわたる頃から、全く消え去つて、世界は杉の梢にかゝる一つの月と、其木の下にゐる一人の私とだけになつてしまつた。此夜もむささびは鋭い聲を出して、私を脅かすやうに鳴いた。その一疋は私が坐つてゐる直ぐ上の枝にゐるらしく、無氣味なはばたきの音もきこえた。然し、其もやがて、默つてしまつて、地上はたゞ〳〵月の美しい光と影とを織りなしたる一枚の大きな不

思議な圖になつた。私は眞言宗に於て、佛界の莊嚴を象徵する所の曼陀羅のすばらしい圖を幾つも見てゐたが、此夜の月光の一大圖繪は、かの羯磨會の大曼陀羅の如く、此の神秘な影の中から顯現する無數の光像は、さながら一千十六尊の姿そのものだとも見られるのである。さうした幻想の中に、私がひたつてゐる時、仄かな聲で、實に遠くの所で鳴くらしく、ブツポウ、ブツポウといふ聲がきこえた。それは如何にも幽かな聲ではあるが、確かにブツポウ、ブツポウと響いて紛れないのである。是だな、三寶鳥といふのは——私はさう思つて、其聲の來る方に耳を澄ました。谷の月光の中に、白い靄は前よりも濃くなつて、所謂、雲海の景色に似て來たが、その靄の海の底と思はれる、鳥は一羽であらう、佛法——佛法——佛法——と續けざまに六七度鳴いてから聲をおさめて、又、しばらくすると鳴きはじめる、たゞ、最後に引き聲にソウと鳴くといふのは、小さな聲だといふ事だが、それは餘りに遠くである爲めに、全く聞こえないのである。

私が戻つたのは餘程更けてゐた。境場を通ると、月はやゝ傾いて、横さまに鐘樓の釣鐘の肌を照らしてゐた。御影堂の御供の淸水が小屋の暗い影の中でチロ〳〵と鳴つてゐた。院では戸じまりをしないので、私は裏門の木戸を押してはいつた。佛前の腰障子は、裾の方から滿ちよせる水のやうに、ひた〳〵と月の色にぬれてゐた。長い廊下をゆくと、佛燈が一つぽつかりと赤いばかりで——。



街の灯

宇野千代

（一）

八丁堀の裏手露路に、東京灣汽船の荷揚げ人足市藏の二階、三疊を借りて、ささやかな隱れ家を營んで居たのは、庸吉と澄江であつた。二人を訪ねて來るものは誰もなかつた。

生活のすべを知らない二人が、ともかくも生活して居たと言ふ事は不思議であつた。窮乏は遣つて來た、と言ふよりも初めから待つて居た。その、慘めさの上に、か細い蜘蛛の糸のやうな幸福をはり渡す事に餘念がなかつた、と思はれる位、澄江は空想的であり、享樂的であつた。彼女は、窮乏を凝視するまへに脚色した。お伽噺、物語、スクリンの筋書が、彼女の脚色を助けた。彼女の希ふところは、何れの舞台に於いても彼女自身がヒロインである事許りであつた。

青山もずつと場末の、箱のやうな小さい店々が、徒らにだだつ廣い街をただしんかんと思はせるためだけのやうに佇ち列んで居る、その軒下にくつつくやうにして、丁度退け時の勤め人や勞働者が、ものを言はない、勤勉な蟻のやうな忙しなさで歩いて居た。――それらの人々に混じつて、澄江と庸吉とは、それらしい店のつい手前まで、同じやうに押し沈默つて歩いて來た。

もう一度、あの、二階の三疊へ引つ返して泣いたり笑つたりして掻き口說くのでなければ、――それはもう、幾度繰り返した事か解らない、――到底も言ひ盡す事の出來ない、餘りにも、胸一杯な感情が、二人に口を利かせないのであつた。

――何でも構ふ事はないわ、滅茶苦茶になつて了ふんだわ、――と、男よりは二三歩前を自棄に足早やに歩いて居た澄江は、そこの、アイスクリーム、ソーダ水と白く拔いた赤いメリンスの暖簾を、今にもぐいと潜りさうにして、ひよいと、後を振り返つた。

「おい、」

と、低い聲で男が呼んだのであつた。何とはなしに、それを待つて居たやうな澄江は、他愛もなく、男の立ち留つて居る電柱のところへ、ぱたぱたと驅けて行つた。

「俺も一緒に這入るのかい？」

庸吉の眼に、氣の弱い、けれども何處か狡猾いと思はせるやうな微笑が浮かんだ。そして、微笑みかけるやうに[illegible]

「一緒に這入つちやあ、まづいだらう？」

「いやなひと！じやあ、ここで待つて居て、好い加減な時にお客になつて這入つて來たら好いじやあないの、」

一つ違ひの年下乍ら、ちよいとした氣紛れに姉さんじみた口を利きたい澄江は、われとわが言葉に惑はされて、ふいに、相手を子供のやうに愛撫したい衝動に驅られるのであつた。――ちつとも心配な事なんかありやあしないわよ、見てらつしやい、そりやあ、うまく遣つて來るから、――と、お俠んな笑ひを殘し乍ら、さりげなく行き過ぎようとすると、

「あの、それから――少うし金をお呉れよ、二十錢で好いから、」

「ビール？」

「ビール？――だつて、何にも取らないつて譯にや行かないだらう、」

澄江は沈默つて、帶の間から、青いきれいの財布を出して渡し乍ら、――それには、つい今朝ほど、最後の財源であつた英ネルの單衣を質入れして二人の電車賃を引いた許りの殘りがあつた。――斯うして居る間にも、今は何方も解らない乍らこの、暖簾一つ潜れば、ああ、今しがたおもてに立つて居た女だな、と思はれさうなうちの中の誰かが、何處かから見て居るのじやないか知ら、と言ふやうな氣がして、じつとして居られないにも拘らず、――他にもつとましな事はなかつたのか知ら、如何してもこんな、ちつぽけなチャプ屋のやうな店へ行かなきやならないのか知ら、――と言ふ風な甲斐もない未練、今までのぐうたらな、けれども決していやな事許りではなかつたその日暮しの生活に對する未練に繋がつて、ふいに、庸吉と自分との隔つて居る空間を、目まぐろしい速さで羽が生えたやうに飛んで行く何か口に見えないものを、わざと取り逃がして居るこころの、じりじりと身うちの焦げるやうな快よさが、一寸の間、澄江を棒立ちにさせた。

「如何したいツ？俺も一緒に行つた方が宜かつたら行くぜ、」

まあ、この男は、すつかり行かせる事に決めて居るんだもの、――と、澄江はちらりと、男の顔の上に微かな輕蔑のまなざしを興れた。――もともと、自分から言ひ出した事乍ら、又、それだからこそ尚更、こんなとこ、思ひ切つて歸らうや、と言つて貰ひたかつた。

澄江は、危ふく泣ぐみさうな自分を、引き離すやうにしてばたばたと駆け出して行つた。

（二）

「いらつしやあい、」

女は、這入つて來た澄江の目色きをちらりと見たきり、ぎい、ぎいと蓄音機のねぢを捲す手を止めなかつた。太太しい、――まだ揃への済まない顔のせいか、人を不快にさせる調子であつた。

澄江は狼狽てて、

「あの、――新聞で見て來たのですけど、」

女はひよいと顔を擧げた。じろりと白眼が動いて、

「へえ？――一寸、女將さあん、」

と、不精らしく、腰を掛けた儘の椅子を、ぎいと後へ廻すやうに體を奥へ向けて、[illegible]を掛けた「あんた、こつちですよ、」

[illegible]、うすべ[illegible]の[illegible]上へ腰を下すと、その、[illegible]

笥、神棚の御神燈、態手まで、あるらしいもののありつたけが、きちんと片附いて居るだけにせゝこましく眼に附いて、ついそこに、投げ出した長煙管を吸ふべき女將と呼ばれる女は、四十がらみの、油の染みた横髪が大きく波を打つて、ちんまりとした丸髷の似つかはしい女でもあらうかと思はれたが、店先に居た女がいがり聲で呼んだほどにもなく、ついと、側の衝立の影から起つて來たのは、大柄な、けれども決して醜くはない若い女であつた。

「どうぞ、お上り。」

と、言葉だけは優しく、吸ひ取るやうな執拗さで眞つ向ふから見詰め乍ら、「おうちは近いの？」

「いいえ、京橋……」

と、上の空で、——丁度その時、聽き馴れた朴齒の、敷居につまづきでもしたのか、叩土を蹴つてどしん！と腰を下したけはひに、おや、もう這入つちやつて、——と、危ふく澄江は、その方へ向くところであつた。

「さう、誰かと一緒に居るの？」

「ええ、一寸、病……」

と言ひ掛けて、流石に嘘を吐くところを庸吉に聽かれて居る可厭さに、聲を潜め乍ら、

「病人が居るもんですから、少しお金をお借りしたいと思つて、」

女將は、眉一つ動かさずに、

「ぢやあお前さん、こつちへ寢泊りは出來ないんぢやあないの？」

「ええ、——何なら、この近くへ越して來ても好いんですけど、」

ばれるならばれたつて構やしない、誰がこんなとこ、——と、澄江は、安つぽい壁紙の煤けた天井をちらと見上げ

た。その屋根裏で、先刻の女などといぎたなく起き伏しする、そして庸吉は、どつか澄江の居ないところでひとりで縦て居る。——庸さん、今の、聴いた？と言つて見たかつた。ずつと視野の外れにほの白く、浴衣を着た庸吉の肩先や、卓子の上の麦藁帽子を感じ乍ら、一緒に、その顔色まではつきりと解るやうな氣がした。

「病人だつて、朝晩、手がかゝるほどぢやないんですの、ただ、御飯を炊いときさいすりやあ、………」

「如何もねえ、先にもよく似た事があつて、さんざ氣を揉ませられたんでね、——と言つて、その女は亭主持ちだつたんだけど」と、ちらりと見て、「一寸、好い女だつたんで、士官、——中尉だつたか知ら、是非一緒になりたいつて、そりやもう、随分金も遣つたやうだつたけど、何しろ、亭主があるんだから、好い加減に騙してたのさね、——亭主は亭主で、洋服の仕立をするつて話しだつたけど、如何だか解りやしないやね、他所さまから預つてあつたきれ地を賣り飛ばしたりしてねえ、その女も到頭、うちの前借をまるまる踏み倒して、一緒に逃げちやつたんだよ。——もうそれから、通ひの女は懲りごり！一寸でも休まれると、又、如何かしたのかと、思ふだけ野暮だからね、」

嘘も出まかせに言ふけれども、効きさうもないと見ると未練はなかつた。じやあ、うちでよく、相談して、と言ひ捨てて澄江は、ひらりと軽く身を躍らせるやうにそこを出た。庸吉の方には眼も呉れないで——。

夕方の風が、袂と裾をなぶり乍ら後からおくつて来た。それに甘へたやうに、わざと體をのめらせて、爪立つやうに歩いて来ると、——街はさきよりももつとだだつ廣く、ただいたづらにしんかんと見え、両側の店々はもつとちつぼけにひしやげて見えた。軽々と、足はその低い屋根を踏んで行くこころであつた。何が嬉しいんだろ、——嬉しいんじやあない、可笑しいのであつた。

振返ると、今出て来た赤いメリンスの腰巻が、低い家並の中に、踏切の旗のやうになぶられて居た。その下から、可

笑しいほど眞面目な庸吉の顔が現はれた。なあんだ、と澄江は、いたづらな眼附で笑つて見せ乍ら、

「駄目よ、そんなに早く出ちやつちや、」

が、その聲とはうらはらに、何となくなごまない心が、うつすりとくすんで行くのを感じた。

（三）

丁稚から叩き上げた岡氣な小商人と言ふ風體の、羽織を着ないで木綿縞に紺の角帯をちんまりと締めた男が、露路の突き當りまで行つて、又、戻つて來る。――ああ、又、通り抜けられると思つたのか知ら、と、何氣なく澄江は、二階の手摺に倚り掛つた見て居ると、その男がひよいと顔を擧げた。なりよりも、もつとくすんだ顔であつた。

所在なさに見て居たと言ふには、餘りにもの好きな自分の視線を感じて、澄江は、狼狽てて顔を引くと、その儘、疊の上へ寢そべつて居る庸吉の方へ、

「ねえ、――變な男が居るのよ。」

「どこ？」

「不可ないわよ！覗いちやあ、」

ちよいと上眼を遣ひ乍ら、何處を見るともなく、何か、聽えないけはひを感じようとする風に、「ね、階下の上り框が開いたやうじやなくつて？」

その時、階下の小さい娘が上つて來た。開きの間から顔を出して、

「小母様！」

と、ぶつきら棒に、大型の名刺を置いて行つた。

庸吉は、腹這ひ乍ら、素早くそれを拾つて、

「松村仲買店々員、服部高助、」

と冗談らしく讀み上げて、澄江の方を盗み覗乍ら、「早く降りて見ないか、そんな、——空つ呆けなくつたつて、ちやんと知つてる癖にさ、」

「馬鹿ね、今の、どんな男だと思つて？軒下を通る人を、私が皆知つてるなんて、筈がありやしないわ、」

——と、ぬき足で上つて來たのか、明けつ放しの開きの蔭から、思ひがけない客の上半身が、のつそりと現れた。

「御めん下さい。一寸、お邪魔をしたいのですが、」

不意を打たれて、殆んど機械的に、

「どうぞ、」

と、澄江の口から洩れた時、見知らぬ客との視線が、空間でかつちりとからみ合つた。ふと、澄江は、自分のもの好きな眼附きが、ほんの通りすがりのこの男を、二階まで釣り寄せたのだと言ふ妄想に驅られた。と、西洋の怪しい女の、めくばせ一つで男を誘ひ込むといふそのめくばせが、彼女自身の遣つたもののやうな鮮明さで頭に浮かんだ。

「失禮ですが、貴女が石川澄江さんで………」

剛々しい、——と形容するには、餘りに固い表情であつた。じつと、喰りつくやうに人の顏を見詰めて、

「何だか、御病人がおあんなさるとかで、」

病人？ああ、青山のバアから遣つて來たんだな、と思ひつくと澄江は、一寸極り惡るげに笑つて、ちらと庸吉の方を

見乍ら、
「あれはあの、――お金が入り用だつたもんですから、――だつて何てつて好いのか解らなかつたんですもの、」
客は、こごりともしないで、
「失禮ですが、どんな御入用があつて、その、」
と言ひ掛けたが、自分の、餘り立ち入り過ぎた問ひを狼狽てて打ち消すやうに、「いゝえ、私の方は、あのバアとはちとも關係ないんですよ。ただ、一寸あそこの女將を知つてるもんですから、そんなお話を聽いて、お若いのにお氣の毒のな事だ、何なら、さう澤山の金でなければ、自分で御用立しても好い、さう思つたもんですから、」
見知らぬ他處の娘に、何の理由もなく金を呉れる、その、親切以上のものを少しも怪しませないためのやうな、さりげない口吻であつた。言葉だけ惡丁寧であり乍らさうしたお世辭を言はなければならない自分自身を、忌々しがつて居る風な調子にしか聽えない、この男の口から聽くと、さうした親切以上のもの！當然享くべき恩惠――とまで思へなくとも、惡く相手の腹を探らせないだけの用意がありさうに見えるのだつた。
だが、何となく、初めから氣を呑まれたかたちの澄江には、この狹い三盤の空氣がすつかり客のものになつて居るやうに感じられた。少くとも、樂々と坐つて居るのは彼女自身でも庸吉でもなくて、この男だけのやうに思へた。
いつそ、他愛もなくほんたうの事を言つて了ふんだ、と突嗟の間にそんな氣になつた澄江は、それが辯の他處めにはさも邪氣のない微笑で、相手を惹くやうに、
「ほんたうは、この男の、」
と、庸吉の方を、――何となく居心地惡さうに、それでも雜誌の頁をめくつたりして、つとめて平氣を裝つて居る

所吉の方を、つい
と眼で示して、「この男の學校の月謝や、それから、色んな………」

「學校の？」

と、微かに男の眼が光つて、それまでは見もしなかつた所吉の顔へまとも
に、

「失禮ですが、貴方は澄江さんの？——」

「從兄です！」

相手の言葉を手繰り寄せるやうに素早く受けて、きつぱりと答へた。その、一寸ものものしいけはひが、澄江の胸の中を同じ音波になつて響いて行つた。

「從兄？」

と、投げ出すやうに繰り返して、——從兄か！從兄でも好い、だが、俺は、貴樣のやうな男は認めないぞ、とでも言ふ風な敵意を露骨に、くるりとそつぽへ眼を移して、

「さうですか、——じやあ、貴方が澄江さんの、謂はばまあ、後見をなさるつて譯ですね。たゞそれだけの事ですね。私は又、よくある、内縁の良人とか何とか言ふ風な方だと許り思つて居ましたが、」

すばりと双肌を脱いで居直つた、と言ふ調子であつた。澄江は、何となくぎくりとして、男の言つた内縁と言ふ言葉を、今更のやうに思ひ浮べた。それは、初めて聽いた言葉のやうに意外で、又、幾度か聽き古した下品な言葉のやうに耳觸りであつた。

好いの？あんなこと言つてて、と言ふ風に澄江は、ちらりと所吉の眼の上を、何となくまともには見られないで掠めるやうに視線を流したが、これも同じ思ひの、思はずつと反らした眼を、——それから、膝の上を、人もなげにいる

〳〵と這ひ廻つて居る一匹の蠅の上に据ゑて、じつとねらひを定め乍ら庸吉は、ばたりと力一杯に空しい音を立てて打ちつけた。

その隙で、潮どきを計つたやうに、

「どれ、」

と、客は立ちかけて、「實は、ほんの通りがかりで、――御承知の通り、つい、この先の店へ出て居ますので、――手ぶらで遣つて來たもんですから、丁度、今、持つてないんですが、――斯うしませう、どうせ、學校に御入用なものなら、丁度あちらに用事もありますから、明日、さうですね、だが、貴方の御都合は？――さうですか、ええ、じやあ、十時頃、赤門の、右側の塀のところでお待ちしませう。そこでお渡ししますから、じやあ、………あ、それから、女將に聽いたところでは、四十圓と言ふ事でしたが、それで好いんですか？」

澄江のあたまに數字が飛んだ。四十圓、六十圓、七十圓、百圓、――いくらでも、好いと言ふ額はなかつた。一瞬間、あまい綿菓子のやうに慾望が膨らんで、かげらふよりも脆く消えた。丁度、西日の斜光の中に、一層色褪せて見える客の小倉の帶のあたりに、全で別人のやうなうすい影が掠めたのを見たのであつた。

（四）

客を送り出して、引つ返して來ると、變な、後めたさに似た空虚が二人を待つて居た。謂はばまあ、後悔をなさるつて譯ですね、――と、こころごころに繰返し乍ら、庸吉は、例の、狡猾さうににや〳〵笑ひ出し、澄江は、われにもなく眞面目を裝つた。お互に、自分の考へを見透かされるのが可厭だつた。

「俺あ、あれと同じ男を知つてるよ。あの、朦朧な印象は、――自分で少し、てれてやがるんだね、」

「如何して？」

「如何して？じやあ、お前は、あの男が、親類の叔父さんか何かみたいに、ただで金を呉れると思つてるんだな、」

「だつて、――じやあ、貴方は、學校でなぞ逢ふ積りはないの？」

「無論逢ふさ、何しろ、」

と、何か素晴しく恩恵がかつた口を利きたくて、――その實、次第に滅入つてゆくこころを感じ乍ら、「思ひがけない福音だからね、」

（五）

誰か、からりと開けたにしても、流し元へ降り立つたついでに、ちよいと、落しものを探して居る、と思はせる姿勢であつた。揚げ板の上に片膝おとして、竹箆の、蓋にしてある簀の子を、ひよつと見咎められたにしても、つい、袂がひつかかつて、と言ひさへすれば濟みさうに、ほんの一寸ほどめくつた隙から、二枚、三枚、五枚と、乾き上つたかきもちを抜き出して、素早く袂へ忍ばせた。そして、その袂を、今とり入れた許りの洗濯物と一緒に抱へるやうにして、澄江はそうつと二階へ上つて行つた。

ほつとするほど仰々しいものではなかつた。さらに、悩みと言ふ程どの意識はなかつた。何か、[illegible]も[illegible]とおり過ぎて行く不氣味さに交じつて、微かに、[illegible]きとあらゆる[illegible]の、てもなく[illegible]けられた[illegible]に、[illegible]りついてゐつた。

——貫吉、あるじの市藏は辨當もちで出掛けたのだし、母なし娘のおつるは何處かへ遊びに行つて居たし、貫吉はつい今しがた、學校へ行つた許りだし、うち中は、凡てのもの音が死んで、ぬるまつたい水のやうな靜けさの中に沈んで居た。——さうした時、澄江は、つい、ふらふらとその病氣に襲はれる。心ともなく、指先ともなくひくひくと神經的に痙攣つて、それをしないで居る事が、次第に苦しく切なくなつて來た。盜みの中毒者！澄江は、殆んど嬉しさうな足取りでその在所に近づいて行く。——彼女は、凡てのものの在所を知つて居る。誘惑者の媚態をつくつて、盜め、盜め、と囁いて居るやうにしか見えないそれら凡てのものの、在所は、眼を閉ぢて居てもはつきりと見えた。

今、——財布には最後の銅貨も乏しく、貫吉とのささやかな夕餉の才覺さへ覺束ないとは言へ、それさへ、彼女の盜みの、ほんの些細な原因にしかならない、さうした澄江にとつて、けれども、ほんのかきもちの二枚三枚を盜まなければならなかつたと言ふのは、何となく味氣なく、恥しい事であつた。——

ひとりで、剝げた塗り膳に向つた。甘味さうに、とろりと煮溶ろけたかきもちを舌にのせると、何か、ほろ苦い感觸があたまを掠めた、と思つた。——が、すぐ、我れ乍ら極りの惡いほどのひもじさが、音を立ててこみ上げて來た。

——あの男にうまく逢へなかつたのか知ら、——澄江はふと、階段に上つて來る貫吉の、氣の拔けた足音を聞きつけて、その方を振り向いた。

「如何？」

…………と言ふのは、御飯は？とも、金を與れたの？とも通じさせる積りであつた。貫吉は、

「ああ、」

と、仰山に、體を本包みと一緒に疊の上へ投げ出して、ちらりと膳の上を見たが、

「駄目、駄目、初めつから、何だか變だな、と思つたんだ。――だのに、金の事だと言ふと、つい、好い氣になやつて、……」

「逢つたの？逢はなかつたの？」

「逢つたさ、昨日の男と、青山の、ほら、あのバアの女將つて言ふ女とが來たよ。こつちあ、知らないんだけど、あの女、俺がお前と一緒にお客づらをして這入つて行つたあの男だつて事を、勘づいたやうだぜ。」

「勘附いたつて構ふ事ありやしないわ。」

「構はないどころじやないよ。お前、覺えてるだらう。俺あ、あの男の前じやあ、ちやんと、立派なお前の後見で通る筈なんだからね、――だが、幾ら惡がつたつて、あんな奴等にや歯が立ちあしないよ、あつちの方が、二枚も三枚も上手なんだからね、何でも逆に利用しやあがる。」

「じやあ、矢つ張り、お金を與れるつてのは嘘だつたのね？」

「なあに、ちやんと四十圓、それこそ俺の顏を見ると直ぐ與れた。――だが、人を有耶無耶の間に、後見なんぞに決めちまやがつて、それで、ちやんと、人の利き腕を折つた積りになつてやあがる。――その金は、條件附きなのだよ。」

「條件附き――――？」

澄江は、殆んど反射的に繰り返した。庸吉は、にやりとして、

「而も、どんな條件だと思ふ？向ふの言ひ分を露骨に飜譯すると、――金は遣る、その代り、お前を妾に寄越せ、――」

さつと閃くやうに、澄江のこころを一つの影が過ぎた。昨日來た男の、盲縞の木綿着とともに装つた慇懃さをかなぐ

り捨てて、脂肪ぶとりの滑らかな片頬に、好色らしい微笑さへ湛えて、彼女を見詰めて居る姿が思ひ浮かんだのであつた。それは、思ひ掛けない姿乍ら、けれども、その姿の上にもう一度、あの小倉の紺帯をちんとりと、締めさせる事の思ひも及ばないほど、それ自身の不髄の如く似合はしいものであつた。して遣られた！と言ふよりも、くすぐつたいやうな寧ろ喜びに似た感情が、水のやうに淡く澄江のこころを流れた。

「へえ、――何て図々しいんだろ、あんな奴の姿になる位なら、苦労しやしないや、」

と、急に、殆んど嬉しそうな高聲で、笑ひ出した。

その思ひ掛けない笑ひ聲と言葉には、妖婦の科白のやうな、態さとらしい偉法さがあつた。聴きやうでは、だから、こんなに苦労をして居るんだ、とも、とれそうな口吻を、庸吉は、他愛もなく、するりと抜け乍ら、

「だが、こつちが、もう一つ上は手を行つて、何でも、うん、うん、と向ふの言ふなりになりさうた風を装つて、あの金だけ貰つとけば、そして、今夜にでも二人で何處かへ行つて了ふと宜かつたんだ、と思つたが、それも、やつと帰り途でさう氣が附いたんだから、欠つ張り俺あ、悪黨にやなれないな、」

「じやあ、貴方！そのお金は返したの？」

と、澄江の眉の間を、微かな軽蔑の影が掠めた。

「返したのだつて？――お前はそれを、持つて帰れば宜かつたと言ふのかい？」

と、殆んど絶叫するような聲であつた。彼の腫れぼつたい細眼は、一瞬間、燃えるやうに、澄江の面に注がれたが、直ぐ、持ち前の、氣のない、悲しげな微笑に移り乍ら、空つぽになつた瞬の上をちらりと見て、

「ああ、ああ、腹が減つたなあ、――さぞ、あの男は、青つ臭い書生だと俺を馬鹿にしやあがつた事だらう。――ほん

とうに、俺あ、あれを返すんじやなかつたつけ、そして、ちよいと許りうは前をはねて、歸りに一杯遣るんだつたつけ——ああ、俺は、どんなに長いこと、うまいものを喰はなかつたらう、ビフテキと、それから冷いビールと、——思ひ切り呑んで遣りたいなあ、」

その、態さとらしい、幾らか芝居がかつた言葉にも拘らず、澄江の耳には、殆んど哭きの聲に聽えた。彼女は、その聲を、直ぐに彼女自身の胸の中に拾ひ上げた。と、庸吉の眼が感じたであらう同じ光景を、——血の滲んだビフテキの切り口とともに、透きとほる玻璃器の表面に、美しく盛り上つて、不可思議な陶醉を呼ぶ黄色い液體が、折からの微風を感じて搖れ乍ら、音もなく卓子の上に零れるのをまで、はつきりと見たのであつた。

（六）

従兄妹同志とは名許りの、田舎にありがちな家と家との確執から、澄江と庸吉とは、顔を合せる事も稀れであつた。人傳てに聽く噂話しは、そんな場合に避け難い、悪意を含んで語られたにも拘らず、二人は丁度、人質にとられた情人同志のやうな、神秘な探り合ひを初めた。誰も、その事に氣附くものはなかつた。彼等自身でさへ、その、仄かな戀心を、優しい好奇心のあらはれとしか思つて居なかつたのだから。——

その中にも、庸吉の家の何處にともなく、庭苔のやうに濕つぽいさびれが見えて來た。永い間の孀暮しを、氣丈者の名に溺れて、庸吉の一人の母は、女の身には思ひも及ばない、射倖心にあふられ、家屋、田畑の賣買ひから、春蠶、秋蠶の仲買めく事にまで、手を出すと言ふ噂があつた。が、強たか者と言ふよりは、髪は切らず、鐡漿も含まぬ許りのたよやかさに、夕暮れどきなど、裏路に佇ぐ姿をでも見掛けようものなら、口さがない村人達は、それ、[illegible]—如何

はしい會合に使はれると言ふ――の踊りであらうの、暗い木立に、ついと、男の影が隠れたの、と囁き合つた。事實、並ならぬ才貌の、誰よりも己れを知つて居た彼女は、おし詰つた金の才覺など、とろりとした、黒瞳の一瞥を吳れる位はあらうかと思はれたほど、ほんの起居にも、眼にあまる水々しさが溢れて居た。

庸吉はさうした母を見て居た。その溺愛に隠れ乍ら、さうした母の姿に對する、ルーズな、ぬるんだ水のやうな無批判が、庸吉のこころに滑り込んだ。家はその、ぬるんだ水のやうな無批判の上に、あてもなく漂つて居る風に見えた。不幸が續いた。最後に、その母も死んで了つて、庸吉は一人、不信と蔑視と、借財との中に取殘された。その上、彼には、ながい間の學生生活を廢する勇氣がなかつた。と言ふよりも、それの終極に依つて購はれる生活を信じて居た。幸福に對する淡然とした期待を抱き乍ら。――

時に、噂は噂を生んで、古沼のやうな家から、澄江の出奔を促した程であつた。彼女の浪漫的感情は、出奔、犠牲、情人、と言ふ言葉の響きを好んで弄んだのみならず、容易く實行に移す大膽さをさへ持つて居た。

而うして、澄江の初めて出逢つた庸吉は、彼女の、多分に芝居がかつた犠牲を果させるために、うつてつけの境遇と性格とを持つて居た。全く、その母から得た感化に依つて、庸吉は、時に、容易く、正情を眠らせ兼ねまじく、又、時に純情愛すべき戀人ともなり得たのであつた。注文通り、彼には一錢の金もなかつた。

幾干もなく、澄江の眼は、都會の明るさ暗さに馴れて來た。漫ろ歩きの行きずりに、笑み交す人も一二ではなかつた。殆んど無意識的な媚が、彼女の唇から、帶から袂から溢れた。彼女は、われとわが嬌態に欺かれて、丁度、生れ乍らの娼婦ででもあつたかのやうな錯覺に陷るのであつた。斯した澄江の姿は、庸吉に、死んだ母を思はせた。母の袂に隠れてゐた頃の、ぬるんだ水のやうな無批判が、再び彼の心に戻つて來た。

二人は、二人の笑つたり泣いたりする聲が、美しい虹になつて縒み乍ら立ち昇つて行くのを、見ようとして居たのであつた。」

淺黄地を白く拔いた水玉の、さもそれらしい湯屋の暖簾を、蛇の目の先きでついとあげて、珍しく、ひつつめの櫛卷に、襟は濃く白粉して、仇ものらしい眞似も巧く、澄江は、縞直しの金盥を片手に持ち扱ひ乍ら、くるりと體を捻つたはづみに、もう片つ方の雨傘を、小器用にぱつと開いた。

——と、ふた足ばかり踏み出すともなく、露路一杯、眩く許りの射光に、はつとして傘を畳むと、今その傘のあたりから、立つたかと見える許り、鮮かな七色の、角の氷屋の軒高く、揭げた赤い旗のあたり目がけて弧を描き乍ら、虹になつて居るのであつた。あ、あ、——と、思はず聲を立てて、振り仰ぐと、湯淩りの快いあたまに、ぼうと上氣して、今にも、その、色美しく細やかな水蒸氣の球が、そのまゝ、額の上に降つて來るかと思はれた。

夢にか、それとも、ずつと子供の頃の事にか、それと寸分たがはない街と家並と空氣と虹とを感じた記憶があつた。

虹だつたか知ら、それとも、——が、七色はその儘、澄江のこころに反射して、あかるく、あかるく、ひとりでに笑ひが浮んで來た。その笑ひの隙き間から、浪漫的な空想が滑り込んだ。——吃度、何かあるんだわ、誰か、どつさり金のある小父さんか誰かが、ひよつこりと訪れて來るか何か、——。

土さへ乾いて、塗りの高下駄も氣取しげに——ただ、浮きうきと歩き出した。街上から、店先の水場から、氷屋の赤い旗から、南京玉の暖簾から、眼に見えない水蒸氣が立ち昇つて、澄江の空想と、からまり合ひ、もつれ合ひ乍ら、

高い虹のてつぺんまで屆くやうに見えた。

と、向ふから、紺の詰襟に、異様な白洋傘を翳して、をどけた腰つきの、昔なら讃岐下りの藥賣と言ふ風體、としは四十か、五十か六十か、如何にも思へさうなずんぐり男が、ろかろかと擦れ違ひざま、ひよいと振り返つたが、

「お澄やんぢやあないか、」

呼ばれて、田舎訛りの呼名に、はつと怪しむひまもなく、虹のお呪ひかと思ふ許り、――同じ生國の、今は、横濱で可なり知られた唐物屋のあるじだと言ふ、澄江が上京の汽車中で知り合ひになつた老人で、金は呉れるか呉れないか、澄江のあたまに閃いたものは、ただその事一つであつた。

（七）

「あら、小父さん、」

「こりや珍しい、如何も似てると思つたが、まさか――」

「まさか、この邊りに居やしないだらうと思つたんでせう？」

「矢つ張りこの邊に居るのかね？」

「だつて、あの時は、何處へ落付く事になるのか、自分にさへ見當が附かなかつたんですもの、嘘を吐いたんぢやなくつてよ。」

「なあに、嘘を吐いたんだつて結構だよ。ちやあんと、この通り出會したからね。――だが、すつかり變つたなあ、」

と、薄い着物を透かして仄白い肌まで、ぺろりと嘗めて了ひさうなとろ眼を、手もなく、彈き返すやうに、澄江は、

けろりと澄まして、

「小父さんだつて、隨分鋭つてるぢやあないの？如何したのよ、その、白い洋傘」

「目じるしだよ。横濱ぢやあ、白蝙蝠の小父さんつて云へば、僕の事だと思ふよ、」

「なあんて、――」

と、笑ふのさへ上の空に、思はず、通りかゝつたうちの露路へちらりと眼が走つた。乏しい粉炭を掻き立てゝつい先刻買つた許りの唐黍を燒いて居るであらう庸吉のうしろ姿が、閃くやうに視野を過ぎたが――。

「時に、ちよいと、夕飯を遣りたいのだが、この邊に、何かうまいものを喰はせるところはないかな？」

「あるわよ、何を上りたいの？」

「さあ？――お澄やんは何が好い？」

「あたしですつて？あたしならもう、お構ひなく、づいそこなんですもの、うちで喰べるから好いのよ。」

すると、すかさず口を寄せて、

「じやあ、お澄やんのうちへ行かうか？」

澄江は態さと生眞面目に、

「ええ、どうぞ、」

と、言ひかけたが、急に、意地惡げにけれども優しく笑ひ乍ら、「だけど、うちは、とうに通り過ぎちやつたのよ。」

「通り過ぎちやつた？――……じやあ、この小父さんを置いてきぼりにしたな、こいつよ。」

と、狡猾さうに笑つて、「何時までも、附いて來る積りなの、ね？」

何て、いけ好かない爺いだらう、――と言ふ気持をさりげなく、

「さうかも知れないわね。」

けれども、さすがには皮肉笑ひも浮かんで来なかつた。言葉にこそ出さなあれ、思つて居た事に間違ひはなかつた。

先刻からそれとなく、用事を切り出す隙を覗ひ乍ら、さて、何處で如何初めるかさへ、見當のつかない滄江だつた。

「じやあ、何處へ行かう？坐るところが好いか――――」

「腰掛けるところの方が好いわ。雑作がなくて。」

「雑作がなくて、仕つけがなくて、だらう？」

「えゝ――――」

「いや、なに、腰掛けて、大勢見てゐるところの方が間違ひがなからうつてことさ。」

はははは、と聲を揃つて、亂杭齒の露出すままの高笑ひが、ぴしり！と頬を打つたやうに響いた。急に、刺すやうな悲しみが滄江の胸を流れた。さうした老人には、ほんの駄洒落に過ぎないであらう一言に依つて、彼女の浪漫的性情は、脆くも傷けられたのであつた。こんな時、昔の貴女のやうに、又せめて、操高いと言はれた白拍子ほどにも、意氣を見せて、ぷつりと押しだまつて了ひたかつた。

けれども滄江は、踵を返さうとはしなかつた。蒼白い顔には、微笑さへ浮んだ。と、直ぐ――――卑屈なおべつか笑ひに變つて、われから、老人の高笑ひの中へ紛れ込んで行つた。

「大丈夫よ。そんなこと…………、間違ひなんか、あると思ふのが間違ひだわ。」

（八）

夕飯には早過ぎる時刻をほんの暇潰しに、煙草を吹かしたり、のみものの、空になつた洋盃を弄んだりして居た客の二三人が、一せいに瞳を擧げた。

「おい、何かもつとうまいものを、――うまいものを喰はせろよ。」

と、もう、大分呂律は廻らない乍ら、そこは醉つ拂ひ相應に、何て景氣の好い爺いじやないか、と思はせたい氣もあつて、コック場へ續く暖簾の間から、ひよいと首だけ出した女給の方へ、大げさに手を擧げて見せた。

ちえ！五月蠅いつちやないよ、と言ふ眼顔が、丁度、澄江の眞向ひ、飾棚一杯の嵌め鏡の面を、掠めるやうによぎつて、暖簾の中へ消えた。澄江は、わけもなく、かあつとなつて行く氣持で、女の消えた方へ、くるりと冷い一瞥を呉れ乍ら、

「好いのよ、小父さん！あたし、もう澤山よ。」

澄江は何となく、いらいらして居た。今夜は、ある知り合ひの解剖醫のところへ、ほんの小遣ひとりの、下調書きの仕事を貰ひに行く筈であつたのに、一寸、風呂へ行くから、と言つて出たきり、先刻から小一時間も、斯うして、酒の相手になり乍ら、ついぞ、用事を切り出すどころか、氣がさして甘へた顔も出來なかつた。いつそ、ここを出て了はう。こんな、明るい、誰にも見られて居るところで、そんな事が言へると思ふなんて、――澄江は、ちらと眉をあげて、硝子越しに往來を見た。

夜空と闇がとけ合つた中を、街の灯がちらちらちらして、徒らに白い浴衣の人影にかかり乍ら、すいすいと、うすあかい闇をたつ

くれ乍ら、硝子に浮かんでは過ぎて行つた。ああ、あんなに暗くなつて了つて………。ほんたうに、歩き乍ら、小父さんの顔を見ないやうにして、ついと、切り出せばそんなでもありやしないだらうに。――

「好いから、早くそのビールを、あけてお了ひなさいよ。」

「如何してだい？如何してそんなに急がなくつちやあ不可ないんだい？」

と、揶揄やうに、卓子へおいたまゝの洋杯へ、じかに唇をあてゝ、上眼遣ひに澄江の顔を覗ひ乍ら、ちく、ちく、と吸つて見せた。その、老年そのものゝやうな、紫色の、夥しい縦皺を口邊に走らせ乍ら、しぼんだり開いたりする唇を、まともには見られないやうな氣がして、けれども、眼だけはやつと笑ひ乍ら、じやあ、あたし・知らないことよ、もう。好い加減にして出なくちやあ可厭！とでも言ふやうに、

「お勘定！」

と、澄江は、勝手にカウンタアの方へ呼び掛けたが、そのふざけた調子にも似ず、聲だけ、びしり！とはね返つて來た。

「なに、お勘定？――まあ、好いや、さう、うまく、まかれやしないからさ。」

と、一寸、立ちかけて、詰め襟のホツクから、シャツのボタンまで外して、うち懐の、大人げもなく首から紐でひつかけた、大きな蟇口を取り出した。おや、おや、と、澄江は、けれども少しの輕蔑も混へたい、子供つぽい眼附きで眺めて居たのだが、その時、もう、拂ひを濟ませて了つた荒物屋のあるじは、ちよいと惡戯な笑顔をし乍ら、同じ蟇口の中から、白い紙切れをつまんで、澄江の手に渡した。

「何よ、これ？」

すると、又、もう一枚二枚と、同じ位の紙切れを見せた。株式會社、カソエアメリカ支配人、松村宗七、それから、京濱電力株式會社監査役、松村宗七など〻刷つてあるのを、眼敏く見て取ると、へえ、こんなもの、と言ふけぶりも見せず、澄江は、

「これ、小父さんの名刺なのね？」

如何だい偉いと思はないか？とちよつとも懸け値のない自慢顏を、あでやかに見上げた。ああ、今、あれを一言、言へたら好いのに、――と言ふ考へが、ふいに、澄江のあたまを掠めた。何處か、顏の見えないやうな暗いところへ行かなくちやあ、――

「さあ、早く、洋服のホックを懸けてお了ひなさいよ。」

「よし、よし、」

と、醉どれらしく、足を踏みしめ踏みしめ往來へ出た。――ひやりと冷い夜霧が、澄江の頬に、肩に落ちた。空から、ガラス窓から、夜店のアセチリン瓦斯から、數知れない微光と影が重なり落ちて、人々は長い短い影を曳き乍ら、如何だねみんな、夜が明けるまで歩かうじやないかねと、聲のない眼くばせを投げ乍ら、擦れ違つてゆく。白粉の顏、赤い帶、麥藁帽の青白さ、溜息を吐く草履の音、――あゝ、何て好い……と、澄江は、夜霧に咽んだ顏をあげて、何か知ら足許をすくつて行かれたいやうなもどかしさで、人いきれを吸ひ込んだ。あたし、まるで醉つ拂つてるみたいよ――と、振返つたとき、ぐいと、たくましい腕の中に抱きすくめられた。

「あ、あ、小父さん、」

と、澄江は、呻くやうな短い叫び聲を擧げた。

（九）

そのまゝ、身悶へもしないで、澄江は、両肩を石のやうにすくめた。彼女の頭を、閃くやうに掠めたのは、つい、この横丁にある小さい公園の事であつた。公園の、深い木立の悩ましい暗さであつた。――じつとして、じつとして、――

――と、澄江は、われとわが心に囁いた。斯うして、あれを言ひ出すのだ。――ねえ？あたし、小父さんにお願ひがあるのよ。――

だが、それは、何と言ふ忍耐であらう。この脈はしく、す、すうん、と音を立てゝ、足の爪先まで傳はつてゆく、よひどれの腕のなま温るさ、うつ！と、顔面をまともに吹きつけて來る酒氣、斯うして抱きすくめられ乍ら、それをじつと堪へて歩いて居るその事でさへ、どんなに恥しい事だか知れやしないのに、それは皆、金を貰ひたい許りの忍耐だと言ふ事を、如何して知られて好いものか、――

二人は、公園のベンチに、くづれるやうに一つになつて、腰を下した。い、けない！と、男の厚い胸を突き上げやうとした時、澄江の片手は、脆くもベンチの縁(ふち)を外れて、そのまゝ、ぺたりと腰を落した。と、男の體の重さが、他愛もなく、どしり！とのしかゝつて、彼女の首は、仰向けざまにうしろへ垂れた。枝の繁つた木立の間から、高い空が、星が、めちやくちやなものゝ影がさかさになつたまゝ、一どきに瞳を掠めたと思ふと、さつと、黒い幕の下りた感じで、男の顔がおほひかぶさつた。

澄江の全身は、恐しい接吻の予感にそのまゝ凍りついて、微動(みじろ)ぎもせず聲さへ立てなかつた。彼女の唇は、靜かた、無感覺に似た放心のために、少しづつ開いたのであつた。――ああ、これが、彩しい縱皺を走らせ乍ら、ビールの披

瑞響にあてがつて居た、あの、にび篠い、戀そのもののやうな汚い唇であらうか？――思ひかけなくも、つい、今感じた唇はしきを衝き抜けて、澄江の想像を奪つたのはこれであつた。――これと同じ事を、あたしは幾度夢想した事であらう。夜、あいびとと××××居てさへも、誰か、顔も見知らない荒くれ男に、深い森の中か果てしのない海の上かで、手籠めにされてでも居るやうな、絶望的な恐怖のままに、身を切るやうな快よさを思ひ描かなかつた事であらうか？――――

「澄ちやん、」

ええ？――――と、澄江は、とろりとしたうすめを見開かうとして、はつと、その聲の調子を感じた。

「小父さんの事を忘れちやあ不可ないよ。ね、ねえ、二人で愛し合はうよ、ねえ、」――

――何と言ふ、おどけた甘つたるさであらう。この男は、もうすつかり、老人なのだ。若い女とのラブシーンには、如何言つたら好いのかわからないのだ。恐らく、活動寫眞からでも習ひ覺えたであらう言葉を、何とまあ、ぶまに拾ひ上げたものであらう。――――と、澄江の唇を、ほろ苦い嘲笑が掠めた。

と、その嘲笑を感じたやうに、ついと、男の顔が遠のいた。空氣と微光と、たとへようもない空虚とが、二人の顔と顔との間を、素晴しい速さで流れるのが、澄江の眼にはつきり見える。流れる、流れる、何と言ふ遠くへ行く事であらう。――――突然、置き去りにされたものだけが感じる、刺すやうな淋しさが、澄江のこころを奪つたのであつた。ひよつと、この儘つ捕へにからかはれて居るのだつたら？――――お前は、瞬つ時のお前だけのままに、お前の身を任せるつもりさ。お前は、あの夜昨の代償を拂はなければならないのだ。金を貰はなければならないのだ。――――と、誰かには、めちやくちやに、おれとおまへを跨しかける。――

視野の外れ乍ら、銅像のやうな黒さと無表情さと醜さとをもつた大きな顔の、夥しい頬髭が、ちか〳〵と澄江の眼を刺すのであつた。

「小父さん、あたし、お願ひがあるんだけど……」

「なに？――何か欲しいのかね？」

と、直ぐ、首をかしげて寄つて來たが、用心深げなうす笑ひを浮べ乍ら、「欲しいものがあるなら、何でもさう言ふと好いんだ。一遍、横濱へ來ると好いんだが、」

「よこはま？」

「さうだよ、うちの店へ來ると好いんだよ。紅玉の指輪でも、腕時計でも、洋傘でも、お澄やんの欲しがりさうなものなら何でもあらあね、」

その時、こと〳〵と、一つの間をもつた急がない靴音が、二人の背ろの繁みから近づいて來た。

「ああ、お巡りだわ、」

と、澄江は、微かに身をよぢらせて言つた。しい！と、仰山にけれどもどこか態ざとらしく言ひ乍ら、男は、澄江の腰へ廻して居た手を、そうつとひいた。そして、

「じつとして居るんだよ。――大丈夫だ、大丈夫だ、」

と、あやすやうに囁いた。

へえ？何が大丈夫なのよ、――と、澄江は、たとへようもない口惜しさを、じり〳〵と心の中へ押し込め乍ら、じつと靴音を待つて居た。

だが、それは、巡査ではなかつた。二人の方を見ないやうに、けれども、どことなく不確かな足どりで二三歩行き過ぎてから、その、若い、電氣會社の集金人のやうな男は、ひよいと振り返つた。

「あの、――一寸お尋ね致しますが、ここからは、電車通りの方へ抜けられないのでせうか?」

「さあ、――」

と、冷淡に、「表通りへ引つ返して行つた方が好いよ。廻つて行つた方がね、うつかり抜け道なんぞすると、――」

「なによう!」

と、澄江は、腹立たしげに遮つて、「そこの柵を越えると、直ぐわかりますわ、白い煉瓦が見えるでせう? あれに添うて行きさへすれば、直ぐ電車通りが見えますのよ。」

若い男は禮を述べて行き過ぎた。

唐物屋のあるじは、にやにや笑ひ出して、

「じやあ、俺も、餘り嫌はれない中にさよならをするかな、――」

「小父さんは、醉つ拂つちやあ居ないのね?」

「俺かね? 醉つ拂つちやあ居ないかね?」

と、同じやうに繰り返し乍ら、ゆつくり立ち上つた。

ふいに、澄江のこころに、憎惡、羞恥、悔恨の刺すやうな悲しみがごつちやになつて湧き上つて來た。[illegible]、凍りついたやうにじつとして居乍ら、眼がしらは、あの、驕れたものだけが知る口惜し涙で、じ、じ、と[illegible]

「じやあ、さよなら、――きつと、横濱へお出でよ、ね、どこからでも、電話を掛けてくれさへすれば、直ぐ行くから

れ、——さよなら、さよなら、」

と、休憩場の咄りふめかしく、あの、つい今しがたの續きのやふな、ぶきな甘つたれ聲に戻り乍ら、澄江の肩に手をかけたが、「まあ、お前さんは、泣いて居るのかね？泣いて？——」

（十）

吹き降りの、はためく風を斜に避けて、半びらきの蛇の目に肩をすぼめ乍ら、小走りに、つつと驅け抜けて來たが、電車通りを二、三丁露路へ折れると、流石に暗かつた。

雨の糸目も、両側の黒板塀に吸ひとられて、ところ〴〵、貧しい軒燈の灯かげさへ、味氣なく泥濘を這ひ、ともすればとられさうな高下駄の、爪がけのさきをさまようだけであつた。

——知つて居るのは、十日許りまへ、耕吉と二人で來た、あのカフェの、裏手の露路と言ふ事許り、今宵、耕吉の不在をしほに、そうつと出掛けて來たものの、今、ひよつとこの、黒板塀の中に、その男が住んで居まいものでもないと言ふところまで來て居乍ら、澄江は、ずる〳〵とまるで、あと戻りをしてゐるやうな自分に氣附いたのであつた。

昨夜、今朝、いや、ほんの電車へ乘る間際まで、あれほど、はつきりと思ひ描いて居た情景は、あとかたもなく消えて居た。——彼女は間違つて居たのだ。——だが、空想の世界では、それはどんなに容易い事であつたらう。あの男を許す？そして、金だけとつて歸つて來る？その事が、名状し難い魅力をもつて、思ひ描かれさへしたではないか。——すぼめた傘と、夜の暗さとの中に、僅かに、わが身のみすぼらしさをかばひ乍ら、こころは重く沈んで行つた。

何處か、潜り戸の開く音がして、それに續いて、落付いた下駄の音がざくざくと露路にこもり乍ら近ついて來た。澄

江は、何故ともなく、もう少し傘を傾けた。その傘の、錐型にすぼまつた下から、ついと通りすがつて行く男の、雨除け外套の袂が、ちらりと掠めるのを見すまして、行き過ぎた。

何氣なく角を曲つて、つい、とりつきの丸ぼやを見上げると、思ひがけもないその家であつた。かたち許りの門構へに、塗りの部厚な標札も可厭味乍ら、「服部高助」と言ふ文字も、惡く凝つて眼に映つた。――ああ、やつつとめかつたわ、と言ふ安堵は少しもなかつた。

――惡黨になれ、惡黨になれ、あんな男の懷から、ほんの三十圓四十圓、それも態ざわざ自分の方から貸さうと言つて來たほどぢやないか。假令、氣弱い庸吉が、貰ひ損ねて歸つて來たとは言へ、あたしまで貰ひ損ねなくちやならないいはれがない。成り上りものの、放圖もない了見を矯めて遣るのだもの、――と、われとわがこころを唆しかけるのは、それとはまるでうらはらに沈んで行く氣持を、知り度くなかつたからであつた。

潜り戸の二三寸開いた隙間から、玄關の、腰高い格子が見えた。嵌め硝子の、雨に打たれるままに、涙のやうな雨滴の傳はつては流れるさままで、うちから洩れる灯光りに、はつきりと見えるのであつた。家庭、團欒、安佚、幸福、――それらの言葉が一塊りになつて、その、灯光りの洩れる格子の中から、彼女のからだへ流れて來るやうであつた。彼女は、まるで物乞ひのやうに、その灯光りの一かけらを拾ひに來たのだと言ふ氣がして、たとへやうもない不幸が、胸をしめつけるのであつた。

手をかけると音もなく齒車の上を轉つて、その、潜り戸と一緒に他愛もなく體がよろけた。ほんたうに、しつかりしなくちやあ可厭あよ、――と、澄江は、ひとりの自分にもの哀しくされ乍ら、そうつと、門の中へ這入つて行つた。

(十一)

「御免下さい、」

と、二聲許り訪ふと、その、自分の聲が、絹糸のやうに纖細な、爪尖の顫へるやうな慄れを帶して、もう一度浪江のところへ戻つて來た。そこで彼女は、ほうつと、一つ深い息を吸ひ込んだ。

奥からは、憚り氣な女の聲が、

「はい、只今、」

と、答へたきり、それさへ、空耳かと思はれるほど靜まつて起居のけはいも、感じられなかつた。

何の氣もない借家普請の味氣なさは言はずもがな、ささくれた疊の上に、八疊の貸し置器も稀茶けて、名許りの下駄箱に、遊び道具の木馬が立てかけてあるのまで、何とも言へずちんまりと取片附いて、貧しさは底に沈んで見え乍ら……。相場師と聞くからは、大して豐かな暮しとは思はなくとも、これは又、思ひがけないつましさであつた。――ふいに浪江のあたまを掠めたのは、彼女の二階へ訪れて來たあの男の、階段を下りて行く後姿であつた。もう、誰も、前に廻つて自分の顏を見るものはないと信じた安堵さが、その顏に現はれるよりもはつきりした表情になつて、首縮の、羽織も着ない肩つきに浮いて居るのではあるまいかと思はれる、あの、不確かな後姿の印象であつた。――

忍びやかに唐紙が開いて、さつきの聲のぬしであらう。古風な姫髮の、後れ毛さへ見せないのが却つて面窶れを感じさせて、素明しさうにこつちを見た。おくさんだな、――――と、咄嗟の間に、この、少しの用意もして居なかつた

在に對して、微かな敵意を感じながら、

「御主人は、おたくでいらしやいますでせうか?」

「ああ、」

と、牛のやうに柔和な瞳が、まともに澄江を見上げたが、直ぐ、遣り場もなく敷居の上を彷徨つて、「唯つた今、出掛けました許りですのに。――」

と言ふさへ半ば獨り言のやうに、うつろに響く聲であつた。では、今、あの、黒板塀のそばで擦れ違つた雨除け外套がさうだつたのか、――と思つたが、引返して逢うと言ふ氣はさらに、遣り過して了つた事にも、微かな悔いさへ浮んで來なかつた。もう、すつかり濟んで了つたのだ、と云ふ氣がして、ふつと、嬉しくさへなつたのだ。

と、眼に映るほどのもの、――何よりも先づこの、時代めいたつつましい妻女の、ぼうつとど、こかとぼけたもの腰が、痛ましく心を惹いた。――では、あの男は何者であらう、妾にしやうの、金を呉れやうのと言つたのは、あの男だつたらうか。――さうなのだ、あの男は羨しかつたのだ。恐らく、走り使ひの小倅から律氣に叩き上げて、やつと人並になれた許りであらうあの男は、誰か、朋輩――と言ふのか、仲間の、工面の好い連中の眞似が、一寸許りして見たかつたのだ。けれども、あの男にはこんな家がある。自分のうちの、名許りの下駄箱に立てかけてある遊び道具の木馬の事を、忘れては了へなかつたのだ。――

「何か、お伺ひ申しておいて……」

「いいえ、――つい、一寸通りかゝりにお伺ひしたのですから、」

とは言つたものの、この吹き降りに、何のもの好きで、青山くんだりまで出掛けて來る事があらう。澄江は、自分

自身にさへ何しに來たのか知らないのだ。今はただ、この女の眼から後姿を見られる事なしに、格子の外へ出たかつた。——

その時、火のついたやうな赤ん坊の泣き聲が、唐紙の中から母を呼んだ。心許なげに振り返つて

「一寸御めんくださいまし。子供が惡うムいますので……、ほんとうに、どうぞお上りなすつて、」

と言ひ捨ててあたふたと、うす汚れた手拭浴衣に、細い二つの足がおどろに縺れて、中へ消へた。——あの足ー

澄江は、その足がものを言ふのを、はつきり聞いた。子供が病氣なのだ。——

逃げるやうに、身をかはして外へ出ると、その爪先きの水溜りに、ちろ／＼と迷ふ灯光りさへ、今は、あの女のしばたいて居る瞳のやうに涙ぐましく、子供の泣き聲に連れて、いつかこれも泣き出しさうな、女の、

「あいよ、あいよ、」

と言ふ聲が、何時迄も追つ掛けて來た。

（十二）

不如意と云ふ、これさへどこか他人ごとらしく、おどけて聽かれたと言ふのも、ほんの僅かの間であつた。澄江と周吉との、文字通りな侘び住居に、貧だけの持つ埃つぽい憂欝と救ひ難い退屈とが遣つて來た。

二人の眼に、二人の姿が、あの、雨洒しの案山子のやうに馬鹿げて見え初めた。

——それは、幾度繰り返された事か解らないのだ。だから、澄江はよく知つて居た。——それだのに、彼女は、まるで口癖のやうに言ひ出すのであつた。

「あたし、あそこへ行つて見ようか知ら？」

と、不確かな呟くやうなわれとわが聲に、はつとなつた。けれども遅かつた。脩吉の、濃い眉が微かに動いたと見ると、

「何處だね？」

と、淺黒い、けれども女のやうに肌理の細かい頰へかけて、眼にも留まらない速さで、鋭い輕蔑が走るのを、――と見る間に、それが、切れの長い唇の間に消えて、中から眞つ白い齒のにつと笑ふのを、見逃しはしなかつた。……あゝ、そこと言ふのはどんなところの事か、脩吉はよく知つて居るのだ。知つて居て、そして、そんなところへ行かうと言ふ澄江を輕蔑して居るのだつたら、彼女は、どんなにでも我慢が出來たらうに、決してさうではないのだ。ほい、また初まつたぞ！一體、何時になつたらほんとうに行く氣なのかね？それよりも一體、お前のために、何でも好い、金を見ようと言ふ人間が、ほんとうに居るのかね？馬鹿な！何時だつて、いよ〳〵といふ眞際に金になつたためしなんぞありはしないじやあないか！――と言つて居るのだつた。

見てるが好いわ！――と、澄江は、底は靜かに澄んだまゝ、ほんのこゝろの上層を掠めて行く敵意の中に、われとわが身を投じ乍ら、じつと、高窓の障子を見詰めて居ると、その細い棧がぼうつと霞んで、二本三本、こはれた寒暖計の水銀棒の様に、つゝと相より相亂れて、又ぼうつと霞んだ。思ひ設けない涙が、眼がしらに滲んだのであつた。――その、涙を知らないかのやうに、けれども、彼女のこゝろは極端に乾き上つた。そして、ほんとうに逆上せあがつて了ふつい手前まで來ると、彼女の自嘲的錯覺が、赤い着物を着て現れた。彼女は殆んど夢見るやうな放心をもつて、この事を思ひ描くのであつた。

――行かう、横濱へ行かう。どこかの宿へとまつて電話を掛けよう。兄さんは、きつと、あたふたし乍ら遣つて來

る。それから？……それから？……構ふ事はありやしない、誰でもが遣る事だのに、私にだけそれが出來ないと言ふ筈がない。生きたからだだと思ふから、生じつか、こんな男に未練があるから、それで出來ないのじやあないか。眼をつむつて、眼をつむつて、ほんとうに、どんなに澤山の女があんな爺さんと寢た事だらう。――けれどもそのとき、あの、公園の繁みから洩れたあまりにも明る過ぎるアーク燈の光りが、澄江のあたまを掠めた。彼女は、あのとき何にも見はしなかつたのだ。ただ、濕つぽい感觸が脣を通り過ぎただけなのだ。――如何してそれを後悔する事があらう。こんな男の前に恥ぢる事があらう。………行かう、行かう。そして、この、貧乏と恥と、言ひ甲斐もない男の輕蔑とからさよならをしよう。――

幾度となく、閃いては消えて行くこの考への周圍を彷徨し乍ら、けれども、彼女のこゝろに浮んで來るのは、嫉妬の赤い血にまみれてのた打ち廻る庸吉の姿より、余りにも現實的な自分自身のみにくさであつた。

或ときは、女事務員の口さがしに出かけた事もあつたけれども、愈々明日からと決まると、毎日、同じ時刻に出て行かうと言ふ事の、又となく懶く、その日その日が、陰影もなく、余りにも平たく夢のないまゝに消えて行きさうな氣がして、堪らなく淋しかつた。

もう一遍、夢の中へ戻りたい、――と、案山子のやうに動かないでつつ立つて居る庸吉の肩さきを、泣きながらゆすぶつて居るひまに、――露路向ひに居列ぶほどの店々から、ちよいとあとで、と言ひ捨てては借りて來た品ものゝ五錢十錢づつが、今は、小さい幽靈の手を連ねて群がつて來るやうに思へ、通りすがりに、茶めし屋の女房の顏を見るさへ氣ぶつせいなら、味噌醬油のとき借りまで、逃れる事の出來ない責苦のやうに思はれた。

氣さくな男あるじなればこそ、二つ三つ溜つた間代の催促もしないけれども、晝間、ひとりで遊んで居る小さい娘の、

このごろは、思ひなしか甘へ寄ることもなく、疑ひ深く二三寸明いたもの影から、そうつと偸み見られて居るやうに身が引けて、階段の上り下りさへ憚られた。

——替ふべき衣もないまゝに、秋立つけはひも身にしみ乍ら、けれども澄江は、じりじり、じりじりと、われとわが身を焼くやうに、怠けものだけが知る、とろけるやうな無爲の湯槽から脱ける事なしに、その、言ひやうもない貧しさをさへ享樂した。

（十三）

「あたしこのお金で一寸行つて來てよ。ね？決して止めたりなんぞ、しつこなしよ。」

五十錢だまを三つ、疊の上に轉がして弄んで居た澄江が、ふと、顏を擧げて言つた。と、直ぐ薄い唇を、つん、と仇つぽく歪めて、——今のは嘘よ。あたし、余りはしやいじやつて、つい、あんな馬鹿な事を言つたのよ。馬鹿な、ねえ？止めやしないに決つてるわねえ？——とでも言ふやうに、おべつかを言ふ子供のやうな、極り惡げな微笑を浮べた。

——今しがた、下岡窩しの賃金に貰つて來た許りの、余りにも玩具めかしい美しさが、灯の下で燦めき燦めき、細い細い鎖になつて纏ひ乍ら、もう、幾日か、その手觸りをさへ忘れて居た、澄江のこゝろを浮き立たせたのだ。——

「何處へ行くんだい？」

「横濱！あの、——唐物屋の爺さんとこさ、」

と口許り、呆て気な無作法さにも拘らず、相手の顏も見られなかつた。

庸吉は、おまのじやくな、ふうんと言ふ顔つきを隠さうともしないで、

「誰が止めるものか、――その代り、ただ舐められて歸つてくるだけぢやあ、何だぜ……その金だつて、今のところかけ替へのない資本だからな、」

言葉ほどにも毒のない調子乍ら、澄江は酷く傷けられて、

「好いことよ、お金が出來ない位なら、それこそ……」

と言ひかけたが、あとが續けられなかつた。今なら、行ける。――澄江は、自分のこころに話しかけた。そして、ついと立つて、暗い出窓の、窓枠に吊してある細長い立て鏡の面を、そうつと覗いた。

――と、直ぐ前の平家の、眞つ黒な瓦屋根の上から、ほのぼのと流れて來る街の微光か月明りか、その、あるかないかの照り返しに、澄江の、びいどろ人形のやうに蒼ざめた顔が、ぼんやりと照し出された。機械的に、無關心に、彼女の白い指先が、眉を引き、白粉を掃き、かぐはしい香氣を漂はせ乍ら、蒼ざめた肌をすべるごとに、不可思議な脂粉の魔術は彼女の體中を包み、賣られて行く美女のそれのやうな錯覺は彼女のこころを徐ひ、その、眉も眼も、唇も、微かな笑ひを含んで、ゆらゆらと、鏡の中からぬけ出て來るやうに見えた。――

「おい、――」

庸吉が呼んだ。

振り返りもせず、甘い放心のままに鏡の中の自分の顔に笑ひかけ乍ら、

「なに？」

「ほんたうに行くのか、」

「え〻、ほんたうよ。」

「さうか、——ぢやあ俺も電車まで行かうか、」

「どうぞ、」

はじめて、鏡の中の眼をそのまゝ、ちらりと庸吉を見た。その、とり澄ました調子をさへ氣附かなかつたかのやうに。

二人は、列んで歩き出した。

——こんな事は幾度もあつたわ、ずつとせんから、もう幾度となく——あたしは、この男をちつとも愛しては居なかつたんだわ。——それとも、愛して居たのか知ら？——だが、何と言ふ事だらう、これつきり、變な事になつて了ふのかも知れないのに、あたしは、ちつとも、悲しくも情けなくもないなんて、何だか斯う、變にそは〳〵しちやつて、——この男ともお別れになるのかも知れないのに、——お別れになる？そんな事はないかしら？——こんなに、あたしの直ぐ側を歩いて居るのに、あたしには、何だか、つい、あの露路から道連れになつた通りすがりの男のやうな氣がする。——

——「誰が止めるものか、その代り何だぜ……」何て言つたのか知ら？——さうだわ、「……かけ替へのない資本だからな、」つて言つたのだわ。——

「あたし、お金を、少し置いて行くわ、」

澄江は、ふと立留つて言つた。

「如何してだい？——それだけでもせい〳〵電車賃くらゐきやあ、ありあしないよ。

「だけど、あとは何にもいらないから、」

「俺の方もいらないよ。」

澄江は沈默つて歩き出した。丁度、水の中を歩いて居るやうな、霧を含んだ夜の空氣のうそ寒さが、澄江のこころを掠めた。

遠くから、電車の前灯が、線路の上を瞬き瞬き、辷つて來た。足もとを掬はれるやうな空しさ、得體の知れない焦燥が、その瞬きと一緒に近づいて來る、――澄江は、身をかはして、まだ止まり切らない電車に乘つた。

「あゝそれから……」

と、追ひ縋つて來る男の言葉を、うしろに聽いて、はつと振り返つた。と、あの、見馴れた庸吉の顏が、一瞬間、マスクのやうに浮き上つて、動かないやうに見えた。――ふいに、刺すやうな悲しみに驅られて、澄江は、車台から男の方へ、そうつと體を寄せた。そして、愛をこめて、なに？なに？と訊き返すやうに、悲しい笑ひを浮かべて、男の顏を見た。その時、庸吉の唇を眼にも止らない速さで、あの、狡猾なうす笑ひが掠めたと見ると、低い、けれどもはつきりした聲で、

「あの……あの……何だつたら、もし巧く行きさうだつたら、出來るだけ××××××やうにして歸つて來いよ。ね？解つた？解つた？」

と、囁いた。

ああ！――と澄江は、その男の顏を見まいとするやうに、眼を閉ぢた。――解つた！解つた！解らないで如何しよう。ばいだと言ふのは、この私ではなくつてお前の事なのだ！――それは、もし、巧く行きさうでなかつたら、×××××構はないと言ふ事なの？――誰がひと！さよなら、さよなら、ほんたうに、あの爺さんの情人になつて遣るから見てるが好い！なつて遣るとも！――

電車が動き出した。泣き濡れた澄江の眼に、街の灯が飛んだ。光りと影とが、ゆらめきくづおれて、まつしぐらに、彼女の窓に吸はれるやうに見えた。(完)

——一九二四、一〇、一一——



舊友

廣津和郞

『此處だな。――よし、此處で止めて貰はう』

賑かな大通から折れた横丁、と云つても、これも人道と車道とが別れてゐて、街路樹などが植つてゐる程度の相當な道路だが、その道路の兩側に並んでゐる澤山の事務所を、一々車上から物色してゐた小野寺修造は、『松崎法律事務所』と云ふ看板を見つけ出すと、俥夫にかう命じた。

俥から下りた彼は、ドアの右手のベルを押しながら、『やれやれ』と云ふやうな氣持と、へんな不安――いや、一種センチメンタルな胸騷ぎとを感じた。

三日前の晩だつた。小野寺は店の相談會があつて、いつもよりも歸りが少し遲れたが、靑山行きの電車の中に腰かけてゐると、彼と丁度筋向ひに腰かけてゐた中年の、肥つた、赭ら顏の、身長も十分に高い立派な體格の洋服を着た男の顏が、自分に向つてにこにこ笑ひ出したのを見た。

『やあ』

『やあ』

釣り込まれて、小野寺もさう云つてから、しげしげと相手の顏を見ると、その大男の少年時代の顏が、やつと思ひ出されて來た。

『小野寺君ぢやない？』

『君は松崎君？』

そこで二人の男は、改めて帽子を脫つて、輕く頭を下げ合つた。――帽子を脫つた時、松崎の頭がすつかり薄くたつて、その薄い髮の毛が、頭の眞中で、よぢれたやうに波を打ちながら、兩方に丁寧に分けられてゐるのを小野寺は見た。さういふ彼も、髮に白いものがぽつぽつ見え始めたのを、毎朝氣にしてゐるのだが。

小野寺の隣りに空席が出來ると、松崎は立上つて、彼の側に來て腰をかけた。隣りに並んで見ると、自分の瘦せた色の青い、病身と較べて、精力の溢れてゐるやうな松崎の身體が、小野寺には何となく壓迫的に感ぜられた。

『ほんたうに久しぶりだね。――もう何年になるかな。二十年……いや、もつとになるかな』

松崎の聲は腹の底から出るやうに、重みがあつて、力強かつた。

『さう、二十年には十分なるね。――A中學を出てから、お互にもう二十五年目だからな』

『さうだ』と松崎は丸くぶつくりと肥えて毛が生えてゐる指を折つて見て、『ほんたうに二十五年だ。――實際驚くな』

『併し君の名前は、よくいろいろな事件の時、新聞で見て、なかなか御盛んだと思つて、始終喜んでゐるよ』と小野寺は

松崎が最近△△擴張十台の牛耳を取り、何か社會の耳目を聳動させるやうな大事件には、必ず其の名の出るのを思ひ出し

ながら云つた。中學時分から、熱烈な調子で演說の稽古などをやつてゐたが、かうして二十五年も經つた今日になつて見ると、なるほど、重味もあるし、見るから信頼出來る辯護士、と云つた人がらに出來上つてゐた。

「なあに、駄目だよ。……時に君は今？」

「僕はつまらん會社をやつてゐるんだよ。△△ビルの六階でね……」

「ああ、さうさう、僕はそれは聞いてゐたよ。誰にだつたか忘れたが、何でもその事は噂で聞いてゐたよ」

A中學を出てから、小野寺は高等商業に行き、松崎は法科大學に行つた。そして小野寺は高商を卒業する頃までは時々同窓會などに行つて、級友達と顔を合せたが、その後彼はさういふ會合に行かなくなつてしまつた。別に大した理由があつたわけではない。學校を出ると彼は△△會社に入り、大連詰となつたので、それがきつかけで、その後東京に歸つて來てからも、昔のさうした會合に出かけるのが臆劫になつてしまつたのである。――だが、二人は少年時代の學校友達のみが持つてゐるあの腹の底からの親しみを、互の胸に感じ始めてゐた。所謂世の中に出てから會つた人間には、なかなか持てないあの親しみ、それを二十年ぶりで會つた二人が、直ぐに感じ始めたのである。

同じ東京の中學を出てゐても、二十年、二十五年の間には、同窓の連中が、この雜然とした社會の何處に消えて行つてしまつたものか、みんな消えて行つてしまつた事、誰々が死んだ事、誰々が博士になつた事、誰々が外國で商館を開いてゐる事……さうした月並な、平生は考へても見ないやうな事が、二人の間に語られ、噂されて行くにつれて、二人は少年時代のさうした人間達や、自分達の姿が眼前に浮んで來るやうな氣がした。

「隨分昔の話だな」

「ああ、隨分昔の話だ」

二人はにこにこ笑ひ、にこにこ語つた。

その時、小野寺の心の中に、急に次のやうな考が浮んで來た。

『結局、この男に話し、この男に頼む事にしようか』

彼はもう二三年前から、さうした信頼出來る人間を探してゐた。彼には兄弟も姉妹もなかつた。親戚があるにはあつたが、親戚の前に、さらけ出せるやうな問題ではなかつた。中年からの友人はあるにはあつたが、それは商賣上の友人とか、趣味の上の友人とかで、互に私生活の上に交渉し得るやうな友達ではなかつた。隨分親しい間柄になつてゐても、中年からの友人には何處かに功利がある。そして又此方からの見得もある。弱みをうつかり見せられないやうな警戒が此方の心にも向うの心にもある。そこへ行くと、――中學時分　少年時分の友人の前では、たとひどんなに時が經つてゐても、互の少年時代の姿が互の胸の中にある。泣いて見せても決して輕蔑しないで、腹の底から聞いて吳れさうな幼な心がある。

『おまけに松崎は辯護士だ。――この男に頼むといふ事は、さういふ意味でも、一番都合が好いだらう』

そこで小野寺は云つた。

『君に御願ひしたい事があるんだがね。折入つて一つ御願ひしたい事があるんだがね。――いつか一度お訪ねしたいと思ふが、どうだらう』

『いつでも、どうか。午前九時から夕方までは大概京橋の事務所の方にゐるよ。――前に一度電話をかけてくれると都合がいい』

小野寺は松崎の名刺をポケツトに入れて、そして青山五丁目まで來ると、そこで友と別れて、電車を降りた。

彼はその時の約束の訪問に、今日松崎の事務所の前に立つたわけである。

△

飾りも何もない小さな應接室だつた。唯ひとつ壁に小さな西洋畫がかかつてゐるのと、圓卓に向つて、椅子が置いてあるのと、その外には何もなかつた。それでも小野寺は、あの地震後に、直ぐこれだけの事務所を此處に開くのは、大變な事だらう、などと考へた。地震後受けた自分の打撃が思ひ出されて、そんな風に考が走つて行つたのである。

『先生は一寸來客中ですが、直ぐおいでになります』

紺飛白に袴を穿いた厭味のない書生が、茶を持つて來て、活潑にかう云つて、直ぐ引つ込んで行つた。

小野寺は部屋の中を見まはしてゐた。南に向つて窓が開いてゐる。その窓の向うに、バラツク建の幾つもの事務所の屋根だの、並木だの、青い空だのが見える。この邊は並木も何もみんな遠火に焼けてしまつたのだが、焼けて枯れ切つたやうに見える梢に、ところどころ青黄ろい葉が、風にでも何處からか飛ばされて來て、引つかかりでもしたやうに、ぽつりぽつりと喰つ付いてゐるのが、そんな風な自然現象についぞ心を配つた事のない小野寺の眼を惹きつけた。めづらしく彼は、そのこびりついてゐる幾枚かの青黄ろい葉を不思議さうに眺めてゐた。あの焼けて枯れ切つた樹木の中に少しでも殘つてゐた生の名殘が、かうして芽をふくと云ふ事が、彼の心に或淋しさを誘つた。さう云へば、その並木の梢の網目の背景の青い空――春らしく潤みを帶びた碧色にやはらかに光つてゐる午後の空も、彼の心を惹きつけた。

小野寺は輕く溜息をした。枯枝のまばらな木の葉や、靜かな青い空から受ける淋しさが、近頃の彼の心の淋しさに、だんだん溶け込んで行つた。――彼は此二三年前から、身の衰へを感じて來た。そして震災後は、特にその感じが深く

なつたやうな氣がした。彼が自分の胸部に申分のあるのに氣がついたのは、この三年ばかり前からであつた。ただ一般から云へば、働き盛りの年だのに、總ての根氣と健康とが、その頃から一時になくなつて來たやうな氣がした。

『やあ、失敬。』さう太い、重味のある聲で云ひながら、松崎が健康さうな、精力の漲つた身體をはこんで來た。『いや、どうも厄介なものなんだよ。性質としては非常に簡單な問題なんだが、親屬間の爭ひといふものはどうもいかんね。互に猛り立つて權利を主張してゐるのが醜くつてね。――今も眼を泣き腫らしてゐるんだからね、そして聞いてゐると、女といふものは、困つたもんだ。事件と何の關係もない相手の秘密などを、口惜し紛れに喋つてね。あつははは』

松崎は今事務室の方に來てゐた客のことだらう、こんな事を云つて、

『やあ、どうも失敬。お待たせしました』と改めて挨拶した。

『やあ』と小野寺も挨拶を返した。『非常に忙がしいところを……』

『いや、今の女はもう歸つて行つたんだよ。だから、もう暇なんだ。まあ、話して行き給へ』

『さうもしてゐられないんだが、唯君に、一寸お願ひして置かうと思つてね』と小野寺はさも何でもない事なのだと云ふ事を、相手にも自分自身にも感じさせようとするやうに、時計などを態と出して、一寸のぞいたりして、こんな風に云ひ出したが、胸がときめいて、妙に尻込みするやうな氣持が、後から追つかけて來るやうな氣がしてならなかつた。

『フン、なるほど』

醫者と辯護士とに共通な、あの相手に十分信頼の念を起させようとするやうな思案深い顏になつて、松崎は少し前にこごみ加減になり、耳をすましながら、合點いて見せた。

『いや、實際改まると云ひにくい事なんだがね。僕は隨分前から、この相談をするべき人物を探してゐたんだがね、そ

つぱり見當らないんだよ。中年からの友人と云ふものには、自分の秘密は一寸話せないものだからね』

『それやさうだ』

辯護士はいかにもと云つたやうに再び合點いた。

『それでいろいろ迷つてゐたところ、先日突然電車の中で君に會つたのでね。これはやつぱり君にお願ひするのが一番いいと云ふ氣がして來たんだよ。どうしても昔の友人といふものは、自分の心持を一番理解して貰へるやうな氣がするからね。――どんな事でも親身になつて聞いてくれると云ふ氣がするからね。そこでお願ひといふのは外でもないんだが、僕は、非常に健康が惡いんだよ。この二三年前から特にそれに氣がついだんだが、此處が』胸を指して、『大分惡いんだよ。醫者に云はせると、それは大分前の古傷ださうで、多分もう六七年にはなつてゐると云ふんだがね。尤も進行性のものではないさうだから、急に危險が來るやうな事は決してない、とかう醫者は云ふんだがね。――震災後、特に又身體が衰へて來たやうな氣がするんだ。何しろ、あの震災後の激動だからね。あの時は世の中全體お互の事ではあるんだが、會社の方もかなり打撃を受けたし、僕も合名會社の代表者なんで、その影響をかなり蒙つたやうなわけなんで、隨分心身の疲勞もあるのが當然だから、それに無理はないと思ふんだが、何しろ、近頃は特に身心が衰弱して來たやうな氣がして……』

『フム、フム……』

松崎は口を結んで、鼻でしんみりと合槌を打つた。

『それで君にお願ひと云ふのは、非常に云ひにくい話なんだが』と小野寺は恥しさうに相手の顏をちらりと見て、それから眼を伏せて、暫く默り込んでしまつたが、やがて思ひ切つたと云つたやうに切り出した。『一口に云と、遺言狀を

作つて置きたいんだよ、いつどうなるか解らないと云ふ氣がするものだからね……』

『なるほど……』

辯護士はゆつたりとした態度で合點いた。

『その遺言狀といふのも、君等の方から云つたら、甚だ簡單なものかも知れないが、僕として見ると、なかなか家庭が複雜してゐるんだ。――これも自分の恥をさらけ出すやうなものだが、併しすつかり君に話さないと解らない事だし、それでお話しするが、君、僕は若い時に不幸な結婚をしてね……』

『………』

『いや、不幸な結婚と云つては、責任のがれの感じがあつていけないが、僕は非常に自分と氣の合はない女と結婚してしまつたんだよ。その女は良人に死に別れて、僕と同い年だつたが、君、女の同い年といふものは、男と違つてまるで老けてゐるからね。無論正當な、世間的な結婚ではなく、一口に云ふと、若氣の至りで、その女と關係してしまつたわけなんだ。それで、自分の弱さから、その後その女と結婚してしまつて、子供まで出來たが、どうしても、僕はその女に愛が持てない。愛が持てないばかりでなく、僕はその女と一緒に住んでゐる氣になれない。今此處でその女の棚おろしをする必要もないが、僕のやうな人間には、總て强過ぎて、どうしても性に合はないんだ。それで離緣したいと思つたが、どうしても諾かないので、僕はたうとう別居する事になつたんだよ。――僕が大連から歸つて來てから二年後だつたから、別居してから、もう十二年以上になる。それで、二人の間にはたつた一人の子供があるが、その子供はその女の方に行つてゐるんだよ。もつとも、今では始終僕の方にもやつて來るがね。君の前だけれども、子供になかなか上出來なんだ。――今は中學の三年生だが、君、ずつと優等を通してゐるんだからね。』

『なるほど……』
辯護士は何か感じ入つたやうに、力をこめてうなづいた。
『併し僕にはその女はどうしても未だに愛する氣にならない。……ところで、僕は他の女と同棲してゐるんだよ。別居すると間もなく同棲し始めたんだよ。僕は今同棲してゐる女を自分の妻と呼んでゐるんだ。いや、實際妻の氣がしてゐるんだよ。その女の外に妻はない氣がしてゐるんだ。……こんな立入つた話になつて恥しいわけだが』
『いや、世間によくあることだよ。それで……』
『うん、それで、僕は前にも云つた通り、自分が近頃益々衰へて來るといふ氣がしてゐるので、いつ自分が死なないとは限らない。自分が死んでしまつたら、僕の愛してゐる、僕の妻だとほんたうに思ひ込んでゐる女が、法律上僕と何の關係もない事になつてしまふ。その女の手には何も殘らない事になつてしまふ。それでは氣の毒だし、僕にしても心殘りの事なんだが……』
さう云ひかけて、小野寺はもじもじしながら言葉を切つた。
辯護士は相手の云ひにくさうな言葉をその職掌柄の敏捷さで直ぐ引取つて云つた。
『うん、解つた、それで君は遺產の事について、遺言狀を作製して置きたいと云ふんだね、そして後日間違ひないやうにそれを僕に托して置きたいと……?』
『つまりさうなんだ』
『よく解つた。――いや、そんな事ならわけはないよ。僕が引受けた』と松崎は大きく一つ合點いて、前こごみになつてゐた身體を起した。『世の中にいくらもある事だよ』

『遺産と云つても、大した事はないんだが、地震後すつかりやられてしまつたので……地所、家屋のやうな不動産ばかりなんだよ。——それを僕は子供と今同棲してゐる女ととに眞つ二つに分けたいんだ……』

『よし、それはさういふやうに、君が書いて僕に渡してくれればいい。——何でもない、わけのない話だよ』

『どうもありがたう』

小野寺は重荷の下りたやうな顔をして、輕く脊友の前に頭を下げた。——實際、案じてゐたよりも、譯もない話だつたのだ。簡單な話だつたのだ。他の人間に話す事の出來ない事なので案じてゐたが、そして又自分一人でそれを自分の手文庫の中に收めて置いたんでは、後日、あの人の好い彼の同棲者が、彼の別居してゐる氣の强い女のために、どういふ風に誤魔化されてしまふか解らないので案じてゐたのだが、實際こんな風になつて見ると、何をそんな事に心配してゐたのかと思ふ程、簡單な問題だつたのだ。『あの地所、家屋……それは捨賣りにしたつて、三萬圓にはなる。時價はもつと高いのだが、今不景氣だから安いとしても、併し三萬圓にはなる。三萬圓の半分は一萬五千圓だ。一萬五千圓あれば、子供は大學を卒業出來る。大學を卒業さへすれば、後はどうにかなつて行くだらう。それから後の一萬五千圓で、あの女は何とか生活の道を立てて行くだらう』彼は腹の中で、そんな事を考へてゐた。彼よりも十四年下の同棲者は、未だ二十九才だつた。二十九才で、それだけの金があれば何とか身の振り方はつけられるだらう——彼は彼女が他の男と結婚する事などを考へた。それもいいと云ふ氣がした。何か自分の任務がすつかり果されたやうな氣がした。嫉妬の感じが起るよりは、肩の輕くなる感じの方が强かつた。

彼はこの事務室に最初這入つて來た時とは違つて、今はすつかり明るい氣持になつた。

『全くこれで安心したよ。ほんとうに有難い。だが、考へて見ると、年を取つたものだね、我ながら。——君達と一緒

にあの丸い學生帽をかぶつて、中學校の運動場で駈けずりまはつてゐたのは、ついこの間のやうに眼に浮んで來るがね。それが今や遺言狀について語らうといふんだからな。はははゝゝゝ』

『うん……』と松崎がそれに答へるでもなく、何か彼自身の考を追つてでもゐるやうな聲で答へた。『だが、人といふものは、いろいろな事があるもんだねえ』

　それがへんに沈んだ調子だつたので、小野寺は自分の事をばかり考へてゐた氣持から、急に覺めて、友の顏を見た。すると、意外にも辯護士は、あの精力の溢れた顏をすつかり曇らせて、打沈んでゐた。

『……？』小野寺は吃驚して眼を瞠つた。

『併し、ほんたうに誰の身の上にでもいろんな事があるもんだよ』と松崎は同じ意味の事を、から繰返して、『自分の心の底にこびりついてゐる心配と云ふものは、誰でもあるものだよ。僕はこんなに肥つてゐるだらう。君なんかが考へたら、僕の身體が非常に健全だと思ふだらう。ところが、これが君、非常によくないんだよ』

『いや、君はそんな事はあるまい……』

『ところが、さうでないんだよ。ほんたうの見かけ倒しだよ』洋服の胴衣の上から胃を押して見せて、『僕は胃がとても弱なしなんだ。それから、これで動脈硬化がかなり烈しいんだよ。酒のためなんだ、みんな。——君なんかの病氣はじりじりと來るから、何とか云つても、前から『死』の準備が出來るが、僕などはポキリと來るからね。ポキリと一遍に來たら、それきりだからね。僕のところには、腦溢血の遺傳があるんだ。つまりアルコホリズムなんだね、先祖代代。みんな五十前にやられてゐるんだよ。それで醫者も、僕の動脈硬化を心配してくれるんでね、近頃は酒をなるたけ節してゐるが、併し酒と云ふ奴は、いきなり止めるのも却つて毒になるさうだから、仕方がなしに、チビリチビリやつ

てゐるが、君、これで僕の身體は、自分ながら薄氷の上を渡つて歩いてゐるやうなものだよ』

『さうとは見えないがなあ……』

『いや、さうなんだよ。腦溢血には夏蜜柑が好いと云ふので、毎朝あれを一つづつ食べる事にしてゐるが、いや、どうも酸つぱいので、實に閉口さ。あつははは』

松崎はかう云つて、大聲を揚げて笑つたが、直ぐに眞顔になつて、

『さつきは君の話を身につまされて聞いたが、併し君は子供が非常に優良ださうで、それは何よりだよ』

『うん、まあ、子供はなかなか出來が好いんで、その點は随分仕合と思つてゐるんだがね。長い間自分の側に置いてないが、併し子供の事になると、妙に鼻をうごめかして得意になりたくなるのは、親莫迦と云ふ奴かも知らんが……』

『いやいや、そいつが一番好い事だよ。僕は先刻それを聞いてゐて、實は内心非常に羨しかつたわけなんだ。と云ふのは、僕にも娘が一人あるんだがね、これがなかなか困りものなんでね。君のの優良に引換へて、これは君、不良なんだ。どうも困つたものなんだ』

『……』

松崎の太い、底力のある聲が、力を落して、拗ね返つたやうに發音されると、喉にかすれて、破嗄れたやうな、却つて忙しい響に聞えた。

『君だから云ふがね、どうもはねつかへりでね。いや、はねつかへりだけなら好いが、十五六から男との關係などの出來たやうな娘でね。― 實際、親の身になつて見てくれ給へ。わが子乍ら手のつけようがないんだよ。實際、自分のやつてゐる職業の方の事だといろいろな事件にどんどん段階もつけられるが、自分の子となると、どうも仕方がないもん

だからね。これも實際、君の云ふ親莫迦に違ひはないが……』

『……』

今度は小野寺の方が、前こごみになつて、耳をすまして、しんみりした調子で、時々同情したやうにうなづいて見せる聞き手となつた。

『母親に早く死なれたので、僕の手一つで育てたわけなんだが、さう子供の教育ばかりにもかかつてゐられなかつたものだからね。随分放任的な形にはなつてゐた。それに甘やかしもした。――併し何しろ弱つたものなんだよ。それを考へると、實際何も彼もどうにでもなれと云ふ氣になるからね。――おまけに今も云つた通り、僕の身體も、見かけ倒しなんだ。――早く聟をと思つて、君、法學士の男を養子にしたんだが、結局娘が我儘者なので、その男が出て行つてしまつたんだよ。――未だ十八なんだがね、どうなる事かと思つて、そいつが始終僕を惱ましてゐるんだが、自分が病氣になつたり、うつかりポキリと行つたりしたら、と思ふと、ほんたうに暗然とした氣になるよ』

『……』

二人は暫く默つてゐた。が、やがて松崎は、顏を上げて、

『いや、ついこんな愚痴を君に打明けてしまつたが、僕もかう云ふ事と云ふものは、中年以後から出來た友人には話せなかつたんだよ。君の云ふ通り、うつかりと他人に弱味は見せられないからね。この世の中では。弟が一人ゐるが、こいつが又ろくでなしでね、相談相手にもならないんだ。だから、僕に若しかの事があつたら、後見人と云ふやうなものになつて呉れるものが、一人もないんだよ』又一寸默つて、うつむいて、卓子のはじを指の先でこすつたりしてゐたが、少し恥しさうな微笑を浮べて、眞面目とも冗談ともつかず、『かういふ種類の交換と云ふ奴は、をかしなものだ

が、君と一つ互の依頼の交換とでも云つたやうなものをやるかね。――まあ君が先に死んだら、僕が君の遺言通りに、君の家庭の跡始末をし、僕が先に死んだら、君が僕の娘の後見をしてくれると云つたやうな……あゝはゝゝ』

肥つた辯護士は突然大きな聲で、てれ隱しのやうに笑ひ出した。小野寺もそれにつり込まれて、淋しく頰笑みかけたが、何だか自分の前にゐる、肉體的にも精神的にも自分に威壓を加へるやうな氣のしてゐたこの大男が、急に痩せて、干乾びて、小さく輕くなつてしまつたやうな哀感を、彼は感じないではゐられなかつた。

二人の男は中年者のセンチメンタルな顔付、忙しさをひしひしと感じてゐるやうな暗い顔付をして、互に眼をそらし、思ひ思ひに考に沈みながら、めいめい眼の前の空間を暫くの間じつと見つめてゐた。窓の外のぼつりぼつりと疎らな葉が獅嚙みついてゐる枯並木の枯枝の網目の向うの青い潤んだ空が、それを見つめてゐる小野寺の眼にはへんに眩しかつた。相手の顔を見るのが氣の毒なやうな、そして相手から顔を見られるのが面映いやうな、さう云つた氣持を二人は互に感じてゐた。

併し間もなく松崎が、ポツケツトから金時計を出して見て、調子を變へた元氣な聲で云つた。

『少し未だ時間が早いが、何處かに一つ飯でも食ひに行かうかね。久しぶりでの會合だから』

『さうもしてゐられないんだよ、今日は。僕はもう一度會社の方に行かなければならない用があるもんだからね』

それ程差迫つたと云ふ程でもないが、併しかなり急ぐ必要のある用があることを、小野寺は考へてゐた。

『だが、まあ好いぢやないか。ほんたうに久しぶりなんだから』

『うん』と答へたが、小野寺は舊友の言葉の調子に、哀願のやうな淋しみのあるのを感じたので、『これぢや會社の方は一つ電話で用事をすますことにして、何處かにお伴することにするかな』と云はないわけに行かなかつた。

このまま振切つて歸るのは氣の毒過ぎる――彼はそんな氣がしてゐた。今や自分の方がこの辯護士を慰めてやらなければならない立場に立つてしまつた――つまりさう感じてゐたのである。（終）



寂しければ

—第三話—

久保田万太郎

……豐島屋さんは呉服屋さんです。廣小路の角の、またの名をヤマ喜といふ聞えた呉服屋の旦那です。——ですからつねは、「しがらき」へ來るのでも、無地の羽織に前かけの、いたつて野暮つたい風をしてゐましたが、ときによると、これはと驚くやうな、とても堅氣と思へないやうな、意氣な、とてつもない拵へをしてゐることがありました。——上へ引つ張るものでも、したがつて、あたりまへの外套を着てゐることもあれば、袖のついたのを着てゐることもあり、ことによると、もじりのやうな恰好のやつを着込んでゐることさへありました。——さういふときに、うつかり、ぶつかつた分には、どういふ筋合のお客か、はじめて逢つたやうな相手にはとてもあたりがつきません。——柄と、擧止と、言葉つきとから押して、大ていは、請負師といふみきはめをつけました。——とりわけ、言葉つきの、醉ふにしたがつて、いよ／＼齒ぎれ

よく、鐵火になつて來るのが、さうとられても自ら無理のないところもありました。

『失禮だが、一つ……』

屢々さう探るやうに

『旦那の御稼業をあてゝみませうか？』

豊島屋さんに釣りこまれて、その場ぎりの、とりとめのないことを好きに饒舌つたあとで相手はいひました。

『さア、どうぞ……』

わざと豊島屋さんはそれにのつて、

『何とみえます？』

『かうみたところ……』

『かうみたところ江戸ぢやアねえ。』

『交ぜつ返しちやアいけない……』

相手は眼を据えて

『あなたは、どうしたつて、土木のはうをやつておいでの方だ。』

『感心！』

『どうです。——問屋でせう？』

『ところが、その……』

豊島屋さんはわらつて

『じがない藝妓屋の亭主。――といふと聞えがいゝ、ありやうは、體のいゝ書記さん……』

『…………………！』

『お買ひかぶりになづちやアいけません。』

逆に、豊島屋さんのはうでも、筋合の知れない相手だと、器用にいつも、さういつたかたちに逃げました。

可笑しいことにはさういふと、大ていの相手は、立ちどころにその扱ひをかへました。――「あなた」が「君」になり、「旦那」がたちまち「大将」になりました。――豊島屋さんには、いつそ、覿面にさうなるのがたまらなく面白いらしいのでした。

が、豊島屋さんが「藝妓屋の亭主」と自分からいふのにうそはありませんでした。さういつていゝだけの理由がありました。――といふのは、豊島屋さんは、芳町に、さつともう十年も世話をしつゞけてゐる藝妓がありました。――で、日に一度は必ず、そのうちのはうをみ廻りました。

もと〱豊島屋さんはヤマ喜へ養子に來た人。――のぞまれて、深川の、やつぱり呉服屋稼業のうちから養子に來た人ですが、家つきの、連れ添ふかんじんのお内儀さんは、病身で ずつと以前から片瀬の別莊のはうへ行きつぎり、何年にも東京の土をふんだことがないといふありさまでした。――ですから、豊島屋さんの廣小路の店は全くの男世帶、女中も置かず、煮焚きのことから何から大ぜいゐる店の人たちが毎日交代でやる。――豊島屋さんはそれに關係なく、朝、暗いうちに、誰よりもさきに起きると、雨がふらうが、風が吹かうが、電車にのつて、河岸の、納屋前まで行つて腹をこしらへ、かへつて帳場にすわりました。――で、その日やるだけのことは半日でやり、十一時ごつつの合間に、そのまゝ店を出て、取敢へず、まづ、しがらきの暖簾をくゞりました。――ときには一二時間でかへることもありま す

が、大ていは、そのまゝ、燈火のつくまで、誰か知ら言葉がたきを摑へては腰を落ちつけました。――燈火がついて、お客の立込んで來たところで、ぶら〳〵と立上り、『おさきへ……』と愛想よくあいさつをして出て行きました。――晝間、途中でかへつたときには、夜になつて、また、改めて出直して來ました。

夜になつて、また、出直して來たとき、天野さんでも、武傳さんでも、鶴菱の大將でもそこにゐると、何時までゞも一しよに附合ひ、汐さきをみて『何處かへ行かう。』と、必ずいつもさういふとき、豊島屋さんは自分からいさんで先棒をふりました。落ちつくさきは、どこといつて、始終、きまつたところはなく、向島へ行くこともあれば、吉原へ行くこともあり、工合によつては、新橋、赤坂のはうへ遠走りをすることもありました。――去年の夏ごろ、その手で二三度わたしもさそはれましたが、どこへ行つてもさういふとき、後から必ず、その豊島屋さんの芳町のが影のやうにあらはれました。――さうして、豊島屋さんと二人、いゝやうに座敷を持つて、どんなときでも附合つたものをみんなお客にしなければ置きませんでした。――天野さんでも、武傳さんでも、鶴菱の大將でも、一國一城のあるじだけこれにはみんなこまりました。

『嫌だ、豊島屋は。――決して、もう、わたしに一しよにならないよ。』

天野さんは、よく、しがらきの主人を摑へてはさういひました。

『どうして、この男は、あゝ自分ばかり金がつかひたいんだらう？』

『自分で撒い出すんだからさうするのが當りまへだ。――豊島屋さんはさういつておいでゞす。』

主人はこたへて

『豊島屋さんのはうには豊島屋さんのはうの理屈があります。』

『そんな間違つた理屈があるものか。――揺い出すのも揺い出されるのもつみは同罪だ。――それがほんたうだ。』
『それは、まア……』
『今夜こそと思つてもチョロリ出し抜かれる。――腹が立つ。――だが、あの芳町といふものが出て來るんで手が出ない。』
『どうも、あの、助鐵砲には……』
『よく、まア、あれまで、豐島屋の呼吸をのみ込んだものだ。』
『武俠さんでも、鵜菱さんでも、みなさん感心していらつしやいます。』
『感心する。――感心するからいけない。――だから引つかゝる……』
『名告りかけて、此方から、何とか二人を床の間のまへに据ゑるやうな段取をおつけになつたらどうなんです？』
『そんなことは疾うにやつてゐる。――疾うにやつて失敗つてゐる。』
『いけませんか、やつぱり？』
『すぐに竹箆返しをされる……』
『其奴は……』
『附合ふからいけないんだ。――附合はなければいゝんだ。――だからもう附合はない……』
さういつても、でも、豐島屋さんに面とむかふと誰も決心がにぶりました。天野さんがどんなにかげで强情を張つても、あへばつりこまれて、結局やつぱり一しよになりました。――不思議にさういふ人を惹きつけるところを豐島屋さんはもつてゐました。
豐島屋さんのその芳町の人。――宗匠のはうの名まへもありましたが、おかみさんと、だれも、ほんたうの名まへば

かり呼びました。――は、行くさき／＼、どこへでも豊島屋さんの影身について出て來るばかりでなく、ときには、呼ばれて、しがらきの店へさへ出て來ました。――どうかして工合のこじれたとき、出來の悪いとき、豊島屋さんは、主人にいつて電話をかけさせました。――時をうつさず、それこそ打てば響くやうに、出さきからそのまゝの済飾つたすがたを暖簾のかげにみせました。

かういつたゞけでは、さうしたところへ自分の女を呼上げる豊島屋さんを、桁はづれの、いやみな、垢抜けのしないものに思ふ方があるかも知れません。もしさう思ふ方があれば、それはその方の思ひすごしで、ありやうは、決して桁はづれとも、いやみとも、垢抜けがしないとも、微塵そんなことを思はせるやうな光景にはなりませんでした。――さういふ光景にするには豊島屋さんが道樂ものすぎました。――おわかさんの豊島屋さんに對してのとりなしに、浮いた、色めいたところがなさすぎました。……

豊島屋さんとも／＼、おわかさんは、たゞもうその場の辻褄を合せようとばかりしました。酌もする、猪口もうける、戯談の合ひづちもうつ。――まるで自分をなしにして、居合す人たちの、誰の機嫌でも自分からとりました。――これが芳町で、とにかく何のなにがしといはれる、押しも押されもしない、うちに抱への三四人も、置く姐さん。――清元の三味線を彈かせたら、外土地にも、これほどの彈き手はないとさへこれがいはれる人かと思ふと、いつそ、その、旦那思ひの心根がわたしにはいた／＼しく感じられました。――同時に、勤め離れてそれまでにされる豊島屋さんの果報を、うらやましいといふよりも、もつとしみ／＼心怖くわたしには感じられました。

「よく仕込んだ。――これまでによく仕込んだ。」

天野さんだの、武俥さんだのとは逆に、そこまで相手に自分をのみこませた豊島屋さんにわたしは感心しました。

『お内儀さんがそばにゐなくつても、あゝいふ人がついてゐれば、結句、豊島屋さんは仕合だ。』

さうした話の出たとき、わたしは、しがらきの主人にいひました。

『それは、まア、いまゝでにするには並大抵ぢやアなかつたらうが……』

『其奴は、まア、手間のかゝつてゐることは……』

主人はわらつて

『随分、豊島屋さんも苦労をしてゐます。――みてゐるとそれが分ります。』

『しかし、苦労をしても、仕栄があつたんだからいゝ。』

『えゝ、まア、それは……』

『豊島屋さんは文句をいふセキはどこにもない。』

『あなたでもさうお思ひになりますか？』

ふいと主人はいひました。

『さう思ふとは？』

『いゝえ、そのね……』

『……………？』

『芳町さんといふ人が豊島屋の旦那からいつてそれほど不足のない人。――ほんたうにさうおみえですか？』

『はて……？』

『……………』

『といふのは不足がある……？』

『といふ、まア……』

主人はかぶせて

『旦那にするとそのかたちがあります……』

『見物にはとても分らない。』

『それは、もう、役者がいゝからめつたなところはみせやアしません。――が、御見物が御見物だから、あなたゞけはもしや……？』

『いゝえ……』

『芳町さんにおつ母さんが一人あります。――義理のでない、實の……』

『………………』

『このおつ母さんを、芳町さん、お持佛さまのやうに大切にしてゐます。――一にもおつ母さん、二にもおつ母さん。――よくあんなに出來るといはれるほどの大孝行です。』

『それは分る……』

わたしはうなづいて

『へんに堅氣な、さういふところのある人だ。』

『それが旦那にいけません。』

『……………』

『いへば、お前はおつ母さんが大切か、俺が大切か。――さういふと、あなたとおつ母さんと一しよにはなりません。――あなたはあなた、おつ母さんはおつ母さん。――あなたも大切ならおつ母さんも大切です。――さういひます。』

『…………』

『あなたとおつ母さんと一しよにはなりません。――それだけならいゝ。――あなたはあなた、おつ母さんはおつ母さん。――あなたも大切ならおつ母さんも大切です、となると、此奴……』

『こまつたね。』

『……でせう?』

『…………』

『わたしはいゝんですけれどおつ母さんが。――わたしは構ひませんがおつ母さんが。――いさとなると木戸が。――必とさういふ木戸が立ちます。――どうにもなりません。――お前とならばどこまでもといふことに行きません。』

『…………、』

『よくしてくれる。――さういつてもよくしてくれる。――みす〳〵無理と思ふことでも素直に聞いてくれるので氣の毒になることがある。――が、その、よくしてくれるのも、無理を聞いてくれるのも、つゞまるところはおつ母さんのため。――おつ母さんに不自由をさせまいばかり――』

『…………』

『といふことのつまりは金。――色でもなければ戀でもない……』

『が、これは……』

わたしがさういひかけると
『と、まァ、旦那はいひます。』
かぶせて主人はいひました。
『…………………』
『さうとばかりいへないことは分つてゐます。——惚れてなくつて出來る所作ぢやァありません。』
『さうだよ、それは。——金とばかりで片附けるのは酷すぎる……』
『でも、旦那にすると……』
主人はつゞけて
『そこに、その、さういひたい筋があります。』
『贅澤だ、それは……』
わたしはわらつて
『いゝ人にとられたければ、豐島屋さん、ヤマ京の身代と緣を切つて裸になることだ』
『そこです。理屈は。』
主人は引取るやうに
『その理屈の帳尻の合はないのが旦那の癪に障ります。』
『…………………』
『一らつをお聞きになりませんか、旦那に？……』

『いゝえ。』
『あなたには、旦那、お話したらうと思ひますが……』
『聞かない。』
『旦那が、まだ、ヤマ彌さんへ來ないまへの話。――吉原の華魁との……』
『いゝえ、知らない。』
『ぢやア、まア、これは内證の話です。』
『…………』
『まへに、その、かういふ經緯があります。……』
さういつて主人の話してくれたのによると、豊島屋さんは、深川の質家にゐた時分。――ですから二十年ほどまへ、吉原のさるうちのお職と深い仲になり、兩方がうごきのとれないところまで上りつめました。――それが、はじめ、遊びにいつてさうなつたのでなく、豊島屋さんのその質家といふのが古くからそのうちに商賣をしてゐた關係で、始終、豊島屋さんは、荷を持つては、店のものと一しよにそこへ出入をしてゐました。――その出入をしてゐる間に、信夫といふその華魁に思ひつかれ、新造のとりもちでとうくさういふ夢をみることになりました。
そのとき豊島屋さんは二十五。――まるでそれまで遊蕩の味を知らなかつたといふわけでもなかつたらしいが、何にしても若いさかりで、逢ふ瀬のかさなるにしたがつて、逆に豊島屋さんのはうから夢中になりました。――と、絆されるかたちで、女のはうも、ついした浮氣がうそから出たまことになりました。――おたがひに、それぐの身がらを忘れて無理をし合ひました。

こまつたのはそのおまきといふ新造でした。二人の中をとりもつたもの丶、直逆にそんなことにまでならうとは思はなかつた。——といつて、自分に落度があるだけ、無下にいまさらあら立てることも出來ない。——なまじなことをすれば、嵩にかゝつて、どんなことをされるか分らないといふ心配もあるので——並外れて華魁の勝氣に出來上つてゐるだけ——手の下しやうがなく、あたらず觸らずの工合に、まア、機會の來るのを待つてゐました。

そのうち誂むきといふ機會が來ました。華魁に身請のお客がつきました。——こゝぞと、おまきは、豐島屋さんを廓の近所に呼出して、華魁の身のためといふことをそればかりくり返し、ほんたうにもし華魁を大切に思ふなら切れてくれ、こゝで綺麗にわかれてくれ。——遮二無二口說きました。

さうしたわけになつてからは、客になつて表むきかよつたとはいふもの丶、もと〱此方は贔屓になる商人、さきは年來のお得意さま。——いざとなると強いことはいへません。それには、それをいふおまきといふものが、何としてもはじめに種を運んでくれた恩人、厄介をかけてゐるだけ、嫌とは、義理としていへません。——泪をのんで、豐島屋さんは、あきらめると一言いひました。

で、ばた〱と決りはつきました。信夫さんの華魁はめでたく素人になりました。——いよ〱、その、廓を出るといふ日、豐島屋さんは、よそながら名殘を惜しむ といふよりは、わかれにもう一とめ、せめてもう一とめ、うしろ姿でもいゝからみたい。——さう思つて、五十間の、大よしの表二階で、飲んでも〱味の出ない酒を相手に、ぼんやり、あてもなくその人のそこをとほるのを待ちました。——が、待つほどに、春の末のしと〱雨が音もなくふつて來ました。——間もなく、幌を深くかけた八九臺の車が、豐島屋さんを殘して、景氣よく大門のはうへ出て行きました。豐島屋さんの眼からはとめどなく泪が溢れました。

あくる日から、豊島屋さんは、目黒の、とある竹藪を控へた、大きな、古い、別莊風の屋敷のまはりを、願にかけて、毎日、うろ／＼あるき廻りました。——その大きな、古い屋敷のなかに、おきみといふ本名に呼びかへられた人が、奥さま／＼で、奉公人たちと一しよにしづかに暮してゐました。——といふのは、その身請をしたといふお客といふのが芝浦の大きな鐵工場の持主で、工場のそばに本宅があり、旦那は、始終、そのはうでして、目黒のそのうちへは五日に一度ぐらゐしか出て來ませんでしたから。……

うろ／＼する豊島屋さんのふところには双ものが入つてゐました。——といつても、みつけしだい女を殺して自分も死ぬ。——とまで思案したわけではなく、たゞもう豊島屋さんは逢ひたい一心。——顔がみたいばかり。——逢つてどうといふやうなたくらみは何にもありませんでした。——が、その、大きな、古い屋敷の門は、人けのないやうに、とりつくしまなく、いつも、閉つてゐました。

豊島屋さんは、でも、力を落しませんでした。——力を落さないといふよりも、空にたゞ、夢のやうに目黒へかよひました。——疾うに、もう、うちへはよりつかず、以前つかつてゐた番頭が仙台で洗張屋をしてゐるところに轉り込み、そこの二階に權八をして、外へ出なければ、うちで、始終酒浸しになつてゐました。——その番頭といふのがとんだ忠義もので、こと／＼く豊島屋さんに同情し、一しよに酒も飲めば、ときには自分からさきに立つて、豊島屋さんを、品川あたりへ引つ張り出しもしました。

と、ある晩、だしぬけに女がそのうちへあらはれました。——豊島屋さんは夢ではないかと思ひました。

が、豊島屋さんがさきを思ひ切れないやうに、さきでも、豊島屋さんにあくまで未練がありました。——おまきに說得されて（そつちへ行つては、おまき、豊島屋さんの身のためといふことを懇々いつた揚句です）泣く／＼うんといつた

ものゝ、さて、目黒へ引取られても一日として豐島屋さんのことを忘れる暇はない。——どうしてゐるだらうと、人をつかつてそれとなく探るとうちに疾うにもうゐない。——はじめて、そこで、おまきにたばかられたことが分りました。——口惜しいと戀しいで、あるかぎりの智慧をしぼつて探索したあげくそこにゐることを知り、奉公人たちの眼をぬすんで屋敷を拔けて來た。——さういつて、その人は、かうなつたらもう死んでも目黒へはかへらない、どこへでも連れて逃げてくれ。——豐島屋さんの膝にすがつて搔口說きました。

で、洗張屋の二階を引拂つて、間もなく、二人は、向島のさきの寺島村にうちを持ちました。——どうして、そんな、突拍子もない方角をえらんだのかといへば、洗張屋さんの伯父さんになる人がその近所に植木屋をしてゐて、その手で、こゝなら大丈夫、だれにも分りつこないといふところをさがしてもらひました。

うちを出るとき持つて出たもので、まづそこまでの役はつけて來たものゝ、世帶をもつたについては何とか稼ぎのみちをつけなければなりません。——といつて、二人とも、世を忍び路の旅ごろもで、公然晴れては出あるけない。——やつぱり、その、洗張屋の世話でミシンの會社からミシンを一臺借り、二人がゝりでやがてはじめたのが風呂敷の縁縫ひといふ內職でした。

そのうち夏もすぎて秋になりました。裏の逃いけを越してくる風が、朝夕、だん／＼身に入みて來ました。——おひおひもう寒くなるといふ分別もなく、二人はぐづ／＼に、たどらちもない毎日を送つてゐました。

と、思ひもよらない人がそこへたづねて來ました。——おまきでした。——二人は驚くよりもまへに、その、お召ぞつきのりうとした拵へに打たれて、穴があれば入りたいやうに思ひました。——といふのも無理のない話で、十月の末だといふのに、一人は、まだ、一重もの、一人は綿セル、ともにいゝ加減汚れくさつたのを後生大事に着てゐる始末で

す。――二人はまともにおまきの顔をみることが出來ませんでした。
いふまでもなく、おまきは、目黒のお客にいひつかつて女を取戻しに來たのです。――が、多寡をくゝつたのかくどいことはいはず、いまゝでのことは水にながして何にもいはないから、改めて、こゝで、すつぱりわかれてくれまいか。――至極さばけたかけ合でした。
『……若旦那も、華魁も、せんべ蒲團にくるまつて色も戀もないぢやアありませんか。』
で、おまきは、ずばりと一つさういひました。
その一言。――そのたつた一言で豐島屋さんの迷ひのゆめはみごとさめました。――金。――つまりは金だ。――豐島屋さんは、はつきり、さう思ひ知りました。
『金がなければ色も戀もない世界だ。』
その夜一夜、口惜し泣に泣きあかしたあとで、二人は、時節を待つ。――さうするより外はないとあきらめました。
――何年離れてゐようと、また、どうならうと、おたがひの料簡さへかはらなければそれでいゝことだ。――今日の、この、辛い思ひをいつまでもおたがひが忘れなければそれでいゝことだ。――必とみ返す。――世に出て、いまに、必とみ返してやる。――それまでの辛抱だ。――さういひ交して二人はわかれました。
女は目黒へかへる、豐島屋さんは詫びをしてうちへ入る。――何のこともなく、そこで、二年といふもの經ちました。
豐島屋さんは生れかはつたやうに堅くなりました。家業大事、店大事、いまゝでしたやくざの取返しをつけるつもりで、身を粉にして働きました。――もと／＼評判のよかつた豐島屋さんです、たちまちのうちに信用を恢復。――延ひ

て、間もなく、ヤマ喜へといふ話が持上りました。――いへば豊島屋さんは、女が目黒のお客のところへ行つた上同じかたちにヤマ喜のうちへ養子に入りました。

由來、ヤマ喜といふうちは呉服屋として知られてゐるばかりでなく、淺草での屈指の地面もち、ありあまるものを抱へながら、内輪は、親一人子一人といふうそのやうに寂しいくらしでした。――その親一人も、豊島屋さんといふものが出來ると、その翌年、八九年越しの腎臓が嵩じてあつけなくこの世を去り、殘つたその娘さんは三年ほど豊島屋さんと一しようにくらすと、早産したのがもとのぶら／＼病ひで長いこと大學の厄介になり、あげくが片瀬へ引籠りつきりといふことになりました。――豊島屋さんは、何のことはない、暗い、手がかりのない、空洞のやうななかに、一人、心細く取殘されました。――身のまはりをみれば、親類の、身よりのといふ有象無象が、冷めたい、山犬のやうな眼を光らしてゐようといふ奴です。……

豊島屋さんは夢中で稼業をやりました。――わきめもふらず自分の行くみちを行きました。

『金。――つまりは金だ。』

片ときも豊島屋さんはこれを忘れませんでした。

『金がなければ色も戀もない世界だ。』

豊島屋さんは、寺島村の、蓮いけのそばの世帯を、その世帯をたゝむときの辛い思ひを、斷えずあたまに置いてそれをみ返す。――たゞもうそれをみ返さうとばかりしました。

先代の七回忌までに、とう／＼豊島屋さんは、店のしくみを以前とすつかり替へ、以前に倍ます奉公人をつかつて、立派に、ゆるぎのないもの自分にこしらへ上げました。――大ていなことをしても、もう、先代からうけついだものに

傷をつけなくてもすめるところまで漕ぎつけました。

それから、ちき、さる問屋の何かの祝ひごとのあつたとき、呼ばれて、矢の倉の福井へ行き、ゆくりなくそこでおわかさんなるものに邂りあひました。――一つには、その問屋の、豐島屋さんうけもちの番頭のさしがねで、無理から押しつけられたかたちもあつたが、とにかく豐島屋さんは、何となくおわかさんにさそはれました。だん／＼凝つてかよふやうになりました。――が、立入つてどうといふところへ行くまでにはしばらく間がありました。……

『三年。――まる三年といふものこれが始めにあつた福井でばかり逢ひつゞけたといひます。』

主人はわらつて

『强情なところがいかにも旦那らしい……』

『…………………』

『と、風の便りに、目黑のが、日本橋で料理屋をしてゐるといふことが耳に入りました。』

『やつぱり、その、目黑のお客の世話になりながら？』

『いゝえ、それが、目黑のお客に死別れたあとで亭主をもつたもんです。』

わたしはいひました。

『亭主を？』

『旦那はすつかり氣を腐らした。――そのまゝぐづ／＼に芳町のはうへ……』

主人は言葉をついで、

『此奴は、まア、さうなるのに無理はありませんや。』

『……………』
『醉つたまぐれに、その後、芳町から大ぜいの末社をつれてそこのうちへ押出しました。——お内儀さんにといつたが出て來ませんでした。——ざまアみろとばかりて引上げて來た……』
『……………』
『が、あとで、何としても寢ざめが悪かつた。——旦那はいひました。』
『それはそのはずだ。』
……豐島屋さんならさうあるのがあたりまへです。
『何とことはない、はつきり愛想づかしをしたやうなものだ。』
『さ、それです。』
主人はうなづいて
『だからことが面倒になつた……』
『……………』
『たつた一人の人。——たつた一人の芳町さん……』
『そのたつた一人の芳町さんに、あなたはあなた、おつ母さんはおつ母さん。——あなたも大切ならおつ母さんも大切です。——旦那はさういはれました……』
『……………』
『金。——つまりは金だ。——でも、出來てみるとさうちやアない。——金のために色も戀もけしとんでしまひまし

た。』

『…………』

『そのときの苦い思ひをみ返すもくそもなくなると、此奴、何のためにそれまで稼いだのか分りません。——えらもない修羅をもやす種をまいただけの話です。』

『…………』

『さう思つてみると旦那のすることにいち／＼無理はありません。——せめて酒でものめえらずば。——平右衛門のいふとほりです。』

『金が敵。——どつちへまはつても金はかたきだね。』

ふと、わたしに、口をきかないときの豐島屋さんのことが寂しく胸にうかびました。

これは、まア、去年の夏時分の話ですが………



子の愛の爲めに

近松秋江

五十に近くなつて思ひがけもなく子供を持つた宇治は、それまで長い過去の生活を通して專ら兩性の愛欲に向けられてゐた愛情の目的を今度は子供のうへに置くことになつた。それはしかし、彼が故意に努めてさうするのでなく、嘗て自分の戀する女に向つて注いだ時と同じやうな深い本能性に基づくものであつた。

宇治の性質として、これまで女を戀した場合の、彼の氣持ちや行爲によつてみても、ある一つの目的物に向つて全力の愛情を傾倒してゐる場合には、恰ど鹿を逐ふ獵師の眼に山が見えないといふ譬のとほり、その一つの目的物よりほかのものは殆ど考へられなかつたのであるが、長い間幾度かの戀の失意の境遇を經て來て、彼が漸く戀にも異性にも倦み疲れた時分には、彼の精神にも肉體にも戀愛の情火の自然に消息すべき五十に近い年であつた。そしてちようど西鶴が萬の文反古の中に「もはや女房持申候力も御座なく候」といつてゐると同じやうに、戀をする力もなくなつてゐるところへ以つて來て、不思議の運命は彼に一人の子供を與

へたのであつた。さういふわけで、今まで異性に向つて注がれてゐた愛情――その愛情は、溺れるほどの愛情でありながら、不幸なる彼には、いかなる運命の神の惡戯か、その愛情を傾倒すべき目的物を彼に與へなかつた。――を、子供の愛に向つて注ぐやうになつたのは極めて自然の變化であつた。

世俗の習慣からいふと、何故か、異性の愛に溺れることは不徳の行爲であるやうに考へられ、之に反して子供を愛することは、いくら深く愛しても、これは不徳でないばりか、親の慈愛として道徳的行爲の如くに考へられのは矛盾したことゝ思ふのであるが、とにかく宇治が、そんな成り行きから愛情の對照を異性から子供の上に移したことは、又自然に彼の世間的の信用をいくらか回復する結果をも持ち來したことは事實であつた。

宇治の生活が、そんな次第で、これまでよりも、世間的の眼で見て、遙に眞面目なものになつて來た事は争はれなかつた。尤も彼自身では以前の生活とても決して不眞面目なものであつたとは思つてゐないのであるが、さうかといつて、今の生活が眞剣であることも、彼れ自身にとつて一點僞りのないことであつた。彼は、今までとても生命が惜しくないことはなかつたが、年をとつてから、早婚の人間にしては孫といつてもいゝくらゐの子供を持つてみると、これまでよりも一層生命は大事であるといふことが犇々と感じられた。そして又今までとても錢の欲しくないことはなかつたが、さうして生ひ先きの逆い子供の親といふものになつてみると、従來に幾層倍して錢が大事であるといふことも眞剣になつて考へられた。

子供が出來てからの彼の念頭を絶えず往來してゐることは、かういふことであつた。

「四十八で子供を持つて、この先運よく十年生きたにしたところで、子供は、やつと十歳になつたばかりである。欲をいふなら、どうか子供が女學校を卒業するまで生きてゐたいものだが、これは、これから先十七八年もかゝることで

る。自分の壽命が今後十七年も十八年も保てることに絶望的たことである。すると、いつかは悲しい死別の時が早晩來るにちがひない。同じ子供を持つなら、もつと早く持つことが出來たなら、せめて今少し長く親となり子となつた現世の緣を悅樂することが出來たらうに……」と、仕舞ひには、そんな取越し苦勞もしてみたり、果ては愚痴になつてもみたりするのであつたが、それも結局宇治自身の心得が長くそつちの方へ走らなかつたから、今となつては致方もないことである。またそれを格別後悔しもしなかつた。

そして、以前藝術に熱中してゐた時分に、藝術は藝術として又異つた意味で、それが彼に取つて大事であつたと同じやうに今は子供の愛情を中心にして生きてゐるのであつても、藝術の大事には少しの異ひもなかつたが、自分の死んだ後で子供とその母親とが困らないだけのことは考へて置かなければならぬと思つた。否、さうなると、甚しく杞憂家の宇治は、もう明日の日にも自分は死にはせぬかといふやうな感念に脅かされるのであつた。實際、こんなことをいふのは、落語にでもあるやうな神經病みのやうであるが、今日の東京市中の交通機關の現狀などを考へ出すと、道を歩いてゐても、電車に乘つてゐても、何處に恐はしい運命の神が潛んでゐるか分らないやうな氣がするのであつた。それゆゑに、無事に生きてゐる間に一日も早く自分の亡き後の圖（はかりごと）をして置かなければならないと、丁度何ものかに後を追ひ驅けられてゞもゐるかのやうに心が急かれるのであつた。

たつた半日東京の市中に出てゆくのでも、自動車にも撥かれず電車の事故にも遭はず、無事に、郊外の自宅に歸つて來る時には、わづかに、停車場から五六町と隔たらぬ道をも、いつもの、子供が風呂に入つて、それから寢床に入る時刻に、どうかして少しでも遲れることがあると、宇治は大抵俥に乘つて道を急いだ。そして、何よりも先に、

「坊主はどうした。何事もないか。」と、訊いてから靴を脫いだ。

子供の母親のお悦は、

「これがゐるから、今年はもう、あまんり遠いところへ幾日もいつて居られないでせう。」といつて笑つてゐた。

愛樂がそこに集まつてゐる以上は、今のところ、子供の爲に脚迫めをされてゐても、格別不滿にも感じなかつた。それに每年ひどく夏負けのする宇治も今年の夏は、そんなことで氣の張つてゐる爲か、いつもほど弱りもしなかつた。丁度暑氣に向ふ六月の初から始めた新聞の連載小說はある事情のために中途で止めたが、それでも殆ど七月一ぱいは書いた。盆前の急劇な暑さ、それから土用に入つてからは息をも吐かせないほどの九十度の酷暑にも抵抗しつゝ、來訪者がみんな「このお座敷は凉しいでせうなあ。」といふ、見掛け倒しばかりの、風通しの惡い二階座敷に閉ぢ籠つて、行者が行でもするやうな勇猛心を鼓して机に向つた。搗てゝ加へて、去年と丁度反對に梅雨が空つゆであつた上に土用前後の二十日ばかりといふもの、藪も枯れるかと思ふばかりの日照りが續いた。

平素は健康體を自信してゐるお悦も、去年の秋その子供を生んでから、四六時中絕えずその子供の爲に惱まされてゐた。産れて五六ケ月の春の頃には夜半に何度も眼を覺ますので、彼女はその爲に常に睡眠が不足勝ちであつた。それから段々夏になつて、そろ〳〵子供が這ひ出す時分になると、今度は、夜はよく寢るかはりに、朝の六時頃から晩の八時頃まで十四五時間の間といふもの、子供は殆ど晝寢らしい晝寢もせず、一ト日母親の膝のまはりに絡まつて絕えず乳房を啣へてゐなければ承知しなかつた。

「せめて二時間でも晝間、床の上にひとりで寢てゐてくれると、宜くらの女中が一日おぶつてゐるくらゐのことは、さ

つく〳〵とやつてしまふ。」と、彼女は話してゐた。

子供は、産れ出るまで、宇治がいろ〳〵に氣使つたほどでなく、二三人ばかりの醫者に健康診斷をしてもらつたところによると、何處に異狀もない健かな體質であつたが、たゞ一つの欠陷はよく睡らないことであつた。乳兒は二十時も眠らなければならぬといふに、十二時完全に眠らなかつた。醫者はそれを、遺傳性の神經質であるといつたが、その點は、ちようど子供の眉毛や眼の切れ目、額の形などが生寫しである如く、明瞭と父親の遺傳をうけてゐたが、母親にもヒステリイ性の不眠性はあるのであつた。

「どうも遺傳とすれば、これは爲方がない。」といつてゐたが、母親は、その夏の間に見るみる健康が傷けられてゆくのが見えてゐた。宇治は、毎日それを目擊もしてゐて、親が子を育てゝゆく狀態に、何となく或る悽慘味を感じてゐた。生物學者の丘淺次郎博士の說によると、親は子を生みさへすれば、それで生物としての機能を了へるのであつて、子を生めば間もなく死ぬのが本當であると、嘗ていつてゐた。宇治は、母親が、一人の乳兒の爲に四六時中惱まされてゐるのを見るにつけても、屢々そのことを想ひ浮べてゐた。そして、乳こそ與へないが、彼れ自身も考へてみれば、近頃の自分は、絕えず慮ることと考へることとが子供のことを出立點としてゐるのであつた。

「この金食ひ蟲めが！」といつたり、「この、親の生命取りめ！」といつて、宇治は、一日に何度となく子供の傍に寄つて、ぺつと、圓く肥つた頰を指の先きで愛撫するのであつたが、そんなに母親の悽慘として惱まされてゐる有樣を見たり、又自分が今はたゞ子供の將來のことで苦勞してゐることが分つてゐても、不思議にそれが、不滿でないばかりか却つて快樂であるやうに考へられるのであつた。

しかしお悅は、口でこそ、そんなに平氣さうなことをいつてゐたが、事實ひどく疲勞してゐた。半病人のやうになつ

て子供を持て剩してゐた。ヒステリイのやうに、

「さあ澤山ちやんお呑みなちやい、いくらでもお呑みなちやい、みんなお前のだから…………可愛いんだからねえ、かあいゝんだからねえ。」と、大きく垂れた乳房をあてがつて添乳をしながら、きゆつと抱締めてゐたりするが、土用の眞晝間、九十度の炎熱にじり〳〵煎り付けられながら、やつと少し晝寢をしかけたかと思ふと、ものゝ二十分も立たぬ内に、目を覺まして、わあツと泣き出す子供を賺かし患ふて、

「これの爲に體中の物をみんな吸ひ取られてしまふ。」

と、母親はこぼし〳〵してゐたが、傍の見る眼にもまつたくそんなやうに思はれた。乳兒も八ケ月からになれば、母體から乳を一日に六合から吸收するといふことだが、親の生命力を犧牲にしても本能的に發育してゆかうとする乳兒の生きる力は凄じかつた。

お悦は體内の水分がさうして毎日々々子供の爲に吸取られるからでもあるまいが、連日の旱天のためにも亦體内の水分が乾涸れてしまふかと思ふやうに、患はしげな顏を顰めて、恐ろしいやうに照りつづけてゐる空を絶望的に見上げて、

「雨が降つてくれるといゝがなあ。…………どうして今年はかう雨が少いんだらう。」

と、眞つやうに繰返していつてゐた。新聞の夕刊などには涼しい雨を持つてくる颱風がもう沖繩群島あたりまで來てゐるやうなことを書いてゐたが、それ等はいつも空賴みにをはつた。

夏には殊に弱い宇治は、いつの年でも降雨に待ち焦がれることは一人であつたが、今年は不思議にそれほどとも思はなかつた。それだから幾らか渇水に對しても抵抗力が出來たのかとも思はれた。そして、彼は概して炎天つゞきをさほどに

どのこともなく、毎日眞裸體になつて、蒸すやうな二階で何か知ら机に凭つて職業の筆を動かしてゐた。

お悅は偶に子供を抱いてその二階に上つて來ることがあると、

「おゝ暑い。とても階下とは比べられない。……おゝ暑いあつい。」といつて、逃げるやうに直ぐ階段を下りていつた。

まめな宇治は、その階段を一日の中に、數へたら、おそらく四五十遍は上がつたり下りたりした。

お悅は、女中と、

「とても、あの眞似は出來ない。」と、笑つていつてゐたが、彼女はそこに上つて行くのが、東京までも出てゆくやうに臆劫であつた。

それに宇治の家では、いつも好い女中のないのに困つてゐた。不思議とその居まはりには好い女中が多かつた。中には一つ家に五つになる、上の坊ちやんが生まれて間もなくからずつと五年も勤めてゐて、次の三つになる孃ちやんは、「お孃ちやんは、誰れの子？」と問へば、「時の子。」といふほど馴附いてゐるのがあつたり、さうかと思ふと、やつと二十か二十一の小柄の女で、五つを頭に三つに一つの三人の子供がある家に、これもう四年も勤めて居て、一人を負つて、二人の子供を兩手に引いて、まるで鈴のなつたやうな形向をして、そのうへ遠くへ物を買ひに行つて來たり、そんなによく働いてゐても、そこの妻君は女中冥利といふことをまだよく知らぬと思はれて、何か氣に入らぬことでもあると、「女中などは上野の公設市場へ行けば降るほどある。」と、そんな棄てぜりふを云ふといふ話も聞いたりした。その他身裝も振りも構はず、せつせと働く女中は、餘處の家には、そこら中に居つた。一つ井戸を使つてゐる相借家に住んでゐる銀行員の家にも足掛け三年勤めてゐる女中がゐて、傍の見る眼にも感心するほどよく働いてゐた。それにも係は

らず、宇治の家では去年の秋子供が産まれた時からもう十四五人の女中が、まるで木賃宿か何ぞのやうに始終出たり入りつしてゐた。

お悦は、何よりも余所の女中のことばかりを、毎日のやうに口に出して羨んでゐた。それで、彼女は、それ等の女中と、子供を抱いて互に表に立つてゐたりして自然に親しい口を利き交はすやうになつた時に、そつと給料などのことを訊いてみると、何処の家でも、宇治の家で遣つてゐる月々の給料に比べて大抵三円から五六円は少なかつた。宇治の家には、子供が生れてからは、中途で一人のこともあつたが、殆ど常に二人の女中が居た。宇治が、年を取つて持つた子供の可愛さから、出来るだけのことをして子供に手数を掛けることを厭はなかつた。それにも係はらず、余所眼に見てゐても、それ等の近所の女中が一人で為てゐることを、宇治の家の女中は二人も居つて、……又どうかすると、出代りで三人にも乗り合つたことがあつたりするが……それほどに働かなかつた。

「何処の家でも、あんな好い女中を何処から目つけて来るんだらう。……ほんとに、内で、どんな非道いことでもしてゐるかと思はれて、始終木賃宿のやうに出たり入つたりして外聞が悪くて為様がない。」お悦は、躍起になつて絶えず滾してゐた。食べる物なども、お悦は、何時も自分と同じ物を女中に与へて、一つ飯台で食べてゐた。

それでも女中に一人だけ、働くことは鈍かつたが、宇治の家ではめづらしく二月から来て、八月の藪入りまでやつと六ケ月だけ居つた女中が、これも、初め来た時には、一二年は居るつもりで親子在の田舎から出て来たのであつたが、もう来て四五月めの六月末に、出し抜けに故郷から本人に宛てゝ手紙が来て、主人の方へは、[illegible]になつたとか何とかで一日の猶予もなく、この女中を嫁にやるから一寸[illegible]といつて来たが、女中が[illegible]して[illegible]、彼女

は、女中に、

「それならお前何時歸るつもり?」と訊くと、

「明日歸るつもりです。」と、いつた。

お悦はそれでひどく心の中で腹を立てたが、

「あ、さう……」といつたきり、その以上のことをいはなかつた。口に出さずに腹の中に持つてゐるだけ、それだけ彼女の氣持ちは一層くしや〳〵した。無論そんな、條理の解らない者を、こちらから手を突くやうにいつて、何時までも引留めて居つてもらはうとする氣はなかつたが、宇治の家にとつて間の惡いことは、その女中を自分の郷里から世話をして伴れて來た、廿四五になるも一人の婦人が、――これは女中といふ譯でもなく、去年宇治の家に子供が生まれた時分から、出たり入つたりして宇治の家に居つて働いてゐた。それは、宇治が今の家に移つて來る前、やつぱり近い處で先の家の隣家の細君であつたが、去年の六月頃そこを離緣にされた。それについて深い事情をよく知つてゐる譯でもなかつたが、その出され方が傍限には隨分非道い仕方であつたのと、その婦人が溫順しい性質で近處まはりのことから、何からよく働く人間であつたゝめに、宇治夫婦はひどく彼女に同情して、いろ〳〵心配したこともあつたのであつた。そして、そのころもう姙娠してゐたお悦のお產のことなどを考へて、宇治の家では彼女に、ずつと當分居つて家事を手傳つてもらひたかつたのであるが、眼と鼻との隣家同志でゐて、まさかそれもならなかつた。だが今度の家は先と大分距離が隔つてゐるので、子供が產まれて一月ほど經つてから、――一時震災の後銚子在の郷里の方へ歸つてゐたのであつたが――又出て來て宇治の家へ來て手傳つてくれてゐた。彼女は針の方のことも可なりによく出來て、臺所まはりのことを形付けてしまふと、一寸の間でも直ぐ裁板の前に來て坐はるといふ風であつた。宇治夫婦は、何處か好い處

があつたら、彼女を嫁に世話をしたいと思つてゐた。そのうち年末に迫つて一つ、五つになる男の兒のあるところへ、好さゝうな緣口があつて、向うも大分乘り氣になつてゐたが、ある故障からその方の話は、いけないことになつた。すると彼女は、その前から遠緣の從姉妹になる婦人の方で話のあつた、三河島とかへ嫁づく氣になつて、年暮(くれ)の二十五日か六日になつて、風呂敷包みを一つ抱へたきりで往つてしまつた。宇治の家では產まれて、やつと二ケ月經つかたゝない赤兒を抱へてこれから冬季に入らうとするのに忽ちその日から困つてしまつた。その緣先きといふのは、お悅が彼女から、ひとゝほり樣子を訊いたところによると、向うはまだ奉公をしてゐる身體で、此方も嫁に行くといふよりも、何の事はない奉公に行くやうなもので、甚だ彼女の爲に香ばしくなかつたけれど、人が緣があつて、自分が格別不滿も感ぜずに嫁してゆかうとするものを、宇治の家で强ゐて留める譯にもいかなかつた。あんまりいふと、宇治の方で勝手でいふと思はれるのを遠慮して、たゞ十分の注意だけを與へておいた。

その時も、彼女は、自分が去つてしまふと、宇治の家の手づかえを察して、自分の郷里の方から、ぜひ一人女中を世話しようと思つたのであつたが、出て來ようといふ者が二人もあつたが、どちらも、その間際になつて、掌を返すやうに約束を裏切つた。一度など、彼女は、いよ／＼その女中に來るといふ者が、あちらを三番の汽車とかで立つて、兩國のステーションに何日の何時に着くから、出て待つてゐてくれ、よろしい迎へに出てゐるから、途へ來てくれといふ約束の手紙を交換して置いて、十二月の十七日の日に、早くから宇治の家を出て兩國の驛にいつて、約束の三番の汽車の到着するのを待つてゐたが、それらしい者の姿は見えなかつた、きつと乘り遲れたのだらうと思つて、四番の汽車を待つても來ない、五番のを待つても終に來ない。十二月半ばの寒空に、北風で吹き曝しの兩國驛で、四五時間も立ち通して、たゞ／＼待ち惚うけを喰はされたことなどもあつた。

宇治の家では家で、その晩は、――給料は世間並に比べて不足のないやうに、これ〳〵。出て來る汽車賃も、そちらで持つてもらひたいといふ手紙であつたから、それも持つ。來たら、すぐ渡さうと、もう幾日も前から再三の葉書や手紙で約束をしてあるので、まるで嫁でも來るのを待つやうに宇治夫婦は、日の暮れまでには、きつと二人で歸つて來るであらうと、頸を長くして待つてゐた。が、日が暮れて夜になつても二人の姿はおろか、迎へに往つた彼女さへ戻つて來なかつた。始終新聞などで見ることだから、もしかしたら、電車か自動車にでも轢かれたのではあるまいか、と、宇治とお悦は、寂しい電燈の下で、互に不安さうな表情を見交はしながら、頻りに氣を揉んでゐた。

「何か間違ひでも出來たのぢやないでせうか。」

「さうだなあ……あんまり遲い。」

「お咲さんは、これまでも、よく、御出て行く時には、今晩までには必ず歸つて來ますといつて、さも〳〵歸つて來さうに堅くいつてゐて、千住とか深川とかへ泊つて來ることが多いんだから、……でも今日はも一人連れてゐるから、……」

「うむ、今日はそんなことはないだらうと思ふがなあ。」

そんな、同じことを、何度も無駄に繰返してみたが、到頭その夜は戻つて來なかつた。

「あんまり、出て來るに手間が取れて遲くなつたから、二人で千住の從姉妹の處に泊つて、今日は早く歸つて來るでせう。」と、お悦は、その翌朝になつて、手を受けて待つやうな思ひをしてゐたが、その日も晩まで待つたが、又戻つて來なかつた。

「一體どうしたといふんだらう!?」お悦はそろ〳〵腹を立てゝ焦れて來た。

するとお咲は、たうどう二晩泊つて、中まる一日置いた、その翌日の夕方になつて、ふらりと戻つて來た。しかも、田舎から出て來た女も伴れずに、彼女一人で歸つて來た。そして、火鉢の向うに坐はつて遲くなつた譯を述べた。それは兩國でいくら待つても來なかつたので、自分も向つ腹を立てたまゝ千住の從姉妹の處に往つたついでに、此の間から話のあつた、自分の方の緣談を、從姉妹に、いつまでも愚圖々々してゐないで、年の内に早く極めてしまへと、喧しく勸められたので、その氣になり、一昨日あの晩、これからすぐ見合ひに往けといはれて、伴れてゆかれて、今日その話がいよ〳〵極まるまで待つてゐたので、えらい遲くなりまして、申譯がありません。といつて、彼女は濟まぬ顏をして詫びた。

それを聽いてゐたお悦も宇治も共にあいた口が塞がらなかつた。

そして彼女は、あと五六日立つて二十三日に一遍銚子在の郷里に自分の用事で、いつて來るつもりだから、その時は必ず誰れか一人は伴れて來ますといつてゐたが、お悦はあんまり當てにもしなかつたけれど、

「お咲さん誰れでも一人ぜひ伴れて來て下さい。頼みます。」といつてゐた。

そしてお咲は、中一日置いて二十五日には必ず歸つて來ますといつて、二十三日に又郷里に向つて立つたが、二十六日の午頃戻つて來たけれど、やつぱり空しく一人で歸つて來た。

「わたし、腹が立つて〳〵。自宅へ怒鳴り込んでいきました。十七日に、あんなに來ると云つておいて、人を散々待たして……わたしの家でもお父さんもお母さんもひどく怒つてゐました。あの晩夜までお母さんが、向うの來るといふ娘の家へいつて、お咲の話の家へぜひ往つてもらひたいといつて頼むと、往きますと固く約束をして置きながら、明る日今日往くといふ日になつて、どうも行けないから止めにするといつて斷りに來たのださうです……それで、

お父さんも、もうあんな連中は對手にならないといつてゐました。」

それつきりで、お咲さんは一人で歸つて來たが、その二十六日の晩は眞似のやうなことでも一寸その志るしをするのだといつて、二時間ばかり、居づらさうに宇治の家にゐて、晝飯を食べると間もなく小さい風呂敷包みを一つ抱へたまゝ三河島へ嫁にいつた……………のか、女中にいつたのか。

それから間もなく新年状の葉書を一枚寄越したきり、何のたよりもなかつたが、今年の二月になつてから、間もなく、彼女は一人の娘を伴れて突然宇治の家の勝手口に珍らしく姿を現はした。

「まあ、めづらしい、どうしました。」

と、お悅が訊くと、五六日一寸攵、田舍は舊のお正月で行つて來ました。丁度此の人が東京へ奉公に出るといふので、一緒に來てもらひましたといふのであつた。

宇治の家では、去年の暮に押迫つて彼女が居なくなり、派出婦などを賴んでどうかかうかやつてゐたが、それも嫌な者がないので、又新聞に廣告などを出して、それから二三人の女中が出つ入りつしてゐた場合であつたから、やつと愁眉を開いたやうな氣持ちがして喜んだ。

そして、お咲自身も、宇治の家で想像してゐたと少しも違はず、三河島の嫁に行つた先が氣に入らぬ處であつたので、それから三四月の頃までにたうとう話が切れて、彼女は又宇治の家へ轉げ込んだ。宇治の家では彼女が伴れて來た女中のほかに、もう一人派出婦から女中に直つて、東北があつて、五十日ばかり置いてくれといつて待つた、よく働く年增の婢があつたが、丁度三月の中ごろになると、それも暇を取つたので、又候お咲は宇治の家で暫時働いてゐた。

その間にも彼女は、宇治の家では女中としては殆ど最高級の給料を與へてゐたにもかゝはらず、もつと金の取れる處に

いつてみたくつて、東京から遠くないある溫泉場へ、淺草邊の周旋屋の世話で五拾圓の前借をして料理屋のやうな處へ働ぎに出ていつた。その時も宇治の家では、人の自由意思を妨げはしなかつた。すると、いつてものゝ五六日も經たないうちに、ある朝早く、彼女は又宇治の家の勝手口に一抱えもある大風呂敷を抱へて姿を現はした。それは溫泉場からその朝暗いうちに、そうつと足抜きをして遁げて歸つたのであつた。彼女は、乘物にも乘らず、二三里の山道を、風呂敷包を背負つて驅け下りて來たので、四五日の間といふもの、足が腰が痛くつてびつこを引いてゐた。宇治もお悅も苦笑したが、そのまゝ又好い顏をして家で働いてもらつてゐた。溫順しい、骨を惜まずよく働く女であつたが、彼女は宇治の家に一と月靜つとして働いてゐると、もう何處かへ早く嫁きたくなつて、肩で太息を吹いて、針仕事をしながら沈んでゐた。

すると、お悅が、去年以來自分の處へ出入りしてゐる產婆に話してゐたところから、緣談の口があつた。向うには小さい二人の子供を遺して細君に死なれて男手に困つてゐる、生活には困らない、柄の惡くない商人であつた。たうどうその話が極つて宇治の力を假りの親元にして、六月の月内に向うへ行くことになつてゐた。そして、一方ちやうどその當日の前日になつて、彼女が折角骨を折つて二月に伴れて來た女中が又、そんな譯で歸るといふのであつた。

年中女中のことでばかり毎時氣を腐してゐるお悅は、その、むしやくしや腹を何處へ持つて行き場もなかつたが、傍に居るお咲やその女中の聽いてゐる處で、彼等に當り付けるやうにいつて、滿足な者の一人もない女中の不平を溢した。

「わたしの處では、碌に用もない時には、いつも轉々二人も三人もゐて、居なくなる時には、一人も居なくなつてしまふ。みんな勝手なことばかりして。どうしてかう、少し、……せめて一年でも續けて辛抱の出來る女中が居ないんだらう。何處の家でもさうかと思ふと、其處らの女中は何れも三年も四年も居る。そして、二人も三人も[illegible]のある家で

安い給料で、又よく働く。」お悦は顏の血の色を變へて愚痴つぽく溢したが、それは本當であつた。
翌日暇を取つて向うへ行くことになつてゐるお咲は默つてそれを聽いてゐたが、實際自分の都合の好い時ばかり、何時でも轉げて來さへすれば好い顏をして置いてくれるので、何度といふことなく出たり入つたりしてゐたことを思ふと、神經の鈍い彼女にも隨分耳は痛かつた。
しかし、お悦は、そんなに向つ腹を立てゝも、今度のお咲の緣談は、自分も一と口々を利いてゐる上に、先方では拔も宇治の家を信用して、もらひたいといふのであるから、幾ら自分の處で手づかえをするからといつて、それを伺うする譯にはいかなかつた。
すると、女中の方は、つい先刻そんな手紙が親元の方から來たと話してゐるところへ、ある男が宇治の家の勝手口の外から顏を出して、昨日お父さんから手紙が來てゐる筈であるが、自分は、今度の緣談のある男の友達で、今一緒に深川の方に、銚子から船で來てゐる。一寸これから行つて會つてもらひたい、晩までには戻つてもらふからといつて來た。
その男は丁度女中が井戸で水を汲んでゐるところへやつて來た。
女中が入つて來てそのことをいふから、お悦は、お咲に向つて、どうしたものであらうと相談を掛けたが、お咲は一寸勝手口から井戸の處に立つてゐるその男を覗いて見たが、知らぬ人間であつたけれども、口不調法な女中のいふことなどから想像しても別條もなさゝうに思はれたので、
「ぢや、いつてもいゝから晩までには必ず歸つて來てもらはないと、自家の方で心配するから。」と、お悦は念のうへにも念を推して出して遣つた。でも、その晩歸つて來るには、かへつて來た。
「それでお前向うへどういつて返事をしたの？」とお悦が訊くと、田舍者まる出しの女中は、

「わたし一人で今返事をする譯にはゆかないから、歸つてお父さんとよく相談をした上で返事をするやうにいひました。」

「ぢや、お前歸る氣なの？」お悦は訊ねた。

「えゝ。」

「いつ？」

「明日歸るつもりです。」女中は澁みながらいつた。

お悦は、それで又赫つと頭が燃えるやうに腹が立つた。

「それぢや、私の處で困つてしまふ。」と、いつたが、そんな十八やそこらの、物を知らぬ者を對手にしても爲方がないと思つた。そしてお咲に向つて、その女中の親どもの、あんまり技術を知らない勝手を攻擊した。

「あつちの方の者はみんな誰れもかれも、斯うなんですかねえ。」お悦は、お咲に向つて當り付けるやうにいつた。

それで、ともかくも一人代りのあるまでは居つてもらはねば、お咲自身もこゝの家に對して困ると、彼女から話して聞かした。女中は殆どまだ自分の自由意思といふものを持つてゐなかつたが、宇治の家ではそれから必死になつて處々方々へ口を掛けてゐたが、何時になつても代りは出來なかつた。そのうち暑い七月になり、八月になつて、土用が明けてから一層秋暑が酷しかつた。女中の代りはないが、その後も親から度々手紙が來て、早く歸れと迫つて來た。それで田舍は舊暦のお盆なので、お悦もそれまでには必ず歸さねばならぬといつて、十日の日にたうとう女中を返した。

女中が一人も居なくなると、宇治の家では忽ち困つてしまふのは眼に見えてゐた。宇治の仕事が忙しいうへに、あれから一層暑さ負けのしてゐるお悦は、朝六時から夜の八時九時まで一日毎日々々、[illegible]

に苦められてゐた。

どうかゝうか人の顔が分るやうになる二月から半歳ばかり續けてゐた、その女中には子供もよく懐いてゐて、父親の宇治が手を出しても、そつぽうを向いていかうといはないのに、その女中には、おつぱいをくれる母親と同じやうに嬉んで、いつた。祖母といつたやうな年寄りの手のゐない宇治の家では、そんな女中に往つてしまはれると、やつと少し月の抜けてゐたのが、又、子供のことはお悦一人に押被さつて來た。

宇治はもう遠から、夏になつたら、確りした留守居を賴む者を見付けて、何處かの涼しい處へお悦と子供と女中を伴れて遣つて置きたいと思つてゐたのであつたが、そんな次第で、留守居をしてくれるやうな者はおろか、女中にさへも差支へた。たうどう夏中を何處へも行かずに過して來た宇治は、それでもさすがに八月の中頃になつてからは大分疲勞を感じて來た。それに、その十日に、役に立たぬやうでも半歳もゐて、家の事がやつと幾らか飲込めて來たところで女中に去かれてしまつてからは、一月から二月頃も二た月ばかり出つ入りて雇つてゐた派出婦を雇つてゐたが、そんな處から來る渡り者には横着な者も多かつたし、そんな通りすがりのやうな者に大事な子供を抱かしたりするのが、宇治にもお悦にも厭であつた。

「家の中に年寄りといふ者の必要なことを、つくぐ感ずる。大抵若い母親などゝいふものは、子供をお祖母さんに育ててもらふやうなものだ。」宇治は心からそれをいつて、爲方のないことを溢した。

「そりやお祖母さんがあるといゝんですよ。其の間は大抵お祖母さんが見てくれるから。」お悦もいつたが、何方を向いてみても宇治の方にもお悦の方にもそんな祖さん母はありはあつても、高齢であつたり、そつちにも手が足りなかつた

りして役に立たなかつた。

爲方なくお悅の肩や手を休める爲に派出婦が代つて子供を抱かうとしても、馴染むまでには、どうしても四五日はかかつた。そしてその四日か五日も居ると彼等は、多くの場合、その横着なのに、此方から愛想を盡かして人を代へてもらつた。

「私も大分疲れて來た。二三日で一と仕事區切りが付いたら、一寸一週間ばかり何處かへいつて息をついて來たいなあ。それには、好い女中は急に望めないとしても、せめて派出婦に好いのが來てくれないかなあ。」宇治は、旱魃に低氣壓を望むよりも、むしろその方を待ち望んでゐた。

そして、階下の北に向いた三疊の室に小机を置いて、それで仕事に寄つてみたりしてゐたが、子供は座敷中を這ひ廻はつて、何にでも手を出した。又彼は二階の、定つた場處に驅け上がつた。それでも彼れは二十二日までには必ず書いて渡さねばならぬ物があるので、やつぱり蒸暑い二階でせつせと筆を動かしてゐた。

二人めに代つて來た派出婦も、五六日居て、横着なところが眼に付くと、お悅は、「あんた、慣れない仕事で疲れたでせう。疲れたら、暫らく他の人に代つて休んでもらつてもいゝんですよ。」といつて、體よく斷はつて返へした。そして、いくら眼に餘るほどの横着者であつても、それが去つてしまふと、あとは忽ち差支へてしまつた。一つ井戸を汲み合つてゐる隣家には、去年の震災後にそこに越して來る前からもう足掛け三年も居るといふ、二十ばかりの女中がずつと一人續けて一日よく立ち働いてゐるうへに、そこには十四五の男の子が一人あるきりであつた。細君など滅多に井戸端に出て水を汲んだりすることはなかつた。お悅は、ちつとも凝としてゐない子な

に惱まされながら宇治と顏を突合はしてゐると、何といふことなしに、氣が焦々して來るやうであつた。

「こんなに手數のかゝる子供を見たことがない。」

始終愚痴のやうにいつて溢してゐた。一體お悅は愚痴つぽい女であつた。どうかすると彼女は子供の產れたことにすら、よく愚痴を溢した。しかし、宇治はそんなことの對手になつてゐなかつた。

「そんなことを今更いつたつて爲樣がない。」

宇治は、ない時には子供を望みもしなかつたが、出來た子供を、これが生れなかつたらばなどと、後悔したことは一度もなかつた。そして、子供が生れると同時に、それまで入籍してゐなかつたお悅の入籍の手續きをも濟ました。お悅と宇治とは、これまでの境遇や經歷の相違、その他の關係から、今後の生涯を共にするには、必ずしも、さうするのが、お互の將來の幸福であるか、どうかは考へ物であつたが、しかし、これまで長い間相應に世間といふものを見て來てゐる宇治は、お悅さへ宇治に順應して行く氣さへあるならば、彼女を生涯の同伴者とすることに格別不都合を感じなかつたのである。といふのは、教育の程度が低いとか、彼女の實家がどうであるとかいふやうなことは、血統などに關係のない限り、宇治は、今となつては、それを東や角云つてゐなかつた。たゞ彼女が、宇治によつて營まれる、今後の、此やかな一家の生活をお互に幸福なものにする上に聰明なる理解を以つて順應し、自分達の老後の生存の安全を保證する方法を立てるうへに就いても宇治の心持をよく飲込んで、和合しさへすればよいと思つた。

すると、お悅の方では、自分と宇治とのつり合をどう考へてみてゐるのか、始終邪推と僻見と嫉妬とに惱まされてゐた。何時でも宇治の爲に放り出されさうな氣がしてゐるのであつた。宇治も、もう相當に考を定めての上のことであるから、自分では少しもそんな氣もなかつたのであるが、殆ど性來の病的ともいつていゝお悅の、さういふ不安は直らなか

つた。宇治は自身で、以前の自身と大分違つて來てゐることを、十分確信してゐるが爲に、お悦のそんな不安を、可笑しくも思つたり、可哀さうにも思つたりするのであつたが、あんまり沒分曉の、お悦のそんな性癖を露骨に見せ付けられると、彼女の生ひ立ちとか教育の不足とか、從來の生活の境遇とかいつたやうなことでなしに、その現前の悪い性癖に手古摺らされて、その爲に、何も斯も我慢してゐるお悦が厭はしくなることが度々であつた。

一度など、宇治が、彼の先輩や友達と五六人で久し振りに親しい夕食の會合を日本橋の方でする晩であつた、彼が衣服を更めてこれから出掛けようとすると、穩かならぬ顏をしてゐた彼女は突如宇治の胸倉に打突つて來て、羽織の紐を千切つたり、宇治が大切にしてゐる結城の袖口を綻ばしたりした。宇治は、たとひ藝者遊びに行くのであつてさへ、そんなことを、お悦がするのは可くないと思つてゐるのに、さういふ性質の會合へ出掛けようとする場合であつたから、つくづくお悦の病的な邪推と嫉妬に愛相の盡きる思ひがした。「この女を、大分見違へてゐたな。しかし自分の不明だから爲方もないが……」と心の中で思ひながら、不快な氣持を胸一杯にして出ていつた。

お悦が突如自分の方から宇治の頭に手を上げて打つて掛つたり、まるで猫のやうに宇治の手だの顏だのを引掻いたりする病的行爲は、先の生傷がまだすつかり癒り切らぬ時分に絶えず發作的に始まつた。一度など、お悦は、平掌を上げて不意に宇治の額を厭やといふほどひつぱたいたので、宇治は眼から火が出るほどの目に遭つた。その時は、宇治も流石に心から憤つた。

「俺の身體には金がかゝつてゐる身體だ。何の爲にそんな不埒なことをするんだ。……俺の兄弟は、みんな田舎にゐるが、それ等の家内に一人だつてお前のやうな者はない。」といつたが、彼は、もう段々年も取つて來たことであるし、晩にどうかして靜かな生涯を送りたいと、それはかりを思つてゐるのに、こんな女に係り合つたものだと云つた。お前は

彼の女を、そんなことを毎度繰返へされても、なほ耐えて置かねばならぬほど、惚れても居なければ氣に入つてもゐなかつたが、さうして、世間體も公然と一旦一緒に棲んでゐる者を、又出すの別れるのといつては、折角年齢相當に近頃大分落着いて來て、世間からもそう見られてゐる自分の行爲を破壞したり、引いては多少の信用を傷けるのが殘念さに、どうかしてお悦のそんな厭ふべき性癖を直したいと思つて耐忍してゐた。彼は、今から一と息若かつた先の獨り身の時分と異り、今は自分に浮氣な慾望など殆ど全くといつていゝくらゐ無いことを自分で知つてゐるので、お悦のそんな病的な嫉妬や邪推や僻見に原因する不作法なる亂暴に、一點の割引きをして考へなければならぬところはないと思ふのであつたが、お悦を出して又ほかの女に取替へるなどといふことは、自分の利害と道徳上からは、そんな次第なので、毛頭考へないことゝ思ふのであつたが、それを實現するのが面倒臭いと思はれるほど、彼はもう、そんなことを臆劫がつてゐるのであつた。そして、何時かは、いくら病的のお悦でも、宇治の日常を觀察してゐる間にはよく彼の心持ちが解かる時が來るであらうと思つてゐた。

けれどもお悦のその性癖は、性來のものと思はれて、とても直りさうになかつた。宇治が少し小言でもいふと、彼女はすぐ、

「氣に入らなければ早く出せ！」といつた。宇治は呆れた顏をして、

「氣に入らなければ早く出せつて、出すくらゐなら、小言も何もいはない。」

「口から出まかせをいふない。出すには金が入るから、その金が惜しいんだらう。」まるでそこらの印袢纏を着た土方か何ぞのやうな口を利いた。

「金が惜しいんぢやない。お前のその惡い性質を直さなければ、その惡い性質で、お前自身、自分の境遇を破壞してゐ

「る。やうなものぢやないか

「悧巧ばつたことをいふな。」彼女は栃木訛りでいつた。

宇治はつく〴〵持て剩したやうに、

「お前といふ人間は、損な性分だなあ。」と腹の底から呆れてゐた。

そんなことは始終のやうにあつた。自分でも、そんな場合には、愚かと知りつゝ少しも負けて居られない性分の宇治ではあつたが、年を取つて勘辨がつくやうになつたのか、宇治は何時でも最後には自分の方から默つてしまつた。そして、これでは到底駄目なものだらうと、彼は腹の中で考へてゐた。不思議なものといはうか、夫婦喧嘩は犬も喰はぬといふ諺のとほりか、そんな狀態のところへ彼女はいつしか姙娠してゐたのであつた。

普通に結婚した、精神の健全な婦人でさへ、姙娠期には、往々いろんな心理的變態を來して、泣いたり憤つたり、又は夫を打つたりするものださうであるが、平常でさへそんな病的性癖の强いお悅が姙娠後にそれが一層募つて來たのはいふまでもなかつた。宇治が偶々女中に優しい口を利くのさへ、屢々彼女の神經を刺戟した。宇治は遂にお悅に絕望してゐた。

胎兒についても宇治は、これまでの生活の結果から、自分の體內に有りはせぬかと思ふ病毒の遺傳を酷く氣づかふとゝもに、母親のそんな病的な精神狀態が胎兒に影響することを、より以上に心配してゐるので、世間的に少しも樂天的な期待などを持つことが出來なかつたけれども、今の場合一人子供が產まれたからとて、格別生活上に差支へを生するとも思はなかつた。丁度胎兒が九ケ月の時に、あの恐ろしい大地震があつたが、この頃健康の優れてゐた宇治は、東京市の慘狀を一度見て歩きたいと思つたけれど、お悅の不安をすこしでもなだめてやりたいと思ふのと、自分が臆病らしい

燒死體などを見て來た話などをして、それが胎兒に惡い影響を與へたりすることを恐れて、震災後半月ばかりは何處へも出て往かずに、ずつと家に落着いてゐた。

そして、その翌月の月半に安々産まれた子供は、宇治がひどく杞憂してゐたよりも健全であつた。これまである不安と不足とに驅られてゐたお悦の境地もそれで一段落ついて、確實なものになつた。

宇治は一日の中にもう何度となく赤ン坊の顏を覗いて、早く子守を附けて幼稚園に遣る時の姿などを空想して、それを口に出してゐた。お悦も一と月ばかりするうちに産後の健康も本に復して、それから冬を越して春になるまで約半年ばかりの間は無事と平和との間に過して來た。そして四月五月頃になると、どうした譯か、又彼女の惡い地金が折々出て來た。ひどくなると、宇治が何か一寸した組織的な小言をいつたのに腹を立てゝ、突如子供をそこに放り出しておいて、立ち上つて來て、瘦せた宇治の身體を、ぐい／＼胸倉をとつて小突きながら、壁や襖に押詰めて、處嫌はず噛み付いた。宇治は時によると指の肉の千切れて下るやうな負傷をさへした。彼は、自分でも、どうして自分はかう眞劍に腹が立てなくなつたのであらうと、不思議に思はれるほど、そんな狂暴なる亂行に對しても勘辨づよくなつてゐた。さうかといつて、お悦には、どんなことをせられても甘受するといふやうに、彼女に惚れてもどうしてもゐるのでは決してなかつた。が、唯ひたすら冷靜な思慮から、子供が可哀さゆゑに何も斯も眼を瞑むつてゐた。それでも心の中では、こんな事を度々繰返へしてゐる間に、いつ、どうした機みに子供を蹴殺すか踏み殺すか又は自分の方でも、もつとひどい負傷をするやうな事がありはせぬかと、それを氣づかつた。

お悦は、宇治よりも腕力が强かつた。大抵十度に十度まではお悦の方から先に手を出すのであつたが、宇治は爲方なく正當防禦のつもりで、後には好い手を思ひ付いた。お悦が狂暴な眼の色をして、いきなり立ち上つて武者振り付いて

來る時、彼は自分の方でも負けずに機先を制してお悦の頭髪を捉んだ。そして、自分の腕の痛いほど、それを宗に絡んで、お悦の攻勢を防いだ。彼女は頭髪を捉まれて、倍々猛り狂ひながら隙を狙つて宇治の腕を引掻いたり、噛み付いたりした。そして足を擧げて宇治の腹を蹴つた。腹を蹴られて、もし內臟に負傷でもするやうなことがあつては大變であると思つて、やつぱり後には宇治の方から手を放して、遁げ出すのであつたが、どうかして、うまく頭髪を捉まれてそこに横倒しになつて、ひい〳〵肩で息をしてゐるお悦に向つて、彼は、涙こそ流さぬが、腹の中では男泣きに泣きたがら、毎時いふことを言葉に力を入れて繰返していつた。

「實になさけない人間だなあ。……お前は一體何で、そんなことをする。どたばた〳〵荒れ狂つて。……近處隣りへこの物音が聞えずにはゐない。お咲さんやお竹などの手前見つともないぢやないか。……私のいつたり、したりすることに何處に不足がある。この罰當りめ！　私はな、そんなことを今更いはなくつても、お前にも分つてゐるだらう。外に出て唯の一度だつて餘計な小使錢を使ふではないし。……私は此のとほりあんまり健康でない上にもうい丶加減年を取つてからの子供だ。運よく十年生きても、私が死んだ後で、まだ十歳かそこ〳〵で、父親の亡くなつた子供がそこを歩いてゐる姿が今から眼の先きに見えてゐる。……そんな時のことを思ふと、片時も安心してゐられない。どうかして三人の者が無事の日を暮して、私の死んだ後でも、あとの者が二人路頭に迷ふやうなことがないやうにと思つて私が苦心をしてゐることが解らないのか……私のすることに何處に不足がある。この罰當りめ！」宇治の聲は涙と憤りとに慄えてゐた。彼はさういひつ丶宛も猛獸の傍を離れるやうに急いで飛び退くと、彼女は又むくりと跳ね起きて躍り掛つて來るのであつた。

「お咲さん、子供に負傷をさせぬやうに氣を附けてゐて下さい。負傷をさせぬやうに氣を附けて下さいよ。」宇治に[illegible]し

く、子供を抱いて遠くへ離れてゐるお咲に聲を掛けながら、座敷中猛獸を逃げて廻はつた。

初めてその光景に接したお咲と女中のお竹とは、何うして可いのか、唯はら〱として仲に入つて引留めてゐたが、後には、そんなことが度が重なるので、あんまり爭ひが凄ごくならない限り、遠くから二人の氣配に氣を附けつゝも餘處眼に見てゐた。

　そして幾らか彼女の鎭まつたところで、宇治は、心の中で、今の自分の年になつて、こんな見ともない粗野な騷ぎをしなければならぬのを、つく〲情けなく思ひながら、彼女に向つて、

「何が不足だ、……罰當り！」と憤りを含んで叱るやうにいつた。

　すると、不貞々々とむくり返つてゐるお悦は、何處までも惡たれるやうに、

「憚りながら、罰は當らないんだから、……まだ罰が當つて病氣になつたことは、唯の一度もないんだから、…………手前（てめえ）こそあの態（ざま）は何だ。頭痛がして反吐を吐いたのは誰れのお蔭で癒つたと思つてゐるんだ。」

「そんなことを今更云はなくつても、よく解つてゐる。お前の療治で癒つたことは、承知してゐるよ。」

「そんなら默れ！」

「そんなら默れつて、……そんなことは今關係がない。」

　宇治はもうそれ以上對手にしなかつたが、それでも默つて居られず、もし何か組織的な訓誡めいたことを少しくどく續けていふと、お悦は、狂氣のやうに、

「知らん〱〱〱〱〱」と、自棄（やけ）にいつて、兩手で耳に蓋をしてしまふ。

　宇治は、そんな時よく、彼女に向つて、

「お前は芝居でする鬼怒川の累のやうな解らず屋だ。まるで、憑者でもしてゐるやうだ。」と口に出していつたが、腹の中でも全く、これは何か憑いてゐるのではあるまいかと思ふことがあつた。與右衛門が、心の中で男涙に、何といつて割つ口說きつ道理をいつて聞かせても、それをいふほど梅幸の扮した累は段々凄味になつて、女性に固有の邪推と僻見と嫉妬との結晶になつていつた。お悅がそんなもの丶やうに思はれた。

兩性の立場から見た女のことについては、もう何もかも諦めてゐる宇治は、曾て一度もお悅について贅澤な不足がましいことを口に出していつたことはなかつた。たゞ日常の生活について相當に細かい注意が行屆きさへすれば、それでよいと思つてゐるのであつた。その點については質素なお悅は節儉をすることも知つてゐれば、又汚れた物を何時までも押入れの中に突込んで置くやうなこともなかつたが、彼女は、宇治が、お悅自身でもよくその用向きを知つてゐる外出先きから歸つて來ても、快よく「お歸んなさい。」と言葉を掛けたこともなかつた。何處から歸つて來ても、そつぽうを向いて、知らん顔をしてゐた。實際、外で無駄な金づかひをせぬ宇治は、用向きの分つた外出のほかには、たゞ銀座の方を散歩するとか、牛込あたりの知人を訪問するとか、又は武藏野の田圃を歩いて來るくらゐのものであつた。一體が細かい事にまめな宇治のことであるから、元から、着物の出し入れや、自分の寢床の上げ下ろしから、脫ぎ棄てた洋服にブラッシを掛けて始末をすることまで、みんな彼が自分手でして、お悅や女中の手を殆ど煩はすことはなかつた。

宇治が、子供が出來てから、偶に、泥棒を捕へて繩を綯ふ位のとほりに、出來ぬ中から少しつゝ何かの形で金を遺して置かうとして、そんな用事などで外を歩き廻はつて疲れて内に戾つて來たりした時に、お悅の、そんな佛頂面を見ると、思はず勃然とするのであつたが、そんな時でも自分の方から先きに言葉を掛けた。それでも彼女は返辭をせぬことが多かつた。

宇治は心の中で、いつも〳〵不貞腐れたやうな顔をして、この女は何が一體不足なんだらうと思つた。紙を張つた支那鞄一つの中に貧しい衣類を少しばかり持つてゐるだけで、銘仙の單衣より上等の物を着たこともなかつたのであるが、宇治は自分がそんな物に趣味を持つてゐるところから、高價な結城縮の單衣だの、薩摩上布などを默つて買つて與へた。

「わたしなんか、そんな物を着ると、勿體なくつて身體が腫れてしまふ、自分で仕立てゝ着たらいゝでせう。」といつてゐたが、無論彼女は買つてもらつて、決して惡い氣持ちはしなかつた。

「なに、私は、そんな物も一とほり持つてゐるんだから、餘計に入らない。ごた〳〵つまらん物を持つてゐるより、季節々々の上等な物を一とゝほり持つてゐれば、女だつて、それでいゝんだよ。」

お悅には、宇治と一緒になる前に、何處か鄕里の方で妻子のある男との間に出來た五六歲の女の子が一人あつた。それは彼女の親の處で大きくしてゐた。彼女は行々はその子を育てゝ獨立して自活するつもりであつたが、宇治の方へ入籍することになつた時、お悅の父親と相談の結果あとで差當り參百圓の金をその女の兒の養育費に遣ることにした。そして宇治は、此の後もう二人と出來さうにない自分の方の子供の友達として、行々はその子供をも自分の方に引取りたいやうな意向を洩してゐた。去年の春、まだ自分の方の子供の產まれぬ時分にも、宇治が一ヶ月ばかり鄕里の方へ歸省してゐた間、お悅が留守居の氣まぎらしにその女の子を呼ばして置いたこともあつた。

それで派出婦が去つてしまふと、お悅は又、あとの代りが來るまでは、自分で重い井水を汲んだり、襁褓を洗つたりしなければならなかつた。獨りでは整綻もせず一日一人はかゝりつきりでゐなければならぬ子供を背に結付けてそんな

ことをするのが暑さに疲勞した身體には大仕事であつた。尤もこれまでも、女中の碌な者に出會はさず、派出婦が始終出代つたりしてゐた、冬の時分にも、彼女が一人で井戸端に出たりしなければならぬやうなことがあると、何か不穩な決心したやうな表情をして、夜など二階で靜つと机に凭り掛つてゐる宇治の處へ子供を抱いて上つて來て、
「わたし、どうしても暇をもらひたいんです。その方が私にもいゝんです。」といつた。
宇治はその度に靜思を脅かされるやうな氣がして、眼を上げてお悦の顏を不思議さうに見守つた。
「どうして？」
「どうしてつて、……さうした方がお互に好いんです。」さういふ彼女の意味は、女中がなくつて、自分が水働きなどをするのが厭だといふのでないことは、宇治にもよく解つてゐるのであつた。それでかういつた。
「暇をくれつて、ぢや、產まれてまだ三月か四月の子供をどうするといふんだ。……そりや、女中が居なければ、こんな赤ン坊のある家では、誰れでも自分でいろんなことをしなければならぬ。決して見つともないことはない。女中の好いのが居ないためにお前に暇をやつて、家を畳むといふことは本と末とを穿きちがえるといふものだ。」
「わたしが居なくつても、これの世話をしてくれる人はありますよ。」
「それが今、おいそれと直ぐにある譯はないぢやないか。女中にさへ困つてゐるのに……それのみならず、入籍までして、ちやんと形付いてゐるものを、半歲も經たないうちに、どうしてそんなことをするか理由が立たない。」
「そんなことは何でも有りやしない。」彼女はまるで反古でも引つ裂くやうな調子でいつた。
「私は、そんな考ではゐない。たつた紙片一枚でも、それには堅い考が入つてゐる。」
お悦はそれで爲方なく又二階を下りていつた。

お悦は、それでその晩も碌に夕飯も進まず早くから子供と一緒に蚊帳の中に入つてしまつたが、宇治も晝間の暑さと執筆とに疲れて、此の頃はいつも宵を少し過ぎると、自分で二階に寢床を敷いて、廣い蚊帳の中に獨りで横はつた。そして翌朝六時頃になつて、階下の座敷で、子供が眼を覺まして氣嫌好ささうに、「やい〳〵〳〵〳〵。」と、いたいけな聲で譯の分らぬことをいつてゐるのを耳にして、樂んで起き上るのであつた。

殊に今日――二十二日――は、一寸した書きさしてゐる物を完結して、なるべく午前中に自分で向うへ屆けて、そのついでに新聞に女中入用の廣告を出さうと思つてゐたので、なほ毎時より早くはね起きて、階下に下りていつて、母子の寢てゐる蚊帳の裾をはねて、中に入つた。お悦はまだ仰向けに寢ながら、脇の下から體温器を拔きとつて見てゐたが、

「七度八分ある。」と、ひとり語のやうにいつた。

子供は傍で這ひながらひとりで遊んでゐた。

宇治はそれを聞くと、慴えたやうに吃驚した聲を出して、

「そら見なさい。だから言はないことぢやない。醫者に見てもらひなさい〳〵と、毎日のやうにいつてゐるのに、醫者に見てもらはないから可けない。……女中は居ないし、私は仕事が急がしいし、此のうへお前の身體でも惡くなつたら、お前も困るし、子供をどうするのだ。ひどくならない内に醫者に診てもらつて、藥を服まないと可けないぢやないか。」

宇治がそれを繰返して少しうるさくいつてゐると、お悦は仰向きになつたまゝ、もう氣に入らぬやうな調子で、

「藥代を惜むぢやないか。」と、たつた一と口にして惡たれた。

それを聽くと、さすがの宇治も一時に憤りが頭に上つたやうな氣がして、頭を一つがんと喰はしたいやう氣が逆るのを凝つと耐えながら、急性に言葉をどもらせて、

「なにが、私が藥代を惜むか。……此の間も私が、……それは自分も一寸腹具合が惡かつたから、藥をもらひたいと思つたからでもあつたが、それは附けたりで、わざ〳〵村松さんの處へ行つて、午後此方の方へお出でになつた序に一寸寄つて診て下さいと賴んで置いたのに、それを後でお前が自分で斷はつたといふぢやないか。……何の據があつて、この私が藥代などを惜むといふ。そんなことをいふお前の根性が卑しい。」宇治はその昨朝むくり起きから眞劍になつて腹を立てた。

それは六七日ばかり前のことであつた。宇治は懇意なかゝり附けの村松醫師の處へいつて、六月頃からどうも食慾の進まない、暑中負けのしてゐるらしいお悅のことが氣に懸つて、殊にそのまゝに放つておくと、今、ぐん〳〵發育盛りの乳兒に惡い影響があるのを氣づかつたので、序に來診してくれるやうに賴んで、ぢや晩方までに往つて診ますといふ返事を聞いて歸つて來た。そして、夕方になつても村松醫師が來てくれないので「村松さんにも困るなあ。だらしがなくつて。」と、二度も三度もお悅の居る前で溢してゐた。たうとうその晚村松醫師は來なかつた。そして翌日になつても、そんなことは決して忘れたり、おろそかにせぬ宇治は、尙ほ村松醫師を溢してゐた。すると、その時になつてお悅は、はじめて實を明かした。

「昨日枡本の酒屋が來た時に、私の方は診に來て戴かなくつても、大したことはないのですから、わざ〳〵おいでをねがはなくても、ようございますと、さういつてくれといつて、此方から斷わつた。だから來ないんだ。」

「何だ、人が折角いつて賴んだのを斷はつたりして。」

そんなことがあつた。宇治は今又そのことを繰返していつた。

「自分が勝手に醫者を斷つておいて、この私が藥代を惜むとは、何を以つて、そんなことをいふか。」

宇治はもう、お悅の三十七度八分の熱よりも、むしろさういふ惡たれた、厭ふべき性情について、心から慨歎するやうな聲を、朝の蚊帳の中で發した。

するとお悅は何處までも逆に、道理を宇治に托けて自分の非を飾らうとするやうにいつた。

「先月、村松さんの藥代が五圓八十錢あつたといつて、何度も繰返していつたぢやないか。」

宇治はそれを聽いて、倍々心外に思つて憤つた。

「何度も繰返してと、仰山なことをいふな。それはお前か、何時でも、村松さんから貰つて來た藥を、散藥でも水藥でも半分くらゐ服んで、あとを殘してゐるから、折角高價なものを、勿體ないから、さういふのぢやないか。自分の落度を棚に上げて、何も斯も、此の私のせゐのやうにいふ。何といふお前は不心得な女だらう、呆れ返つて物がいへない。」

尤も、はつきり覺えぬが、此の二三ケ月前から村松醫者の處では藥價を二三割方引上げたやうである。宇治が時々腹具合が惡いといつて二日分か四日分くらゐ貰ふ藥代も、先の時分に比べて、こんなに金高になつてゐるかと思ふやうなことが一寸々々あつた。そこへ持つて來て、七月の末に村松から掛取りに來た時の書附には、お悅の服んだ分が五圓七八十錢になつてゐた。宇治はお悅がその書附を、自分の傍に持て來て見せた時、

「五圓八十錢。今月はこんなに服んだのか。隨分高いねえ。藥代も馬鹿にならぬ。」といつた。

するとお悦は、
「えゝですよ。それは私の小使ひから出して置くから。此の間貰つたのが丁度そのくらゐある。」
「なに、藥代は私の方で出すさ。」
「えゝんですよ。それは私が自分で出す。」彼女はもうすねるやうにいつた。
「さうか、そんなら、今とにかくさうして置け。又後で私の方から戻せば同じことだ。」宇治はその時丁度晝飯を食べてゐた。

お悦はそれで、自分の財布からその五圓八十錢の分を取り出して拂つたやうであつた。一體他の商賈や何かとちがつて、主人の職業に女の手を少しも煩はすことのない宇治の家では、お悦が自分の働きによつて入る金はなかつた。彼女は本來、その免許狀も持つてゐるマッサージの技術は確かに上手であつた。宇治の四五年續けて惱まされた痼疾もその爲に癒つたことは事實であつた。彼女は獨立してその職業で自活する筈であつたのが、ついに宇治の痼疾を癒したやうなところから、初は同棲するに至つたのであつた。宇治の身體には、今、帝國大學の病院で眞鍋博士の物理治療科で用ゐてゐる按摩を絕えずやつてゐなければ、十分に健康が保てなかつた。それで宇治は屢々お悦に向つて、
「私の身體には、どうも、これを始終やつてゐなければいけない。私の經濟では女中を二人を雇ふのは精一杯のところだ。子供が可愛いから、それも厭ひはせぬが、尙ほ此の上に毎日壹圓の料金を拂つて、按摩をすると、女中二人の費用と一緒にして一ヶ月に百圓は掛る。女中が一人ならば他から按摩を呼ぶが大抵二人居るんだから、お前が毎日やつてくれゝば、小使のつもりで五十錢でも七十錢でも出すよ。」と、笑つていつてゐた。

するとお悦は、

「七十錢でなくつとも、五十錢にまけて置く。」

といつて、自分の氣に向いた時には宇治を揉んでやつたが、それが三日と續くことはなかつた。そして、

「誰れだつて、揉まなくつても小使くらゐは呉れる。」と、我儘をいふのが常であつた。

そんなことをいふのは可くない。私の身體が少しでも達者でゐて。出來るだけ今の内に勉强して置かぬと、子供が後で困る時が來るのは眼に見えてゐる。金に不自由のない者でも親に早く別れるのは不幸である。況して私などは、今のままで死んだら、どうする。」宇治のいふことは毎時そこに落ちてゆくのであつた。

「可くなくつても構はない。もう散々揉んでやつたぢやないか。揉んでやつたから、こんなことになつたのぢやないか。」

「こんなことになつたとは、何がだ？」

「自分で考へてみたら分る。」

お悦は自分が、宇治の痼疾を癒したのが、そも〳〵の原因で、宇治と一緒になつたり、子供が産まれたりしたのを後悔してゐるやうな愚痴を、何かにつけて溢すのが常であつた。宇治は、そんな阿呆なことに對手になつてゐられないと思つて、口を緘むのであつた。

お悦が今、自分の小使ひから出して置くといつたのは、その按摩をして宇治から貰つた錢であつた。お悦は、それを、

「もらふんぢやない。取るんだ。」と、何につけても物に角を立てゝいつた。

宇治は半分戯談のやうにそんな規則を立てゝ、お悦に小使を渡してゐたが、夏以來彼女がずつと衰弱してゐるので、そんな錢も溜らなかつた。しかし、宇治は、格別お悦に、區別を附けて小使錢を渡す必要を覺えなかつた。名目の立つた少し金目の出費は無論宇治の方から出すのであつた。お盆過ぎに、その薩摩上布を、お悦の思ひがけもなく宇治の買

つて來た時にも、彼は自分の方が樂しさうに
「お前に今日、大變な物を奮發して買つて來たよ。」といひいひ紙包みを解いて
「どうだ、此の縞柄は好いだらう。私は金が少ないから負惜みでいふのぢやないが、自分のでも絣よりも縦縞の方が好きなんだ。どうだ、これは意氣でゐて、それで質撲な柄だから、お前なんかにも惡くない。……高い金目の物は、かうして私が買ふから、あとの細々した物は、お前が働いて買ふさ。」
お悦はそれに背いてゐたが、たゞその時きりで、後は我儘をいつて、決して從順に宇治の療治をしようとはしなかつた。

これで宇治がさういふと、お悦は飽くまでも負けて居らず、
「あの時の藥代だつて、私の小使錢を出して拂つたんだ。餘計な事をいつて貰はない。」
宇治はそれを聽いて、つくづくと、もう、到底こんな女には何といつて聽かせても駄目だと思つたが、やつぱり默つて居られず、
「お前の小使ひだの、自分の小使ひだのといつて、私の家には、そんな區別はないつもりでゐる。一體私の家では——私の郷里の家でもさうであるが、一家の中にそんな區別のある内證金を女が、ちやらちやら財布の中でいはしたりしてゐるのが、私の死んだ父親からしてさうであつたが、今の兄もそれが大嫌ひだ。私もさう信じてゐる……又、あの時の藥代が高かつたと、此の間から二三度繰返していつたのは、何もその金を惜しむのぢやない、そんな高い藥をお前が皆まで服まないから、それでさう云つたのぢやないか。いつだつて半分以上飲み殘して、茶箪笥の上に載せたまゝに

なつてゐるぢやないか。……これほどに誠意を籠めてゐる私の言葉をお前は一體何と聽いてゐる？」

宇治は腹の中で泣き出したくなつてゐた。對手が、そんな卑しいことを言ひ出せば、自分の方でも、やつぱり、そんなことを口に出さなければならぬので辛かつた。するとお悦は、

「何と思つて聽いてもゐない。うるさい！」といつて、仰向きになつてゐた身體を、くるりと寢返りをして向うにむいて、亂れた頭髪を敷蒲團に押付けてしまつた。

暫くそこにひとりで遊んでゐた子供は又泣き出した。宇治はたゞ黯然として、穢なく、伏つてゐるお悦の不貞腐れた樣子に凝乎と見入つてゐた。近頃は、夜中に眼を覺えます子供の爲めに起されることが度々あるので、殊にさうであつたが、彼女は、子供のない時からも、朝寢で、宇治より遲く起ることも、めづらしくなかつた。やゝあつて宇治は、心の中にひどく思ひ決するところあつて、蚊帳の裾を跳ねて外に出た。そして自分で井水を汲んで急いで顏だけ洗つて、そゝくさと家を出ていつた。

彼はそれから中野の町まで往つてお悦の父親にあてゝスグキテモラタイといふ意味の電報を打つた。……もう、それまでにも、假ひ代りがなくつてもどうしても女中を歸さねばならなくなつた時、先にも暫く來てゐたことのあるお悦の末の妹を手傳ひに貸してほしいと、彼女から再三いつて遣つたのであつたが、それは何故か貸して寄越さなかつた。毎時借りつ放しで返したこともないのだが、まさかそんなことくらゐで貸して寄越さぬのでもあるまいと、宇治はいろ〳〵に氣を廻して考へてみた。確かな留守居も見附からなかつたので、家中で何處かへ暫らく避暑にゆきたいと思ふ計畫は成立たなかつたが、

「小さい子供など連れて餘處へ行くより自家にかうしてゐる方が、どんなに氣樂だか知れない。」と、お悦がいふので

「ぢや、私一人で何處かへ十日ばかり往つて來よう。」

宇治はさういつて、お悦に、彼女が、いつかも云つてゐた、何處か旅行でもして宇治が不在になる時には彼女の父親が遊びかた〴〵來て居てやるといつてゐたといふ話を思ひ起して、お悦にそんなことを書いて出さしたが、一向向うからは返事もなかつた。それにお悦が夏中どうも健康が優れないので、宇治自身からも一度遊びかた〴〵ぜひ來て來れるやうに再三手紙を遣つたのであつたが、妹も今のところ、何か皮膚病を患つてゐて外に出されないし、父親も多忙で往けないといふ、お悦の母親からの手紙であつた。お悦の母親は假名まじりの文字ではあるが筆蹟など誰れよりも巧みであつた。

宇治はお悦が、そんな譯でとかく從順でなかつたり、眞面目に藥を服まなかつたりするのに毎度手古摺るたびに、中つ腹になつて、

「私はもと他人だからい〻やうなもの〻、お前はさうぢやない。娘が手不足であつたり身體が惡くつて困つてゐるんだから、誰れか一度、あれほど度々手紙を遣つて賴むのだから來てくれ〻ばよささうなものだ。私は、自分の方で出來るだけのことをしてゐるつもりだ。」彼のさういふ腹には、親元にゐるお悦の子供に對する仕打ちからいつても決して不足のある筈はないと思つてゐるのであつた。

そして宇治は、電報を打つて戻つて來る道すがらも、先刻からの不愉快な憤怒の餘熱まだ消えず、産まれてやうやう十ケ月、母親の乳よりほかの物をまだ少しもやつたことのない子供を母親の手から離すことの可哀さから、出來るだけ辭退して來てゐるのであるが、とても手の着けやうのないお悦の親許に、すつかり愛相が盡きてしまつたので、父親が

出京するのを待つて、これまで嘗て口に出さなかつた彼女の平素の我儘、婦執狂暴を有體に話して十分に父親から訓誡を加へてもらふつもりであつた。お悅は平素の口吻からも母親はそれほどでなかつたが、父親には威服してゐるらしかつた。父親は郷里のその村でもなか〳〵物の事理の解つた人間で、常に人に依賴されて口を利いてゐるといふことも宇治はお悅から度々聞かされてゐた。もう六十を二つ三つ出た、でつぷり肥滿した人物で、不斷は優しい眼元に始終笑みを湛えてゐた。

宇治はそれで、これまでもお悅の婦執を持て剰すたびに毎時も心で呆れながら考へた。お悅の親達は、自分の娘のこんな惡い性癖を知つてゐないのであらうかと。尤も宇治に對しては常にそんな狂暴でゐて、その癖ひどく小心で含羞性の彼女は、他人の前では、便所の掃除屋にまでも馬鹿丁寧な口を利くのであつた。たゞ一とゝほりにお悅を知つてゐる者は、彼女にそんな病的な性癖があることを知らなかつた。宇治も、これが人から强ゐられたといふのでもなく、相當思慮分別の熟してゐる彼の自由意思でしたことであるから、何とかしてその惡癖を直すより他に爲方がなかつた。そして毎時もお悅の婦執と狂暴とが募つて持て剰すたびに宇治は、子供を脅かすやうに、

「國から親兒さんに來てもらつて、すつかり話してしまふ。お前の親兒さんは、もつと物がよく解つてゐる筈だ。…………手紙でこの事を書いてやる。」といつてゐた。宇治は單に脅かすばかりでなく實際腹からさう思つたことも度々であつたが、遂に委しいことは一度も書かなかつた。それでも彼女は、そんなことを父親に話されるのを惧つた。そして、

「何も、こんな下らないことを親兒に話す必要はない。二人のことは二人で話が出來る。」と、いふのであつたが、宇治は、つく〴〵持て剰すたびに眞面目に考へてゐた。

宇治は中野の町の郵便局からの歸途、ひどく昂奮した、悲しいとも寂しいとも分らないやうな氣持ちで、自分はやつぱり長い間通して來たやうに一人で居る方が好かつたのだといふやうなことをも考へながら、パンとバタとを買つて戻つて來た。そして臺處で瓦斯の火でパンを燒いて、好きな番茶を焙じて、それでパンを食べて、奥の蚊帳の中の子供のことは氣にかゝりながら、どんなことがあつても母親の本能として、子供には非道いことはせぬといふ安心があるので、そのまゝ颯々と二階に上がつて、今日どうしても午までには終にして持つて行かうと思つてゐる原稿を急いで書き續けた。そして、自分は何處までも此の仕事を大事にしてさへ居ればよいのだと思つて、不愉快な佗しさを强ゐて高尙な心持ちにして慰めようとしてゐた。一寸した物であつたが、筆はどんどん進んで、思つたよりも早く濟んでしまひ、それがすむと、折柄雨天であつたので、宇治は寢卷のまゝの浴衣の上に洋服のうへに被るレーンコートを引掛けて、足駄穿きで停車場へ急いだ。そして丸の內に行つて新聞社へ原稿を屆け、用を達すと又すぐ引返して省電で歸つて來た。その內空も晴れて來た。歸つて臺處の方で泥の着いた足を洗ふとして、そつちへ廻はると、流し元に二十一二の若い女が居て洗ひ物をしてゐた。おゝ、もう派出婦會から代りの女が來たのだなと思つて、ほつとした。そして足を洗つて玄關の方に來ると、門の內に植木屋が來て、いつぞや賴んで置いた西日よけの篠竹を持つて來て植えてゐた。あゝ、植木屋も來てくれたなと、それにも滿足を感じて木戸から、ずつと緣側の方の庭に廻ると、植木屋は、それも賴んでおいた芙蓉を丁度いゝ位置の處に植えて土をかけてゐた。

お悅は、朝の蚊帳の中の、寢穢ない不貞た樣子は、けろりと忘れたやうな顏をして、子供を緣側で遊ばしながら謙遜な植木屋と話してゐる處であつた。宇治は好い氣嫌の顏をして、

「どうもご苦勞でした。」と、植木屋に言葉をかけた。それからお悅の方を向いて、

「代りが早速來てくれたな。」といつた。

お悅は氣嫌が直つて、

「えゝ、今度のは、なか／＼働けさうです。村松さんの處に五十日も居つたんですつて。」

「あゝ、さうか。村松さんにそんなに長く居つたのなら、性も知れてゐる。」

宇治もお悅も、何だか好さゝうな派出婦が來てくれたのを、口に出し合つて悅んでゐた。

「まあ、二三日爲ることをよく見て、安心出來るやうだつたら、私も暫く何處かへいつて、も少し仕事を爲なければならぬ。」宇治は、いつてゐた。八月の一日限りにある會社へ少許の金を纏めて拂込まなければならぬのが、延期してもらつてゐて、どうしても月一杯には遲くも拂はなければならなかつた。

「今度のは好さゝうですから、家は大丈夫です。留守になつたら誰れも來るものがないから……」

植木屋は芙蓉を植えてしまつて、尙一つ二つ芭蕉などの位置を植え替へたりして、奇麗に土をならし、ついでに腰から剪を拔き取つて、そこらの樹木の枯れ枝を拂つたりしてくれた。

「やあ、どうも御苦勞さま。お蔭で奇麗になりました。」宇治はさも氣持ちが、さつぱりしたやうにいつた。

「まあ、休んで下さい。」

植木屋は、近いところの柏木の可なりの大地主であつた。

お悅は、女中に氷を取つて來させて、シトロンを注いで植木屋に進めたりした。

お悅が、はじめ、宇治が自分で、折角わざ／＼賴んで來た醫者を斷はつてやつたりしたのも、一つは彼女自分だけの

腹の中では、ひよつとしたら、又もしか妊娠でもしてゐるのではないかといふ輕い疑念も抱いてゐるからでもあつた。

あまりに無智な剛情を張つたのが原因で、めづらしくない言ひ合ひを宇治とした時、お悦は毎時の口癖を又はじめた。

「そんなに氣に入らなければさつ〳〵と出せ。」

「何も、そんなことをいはないぢやないか。……そんな下等な口を利くのが氣に入らないのだ。」

「いくら云つたつて、これで今まで通つて來たんだから直らない。」泣くやうに我鳴つた。

「直さうと思はないから直らないんだ。」

「直さない。……こんな處に居ないから直さなくつてもいゝんだ。」

「あゝ、ぢや。お前の好きなやうに出ていつてもらはう。出ていつてくれ。」

宇治は幾度となく、そんな決心を腹の中でしたが、乳兒のことを思ふと、毎時も鐵のやうな強い決意が、すぐに鉛を熔かしたやうに弱く鈍るのであつた。が、一度そんなことのいひ諍ひをしたあとで、宇治は例になく、ひどく決心した顏をしたまゝ、棄てぜりふを殘して、颯々と二階の書齋に上がつてしまつた。あとで、お悦は――その時も丁度、も女中派出婦も來てゐない時であつたが――子供を背中に結附けたまゝ階下の座敷に這伏さつて、近處にも響く聲を揚げておい〳〵泣いてゐた。宇治は、古人の云つた婦女と小人は養ひ難しといふ金言を今更のやうに思ひ起してみたりしたが、もう同情も可憐も打消されてしまつてゐるので、獨りで頭振りをふる氣になつて、そんな愚かしいことに大切な頭腦を疲らせまいと努めた。

そして又少時して宇治が階下におりてゆくと、彼女は、今までの泣き顏を、きつとした表情に更めて、身體の異狀について實を明かした。

「これさへどうかしてもらへば、わたし此處に居ないんです。……その方がお互に好いんです。」といつた。

宇治は、初めてそんなことを聽かされて變な氣持ちがした。そして頻りに小頸を傾けながら、

「さうかなあ！」と二度も三度も繰返していつてゐたが、それがもし、その通りであつたとしても、お悦自からの、常に心の落着かないやうな病的の性癖さへ何事もなくなれば、兄弟友達が、あとも一人くらゐ有るのは、たとひ定命であつてさへも結局早く父親に死別れねばならぬ運命の下に生まれて來た子供の爲には寧ろ悦ぶべきこと〻思つた。

「そんならそれで、早くその事をいはなければ可けないぢやないか。……たゞ、これが、もう一年後だと申分ないんだがなあ。」

「こい奴が、こんなに手數のか〻る上に、又そんなことにでもなつたら、とても身體が續かない。……これが可哀さうだ。」といつて、お悦は背からおろした子供を抱きとつて、大きな乳房をあてがつた。

「なんにしても、そんなら直ぐ村松さんに診てもらひなさい。今日でも明日でも急に。」宇治は急がした。

その翌日又宇治が散歩の足で賴みにいつて、村松醫師は一度往診のついでに立ち寄つてくれたのであつたが、もつと十分に診なければ何ともいへぬから、一度自宅へ來て委しく診察するやうに云つて歸つた。しかし、お悦は又そのま〻に二三日往かずに居つた。

宇治は、昨夜まで、一寸仕事に何切りがついたのと、今度雇入れた婦人がどうやら安心の出來さうなのとで、いくらか氣持ちも輕くなつたやうで、これならば、來月の物の執筆かた〴〵月末まで五六日何處かの涼しい溫泉場へでも行つて來ても差支へないと思つてゐた。そしてさうするには、その前に、もう疾うから話を仕掛けてゐる借地のことを決定

して置きたいと思つて、省線に沿ふた二つ三つ先の停車場附近まで散歩に出ていつた。そして、又盛返へして來た九十度の秋暑を汗だくになつて田圃や林の中を歩き廻つて戻つた。

お悦は、彼の留守の間に、昨日來た女中に子供を預けておいて急いで村松醫師まで往つたといつて、新しい顔に馴染まぬ子供が、蟲の起るほど泣いて持て剰してゐたのを隣家の妻君が抱いて賺してくれながら、横町の辻口まで、誰れかの歸つて來るのを待つてゐた。

「これは〳〵どうも難有うございました。どうも濟みませんでした。おばちやまに抱つこして頂いて、よかつたなあ。」

といつて、宇治が子供を受取つてゐるところへお悦も丁度戻つて來た。診察の結果は、それが事實であつた。

その晩お悦は又宇治と、つまらぬことからいひ諍ひをはじめた。役に立ちさうな好い派出婦が來てくれて、豊間お悦が村松醫師から聞いて來たところによるも、よく働く確かな者であることが分つたので、彼女はそんなことにも一寸安心して少し調子に乘つたやうになつて、今までの女中や派出婦のどれも〳〵揃つて可けなかつたことを又お浚へして悔しさうに饒べつてゐた。腹が立つて〳〵堪らないといふやうに夢中になつて昂奮してゐるその聲がだん〳〵高くなつていつたところから、彼女が自分で持て剰しながら、やつとの思ひで折角ぐつすり睡つた子供が又その爲めに眼を覺ましてしまつた。宇治も、お悦の、そのあまりに愚かな粗野が堪らなくなつて、彼も亦た聲を高くしてお悦をたしなめた。

するど彼女は、

「あ、喧しい。さつ〳〵と二階に上がつていつて寝ろ。」と宇治に向つて又喰つてかゝつた。

「それは一體何といふ言葉だ。……何も今まで居つた女中のあらを此處でお浚へする必要はない。そんなことはいはなくつたつて分り過ぎてゐるぢやないか。用のあることで大きな聲を出さなければならぬことがあつたら貴方もたい

が、そんな無用なことに大きな聲を出して、折角寢付いた子供を起すといふのはお前の愚かといふものだ。………お前のやうな下等の人間が居つては女中も居つてはくれない。」宇治は、暑苦しい晩とてまだ開放した緣側に立つて怒鳴りながら、不快に滿ちて、どんどん二階の自分の室に上つてしまつた。その後でお悅は一晩中氣分を惡くして寢てゐた。そして、又夜中に起上がつて泣きながら鄕里にあてゝ、長い手紙を書いたりした。それを夜の明けるのを待つて自分で郵便に出しに往つた。

翌日になつて、一昨日來たばかりの派出婦は、朝からひどく蟲齒が痛むといつて優れぬ顏をしてゐたが、お悅は近い處の齒醫者を敎へて行つて來させた。女中は間もなく歸つて來て前より一層疼み出したといつて、暫く女中部屋に橫になつてゐたが、

「まことに濟みませんが、今日一日だけお暇をいたゞいて宿へ歸らしてもらひます。そして休んでみて、明日になつても、まだ可けないやうでしたら早速他の人に代つて來てもらひます。」といふ。

宇治もお悅も、今度こそ折角好さゝうな女が來てくれたと思つて喜んでゐたところなので、ひどく落膽しながら、同じやうに、

「今日一日くらゐ何もせずと、家で休んでゐてもいゝから、ぜひ居つておくれ、ちつとも遠慮は入らぬから。」と言葉を盡して留めたが、女中はそれでも、高い給料を戴いた上に一日休ましていたゞいては申譯がないといつて、風呂敷包を始末して歸つていつた。

宇治もお悅も等しく失望の眼で、女の歸つてゆくのを見てゐたが、昨夜からの不快な氣持ちが惡い宿醉の如く二人と

も殘つてゐるので、彼等はお互に口も利かうとしなかつた。そして又しても年中惱まされてゐる手不足の不安が暗く押被るやうに彼等を襲ふた。宇治は又默つたまゝ二階に引揚げた。

と、それからものゝ三四時間も立たない、午過ぎになつて、又三十近い他の女が派出婦會から上りましたといつてやつて來た。まあ上がれといつて、上には通したが、そんな者には馬鹿鄭寧な口を利くお悅もさすがに暫時は向うから何か話し掛けても返事もせずに不機嫌な顏をしたまゝ默り込んでゐた。お悅も宇治も、なるべく今朝行つた女が戾つてくれればよいがと心待ちにしてゐたのが、又もや見も知らぬ者が來たので、まるで自分の家が餘處の家か何ぞのやうに落着かぬ散らけた氣持ちにならされた。

でも、それから少時して働かしてみると、爲ることは思つたより鄭寧であつた。

二三日して宇治は、今度の雇女はどうやら、自分が不在にしても安心出來さうなので、こゝ五六日の間を急ぐ執筆をする爲にいよ〱何處かの溫泉場へでもいつて仕事をしようと思つてお悅にそのことをいふと、彼女は、

「もう四五日のことだから待つて下さい。この間親兒に――」彼女は父親を呼ぶに父ともお父さんともいはなかつた。――手紙を遣つてあるんですから、何處へも行かないで親兒が來るのを待つて、わたしの事の話を、さつぱり附けて、行くなら、どこへでもいつて下さい。」と、眞顏になつていつた。

つまり暇を取るんだから、その結末を附けてくれといふのであるが、そんなことは、宇治が何か一寸した小言をでもいふと、必ず二の句に彼女の口から出ることであつたから、宇治もめづらしくないこと〻思つてゐるのであつたが、しかし、こんなことを、何かといふと、すぐに輕々しく口に出すやうなことでは、どんな小さい家庭であつても、此の先

到底和樂な一家を續けることは不可能であると思つて、宇治も近頃は、心の中だけで少し眞劍になつて考へてゐた。

するとその晩か翌日お悅の父親から宇治にあてた手紙が來た。それは二三日前宇治からの電報を受取つた後で書いたものであつたが、どうあつても多忙で今のところは出京出來ぬといふのであつたが、そして、その手紙のをはりに、自分の方の孫が此の間百ケ日を濟ましたから、そのことをお悅に傳へてくれと特に書いてあつた。その孫といふのは家をやつてゐる、父親の次男の長男であつた。宇治はそれを見て、何といふことなしに、その子供の誕生の祝ひ物を催促せられたやうな氣がした。さう思つたのは、何か祝ひのしるしをしなければならぬと心に掛けながらも、連日の炎暑とお悅の夏病みやら、宇治自身の多忙やらで、ついそのまゝにしてゐるので、その爲に宇治の方で多少邪推したのであつたかも知れぬが、宇治自身としては、何時となくほのかに洩れ聞いてゐる、お悅の次弟に當るその次男が、お悅が先に産んだ女の子を、その弟に世話を掛けながら、勝手に宇治と同棲したり、又、子供を産んだ結果、籍まで移して宇治の處に嫁入したりしたことについてひどく惡感を抱いてゐて、その爲に父親や、妹などが東京に來て偶に宇治の處に客になつたりすることを常に嫌つてゐるといふことを知つてゐるので、子供の厄介を掛けてゐるお悅の立場としては兎も角も、宇治はそんな話を耳にする度に、格別それくらゐのことを氣にも留めなかつたが、しかし、常にそんなことを考へてゐるといふお悅の次弟に對しては少しの好意を持つことが出來なかつた。お悅との同棲が世間普通の婚姻に成つたものでなかつたので、勿論宇治は、お悅の實家も知らなかつたし、東京に定住してゐる彼女の弟妹の他はその次弟などにも會つたことはなかつた。それで、何となく祝ひ物の催促でもしたらしい、その文面を見ては輕い不快を感じたのであつたが、高が銘仙の半反や一反やそこら何でもない宇治は、そのうち序の時で可いと思つてゐた。

その手紙の樣子では、父親は、お悅は又自分で、どんなことを云つてやつたか知らないが、彼女のいふやうに急に出

京するらしくも思はれなかつたのと、いくら彼女が口癖のやうに、明日にもすぐ此の家を出て行くといふやうな昂奮したことをいつてゐても、いよ〳〵實際となると、そんなことは容易に斷行せらるべきものでもなく、宇治は固より、何より第一に子供の爲にそんな輕擧に出でることを甚だ好まなかつたので、そんな無益な言ひ爭ひに、さうなくてさへ暑苦しいこの頃の日を續けてゐるのが、ほと〳〵馬鹿らしくなつたので、どうあつても此の五六日の中にぜひ形付けてしまはなければならぬ執筆の仕事を携へて伊香保の溫泉に往くことにした。晦日のことなども滯りなくお悅にいひ殘して、彼女は、宇治の小道具を入れる手鞄の始末をしたりして、彼は二十九日の朝立つて往つた。

伊香保は宇治の想像してゐたとほり、夏中雜踏してゐた避暑客が丁度月末になつて、殆ど全部引揚げて去つた後で極めて閑靜であつた。彼は、好い時に來たと思つて、夏中つゞけて氣怠しなかつた體が、はじめて、やつとのんびりとした氣持ちになつた。さう思つて安心すると、何だか長い間の疲れが一時に發したやうで、却つて妙に神經衰弱に罹つたやうな氣持ちさへするのであつたが、出來るたけ心を使らぬやうに四五日の間は、つとめてたゞの湯と散歩とに消してゐた。

それでも空氣が清澄なるにつけ、山々の眺めが美しいにつけ、溫泉の香が懷しいにつけ、宇治は毎日、まだ秋暑の淩ぎ難さを思ふて、お悅と子供との無事を心に祈りながら一日に一度は必ず繪葉書か手紙を出してゐた。お悅からは來た晩すぐ宿を知らしてやつてから三日めに、簡單な用事の手紙が一度來たきりであつた。

そして五日めの午前、宇治はいつものとほり涼しい木陰の道を散歩して歸つて來て、一浴して汗を流し、座敷に戾つて休息してゐるところへ女中が郵便を持つて來た。何處からか、書く物の催促であらうと何の氣もなく受取つてみると、表には發信人のしるしもなく、封を切つて讀むと、

オクビヨウキオカヘリタノム

とある。宇治は初め一寸判じかねたが、たつた一人の兄が長く東京に年期を勤めてゐて、つい半月ばかり前にその兄が死んだといつて、ひどく憂ひに沈んでゐた係りの女中が傍でその文句を見て、

「奥様が御病氣でゐらつしやるんでせう。」といつたので、はじめてそれと分つた。さう分ると宇治は、つんと胸を一つ突かれたやうな氣持ちがした。電文で想像すると、留守を賴む女中が打つて寄越したものらしい。

それから俄に支度を調へて歸途に就いたが、宇治は電車の中や汽車の中で、病氣はどの程度の病氣であらうかと想像してみたが、自分の欲目かそんなに重態のやうには思はれなかつた。それでも歸つて見なければ安心出來ず、心の急ぐほど汽車が遲いやうに思はれ、まだ東京までは二時間もある内に日は遠くの秩父連山の彼方に沈んで窓外の野は刻暗に包まれてしまつた。

そして上野驛からすぐ自動車に乘つて、東京西郊の自宅まで急がしたが、だん〳〵道が近くなるほど頻りに氣が焦つて來た。門の外で自動車から飛び下りて、入口を入ると、そこへ立ち表はれたのは、お悅の直ぐの弟の慶吉であつた。

宇治は玄關に突立ちながら、靴をも脫がず、

「おッ！　あんた何時來た？」

「う、私は今日少し先きに來たばかりです。」

「病氣を知つて？」

「いえ、たゞ何といふことなく、ふらりと來たのです。」

「さうか。それでも、それは丁度好かつた。……そして病氣はどんな具合かね？」

宇治は庭に突立つたまゝ吃驚してしまつた。そして開いた口を閉ぢる力も拔けたやうに、

「何にも分りません。夢中です。」

「何にも分らない、夢中だ。そんなに惡いのか、そりや大變だ。一體どうしたといふんだ。」

宇治はぶる〳〵顫へるやうになる指先に力を入れて急いで靴を脫ぎ棄てゝ上がつて來た。奥の蚊帳の中ではお悅がまるで狐の憑いたやうな眼を据えて又しても起き上らうとするのを弟の慶吉が一生懸命になつて鎭めながら抱いて寢かさうとしてゐるが、すぐ又狂人のやうな表情をして跳ね起きようとする。

宇治は洋服も脫がずに蚊帳の外に突立つたまゝ、そこに子供を抱いて居る女中を顧みて、

「醫者はどうした。村松さんは何といふんだ？」と速口に訊ねた。

宇治の立つ四五日前に雇つたその女中は、主人の不在中に突發した急變に、もうおど〳〵して、聲を亂しながら發病前後の經過を語つた。

宇治が立つていつて三日めかの三十一日の朝であつたか、お悅は今朝は少し頭が重くつて熱もあるやうだからとて、女中をかゝり附けの村松醫師まで迎へに遣つた。醫師は早速來診してくれたが、心配するほどのことでもないといつて、後から藥を取りに來るやうにいひ殘して歸つた。そして月末の諸拂ひもお悅が寢床にゐて女中に渡して仕拂ひをさせた。その翌日の九月の一日になつても大した變化もなかつたが、村松醫師は來診してくれた。二日もそのとほりであつた。が、病狀は輕快にはならなかつた。主人から、伊香保にいつてからも繪葉書を寄越してくれ〳〵も留守のことを頼まれてゐる女中は氣になるので、村松醫師を玄關まで送つて出てながら、

「旦那さまへお知らせいたしませうか、どんなものでございませう。」と、いつて訊くと、村松醫師は事もなげに笑ひながら、

「いや、そんな御心配はありませんよ。」といつて、歸つていつた。

女中はもうそれまでにも、度々お悦に向つても、

「奥さま、旦那様にお知らせ申しませうか。」

と、相談するやうに勸めてみたのであつたが、平素から自分の健康を信じてゐるのと、宇治が急ぐ仕事をする爲に折角靜養かた〴〵行つてゐるところを驚かすのは入らぬことゝ思つたらしく、

「なに、いつてやらなくつてもいゝんです。わたしは達者な身體なんですから。この頭痛のするのさへとれゝば、何でもないんです。と仰有いましたものですから、早くお知らせもいたしませんでした。」といつて、女中は幾度も詫びた。

するとその翌曉の三時頃になつて、子供のひどく泣く聲に、次の室に寢てゐたお芳といふその女中は眼を覺まして起きて八疊の蚊帳の中を覗いてみると、子供は蒲團の上に放り出されたまゝ火の附いたやうに泣き入つてゐるにもかゝはらず、奥さんは傍で知らん顔をして寢床の上に半分起きてゐるので、

「お孃さん、どうなさいました。……奥さま、御氣分はいかゞでございます。」と聲を掛けて蚊帳の中に入つたが、奥さんは默つて、眼をきよと〳〵させながら、返事もしない。赤ちやんは割れるやうに泣くばかりである。すると、奥さんは、變な眼付でお芳の方を見て、

「あんた今日國へ歸るんですか。」と、とつてもつかぬことを云つて訊いた。お芳は、その眼元といひ、先きからの様子が少し變なので、夜明の肌寒にやゝ慄然と感じながら、

「いゝえ、奥さま、わたしは國へなど歸りません。」と答へると、
「さうですか。でも、あなた今日國へ歸るといつた。」と今度は正面の方に向いて、ひとり語のやうにいつた。
お芳は、これは、いよ／＼大分違つてゐる、朝になつたら早速旦那様に電報を打たうと思ひながら、
「さあ、お嬢ちやん、わたしが少し負ぶしませう。」と、いつて、背を向けて抱上げようとすると、奥さんは、
「さうですか、どうも濟みません。」といひながら、自分で子供を抱き取つてお芳の背に載せ、結く紐まで掛けてくれた。
そして、少しも早く夜の明け放れるのを待つて、此の間旦那が立つて行つた翌日、ほかから又一人來た若い女中にいひつけて、それに電報を打たしに行かしたのであつた。
「旦那様のお留守を預かつて置きながら、もつと早くお知らせすればよろしかつたのに、そんな譯で遲れて本當に申譯ございません。」
といつて、彼女は又わびた。
宇治はまだそこに坐りもせず、突立つたまゝでそれを聽いてゐたが、
「なに。……あゝ、さうか／＼。よし／＼。」といつて頭は宛然電の如くぱち／＼八方に亂れて飛ぶかのやうに、お芳の抱いてゐる子供の方に悲しい慈愛の眼を留めて、
「おゝ、坊主。………それから子供はどうした。乳は？」
と訊くと、母親がそんな具合であるので、一昨日から牛乳にしてみたが、初めの日にやつと一合飲んだきり、昨日もそのくらゐであつたが、今日はその牛乳もどうしても飲まないので重湯に替へてみたが、それも飲まない。
「今日は朝から何にもお上りしませんのです。」お芳は九州辯でいふ。

「あゝ、さうか。そいつは可けない。子供が干乾しになつてしまふ。………ちやもう一度新しい重湯をこしらへて。」と、いひながら、宇治はお芳に抱かれて睡つてゐる子供の顔をそうと覗込んでみたり、額に輕く手を當てゝ、

「うむ、熱はなささうだな。」といつたりしながらも、痛心に堪えない表情をして、

「あゝ、これは大變なことになつてしまつたなあ。」と、唸るやうな太息を吐いて、今度は又奥の病人の方に戻つて來て、

「なに、村松さんがこんな急病人を見て、今朝、何でもないといつて歸つた?……何をいつてゐるんだ。何でもないとは何の事だ。あの藪醫者にも困つたものだ。」宇治は、自分の留守の間に起つた家内の急變に手の下しやうもないといつた有様で、やつぱりまだそこに突立つたまゝ暫く考へてゐたが、

「とにかく村松さんを、これから直ぐ誰れかいつて呼んで來てもらはう。」

「村松さんは晩にも又來て診てくれたんです。」

「今日は二度來て下さいました。」

慶吉とお芳が交々いふ。

「あゝ、さうか、晩にも來たのか。それで何といつた?……何時頃?」

「なに、まだ一時間か、二時間にならないくらゐです。」

「それで、何といつた?」

「別に何ともいひませんでした。變りはないんでせう。」慶吉がいふ。

「もし變つたことがあつたら、すぐ使ひをよこしなさいと仰有いました。たゞ氷で頭をよく冷すやうにと、それだけい

つてお歸りになりました。」お芳がいふ。

宇治は自分ですぐ村松醫師の處に驅付けて委しい話を聽かうかと思つたが、自分の體もひどく疲れてゐるので、こんな場合又自分でも倒れたら、暗闇だと思つたので、注意しつゝ、すぐ近所の坂下にある別な醫者を迎へに遣つて、來診してもらつた。それは子供を一二度診てもらつた若い醫者であつたが、一とゝほり診た後で、頸を傾けながら、

「まあ、何處かへ入院さした方がいゝですな。」

といつて、その序に子供をも診て歸つた。

その醫者が歸つた後で直ぐ又宇治は、どうしても安心出來ないので、使を遣つて村松を迎へた。村松醫師は看護婦を伴れて十一時頃に來てくれたが、病人は、慶吉が終始附きつきりで抑へてゐないと、どんなに寢かしても、すぐ跳ね起きて、何かいはうとするが、口は少しもいふことを利かない。何をいひかけても解る樣子もない。たゞ子供が遠くの方で泣いてゐる聲だけは耳につくと思はれて、常に子供を寢せてゐた、自分の寢床の脇を、手でそうつと叩く眞似をする。

それで明朝新宿の方のある病院の院長に來診してもらふことに相談を定めて村松醫師は歸つた。

それから重湯が出來たので、宇治は、子供を二階の自分の蚊帳の中に入れて、それを飮まさうとしたが、匙で三つか四つ飮んだきり、どうしても餌に附かない。そつと寢かして置くと、十分間も立たないうちにすぐ眼を覺まして泣いた。たうとうその晩は徹宵、お芳が背中に負つたまゝ、自分はまんじりともせずに彼女の蚊帳の中に坐つて一夜を明かした。

宇治はさうなると、今日伊香保から急行程で歸つて來た身體の疲勞よりもう精神の疲勞の方を餘計に感じて、病人は慶吉と看護婦とに任かしておいて、自分は二階の自分の室に上がつて綿のやうになつた身體を蚊帳の中に橫へたが、

すこしく假睡としかけたかと思ふと、すぐ跳ね起きて階下に驅け下りてみた。宇治は、寢てゐても幾度となく唸るやうな太息を吐いて、これは飛んだことになつたものだと思つた

翌日早く、係り醫の村松醫師が新宿の方の病院の博士を案内して來診してくれた。診察の結果、現在の症狀は腦の疾患から來てゐるものか、或は極度のヒステリイなどの昂じた神經系統に屬する病氣であるか、博士はまだ十分の疑ひを抱いてゐるものゝ如く詳に語らなかつたが、割合に熱の低いのが腦の疾患ではなささうに思はれたりした。それでもし神經系統の異狀に基づくものとすれば、それは、それで又心配の種であつた。どちらにしても、まるで闖入者に入り込まれたやうな憂慮と不安は去らなかつた。

そして宇治が乳兒にも困つてゐることを話したところ、博士は自分の知合の、牛込の方の小兒科の醫院を紹介してくれて、一時そこへ預けることを勸められたので、宇治は早速先づ子供をそこへ伴れていつて預けることにした。

もうこの三日間――といふよりもその前から幾日の間碌々食餌を攝取してゐない乳兒は、昨夜徹宵女中の背中に結付けられたまゝ夜を明かしたのであるが、朝になつて見ると、ぐつたりとなつて、女中の背に凭れたまゝ、時々元氣のなささうな聲を發して泣かうとするけれど、その聲も嗄枯れて泣く力もなく、たゞ鳥のやうな聲を出すばかりで、唇の色も白く靑褪めてゐる。宇治は、それを見て、まるで、胸が潰れるやうな氣がした。

とにかく子供の方を先に始末をせねば、病人の方に手が出せないので、宇治は、博士を送り出すと、それから、直ぐ支度をして二人の女中とゝもに子供を伴れて牛込の小兒科に往つた。外來患者を診察してゐた小兒科の院長は博士の紹介狀を讀むとすぐ宇治に會つてくれて、

「よろしい、分りました、貴下の方のは病人ではないけれど、急に母乳を離れて、手馴れぬので困つてゐるから、これ

から段々牛乳なり重湯なりで食餌に附くやうにしてほしいといふのですから。……丁度あちらに一室あいてゐますから私の方で確かに御引受け致しました。」見るから精悍な活動家らしい院長は頼母しさうにいつてくれた。

宇治はそれから、家の方が心配なので、一人の女中は先きに返して、一人の女中はずつと病院にゐて子供に附添はすことにしておいて、自分は他にその邊に用事があるので、一二ケ處寄つて一時間ばかりして又病院へ戻つて來ると、子供は此の間中の空腹と睡眠不足とのせいもあつたらうが大きな寢臺の上に大の字になつてぐう〳〵熟睡してゐた。宇治はそれを覗込むやうにして、

「どうした？よく寢てゐるな。」

「牛乳を一合おいしさうに召上りました。」傍について居たお芳は安心したやうにいふ。

「うむ、さすがに專門だ。違ふな。」

「先程先生が御診察もして下さいました。他に變つたことは少しもないけれど、いかにもお腹が空き切つてゐるのだと仰有つてゐました。」

「さうか、可矣々々。」宇治はそれで子供のことは先づ一と安心して、ジリ〳〵と照りつける九月初めの日中を急いで自宅へ歸つて來た。

朝のうち少し落付いてゐた病人は、歸つてみると又動き出して弟の庭吉が男の手でいくら抑へても〳〵身を踠いて、何かいひながら跳ね起きやうとしてゐる處であつた。この枕頭には郷里から出て來たばかりの父親が趺座をかいてゐた。

昨夜父親に知らさうかどうしたものであらうといふ相談を慶吉から云ひ出した時、宇治はあたりまへならば、無論知らして遣る筈であるが、夏以來ずつとお悅の健康の優れなかつた事、その他のことについては、ぜひ共一度父親に出京してもらひたいと思つて、再三再四の手紙なり電報なりを以て、さういつてあるにも係はらず、一向それに應じてくれなかつたので、

「それは知らしてやるのも可いが、知らしてやつたつて駄目だ。何度さういつても、その氣にならないんだから……」

といつて、宇治の方からは知らさうともしなかつたが、かうして俄かに出て來たところを見ると、慶吉の方から昨夜電報でも打つたものと見える。

父親は、意外のお悅の重態に驚いたものと思はれ、始終痛心の面をして、頻りに暴れ出さうとするお悅の樣子に凝乎と眼を据えてゐたが、

「すこし寢ろ。」と、高い聲で一と口いつた。けれどお悅には固よりそれが分る筈もなかつた。

さうした場合、子供を手放して他へ預ける事は止むを得ぬことでもあつたし、又、醫者の方でも頻りしく云つて引受けてくれたけれど、宇治は感情の上で何とも云ひやうのない哀憐と寂寞とを感ぜずに居られなかつた。が、又一方理性ある親としての態度を考へると、一時のセンチメンタルな盲愛などに囚へられて、躊躇してはゐられなかつた。

そして宇治は、子供のことだけは、あゝして置けば先づ一と安心だと思ふと、昨日からの自分の精神の疲勞を又頻りに覺えて來た。それに病人の方は、死ぬか生きるか、もし生きても、とても三日や五日では癒るものとは思はれないので、宇治は何より、これから先き長い間の計劃を考へて置かなければならなかつた。そのうち病人も又暫く睡眠に落ちたので、そつちの方は慶吉と看護婦とに任かしておいて、二階の自分の室に上がつて、横になつた。

日の暮れになつて症狀は一層惡化して來た。病人は眼が覺めれば、すぐに起き上らうとして意味の分らぬ異音を發しながら頻りに呟いた。そして、瞳は上の方の瞼の奥に隱れて、白眼の多くなつた眼は、まるで魂の失せたものゝやうに遠くの方を見て据はつてゐた。

夕方になつて又來診した村松醫師は、宇治や慶吉や父親の前で、

「どうも此の病人は經過が良くないですなあ。……今の間に通知して置く處があるなら、通知してお置きになつた方がいゝでせう。」

と、恐ろしい運命を宣告するやうにいつた。宇治は、それを聽いて自分の身體がそこに坐はつてゐる力を一時に失つたやうな衝動を感じた。

「はあ、經過が良くないですか。」彼は醫者のいふたとほりを、たゞ鸚鵡返しに口の中で繰返してみて、突如として起つた恐ろしい運命について默想してゐた。

慶吉と父親とは、やうやく薄暗くなつて來た向うの座敷の隅で何か絶望的な囁きをしてゐた。

宇治は不斷から口癖のやうに、自分は、長くて、あともう十年生きれば奇蹟であるといつてゐたのであるが、かうなつて見ると、平常健康を、本人自分でも傍でも信じてゐたお悦が先きに死ぬことになつてしまつた。宇治と違つて、嘗て自分の死などといふことを考へたこともなかつた彼女に思はぬ死が見舞ふて來た。まだ三十五か六で死ぬる當人の不幸はいふまでもないが、今日小兒科の病院に預けた子供を、母親の死んだ後で、これから長い生ひ先きを誰れに賴んで世話をしてもらはう？……宇治はそれを考へると、急に世界が暗くなつて來るやうに思はれた。

しかし宇治は、自分の欲目であるか知らぬが、村松醫師は、恐ろしい運命を宣告するやうにいつて歸つたけれど、自

分だけの直覺では、どうも病人は死ぬものゝやうな氣がしなかつた。それで彼は、密々と言葉を交はしながら、絕望の色に鎖されてゐる父親や慶吉の前で、彼等の氣を引立てるやうに、

「あんなことをいつたつて、村松のいふことなど當てにならない。……當てになつて死んだら困るが……何だ、つい昨日の朝までは、女中が訊いたら、なに大したこともないと、いつておいて、今日になつて經過が惡いなんて。そりや經過は惡いだらうが、そのくらゐの診斷なら、私達素人にだつて言へることぢやないか。……私は、この病人は死なゝいと思つてゐるんだ。」

と、樂觀的にきつぱりといつたが、父親や慶吉は、それでは安心出來なかつた。

夜に入つてからは、昨日から二日ぶつ通しの看護に、慶吉も看護婦もぐつたりとなつてゐた。病人の少し靜まつてゐる暇をみては、みんな交代に轉ろ寢をしてゐた。夜の深けるにつれて、仕切りなしに取換へる氷枕や氷袋の氷を碎く音ばかりが臺處の方で寂しく聞えてゐた。宇治も二階に上がつて蚊帳の中に入つてゐたが、やつぱり眠れなかつた。そして、すこしの間うと〳〵となつて、何か階下の病室の方で高い女の聲がすると思つて眼を覺まして、はつと思ひながら耳を澄ますと、それは、府下の方に嫁いでゐるお悅の妹のお茂の聲であつた。遲くなつてお茂が見舞ひに來たものと見える。さう思つてゐると、彼女は、戶を閉め切つた深夜の家の中に鳴り響くやうな泣聲を揚げて、

「姉さん、どうしたんですよう……わたしが分らないんですか。わたしはお茂ですよ。お茂ですよ。……こんなにいつても、ちつとも分らない。!……姉さん生きてゐる間に、私のことで散々心配を掛けて、すこしもその恩返へしをしないうちに私達を遺しておいて……今死んだらどうするんですよ。……これ姉さん、氣を確かに持つてゐて下さいよう。死

んちやいけないよう姉さん。」

と、喚めいてゐるのが、絹を裂くやうに、切れ〴〵に耳を劈いた。

宇治は枕から頭を擡げて、その樣子に聞入りながら、お茂が見舞ひに來てくれたのもいゝし、瀕死の姉を悲むのも自然の情であるが、それが爲に、絕對安靜を要する病人に惡い影響を與へなければいゝがとか、その消魂しい女の泣く聲が、深夜の戶を洩れて、近處に聞えなければいゝがとか、そんなことをひたすら氣づかふてゐた。

そして、お茂のひと仕切り泣き喚めく聲が靜まつた時分に又病室に下りて來た。お茂は慶吉と看護婦に代つて自分で姉の枕頭に附いてゐたが、宇治がそこに出て來たのを見て、いきなり、

「こんなにひどくなるまで何故わたしに知らしてくれなかつたのですか。」と不足をいつた。

宇治は一々それに返答もしなかつた。

夜はもう彼是れ一時をも過ぎてゐたらうか、晝間はまだ秋暑が堪えがたいやうでも、深更になると、さすがに薄ら寒い冷氣がすうつと肌にしみて來た。

病人は、お茂の大きな聲に惱かされたせいでもあるか、もう先のやうに跳ね起きようとする元氣もなく、咽喉の奧の力で微かな音を立てるばかりで、白い眼は全く死相を呈してしまひ、瞳はまるで瞼の下に上がつてしまつた。もう今にも事は切れるものと思はれた。家の中は森として、幽かな電燈の影に一座は悉く深い沈默に鎖されてしまつた。

宇治はしかし、そんな絕望の淵に立つてゐながらも、素人考へに、眞白に上がつてしまつたその眼の尙ほ動いてゐる有樣が、まつたく息の絕える刹那の樣子とは少しく異つてゐるやうに思はれた。まだ〳〵死にはせぬと思はれた。そんなことを感じながら八疊につゞいた納戶の三疊の方を見ると、父親は悲みの面を匿すやうに向うの壁の方をむいて直坐

ひになりながら、幽かな電燈の明りで何か手紙のやうなものを披いて讀んでゐた。宇治はそれを見るともなく、病人の枕頭を離れてそつちに寄つて行きながら何氣なく、その手紙の文字に眼を留めてみると、それは、たしかにお悦から父親に遣つた手紙らしく、

「……たつた五圓八拾錢の藥代をさへ吝んで、藥代が入つた〱と何度もそのことをいひ、小使さへ一錢もくれずその藥代も自分の小使で拂つたのです……」

といつたやうな意味のところが眼に入つた。

宇治はそれと氣が付くと、お悦が此の間もいつてゐたことを、自分の思つてゐるまゝに、父親に書いてやつたものと察した。さうして、その無理解と不埒とについて忽ち非常な不快と立腹を感じた。そして、いきなり「何だ、そんな手紙をやつてゐる！　何で私が藥代を吝んだ！」と激昻の語を發した。

すると、そこに腹這ひになつてゐた父親は、起き上つて來て趺座になりながら、きつとなつた顏をして、宇治に向ひ、

「貴下がさういふなら、いふ。私もいふ。……事實に無いことを手紙に書く筈はない。藥代を吝んだと書いてあるのも、貴下が吝んだから、そのとほり書いたものに相違ない。」

それを聞くと宇治は、此の間も既にそのことで、お悦に對して、ひどく立腹したのであつたが、他のことゝ違ひ、自から必要と信ずる物を吝んだなどといはれては、それが全然自分の氣持ちと正反對な言ひ前であるだけに一層腹が立つた。

「何で私が藥代を吝んだ。この私が物を吝むなどと、事實を强ゆるにも事に依る。どこにそんな事實があるか。」

宇治は、お悦に向つていふ如く父親に向つて喰つて掛つた。

すると父親の方でもます／＼開き直つて來ながら、

「事實ないことを夫婦の間で書く道理がない。……それに、小使ひまで碌に當てがはないといふのは、貴方は悦を虐待しとるぢやないか。」と怒鳴つた。

しかし宇治は、自分の意中に强い自信があるだけに、そんな言ひ分を聞くと、腹の中で稍々お可笑しくなつて來た。

「何で私が虐待をしてゐる。何處に私が、彼女に不自由をさせた事實がある？」

「不自由をさせて居るぢやないか。虐待してゐない事實がないものが、何で此の手紙を書く？……追掛けおつかけ、始終中此のとほり手紙が來てゐる。」といつて、父親は見たところ十通ばかりの嵩のある手紙を束にしたのを取り出した。それはお悦から遣つたのばかりでなく宇治の方から遣つた物と一緒らしかつた。

「このとほりの手紙が來てゐる。」といつてゐたが、彼は昂奮の極に達したもの丶如き有樣で、「これが虐待でなくて何だ？………。元のとほりの身體にして返せ！」

と怒鳴りながら、手紙の束を疊の上に、はたと叩き付けた。

宇治はその劍幕に吃驚り呆れたが、その直ぐ後の瞬間、妙に人間として自分の優越を感じた。——といふのは、宇治自身に何處を突いても兎の毛ほども、さういふ不足をいはれる缺點がないといふ强い確信があるからであつた。事實、宇治はお悦を虐待するどころの騷ぎではない、平素から宇治自身の方が、お悦に虐待せられてゐると云つても決して不當ではないのであつた。もう長い間、お悦の病的な狂暴に手古摺るたびに、今度こそは父親に會つて一伍一什の事情を委細打ち明けて懇話しようと思つたことは幾度あつたか知れぬが、何より、毎時勉强の方のいそがしさに、そんな話ら

ぬことに暇を費してゐるのが臆劫で馬鹿げてゐるのと、お悦の缺點を數へ立てるといふことは、取りも直さず、自分がお悦の如き者を入れて妻にしたといふ自己の不明を語らねばならぬことになるので、それが、宇治自身の、相當思慮あるべき筈の年配を省みて出來ないことであつた。そんな時彼は屢々自分と同じ職業の大先輩であるところの瀧澤馬琴の私生活を思ひ出した。馬琴は老境に入りて、無智婬執なる妻の狂暴に苦められてゐた。彼はその事を日記に書いて且つ悔ひ、且つ慚ぢ、且つ歎いてゐる。宇治は嘗てそれを讀んで、ひどく〳〵、この大家の老後に同情したことがあつた。彼は、馬琴でさへ、無智の愚婦に會つてはそんな困惑をしてゐると思ふと、やゝ諦めも付くのであつた。

それで、いよ〳〵最近お悦の狂執が募つて、どうにも始末におへなくなつたところから、父親の出京を促して、長い間腹に溜めてゐた顚末を洗ひざらひ話さうと思つてゐたのであつた。それに何事ぞ、お悦の手紙の端に認めたところによると、宇治の方から父親に談じようと思つてゐたことを、それをいはれては、困るところから、彼女自身の方で先括りをして、事實を曲げて、宇治の虐待を讒訴してゐるのであつた。宇治はお悦の淺慮な狡智に不快を感じた。そして、子に愚かなる父親は自分の娘のいふとほりを眞實だと信じてゐる樣子である。宇治は平素から夙に、お悦の親達は、お悦の此の性情の缺點を知つてゐないのであらうかと思つて、親達の賢愚にまで想ひ及ぼしてゐたのであつたが、かうなつてみると、その土地では、物の解る人物といはれて立てられてゐるといふ父親の相場も大抵知れてゐる。

宇治はそれで、父親の、年効ひもなく昂奮した劍幕を驚くよりも呆れた顏をして、少しく笑ひを含みながら、言葉をやゝ和げて、

「元のとほりにして返へせ。」と、父親のいつたとほりの言葉を鸚鵡返しに一遍口の中で繰返して、

「……だから、このとほり病氣の手當をしてゐるぢやないか。今、そんなことを此處でいつてゐる時ぢやない……」

……」
と、口を吃らせながら尙ほ何か後をいはうとしてゐるところで突然宇治はぴしやりと頭腦を毆き潰されたやうな氣がして、眼からさつと火が迸つたと思つて、そのまゝ眼が眩でしまつた。幸ひにして坐つたまゝ倒れはしなかつたが、少時暗くなつて明を失してゐた。

さうして、何だらうと、稍々意識を囘復しかけてゐるところへ、再び後から、ぴしやりと、又頭を打つた。それと同時に宇治の背後で慶吉の聲がして、

「この野郎！」と怒鳴つたのが分つた。

それで、宇治は、慶吉が理不盡にも自分の頭を毆打したものであるとはじめて氣が着いた。

宇治は、眞暗から段々明るくなつて來る眼を双掌で抑へて、これは盲目になるのではないかと氣づかひながら、

「何を爲る！」と、いひさま背後を振向いた。慶吉は、尙ほ手を上げて打つて掛らうとするところを、も一人そこに居る、先に父親の處の使用人で、今東京のある店に奉公してゐる若いものが手を以つて制してゐた。

宇治はまるで蠻人の群に包圍されてゐるやうな不安を感じた。そして忽ち念頭を走つたものは、自分が今こゝで死んだら、今朝病院につれていつた子供を誰れが世話するかといふことであつた。そして哀憐の感は湧くやうに胸を突いて起つたが、慌てもせず、そこに靜つと坐つたまゝ、

「何を爲るんだ？………眼が見えなくなつてしまふぢやないか………私が今死んだら子供をどうすることも出來ないぢやないか………」

と、いひつゝ、そんな凶暴を敢てする自分の伜の行爲を何と見てゐるであらうかと、正面を向いて父親の顏を見ると、彼

は、慶吉の無法なる行爲を格別制止しやうとする風もなく、二十貫に餘る巨軀を小山の如く大趺座をかいて微動もしないでゐる。宇治はそれを見ると一層癪に障つた。そして又お悅がそんな宇治に對して背信の手紙を父親にあてゝ書いた、――自分の非を飾らんが爲に、それを宇治に轉嫁しやうとする狡るい惡德を憤る念が湯煙の如くに頭に騰つた。しかし言葉はつとめて穩にしながら、

「私が藥代を吝む、何處に藥代を吝んだ。……小使錢を與へないといふが、何時私が彼女に不自由をさせた？」

宇治は、お悅を蛇蝎の如く憎惡する語氣を父親に向つて吐いた。すると宇治の背後に尙ほ手を振上げてゐた慶吉が、

「虐待ぢやないか、碌に小使ひもやらないで、自分では勝手な事をしてゐるぢやないか。」と、怒鳴つた。

宇治はそれで倍々憤激しながら、斜にそつちを扭向くやうにして、

「私が何處に勝手な事をしてゐる。外に出て餘計な小使ひ一つ遣ふといふではないし……」假ひ自分が外で自分の取つた金で藝者遊びをしてさへ何處に遠慮も入らないのだがと、腹の中で思ひながら、急語した。そして又振返つて父親の方の顏を見て、

「何處に私が、彼女に不自由をさせてゐる。…………たとへば月々の諸拂ひにしても、たゞの一度だつて、お勝手口で晦日に、出入りの商人に勘定の遲れる斷はりを言はせたことがあるか………」

宇治はさういひながら、ひとり胸の中で、自分の十年も十五年もの以前の生活と思ひ比べて感慨に堪えないのであつた。

すると、父親が始終沈默してゐるにも係はらず、慶吉が後から顏を差出がましく又口を出した。

「そりやあお前、いくら物質的に不自由をさせないでも精神的に虐待してゐれば、やつぱり虐待ぢやないか………」

と、さも／＼悧巧さうに云つた。

慶吉は小學校だけ卒業したにしては筆蹟なども割合に巧みで、三十二か三にしては世間的の智識にも暗い方ではなかつたが、精神的だの物質的だのといふ言葉を用ゐて理屈をいひ出したので、宇治は、本氣で今對手になつてゐる心もしなかつたが、

「精神的に何處に虐待してゐる？」と言葉を返した。そして今こんな苦々しいことが始まるまで氣が付かなかつたが、今日晝間、子供を小兒科に預けて戻つて來た時、後で、お悅の枕頭に父親の趺座をかいてゐた處へ、宇治が此の間伊香保からお悅に當てゝ越した手紙の開封したのが置いてあつたことを、ふと思ひ浮べた。その手紙は九月の二日に書いて出したもので、

「……留守があれば、お前と子供と來るとよいのだが。こちらには、何にも、ぴらしやらした男や女ばかりも來てゐない。普通のおかみさんや、子供も來てゐる。子供を溫泉に入れてやりたいと思ふ。

伊香保のぜんまいを少し送つた。よく干して置くといゝ。煮てたべなさい。

私が不在中でも時々武藏屋の鰻を取つて食べるべし。滋養をとらねば、母子ともにいけない。

ついでに十日頃までも、ゐたいものだが。」

ひとり娘のお父さん

九月二日

お悅さん

と、いつたやうな愛情細かなる手紙であつた。宇治は、それを晝間お悅の枕頭で見たのであつたが、二日の正午に向うを出したものであるから早くて三日の午前でなければ着かね。そしてお悅は三日の早曉から症狀が急變してゐるので

あるから、その手紙を自分で開封したか、どうか甚だ疑はしい。多分自分では見なかつたであらう。すると枕頭に開封のまゝ置いてあつたのは、或は慶吉でも臨機に開封して讀んで見て、それを又その日に出京した父親に見せたものであらうといふやうなことを、心の急しく顚倒してゐる場合とて、ゆつくり考へてみる暇もなく、自分の書面であるから、そのまゝ手にも取上げなかつたが、今となつてよく考へてみると、お悅がいろんなことを書いて遣つた手紙によつて、父親等は、お悅の言葉を一から十まで信じ、いかにも宇治が、お悅を虐待してゐるかの如く思ひつめて、そんな手紙まで、宇治の不在中に慶吉と二人で取出して讀み返へしてみたものと思はれた。何處までも虛心坦懷なる宇治は、さういふ邪推と僻見とを以つて物を見てゐる彼等の中にあつて、丁度都人を見馴れない田舍犬に寄つて集かつて吠えられてゐるやうな、爲方のない氣がした。

さう思ひながら、ふと背後の方でお悅が頻りに苦しさうな息を吹返へして、何か物でもいはうとしさうに、床に横はつたまゝ身を跪いてゐる樣子が耳についた。宇治は此の場合お悅の不德を憤り、無智を憐んでいゝか、どうか分らないのであつたが、彼女の、今にも息の絕えんとする苦しい呼吸の音を聽くと、又別の哀憐の感が新しく起つた。そして、先つきまで眼を白くしたまゝ少しく靜まつてゐた彼女が、さうして又急に夢中に身を跪いてゐることを思ふと、彼女は、こちらの方でたゞならぬ物音高聲がするのを半無意識の中に知つてゐて、それで何かいひたい、どうかしたいと思つてゐるのではないかとも察しられた。宇治は、父親と慶吉との間に挾まつてゐた座を突如として起ち上りお悅の枕頭に步み寄つて、その顏を覗いて見て、他の者の方に向つて、

「あゝ、もう、うるさいッ!………肝腎の病人を打つちやつておいて何の事つた。」と、叱咤するやうにいつた。

宇治は一と言さういつて、自分にも反省すると同時に彼等に向つて、警告を與へたが、自身の憤激の感情は少しも納

まらなかつた。そして又元の座に近く戻つて來ながら、

「私が彼女を虐待してゐるとは、一體どういふ譯だらう。何處に虐待してゐる？」と激昂した。そして、心の中で、虐待どころか、お悦の方で平素自分をどんなに對遇してゐるかといふことを、考へ出すと、山ほど言ひたいことが募つて來たが、今眼の前で斷末場の苦しい呼吸をしてゐる病人の非違を數える氣には、どうしてもなれなかつた。宇治は苦しい思ひを凝乎と堪えてゐた。

すると、慶吉と病人の裾の方との間に横になつたまゝ自分の子供に添乳をしてゐた妹のお茂が、口を出した

「姉さんは此處の家に居ない方がいゝんだよ。…………居なくつたつて立派に食つて行かれるんだもの。」と擲げ付けるやうにいつた。

宇治はもう、此奴等を對手に物を言ふだけ自分も一緒に愚かになるといふ氣がして出來るだけ默つて居らうとした。彼等の常識と道德とから判斷すると、食つて行かれりや女は一旦嫁しても勝手に出ていつても一向差支へないものと受取れた。

お茂は、今居る場處が宇治の家であるか、それとも父親や兄の慶吉や姉の居る傍であるから、自分達の家であるとでも思つたのか、さながら家の中に一杯になつたやうな調子で、又畳みかけていひ放つた。

「姉さんは何時か、わたしの處に來て、いつてゐたことがあるよ。…………わたし一寸人を見違へてゐたといつて、後悔してゐたことがあつたよ。」

それを聽くと宇治は、何處までも默つて居らうとしても、つい堪え切れずして、

「ほう人を見違へてゐた。私を見違へてゐた。」

とたゞ中音に聲を發したが、あんまり呆つ氣にとられた形で言葉に力も入らなかつた。そして又心の中だけで、人を見違へるとは、それは此方の方から先きにいひ出すことであると思つたが、その見違へたのも、自分の不明であつてみれば、現在このとほりの活劇を演じなければならぬ始末になつたのだと思つた。

お茂は又いつた。

「何も斯も聞いて知つて居るよ……此處に居た女中からも聞いたことがあるよ。」とさも〳〵宇治の惡い事實を明かに知つてゐるやうにいつた。「うむ、いろ〳〵聞込んでゐる事もある。」親父もその後について、いつた。

宇治は又默つてゐられなかつた。

「ほう、何を聞いて知つてゐるか知らないが……」

と、いひさしてそのまゝ後の言葉を呑込んでしまつた。そして又腹の中だけで考へてゐた。――女中からも聞いて知つて居る。何を聞いて知つてゐるのだ？お茂が此家の女中と二人ばかりで會つたこともない。又女中から、お茂が聞かされて。それを宇治が迷惑したり、申開きに差支へるやうなことは露ほどもない。すると記憶の好い宇治はすぐにかういふことを思ひ浮べた。いつであつたか、お悦が宇治と言ひ爭ひをした時、先頃まで半歳居つたといふ女中が、旦那樣は隨分ひどいですなあ、昨日渡した金はどれだけ入つたなんて、朝から、お金のことなんか訊いてと、いつたことがあるといつて、お悦が、

「あんなものさへ、そんなことをいつてゐた。」といつた、その時宇治は、

「何だ、それが。毎日々々聞くのぢやあるまいし、私の方でもあの時一寸都合のあることがあつたから、それで、そちらに幾ら小使が殘つてゐるかと思つて訊いたのぢやないか、あんな半端人間が、たゞそれだけ聞き嚙つただけで、私がど

んな事を考へてゐると云ふことの大體を知つてゐる譯ぢやないぢやないか。そんなことをいふとお前までも半端人間ぢやないか。……私がかうして無事でゐる間は、まあ今くらゐな生活(くらし)は、どうかかうか出來る。たゞ食つて通つたゞけでは私が死んだ後でどうする事も出來ない。」

宇治はその時も、毎時も口癖にいふことを云つた。お茂はきつと、そんなことでもお悦から女同志の、ぴちや〳〵ばなしに聞いてゐるのかも知れぬと思つてゐた。と、お茂は一人で又口を出した。

「何だ小使ひも碌にやらないで。何處に行つたつて、世間にそんな家はありやしない。」

宇治はそれで、默つてゐた口を又切つた。

「小使をやらないつて、それを大變な不足のやうにいふが、小使が入るなら、入るだけやるぢやないか、何に使ふといふ使ひ途の分つてゐる小使をやらない筈はない。それどころぢやない、買つて呉れといはない物をも偶には買つてやつてゐる。……それやあ、あれも欲しいこれも欲しいといふ段になれば此の家の道具だつて不足だらけだ。……これで私が外で餘計な小使ひを無駄につかふといふではないし。」

といひかけると、今度は慶吉が又横から悧巧ぶつた口を出して、

「餘計な錢を使ふぢやないか、……病人を放棄(うつちや)らかしておいて、自分は伊香保などにいつて勝手なことをしてゐるぢやないか。」

宇治はそれを聞いて、少しく苦笑ひを含みながら、

「伊香保に行つたのが何で勝手だ。何も病人を打つ遣(ちや)らかしていつたのでもない。私が家に居ると、二人で互に詰らん貧しいことばかりいつてゐるから、私が少時留守にした方がいいと思つたのだ。それに自分も隨分夏中疲れてゐたから

……」

宇治は、そんな自分の一家の事まで立ち入つて口を容れられたり、又此方から、それについて一々說明する必要もないと思つたが、禮儀といふことを知らず、いふべきことの分限さへ辨へてゐない彼等が勝手放題なことをいふのが耳に入ると、彼の性質としてそれを默つてゐては氣が濟まなかつた。そして、今度は先つきから始終凝乎と默つてゐる父親の方に向つて、感慨めいた調子になり、

「小使ひを碌にくれないとは、一體どういふ考へでゐるのか知れないが、私としては實に出來る限りの暮しをしてゐるつもりだ。彼女にも始終いつて聞かせてゐる筈です。私がかうして生きてゐる間は可い。唯食つて通つたゞけでは死んだ後で二人の者がどうすることも出來ないから、今の內に少しでも殘す分別をして置かなければならぬと思つて、何も斯も儉約をしてゐる……」

といひかけると、又慶吉が橫から悧巧らしい口を出した。

「平常儉約をしたつて、病氣になるまで儉約をして、それが何の役に立つか。」と、怒鳴つた。

宇治は又それで、言葉の半ばで口を結んでしまつた。さうして少時苦い笑を含んでゐたが、やつぱり言はなければ氣が濟ます、

「何も病氣になるまで、私がどんな儉約をした？」

宇治は、馬鹿共を對手にしてゐると思へば腹も立たないのであるが、さういふことをいはれるとやつぱり心外で溜らなかつた。そして又心の中で思つた。現に傍に居るお茂などは、去年お悅よりも三四ヶ月早く子供を產んだのであるが、もとより女中一人使つてゐる譯でもなかつた。瓜の先に火を點すやうにして小金を殘す一方の堅人である彼女の亭主に

は一人の母親があつた。その姑は、自分では毎晩のやうに揉み療治をやつてゐても、お茂が始終子供を負ふので肩がいたくつて堪らぬから、一遍療治をしてもらつたらといふと、なに、若い者はそんなことをしなくつても、私は年寄りだからといつてお茂に療治一つさせなかつた。それを又お茂の亭主は、姑のいふとほりになつてゐた。それで肩の凝りが原因で此の夏は中耳炎を起して、遠くの大森の方から慶應病院に暫く通つてゐた。その時彼等は夫婦連れで來て宇治の處に寄つて休んでゐた。それに比べると、宇治の家では女中は大抵二人で一人の時は少なかつた。お悦には、氣を置かなければならぬ年寄りといふ者もなかつた。宇治は外で錢を使はぬ代りに、家では毎日欲しいと思ふ物を食べてゐた。

——宇治はそれで、小使ひをも碌にくれないと、何かに附けて皆ながいふところを少し不思議だと思つて考へてみると、お悦は、なるほど宇治の家に居て、格別日々の事に不自由をしてゐるほどでもないのだが、自分の先に産んだ子供の厄介を掛けてゐる鄉里の次弟の方などへ思ふとほりの義理をすることが出來ぬのを始終心苦しく思つてゐるのではあるまいかと、宇治には考へられた。しかし、それもお悦が、平常眞面目に宇治のいつてゐるとほりを果たしさへすれば何でもないことなのであつた。宇治自身としては、初めから自分の方へ餘り好意を有つてゐないらしい、お悦の次弟の方へまで始終氣を配つて世間並の義理をしなければならないとも考へなかつた。宇治の頭は、それよりもゝつと大事なことに急がしかつた。彼は、學生時代から始まつて、ずつと中年にかけて長い間に數千圓といふ金を貢つてゐる自分の鄉里の兄に孫が産まれても、自分で氣の向いた時でなければ、改つて祝儀もしなかつた。その代りにどうかすると東京中を探して、田舍の者の眼を驚かすやうな物を買つて遣つたりした。

——前後の口裏では、どうやらそれが、お悦の次弟に二度目の男の兒が産まれて、その百ケ日が過ぎても、お悦——宇治の方で——祝儀もせぬのが、お悦に碌に小使も與へぬといふことが重大な問題になつた原因の一つらしかつ

た。それと察しられると、宇治は一層厭な氣がした。夏中ひとりで蹣跚して日を立てた宇治は、そんなことをもし、向うで根に持つてゐるとすれば、いよ〳〵以つて爲方がないと思つた。

さうするとお茂が又口を出した。

「姉さんは獨りになつて自分で働ぐ方が好いんだよ。立派な腕を持つてゐるんだもの……さうして、あちらの子供を自分で育てる方がいゝんだ。……あちらの子供が可哀さうぢやないか……」と、いひながら、仕舞の方の聲は涙に濡れた。

宇治は又それを默つて聞いてゐながら、お茂は自身には亭主があつても、姉のお悅には夫は無くつても可いと思つてゐるのであらうかと思つてゐた。

すると、今まで少時默つてゐた父親は、

「去年子供が産まれた時に、悅を此方へ入籍することを承諾したのは、私の方では、貴下に恩惠を施したつもりでゐるんだ。」といつた。その語裏には勿論、自分の方ではお悅をお前の處などへは寄越されないのだが、お前の懇望に任せて寄越した。それにも係はらず、お悅を虐待するとは何といふことであるといつてゐるやうに思はれた。それで宇治は心の中で、お悅がそんなに勿體ない女であるならば、何時でもお引取りをねがふのだと考へたが、今止むを得ずして母乳を離したばかりの子供のことに一度び思ひ及ぶと、宇治は體中の勇氣が悉く挫けるやうな氣がした。

宇治はさうしてゐるかと思ふと、心は絶えず八方に散らかつてゐるやうに、恰も彈機仕掛けの如く又すつくと起ち上がつて病人の枕頭に歩み寄り一寸樣子を覗いて見て、

「あゝもう、うるさい〳〵。そんな話は何時でも出來る。今此の死にかゝつた病人を打遣つておいて、そんなことをい

つてゐる場合ぢやない。……〳〵……助かる者をも殺してしまふ。」と、ぶつ〳〵言ひながら、又今度は彼の方から付つ親だの慶吉の居る脇に寄つて来て坐はつて、

「まるで皆な此処の家を破壊してしまふやうなことをする。」と沈痛の情を顔に浮べて呻つやうにいつた。

すると、慶吉は、又のり出して来ながら、

「破壊してしまふやうぢやない。もう破壊してしまつてゐるぢやないか。子供なんか死んだつてかまはない。病人はもうあのとほり死んでしまつてゐるぢやないか。貴様が殺したんだ。貴様もついでに殺してしまつてやる。」

といつて、そこにあつた瀬戸の手提げ火鉢に手を伸ばした。傍に附いて居たさつきの若い者が又それを制した。

宇治は呆れた眼をしてその態を見てゐたが、何か一つ自分の方でいひ出せば、何れもこれも妙な道理をこじつけて来て鉢をいひ出して、果てはこれ以上にどんな凶器を働かないとも限らないので、もしその為めに實際、救かるべき病人を死に到らしめては、悲痛も悲痛であるが、一家の主人として宇治自身の人格と品位をどれだけ傷けるか知れないと思ひ、どんなに腹が立つても凡て後日に譲り、満腹の耐忍を以つて今はもう一切何にも言はぬことに定めた。そして却つて彼等の浅慮なる挙措を宥めるやうなことをいつた。

「あゝ、よし〳〵。もう皆な分つた〳〵。私が悪いんだよ、わるいんだよ。」といひながら、又坐を起つて病人の方に寄つていつた。肝腎の病人はその騒ぎに、誰れも顧る者なく、一晩打つゞけの看護に疲れた看護婦などは女中部屋に転寝をしてしまつて、枕頭にはその日また新しく雇つた雇女が、呆気に取られたやうな顔をして手持不沙汰に控へてゐた。

病人はいくらか又落着いて、自然の顔も元の色に戻はれてゐたが、宇治はその顔を覗き込んで、

「氷を飲むか。」と訊ねると、微かに肯づく色を見せた。宇治はそれだけでも自分も元氣づいたやうな氣になつて、

「あ、氷を飲むといふよ。死にはせぬ〳〵。」と聲を發した。そして小さい氷の碎片を四五度口へ持つていつてやつた。するとお茂もそこに摺り寄つて來て、又氷の碎片を立てつゞけに口に含ました。

「そんなに無暗にやつても可けない。」

「なに氷くらゐ少し餘計にやつたつて構やしない。」宇治は、お茂のその粗野を厭ふて、ついと又坐を起ち上がつた。そして、

「この模樣ならまだ死にはせぬ〳〵。」と、ひとりで景氣づいたやうにいつた。」

父親は先の處に趺座を搔いたまゝ、宇治の方を見て、

「二階にいつて少し寢るといゝ。……又惡かつたらさういふ。」といつた。」

「惡くつては困る。」といつて、宇治はそのまゝ二階に上がつて來た。

そして蚊帳の中に入つて身體を横へたが、極度の辛勞と憤激とに胸の中は焔の如く火照り、呼吸をする力も絶え〳〵に掠れた。宇治は苦しい息を吐きながら、此の際自分までがもし倒れるやうなことがあつては、何も斯も破滅だと思つて、努めて氣を張り、心を平靜に保たうとして、眠られぬまゝに仰けになつたまゝ、胸を開いて大きな呼吸をつゞけた。さうしてゐると、先刻慶吉に毆打された時したゝか眼に觸つたものと思はれて、じつと眼を開いてみると、瞼に曇りが懸つて電燈の灯影がぼんやり霞んで見える。これは、もしかしたら視力を傷けたのではあるまいかといふやうなことが又頻りに氣になつて來た。宇治は、飛んでもない野蠻人の一族に係り合つたものだと思ふと、三十餘年の長い間、ともかくもして今日までストラッグルして修養して來た自分の生涯を、すつかり棒に振つてしまつたやうな氣がし

自分の身體には金錢からも精神からも大變な資本がかゝつてゐるのだといふやうなことも考へられた。いろんな思想が矢の如く往來して神經は一層昂奮して來た。彼はそれを強ゐて閉切らさうとして、うん〳〵聲を出して深い息と一緒に唸りながら、とろ〳〵と假睡んだ。

翌晩になつても病人は少しも良い變化を見せなかつた。村松醫師は又早く來診してくれたが、昨日の晩と同じやうに、

「どうも經過が良くありませんよ。」と絶望的なことを宣告した。宇治は、昨夜深更の樣子では好い見込みがありさうに思はれて、獨りで勇んでゐたのであつたが、村松醫師がさういふのを聞くと、又胸が寨がる思ひがした。宇治はその一喜一憂で自分の身體が段々に疲勞するのを感じた。

父親は、始終憤りを含んだ穩かならぬ顏をして、

「生命の無いものなら、それは爲方がないが、……かうなるまでの事が殘念だ。」

と、いつて、もしこれで死んだならば、たゞ事では濟ます譯にはゆかないといふやうな氣勢を見せて、宇治の方をじろり〳〵白眼で睨みつけて、

「今日はまあ一と先づ歸るから。二三日の内に又必ず出て來る。」といつて、その朝雨のばら〳〵降り出した中を妹のお淺などと連れ立つて歸つていつた。

宇治はそれを玄關まで送り出したが、左樣ならといはずに歸つた。今度出て來た時お悅が死んでゐたら、彼はどんなことをいひ出すであらうと、宇治は思つた。

宇治は一昨日の夜遲く歸つて來たまゝ、まだ金の用意をする間もなかつたので、父親等が引揚げて去つた後、その金の準備の爲かた〴〵、昨日病院に預けた子供がどうしてゐるか、氣になるので、秋雨の佗しく降りそぼつ中を、疲勞し切つた身體に雨具を引纏ふて牛込の方に出掛けていつた。

昨夜からの苦々しい家內の醜狀が嘔吐を催すやうに胸に痞へて、宇治は自分の家であるにも係はらず、地獄に等しい其處を遁れ出でて少しも早く行つて子供の顏が見たかつた。

小兒科の院長は、快活な調子の人で、宇治の顏を見ると、

「やあ、大變好いですよ。よく牛乳を飲みますよ。」と聲を掛けてくれた。宇治にはそれが宛ながら天國からの響きのやうに思はれた。

「あゝさうですか。難有うございます。」と感謝の辭を洩しながら、秋雨にいとゞ薄暗い子供の病室に通つて、寢臺を覗くと、子供は附添ひに看護られながら、すや〳〵と眠つてゐるところであつた。

「よく牛乳を召上りになります。」と附添ひがいふのに、

「あゝ、さうか〳〵。」と返辭しながら、外套をそこに脫いで、どつかと大きな寢台の上に腰をおろして子供の寢顏をじいつと見入つてゐたが、慈愛と哀憐の感が交々胸に迫まつて來た。

「あゝ私も疲れた。」と太息を吐くやうにいつて、そのまゝ子供の脚の方に身を倒したかと思ふと、宇治は、いつの間にか前後も知らずに、そこに昏睡してゐた。

それから三十分ばかりして、ふつと眠を覺まし、附添ひが、お孃ちやんの新しい玩具を貰つてもらひたいといふので

雨の降る街中に出でいつて、宇治はもう可愛さに何でも買つてやるぞといふやうな氣持ちになつてそこら中の店屋から變つた玩具だの、頭巾だの、秋冷を厭ふ錦紗のちやん／＼などをあれこれと買ひ集めてゐると、彼の胸には、今母親に死別れようとしてゐる子供の哀れが、冷たい秋雨とゝもに滲むやうに眼を潤ほした。

買つた品々を子供の處へ屆けて置いて、宇治は今にも自分が倒れさうになる身體に氣を張りながら、そこらの酒場に入つて葡萄酒に元氣を附け、自動車に身を托して又自宅に急ぎ歸つた。屹度死んでゐるに違ひないと思つて歸つてみると、病人は又稍々確かになつてゐた。

その翌々日大學の博士達の來診を仰いだ結果病人は大學病院に入院させることになつた。宇治はそれからといふもの毎日二ケ處の病院を見舞つてゐたが、どういふものか母親の病院の方には足が快く進まなかつたにも係はらず、子供の病院へは、恰ど戀する者が戀人の處に通つて行くやうな樂しさと慰めとを感じて、そつちの方へは毎時も足が輕かつた。片方の苦々しい惡感は、さうして子供の顏を見てゐる間だけは忘れてゐることが出來た。病が癒えてくれなければ困るといふことは分つてゐるにも係はらず、憎んでいゝか憐れんでいゝか分らぬお悦の病室を見舞ふのは、宇治には重い義務のやうな氣がするのであつた。宇治はお悦の病室を遁れ出ると、すつかり別な氣持ちになつて子供の處へ急ぐのであつた。そして牛乳臭いにほひのする、汚れた頬ぺたに自分の頬をぺつたり推し當てゝ、その柔かな皮膚を感じてゐると、宇治は凡ての勞苦をすつかり忘れてしまつて、子供の慈愛に體が輕く浮き上るやうな心地がして、小さい體をまた緊と抱きしめた。宇治は咽喉の塞がるやうに涙が逆み上げて來るのを覺えた。（をはり―十三年十一月十二日）


マツダ瓦斯入
冬の夜
妙なる歌の調べ、さゞめく笑聲、冬の夜の團居も
亦樂しい事の一つでありませう
白色の光心地よく明るいマツダ瓦斯入電球、それ
はお部屋に一段の温味を添へ、いやまして冬の
夜の情緒を深く致します。
健康美
つや〳〵とした薔薇色の頬、涼しい瞳ー自ら健康
の美を思はせます。正確無比なギバ體温計を常備
せらるゝ御家庭には病魔の侵入する餘地なく、お
家族の顔は皆健康に輝いて居ります。
神奈川縣川崎市
東京電氣株式會社
TEC
ギバ体温計

公論大賣捌所

同	京橋區銀座…	…
同	京橋區元數寄屋町	北隆館
同	日本橋區本石町	至誠堂
同	本鄉區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町		盛文館
同	北區東梅田町	立盛社
京都市七條停車場前		共盛社
同	新町通り七條南入	大誠社
名古屋市	富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目		日韓書房

◎定價 金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）

國別／冊數	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號一冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれは一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

一振替貯金口座番號は東京二〇五番…

一郵券代用は謝絶す　但し郵便局に不便の地に限り割增にて代用せらるるを拒まず

一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す

一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれは雜誌發送せず

　一金二圓以上五圓迄　金七錢
　一金拾圓迄　金八錢
（集金委託料及送料共）

一中央公論及婦人公論代金取纏め御拂込みの場合には各誌割當にて金額御指定を乞ふ

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十三年十一月廿一日印刷納本
大正十三年十二月一日發行（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木鳥三

發行所　東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話 長丸ノ內三〇二（當分不通）
牛込 五〇八九
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舍

本號特價金壹圓　郵稅金三錢

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

東京小石川研精社印刷